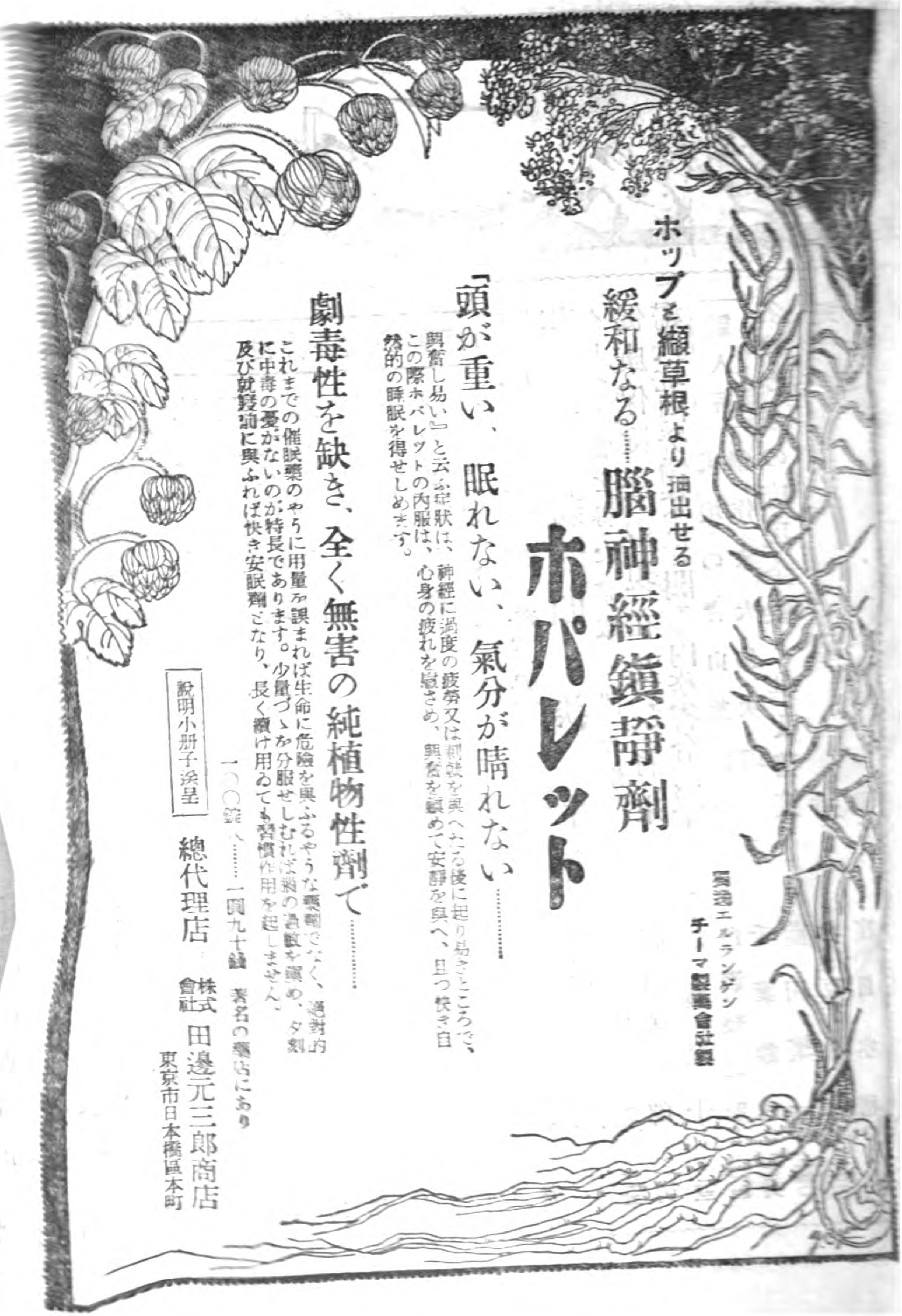
KAIZO

改造

新年號

1929


獨逸エルランゲン
チーマ製藥會社製
ホップと纈草根より抽出せる
緩和なる……腦神經鎭靜劑
ホパレット
「頭が重い、眠れない、氣分が晴れない……
興奮し易い」と云ふ症狀は、神經に過度の疲勞又は刺戟を與へたる後に起り易きところで、この際ホパレットの内服は、心身の疲れを慰さめ、興奮を鎭めて安靜を與へ、且つ快き自然的の睡眠を得せしめます。
劇毒性を缺き、全く無害の純植物性劑で……
これまでの催眠藥のやうに用量を誤まれば生命に危險を與ふるやうな藥劑でなく、絕對的に中毒の憂がないのが特長であります。少量づゝお分服せしむれば腦の過敏を鎭め、夕刻及び就寢前に與ふれば快き安眠劑となり、長く續け用ゐても習慣作用を起しません。
一〇〇錠入……一圓九十錢　著名の藥店にあり
說明小册子送呈
總代理店
株式會社 田邊元三郎商店
東京市日本橋區本町

改造社版 經濟學全集 ◇第四回配本

唯物史觀經濟史

本書は、唯物史觀の上に立つ經濟史として、日本文を以て書かれた最初の著述である。原始共產制時代に筆を起し、古代社會、封建社會を經て、資本主義成立時代に入り、資本主義發展の跡を詳叙して、更に社會主義經濟が如何に成立し發展しつゝあるかの狀を論じて全篇を結ぶ。尨然たる結構、直截簡明なる理論には、力强き魅惑を有す。本全集中最も光輝ある論著として汎く江湖に薦む。

內容一斑

資本主義以前經濟史　山川均

資本主義の成立とそれ以後に於ける經濟の發展　石濱知行

社會主義經濟の發展　河野密

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

第三回配本　日本社會經濟史（配本濟）

京都帝大教授 經濟學博士　本庄榮治郎

日本社會經濟史（…）經濟學博士…

戰爭

列國軍備の現況と新兵器の整備　陸軍省軍務局長　杉山元…一六一

無產者運動……山川均…一六七

對支根本策樹立を急げ

我政府の對支根本政策がぐら〱して決定せず、閣内に於てさへ田中、久原、小川を中心とする所謂强硬政策と他閣僚を中心とする日和見政策とが常に相鬩ぎ、與黨またその大方針を決定が出來ないのは何たる醜態ぞ。先づ常態より推せば與黨代議士會にかけて政友會の大方策を協定し、それを自黨内閣により實行すべきである。しかもいつも閣僚二三の意見に引きずられて眞正の代議政治の實を擧げ得ざる狀勢にある。かくの如き寡頭政治であるから中間勢力にいつも乘ぜられて自黨の政策遂行難に陷るのだ。今回床次君の支那行の如きも與黨と、内閣とが不動の政策なき結果起れる變態的現象である。我々は床次君の支那行によりて日支に横はる暗雲が一掃さるるものとは思はぬ。よし、蔣介石と何等か密約やうのものが出來たにしてもそれは何の役にも立つものでない。公明なる日支兩國民の前に批判を仰いだものでなくては却つて他日に累を及ぼさぬとも限らぬ。我々は過去に於ける幾多の事實に徵してしかく斷言するものである。殊に支那政局を有利に展開せんが爲に暫定的、密謀的協定によりて一時を瞞着せんとする將馮の下心が彼等にありとすればそは重大なる禍根を將來に貽すものだ。床次君にしても滿洲問題を完全に解決する成案なくして將馮に會見するのは無意義である。現内閣が執する滿洲政策に對し我が國民はどれほど支持しているか、否現内閣のとれる對支政策には我國民は不關焉の態度にあるではないか。我々は支那問題を解決するには先づ閣議を開いて不動の大方針を確立し、それを民衆の前に批判を仰げと絕叫するものだ。國民の支持なくして對支問題を有利に展開することは斷じて出來ないからである。大方針さへ確立すれば、芳澤、藤田、矢田、間のいがみ合ひもなく、久原、田中善等の人騷がせもなく、床次の支那行もなく、常に一糸亂れざる軌道を行くことができるのだ。田中内閣には常に無責任の地位にあるものが跳梁する。こうしたことは政界を暗曹にする。殊に外交舞臺をそうすることは重大なる禍機を孕ませるものである。そしてその妥協が一部ブルジョアの利權を中心になされた場合國民憤怨の的となるのだ。我々は此機會に國民政府主腦者にも一言する。貴下等は眞實日支の關係を有利に展開するの誠意あらば先づ自ら政商たる如き陋態を棄てよ。一たび政權の中軸を握れば忽ちにして數百萬乃至は幾千萬の分限者となると云ふ批評は國民政府の首腦者として名譽の批評ではない。またボイコット、恫喝を連發せしむることも策の得たるものでない。第三國を引張つて我國を威脅することももう古い手である。自己の功名、利祿をスッパリ投げ出して眞に支那民衆のために眞つ裸となる時である。日支兩國の代表者が今のやうに權謀と自己の功名とに熱中しておる間は眞のよき解決はできないのである。

唯それが國家の命ずる所であるからではなく、其の行動を爲さないとき、制裁を受け又は强制せられるであらうと、考へるから、選擇的考量を爲した末、其の行動を爲すこともある。これは、國民が、其の意志を、國家の意志のまゝに、活用するのではなく、即ち、國家の權力活動に服從するのではない。それは、服從して行動を爲すのではなくて、服從しないで、唯、服從しないことの結果を避けるが爲めに、行動を爲すのである。故に、通俗に、國家の權力活動に服從する、と云はれる場合でも、制裁を受け又は强制せられるからとて、其の行動を爲すことは、眞正の服從ではないのである。併し、此の場合をも、國家の命ずる所であるから、其の行動を爲す場合と、一樣に服從と云ふとせば、前者を選擇服從と名け、後者を純粹服從と名けてもよいと思ふ。從て、眞正の服從を爲すこと、即ち、國民が、其の意志を、國家の意志のまゝに、活用することは、獨り純粹服從の場合に於てのみ、これを見るのである。選擇服從の場合、例へば、納めなくても强制的に徵收せられるからとて、租稅を納め、服從しなければ罰せられるからとて、徵兵に應ずるが如き場合には、其の意識に於ては、租稅を納め、徵兵に應ずるのではない。それは、其の行動に付ては、强いて服從を取

い。

三 服從と權威

此の如き服從は、如何にして、成立するのであらうか。問題は、今や進んで、こゝに到らなければならない。國家が國民に或行動を命じ、國民がこれに服從して、其の意志を、國家の意志のまゝに、活用する、といふときには、二つの主體の意志が結合しなくてはならない。二つの意志の結合といふことが、如何にして、可能であるのであらうか。服從といふことが外的事實であるならば、かゝる問題を考へるの必要はないけれども、それが意志の關係であるから、國民が、國家の意志のまゝに、且つ意志を活用する、と云ふことに付て、可能性のことを考へなければならないのである。それは、結局、國民の意志の決定の過程に於て求めるの外はない。國民が意志を決定するに當ては、其の過程に於て種々の意欲が錯綜して起る。其の場合、或一の意欲が、他の意欲に打ち勝つて、其の意欲に從て、意志を決定するに至るのである。其の意志を決定する意欲が國家の意欲に本源を有するとき、換言せば、國民が、國家の意欲を自己の意識作用の過程に取入れて、自己

動に服從するものである。換言すれば、國民が國家の權力活動に服從するといふのは、國民が、國家の意欲を自己の意識作用の過程に取入れて、自己の意志を決定する意欲とし、これに依て自己の意志を決定する、ことである。

此の如く、國家の權力活動に依て國民に示された意欲が、國民の意識作用の過程に於て決定力を有するのは、何故であるか。それは、決して、個々の場合の國家の權力活動に示される意欲の性質に因るのではない。國民が、國家の、其の意欲を、是認するからではない。寧ろ、國民は其の性質の如何を論じない。唯、それが國家の權力の發動であるから、である。然れば、國民が國家の個々の權力活動に服從する場合には、其の意識に於ては、其の個々の權力活動を觀てゐるのではなく、國家の權力一般を觀てゐるのである。而して、それが國家の權力の發動であるから、唯其の故に、それに服從するのである。即ち、一般に國家の權力の判斷する所のものが、國民の判斷する所のものに優越し、其の結果、國民が國家の個々の權力活動に服從するのである。これは、つまり、一般に國家の權力といふものが、國民に向つて、權威を有つてゐるのである。元來、權威といふ概念に就ては、色々の說明があるけれども、それは本論に於て詳述すべき限でない。平易に說明すれば、或ものが權威を有つといふことは、其のものゝ示す所が、吾々自身の判斷に優越して、吾々が、[illegible]を有する。ことに外ならない。其の結果、吾々は、其のものゝ示す所に從つて、意欲し又は思惟するのである。

然るに、前にも述べた如く、國民は、國家の命ずる所の行動を爲さないとき、これを强制せられることもあり、又、これを爲さないときの制裁又は强制を避けるが爲に、これを爲すこともある。それは、眞正の服從でないことも、亦既に之を論じた。此等の場合には、其の限度に於て、國家の權力が、國民に向つて、權威を有つてゐない、こととなるのである。蓋し、此等の場合には、國民の意識の過程に於て、國家の意欲が、國民の意欲に優越して、これに從はしめるの力を有してゐるのでない、からである。此の點に於ては、右の場合の中、國民が國家の命ずる所の行動を爲したときでも、何等の差異がない。

然れば、通俗に、國家の權力活動に對する服從と云はれる場合に於ては、國家の權力が、國民に向つて權威を有つてゐる場合、及び、國家の權力が、國民に向つて、權威を有つてゐない場合がある。後の場合には、眞正の服從は存しない。然るに、國家は權力團體であり、權力團體であるの故に、最も强固な、最も統一ある、人類の共同生活の形態である。これは、何人も云ふ所であつて、自明の理である。唯、其の權力團體と云ふことに就ては、注意を要する。其の權力は、國民に向

つて權威を有つてゐるもの、でなくてはならない。其の場合に於てのみ、國家と國民との間に、意志の關係が密切となり、其の國體が强固に統一せられるのである。國家が、彼の、國民が、單に、制裁又は强制を避けるが爲に、國家の命ずる所の行動を爲す、といふやうな狀態であるならば、換言せば、國家の權力が、國民に向つて、權威を有つてゐないならば、國家と國民との關係は、密切な意志の關係ではなく、外的事實である。かゝる狀態に於て行はれる共同生活が、眞に、强固な、統一ある共同生活でないことは、當然の事理である。然れば、國家を思ふ者は、國家の權力をして權威を有たしめる、ことに努めなければならないのである。然らば、如何なる條件の下に、國家の權力が權威を有つのであらうか。此に於てか、權威の根據に就て考へるの必要を生ずる。

四　權威の根據

或ものが、吾々に向つて、權威を持つは、畢竟、吾々が、其のものに、權威を認めるのである。吾々は、權威なるものを認めることなしに、生活することが出來るや否や、又、吾々の生活の如何なる方面に

威を認めてゐるのである、といふことは、疑ない。國家の權力一般に權威を認むることなくして、國家生活といふものを考へることは、論理上あり得ないのである。此の如く、國家生活を成立せしめるが爲に、權力一般の權威を認める、といふことの、必要であることは、論理上の斷案であるが、其の權威が認められることは、心理上の事實である。全く經驗的のものである。從つて人類の意識の發達の狀態に依つて異ならざるを得ない。それ故に、處と時とに依つて、權力の權威を認めるに至る事情を異にすることもあるのである。それであるから、昔の國家生活に於て、國民が國家の權力に權威を認めた場合と、同樣の事情の下に於ても、今日では、必ずしも、國家の權力に權威を認める、とは云ひ得ない。さて、然らば、今日、國民が國家の權力に權威を認めるが爲には、如何なる事情の存在を必要とするのであらうか。

凡そ、權威なるものゝ、根據に就ては、色々の說明があるのであるが、恐怖、信仰、尊敬、理解等を擧げることが出來る。或は、或るものに對する恐怖よりして、其のものに權威を認める所の、恐怖を根據とする權威もある。或は、或ものに對する信仰よりして、其のもの

る要素もある。實は、[illegible]に對する理解[illegible]、其の[illegible]に權威を認める所の、理解を根據とする權威もある。此等の權威の要素は、必ずしも、相互排斥するものではないから、或權威は、決して、右に示したもの丶中、いづれか一のみを根據とするものである、と云ふことは出來ない。國家の權力に權威を認めるに至る の根據も、亦同樣に、右の諸種の根據の混合したものである。併し、現代の國家生活に於ては、國家の權力に權威を認める根據として、權力に對する理解といふことを見逃してはならない。且、それが重大の作用を爲すものである。固より、現代人と雖、恐怖に依り、信仰に據り、尊敬に據り、權威を認めないのではないけれども、然しながら、少くとも、これと共に、理解に據り權威を認めるといふことが、現代人の特徴と云うてよい。此のことは、國家の權力に就ても同樣である。現代人が國家の權力に權威を認める根據の、決定的のものは、寧ろ理解である。それ故に、國家の權力に對する理解の大小に依て、國家の權力が權威を持つ程度の大小を生ずるのである。

五　權力に對する理解

國家の權力に對する理解は、吾々が、權力の下に於てでなくては、共同生活を爲すことが出來ないといふ思惟である。[illegible]る丶思惟するこ[illegible]、及び、權力[illegible]ある丶思惟することである。即ち、吾々が共同生活を爲す以上、權力に依て生活を共同ならしめるものである、と思惟し、權力に權威を認めるのである。又、權力に依て生活を正しくするものである、と思惟し、權力に權威を認めるのである。

第一の點、即ち、權力に依て生活を共同ならしめるものである、と思惟することは、特に述べるまでもないけれども、論述の順序上一言しよう。共同生活を爲す所の人々は、必ずしも、內容に於て同一である意志を有することは出來ない。內容上差異を生ずべき意志を有する多數の人々が、それにも拘らず、共同して生活を爲すことが出來るのは、全く、各人が、其の社會人としての行動に、一つの限界を附するからである。其の限界は、人々の意志自身に於て、制止作用が行はれるから、生ずるのである。即ち、吾々の意志が、各自それ／＼制止作用を行うて、其の限界を見出し、其の結果、多數の人々の意志が、兩立するのである。然らば、此の如き制止作用は何に依つて生ずるかといふに、それは、各人が、一定の意志力に、共通の權威を認めるからである。即ち、各人が、一定の意志力の示す所のものを、共通に、各自の判斷に優越するものとして、其の示す所の行動を爲すからである。其の

共通の權威たる意志力は即ち國家の權力に外ならない。これは、畢竟、各人が、權力を以て、生活を共同ならしめるものである、と思惟するのである。これに據て、權力が權威を持つのである

第二の點、即ち、權力に依て生活を正しくするものである、と思惟することは、權力に對する理解に於て、重要のことである。權力に對する、此の理解は、又、權力は、恣意に依て、發動せられるものでなく、客觀的の規律に依て、發動せられるものである、と思惟することと、及び、權力は、吾々の道德觀に適合して、發動せられるものである、と思惟することに分れる。

先づ、國家の權力は、客觀的の規律に依て、發動せられるものである、と吾々が思惟するとき、權力は吾々に向つて權威を持つ。それが或者の、時々の姿意に依て、發動せられるものであると、吾々が思惟するならば、吾々は權力に權威を認める筈がない。何故かといふに、其の場合、國家の權力が恣意に依て發動せられるならば、一定の人々の個人的の都合に依つて、任意に左右せられることゝなるから、それが、吾々の共同生活を正しくすると、考へられないのである。現代に於ては、國家の權力は憲法其の他の法といふ規律に依つて發動せられはれると信ずる間は、權力は國民に向つて權威を持つけれども、然しながら、之に反して、國民が、權力が法に依つて行はれるものでない、と信ずるときは、權力は國民に向つて權威を有つものではない。

次に、國家の權力は、吾々の道德觀に適合して發動せられるものである、と吾々が思惟するとき、權力は吾々に向つて權威を有つ。それが、吾々の道德觀に適合して發動せられるものでない、と吾々が思惟するならば、吾々は權力に權威を認める筈はない。蓋し、吾々が共同生活を爲すは、唯同時に同一の場所に生息するといふことではなく、吾々の生活を正しくするが爲に、共同して、努力するのである。吾々の生活を正しくするのは、生活を吾々の道德觀に依て、整理するの外はない。これが爲に、權力を、吾々の道德觀に適合して、發動せしめようとする。而して、之に依て吾々の生活を正しくしようとするのである。それ故に、國家の權力が、吾々の道德觀に適合して、發動せられると、吾々が信ずる間、吾々は、權力が吾々の生活を正しくするものである、と思惟する。即ち、それに權威を認める。

然るに、國家の權力が、吾々の道德觀に適合して、發動せられる、と思惟することは、其自身では、個々の權力活動に付て、吾々の道德觀に依て、批判する、といふことではない。それは、國家の權力の發動

は吾々の道德觀に適合して發動せられるものである、と信じ更に、さうでない、と信ずるのである。然らば、それが如何なる一般的方向であるとき、吾々が、國家の權力は吾々の道德觀に適合して發動するものである、と思惟するであらうか。それには、權力發動の一般的方向に付て、形式と實質とを分つて考察することを要する。

一に、形式から云へば、國民が國家の權力の發動に、參加し得るならば、國民は、權力が自己の道德觀に適合して發動するものである、と思惟する。それは、縱令、常に自己の道德觀と一致するとは思はないにせよ、自己の道德觀が顧慮せられる狀況に在るが故に、それが、自己の道德觀に適合して發動せられ得る、と思惟するのである。今日の制度に於ては國家の權力は、法律や豫算に準據して行はれ、法律や豫算には、國民が、議會を通じて、參與してゐるのであるから、國民は、國家の權力の發動に自己の道德觀を加へ得るのである。即ち、權力が吾々の道德觀に適合して發動せられるものである、と思惟せられる。此の點から、吾々は國家の權力に權威を認めるの結果となるのである。

二に、實質から云へば、國民が、國家權力の發動の一般の目標が、現代の社會生活上の正義に置かれてある、と信ずるならば、國民は、國家の權力が、自己の道德觀に適合して、發動されるものであると思惟する。これは、立法の方針に關する國民の感想の問題である。

法と[illegible]い。社會生活は、法に依ても、道德に依ても、共に、規律せられるものであるが、法は、權力に依て、强制的に、吾々に一定の社會的行動を要求し、道德は、吾々の自律的態度に基く所の、一定の社會的行動を要求する。それ故に、道德と法との區別は、其の規律する事項の內容に存するのではない。同一の事項が、或は、法と道德との兩者の內容であることもあり、或は、法か又は道德かの、いづれか一の內容であることもある。而して法の內容、即ち、國家の權力が法として、吾々に要求する所の社會的態度が、吾々の一般道德觀に依つて要求せられるものと、一致するときには、吾々が其の法に從ふのは、吾々の道德觀に從ふのである。それは法の要求する所のものを、完全に、吾々の意志決定の過程に取入れること丶なる。それ故に、か丶る場合には、吾々は、法たる國家の權力に權威を認めるのである。之に反して、權力が、法として、吾々に要求する所の、社會的態度が、吾々の一般道德觀に一致してゐないときには、吾々が其の法に從ふのは、吾々の道德觀に從ふのではない。それは、法の要求する所のものを、完全に、吾々の意志決定の過程に取入れるのではない。從て、法の要求する態度を取つた場合でも、國家の權力に、完全に、權威を認めた、とは云へない

尤も、社會生活に關する、吾々の道德觀なるものそれ自身の內容か、

固より、相對的のものであつて、時代に依つて變化するものである。一般に、吾々の社會生活に關する道德觀と云へば、個人的の見地、即ち、吾々は、吾々自身の幸福を來す爲に、他人に損害を與へざる限り、自己の力を以て、自由に自己の生活內容を定めてよい、とするの思想及び、社會的の見地、即ち、吾々は、吾々自身の幸福を來すことは、固よりよいが、これが爲に、單に、他人に損害を與へないといふことを以て十分とせず、吾々自身の生活が同時に社會に寄與する樣に、努力しなければならない、と云ふの思想の二つに分れる。此の二つの見地の比較は、昔より今日に至るまでの、社會生活に關する吾々の道德觀の變遷を、證明するものである。從來は、主として、個人的の見地に立つてゐたのであるけれども、今日は、主として社會的の見地を重ずることとなつてゐる。從つて、今日に於ては、國家の權力の發動に付ても、それが、吾々の社會的の見地に立つ所の道德觀に適合してゐる、と思惟せられるとき、それが、吾々に向つて、權威を有つのである。

以上述べ來つた所に依れば、今日に於ては、國家の權力が、吾々に向つて、權威を有つには、權力に對する吾々の理解を根據とする、ことを注意しなければならない。換言せば、吾々が、權力に依て、生活を正しくするものである、と思惟することを必要とするのである。……生活

有つのである。而して、權力が生活を正しくするものである、と思惟するには、權力が客觀的の規律に依て發動せられるものである、と思惟し、又、權力が吾々の道德觀に適合して發動せられるものである、と思惟することを必要とする。かくの如き理解がないときには、權力は權威を有たないのである。

六　理解の障害

國家の權力に對する理解は、國家の權力一般に對する理解である。一般に國家の權力といふものが、吾々の生活を正しくするものである、と思惟するのである。個々の權力活動に付て、それが吾々の生活を正しくするに足るや否や、を吟味して、之を肯定する、といふことではない。それ故に、國家の權力に權威を認める、といふことは、一般に國家の權力の示す所のものを以て、自己の判斷に優越せしめ、これに從ふ、といふ態度を取ることである。其の態度を以て、個々の權力活動に臨むといふ點に於て、權力の權威と個々の權力活動とか、關係があるのである。併し、それは、個々の權力活動を審査して、それに、自己の判斷に對する優越を認めて、服從するのではない。一般に權力に

る、と云ふのではない。個々の權力活動に對する國民の態度は、昔に無批判的であつたが、漸次批判的となり、今日に於ては、全く批判的となつた。今日は批判的態度の時代である。從つて、國民は、個々の權力活動を、正しくない、と考へる場合がある。それにも拘らず、これに服從するのは、一般に國家の權力に權威を認めてゐるからである。卽ち、一般に權力が生活を正しくするものである、と思惟するからである。

然しながら、個々の權力活動を、正しくない、と思惟することがあるにも拘らず、一般に國家の權力に權威を認める、といふことが、如何にして可能であるか。それは、國家の權力の永遠性を思ふからである。國家の個々の權力活動が、時に、正しくないとしても、常に、同樣の狀況をくり返す、ものとは思はないのである。寧ろ、却て、それは、國家の權力一般より云へば、變態である、と考へる。而して、結局、國家の權力活動は、正しい所の、常態に落ちつくものと考へる。そこで、權力一般を以て、吾々の生活を正しくするものである、と考へるのである。故に、若し、個々の權力活動が正しく行はれないといふ狀況が、斷えず、繼續するならば、國民は、一般に權力といふものが、生活を正しくするものである、といふ思惟に付て、懷疑をさしはさむに至り、卽ち、權力一般に權威を認めざるに至る、のである。然[illegible]いふものに權威を認めてゐる結果であるけれども、然し、又、個々の權力活動の狀況如何が、一般に權力といふものゝ權威の存立に影響を及ぼすのである。而して、眞正の强固な統一ある國家生活に於ては、權力が權威を有つものでなくてはならない、ことは既にこれを述べた。然れば、吾々は國家の權力一般をして權威を有たしめるやうにするが爲に、個々の權力活動を正しくすることを怠つてはならない。吾々は、國民が、正しからざる個々の權力活動に對しても、强制又は制裁の觀念から、服從する、といふ外的事實を觀て、滿足してはならない。此の如き狀況がくり返へされつゝある間に、國家の權力は權威を失ひつゝあるのである。

かゝる見地よりして、我國の現狀を觀るとき、遺憾とすべきことが頗る多い。

第一に、個々の權力活動が、憲法其の他の法及び、法の精神に反してゐることが、屢々目につく。これは、敢て、現政府の態度に就て云ふのではなく、我國政府の近來の一般の態度に就て、云ふのである。玆に一々其の具體的の事例を指摘して批評することは、本論の目的ではないが、其の法又は法の精神に違反する、重要な點を示さなければならない。國家が、人權の保護の爲に權力の發動に付て設けた所の限

界を無視し、又、已むを得ざるの必要ある場合にのみ認められた緊急作用を濫用し、又、國民の意志を問ふの目的を以て行はれるべき衆議院解散を惡用し、又、自由に國民の意志を活用せしむべき選擧に干渉するが如き、これである。此等の場合には、個々の權力活動が、客觀的の規律に依て行はれないで、政府者の恣意に依て行はれるのである。此の如き現象が繼續して發生するならば、國民は、これよりして、遂に、國家の權力といふものは、一般に、或者の恣意に依て行はれるものであつて、客觀的の規律に依て行はれるものでない、と思惟するに至るであらう。即ち、一般に國家の權力が、國民に向つて、權威を有たないことゝなるであらう。

第二に、個々の權力活動と吾々の道德觀との關係は、如何であるか。形式から云へば、吾々が、權力が、吾々の道德觀に適合して發動するものである、と思惟するには、國民が、國家の權力の發動に參加し得る、場合であること、前に述べた通りである。然るに、近來、政府は、進んで、政治上の問題を、虚心坦懐に、議會又は世間に於て論議せしめようとしないで、寧ろ、問題とせざらしめるようにする、の傾向がある。殊に、前にも述べた通り、緊急作用を濫用し、例へば、國論

れは、皆、國家の個々の權力活動に、國民の意志の參加を拒むのである。此の如き現象が繼續して行はれるならば、國民は、一般に權力といふものは、容易に、國民の意志を參加せしめないで、行はれるものである、と思惟するに至るであらう。即ち、國家の權力といふものが、一般に、吾々に向つて、權威を有たなくなるであらう。次に、實質から云へば、吾々が、權力が、吾々の道德觀に適合して發動するものである、と思惟するは、吾々が、權力の發動が、吾々の、現時の、社會的の見地に立つ所の、道德觀に適合してゐる、と思惟する、場合であること亦既に述べた如くである。然るに、我國現時の個々の制度は、主として、舊來の個人的の見地に立つ所の、道德觀に基てゐる。例へば、財産權に就て見ても、吾々は、各自の生活の立場のみから、自己の欲するまゝに、其の財産を利用し又は利用せざるの自由を有つてゐる。即ち、それは、徹底的に各自專屬の力とせられてゐて、社會公共の力とはせられてゐない。然し、今日の、社會生活に關する、吾々の、道德觀は、明に、社會的の見地に立つものであつて、吾々は、自己の力を社會的に利用すべきものである、と要求せられてゐるのであるから、財産の所有者と雖も、成るべく、それを社會の用に役立つやうに、利用

の制度は、強りに、從來の個人的の見地にのみ立脚してゐる。むしろ、今日の制度の下に於ても、既に、同に、財産權に社會的の意味を加味してゐるものもある。例へば、彼の著作權や特許權の如きは、本來個人の力として認められてゐるものであるけれとも、然しながら、同時に、著しく社會的に取扱はれてゐる。兩者共に權利に一定の存續期間が定められ、其の期間經過後は、其の權利は消滅する。即ち、一定の期間を經過すれば、其の財産は、最早其の個人の力ではなくなり、社會の力となるのである。又、特許權に就て、公益の爲に、强制的の實施を定めてあるのも、其の程度に於て、それを、社會の力としてゐるのである。併し、一般に云へば、財産權に付ては、社會的の見地に立つ所の道德觀に適合してゐないことが、多いのである。獨り財産に就てのみならば、一般に、吾々が、社會的見地に立つ所の道德觀に據て、生活を爲す、といふ思想が、我國現時の制度となつてゐる程度は、極めて小である。之を放任して置くならば、國民は、一般に權力といふものは、吾々の道德觀に適合して、發動するものでない、と思惟するに至るであらう。即ち、國家の權力といふものが、一般に、吾々に向つて、權威を有たなくなるであらう。

以上は、國家の權力に對する理解の障害となり、從て、權力が一般に、吾々に向つて、權威を有たなくなる事情であり、且、我國現狀に[illegible]發揮しようとする者に、[illegible]い。此の點に就て、一般國民も注意すべきであるが、殊に、權力行使の任に當る政府者は、權力を發動するに當て、殊に反せざるやう、又、今日の社會の道德觀に適合するやう、努力すべきものである。然らずんば、國民が國家の命ずる所に從て行動を爲すとしても、それは、國家の意欲を自己の意志決定の過程に取入れるのではなく、唯、これを爲さざる場合の結果を避ける爲に、これを爲すものに外ならない。それは、眞正の服從ではないのである。國民が事實上國家の命ずるまゝの行動を爲してゐるといふの狀態を見て、眞正に服從してゐるが如く考へるのは、皮相の見と云はざるを得ない。而して、眞正の服從が行はるゝ場合に於てのみ、强固に統一せられた國家があるのである。政府者が、通俗に所謂服從の外的事實を觀て滿足してゐる間に、國家の權力は權威を失ひつゝあるのである。先哲の語にも「以力服人者非心服也。以德服人者中心悅而誠服也。」と云ひ「得天下有道。得其民。斯得天下矣。得其民有道。得其心。斯得民矣。」とある。國民の心を得て心服せしめるとき、權力が權威を有つ。權力が權威を有つとき、國家は安泰である。爲政者の態度に於て、權力の權威を失はしめるやうな事實を剏ること、これが、實に國難中の國難である。

英雄論

杉森孝次郎

一、英雄とファクタ

一九二二年八月一日のイタリは突如、全國罷業の革命的脅威に訪はれた。戦爭の結果は、イタリにとつて、他のいかなる戦勝國にとつてよりも早く、劇しく幻滅的であつた。生活難は急角度を描いて襲來した。帝國主義的願望は勝つて勝手の英佛米のためにつめたく、輕く片づけられることによつて恥辱、憤滿と變じた。非戦主義者、共產派の捲土重來が始まつた。國民の本能は、しかしながら、これを後援する傾向のものではなかつた。またその共產主義的分子も準備と決意に於いて、ロシアのそれに比すべきやうな確實なものではなかつた。全國罷業は戦後の颶風、紛擾、無政府的情勢の滞積の一決潰にほかならなかつた。

國民は大衆者であるがゆゑに、常識主義者であるがゆゑに、不随意立ち場を取りながら、無力であつた。

決意の人、行動の人ムッソリーニはこの機會を捉へた。かれは左手に匪援分子を撃蕩し、右手に最も大膽なるクーデータを斷行した。英雄ムッソリーニの方法はこれであつた。

二、英雄とケレンスキ

一九一七年夏に及んで、三月革命は、ケレンスキの名に於いて、完全に行きづまつた。かれは社會主義の原則を國內に假定しながら、英佛米等、聯合國の意向に怖れ隨ひ、帝國主義、資本主義のための戦爭と新ロシヤが公然觀ずる戦爭を、無理やりにおつきあひし續けた。國民は戦意を完全に喪失したのみならず、不戦意を積極的に生じた。ケレンスキは空腹と空銃の士卒を、自身曳きずるやうにして國境さきの墺領ガリーチェンに出戦して惡闘したが、慘敗以上の慘敗だつた。國

て革命を企て、軍隊が先方にあつて當方につかなかつたため一敗地にまみれ、敗殘竄匿、一九〇七年に國外してから十年不還の人であつた

リェニンは、今度は首尾よく宿志達成の機會を捉へた。

リェニンの敗擧は一九〇五年十二月末、モスクヷに於いての事であつた。詳しくは軍隊がつかなかつたのみならず、他の諸都市に於ける一齊反起なく、農村に於ける思はしき反應がなかつたため*であつた。



ムッソリーニ

一九一七年春初、第一革命の時にはリェニンは瑞西にゐた。かれは歸心矢よりも急であつたが、イギリスの政府の頑強なる禁足運動のために妨げられ、ドイツを汽車にてかくれ拔け、瑞典、フィンランドを通ほつて四月、着露した。その月四日（トロツキによる）の夜、かれはペトログラードのフィンリャンドスキ停車場に於いて、列車を出るとすぐ、一場の演説をやつた。かれの古くからの革命主義的同志によつてさへも、それは熱迎のみによつては酬いられず、多少の疑惑、また反對さへもによつて迎へられた。

日刊『プラウダ』に陣取つて、かれはブルジョアジーと假政府に對する無産大衆の不信任を煽動し、激揚し、組織すべく精力を擧げた。

ケレンスキ系の社會主義者らが、ブルジョアジーと組んで、政權維持と政局打開を策するに及び、加ふるに聯合諸帝國主義國の強制的請下に、明白に絶望な攻勢戰を企つるに及んで、即ち七月早々に民衆の直接行動的示威運動が勃發した。五日の晩に政府軍が市ペトログラードを占領してリェニン勢は鎭壓された。リェニン追索が極度の緊張に於いて始まつた。かれは「地下」策動を開始し、先づペトログラードに於いて一職工の家に身を潜め、のちフィンランドに亡匿した。しかし、かれはボルシェヴキー黨の領袖連との接觸をば持續した。

しかし、形勢はその間に急轉直下的に進展した。リェニンの豫言――樂觀的豫言は着々實證された。ボルシェヴキーはペトログラード及びモスクヷのソヴエットに於いて大多數を制した。リェニンは今や統制獲得のまぢかの可能に當面し、あらゆる言論的武器を大車輪に使用してそれのいよ〳〵の實現に集中した。「今しからざれば決して！」（横槍ながら禁じえざるに近い衝動に於いて筆者評す、社會進化の必然は？と）をかれは激越の文章、手紙、及び面談に於いて繰り返した。

十月二十五日はソヴエットの第二回議會の開會當日であつたが、この日ケレンスキ政府否定の直接行動が開始された。リェニンは、三



ケレンスキ

個月半の潜伏ののち、革命中ボルシェギキーの本營として使用されたスモルニに現はれ、そこからして自身直接に戰鬪を指揮した。

同じ議會の二十七日の夜の議場に於いて、リェニンは講和と土地に關する政令案件を提出して通過した。リェニンの統制獲得の現實の最初の瞬間が、しかるのち、議場に於けるボルシェギキー的大多數及び左翼的贊同者の名に於いて、かれを頭首とする人民委員會の設立が宣表されたことによつて到來した。きのふまで丸木小屋に敵の統制を危ふく避け逃れてゐたお尋ねものが、かくして、統制者となつた。

ファクタがムッソリーニを英雄としたやうに、ケレンスキがリェニンを英雄とした。

三、英雄とアスクィス

一九一六年十二月は、イギリスに於いては、アスクィス内閣に對するロイド・ジョージのクーデータが行はれた時だ。

アスクィスの「待てそして見よ」に國民はしびれが切れるどころか業が煮え、業が煮えるどころでなくいのちがあぶなくなつて來た。一と方でない。一九一五年五月、アスクィスの首相席をそのまゝに聯立内閣が造られたけれども、首相居据りでは緩漫症は勿論見なほさなかつた。

陸では連戰連敗、水の上では毎日のやうに貨物船が潜航水雷の餌食となる。ロンドンの空は爆彈投下のツエッペリン、それから飛行機に、敵に無難に見舞はれどほし。大統領ヰルソンからの多少の講和的策動にアスクィス内閣の食指はほとんど決定的に動いた。國民は執拗第一のたて糸と、プライド第一の横糸で織られてゐるのだから、勝たずに再握手するなど、堪へられたくやしさではないか。名案はない。あわつるな乃公これにありと、猛然名乘りいでたものが一九一六年末のロイド・ジョージであつた。

ファクタがムッソリーニを英雄としたやうに、ケレンスキがリェニンを英雄としたやうに、アスクィスがロイド・ジョージを英雄とした。

四、英雄と押しのけ

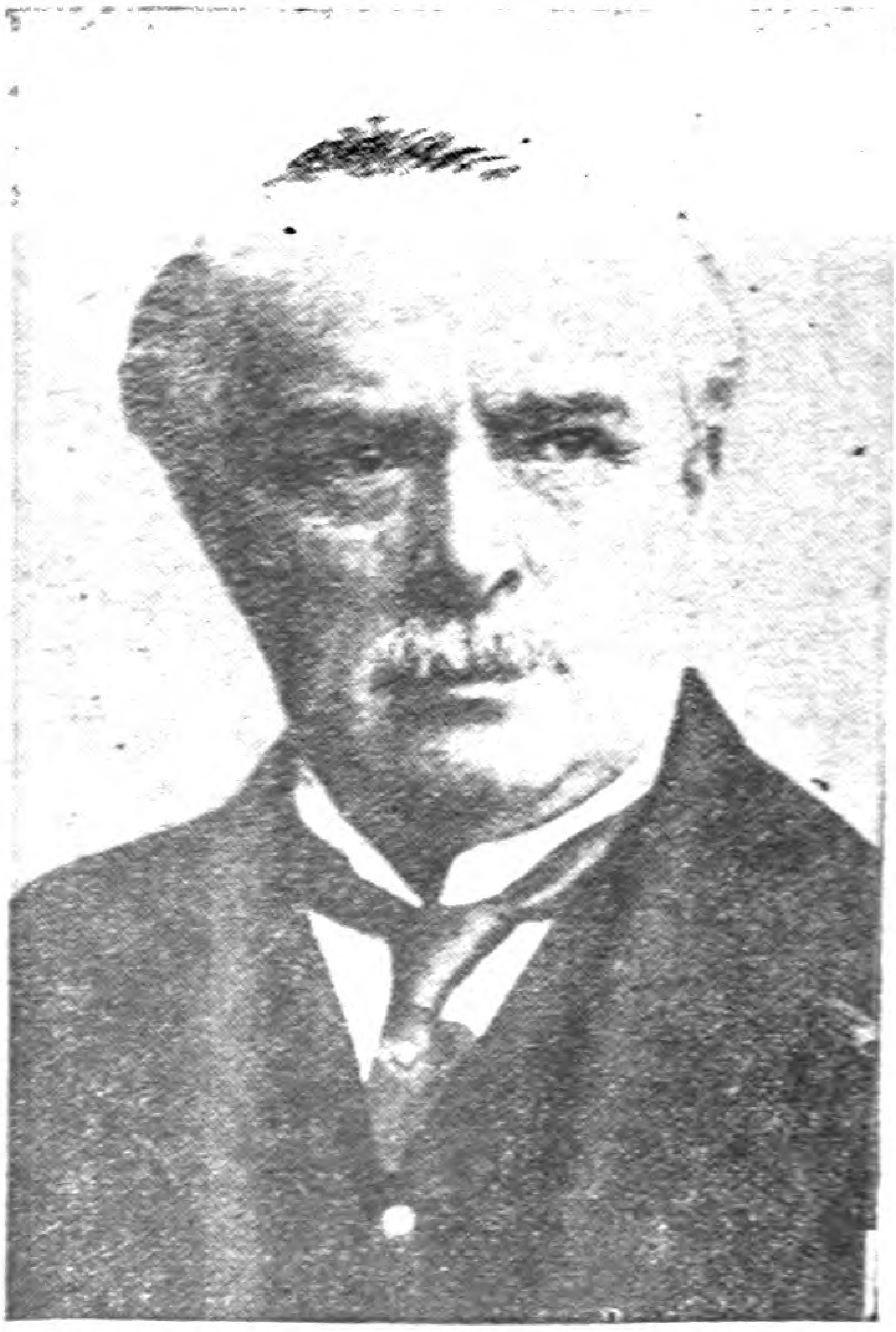


アスクィス

ムッソリーニのファクタ押しのけ、リェニンのケレンスキ押しのけ、ロイド・ジョージのアスクィス押しのけが注意される。

いふ言葉をきこつかせる底の主義、理想の一貫的熾烈において顯著であり、第三の場合は比較的に小細工に屬するが、三者を通じて押しのけの形式から全然自由ではない。それの善惡は別の問題としてだ。

ロイド・ジョージの押しのけは他二者ほどに世界的に知られてはゐない。かれの場合はかうであつた。それは勿論前節に記したやうな社會的情勢下に於いての事であつた。一九一六年十二月一日に、かれは、さきに北海で變死したキッチナーのあとをうけて陸相であつた際だが、首相に内談に及んだ。いはく、新たに戰爭委員會を設け、戰爭の最高指揮權をばそれに一任するでなければ、自分は在職を續けることができない。その委員會は自分と、エドワード・カーサン、ボーナー・ロー、ほかにもう一人勞働黨議員とから成り立つ。そして首相は入れない。アスクィスは慚恥の極を覺えたが即決はしなかつた。そこで、五日にロイド・ジョージは辭職した。アスクィスも續いてした。組閣の大命は一と先づかたばかりに統一黨首領ローに降つたがもとより受けず、ロイド・ジョージに降つて幕は下りた。


ロイド・ジョージ

押しのける英雄の動機が問題だ。それを通はす社會の意向または傾向、乃至廣く事情が問題だ。

英雄は機關手の如し。大衆及び社會は汽車の如し。前者の腕力で後者が走るのではない。後者自身の組織と傾向、軌道といふ事情が前者は利用するのみ。軌道とはいうても既設に限らない。それはしば／＼新設される。しかし英雄が軌道を新設する自由にも自然に制限がある。海底鐵道、墜道も或程度以上の長距離は絶望だ。機關手は軌道新設者ではないからこの比喩は最初の暗示だけでよい。また押しのけといふ言葉に即していへば、押しのけてこそ英雄、それまでは英雄ではない。ムッソリーニの英雄史は一九二二年十月から、リエニンの英雄史は一九一七年十一月から、ロイド・ジョージの英雄史は一九一六年十二月から始まる。明治二十八年の結果を見てから、世界は、支那はその以前から弱かつた、日本はその以前から強かつたと考へるやうなものだ。押しのけは歸納だ。實驗だ。演繹の新らしい足

場がそれによつて造られる。

一九二二年十月以後の世界はその以前のムッソリーニを、一九一七年十一月以後の世界はその以前のリェニンを、一九一六年十二月以後の世界はその以前のロイド・ジョージを、その最近の歴史を材料として構成する。この方法がかうずると、處女から產まれたヤソが出來たり、よち〳〵しながら天上天下唯我獨尊したり（もつとも、これはその意味の取りやうではなにも超人間的な藝でも、現象でもない）、秀吉、日蓮、陽明等、等、等にざらに見られるアプリオリ誕生記、おひ立ち誌が現はれたりする。


ファクタ

しかし迷信と輕信と無知を排拒すれば、成功及び成功後を參考材料としてその以前を探索したり、再認したり、改釋したりすることは、一つの生命を史的に、客觀的に、本質的に認識、理解、評價するための學術方法的一要件だ。勿論、一つの生命的過程を研究、批判するためには、その過程の比較的後期を暗示力として比較的前期を推定することに多少の方法的價値がある如く、その逆にもそれがある。三つ子の魂百までとほる一側面的事實がある。

一つの生命は、しかし勿論、それの複雜無限の環境を持つ。英雄を分析すれば大半は環境だ。ナポレオンはマホメットを主題として「マホメットはすべての人々が唯一神を信ずることを權威づけられたく切欲してゐる瞬間に出現した。……一個の人間はただ一個の人間でありうる、しかし時あつてか一個の人間としてかれは大事を成就しうる。かれはしば〳〵燃え易いもののなかに投ぜられた一つの火の子のやうだ。私はマホメットが今の時（一八一七）アラビヤに於いて成功するだらうとは考へない。しかしかれ自身の時代に於いてはかれの宗教は十年にして既知世界の半分ほどを征服した。クリストの宗教がしつかりと建設されるためには三世紀かかつたのにだ。クリストの宗教は東方人にとつては精微に過ぎる。かれらはもつとはつきりした、もつと精神的でないものを求める」といふた。

そのナポレオンの成功も大半は環境の手柄であることはかれ自身も知り抜いてゐた通りだ。かれはどうしてフランスの統制者となつたか。國民が最も必要とする二つのものを、そして他のなに人もが供給することのできなかつたその二つのものをかれは、敢然卒先して供給したことによつてだ。その二つのものは內に秩序、外に侵寇擊破であつた。革命はフランスに混亂と外力の包圍的干涉の尾を曳いたのであつた。ナポレオンは革命のあとかたづけを、一面即ち環境的側面から見れば、國民のために最も能率的に經營、執行してやつたのだ。

英雄は押しのけの名人だが、その押しのけが利くあひだは、大體に於いて、社會がかれの後援者だ。ムッソリーニは國民をうしろ楯に取つてファクタを押しのけたのだ。リェニンは勞農大衆を背景とし、ロイド・ジョージは英帝國及びその一黨の大多數人口の戰勝本能をふん



　フーヴァーを歷史の大統領に比見すると、今日までのところでは、英雄的でないことによつて目立つ。これはなにを意味するか。フーヴァーが英雄だとか、英雄でないとかいふことよりも、アメリカの社會事情が注意される。同じアメリカでも、革命卽ち獨立の必要が最も強かつた十八世紀にはワシントンその他が自然浮かんだ。十九世紀中、奴隷の問題、南北統一の問題が强烈化するに及んではリンカンが出現した。最近のウイルソンはやや問題だが、クレマンソーやロイド・ジョージを向ふにまわして國際聯盟をひた押しに往つたところにおもかげの必ずしも定石ならぬところがある。しかしウイルソンは自身英雄であるよりもアメリカの時運が或程度に英雄的であつたのだ。それにしても次期大統領約束濟みのフーヴァーにくらぶればかれの身邊に英雄的なとりとめなさがある。

　フーヴァーの將來は全く別の問題だ。ミユテーションが學說として、暗示として羽振りのいい現代だから格別、またかれの細き特書と能率に非凡の成績を過去に於て確實に示した還曆前者のことだから格別、將來はしばらく不問に附するが、今日までの現實では、かれは憲制內のはたらき手だ。

　アメリカの現在は、土地いまだ企業化されないかたちに於いて廣て、多く勞せずしてロムバード街をウオール街へ移してくれた。大體に於いて、現在のアメリカは、階級鬪爭、生活苦、不景氣、國境不安の風はどこを吹いてゐるのかといふ涼しい、あたたかい身上だ。

　フーヴァーがいかに技師的。事務家的であるかを見よ。憲制の根本機構など、もしこれを意識する瞬間または適當があるとするならば、それは死守主義の自覺、本能、意思の再發進を內容とする。

六、英雄と社會事情

　ムッソリーニとイタリの社會事情との間に、なんといふ同化があることか。

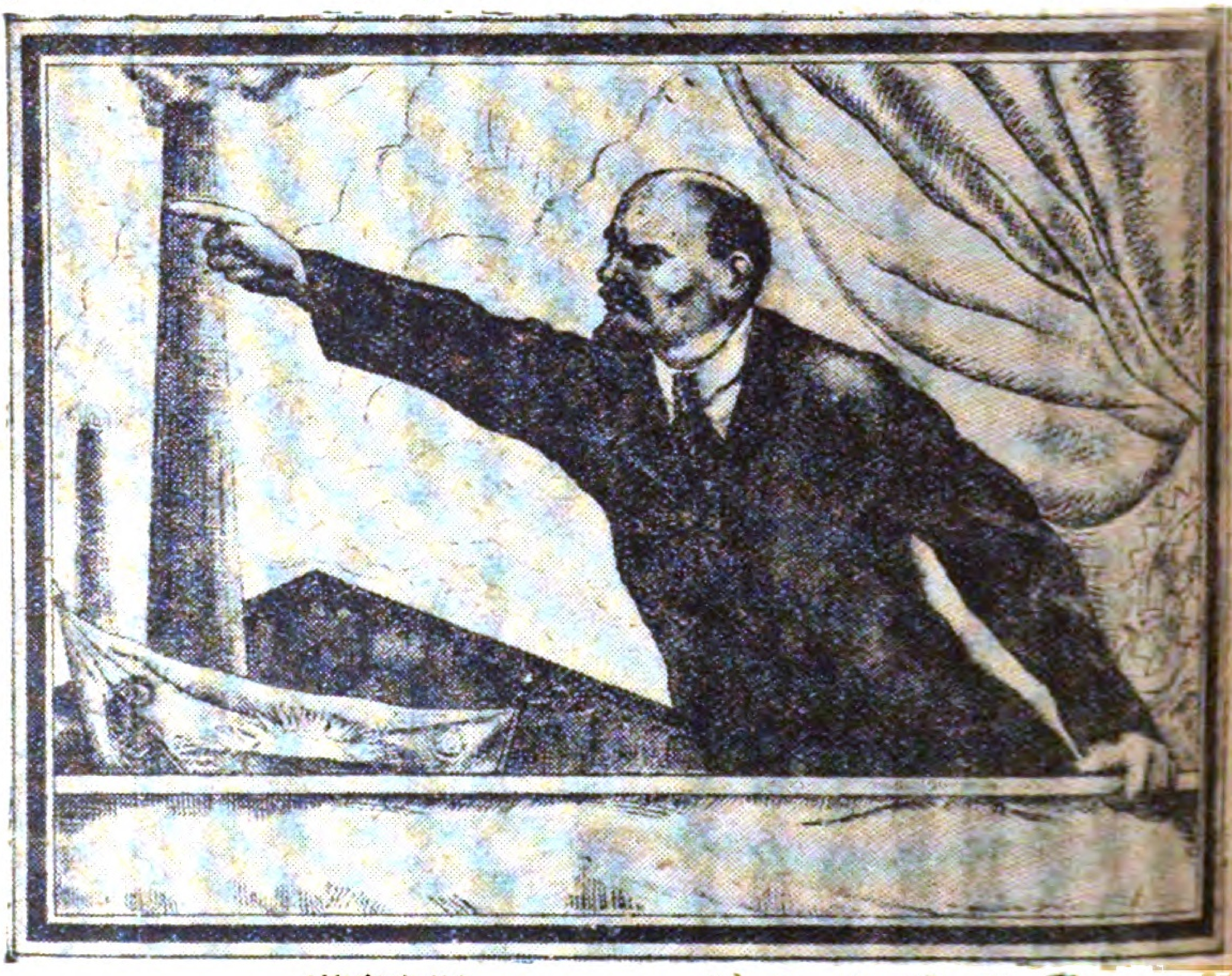
　イタリには石炭も、鐵もない。面積は狹小だ。隣邦、墺地利帝國との間には變換不斷の歷史的、民族的、帝國主義的紛爭がある。產業はまだ十分に機械時代に入つてゐない。しかしロシヤにくらべては進んでゐる。文化に至つては誇るべき古い資庫そのものだ。傳統的にダンテ、マチーニと、愛國詩人、國民主義宣言者をあとから、あとから生んだ。最近にはダヌンチオが出た。近代の英雄ナポレオンがまたイタリの血だ。

　ロシヤが、北極を背景として歐亞二洲を傳統的に、またかなり不可

[illegible]所有する可能なる點に於いて、今[illegible]と、しばしば世評さるゝ身の上とくらべて、イタリは全く別だ。

ロシヤの世界横斷の無産者による革命と獨裁を選擇し、イタリの一國擴充に狂奔するの途を選擇したると、觀じ來たれば人間性が環境に適應する必然の法則内の二象だ。ムッソリーニとリエニンとは、この光りに照らされては驚くべく個性を薄くする。

カイゼルのドイツが、リープクネヒト、ローザ・ルクセムブルヒ等の犧牲者をばだしたけれども、産業革命を立派に成し遂げてすでに久しからんとする國情は、もしくは直接至近の社會事情は、その後スティンネスを躍出させたり、ヒンデンブルヒその人の統制下に安民鎭國、いな實に各員精勵せしめてゐることは、これまた社會事情そのものに第一說明を見いだす現象でなくてなにか。



獅子吼するレーニン（某畫家筆）

[illegible]しては國家的社會にあつては、ロシヤ式の革命は不可能だと。ドイツはその原則の一證だと私は見る。イタリの革命的不革命がまたそれの一證だと考へる。

實に、産業革命はその社會を最廣義の分業卽ち發達的協力のかたちに於いて複雜無限ならしめる。されば、單純なる辯證法的進化方法はそこにては時代錯誤だ。名はなんであらうと實に於いて、機能主義的方針したがつて政策がつひに輿論の支持を確得する。ドイツのやうに、道德的政治組織の上に進化的改善をあらまし基礎づけた社會にあつては、英雄いでて更に新たに風雲を捲き起こす餘地は當分ない。ドイツに英雄見なきにあらず、イタリとロシヤにだけ英雄を生んだ母があつたのではない。社會事情の適、不適がそこに決定力を不可抗的に發揮しつゝあるのだ。

社會事情よりも恐ろしいものはない。一九一四年六月二十八日前のベルリン、パリ、ロンドン街上を見た目で八月一、二、三、四日後の獨、佛、英を見よ。これが同じ人間かと驚絶せざるをえまい。ないだ海が怒濤さかまく阿修羅王の形相に頃刻の間に一變し了するが如きは形容とはならない。六月二十八日はサラエヴの突發事件のあつた日だ。八月最初の數日はクリスト教國の最古的社會が相次いで宣戰した時だ。

文字通りの戰爭は、すくなくとも西歐諸國の間にはすでに過去のものと大體なつたのではないかと獨斷してゐた個人の數は戰前、恐らくは壓倒的であつた。しかし、中歐の僻陬ボズニアの一小地點に偶發した事故に導かれて戰雲見る〳〵全歐の空を暗くし、二た月とたたぬまにそこは曠古の大戰亂場と化し去つた。死者千二百萬と傳へらるゝ人殺しの現實劇の幕が運命――單なる社會事情といふ運命の手によつて切つて落された。

人間性が急に殺伐に、饑血に變はつたのではない。社會事情が變はつたのだ。

一九一七年十月以來のロシヤの場合、一九一九年三月以來のイタリの場合も異曲同工だ。不用意にボルシェヴキーを見、ファシスティを

一實在だ。

ただわれらが銘記すべきことは、きのふ菩薩であつたものはいつでも、どこでも菩薩であり、けふ夜叉であるものはいつでも、どこでも夜叉であるにきまつてゐると夢にも信じてはならないことだ。人情古今ほぼ同じ。ただ社會事情はほとんど刻々的に變化する。この後者が前者を相當に決定する。結果から見れば、人情そのものが變化するにやや似てゐる。

いかなる英雄人といへども、社會事情を無視して社會統制を實現することはできない。英雄は社會統制者だ。

七、英雄と時代本能

時代本能と見るべきものがある。英雄もそれの奴隷だ。勿論、時代本能と社會事情との間には本質別はない。比較的に底深く、したがつて發展、持續する社會事情が時代本能だ。社會事情は時代本能の表層機構だ。時代本能は社會事情の根基だ。

近代の時代本能は民族主義と產業主義即ち機械產業だ。

されば近代の英雄を通觀せよ。その二者の一を機會とするものか、兩方をあはせて機會とするものかのほかには一人もない。リンカンと

[illegible]

産業革命以後の社會に於いて、即ち機械時代に入つて、なほ且つ單純に、あるひは單純なる二分觀的階級見に暗示されてそれの捕囚となり、同じく單純なる辯證法的三段進化說に暗示されて聰明を喪失する種類の社會主義者との對照に於いては、帝國主義者は本能に、社會主義者は意識に、幅狹く釘づけにされた不自由が目立つ。今のところでは、概しては、社會主義者は階級が橫に解放されてゐるが如くに普遍妥當的だ。そして帝國主義者は縱に原始的な深さを持つ。しかし、前者は縱に自己を、現代生活を全觀せず、後者は橫に國境といふ幽靈におびえて、尻込して、行きづまる。

新英雄がでて來る番だ。リェニンも、ムッソリーニも、それこそ進化的に克超（アウフヘーベン）されねばならない肯定、否定、否定、肯定だ。

十、力の時代の英雄

現代は力の時代だ。歐戰、露革、ム伊、デモクラシ不振、中世期的宗教沒落、唯物論と辯證法の多少の流行、これらはその或證據だ。

歐戰を分析したら第一に帝國主義、第二に資本主義が現はれる。その帝國主義は、しかし、民族主義ではない。それは民族主義を機會として利用する近代の權力意思だ。その資本主義も産業主義ではない。主義は、機會と材料に於いて相異り、形成力、能動力に於いては同一だ。そしてそれは權力意思だ。

露革は無産者獨裁主義の實現だ。それはいはゆる共産主義だ。共産主義は機械産業だけではない。それを機會とする權力意思の最新型のやうなものだ。

この力の時代はどこから來たか。科學から來た。近代は科學の時代だ。近代を特徵づけるものは科學だ。他の近代的特徵にみな科學の現はれだ。近代の科學は物質認識だ。

この科學が近代人に、殊に産業革命以來の現代人に、物的環境が關する限り、權力者たる位置を築き上げた。科學によつて、現代人は陸、水、空を支配する。科學は、技術化する必然によつて、近代人を社會的、集團的に英雄とした。英雄は權力意思及びそれの成功だ。

人間性に特有ではないが固有の權力本能が、科學的技術によつて刺戟され、高速度に於いて養成された、對同胞人類の態度の上にまで、對物的環境の態度からの自然の習性侵略が發達した。かくして、現代人は往昔のいかなる時代の祖先にくらべて見ても、概要するに、權力意思に於いて發達してゐる。

ヤソは信仰は山をも移すといひ、マホメットは山の方でやつて來な

[illegible]界の當者に臨み、または職にさはるやりに臨む、その形式に個人的と狀態的とある。集團の場合には指揮者がてる。かれは英雄だ。

十一、英雄と政治家

英雄は政治家だ。政治家は英雄だ。大英雄は大政治家だ。大政治家に大英雄だ。小の場合も同樣だ。

政治は統制だ。統制は行動だ。すべての人々の行動を單一の立ち場から意思によつて決定する行動が統制だ。千百萬人を、あらん限りの人々を、即ち全き社會を、わが手足のやうに動かすことが統制だ。その動機は社會的であらうと、利己的であらうと、政治の形式は常にこれだ。さればザアも、リェニンもこの點に於いて區別はない。チャールズ一世も、クロムエルもだ。

單なる權力意思の滿足のためから考察して、政治が必然の選擇であることは自明的だ。一人が、かれの全き人間的環境即ち社會をかれ自身の意思にしたがつて決定すること、即ちその在りかたを決定することが、かれの權力本能の滿足にとつて必要であることはいふまでもない。しかる時、かれの方法は、結局、具體的には、政治の形式を取るほかない。實に、權力または力は、一人、一團體、一物が自分の意思にしたがつて環境を決定すること以外のなにものでもない。この關係に於いて、政治と權力とは一致する。問題は、その自分の意思なるものが

[illegible]なのもあれば、同樣に普通認識されるナポレオン、ロイド・ジョージのやうなのもある。英雄がその通りだ。現にこれらの人物がみな政治家にして同時に英雄、英雄にして同時に政治家だ。

十二、英雄と淺薄

英雄は概ね淺薄だ。必ず淺薄だといつてもいい。それはよんどころない。あたり前だ。なぜなら英雄は政治家だ。政治家は統制者だ。統制は間口に於いて全き社會內容ほど廣い。一人が、どんなに聰明であつてさへも、またどんなに勉強してさへも、かれの全き社會的環境の各部に精通することは、精力と時間の一點のみから考へても、できないことだ。だから政治家は淺薄だ。政治家が淺薄だから英雄は淺薄だ。

英雄が淺薄でない方面がある。それは統制そのことにかけてだ。これはかれの專門だから、この方面に於いて英雄がどんなに深く、厚くあらうとも、驚くには足りない。統制術に於いては英雄は名人であるにきまつてゐる。統制的行動以外のすべての藝能に於いては、英雄は大體第一人者ではない。しかし、當方の愚によつて、英雄の各種天才を主觀的に、想像的、迷信的に造り上げる場合は古來の實に多くの個々人にあつたし、現にまたある。

十三、英雄と創造

英雄を淺薄呼ばはりしたのは、その言葉の或意味にしたがうてだけのことだ。英雄は創造する。創造するからこそ英雄だ。形式に於いてかれがどんなに權力主義者であらうと、したがつてまたどんなに制限主義者であらうと、それはかれの全部では勿論ない。英雄は創造する。創造するからこそ英雄だ。

ナポレオンは「明瞭であれ、さすれば殘りのすべてはしたがつて生ずるであらう」というた。英雄の創造の秘訣がどこにあるかは種々にして一定しないが、深觀、洞察、明識、加ふるに決意がそこにあることはたしかだ。また、さうした知識や意思の言葉に於いていひあらはされうるものだけではなく、一種の自發的、天才的創造本能、創造力がそこに作用することがまた極めてたしかだ。

一九一七年七月の民衆運動、それに對するケレンスキ政府の軍隊による鎭壓あつてこのかた、形勢は急轉直下的にリェニン一派にとつて有望になつて來た。しかし、かれ以外のほとんどすべての同志さへもが疑惑、躊躇を持つた際に、かれは確信そのものであつた。そして、最後の行動に出づるの急々必要にむかつて、かれは同志を説得するこ

指導しつゝ行動した。そして成功した。

その年、かれが十年ぶり、あるひは一九〇五年の歸國を算へなければ十五年以上の國外生活ののちに、歸國して、同志にむかつて意見の表示をした時、かれを完全に理解したものはほとんどなかつた。かれは、しかし、その後に及んでかれの行動及び周圍の事情が實證した通りの思想、主張を繰り返へし且つ發展してやまなかつた。三月の行動は第一段階にすぎない。それはもはや大衆を滿足させる力を持たない。あれはブルジョアによる革命だ。無産者の任務は武裝するにある。各ソヰエットの權力を強めるにある。農村地方の覺醒を促かし作るにある。そして、一種の社會主義者たる立ち場からして社會を改造するといふ名義で統制權を征獲するための準備をするにある。といふのがかれの主張であつた。これはかれに最も近い同志の間にさへも反對を喚起した。プレハノフはこのリェニンの實行目錄を本氣の沙汰でないと呼んだ。リェニンは、しかし、かれの政策を直接に現實の階級關係そのものと、大衆運動の論理の上に建設し、革命の現在の指導者たちの意向や見解の上に建設することをばしなかつた。かれの心眼にはブルジョアジーとケレンスキ政府が日ましに不信望を強めて行くであらうこと、ボルシェヰキー黨が各ソヰエットに於いて大多數を制するで

[illegible]大問題に當面して、毅然として獨自の見を立て、それにむかつて[illegible]不撓であることは、古來、英雄に通有的な一現象であつて、殘餘の人々が一目置かざるをえない一つの事實的理由だ。その猜疑、逡巡、否定する分子が自分の最も近い同情者である場合に於いても、英雄的人物は、しばしば、依然として一己の見に殉ずる。いな、多くの場合、殉ずるではなく、その一己の見に專ら聽從して斷行し、成功することによつてさきの反對者を愧死せしめる。周圍の人々の目には、かれは無茶、無鐵砲に見える。かれは恐ろしい運命の神にむかつて危ふくも挑戰するやうに見える。しかし、時がたつて結果が到來して見ると、かれには第六感のやうなものでもあつたのかと驚嘆させ、やがて畏拜させる。創造的想像が英雄には、すくなくとも或種の英雄には、常にではなくとも時あつてか、發生するのだ。それと密接に關聯し、もしくは一體的に結合して、かれには集中力が非凡だ。

ついでながらだが、集中といへばすぐに天才が聯想される。心理學者のジェームズもいつたやうに、集中と天才との間には不離の關係があるが、それは、しばしば假定されたやうに、集中が天才の原因なのではなく、天才が原因で、集中はそこから生ずる必然の結果にほかならない。集中しうる人、集中する人にはその方面の天才が先づあるのだ。天才とは、いはば自然的才能だ。

ムッソリーニの思想は極めて平凡だ。勞働は生産力の一大要素だ[illegible]り、唯物史觀に批判を持つあたり、個人主義にも、無政府主義にも、組合運動にも、道德的政治組織にも、愛國にも深い興味を持つあたり、常識そのものの如くだといひたくなる。しかし、常識の人はイタリにも必ずしもすくなくない。しかるに、ムッソリーニは極めて特色的だ。要するに、かれの行動がかれの思想的自信にしたがつて無限に勇敢であつたからだ。かれの思想によつて深く啓發されたり、または激しく批判を反起されたりすることは、現代の聰明なる人々の世界には多くないであらう。けれども、現代の聰明なる常識の所有者たるなに人が、ムッソリーニの行動に對して深く、強く異常の感を持たないことができるか。かれは、たしかに、一つの新らしいイタリを創造した。恐らくは今後に及んでその意味がもつと具體的に發展するであらうか。また、もしさうでないとするならば、ただこれまでの事では、ほとんど新イタリなどとはいへない。クレマンソーのやや趣きを異にしたやうなものにすぎないことになる。それはたかだか、善義に於いての反動的行動以上のものではないことになる。

ムッソリーニの意味は、イタリをどうしたといふ點に主として存するものではない。一つの可能を世界に、むしろ概念的、抽象的に暗示した、自然にその結果を持つ點にそれは存する。

一九一六年の末までに、イギリスは懷疑的になつた。その時にあた

つて、敢然として戰勝の可能を信じ、しかも全責任を一身に負ふ事情下にその所信を勇敢に表示したこと、そして結局、一九一八年十一月十一日の結果を見たことは、ロイド・ジョージの創造的想像と集中を示す。

かれは國内の、朝野の疑議と反對ありしにかかはらず、夙に兵力を東方に割くことの必要を主張した。そして實行した。肝腎のまさかの西部戰線があぶないのに、その上そこを手薄にして飛んだ遠方に義理立ての出兵、援兵さたなど正氣の考へではないといふ周圍、世間の批難が高かつた。けれども一九一八年に於ける最後の聯合軍の勝利は東方から始まつた。ブルガリア先づ降り、續いてトルコがさうし、中歐勢の白旗掲揚に及んだ。英國の戰利はメソポテミヤの油田に代表されるといふも過言でない。これは、しかし、ロイド・ジョージが衆論を排して、いはゆる專門家のそれをさへも排して斷々乎、一己の見にしたがうてサロニカ、パレスタイン、メソポテミヤ方面へ派兵したおかげであつた。

東部戰線に於ける統一的指揮の必要をロイド・ジョージは、キルツンからのいくらかの暗示もあつたけれども、早くから痛感して主張やまなかつた。これには國内の輿論がほとんど沸騰して反對した。ロイド・

その馬前に討死することは許すべからざる不正だといふ聲も高かつた。軍部は無論第一に狂氣の如く反對した。ロイド・ジョージは、しかし、斷行した。アメリカが一九一八年の晩春、初夏の交から大擧派兵したのもこれによるところすくなからず、戰勝が最も直接にはフォッシュ任命にあつたことはなに人も疑ふことができない。戰勝によつて統一的指揮論は最後の成功的實驗をうけたわけだが、一九一七年秋の伊軍の大敗がすでにロイド・ジョージの所論を有利に導いたのであつた。

リェニンの場合でも、ロイド・ジョージの場合でも、かれらは、最初のうち、周圍から本氣の沙汰でないとばかりにつらく、つめたくあしらはれた意見を發表し、ひるまず主張しつづけ、誤解、曲解、迫害と鬪つて進み、その内に、事實が先見の明を證據立てるやうに展開し、威信を獲得するに終はつた事績に富んでゐる。勿論、ロイド・ジョージはリェニンに比して遙かに理想的下位に立つが、英雄共通の形式は種々注意される。

これに關して、もう一つロイド・ジョージの材料を使ふことを許して貰はう。一九一七年十二月二十九日のデーリ・テレグラフ紙上に發表されたランズダウンの手紙は、當時の英國の最も分別ある男性階

[illegible]ロイド・ジョージは、しかし、[illegible]新聞記者に對する放言に於いてさへも、ドイツを新聞の上から叩きつけてしまふといふ勢ひの、必勝的な強いことをばかり平氣で放言してやまなかつた。平素あまり愛國氣取りでないマンチェスター・ガーディアン紙までもが大いに心配して、たびたび社說欄に於いてロイド・ジョージに警告を與へたものだ。いはく、その強がりだけは愼しんでくれなくては困る。いたづらにドイツの敵愾心を強めて、また第三者的位置にあるものの間に帝國主義的印象を強めて、當方を不利に導くだけだからといふのであつた。しかし、ロイド・ジョージは平氣の平左で、ますます強いことを公私各種の場合に放言してやめなかつた。結局、かれは器量を上げたやうなことになつた。

レーニンでも、ロイド・ジョージでも、比較的に知識ある同情者でさへもが、それはあまりに大膽すぎると實感して、諫止してやまぬやうなことを、振り切つて敢進、そして達成した。功名心、理想主義、動機は種々に分類もされ、分析もされるが、その事實は注意を値ひする。

ロイド・ジョージの強がりの、または強がりめいた放言の如きは、一身の面目、利益、行きがかりからいうても理解される部分を持つ。しかし、必要と必然との結合は、多くの場合に、英雄心理を構成する一大要素だ。レーニンにも、マールクシズムそのものにも、主觀的必要と、客觀的必然との結合は、極めていちじるしい。客觀的必然だけな[illegible]に[illegible]精神一到またこれに關係がある。[illegible]理想にもとづく必要は發展するが、その理想が迷信でない限り發展するが、利害にもとづく、打算にもとづく必要に、原則でなく政策のやうなものだから、短命だ。史を觀るに、短命の、社會價値的に短命の英雄がなんと多いことか。ロイド・ジョージも戰爭がすんで用なしになつた。社會價値的にとは創造的にといふことだ。永く創造する英雄は社會の本質的事情を人格的に把握したのだ。創造するあひだが英雄だ。

十四、英雄と妥協

プレスト・リートヴスクの協商に於けるレーニンと、ウーディネの演說に於けるムッソリーニとは、英雄妥協の最近代に於ける最も興味ある二つの場合だ。

一九一七年秋、レーニンの成功の第一條件は講和であつた。即刻講和がかれの約束であつた。總講和、しからざれば單獨講和がかれの決意であつた。

かくして一九一七年十一月九日に、外務の責任者であつたトロツキは、聯合諸國及びドイツにむかつて一樣に、無線電信で、即時休戰の締結を招請した。ドイツはこれに應じた。聯合諸國は勿論しなかつた。二十八日に、ロシヤは、やはり無線電信で、聯合各國の人民にあてて、

それ〴〵に自國の政府を强制して終戰させるやうにと强く勸說した。民衆の終戰熱は極度に昂揚してゐて、態度不簡明であつた總司令官ヅホーニンが免官、逮捕、そしてリンチされたりなどした。こんな形勢で非公式の休戰はすぐに始まり、十二月五日には、公式に、バルティックから黑海にわたる全戰線の休戰が締結された。

ロシヤの條件は「民族自決の原則に立脚して無併合、無償金」といふにあつた。ドイツはよろしいと、ずるく、ぼんやりと承知した。原則はそれで結構、實際は追つてあとから具體的事情に卽して御相談の上にといふ手であつた。まもなく、ドイツは、聯合諸國同樣に、ボルシェヸキーの誠實、正直を頗る低く買つてゐた證據が進展して來た。はなし込めばぢきに融通の利く相手ぐらゐだとも見た。ロシヤ側では驚いてすぐ、一九一八年一月二十七日に、國民及び全世界にむかつて、ドイツが申しでた和議は狼が羊に申しでた和議同樣のものであつて、直ちに應ずることのできるものではないといふことを發表した。ロシヤ側は、ドイツの職工階級が、かれらの支配者たちが和議の署名を妨げたことを知つて激し、相當の行動にいづるであらうと待ち望んだ。その矢先きに、南露ユークレーンに內亂のやうなものが發展して、そのブルジョア政府はドイツと單獨講和を署名してしまつた。それは二月九日の事であつた。ボルシェヸキーは形勢に察して、翌十日、終戰はするが、和議には署名しないと宣言した。ドイツは兵を進めた。そして、「ペトログラード占領、ロシヤ人のブルジョア政府を再設してそれと和議を講ずる等の可能が眼前に脅威して來た。中央委員會に於いては議論が鼎沸した。リェニンは、もしドイツが許すならば卽刻和議に署名することが唯一の賢明な方法であることを反對者にむかつて極力說いた。そして三月三日に和議が署名された。

リェニンは最初から隱忍說であつた。かれはロシヤの當面の經濟的窮狀と、農民の氣分に對する認識にもとづいてそれであつたのだ。談判は長引かせるほど當方に有利だ。その間にドイツ、聯合諸國その他の無產階級の輿論及び相當の行動を喚起しうるからだ。しかし、最後通牒を送りつけられる運命になつたら、領土讓渡でも、償金辨濟でも辭せずに、和議に署名しなくてはいかんと主張した。「われらをして空間に於いて失ひ、しかし時間に於いて勝利せしめよ」とかれはいうた。西歐に準備されつつある革命の機運は早晩その無理な講和條件を反故にしてしまふであらう。

リェニンの主張が容れられずに獨軍の進擊を招き、二月十八日の中央委員會は、そのペトログラードをさしてほとんど無人の野を行くの概ある敵の進軍をかたはらにして議論二分した。トロッキによつて輿へられた一票のおかげで、リェニンの隱忍說が玉碎論に勝つた。勿論、目的に於いては後者も前者同樣、その平素からなる共通志業の可能的最善成功のほかにはなにもなかつた。

政治の原則、國家の根本機構等に關して、ムッソリーニには、早くから多少の定見またはそれに近いやうなものがあつた。かれは一九一一

一年五月の選擧戰には、ファシストたる同志三十五人と共に當選して議院入りしたが、議會人としての行動に於いても、またその以前からの言論、文章のかたちに於けるかれ自身の、あるひはかれの黨の意見や綱領の發表に於いても、その定見の片鱗、斷甲や、全現やがあつたものだ。一九二一年五月頃までには、かれの黨員は激增したが、その多くの新入者のなかには、かれ及びかれの黨の思想に理解のないもの、知識のないものが非常に多數であつたことをかれは發見して、いまさらのやうにびつくりした。訓示らしいものや、再聲明のやうなものを演說、文章じたりした。かれは、それらの經驗からして、イタリの民衆の思想的水準がいかなるものであるかを痛感させられる機會を持つた。政治的に、いますぐに成功するためには、その水準的聰明を無視してはだめだといふ暗示及び確信を構成させられるにがい經驗をも多少繰り返した。方法に關する反省が急にかれの心に發達した。一九二二年八月一日の罷業を、政府の無力の前に、かれ自身の黨の力で打破したことが一轉機となつて、ムッソリーニの權力獲得の[illegible]なつて來た。



ト　ロ　ッ　キ

一九二二年九月二十九日、ウーディネに於けるファシスティの集會に臨んでかれがなした演說は、實に、如上の知識を條件として始めて理解されうるものだ。その演說の結果は、多くの非ファシスティ及び軍隊からの同情を獲得したことであつた。「……正直のところ、完全なる統制機構は哲學の本のなかに見いだされうるだけだ。私は考へる、もしもプラトーの理論が文字通りに適用されたなら、ギリシャの都市は災難したことであらうと」、「……だから、一般的にいふと、政治的形式は永久的に是認されたり、非難されたりすることはできない。それは政治的形式が特殊の民の心狀、經濟的事情及び精神的勢力に對していかなる直接關係を有するかといふ見地から檢察されねばならない。（一聲叫ぶ、マチトーニ萬歲と）」、「……他面に於いて、ファシスタ革命はまた萬事を危險にさらし、萬事に冒險することをば避けなくてはならない。或堅固な地盤は殘されなくてはいけない。さうしないと民衆は萬事が破滅し

つつあるやうに感じ、萬事が再始されねばならないやうに感ずるであらう。その場合には熱誠の第一波が恐慌の第二波によつて續かれることになるからよろしくない。いまや萬事は甚だ平明である。社會民主的表層構造が打ちこはされる必要があるのである。

十五、英雄と問題の無僞眞誠

シンセリテイはたつとい。それだけに、あるひは卽ち、それはまれだ。英雄に於いてそれは殊にまれだといふ一面がある。しかし、それなしでは英雄になれないといふ他の一面がまたある。カーライルはそれを偉人の第一質にかぞへた。クロムエルは、ナポレオンとの對比に於いては、眞だからうれしい。逆に、ナポレオンはうそ、僞が巨玼だとかれは觀じた。マホメットには政略があつた。かれの最强點の一は人を見る明と共に、外交にあつた。しかし、かれには無限に强い眞實慾があつた。偶像と迷信はかれの不倶戴天の敵であつた。ここにかれの大がある。

しかし、英雄は社會統制を業とするがゆゑに、また權力本能がかれにあつて甚だしばしば强大であるがゆゑに、無僞眞誠が制限される。權力としての力は創造せずに制限する。その權力以内の生命はそれに絕する。ここに人生の矛盾的一關係がある。しかし、英雄に於ける進化はその距離をいくらかづつ短縮する。理想は眞人が英雄であることだ。

十六、英雄の認識論

英雄の認識論はしばしば極度に、概して高度に、實用主義的だ。社會技術に役立つ限りに於いて、あるひは權力の獲得または維持に役立つ限りに於いて、かれは認識を信仰する。英雄の認識信仰は內在的でなく利用的だ。かれは萬事を客觀することを好む。しかし、それは行動に於いて失敗しないためだ。敵の利益となる、そして身方の不利益となる種類の事實には、その限りに於いて、かれは盲をする。戰時に於ける勝敗の虛報、宣傳のための揑造、カムーフラージュ、いな實に外交、戰術、計略、陰謀、煽動等、これらはみな英雄にほとんど必然的に近い關係を有するものだが、說明不要的に認識否定の一面を積極的に持つ。黨人の自他政黨觀を見よ。はたから見れば意識的にのみ認識不正を犯してゐるかのやうだが、これはさうばかりでなく、かれらにとつては認識はそれくらゐの、それだけの價値をしか有するものでないので、本氣だ。そのかはり、利害一とたび移れば、脫黨して、き

だ、[illegible]オンの戰況報告はらその別名として有名だが、リェニンでもわれ知らずその心理の支配を相當にまぬかれることはできなかつた。勿論動機が社會的、道徳的、最近代的であるにつれてそこに著差は必然生ずる。

十七、英雄の經濟學

英雄に權力本能を原因とする種類のものが多い。その型のものが關する限りすくなくとも、かれの經濟學も抽象的だ。强盗主義、詐僞主義がすくなくない。掠取を見よ。掠奪を考察せよ。勤勞と貯蓄は經濟の或要件だが、英雄はそれの自身實現的信者ではない。狩獵時代の英雄の原則が、すくなくも資本主義世界の英雄にまでは生き殘つてゐる。

經濟を方法として權力を獲得する場合が注意される。資本主義王國の巨頭たちが賃銀制度及び温情制度に固執する一大原因は權力慾にある。唯物史觀ではなく、唯心史觀がそこに材料を供給してゐる。富が目的ではなく、それを手段として享樂される權力が目的であるのだと判斷される場合と部分が多い。

十八、英雄の教育學

英雄の教育學は甚だしばしばマホメット流だ。客觀的でなく主觀的だ。個性の發達を目的とするよりも、どの途發達または形成の可能ある[illegible]の、自分に都合[illegible]目的とする。革命に都合よく敎育し、獨裁に都合よく敎育する。それが徹底的になされる。しかし、これが度を過ぎると、その社會内に發明、獨創が無くなる。その結果、よその自由な社會にまける。さなくとも進歩がとまる。ロシア、イタリが警戒を要する一點だ。マホメット教や、ロヨラ宗が永く十分に發達しなかつた一因が聯想される。外部の壓迫ではなく、内部の壓迫がその發達を制限した。英雄は、人をさへ見れば、教育的には、こやつを利用するにはどう教育すべきかを問題とする。かれは、要するに、人をさへ見れば、こやつ如何にせば統御しうべきかを問題とするからだ。勿論、これは或種の英雄に主としてついていふのだ。こゝに限らず、その理解は讀者の聰明に信賴する。

十九、英雄の美學

英雄の美學は獅子の雷音だ。たてがみだ。孔雀のはねだ。墮落すると門頭、棟上の金のしやちほこだ。裝飾美學だ。示威運動だ。しからざればそれは刺戟劑だ。興奮劑だ。自己陶醉、自己暗示、自己感激の資料だ。力の崇拜の詩だ。立身、功名の具だ。伊藤俊介の豪氣堂々大空に横たはるだ。雲井龍雄の生きてはまさに雄圖四海をおほふべし、死してはまさに芳躅を千祀に傳ふべし、功名遠く群を出づる

あるにあらずんば、豈に喚んで眞の男子となすに足らんやだ。進軍喇叭だ。もの〱しさだ。物力的だ。外効的だ、

いづれにしても利用美學だ。

二十、英雄の神學

チャールズ第一、ギルヘルム第二頃までは、英雄は神學者だつた。神權説のまじめな信者だつた。かれらの神は全能だ。遍在だ。絕對者だ。かれらはそれの特權づけられた子だ。神の名に於いてかれらは獨裁を行ふ。勿論發生學的に、かれらの神は地上の權力組織によつて創造され、支持されるものだつた。それだけにかれらに有用であつた。

二十一、英雄の宗教哲學

ウトレヒトでは新教的、エジプトでは回教的、これはナポレオンの



ギルヘルム二世

つた。マホメットはこの點術がちがふ。英雄の宗教哲學は、甚しばしば、普通の迷信を内心比較的に輕く持つてゐる程度のものだ

二十二、英雄の心理學

英雄は概して、人間性の精通家の自信またはうぬぼれを持つてゐる。かれの心理學は、しかし量的だ。直接行動的だ。慾と恐怖でいかなる相手をも讀まうとする傾きをそれは持つ。思想家や、藝術家は、かれらがほんものである限り、英雄を一面に於いて輕蔑するが、英雄がかれらの貴重な内生命を物價扱ひするのでたまらなく不快に感ずることがある。英雄の心理學は權力、利用、名譽を目的として文字通りに、いな文字通りの淺い意味にしたがつて人間といふ形容詞のつく「自然」の常識科學的理解に從事するものだ。女將の心理學に似たものだ。唯物心理學だ。

で在る證據だ。これはなにも[illegible]。闘爭本能と呼ばうべきものでないではない。しかし、闘爭本能は、闘爭本能と見えるところのものは、全く別種の本質と内容とを持つ。社會的に見て殊にさうだ。

闘爭本能を見よ。なにか具體的の、もつと特殊的な現在目的をそれは持つ。

犬を見るに、性本能の進出が先づあり、それが邪魔された時に、その雄は邪魔した他の雄にむかつて怒り、先方も強ければ闘爭が出現する。食の場合にも似た現象がある。

自由が妨げられた時に怒るのだ。その怒りの表現が、相手を條件として、闘爭であるのだ。

古來の英雄を見るに、かれら自身は、しばしば、その社會に於ける闘爭係りだ。酋長英雄がすでにそれであつた。ナポレオンは國民の、リェニンは階級のために闘爭した。

一種の分業組織だ。代はつて闘爭してくれる人があるから、自分には闘爭力が薄弱であり、他にもつと價値的な仕事を持つ人々がその建設的生活を經營して行ける。

英雄に戰闘力が缺乏してゐたら、それは英雄でないことだ。闘爭自身は破壞的だ。しかし闘爭の原因は建設的だ。小供が、組み上げた構造を他人にこはされた時、かれは怒る。

二十四、權力本能が英雄を造る過程

權力者になるためにも、方法としては目的である必要がある。大衆は比較的に隷從的であつたり、なまけものであつたり、頭がわるかつたり、專門に吸ひ込まれたりしてゐる。かれらは、自分の直接の必要を滿足させるための手段の極めて部分的な持ちぬしだ。權力意思の旺盛な個人あつて、その大衆の要求を察し、それを代辯的に達成してやる。された方では重寶心理、感謝心理、感激心理、それから崇拜、畏敬、尊信へと發展する。權力と服從の關係はほとんど見られなくなる。英雄得意の時代はこれだ。

二十五、名譽心が英雄を造る過程

名譽心は、本質に於いては明確に利己主義だ。それは、しかし、方法に於いては必要的に社會主義だ。名譽心は、一人または一團體が周圍の社會からえらいと思はれることを必要とする主觀的狀態だ。その方法として最も有効なものはその周圍の社會の利益を造ることだ。名譽心目的の社會救濟的行動から英雄が造られる可能も小さくはない。

二十六、英雄と積極的同情

單なる同情からは英雄は造られない。同情して相手と共に腰を拔かしては英雄になれない。勇と知とある同情は必然的に英雄を造る。こ

れを最善義の、または最全義の聰明が英雄を造るといひかへることができる。

二十七、英雄に於ける進化

機械時代の發達は協力の必要を發達させる。社會主義の發達が産業革命を背景とする理由が注意される。

リェニン、ガンディ、ムッソリーニその人といへども、英雄に於ける進化を暗示する或ものを持つ。

愛、正義、仕事が主でえらがり、人物がりが從位または無位に退却、消滅する傾向が多少注意される。社會に於ける英雄の機能が、この傾向の進展によつて多少有罪化される。

二十八、夫に於ける英雄

心細い英雄は單なる夫としての英雄だ。これは久しい過去を持つが、短かい將來を持つべきものだ。

二十九、父に於ける英雄

これこそは英雄の原型そのものだ。最古にして最惡の英雄はこれだ。

この英雄がいつまで續くか。

當一九二八年、フーヴァー五十五、ムッソリーニ四十六、なかにヒンデンブルヒの八十二の如きもあるが、概していへば、現代の日本の英雄は老年に於ける英雄の特徴に富みすぎてゐる。

三十一、英雄と組織者

英雄は組織者だ。

三十二、子に於ける英雄

これの種類は多い。貴族にもある。金持ちにもある。個人、家族にあるやうに民族、國家にもある。帝國主義の組織内にも、資本主義の組織内にも、子に於ける英雄の大小形がある。傳統、世襲、相續を全部の内容とする英雄よりも英雄でないものはない。これを英雄扱ひする個人と社會よりも眞人間的でない現象はない。

三十三、英雄と失意

英雄は失意に創造する。リェニンの生涯にこれは連續的だ。一九一九年の衆議院議員選擧戰にムッソリーニは慘落した。失意を造るものもしばしば深い意思だ。失意に飛躍するものだけが英雄だ。

——十二月三日——

危機における理論的意識

三木清

一

思想の問題は今や思想の危機の問題として現はれてゐる。人々は到る處、あらゆる機會に於て、思想の危機について語り且つ叫ぶ。しかし彼等は自己が語りつつあるもの、叫びつつあるものが何であるかを理解しない。いな、みづから理解することなく、理解しようと欲することなく、語り且つ叫ぶといふことがそれ自身また思想の危機のひとつの特徴である。思想の危機の叫びのうちに表現されるところのものは理論的意識の缺乏であり、まさに「思想の貧困」である。けだし事物の本質を明かにして思想を發展せしめることが斯く叫ぶ者の目的でなく、彼等の目的は却つて正反對のものである。思想の危機を叫ぶことによつて恰も思想を窮迫せしめ、空虛ならしめ、かくて思想そのもののためでなく、寧ろ全く他の意圖のために謀らうとすることが彼等の目的である。このときにあたつて眞實に思想を求める者は、彼等の叫びに迷はされ、驚かされ、恐れさせられることなく、自己の理論的意識をいよいよ銳利ならしめ、果敢ならしめねばならぬ。そのためには思想の危機が本來如何なる意味のものであるかを明瞭にすることがなによりも先づ必要である。

「思想の危機」とは、これを純粹に理論的に見るならば、一定の思想が自己の反對の思想へ轉化してゆくことを意味する。この轉化そのものはその思想にとつて危機として現はれる。思惟が一定の思想を眞理としてそれに固執し、それを永久に自己同一的なものとしてどこまでも維持しようとするとき、この固執され、固定された自己同一性は、自己がまさに在るところのもの、即ち一面性として、制限性としてみづからを現はすに到る。換言すれば、その思想は自己の偏見であることを顯はにするのである。しかるに一面性と制限性とは、恰も一面性として、制限性として、虛僞である。かくて最初の眞理は虛僞であることが分る。この自己批判によつて一定の思想はその反對のものへ移つてゆく。この推移が思想の危機であり、從つて危機的とは批判的といふことである。斯くの如き危機はまことに思想そのものにとつて價値あるものでなければならぬ。なぜなら、それによつて初めて思想は

運動し、發展し得るからである。思想はその對立者によつて否定されると同時に、このものの媒介によつて自己の一面性と制限性とを脫して自己を止揚する。抽象的なものは具體的となる。かかる過程を通して對象は初めて全面的に把握されるに到るのである。このやうにして危機こそ思想の富を作るものであり、生命をなすものである。危機のないところには、ただ凝固と死がある。

若しさうであるならば、眞理を求める思想家にとつては、思想の危機はまさに歡迎すべきものである。自己の思想を否定するもの、それに矛盾するものが現はれるとき、彼は徒らに悲しんだり、恐れたり、憤ほつたりすることをしない。彼はそこに自己の思想の批判の契機を見出し、喜んでこの契機を捉へ、それを媒介とすることによつて、自己の思想を發展せしめ、具體的ならしめることを知つてゐるからである。彼の思想家としての活動がこのとき最も活動的となる。思想家たる彼はこのとき最も生き甲斐を感ずるであらう。彼の思想は固定したもの、死んだものから運動するもの、生命あるものとなつたからである。眞實に人生を生きようと欲する者に、生活に於ける危機の經驗が却つて人生を豐富ならしめ、一層眞實ならしむることを知つてゐる。恰もそのやうに、眞理を追ふてやまぬ者は、思想の危機がまさしく思想を具體的ならしめ、一層眞理ならしめることを理解する。かくて、思想の危機の必然性とその意味とを認識せる人にとつては、危機はもはや危機として、單なる危機としては現はれないであらう。必然の洞見は自由である。思想の危機の必然性を透察して思想家は自由なる思想家であり、彼の前には危機はいはゆる危機としては存在し得ないのである。ところで、思想を發展するものとなし、しかもこの發展が自己に矛盾するものへの轉化によつて、即ち危機を通して行はれると考へるのは、辯證論者である。辯證法的思惟は思想の危機を現實的に克服する道を我々に敎へる。それ故に我々は言ふことが出來る、思想の危機が叫ばれるときにあたつて、唯一つ現實的なる理論的意識は辯證法的思惟である。

しかるに抽象的思惟にとつては、思想の危機は克服されることなくしてどこまでも危機としてとどまる。眞理の普遍妥當性――それは抽象的な永遠性である――を信奉する者、眞理の自己同一性――それは形式的な不變性である――を主張する者、總じて眞理が矛盾を媒介として發展する生命であることを把握しない者、斯くの如き人々は、自己の思想に反對し、對立する思想の現はれるとき、それはただ彼の思想にとつてのみ危機であることを忘れて、却つてそれが一般に思想そのもの、眞理そのものの危機であるかの如く見做し、徒らに思想の危機を叫ぶのである。彼等にとつて否定は單なる否定であり、矛盾は單なる矛盾の意味しかもたない。彼等は抽象的思惟に固着して言ふ、眞理は眞理であり、虛僞は虛僞である。そして彼等は他人だけが誤謬と錯誤に陷る者であつて、自分はこれに反して最後究極的な、絕對決定的な眞理の所有者であると考へてゐる。このやうな人々が、自己の思

想[illegible]
彼等に思想そのもの、眞理そのものを愈々抽象的ならしめ、非現實的ならしめ、かくてそれの生命を奪つて死滅せしめるのである。思想そのもの、從つて彼等自身の思想をも危機に陷れるものは、思想の危機を單なる危機と見ることしか出來ぬ彼等である。思想の本質的なる相對性を認識してゐる者こそ却つて思想の生命の發展の絕對性を肯定する者である。かかる人間が自己批判的であるに反して、彼等は獨斷論者である。彼等は自己の思想を絕對化し、永遠化する。彼等は恐らく人類歷史のなほ初端にある者であり、從つて今後彼等の思想を訂正するであらう人間は、彼等自身がその思想を訂正した人間に比し、その數に於て比較にならぬほど多いであらう、といふことを彼等は思つてみない。思想の危機の叫びをもつて我々に向つて來るのはいつでもこのやうな獨斷論者である。しかるに獨斷論と共に我々は純粹に理論的な領域から他の領域へ移されてゐるのを見出す。我々は獨斷論が本質的には理論的な立場でないことを發見するであらう。純粹に思想する者である限り、何人も自己批判的ならざるを得ない危機に際して、思想の危機の問題に關して何故にかくも獨斷論者がなほ存在するであらうか。

二

私はこれまで思想を主として眞僞といふ方面からのみ考察して來た。眞理と虛僞は、哲學上の用語法に從ふならば、思想の「價値」である。[illegible]うに、眞僞は思想の有する價値である。しかもそれにこのものにのみ固有な價値である、と哲學者は考へてゐる。從つて或る思想は眞であつたり僞であつたりするが、我々はそれを善い思想であるといつたりまたは惡い思想であるといつたりすることを許されない。近代の認識論はこのやうに說くにも拘らず、現實の生活に於ては、我々は絕えず、一定の思想を善い思想であると呼び、または惡い思想であると稱してゐる。それが現實である。むしろ眞なる思想、僞なる思想といふ言葉よりも、善い思想或ひは惡い思想といふ言葉を一層多く實際生活のうちでは用ゐてゐるやうに見える。例へばかの思想善導といふ語をとつて考へてみよう。思想善導といふのは、眞なる思想へ人々を善く導くといふことでなく、却つて善い思想へ人々を導くといふことを意味してゐる。若しそれが眞理へ向つて善く誘導するといふことであるならば、それはそれが今現實にとつてゐるやうな形態をとつて現はれ得ない筈である。如何なる思想が眞理であるかはただ研究を俟つてのみ決定され得ることであるが故に、その場合には、ひとが思想善導の名のもとに、、、、、、、、、、、、、、、、、、、するばかりでなく、更に進んで、、、、、、、、、、、、、、、、、、、することは出來ない筈である。しかるに思想善導が實際に於てはこのやうな形態のものであるとするならば、そこで問題となつてゐるのは、なんら思想の眞僞ではなく、却つて思想の善惡であるのでなければならぬ。即ち、

或る思想は取締られ、壓迫さるべきであると考へられるのは、それが惡い思想であり、危險な思想であると、人々が見做してゐるのに因るのである。このやうに、現實の生活の中に於ては、思想は眞僞といふ理論的價値のほかになほ善惡といふが如き規定を具へてゐる。これは明かである。私はかかる規定を思想の「價値」と區別して思想の「性格」と名付けようと思ふ。思想の性格を表現する言葉には、善、惡以外に、危險、穩健、反動的、過激的など、その他のものがある。思想は現實に於て凡て性格的である。否、我々の日常の生活にあつては、眞理と虛僞なる思想の價値は蔽ひ隱されてしまつて、思想は凡て性格的なものとして生きてゐるのがつねである。

ここに注意すべきは、思想の價値と性格とが必ずしも相應しないといふことである。善い思想が必ずしも眞なる思想であるわけでなく、危險な思想が必ずしも僞なる思想であるわけではない。しかしながら實際生活に於ては、思想の價値規定は埋沒されて認識されることなく思想は單にその性格に從つてのみ理解されてゐるが故に、まさしくこのことから容易に、人々が善い思想をもつて直ちに眞なる思想であると考へるに到る、といふことが屢生ずる。善い思想だから、それは眞でなければならぬ、といふ風に、無意識的にであるにせよ絶えず推論されてゐる。かくの如きことは眞理といふことをのみひたすらに問題ゐることが屢である。それだからこそ或る者は彼の思想が理論的に反駁されればされるほど、理論的にその缺陷が指摘されればされるほど、却つて益々これを辯護するに到る。彼はこの辯護に於て或る種の道德的義務を感じて愈々興奮する。彼の議論は義憤に變る。學者は今や憂國の志士として現はれる。彼は自己と反對の思想を有する者をもつて何等か危險な者、下劣な者、不道德な者であると見做すに到る。我々は我々の經驗に於て獨斷論者が最も多くの場合このやうな現象形態をとつて出現するのに出會ふであらう。このとき叫ばれるのはいつでも思想の危機である。思想の危機の叫びは、斯くの如く、現實に於ては思想の性格といふことに最も多く關係してゐる。思想の危機の叫びのうちに表現されるものは、思想に於ける理論的なものでなくて性格的なものである。

思想の性格といふのはひとつの實踐的な概念である。それは思想が思想である限りの思想に屬するのでなく、思想が人間社會に働きかける關係についての規定である。私が思想の性格の名のうちに數へたところの善惡といふ概念が道德的、實踐的な概念であることがそれを示してゐる。若しさうであるならば、思想の性格の中には社會の構成そのものが反映されてゐるのでなければならぬ。この社會が階級的構成のものであるとするならば、思想の性格は階級的な言葉である筈であ

る。換言すれば、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。即ち、一定の階級の社會上の優越がその階級の思想の性格上の優越を規定する。支配階級の思想が支配思想であるからである。從つてこの階級の社會的位置が安定してゐる限り思想の危機は現はれない。思想の危機の出現するのは、社會に於ける階級の間の、、そして、、、、、、、、もはや蔽ふべからざるものとなつたときである。このとき支配階級は、自己の社會的位置の、、、、、、、、自己にとつて惡しき思想の出現を直接に思想の危機として感ぜざるを得ない。社會上の危機が思想の危機として表現されるのである。このとき、、、、、、、、、、の内部に於て高まつてゆく。危機にあるのは思想そのものではなくて却つて、、、、、なのである。惡しき思想の排撃によつて維持さるべきものは思想そのもの、眞理そのものでなく、、、、、、、なのである。それだから思想の普遍妥當性を說くことはこの階級の永遠性を主張する意味をもつて來る。それだから從來の思想の辯護はこの階級の辯護となつて來る。思想の危機の叫びのうちに表現されるものは階級的なるものであつて、思想的なるものそのものではない。否、思想の危機が叫ばれれば叫ばれるほど思想は反對に益々空虛になつてゆく。それは階級的獨斷論の叫びであるからである。そして善い思想と眞なる思想とは合致するのでなく、却つて背致してゐるから

、、、である。思想そのものの一層から云へば、社會に於ける支配階級
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、。これに反して支配階級が思想の危機を叫ぶことが必要になればなるほど、、、、、、、、、、從つて自己をあらゆる手段をもつて維持することが愈々必要となつてゐるのであるから、この階級を代表する思想もまたそれ故に愈々獨斷的となるのである。

獨斷論は最も多くの場合階級的な意味のものである。しかるに獨斷論に、まさに獨斷論として、思想的には、、である外ない。思想の危機に際會しては、獨斷論は必然的に最も獨斷的とならざるを得ないから、思想的には、、、、となり、かくて獨斷論は思想そのものの立場から他のものへ轉化してゆく。最初には、思想に對するに思想をもつてすべきであると主張した獨斷論は、思想の危機が激成し、擴大するに立ち到るや、今は、あらゆる實踐的な手段に訴へることとなる。、、、、、、、、等々。獨斷論に於て、理論的なものは實踐的なものに必然的に轉化する。しかるにこの轉化は、この場合、實に理論そのものの否定を意味する。思想の危機が本來、、の危機であるからである。獨斷論が本質的にはなんら思想そのものの上に立つのでないからである。このやうにして、一定の階級によつて階級的な立場から、實踐的に思想の否定が行はれるに到つて、思想の危機はまさしく思想そのものにとつての危機となる。

三

我々は思想の危機にあたつて理論的なものが實踐的なものに推移してゆくのを見た。しかも同時に我々はそこに於て理論そのものの否定が實行されてゐるのを知つた。かくの如き場合に於ては、理論的意識はもはや單なる理論的意識としてとどまることが出來ない。獨斷論に於ける理論より實踐への轉化がまさにそのことを敎へるのである。實踐を理論から分離することが、純粹に理論的意識を維持する所以であるとする見方は、思想の危機にあつては、なんら現實的なる理論的意識であることが出來ぬ。思想の危機にあつては、このやうな見方こそ却つて理論的意識そのものを死滅させることとなる。それはこのとき、思想そのものにとつてはむしろ「危機の思想」であるのである。ここに私はかかる非現實的な危機の思想として現はれてゐる一二のものを擧げておかう。

そのひとつは形式主義である。形式主義者は考へる。理論は理論としていつでも形式的なものである。從つてそこには階級性などはあり得ない。彼等は階級を超越した理論を求める。しかるに理論は、それが現實的な理論として、現實の社會と連絡をもちそれに働きかけ得るものである限り、現在の階級社會ではつねに階級的な性格をもたざるを得ないから、そこで彼等は非現實的な理論を意識的に求めることになる。そして彼等は彼等の理論の非現實性に、普遍妥當性または永遠性などといふが如き美しき札を張りつける。例へば、彼等は、普遍妥當性な眞理があるといふことを論理的に證明し得ると稱して、――相對主義は自己矛盾に陷る、なぜなら相對主義を荷も意味あるやうに主張し得るためにはこの主張そのものが絕對性をもたねばならず、從つて少くともひとつは絕對的な眞理がある、と云ふ。かくの如く形式的には、眞理の普遍妥當性は證明されることが出來よう。絕對的な眞理はある。しかしそれでおしまひだ。その眞理が內容的には何であるかを我々は知らうと欲してゐるのである。形式主義は形式を說くことによつて我々の認識を豐富にすることなく、形式に固執することによつて却つて我々の認識を貧困ならしめる。形式主義は最も多くの場合我々の認識活動を停止せしめることを我々に命ずる。かくしてそれは我々の具體的な理論的意識を滿足させることなく、思想の危機に際してはそれは、我々の認識を窮乏ならしめる論理であることによつて、却つて反動的な役割を演ずる。――他のものは自由主義である。今日、自由主義者は、、の自由と研究の自由とを區別する。そして思想研究の自由は認めるもそれを、、に於て、、するはこれを認めること亦出來ない、と考へる。しかるに、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。なるほど、危險思想の研究が自由に許されてゐるとする。そこでいまひとりの者がこの思想を研究してゐるとする、しかし彼はまさに危險思想の研究者なる故をもつて、會社でも、銀行でも傭つてくれず、いな、大學に於てさへ使つてくれない。研究の自由は彼にとつて貧困の自由を意味する。彼の研究の自由はかたつぱしか

ら彼の、、の自由によつて否定されてゆく。、、の自由を認めようとい
へば、彼に研究の自由を否定しなければならぬ。自由主義に階級意識
の中では現實的に存在し得ないのである。

思想の危機にあたつては、理論的意識に、、と結びつくことによつてのみ、、、であることが出來る。このとき、、はもとより單なる理論の合理ではない、それは相當高者のことである。、、は理論にまで高められ、理論に、、にまで高められ、かくて理論と、、との辯證法的統一がなければならぬ。理論と、、との辯證法的統一の上に立つ理論的意識のみが、思想の危機に際して、唯一つの、、、、なる理論的意識である。しかるに斯くの如き理論的意識は今や社會的に危機にある階級、即ち支配階級の中では獲得されることが不可能である。彼等は危機を絶對的なる危機として受取らざるを得ないが故に、辯證法的に危機を思惟することが出來ない。この危機を辯證法的に把握し、そこにむしろ未來の發展に對する展望を認め得るものは、未來を約束されてゐるところの新興階級である。

これが思想の危機の理論である。

――（一九二八・一二）――

化物の進化

吉村冬彦

人間文化の進歩の道程に於て發明され創作された色々の作品の中でも「化物」などは最も優れた傑作と云はなければなるまい。化物も矢張り人間と自然の接觸から生れた正嫡子であつて、其の出入する世界は一面には宗教の世界であり、又一面には科學の世界である。同時に又藝術の世界ででもある。

如何なる宗教でも其の教典の中に「化物」の活躍しないものはあるまい。化物なしには恐らく宗教なるものは成立しないであらう。尤も時代の推移に應じて化物の表象は變化するであらうが、その心的內容に於ては永久に同一であるべきだと思はれる。

昔の人は多くの自然界の不可解な現象を化物の所業として說明した。矢張一種の作業假說である。雷電の現象は虎の皮の褌を着けた鬼の惡戯として說明されたが、今日では空中電氣と稱する怪物の活動だと云はれて居る。空中電氣といふと分つたやうな顏をする人は多

ゴーの科學者の大會でシムプソンとウイルソンと二人の學者が大議論をやつたさうであるが、此れは正に此の化物の正體に關する問題についてであつた。結局は唯昔の化物が名前と姿を變へたゞけの事である。

自然界の不思議さは原始人類にとつても、廿世紀の科學者にとつても同じ位に不思議である。其の不思議を昔の我等先祖は化物へ歸納したのを、今の科學者は分子原子電子へ持つて行くだけの事である。昔の人でも恐らく當時彼等の身邊の石器土器を「見る」と同じ意味で化物を見たものはあるまい、それと同じやうに如何なる科學者でも未だ天秤や試驗管を「見る」やうに原子や電子を見た人はないのである。それで、もし昔の化物が實在でないとすれば今の電子や原子も實在ではなくて結局一種の化物であると云はれる。原子電子の存在を假定する事によつて物理界の現象が遺憾なく說明し得られるから此等が物理的

尤も、此れには明に相違の點がある事は此處で改めて云ふ迄もないが、併し又共通な所も可也にある事は爭はれない。兎も角も此の二つのものゝ比較は吾々の科學なるものゝ本質に關する省察の一つの方面を示唆する。

雷電の怪物が分解して一半は科學の方へ入り一半は宗教の方へ走つて行つた。凡ての怪異も同樣である。前者は集積し凝縮して電子となりプロトーンとなり、後者は一つにかたまり合つて全能の神樣になり天地の大道となつた。さうして兩者共に人間の創作であり藝術である。流派がちがうだけである。

それ故に化物の歴史は人間文化の一面の歴史であり、時と場所との環境の變化が此れに如實に反映して居る。鎌倉時代の化物と江戸時代の化物を比較し、江戸の化物とロンドンの化物を比較して見れば此の事はよく分る。

前年誰れか八頭の大蛇とヒドラのお化けとを比較した人があつた。近頃には印度のヴイシヌと希臘のポセイドンの關係を論じて居る學者もある。又ガニミード神話の反映をガンダラの或彫刻に求めた或學者の考では、鷲がガルダに化けた事になつて居る。そして面白い事にはその彫刻に現はされたガルダの顏貌が、我邦の天狗大和尙の顏に餘程似た處があり、又一方ではジヤヴアの或る魔神にもよく似て居る。又吾々の子供の時から御馴染の「赤鬼」の顏はジヤヴア、印度、東トルキスタンから希臘へかけて、色々の名前と表情とをもつて横行して居る。又大江山の酒顛童子の話ともよく似た話が支那にもあるさうであるが、又此話はユリシースのサイクロツプス退治の話と餘程似た處がある、のみならず此のシユテンダウシがアラビアから來たマレイ語で「恐ろしき惡魔」といふ意味の言葉に似て居り、もう一つ脫線すると源賴光の音讀がヘラクレースと何處か似通つてたり、勿論暗合として一笑に附すればそれ迄であるが、されぱと云つて暗合であるといふ科學的證明も六かしいやうな事例はいくらでもある。兎も角も世界中の化物達の系圖調べをする事によつて古代民族間の交渉を探知する一つの手掛りとなり得る事は寧ろ既知の事實である。さうして言語や文字や美術品を手掛りとする此れと同樣な研究よりも一層有力であり得る見込がある。何故かと云へば各民族の化物には其民族の宗教と科學と藝術とが綜合されて居るからである。

併し不幸にして科學が進歩すると共に科學といふものの眞價が誤解され、買ひかぶられた結果として、化物に對する世人の興味が不正當に稀薄になつた、今時本氣になつて化物の研究でも始めやうといふ人は可也氣が引けるであらうと思ふ時代の形勢である。

全く此頃は化物共が餘りに居なくなり過ぎた感がある。今の子供等が御伽噺の中の化物に對する感じは殆んど唯空想的な滑稽味或は怪奇味だけであつて、吾々の子供時代に感じさせられたやうに頭の頂上から足の爪先迄突き拔けるやうな銳い神秘の感じはなくなつたらしく見える。此れは一體どちらが子供等にとつて幸福であるか、どちらが

子供等の教育上有利であるか、此れも存外多くの學校の先生の信ずる如くに簡單な問題ではないかも知れない。西洋の御伽噺に「ゾッとする」とはどんな事か知りたいといふ馬鹿者があつてわざ／＼化物屋敷へ探險に出かける話があるが、あの話を聞いてあの豪傑を羨しいと感ずべきか、或は可愛想と感ずべきか、此れも疑問である。兎も角も「ゾッとする事」を知らないやうな豪傑が、假りに科學者になつたとしたら、先づ餘り大した仕事は出來さうにも思はれない。

仕合せな事に吾々の少年時代の田舍には未だ／＼化物が澤山に生き殘つて居て、そしてそのおかげで吾々は充分な「化物教育」を受ける事が出來たのである。郷里の家の長屋に重兵衞さんといふ老人が居て、毎晩々酌の肴に近所の子供等を膳の向ひに坐らせて、生のにんにくをぼり／＼かじりながらうまさうに熱い杯を嘗めては數限りもない化物の話をして聞かせた。想ふに此老人は一千一夜物語の著者の如き創作的天才であつたらしい。さうして傳說の化物新作の化物共を隨意に眼前に躍らせた。吾々臆病なる小さな心臟は老人の意のまゝに高く低く鼓動した。夜更けて歸る各々の家路には樹の蔭、河の岸、路次の奥の到る所にさま／＼な化物の幻影が待伏せて動いて居た。化物は實際に當時の吾々の世界にのび／＼と生活して居たのである。中學時代になつても未だ吾々と化物との交渉は續いて居た。友人で禿頭のNといふのが化物の創作家として衆に秀でて居た。彼は近所のあらゆる曲り角や芝地や、橋の袂や、大木の梢やに一つづつ極めて恰好な妖怪を創造して配置した。例へば「三角芝（さんかくしば）の足舐（あしねぶ）り」とか「T橋の袂の腕眞砂（うでまさご）」などといふ類である。前者は河沿の或る芝地を空風の吹く夜中に通つてゐると、何者かゞ來て不意にぺろりと足を嘗める、すると急に發熱して三日のうちに死ぬかも知れないといふ。後者は、城山の麓の橋の袂に人の腕が眞砂のやうに一面に散布して居て、通行人の裾を引き止め足をつかんで歩かせない、此れに會ふと大抵は其場で死ぬといふのである。勿論もう「中學教育」を受けて居る其頃の吾々は誰れもそれ等の化物を吾々の五官に觸れ得べき物理的實在としては信じなかつた。それに拘らず此の創作者Nの藝術的に描き出した立派な妖怪の「詩」は吾々のうら若い頭に何かしら神秘な雰圍氣のやうなものを吹き込んだ、或は神秘な存在、不可思議な世界への憧憬に似たものを鼓吹したやうに思はれる。日常茶飯の世界の彼方に、常識では測り知り難い世界がありはしないかと思ふ事だけでも、其心は知らず／＼自然の表面の諸相の奥に隱れた或者への省察へ導かれるのである。

此のやうな化物教育は、少年時代の吾々の科學知識に對する興味を阻害しなかつたのみならず、却つて寧ろ益々それを鼓舞したやうにも思はれる。此れは一見奇妙なやうではあるが、よく考へて見ると寧ろ當然な事でもある。皮肉なやうであるが吾々に本當の科學教育を與へたものは、數々の立派な中等教科書よりは、寧ろ長屋の重兵衞さんと友人のNであつたかも知れない。此れは必しも無用の痴奇論ではない。

不幸にして科學の中等教育に往々にして其れ自身の本來の目的を裏切つて被教育者の中に芽生へつゝある科學者の嫩芽を殺す場合がありはしないかと思はれる。實は非常に不可思議で、誰れにも本當には分らない事を極めて分り切つた平凡な事のやうに餘りに簡單に說明して、それでそれ以上にもう何の疑問もないかのやうにすつかり安心させてしまふやうな傾向がありはしないか。さういふ科學教育が普遍となり凡ての生徒がそれを其儘素直に受け入れたとしたら、世界の科學は恐らくそれ切り進步を止めてしまうに相違ない。

通俗科學などと稱するものが矢張り同樣である。「科學ファン」を喜ばすだけであつて、本當の科學者を培養するものとしては、どれだけの効果が果して其の弊害を償ひ得るか問題である。特にそれが科學者としての體驗を有たない本當のジャーナリストの手によつて行はれる場合には猶更の考へものである。

かういふ皮相的科學教育が普及した結果として、あらゆる化物共は函嶺は勿論日本の國境から追放された。あらゆる化物に關する貴重な「事實」を凡て迷信といふ言葉で抹殺する事が即ち科學の目的であり手柄でゝもあるかのやうな誤解を生ずるやうになつた。此れこそ「科學に對する迷信」でなくて何であらう。科學の目的は實は化者を搜し出す事なのである。此の世界が如何に多くの化物によつて充たされて居るかを數へる事である。

昔の化物は昔の人にはちやんとした事實であつたのである。一世紀以前の科學者に事實であつたものが今では事實でなくなつた例はいくらもある。例へば電氣や光熱や物質に關する我々の考でも昔と今とは丸で變つたと云つてもよい。併し昔の學者の信じた事實は昔の學者には矢張事實であつたのである。神鳴の正體を鬼だと思つた先祖を笑ふ科學者が、百年後の科學者に同じやうに笑はれないと誰が保證し得るであらう。

古人の書き殘した多くの化物の記錄は、昔の人に不思議と思はれた事實の記錄と見る事が出來る。今日の意味での科學的事實では到底有り得ない事は勿論であるが、併し其等の記錄の中から今日の科學的事實を掘り出し得る見込のある事はたしかである。

其のやうな化物の一例として私は前に「提馬風」のお化の正體を論じた事がある。其後に私の問題となつた他の例は「鎌鼬」と稱する化物の事である。

鎌鼬の事は色々の書物にあるが、「倭訓栞」といふ書物に據ると、關東地方に此現象が多いらしい、旋風が吹おこつて「通行人の身にものあらくあたれば股のあたり竪さまにさけて、剃刀にて切たる如く口ひらけ、しかも痛み甚しくもなし、又血は少しも出ず、云々」とあり、又名字正しき侍には此害なく卑賤の者は金持でもあてられるなどと書いてある。此處にも時代の反映が出て居て面白い。學藝雜誌には「西國方に風鎌といふものあり」としてある。此の現象に就ては先年我邦の或る學術雜誌で氣象學上から論じた人があつて、其所說によると旋風

の中では氣壓が甚しく低下する爲に皮膚が裂けるのであらうと說明してあつたやうに記憶するが、此說は物理學者には少し腑に落ちない。假令可成な眞空になつてもゴム球か膀胱か何かのやうに脚部の破裂する事はありさうもない。此れは明に强風の爲に途上の木竹片或は砂粒の如きものが高速度で衝突する爲に皮膚が截斷されるのである。旋風內の最高風速はよくは分らないが每秒七八十米を超える事も珍らしくはないらしい。彈丸の速度に比べれば問題にならぬが、玩具の弓で射た矢よりは速いかも知れない。數年前アメリカの氣象學雜誌に出て居た一例によると、麥藁の莖が大旋風に吹きつけられて堅い板戶に突きさゝつて、丁度矢の立つたやうになつたのが寫眞で示されて居た。麥藁が板戶に穿入する位なら、竹片が人間の柔い肉を破つても大して不都合はあるまいと思はれる。下賤のものに此災が多いといふのは統計の結果でもないから問題にならないが、併し下賤の者の總數が高貴な者の總數より多いとすれば、それだけでも此の事は當前である。その上に又下賤のものが脚部を露出して步く機會が多いとすれば猶更の事である。又關東に特別に旋風が多いかどうかは此れも充分な統計的資料がないから分らないが、小規模の所謂「塵旋風」は武藏野のやうな平野に多いらしいから、此の事も全く無根ではないかも知れない。

怪異を科學的に說明する事に對して反感を懷く人もあるやうである。それは折角の神祕なものを淺薄なる唯物論者の土足に踏みにじられると云つたやうな不快を感じるからであるらしい。併しそれは僻見であり誤解である。所謂科學的說明が一通り出來たとしても實は其象の神祕は少しも減じない許りでなく寧ろ益々深刻になるだけの事である。例へば鎌鼬の現象が假に前記のやうな事であるとすれば、本當の科學的研究は實は其處から始まるので、前に述べた事は唯問題の構成（フォーミュレーション）であつて解決（ソリューション）ではない。又此の現象が多くの實驗的數理的研究によつて、いくらか詳しく分つたとしたところで、それからさきの問題は無限である。さうして何の何某が何日に何處で此れに遭遇するかを豫言する事は如何なる科學者にも永久に不可能である。此れをなし得るものは「神樣」だけである。

「鸚鵡石」といふ不思議な現象の記事を、猪軒小錄、提醒記談、笈埃隨筆等で散見する。此れは山腹に露出した平滑な岩盤が適當な場所から發する音波を反響させるのだといふ事は今日では小學兒童にでも分る事である。岩面に草木があつては音波を擾亂するから反響が充分でなくなる事も多くの物理の學生には明である。併し此等の記錄中で面白いと思はるゝのは、或書では笛の音がよく反響しないとあり、他書には鉦鼓鈴の如きものがよく響かないとある事である。笈埃隨筆では「此地は神跡だから佛具を忌むので、それで鉦や鈴は響かぬ」と云ふ說に對し、そんな馬鹿な事はないと抗辯し「それならば念佛や題目を唱へても反響しない筈だのに、反響するではないか」などといふ議論があり、結局五行說か何かへ持つて行つて無理に故事付けて居る所が面白い。五行說は物理學の卵子であるとも云はれる。此れに就て思出

十の[illegible]數日間の天幕生活をした事がある。頂のない[illegible]或日あの火口丘の頂に立つて大きな聲を立てると前面の火口壁から非常に明瞭な反響が聞こえた。面白いので試にアー、イー、ウー、エー、オーと五つの母音を交互に出して見ると、ア、オなどは強く反響するのにイやエは弱く短くしか反響しない。此れは多分後の母音は振動數の多い上音（オバートーン）に富む爲、又さういふ上音（オバートーン）は其波長の短い爲に吸收分散が多く結局全體としての反響〔强〕度が弱くなるからではないかと考へて見た事がある。兎も角も此の事と、鸚鵡石で鉦や鈴や調子高い笛の音の反響しないといふ記事とは相照應する點がある。併し此れも本式に研究して見なければよくは分らない。

近頃は海の深さを測定する爲に高周波の音波を船底から海水中に送り、それが海底で反響するのを利用する事が實行されるやうになつた。此れを研究した學者達が、どの程度迄上記の問題に立入つたか私は知らない。併し此の鸚鵡石で問題になつた事は此場合當面の問題となつて再燃しなければならないのである。伊勢の鸚鵡石にしても今の物理學者が實地に出張して研究しやうと思へばいくらでも研究する問題はある。そしてその結果は例へば大講堂や劇場の設計などに何かの有益な應用を見出すに相違ない。

余談ではあるが、廿年程前にアメリカの役者が來て、たしか歌舞伎座であつたかと思ふが、「リツプ・ヴアン・ウインクル」の芝居をした事[illegible]ふく、反響がする[illegible]と調子の低い空虚な気味の悪い聲で應へるのか、如何にも眞に迫つて面白かつたのを記憶する。此れは前者のやうな理由で音聲の音色が變る事と、反對面に段階のある爲に音が引延ばされ又幾人もの聲になつて聞こえる事と、此の二つの要素がちやんとつかまれて居たからである。想ふに此役者は「木魂（こだま）」のお化を可也に深く研究したに相違ないのである。

「伽婢子」巻の十二に「大石相戰」と題して、上杉謙信の春日山の城で大石が二つ或日の夕方頻に躍り動いて相衝突し夜半過迄喧嘩をして結局互に碎けてしまつた、それから間もなく謙信が病死したとある。此れも勿論余り當にならない話であるが、併し作りことにしても何等かの自然現象から暗示された作りことであるかも知れない。私の調べた處では、北陸道一體にかけて昔も今も山崩れ地辷（ぢすべ）りの現象が特に著しい。此れに就ては故神保博士其他の詳しい調査もあり、今でも時々新聞で報道される。地辷りの或ものでは地盤の運動は割合に緩徐で、辷つて居る地盤の上に建つた家などぐらぐらしながらも其の儘で運ばれて行く場合もある。從つて岩などでもぐらぐら動き、又互に衝突しながら全體として移動する事もありさうである。さういふ實際の現象から「石と石が喧嘩する」といふアイデアが生れたかも知れないと思はれる。それで、もし、此の謙信居城の地の地辷りに關する史料

を捜索して何か礦物でも見付かれば少しは話が物になるが、今の處では唯の空想に過ぎない。併し此話が兎も角もさういふ學問上の問題の導火線となり得る事だけは事實である。

地變に關係のある怪異では空中から毛の降る現象がある。此れに就ては古來記錄が少くない。此れは多くの場合に多分「火山毛」即ち「ペレ女神の髮毛」と稱するものに相違ない。江戸でも慶長寛永寛政文政の頃の記錄がある。耽奇漫錄によると文政七年の秋降つたものは、長さの長いのは一尺七寸もあつたとする。此前後伊豆大島火山が活動して居た事が記錄されて居るが、此時は丁度江戸近くを通つた颱風の徑に工合よく大島の空から江戸の空へ運ばれて來て落下したものだと云ふ事が分る。從つてそれから判斷して其日の低氣壓の進路の大凡の見當をつける事が可能になるのである。

氣象に關係のありさうなのでは「狸の腹鼓」がある。此現象は現代の東京にも未だあるかも知れないが多分は他の二十世紀文化の物音に壓倒されて居る爲に誰れも注意しなくなつたのであらうと思ふ。兎も角も氣溫や風の特異な垂直分布による音響の異常傳播と關係のある怪異であらうと想像される。今では遠い停車場の機關車の出し入れの音が時として非常に間近く聞こえると云つたやうな現象と姿を變へて注「天狗」や「河童」の類となると物理學や氣象學の範圍からは大分遠ざかるやうである。併し「天狗樣の御囃子」などといふものは矢張前記の音響異常傳播の一例であるかも知れない。

天狗和尚とジュースの神の鷲との親族關係は前に述べたが、河童が海龜の親類である事は善庵隨筆に載つて居る「寫生圖」と記事、又筠庭雜錄にある繪や記載を見ても明である。河童の寫生圖には明に龜の主要な特徴を具備して居り、其の記載には現に「龜の如く」といふ文句が四箇所もある。さうだとすると此等の河童捕獲の記事は或る年の或る月に或る沿岸で海龜が獲れた記錄になり、場合によつては海洋學上の貴重な參考資料にならないとは限らない。

序ながら印度邊の國語で 海龜を「カチフア」といふ「カッパ」と似て居て面白い。

尤も「河童」と稱するものは、其實色々雜多な現象の綜合されたものであるらしいから、今日此れを論ずる場合にはどうしても一旦此れを其の主要成分に分析して各成分を一々吟味した後に、此れ等が如何に組み合はされて居るか、又時代により地方により其の結合形式が如何に變化して居るかを考究しなければならない、此れは中々容易でないが、もし出來たら可也に面白く有益であらうと思ふ。此のやうな分

[illegible]

要するにあらゆる化物を如何なる程度まで科學で說明しても化物は決して退散も消滅もしない。唯化物の顔が段々にちがつたものとなつて現はれるだけである。人間が進化するにつれて、化物も進化しない譯には行かない。併しいくら進化しても化物は矢張化物である。現在の世界中の科學者等は毎日各自の研究室に閉籠り懸命に此等の化物と相撲を取り其正體を見破らうとして努力して居る。併し自然科學界の化物の數には限りがなく各々の化物の面相にも際限がない。正體を見たと思つたは枯柳であつて見たり、枯柳と思つたのが化物であつたりするのである。此の化物と科學者の戰は恐らく永遠に續くであらう。さうしてさうする事によつて人間と化物とは永遠の進化の過程をたどつて行くものと思はれる。

化物がないと思ふのは却つて本當の迷信である。宇宙は永久に怪異に充ちて居る。あらゆる科學の書物は百鬼夜行繪卷物である。それを繙いて其の怪異に戰慄する心持がなくなれば、もう科學は死んでしまふのである。

私は時々窃に想ふ事がある、今の世に最も多く神秘の世界に出入するものは世間からは物質科學者と呼ばるゝ科學研究者ではあるまいか。神秘なあらゆるものは宗教の領域を去つて何時の間にか科學の國に移つてしまつたのではあるまいか。

又こんな事を考へる。科學教育は矢張り昔の化物教育の如くすべき[illegible]自然の不思議[illegible]ではあるまいか。そこには教育者自身が常に此の不思議を體驗して居る事が必要である。既得の知識を繰返して受賣りするだけでは不充分である。宗教的體驗の少ない宗教家の說教で聽衆の中の宗教家を呼びさます事は稀であると同じやうなものではあるまいか。

此んな事を考へるのは或は自分の子供の時に受けた「化物教育」の藥が利き過ぎて、折角受けたオーソドックスの科學教育を自分の「お化鏡」の曲面に映して見て居る爲かも知れない。さうだとすれば此の一篇は一つの懺悔錄のやうなものであるかも知れない。此れは讀者の判斷に任せる外はない。

傳聞するところによると現代物理學の第一人者である丁抹のニエルス・ボーアは現代物理學の根本に横はる或る矛盾を痛感した際に、此の矛盾を解き得る迄に吾々人間の頭は未だ進んで居ないだらうといふ意味の事を云つたさうである。此の銘記すべき大家の謙遜な言葉は今の科學で何事でも分る筈だと考へるやうな迷信者に對する箴言であると同時に、又私の所謂「化物」の存在を許す認容の言葉であるかとも思ふ。もしさうだとすると永い間封じ込められて居た化物共も此れから公然と大手をふつて歩ける事になるのであるが、此れも併し私の疑心暗鬼的の怪物かも知れない。鍾馗の畫像を作つておけばよいのである。

（昭和三年十一月下旬）

獨逸復興の思索的背景

――Liberalismus ueber alles,
Ueber alles in der Welt‥‥

黑田禮二

一

昭和三年の秋九月。ベルリン西郊シャルロッテンブルグ區に在る日本人コロニイの中へ三人の新しい顏觸れが加はつた。言ふ迄もなく『復興の獨逸を親しく見聞視察しようと思つて遙々やつて來たのですが……』と言ふのである。

A君はそのうちでもまだ齡も比較的若い氣鋭の技師である。朝鮮總督府に勤めて居られるのだと言ふ。短日月に獨逸の工業の復興狀態を視察するんだとあつて、暇さへあれば自動車を驅り汽車に乘り、飛行機を飛ばせ、ベルリンの市内から郊外は愚か一週間にして全獨逸の工場の煙突などどうだ――汽車の窓から覗いた所では――まるで黑煙が上つて居ないね。大分工場も傷んで居るかと思ふと僕は多少悲慘な感じに搏たれた！』と。然り、工場は或は大分傷んでるかも知れない。多少悲慘な感じに搏たれるのも宜敷い。唯だ工場の煙突から今日のマンチエスターや大大阪などの樣に黑煙濛々として天日が暗くなつて居ないとの理由丈けで以てすぐ獨逸の製造工場が休止して居ると結論するのは多少早すぎる。獨逸の工業諸都市では『黑煙濛々』は市民の衞生に害があるからと言ふので各市の命令で禁止されてある筈だ。燃料に使ふなら無煙炭か骸炭か煉炭。已むを得ず安石炭を焚く場合には防

[illegible]酒をぽん／＼三本以上抜かぬことにないと言ふ。『…矢張り獨逸は一番景氣が宜えな。料理屋でもカフエでも奇麗なこと、贅澤なこと。それに大抵滿員やから驚く。女の多いのもパリなどより或はうわ手かも知れんぜ…此の景氣丈けで以てや、既に横溢せる復興の氣分は……』と來た！　だがそれは正に反對だらう。獨逸に賣女が多くつてカフエや遊興場の無茶に賑つたのは今よりも、もつと以前の所謂『希望なき時代』、則ちインフレーションのどん底に墜ちた一九二三―四年の頃ではなかつたか？　復興の望まれない一番酷い時が一番贅澤だつたのだ。B氏の三鞭氣焔は氣の毒だが一笑に値せず。

最後にはC君――文部省の少壯海外研究生。極めて眞面目な勉強家である。あらゆる統計を聚集して部屋一杯に擴げつゝ、之は又謹直にも下宿屋を一歩外へ出たこともないと言ふ。『獨逸戰前の人口は六千五百萬人で一平方基米の密度百二十人、今日ではそれが六千二百萬人で密度百三十三人半。次に生産に於ては小麥の年産一九一三年に四百萬噸なりしもの一九二六年には二百六十萬噸…同じく銑鐵は一千九百萬噸より九百二十五萬噸に、鋼鐵に到つては一千八百六十萬噸より一千二百萬噸に減少した…然し乍ら石炭の産額に於ては褐炭八千萬噸臺より一億四千萬噸臺に、褐炭煉炭二千萬噸臺より三千四百萬噸臺等寧ろ戰前の産額を凌駕するものがある。唯、その總産額に於ては一億九[illegible]の數字を集めて戰前と今日とを比較し或の點は恢復したが、或の點は未だし、此の點は復興の途上に在りと判斷し、『獨逸復興に關する二三の考察』とでも言ふ樣な論文を書いて居られる。だが之は少し可笑しい。

と言ふのは戰前の統計と今日の統計の數字の差異を調べて表を作ることは決して惡いとは言はぬが、その數字にすぐ樣『復興』と言ふ内容の物を言はせることは多少眉毛に唾が要る。獨逸は復興の途上にあり！　それは宜敷い。

然し獨逸は戰爭前に歸る樣な努力に腐心して居ると言ふならばそれは明かに間違ひである。今日の國勢と文明の程度が戰爭前に復歸したらそれこそ進歩でなくて怖しく退歩だ。例へば流行。今日ベルリンのノワフユルステン街頭を珍竹林のスカートに毫脛を出して散策さるゝ夫人や令孃方に戰前見たいなコルセットを着け裙を引摺つて歩いて御覽なさいと希望することは無理な註文だし、又米國流のジャズにパリ流のレヴユー全盛の寄席へ以て行つて戰爭前のウインナ張りのオペレツトやロシア式のバレーをやらせた所でまるで見物人が來なくつて經營者は大損をするだらう。戰後にのみ勃興したメルセーデスやオツペルの自動車にしろ、ルフト・ハンザや、ユンカアの飛行機にしろ戰前に復興して了へば殆ど零に歸つて了ふ。從つて戰爭前の狀態に歸ると言ふ

ここに或意味に於て決して獨逸人の希望でもなければ努力の存する所でもない。此のテムポの速くなつた新しい時代に在つては今日の世界的文明水準から落伍しないと言ふ極めて動的な標準を基礎として獨逸人が努力して居る點——それを『復興』と言ふ文字で表はさうと言ふのなら別に文句はない。一方大戰に於て獨逸軍はベルギーやフランスの土地を荒廢に歸せしめた。村落は毀たれ森林は丸坊主となつた。之を再建する様な意味の復興はベルギイやフランスにはあるが國内を戰場に使はなかつた獨逸にはそんな意味の復興事業はない。戰爭が濟むだ直後四五年の間爲替相場の變動に依つて經濟組織に不正常な狀態を示して居たことは尠くとも表面と原則丈けはドーズ案の實施に依つて其の跡形を絕つて了つた。だから其の意味丈けの『復興』なら今更事新しく論ずる必要もない。結局その問題は賠償問題とか、延ては國際戰債と言ふ様な範圍の廣い論題に歸趨して常識で謂ふ所の獨逸の『復興』なる言葉の解釋から『ウエルトホリテイク』に飛んで行つて了ふだらう。同時に又大戰に依て嘗めた苦い經驗を忘れる爲めには或は國際聯盟となり或は軍縮會議となつたと言ふので——それ等が齎す或物の如何は兎も角も——其處に力瘤を入れることも問題それ自身に於て世界共通のものである。獨逸の復興に關係があると共に世界の復興問題ではないから、僕はもつと別の立場から先づ戰敗の獨逸の今日にのみ特別に適合する様な『復興』の概念を自己流に披瀝して見たいと思ふ。

二

獨逸の復興とは要するに獨逸リベラリズムの復興である！

一體リベラリズムの中に『獨逸のリベラリズム』なんかと言ふ特種のものが有り得るだらうか？ 曰く、リベラリズムの觀念的なシステムの上にはそんな特別なものは無い、唯歷史的の過程から見て獨逸には獨逸に適合する様なリベラリズムが存在し得る、と思ふ。

言ふ迄もなく獨逸の革命はプロレタリアートに依て火蓋を切つて落された。モスカウの東から來る共産黨の先驅的宣傳とチムメルワルドを中心とする獨立社會民主黨の地下潛行的活躍とに依て大衆を包括する社會民主黨を動かし、遂に封建官閥の獨斷的な戰爭繼續政策を全然不可能ならしめた。カイゼルは自動車に隱れて和蘭に蒙塵し、ルーデンドルフ將軍は黑眼鏡をかけて瑞典に逃げ走つた。革命水兵は短銃を擬してベルリンに進擊し、戰線の陸兵は劍を捨て袋を背負うて長蛇の如く故鄉に歸り往いた。扨てこそホーエンツオレルン王朝の終焉、統一獨逸帝國の崩壞である！ 然しそれに拘らず當時革命の原動力たりしスパルタキストや共産黨員が獨露と相提携する様な勞働者委員會制度は全

——商工業會議所の代表者たち——と完全に妥協した。ツキエト國に會を喚び寄つて地歴試君むだかもう追付かなかつた。評して「資本の攻勢」と唱へ、「ブルジョアジイの協同戰線」と命名した。然り、獨逸の革命は單にプロレタリアートの緣の下の力持に依て開展し、封建軍閥の自滅に伴つて、棚からのぼた餅の如く新しい資本階級の懐中に落ちて來た異變の社會現象に過ぎなかつた。ワイマア憲法を合圖として玆に新リベラリズムが起死囘生したのである。獨逸革命はげに一片のブルジョア革命であつた。その昔英國に於て產業革命の結果パーリアメンタリズムを創設し、佛國に在つては血腥さ大革命の慘劇を經過した樣な同じ生みの苦しみを一度は獨逸のブルジョアジイも嘗めて見なければならぬ運命を持つて居たであらう。從つて英國が既に十七八世紀に亙り佛國が十八世紀の末葉から十九世紀の冒頭にかけて拂ひ落した試練の厄を獨逸はやつと今度の大戰の敗衂に依つて卒業した譯である。されば最近十年間の所謂資本の攻勢安定時代に於て英國も佛國も米國も一切の自由主義が却て大昔に逆戻りし、自分の身を一家老格一番頭格に引き下げ、今迄の敵たる保守主義を御大に祭り上げ、それを助長しつゝ、資本擁護の目的を遂して居る現象なるに拘らず、獨逸に於ては自由主義自身が總大將となつて古い右翼の封建勢力と、左翼の社會民主黨とを番犬とし資本擁護の目的に利用しつゝある現象を呈して居る。英米佛にあつては自由主義がもう長い間政權を壟斷して居たので惰性となつて多少倦怠が來た。少し許りは保守主義に一籌を輸しても可笑しくはないらしい。[illegible]されるたらうし、佛國ではミレランもポアンカレも[illegible]やつても可笑しくないだらうし、[illegible]大手を振つて横行しても珍とするに足りない。是等の國の自由主義は一と先づ當分辭退して積年の疲れを休めて居れば宜い形である。處が獨逸では今度自由主義が生れて初めての政權に在り附いたのだ。その若々しい元氣で以て封建の殘滓をも社會主義をも一切合財リベラリズムの坩堝に入れて溶かさないでは措かぬ權幕を示して居るのも無理はない。さればにや政府界に於てはウイルトの履行政策、ストレーゼマンのロカルノ政策、又經濟界に在つてはスチンネス等の大カルテル運動、ジーメンス一派の合理化運動など所謂獨逸復興の基本をなす現象の數々は何れも革命のお蔭で新しく政權を獲得し得たリベラリズムの末梢尖端より迸り出る閃光に他ならぬ。一方右翼から文句が出たとする。するとリベラリズムは彼等に王族財產の還附を約してやつたりヒンデンブルグ元帥を大統領と言ふ飾り物にしてやつたりしてその頑固なコンセルヴアチヴイズムを旨く緩和融化して了ふ。一方左翼から激しい苦情が出たとする。するとリベラリズムは彼等に平和主義を高調して見せたり、社會政策を約束したりして、その社會革命性を實際よく籠絡買收して了ふ。總て是れ、聯合妥協の波瀾曲折を上に下にと縫ひ乍ら蛇が坂路をのたくつて上り行く樣にうねり乍らも結局自分の目的とする一線丈けを前進して居るのである。要するに西隣各國に在つては

様な『法的秩序の完成』なる消極的な貝殻に閉ぢ籠つて了つた。始めは脱兎の如く終りは處女の如しである。然も亦彼等が政權を獲得し得る資格のある時代は、取りも直ほさず一方では彼等が社會經濟組織上の資産階級としての成熟期を物語つて居るのを常とするのであるから、彼等は自分達の背景となつて居る資本制を擁護する爲めにも、おとなしい平和主義を高潮せざるを得ないのである。それは自由主義理論の論理上の歸結でもある。何故ならば彼等が今迄血を流してまで喧々囂々として唱へ來りし人民主權とか各人平等權とかの權利は『純正な理性』から出發した一般的原則の上に立つたものであつて人間社會一切の關係を基礎としたものである以上之を國家と稱する關鎖内に包括された人間關係の間に應用して見ると、國家が前に述べた『法的秩序の完成』と稱して暴力を利用すること自身、既に理性則ち法の觀念又は正義の觀念と矛盾することゝなる。從つて理論に忠實なるリベラリストである限り、彼等は結局パシフイストたらざるを得なくなる。換言すれば對内的には封建分子及び勞働階級と妥協又は協調の態度に出で、又外敵を防衞すると言ふ國家意思の對外的表示に於ても國際間の平和を高潮せざるを得なくなる。雖れ實にリベラリズムが初めは血を見て泡くことなき兇狼の如く狂暴なりしもの、何時の間にか温順な出來る様になつて居るのだ。曰く天賦固有の人權には他人に指一本をも染めさせないと頑固に執着く方面と、法的維持の完成にはあらゆるものと協調しやうとぼんと他人の肩を叩く方面と。その昔詩人ゴエーテは自由の秋の野に獨立する、銀杏の樹の下に立ちて歌ふ。『あはれ三位にして一體を象徴る銀杏の葉——されど奈何せむ、その葉の尖端は悲しくも右と左の二元に分岐れたり』と。それがリベラリズムの本質である!

四

僕の言はんと欲するリベラリズムなる思想の一般普遍の性質は先づそれで以て盡きたとする。之より進んでは所謂『獨逸リベラリズム』の特異性に移らう。

前に述べた様に獨逸に於けるリベラリズムと雖もその哲學的な世界觀の内容に於ては敢て一般の自由思想のそれと異つた點のあり様はない。唯それが特異な獨逸の國家形體に反映して歴史的に妙な作用を表はした點に於て一種の特異性を想像することが出來るのである。もつとそれを分りやすく具體的に考へて見やう。

由來獨逸ほど『ゲオポリチツク』の立場から見て複雜極まる不統一な國家はない、今日然るが上に歴史的にも既にさうであつた。初期自由

國に於ては一國家の點景を描いて居た。それに伴ひ生存する資格たる地理的區域はラテン、スラヴ、北ゲルマン等民族の錯綜した爭闘の中心舞臺であつて、勝つものは此處に勝誇の凱旋記念碑を殘し、負けし者は悲慘荒凉たる死屍の墓場を殘した。同時に此處を通路として入り亂れた異民族に各自の文明の種子を蒔き散らし、雜て名も知れぬ外つ國の草花が是等の歴史的な古戰場と墓場とにその爛漫の色を競う た。だから國を鎖した坩堝の中に純正な民族が、固有の文明と傳統とに根ざす近代統一國家を沈澱せしむる様な餘裕と機會とは與へられなかつた。同時に彼等自身が天然國境のない曠漠な低地に散居して居たため或はエルベやラインの河口に下りて海を渉り、或は低いフオゲゼンの森を彷徨ひ越えて西歐に出で、或は東海の砂丘を傳つてハルトの沿岸に擴がり、或は又ドナウ河を下へ〳〵と推移してバルカンの野に新天新地を發見するなどは敢て骨の折れる植民事業でも何でもなかつた。要するに獨逸は外國文明が勝手次第に這入つて來てその爛漫の匂ひを競ふ花園であると共に、又その種子は勝手に風に吹き送られて何處の土地にも蔓り得る性質の國である。

斯様な狀態の下では、昔から獨逸人の間に完全な統一國家の形式を望むことは極めて無理な註文であつた。それに較べて隣りのイギリスなどは譯が違ふ。イギリスはもう十六世紀頃から、根ざしのゆるがぬ胡桃の様な固い統一國家である。又フランスだつて矢張り十六世紀から十七世紀にかけては立派な中央集權の統一國家を組織して居た。若しも是等の民族が一國家と言ふ政治的社會的に統一されて國民生活の必需に合はなくなつた場合には、例へばイギリスに於てはパーリアメンタリズムと言ふ新しい着物に着換へて巧に國民生活の調和を保つて往つたたらうし、又一方佛蘭西ではフランス革命と言ふ熱湯に行水して古垢をきれいに洗ひおとし得た。

要するに英國と言ひフランスと言ひ既に初めから立派な統一國家が形成せられ、それを支持する封建的な保守的な分子が時代の進展にも拘らず依然として自己に有利な經濟的社會的の特權を保有しやうと言ふ努力に對し、之れと利害を異にする新興階級が次第に大きくなつて來て政權參與のために爭闘を始めた痕形を見るならば——假令英國ではそれがパーリアメンタリズムなる形式で治まり、佛國では革命の洗禮を受けたと言ふ態様の相違にあつたにしても——結局同じ軌條を走つて行つたに過ぎぬ。換言すれば英國や佛國に於ては『太初に統一國家あり』が前提條件である。その統一國家の機關の運用の方法が時代に添はぬ『保守』なものとなつた。だから結論として時代に添はせる様な『自由』を主張するものが發生した。統一國家則保守なるものがあつたればこそ、それを改造する自由が新に生れたのである。

此の分り切つた現象に於て獨逸の方はまるで反對になつて居る。勿論獨逸と雖も當時カレイデスコープの様にばら〳〵になつて居た——例へば當時のオーストリアとかプロシアとかバワリア、サキソニア、ヴユルテンベルク、バーデン等の獨立國家の——一々をとつてその內部

を檢討して見ると社會進化に適應する政權爭奪の形式は規模と程度の相違こそあれ別に英佛等の共通に經過した歷史的原則の約束と違つて居る譯はない、然し乍ら獨逸全體を纏めて所謂『ドイチュツーム』なるものを假定し、それを他方の『ブリチッシ・エムパイア』であるとか、又は『ラ・フランス』、『ラ・パトリイー』等に綴つたイギリスやフランスに對峙する觀念を作つて對照して見ると、其處に大きな形式上の相違として、前者には近世統一國家が缺けて居たと言ふ點を特に高潮しなければならぬ。從つて天然國境の障壁を一も有せざる獨逸の中へ無條件に流れ込んだ當時の自由主義の精神は澎湃として獨逸の全土に充ち溢れたに拘らず、彼等は之を政治的のプログラムに固定せしむる對照物がなかつたのである。英國流のパーリアメンタリズムや、米國獨立の自由の精神や佛國革命の平等觀やまたその餘震として起つた七月革命、二月革命の影響等一として獨逸人の胸に響かぬものはなく、到る處にその渇仰者や讚美者は發見されたけれども、扨て彼等之れに依つて立たんとする場合一體誰れに向つて喧嘩を吹きかくべきであるか？　當時に於ける彼等の相手は單なる假想敵であつた。ドン・キホーテの水車であつた。

されば英國の自由主義者には『ビル・オヴ・ライツ』とか、『閣收選

國內的プログラムの傘下に蝟集し得たリベラリズムは、統一國家を有せざる獨逸に於ては單に人生觀上の自由主義に過ぎなかつた。獨逸流に言ふならば所謂『ウエルトアンシヤウング』としての自由主義であつた。英佛等の如く『保守』が在つたから相對的に『自由』が生れたのではない。全獨的な『自由』が絕對的にふわりと生れて、それが具體的な政綱を作る必要上統一獨逸の出現を呼びかけたのである。ホーエンツオレルンの軍閥を創設したのである。ビスマルクの反動を捏ち上げたのである。『自由』が土をこねあげ、息を吹きかけて『保守』を創造し給うた！　換言すれば獨逸の『保守』は『自由』から生れた子供であつた！

五

以上の獨逸リベラリズム發生の形式的關係の說明は單なる戲辭と見てはいけない。其の出發點が大變重要なことだと思ふ。

第一獨逸リベラリズムの政治的プログラムとしての具體化、即ち政黨の發生が既に哲學的で世界觀的である！　從てそれから惹起さるゝ現象として――今日に到る迄――獨逸の政黨は多數に分裂して居る。世界觀が基礎である以上、十人各々その顏の異る如く勝手な政黨が生れ出る。家賃の高いのに不平な連中は、それを世界觀とする政黨を作

特力教語宣麗、[illegible]人
良にはお互ひなく[illegible]に政黨が發生し得る。二大政黨主義？ 人間の人生觀がたつた二つしかない筈はない！ 從つて獨逸の政黨は二十も三十もある。此の現象は『ウエルトアンシヤウング』に依つて初めて政黨化し獨立した所の獨逸リベラリズムの遺傳に依ると思ふ。

第二に獨逸の保守思想もリベラリズムの變態に過ぎない。

先に述べた樣に世界觀に依つて立つた自由主義者が、自分の政治的經濟的な政綱を具體的に設定する爲めの相手として、統一獨逸の大業を完成した。實際上の歴史を見ても一八七一年にビスマルクが獨逸帝國を建設したのも是等の自由主義者の後援に依つて――或は反對に是等の自由主義者を巧妙に利用することに依つて――結晶した集大成である。而て自由主義に依て生れた新しい保守思想である以上、その證系は依然として保守精神の『世界觀』である。ハラーだのゲルラハだのシュタール等の碩學がその代辯として之に保守的な國家理論を編み出したのも此の世界觀の表現に外ならぬ。然も此の世界觀たるや――彼等が政黨としては自由主義に依て創設された以上――依然としてその母胎たる自由主義と共通な『個人主義』の立場を持續して居る。從つて自由主義と同じロマンチシズムである。唯だ彼等が自由主義者と異る所は『純正な理性』を信用しないために粗笨な未來の空中樓閣を組立つる『夢』に非ず、良き在りし日の昔を偲ぶ繊弱な『涙』であつた[illegible]あつた。だから彼等には中世の獨逸が彼等の理想となつた。古代ゲルマニアのお伽噺や民謡の探究！ ニーベルンゲンの研究！ 斯くして古い民族歴史に結び附いた獨斷が獨逸人の國民的自矜を生むに到つた。

自由主義者はそれを利用して獨逸統一を計畫した。反對にビスマルクは自由主義者を利用して此の保守思想を堅めることに腐心した。斯くして、『統一された獨逸』の面影を見る時は其の姿は自由にして保守であり、保守にして自由である處の渾然たる一團である。社會主義者迫害の急先鋒たるビスマルクが同時に社會政策の先祖であるのも敢て怪しむに足りない。

六

獨逸自由主義が此の自身の姿の分身だと思つた保守主義に政權の貸借を許して以來茲に五十年。此の借地人の鼻息は其の間に次第に荒くなつていくら立退を命じてももう金挺でも動かない有樣となつた。ビスマルク及び其の政策を蹈襲した所謂『ユンカーツーム』はそれの書生かお屋壯士の役目を演じて地主たるリベラリズムの脅促を柳に風と追拂つて居た。

斯んな工合で獨逸統一の創設者たるリベラリズムが自分の親類筋の保守主義者一派に假りに許しておいた政權を壟斷せらるゝこと五十年の久しきに及び、その間どうかして全獨的國權復古に臥薪嘗膽の策略

を廻らして居た經緯が要するに立憲帝國時代の獨逸の一切の政治史である。その隱忍は遂に戰敗の後に勃發した革命に依つて報いられた。『革命は死せり！』而てその革命舞臺の緞帳を開けることにのみ役立つた鮮血淋漓たる勞働者や兵卒の死屍を踏み越え踏み越えて次第〳〵に現はれ來りし巨人はと見れば、そは昔一千八百四五十年の頃獨逸全體の思想界を風靡して居た其のまゝの姿である。其の名は、曰く、リベラリズム――『革命は死せり、リベラリズム此處に復古す――』と言ふのがその巨人の絕叫した標語であつて其の記錄をワイマアの憲法となす。

新リベラリズムが初めて政權を把握して以來の大きな事業は茲に絮說の必要もない。曰くヴェルサイユ條約の充行政策――ドウズ案の自發的承認――僞替相場の安定策と外債の積極主義――聯盟への加入。曰く經濟の立法化――カルテル運動の助成――產業の合理化、等々。是等の事業を大成するためにはリベラリズム本來固有の『グッタ・ペルカ』性を發揮して右に王侯財產の還附を約し、宗教々育への復古を誓ひ、左に社會政策の充實を標榜し勞働組合指導者の政權參與を誘ふなど、中間聯合內閣の中間妥協をモットーとして有らゆる方面に媚……等、……べてゐ、た。

エフ流の『赤色獨逸』策は方向を轉換する必要が起る。然り、獨逸は復興した。

たゞそれは戰爭直前の獨逸帝國に『在りし昔』に歸つたのではない。

もつと古い時代、ビスマルクの統一以前の獨逸に『在りし昔』に歸つたのだ。

リベラリズムが復興した――

資本蓄積に關する第二論

（生産手段と消費資料との關係につき河上博士に答ふ）

高田保馬

一

此小論に河上博士の論文『資本蓄積の行き詰まり（生産手段と消費資料との關係につき高田博士に答ふ）』（社會問題研究第七十冊、大正十五年四月號所載）に答へ、重ねてその教示を仰がうとするものである。

河上博士の此論文は『改造』大正十三年十二月號によせたる小論『剩餘價値第二論』に於て、私が博士の資本蓄積行き詰り論（その著『社會組織と社會革命』に於ける）に加へたる批評への答辯と見るべきものであるが、私はその詳細なる論述にも拘はらず、博士の所說を承服すべき何等の理由をもその中に發見することを得ず、從ひていつかは重ねて所信を述べ以て博士の再考と再教とを仰がうと考へてゐた。たゞ當時既に着手してゐた一の仕事があり、それを拋棄して此問題の考察に入ることを欲しなかつたが爲に、そのまゝ不本意にも約二年半の歲月をすぎた。此秋その仕事にも略ぼ一段落がついたので、漸く此筆を執ることとした次第である。顧みれば、河上博士の批評の目的物となつてゐた私の小論を書いてから、約四年あまりの春秋が流れてゐる。私はその間マルクス說の研究のために少しの努力をも時間をも惜し得なかつた故とは云ふものの、自己の知識が此方面に於て何等見るべき進歩を遂げてゐないことを恥づる。それにも拘はらず、私が安じて此ペンを執り得るのは、河上博士によりて加へられたる（私見への）批評の關する限り自ら誤る所なしとの確信を抱き得るが故である。

二

河上博士の主張は『社會的生産が年々より擴張されたる規模において行はるるならば生産せらるる消費資料の價値もまた年々增加してゆく』と云ふにある。私は、生産方法が變化する限り、即ち勞働の生産力の增加する限り、必ずしもさうではないと思ふのであるが、而してこのことを前述の論文に於て述べたのであるが、河上博士は依然として、此點に於けるその主張を改むる必要なしとせられてゐる。私は手みじかにではあるが、次に博士の答辯の要點を吟味しようと思ふ。

それに入るまへに、たゞ一事を述べたい。それは、私が博士の資本蓄積行き詰まり論に對して如何なる批評を加へたかと云ふことである。私が批評の的となしたる博士の資本蓄積行き詰まり論は次の如き理論の組立を有してゐた。

その消極的部分、即ち資本蓄積の無限進行が可能であると云ふツガンの主張に對する論駁。これは二の部分的主張より成る。

(第一)『享樂財の生産額が年々減少してゐるのに、生産手段の生産額が際限なく年々増加するが如きは事實に於てあり得ないと云ふことだ』(論據のA)

(第二)『ツガンは其の數字表に於て資本家の生産した生産手段をば、資本家同志をして相互に買取らしめてゐるが、私の見る所によれば、資本家が相互に斯樣なことをしてゐるのでは、彼等は到底利潤を得ることが出來なくなる筈だからツガンの假定は資本主義の下に於て所詮實現され得べからざるものだと云ふに在る』(論據のB)

その積極的部分、即ち資本蓄積の進行(從ひて擴張複生産)は最初の第一歩より消費手段の一部の賣殘りのために絶對的に不可能であると云ふ主張。これは次の如くに敍述することが出來よう。『擴張複生産の差支なく進行し得る爲には二の條件が必要である。即ち一方に於ては、各種生産部門の比例的關係が保たれてゐることであり、他方に於其出發點からして生産物が賣れ殘る。かくてかの條件の充されざることは必然的である。即ち資本主義の純粹なる限り、擴張複生産は最初の第一歩より行はるる事を得ざるものである』(論據のC)

さて河上博士の論證に於けるこれらの三の論據(ABC)のうち(それは消極的部分に於て二、積極的部分に於て一)、最も重要なるものは云ふまでも無く、その最後のものにある。前の二者はよし全然正當なるものであるにしても、高々、ツガンの擴張複生産の無限可能説を打ち破るだけに止まる、他の仕方によりて此可能が論證せられぬことを說き得ぬ。其行き詰りを論證するのは最後の論據によらねばならぬはずである。而して、私は前述の小論に於て、極めて不十分なる論じ方ではあつたが、此三の論據を吟味し、その何れも成立し得ざることを述べた。然るに、河上博士は折角私の批評への答辯を與へられながら、この最も重要なる部分(C)については一言も觸るることなきのみならず、他の消極的なる二の論據(A及びB)のうちの後者についても何等論及せられてゐない。たゞ博士の此資本蓄積問題に關するその後の著作に於ては此二つの論據が資本主義の行き詰りの論證のために何等利用せらるるところがない。その點から見れば博士は全然、これらに關する私見を容れられたるものと思ふ。さら見て差支無きや。

三

もともと、河上博士の論據（私のAと名づけたるもの）はツガン・バラノフスキの擴張再生産の數式に關してゐる。面倒ではあるがその數

	（一）生産手段の生産	（二）勞働者用消費資料の生産	（三）資本家用消費資料の生産
第一年度	1632p＋544n＋544r＝2720；	408p＋136n＋136r＝680；	300p＋120n＋180r＝600.
第二年度	1989p＋496,9n＋828,1r＝3312,8；	372,5r＋93,2a＋155,3r＝621；	360p＋90a＋150r＝600.
第三年度	2585,4p＋484,6a＋1239r＝4309；	365,9p＋68,9a＋176,5r＝611,3；	360p＋67,5a＋172,5r＝600.

この數式を見ると、『第一、生産手段の生産額は年々增加してゐるが第二、勞働者用の消費資料の生産額は年々減少して居り、それと同時に第三、資本家用の消費資料の生産額は年々同じであり、從つて全體に於ける消費資料の生産額（勞働者用のそれと資本家用のそれとを合計したもの）は年々減少してゐる。簡單にいへば、生産手段の生産額は年々增加しながら、それらの生産手段によつて生産せらるる消費資料の生産額は、年々減少することになつてゐる』（『社會問題研究』第七十册三頁參照）。これに對して河上博士は云はれる。『消費資料の生産額は年々減少してゐるのに、生産手段の生産額のみが際限なく年々增加すると云ふやうな事實は、實際において起り得ない。』『すべて生産手段なるものは、直接か間接か間接のまた間接かには、必ず享樂財を生産するための手段となるものだから、その手段となるべき物のみ無暗に殖えて、その目的とするところの享樂財の生産が却つて減少すると云ふやうなことは、決して在り得ないからである。』

式の數式に於けるpに生産手段、vに勞銀、rは利潤——これをマルクスの符號に飜譯すれば、pはc、uはv、rはmに當る。」

豫め斷つて置くが、私はツガンの見解の是認者ではない。加之、前掲の數式のたて方そのものに根本的なる困難の存することを認める。この困難はマルクスの擴張複生産の數式にもまた共通なるものである。固定資本の存在を無視してのみ是認せらるるやうな此數式は、それをたよりとして、生産部門間の比例關係を吟味するに足るものではない。單純複生産の場合に於てならば、それは固定資本の年々の消耗部分、補償部分を掲げ出せるものとして、是認せられうる。事、擴張複生産に關するかぎり、此數式は固定資本なき生産にのみあてはまると見なければならぬ。現實の資本主義生産はその進行するにつれて、固定資本の數量を增加しつゝある。これを無視したる數式をたよりにして、擴張複生産の可能條件を吟味するが如きは、根本的に誤れりと云はねばならぬと思ふ。併しながら、玆にはこの數式の數字の吟味をしようとするのではない。博士のツガン說に對する批評そのものが果して支持せられうべきや否やを問題とするのである。

これに對する私の批評の骨子は次の點にある。『生產手段の增加するにつれて、消費財または享樂財の生產額の增加あることを要すとなす河上博士の見方は、生產方法に變化なき限りと云ふ假定の下において眞理である。然れども、資本主義生產と切り離すべからざる生產方法の變化を考へ來れば、これ到底成立し得べからざる見解である』

私は今この考に若干の說明を加へたいとも思ふが、それよりも寧ろ此批評に對する河上博士の論難を吟味することが、かへつて私の立場を明白ならしめ得よう。

河上博士によれば、生產方法の變化、卽ち勞働の生產力の增加があれば、『それにつれてｖ卽ち可變資本（勞働者階級の受くる勞貨）に相當する部分のみが相對的には益減少することゝなり、』『生產せらるる消費資料の價値量は年々增加しゆく。』然らば、此消費資料の價値量の增加が如何にして論證せられたるか。此論證は約六頁の長きに亘りて詳述せられてゐるが、玆にはその要點のみを摘記しよう。

『勞働の生產力の增加とは、一定分量の勞働を以て生產し得る使用價値の增加のことである。例へば十時間分の勞働を以て一足の足袋を生產してゐたものが、同じ勞働時間内に十足の足袋を生產し得るに至るなれば、勞働の生產力は十倍に增加したといふのである。さてこの場合に、勞働の生產力が增加したのは、ただ足袋の生產過程においてのみ

ずることに』なる。『しかし足袋一足の價値は減少しても、生產せらるる足袋全體の價値は增加する。假に一足の足袋に要する原料の價値（x）を五十錢とし、十時間分の勞働（y）を一圓とすれば、前の場合に生產せらるる足袋全體（それは一足に止まる）の價値は——假に原料以外の生產手段を無視すれば（圈點は私の加へたるもの——高田附記）——$x+y$ 卽ち一圓五拾錢であり、後の場合に生產せらるる足袋全體（それは十足に上ぼる）の價値は $10x+y$ 卽ち六圓である。』かくて足袋の生產量は、『使用價値としては一から十に、價値としては $x+y$ から $10x+y$ に增加』するのである。『これを逆に云へば、生產手段としての原料の消費が一から十に增加するならば、生產物の價値量も、たとひ之と正比例的にではなくとも、$x+y$ から $10x+y$ に增加するのである。』『要するに、使用價値の觀點からしても、また價値の觀點からしても、生產手段たる原料の消費量が增加するのに、生產物（消費手段をさす——高田附記）の生產量が減少すると云ふことは、決して在り得ない』（圈點は私の施したるもの——高田附記）（同上、一八—二〇頁）。

こゝに引用したる主張の內容はこれだけに歸着する。假に原料以外の生產手段を無視しよう。原料と云ふ生產手段の消費量增加はやがて生產物たる消費手段の生產量增加を意味するのであると云ふこと、卽ちこれ。併しながら、これが果してどれだけ、博士の立場を救ひ得るのであらうか。第一に、河上博士は『假に原料以外の生產手段を無視せ

他の生産手段 [illegible] 費生産が行きつまるか否かにある。然るにその肝腎に於て、原料以外の生産手段を無視し、云はば資本主義の本質を抜き取りて、そこから正眼の命題——博士の主張の骨子——を求めようとしても、正しいものの得られないことは當然の事理でなければならぬと思ふ。第二に、博士が論證せらるべき命題、その主張の根柢をなしてゐる命題は『生産手段の生産額が年々増加しながら、それらの生産手段によつて生産せらるる消費資料の生産額は年々減少する』わけはない、『生産手段の生産額の増加するにつれて、消費財または享樂財の生産額の増加がある』と云ふことではないか（同上、五頁、七頁）。即ち、問題の重心は生産手段の生産額にあつたはずである。然るに、博士はこれに答へて生産手段の消費量が増加するのに消費手段の生産量が減少することはあり得ぬと云はれてゐる。それは生産手段の消費量と消費手段の生産量との關係ではないか。生産手段の生産額とその消費量とは全然相異なれる内容である。後者の増加が消費手段の増加を生ずとしても、それから直に、生産手段の生産額増加が消費手段生産の増加を意味するとは云はれまい。要するに、博士はその答解を與ふべき問題に何者の答解を與へられてゐないことになる。『かくて吾々が原料を以て生産手段を代表せしむる限り、消費せらるる生産手段の價値量が増加して、之により生産せらるる生産物の價値量が減少すると云ふことは、決して在り得ないのである』（同上、二一頁）。誠に然り。併しながら、問題は一消 [illegible] たにすぎである。以上博士は [illegible] の [illegible] に於て [illegible] をして行先の目標を見失はれた。

博士は此見失ひたる目標を再び見出してこれに向はむとせられた。即ちまづ、原料が生産手段を代表するものとなしたる假定から離れて勞働手段を併せ考へられたのである。蓋し、生産手段は勞働の次から次に加へられて行く勞働對象、即ち原料と勞働手段とに分たれる。前者は生産物の上にその價値の全部をうつすのであるが、後者はその消耗部分の價値のみをうつす。即ち、『機械建物の勞働手段になると、それは現狀を維持しながら繰返し何回もの生産過程に役立つのであり、一回分の生産過程に於て失ふところの使用價値は、ただその一部分に過ぎぬのであるから、從つてその失ふところの價値、即ち其のものから生産物の上に移轉さるる價値も、またその一部分づつである。』『了解に便利なるため、重ねて原料が生産手段を代表するものと假定したけれども、更にこれを勞働手段について見るも畢竟は同じことである（圏點は私の加へたるもの——高田附記）。何故なれば、既に述べたやうに、すべて生産手段は原料であつても勞働手段であつても、それが生産のため消費せらるるならば、それ自身の價値を生産物の上に移轉することにおいて、何の變りもないからである。但し原料は單に一回の生産過程を通過することにより、それ自身の獨立存在を失ひ、從つてその價値の全部を生産物の上に移轉するけれども、勞働手段は幾

回もの生産過程に役立つものであり、從つてそれら幾回もの生産過程を通じ、その價値の一部分づゝを切れ〲に生産物の上に移轉する。それゆゑ、マルクスの資本再生産の表式――價値の消費および生産の表式――には、原料の價値の全部が登錄されてゐるに反し、勞働手段の價値はその一部分しか登錄されてゐない。そこに兩者の差――謂ゆる固定資本と流通資本との差――が横たはる』（同上、二一一頁）。河上博士はこれだけの前置から、生産手段の價値が消費資料の上に移轉する點に於て、原料も勞働手段も畢竟は同じことであるとなし、その結果、次の如き結論に到達してゐられる。

『勞働の生産力の增進は、また多くの場合、勞働手段としての生産手段の增加を伴ふ。けれども、それら生産手段の價値は、生産のため消耗せられる限りにおいてマルクスの表式に現はれ來たるのであり、さうしてそれが生産のため消耗されたのであれば、それは必ず生産物の價値の上に移轉され、生産さるる消費資料の價値の一部となつて現はれるのである。だから、これを表式に現はるる範圍において見るかぎり（圈點、原文に從ふ）、勞働手段も原料も、その價値を生産物の上に移すことにおいて變りはない。それらは必然的に、生産物たる消費資料の價値を構成する。生産的に消費さるる生産手段の價値が增加するの――高田附記）（同上、二一三―二一四頁）。

勞働手段をも考の中にとり入れることによりて、見失はれたる目標を再び見出されたるかに見えたる博士は重ねてまた、消費さるる生産手段の價値と消費資料の價値とを問題の主眼點となすことによりて、完全にかの目標を見失はれてゐる。

ツガンの立場を打破るための河上博士の主張は(1)の如きものであつた。然るに、私がこれを否定したるに對し、詳細なる論證の道行の結果、到達せられたるものは(2)に外ならぬ。論證の道行は意外のところに到達してはゐないか、而して、博士の主張はその爲に事實上、何等の論證をも與へられてゐないと思はれる。

(1)生産せらるる生産手段の價値量の增加は必然的に、消費手段の價値量の增加を伴ふ（社會問題研究第七十冊二、三、七、一一頁）。

(2)生産的に消費せらるる生産手段の價値量の增加は必然的に、消費手段の價値量の增加を伴ふ（同上、二四頁）。

四

併しながら、博士の論證せられたりと思はるる結論すら、其實十分の論證を與へられてはゐないと思ふ。

河上博士によれば、生産的に消費さるる生産手段の價値が增加する

實に關し[illegible]比較後のものに生產方法の變化、即ち勞働の生產力の增加に伴ひ一般[illegible]次に（使用價値との比較に於て見るも、又更に廣く、生產物の全價値量との比較について見るも）減少する傾がある。c+v+m に於て、Bが減少するとすれば、Aのみが如何に增加するとしても、Pがますます A と共に增加するとは云へぬわけである。

こゝに於て、も一度、博士の足袋の例にもどる。なるほど、『原料以外の生產手段を無視すれば』、原料と勞働とのみによりて足袋が出來上る。而して、假に勞働の生產力の增加によりて（原料以外の生產手段を無視して、如何にして此生產力の增加が生ずるか?）、十倍の足袋が出來上るとする。さうすれば、足袋の價値總量は $m+v$ より $10m+v$ に上るであらう。併しながら、事實に於ては、足袋の生產せらるるが爲には勞働手段を要する、而してこの消耗量は生產方法の變化に伴ひて、著しく變化する。加之、原料の價値が一定せるものと假定せられてゐるが、これも事實にあてはまらぬ。生產方法の變化は、生產部門の極めて廣き範圍に亘りて行はるるのを多しとする、從ひて、それは同時に多くは原料の價値の減少をも意味する。從ひて、これを一定なるものとして、消費せらるる生產手段の價値增加は消費資料の價値增加を伴ふと見るにしても、それは何等の必然性を有し得ざるはずである。

事柄は、單に足袋の生產のみを眼中に置かず、社會全體に於ける生產を包括的に考ふるとき最も明瞭となる。一の社會の生產數量をは時[illegible]等の變化[illegible]る、他の言葉を以て云へば、[illegible]の素を保ちつゝありとする。而して第一の時期に於ては全勞働の四分の一のみが生產手段の消耗部分の補償のために振あてられる、云はゞ生產財の生產に向けられるとする。さうすれば、殘りの四分の三が生產手段を利用して直接に消費資料を生產する仕事に向けられるはずである。第二の時期に於ては、生產力が增加してゐるとする、その必然の結果として、生產手段の利用せらるる數量が多い。それにつれて、その消耗部分も大きくなる。全勞働の今や四分の三までが生產手段の消耗部分の補償のために振向けられ、殘りの四分の一のみが消費資料の直接なる生產にあてられる。此場合、假に一年間（又は一生產期間）の全勞働量を一萬とすれば、完成せられて年々人格的消費に充てられる消費資料の總量もまた一萬の價値を有する（靜態に於ては年々各生產段階に於て生產せられたる價値又は價格の數量だけの完成財が生產せられるから）、而して、このことは如何に生產方法が變化し、また勞働の生產力が變化しても變りはない。かくて、其結末はからなつてゐる。生產せらるる消費資料は後の時期に於て何等の變りもない、依然として一萬である。然るに、生產的に消費せらるる生產手段の價値は二千五百（一萬の四分の一）から七千五百（一萬の四分の三）に增加してゐる。生產的に消費せらるる生產手段の價値量の增加は何等消費手段の價値量の增加を伴つてゐない。この

ことは一＋一＝二の命題ほどにも公理的に明白なるものである。然るに河上博士によれば、生産的に消費せらるる生産手段の價値量の增加は必然的に、消費手段の價値量の增加を伴ふ。まさに、かの公理的に明白なるものの反對である。

前述の例に於て、例へば勞働組合の勢力により勞働時間が二割だけ短縮せられたりとせよ。年々生産せらるる消費手段の數量は八千となる。而も生産手段の年々の消費數量は八千の四分の三、即ち六千に上るであらう。即ち、生産的に消費せらるる生産手段の數量は二千五百より六千に、云はゞ二倍以上に上れるに拘はらず、それによりて生産せらるる消費資料の數量は一萬より八千に、即ち二割を減じてゐる。河上博士が私見の批評のためにその議論を展開しゆきながら、結局、二十四頁を費したる後到達せられたる結論は何であるか。『生産的に消費さるる生産手段の價値が增加するのに、それによつて生産せらるる消費資料の價値が却て減少すると云ふことは、たとひ生産力の增加があつても、その他の事情にして變化なき限り、事實上決して起り得るものではない』(同上、二四頁)。而も、前述のところから見れば、これ位に明白なる誤謬はない。一たび沈みたる太陽は明日になつて決して再び東から昇るものではない。かく云ふことは自由である、此意味に前述の命題にして正しいとするも、これによりて、當初の目じるしであるところの命題、即ち『生産せらるる生産手段の價値量の增加は必然的に、消費手段の價値量の增加を伴ふ』と云ふことは、何等論證せらるるところがない、蓋し、これらの二は全く異なれる事柄であること、前述の如くであるから。

併しながら、一見、次のやうな議論が成立しさうにも見えよう。生産せらるる生産手段は常に消費せらるる生産手段を補償せむが爲に生産せらるるのである。從ひて、消費せらるる生産手段の數量は生産せらるるそれの數量と相等しい。かくて、生産的に消費せらるる生産手段の價値量の增減(前者)と云ふことは必然的に、生産せられたるそれの增減(後者)を意味するものである。前者の增加が必然的に消費手段の價値量の增加を伴ふならば、それは、やがて後者の增加がまた消費手段の價値增加を伴ふことを意味する。」併しながら此考方もまた誤つてゐる。年々生産せらるる生産手段の數量と補償せられ從ひて消費せらるる生産手段の數量と、相等しいのは、たゞ單純複生産の場合にかぎる。動態、從ひて擴張複生産の場合にありては、生産せらるる生産手段(の價値量、以下此斷を省略して單に生産手段と云ふ)と消費せらるる生産手段とは決して平行しない。消費せらるる生産手段の數量よりも生

としても、それからして、「生産せらるる生産手段の増加は必ずや消費手段の增加を伴ふ」と云ふ命題を導き出すことは出來ぬはずである。

かくて私から見れば、河上博士が生産手段の數量のみ增加して消費手段の數量が增加せずと云ふのはあり得べからざることであると云はれるのは、畢竟太陽は明日東より昇らざるべしと云ふ類である。かゝる立場に導き入れたるものは、原料を中心として生産手段の性質を見、從ひて生産手段と消費資料との關係を見られたる一事である。然るに生産手段のうち、原料は資本主義生産の特徴をなすものではない、資本主義生産の特有の事象は固定資本の增大、從ひてそれが全生産手段に於て特に重要なる部分を占めると云ふことである。然らば、資本主義生産に於ける蓄積の進行の可能なりや否やを吟味するに當り、而して此吟味をば生産手段と消費資料との關係と云ふ視角よりはじむるに當り、まづ固定資本そのものからはじめ、その性質に從ひて答解の方向を見定むべきである。然らずして、資本主義生産が以前の段階と共に有する生産手段、即ち原料そのものからはじめ、大體の方向をその性質に從ひて見定むる限り、誤れる立場に迷ひ入らざるを得ぬ。河上博士の議論の筋道はかうなつてゐる。原料について見るに、生産手段の價値はやがて消費資料の價値の中に全部移轉する、そこで（原料のみふえて）生産手段のみ殖えて消費資料の增加せぬと云ふことはあり得ざる譯である。何となれば、他の生産手段といへども、『畢竟は同じことである』（同上、二一頁）。いつかはその價値を消費資料の上に移轉せし[illegible]竟は同じことである。何人も畢竟は死ぬ、誠に然り。しかし何時死ぬかが問題ではなからうか。固定資本の價値とてもいつかは全部、消費資料の上に移轉する。しかしそれが何時に移轉するか、從ひてその幾部分が明年明後年に移轉するか、このことが問題である。生産方法の變化ある限り年々の移轉割合に變化があり、多くはそれが減少する、さうである以上、生産手段がふえると、必ず消費資料が增加するとはどうしても云へないわけである。隣の病人の如くすべての人人が明年死ぬならば人口は消滅する、勿論何人も畢竟は死ぬ、畢竟は死ぬからといつて隣の病人の如くすぐ死ぬと云へぬ、從ひて人々は消滅するとは云へぬ。生産手段の價値も畢竟は消費資料の上に移る、しかしそれは原料のそれの如く全部直に移るとは見がたいはずである。原料のそれと一樣に取扱はうとするときに、人口は消滅すると云ふやうな、見當ちがひの結論に到達せざるを得ぬ。

五

そこで、私は、河上博士が私の設けたる例證に對して下されたる批評にうつる。

(1) 一團の漁夫。勞働時間毎日八時間。生産期間一〇〇日。毎日の生産高四。——總生産高四〇〇。

(2) 毎日二時間をさいて製網。その價値二〇〇（百日間使用にたふ）。

(3) 勞働時間四時間。毎日二時間づゝ製網、補償のため。毎日の生産高

四〇。——總生産高四〇〇〇。

生産手段の生産額は一生産期間〇より二〇〇に増加、消費資料の生産は同じく八〇〇より四〇〇に減少してゐる。まさしく、「生産手段が増加すれば消費手段もまた増加する」ことの反對である。

さて、これだけの私の主張に對して、河上博士はまづか丶る漁夫國が原料を用ひざるが故に特異なる、「例外的なる場合」だと云はれ、そこに『手品のたねの一つが横はる』といはれる。併しながら、『人間がたた自然に存在せる勞働對象に働きかけるといふことは、原始林の木を伐るとか、地中の鑛物を採掘するとか、水中の魚類を捕獲するとかいふやうな、極めて例外的の場合』であらうか。鑛山業水産業の産額は可なりに巨額である、これが抑も例外的のものであらうか。近世に發達したる産業のうち、最も巨額の資本を要したるものは電氣に關するそれである。而もそれは全部原料なき産業ではないか。更に進みて云はゞ、縦の方向に於ける企業結合の傾向は益進行しつ丶ある、その結合の遂行せらるる限り、結合により新に成立したる企業は全體として原料を要せざるものとなるのではなからうか。か丶る重要なる生産の範圍が如何にして特異であり例外であり得るか。河上博士の構想にか丶るかの固定資本なき資本主義こそまさしく、幽靈的資本主義ではないか。

は、決して起り得べきでない。私(河上博士)は進んでこのことを明にするであらう』(同上、一一頁)。而して博士は如何にして之を示されたるか。私の例に於て、勞働時間が八時間より四時間に減少してゐるが『勞働時間を一定する限り、たとひ如何なる割合において或は消費資料の生産のため或は生産手段の生産のため之を充當するとするも、これによつて生産せらるる消費資料の價値はいつも同じである』(同上、一二頁)。然り、勞働時間を一定する限りさうである、生産手段を用ひようが用ひまいが、單純複生産の行はるる限り、消費資料の價値はいつも同じである(勞働者數を一定とする限り)。私と雖も、これを自明のこととして明言してゐる。而して、それが博士の立論をどう支持するか。私の例に於て勞働時間數が減少してゐる、それが道理に背く、あり得べからざることと云はれるのであらうか。生産力の増加につれて勞働時間數の減少するのが何故にあり得べからざる事實であるか。勞働時間を延長せむとする資本家の壓迫あるときにすら、勞働時間は短縮せられつ丶あるではないか。

私の場合、生産は縮少せられてゐる、問題は擴張生産にあるのではないかと云ふのが河上博士の次の非難である。この非難も的を外れてゐる。博士が「生産手段の生産額の増加につれて享樂財の生産額が増

つてゐるものではない。かくて、博士の主張にその實、私見に對する何等の非難でもない。進みて私は労働時間を後の場合にも六時間に延長しよう。消費資料の價値は八〇〇であること前と同じい。而して生産手段の價値は〇から二〇〇に増加してゐる。『第一部門における生産手段の生産額の増加につれて、第二部門乃至第三部門における享樂財の生産額が増加するやうに、訂正しなければならぬ』と云はるる博士の眼から見れば、生産手段は増加してゐるのに何故に消費資料の價値は増加しないのであるか。消費資料の價値の増加しないのは博士の主張そのものを否認してゐる。

私は單純複生産を營むでゐる二の時期を比較したが、私の立場を一層明瞭ならしむるためには、やはり生産擴張の進行中にある時期をも例にとるべきであると思ふ。前例に於て、はじめ、毎日二時間をさいて網を作りのこり六時間を漁撈に充てたる代りに、毎日四時間をさいて新機軸の網を作り、五時間を漁撈にあてるとしよう。消費財の價値は八〇〇より五〇〇に減少する。生産手段の價値は〇より四〇〇に上る。生産の全體は擴張せられながら、而も消費財の價値は減少してゐる。事あまりに平明に見ゆるが、河上博士の主張は此平明なる事實さへも看過したるものである。要するに、極めて不遜なる、併しながら極めて卒直なる申分を許さるるならばから云ひたい。河上博士の全批評（前述の論文）をあげてこれ誤謬であると私は信じてゐる。

六

これ[illegible]ら、以上の私見の根據となれるものを明にして行きたいと思ふ。

マルクスに於ける複生産の數式は生産手段のうち、たゞ消耗せられて價値を生産物の上に移轉する部分のみを表はしてゐる。所謂、年々消耗される資本の再生産（ならびに新たなる資本の蓄積）に關する表示である。併しながら、さうであるが故に、これを中心として擴張複生産の行き詰るや否やを考ふることは、本來不可能のことである。何を以てさう云ふか。

まづ、マルクスの擴張複生産の數式を（その一部分だけであるが）掲げる。

基本年度 $\left\{\begin{array}{l} \text{I. } 4000c + 1000v + 1000m = 6000 \\ \text{II. } 1500c + 750v + 750m = 3000 \end{array}\right\}$ 計 9000

第一年度 $\left\{\begin{array}{l} \text{I. } 4400c + 1100v + 1100m = 6600 \\ \text{II. } 1600c + 800v + 800m = 3200 \end{array}\right\}$ 計 9800

第二年度 $\left\{\begin{array}{l} \text{I. } 4840c + 1210v + 1210m = 7260 \\ \text{II. } 1760c + 880v + 880m = 3520 \end{array}\right\}$ 計10780

基本年度に於ける生産手段の追加生産額（消耗部分の補償に必要なる以上の生産額）は五〇〇である。然るに、次年度即ち第一年度に於て、それは使用せらるるのみならず、全部が消耗し盡されてゐる。これは、資本主義生産が前提とせらるる限り全然あり得べからざることである。此事はたゞ次の如き想定の下に於て生じうる。生産手段の追加生産額がすべて原料であるならば、それが次年に於て全部消耗せら

れらる。併しながら、固定資本に於ける變化なくして使用せらるる原料のみの增加と云ふことはあり得ない。或は此追加生産手段のうち、一年の使用の後殘存するものを資本家の申合によりて破棄するときにも、全部消耗せられるものと見得るが相競爭する資本家が此擧に出づるとも考へがたい。一體、生産手段の消耗部分のみを數式の上に揭げ出すことは、單純複生産の場合についてならば、全然正當である。併しながらかゝる數式を擴張複生産にそのまゝ利用しようとすれば直に誤謬に陷る。生産力に變化がない以上、追加生産手段（其本年度に於ては五〇〇）の幾パアセントのみが、次年度のc、卽ち消耗する生産手段中に於ける追加量として揭げ出さるべきものである。從ひて第二年度の數式に於ける生産手段は4400＋1600＝6000でなくして、(4000＋1500)＋$\frac{1}{n}$(6000－4000－1500)＝5500＋$\frac{1}{n}$(500)である。此場合、nの大さは生産方法の如何によりて定まる。$\frac{1}{n_1}$ $\frac{1}{n_2}$をそれぞれ各生産部門に於ける生産手段の消耗率とすれば、使用せられつゝある（其本年度に於て）生産手段の總額はそれぞれ次の如くである。

（第一部門）$\frac{1}{n_1}$×4000（生産手段生産業に於て使用せらるる生産手段の總額）

（第二部門）$\frac{1}{n_2}$×1500（消費資料生産業に於て使用せらるる生産手段の總額）

數式に示されたる（卽ち1600）よりも、遙に小なる生産手段の價値量が消費資料の上に移される。何となれば、第一部門に於ける生産額の兩部門への振當を變化なきものとするも、消費資料産業に於ける補償部分一五〇〇は新生産方法に從ひ、從ひて以前よりも小なる割合だけが消耗せられる（生産方法の變化につれて$\frac{1}{n}$、卽ち消費資料の生産に用ひらるる生産手段の持續年數が加はるものと見れば）、加之、追加生産手段一〇〇からもまたこれに新なる消耗率を乘じたるものだけが消費資料の上に價値を移轉する。かくして、前年度よりも割合に小なる（場合によりては絕對量に於ても前年度より小なる）價値が生産手段から消費資料の上に移される。それに生産方法の變化はまた、不變資本に對する可變資本の割合を減少せしめる。不變資本の總額は增加するにしても、此割合の減少のために、消費資料の生産に於ける可變資本ひいて餘剩價値の大さを減少する可能がある。かくして、消費資料の價値の大さは生産の擴張に拘はらず、減少する可能が與へられて居ると見なければならぬ、減少せざるまでも、生産手段の生産額の增加に伴うて增加せざるのを一般とする。

*　　*　　*

これからしばらく述ぶるところは、煩瑣なる數字を厭ふ讀者ないに

第一に、各部門に於ける餘剩價値の蓄積せらるゝ[illegible]門に於て利用せらるるものとしたれども、これは必ずしも事實ではない、生産方法の變化は固定資本の增大を必要とし、その結果、消費資料の生産から蓄積資本の幾分は生産手段の生産へと移轉する可能性が多いと認め得る。かくて、第一部門に於て、餘剩價値の蓄積部分のすべて即ち五〇〇が利用せられるとは考へがたい、從ひて、第二部門に振當てられるところの生産手段の數量もまた前に述べたる數式より動く譯である。第二、假にこの五〇〇全部が第一部門に利用せられるとしても、その際どれだけの生産手段が必要とせらるるか、詳言すればこの五〇〇が如何やうに可變資本と不變資本とに振り分けられるかは、全く新しき生産方法によりて定まる、若し、不變資本の全資本に對する割合を以てx'とすれば$500\times x'$だけが、第一部門に追加せらるる生産手段である。もしまた、蓄積部分が兩部門間に融通出入するものとしこの五〇〇に加減せらるる數量をyとすれば$x'(500\pm y)$だけが第一部門に於て必要とせらるる追加生産手段の量である。

これだけを前置として、擴張第一年度に於けるマルクスの數式が、若し生産力の增加を考慮の中に入るゝ場合に、如何に改訂せらるべきかを考へて見る。

此年度に於ける第一部門の生産手段消費量は、次の三の部分よりなる。(A)以前の生産方法による生産手段の消耗部分、これは持續年數をn_1とすれば$(n_1-1)4000\times\frac{1}{n_1}=4000\times\frac{(n_1-1)}{n_1}$となる。(B)前年補償[illegible]年數をn_1'とすれば$500\times\frac{1}{n_1'}$に當る。(C)新に追加せられたる生産手段[illegible]分の消耗部分、これは次の式を以て示され得る。$x'(500\pm y)\times\frac{1}{n_1'}$、かくて、擴張第一年度の第一部門の數式に於ける生産手段四〇〇〇の代りに、次の數字が置かれねばならぬと思ふ。

$$4000\frac{n_1-1}{n_1}+\left\{4000+x'(500\pm y)\right\}\frac{1}{n_1'}=4000\left(\frac{n_1-1}{n_1}+\frac{1}{n_1'}\right)+x'(500\pm y)\frac{1}{n_1'}$$

さてさきに不變資本の全資本に對する割合を（新しき生産方法に於ける）x'とした、舊き方法のそれをxとする。$(1-x):(1-x')$はそれぞれ可變資本の全資本に對する割合である。さうすれば、可變資本は次の式を以て示されうる。

$$(1-x)\frac{4000(n_1-1)}{n_1}+(1-x')\left\{4000+x'(500\pm y)\right\}\frac{1}{n_1'}$$

かくて、擴張第一年度に於ける第一部門の生産擴張の數式

I. $4400c+1100v+1100m=6600$

の代りに、次のものが置かれることを要する。

$$\text{I.}\quad \underbrace{\left[4000\frac{(n_1-1)}{n_1}+\left\{4000+x'(500\pm y)\right\}\frac{1}{n_1'}\right]}_{c}+\underbrace{\left[(1-x)\frac{4000(n_1-1)}{n_1}+(1-x')\left\{4000+x'(500\pm y)\right\}\frac{1}{n_1'}\right]}_{v}+\underbrace{\left[(1-x)\frac{4000(n_1'-1)}{n_1}+(1-x')\left\{4000+x'(500\pm y)\right\}\frac{1}{n_1'}\right]}_{m}$$

＝生產手段生產額

この數式をば更に簡單化しうるか、その作業をこゝには進めない。なほ第二部門、即ち消費資料產業についても、同樣なる考方を進め得るけれども、こゝには、その數式によりて問題が解決せられると云ふ譯のものでもないから、それまでには立入らぬ。たゞ、生產方法の變化と固定資本の存在を無視してゐるマルクス擴張生產數式が現實の經濟の進行を反映する爲には、如何に根本的なる改訂を必要とするかの一端を述べたるまでである。私の煩瑣なる數字の列擧と云へる部分はこれだけを以て終る。

*　*　*

私から見れば、マルクスに於ける擴張複生產の數式は三の重なる困難を藏してゐる。

第一。此數式は固定資本の存在を無視してのみ成立し得る。然るに、これは資本主義生產の特徴其ものを無視したるものである。此數式を基準とし、それに基いて直に資本蓄積の現實を理解し、その成行を判斷しようとするが如きは許すべからざる誤謬である。

此點については、ツガン・バラノウスキも、ロオザ・ルクセンブルグも、而してブハアリンも、更にまた、福田博士も、河上博士も、而して以前の論文に於ける私も各自の立場の如何に異なるに拘はらず、こゝに於て以前の論文に於ける主張を支持し得る所以は、私自身が此數式そのものによりて自己の見解を築くことなく、まづそれから離れて事態そのものを考察したるが故である。少くも日本の學界に於て、先づ、固定資本を擴張複生產の數式の中に取入れたることは織戶(登代)學士の功績である(『社會的資本再生產行程の分析の一部』經濟研究昭和三年七月號參照)。類似の見解を抱いてゐた私は同學士の論文の草稿をよみ且つ吟味することによりて、少からざる學益を受けてゐる。固定資本に於ける消耗部分と殘存部分とを考慮の中に入れたる擴張複生產の數式はやがて學士の續稿に於て示さるるであらう。私は今茲に自らこれを展開することをしない。而して同時に學士の見解が向阪逸郎氏の影響に負ふところはあるにしても、私の考からは全然獨立に作り上げられてゐることを明にしたい。

第二。マルクスの數式は生產力の增加を考慮の中に入れず、云はゞこれを抽象してゐる。此點は從來しばしば論せられたるところである。或はマルクス自身に於て、更に進みてそれをも考の中に入れたる數式に仕上げる企圖があつたかも知れずとは云へ、少くも、此數式をたよりにして、資本蓄積の行詰るか否かを判定する譯には行かぬ。

第三。マルクスの數式の背後には、非資本家的要素が潜んでゐる。少くも、第一部門の生產者には資本主義以外の動機によりて動く

、勿論今までは、消費資料の生産額を一定なるものとしてゐたのであるが、此假定を取り去れば、生産手段の増加の可能なる道行が増す。消費資料は一方に於て人口の増加に伴ひて増加する。他の事情にして一樣ならば、正しく人口の増加に比例して増加するであらう。他方に於て、勢力關係の變動につれて増加する。無産者の勢力が加はるほどその所得は直接に（勞銀の増加によりて）、又は間接に（その他の道行によりて）増加する。此所得増加は必ずや、消費資料の生産増加を必要とするであらう。然るに、これらの道行による消費資料の生産増加は常にそれに幾倍するところの生産手段の生産増加を必要とする。極めて大まかに云へば、此増加量だけの價値を、生産手段の消耗率1/nを以て除したるだけの、云はゞそれにnを乘じたるだけの、生産手段の價値量が増加しなければならぬ。此點から云へば、無産者の勢力が漸次に増加することによりて、所得がまた漸次に高まると云ふことは、結局それだけ、擴張複生産の進行を容易ならしむるものであり、それだけ、資本主義の存續を助長するものである。少くも、經濟的なる視角のみから見る時には。

かくて、資本蓄積がどこまで進行し得るかと云ふことはたゞ二の事情に依存する。一は生産方法の變化である。消費資料の生産額が同一であるとしても、換言すれば同一なる消費資料の基礎の上に此變化に

二は消費數量の増加である。此増加に應じて、生産手段の存續年數nをこれに倍したるだけの生産手段が新に生産せられなければならぬ。而してこの二の事情のうち、何れが基礎的のものであるかと云ふならば、前者がそれであると答へねばならぬであらう。何となれば、消費資料の價値量に於ける増加はそれほどに大ではない。勞銀の増加はむしろ遲々たるものであるから、無産者の勢力増加による消費資料の増加と云ふものは、割合に小であつた。而して人口の増加は過去百年間に二倍したと見らるる國は殆どない。然るに拘はらず、生産手段の増加は二三倍どころではない。結局、生産手段の増加を必要ならしめたる根本は生産方法の變化にありと見なければなるまい。

私は玆に停りて再び、かつて吟味したる命題を吟味する。

河上博士によれば、「生産手段の生産額が増加すれば消費資料の生産額も亦た増加せざるべからず」（社會問題研究第七十册表紙の文句より）。これは二樣に解することが出來る。一は生産擴張の行はれたる前後の時期の單純複生産について。（靜態の比較について）。これは專ら消耗し補償せらるるところの生産手段の數量と消費資料との比較について云ふのである。これは勞働時間數が同一であれば、年々生産せらるる消費資料の影響には變化がない。然るに生産手段の補償的生産額は使用せ

しかも、消費資料の生産額は同一にして而も生産手段の生産額の増加することは正に河上博士の主張を否定するものでなくして何であらうか。

　他の事實は、事、擴張の進行、即ち動態に關するものである。此場合、生産手段の年々の消耗量と消費資料の數量との關係が問題となるのではない、同一の消費資料を生産するに要する生産手段が増加しなければならぬ（生産方法の變化のために）、此必要に應ずるために、消費資料の増加せざるに拘はらず、生産手段の生産額が増加しなければならぬ。此限りに於て生産手段の生産額が増加したるときには、それは何等消費資料の生産額の増加を伴ふことはない。これ、私が河上博士のかの主張を目して、生産方法の變化ある限り、誤れりと云ふ所以である。

　河上博士は此二の點のうち、前の點のみを取上げて自説、の論證に力められたが、その無効に終れる（と私は思ふ）ことは前述の如くである。而して此點に關する私の主張は、公理的に明白なることにして、之を否定するのは1+1=2を否定するの類である。若し、依然として之を認めずと云はるるならば1+1=2を認めざる人と數學上の議論を闘はし得ざるが如くに、これ以上、此問題に就て議論をつゞけ得られない。後の點について、河上博士は何等論及せらるるところがない。問題の所在をだに認められずと云ひ得る。此中心點を看過して資本蓄積を論ぜむとすること、抑もまた危いかな。

[illegible]其理由を詳述することは茲に之を避ける。要之て、私は何等[illegible]ツガンに[illegible]する意志を有するものではない。たゞ河上博士のツガンに對する批評については、それが何等の打撃をも與へてゐないことを認めざるを得ぬ。

　河上博士によれば、『もし勞働の生産力の發展を計算に入れるならば、マルクスの擴張再生産の表式に示すが如き、各種生産部門の間に於ける比例的關係は全く破れて仕まふ。』『各種生産部門の間に於ける比例的關係は、ツガンの表式において全く破壞されて仕まふべき筈である。しかるにも拘はらず、ツガンの示すところによれば、それらの比例關係は年々圓滑に維持されてゆくことになつてゐる。』『それはツガンが、二つのあり得べからざる事實を、表式のうちに假定してゐるからである。その一つは、生産せらるる生産手段の價値總量は年々増加するに反し、生産せらるる消費資料のそれは年々減少するといふ事實それ自身である。』『在り得べからざる第二の事實は、可變資本の絶對的減少である』（同上、二七頁、三一頁）。さてかゝる見方の成立しがたき事は上に述べたる所からして明白であると思ふ。生産手段の價値總量が年々増加するに反し、生産せらるる消費資料のそれは年々減少すると云ふ事實を以てあり得べからずと云はれるが、その十分なる論證は與へられてゐない、試みられたる論證の支持せられがたきことは、繰返してこれを述べた。ありうべからざる事實と云ふのはどこにでもあり得べき

事實でしかない。ありうべからざる第二の事實と云はるるものは、何等ツガン說に對する攻擊とはならぬ。なるほど可變資本の絕對額の減少はあり得ざる事實であらう。併しながら、ツガンは假に可變資本が減少してもなほ資本蓄積のどこまでも進行し得ることを述べたのに過ぎぬ、可變資本が增加するとすれば、その議論は（しばらくツガンの立場を許せば）强くこそなれ、弱くなるのではない。明日雨がふつても船は十時までにつくと云ふとき、明日雨はふらぬから船の十時までにつく道理はないと云ふのが、河上博士の論法である。可變資本を增加せしむる時ツガンの數式は不變資本の增加を盛ること愈〻容易である。

七

類似なる謬認はまた之をブハアリンに認めることができる。私は繰返して述べたるが如く、ツガンの學說の辯護者ではない。ツガンの立場からは生產手段の生產擴張がそれ自體のために行はれ得て、從ひて消費資料のそれとは獨立なる性質を有するものと見られる、少くも私はさう解釋してゐる。『資本家が萬一その蓄積欲から彼等自身の消費を節約せむと欲しても、此事には何等の障礙もない。此場合資本家の消費手段の生產は節約されて、社會的生產物の一段と大なる部分が生產の第二段の擴張に充てられる生產手段から成り立つやうに成る。』から云謬がある。ブハアリンは說いて次の如くに云ふ。『生產手段の大擴張は不可避的に、早晚市場にもたらされる消費手段の大增加を惹起するであらう。』『製鐵業に於て大規模の機械設備を建設したとする。石炭及び鐵の消費が恐ろしく增加する。問題は之に止まるであらうか。』『機械工業は益〻多量の機械を作出する。之は何を意味するか。これは即ち、例へば、纖維工業に於て勞働者數は減じたりとは云へ、遙により多量の木綿及びその他の原料が加工せられ、從ひて非常に多量の完成生產物即ち直接消費の對象物亞麻布が作出せられると云ふ事である。斯樣な著しい商品量の增加には商品の價値の增加（必ずしも正比例的ではないが）が隨伴してゐる。蓋し、完成消費手段の價値は啻に是等消費手段を作出する產業部門に於て使用された勞働に由つて現はされるのみならず、自動的に夫等消費手段に移される所の原料、機械等の價値に由つても現はされるからである』（友岡學士譯『帝國主義と資本の蓄積』一三四―一三五頁）。まさしく、此見方は、生產手段の生產增加が必然的に消費資料の生產增加を伴ふと見るものである。併しながら、此主張そのものは何等の必然性を有せざるものである。

生產方法に變化なく、從ひて生產力の增加なき場合ならば勿論、生產手段の生產增加は必然に（早晚）消費資料の生產增加を伴ふものである。併しながら、生產力の增加から切りはなされたる資本主義生

論に[illegible]生産額を増加せしめる、増減はすべて價値量について云ふ。[illegible]從つて資本主義生産そのものについて云ふならば、生産手段の生産増加に消費資料の生産増加を伴はずして行はれ得る。ある場合に於ては消費資料の生産額が減少してもなほ生産手段の生産増加が行はれうべき事は、十分に考へ得られる。たゞそれがどこまで實現せられるかは一に、生産方法の變化の內容、卽ち單に技術の變更の內容によりて決定せられる事柄である。從ひて、生産手段の擴張は不可避的に消費手段の增加をひき起すと云ふ主張は根本から誤つてゐる。此誤れる前提を以つてツガンの學說を破壞しようとしても、ツガンの學說はその際からくづれるものではない。なるほど、ツガンの學說は誤謬にみちてゐる、利刄僅にふるれば直に倒れさうな弱武者ではある、併しながら、ブハアリンが振りかざしてゐる銀紙の竹光によりて仆れるものではない。

なるほど、ツガンが生産手段の生産と消費資料の生産との間に存する所の必然にして不可離なる聯絡を無視したる點は明白の誤謬である。此二者の聯絡を高調する點に於てブハアリンは正しい。併しながら、その認め得たる聯絡はまことの聯絡ではない。生産力の增加なきところの資本主義生産が地上のどこにあるか。此增加の存せざるところにのみ存するところの聯絡を以て、資本主義生産そのものに於ける生産と消費との聯絡であるとする。それは眞空に於ける物體落下の速度を以て地上に於ける落下の速度であるとするに等しい。此二者のま[illegible]人口は最近一世紀[illegible]したる增加もない少くもこれをその價値の上から見る時には。從つて消費資料の生産はその價値量に於て二倍をこえてゐないであらう。然るに拘はらず、生産手段ことに固定資本の存在量は幾十倍に達してゐる。此增加は何ものを物語るか。若し、ブハアリンの信ずるが如く、『生産手段の大擴張は不可避的に早晚市場にもたらされる消費手段の大增加を惹起する』ものならば、今や資本主義諸國は消費財の洪水になやみつゝあるはずである。否、資本主義そのものは生産過剩の爲にとくに沒落してゐるはずである。而も、事實は如何。消費資料の生産缺乏はなほ無産者をして生活難になかしめつゝある。

序に、ブハアリンの擴張複生産の數式に就いて一二の批評を加へたい。まづ此數式そのものの假定について。此場合、不變資本は一回轉の過程に於て全然消耗し盡されると假定するか、乃至は同じ事であるが、cは簡單に不變資本の消耗分に照應すると云ふ條件を設けるか、その何れかを必要とすることになつてゐる。此條件の下に立つ以上、其數式は固定資本が年々生産せられまた殘存してゆく地上の資本主義生産の姿を現はすものではないと云はなければならぬ。このことは前にしばしば述べたるところである。以下、姑く此點を看過して、與へられたる假定の下に論を進めよう。

今第一部門（生産手段の生産部門）に於ける不變資本をc、可變資本を

v_1、餘剩價値をm_1、此m_1のうち資本家の個人的消費に役立つ部分をa_1、資本化さるる部分をb_1とする。第二部門（消費資料の生産部門）についても、これらに相應じて、c_2 v_2 m_2 及び a_2 b_2 等の符號を定める。更に進みて、第一部門に於て蓄積せらるる部分b_1が不變資本として利用せらるる部分b_{1c}及び可變資本として利用せらるる部分b_{1v}より成る。第二部門についても亦蓄積せらるる部分がb_{2c} b_{2v}より成る。

$b_1 = b_{1c} + b_{1v}$；$b_2 = b_{2c} + b_{2v}$ さうすれば、各部門の生産額は次の如くである。

$$\text{I} \quad \boxed{c_1 + v_1 + a_1} + b_{1c} + b_{1v}$$
$$\text{II} \quad \boxed{c_2 + v_2 + a_2} + b_{2c} + b_{2v}$$

共通なる枠を以て圍みたる部分には、單純複生産の問題が含まれてゐる。而して、そこには單純複生産一般に於けるやうに、$c_2 = v_1 + a_1$と云ふ關係が存立しなければならぬ。擴張複生産の差支なく進行し得るためには、この圍ひの外の數量の間に一定の關係の存することを必要とする。

b_{1c} b_{1v}について見るに、b_{1c}は第一部門内に殘留するがb_{1v}は第二部門の生産物と交換せられねばならぬ。b_{2c} b_{2v}について見るにb_{2v}は第二部門内に殘留するがb_{2c}は第一部門の生産物と交換せられねばならぬ。かくてb_{1v}とb_{2c}と交換せらるるを要し、それらは價値に於て相等しきはずである。從ひて擴張複生産の順調に營まれゆく爲には$c_2 = v_1 + a_1$；$b_{2c} = b_{1v}$の二の條件が具はることを要し、從ひて次の條件がみたされることを要する。

$$v_1 + a_1 + b_{1v} = c_2 + b_{2c}$$

『換言すれば、第一部門の新可變資本と同じ部門の剩餘價値中の不生産的に消費せらるる部分との和は、第二部門の新不變資本と相等しくあらねばならない』（同上、一一頁）。これだけの條件の具はるところでは、『生産の増大と相並んで斯の生産の市場も増大する。卽ち生産手段の市場も膨脹し消費需要も増進する。換言すれば此點に於て一方には社會的總生産の種々なる部分間の平衡の可能性が與へられ、他方には生産と消費との平衡の可能性が與へられてゐるのである』（同上、一四頁）。さて、如上の二の條件（A）$c_2 = v_1 + a_1$；（B）$b_{2c} = b_{1v}$にしてみたされると、蓄積は圓滑に進行しうるや。私はなほ次の條件がその外に數へられねばならぬと思ふ、（C）$c_1 : v_1 = b_{1c} : b_{1v}$；（D）$c_2 : v_2 = b_{2c} : b_{2v}$。但し此（C）（D）の二條件は、不變資本が一回轉每に消費し盡されると見ての事（例へばすべてが原料であるとみてのこと）である。若し、固定資本があり、その消耗部分のみが數式の表面に出て來ると云ふことになれば、（C）（D）は全く書きかへねばならぬ。從ひて、此二のことを同一のやうに取扱へるブハアリンの見方は採るべからざるものである。如何やうに書きかへらるべきかについては、前に說明して置いたつもりである。

さて今、冷靜に、ブハアリンがかかる數式によつて何を主張してゐるかを考へて見よう。彼の認めるところによれば、これはまさに、集積

の[illegible]しうる[illegible]ここには[illegible]蓄積[illegible]するもの[illegible]

それは一の[illegible]を設さんとするもの。蓄積 [illegible] 以外の何物と

もなへられぬ。なるほど蓄積の行はるるためには(A)[illegible]

[illegible]のこの條件のみたさるゝことを要す、誠に然り。明朝東京に着くためには今夜の急行列車にのりこむことを要す、誠に然り。問題はその人が急行列車に乘り込みうるか否かにある。問題は與へられたる事情に於ける資本主義生産がかゝる二の條件(實は(A)(B)以外に(C)(D)の條件をも)をみたしうるか否かにある。而も此點についてはブハアリンは何等の顧慮を拂はず、說明を與へない。而して云ふ、この條件の存するところ、生産の增大と相ならびて生産の市場も擴大する、消費需要も增進すると。然り。今夜の急行列車にのりこみさへすれば、明日は三越に行かれ帝劇が見られる。たゞそれだけの事ではないか。

吟味を要する點は別にある。v_1とm_1との割合如何。m_1がa_1とb_1とに振り分られるがこのa_1とb_1との割合如何。b_{1c}とb_{1v}との割合如何。同樣にして、v_2とm_2との割合、a_2とb_2との割合、b_{2c}とb_{2v}との割合、これらは如何。これらのものはすべて、獨立なる變數である。その獨立に變化するところに於て、果して、(A)(B)の二條件が存立しうるや如何。若し代數式を以て算術式に代へようとするならば、此點を明にすべき代數式を提示すべきである。マルクス、ロオザ乃至ツガン、バウアアの如き算術式は、よしそれぞれに訂正を要すべき難點を藏するにせよ、こ

[illegible]

[illegible]二つ實現されざる[illegible]について[illegible]

へてゐる。ブハアリンの數式は此點について何物をも與へてゐない。

八

生産手段の數量と消費資料との關係に關する河上博士の根本見解は、ひいて、博士の資本主義の行詰りに關する見方の理論的組立をしてあまりに脆弱なるものたらしめてゐる。

博士によれば、『資本論第二卷の表式は、全然、勞働の生産力の發展を抽象してゐる。して見れば、ローザがこれを以て資本家的現實の本當な理論的反映でも、またマルクス說の眞實の歸結でもないと言つてゐるのは、當を得てゐると言はなければならぬ。』『吾々がもし勞働の生産力の發展を計算に入れるならば、先きに掲げた擴張複生産の表式に表すが如き、各種生産部門の間における比例的關係は、全く破れて仕まふ。』然らば、その理由として何があげられてゐるか、引つゞいて二の事項が述べられてゐる(社會問題研究第六十九册一八頁)。

(一)『勞働の生産力の發展を計算に入れるならば、剩餘價値の生産は可變資本に對する相對的關係において、益々增大しなければならぬものであり、これを裏から言へば、可變資本(卽ち勞働者階級の所得に歸する勞銀額)は、剩餘價値に對する相對的關係において、益々減少しなければならぬのである。

(二)『勞働の生産力の發展を計算に入れるならば、可變資本は、不變資本に對する相對的關係において益々減少しなければならぬ』

一體マルクス擴張複生産の數式は $c:v$＝不變 $v:m$＝不變 と云ふ二の條件をまちてはじめて成立してゐる。然るに、事實に於て此二の條件ともに破られるのであるから、かゝる數式は成立せず、云はば比例關係を保ちつゝ擴張複生産が進行することはあり得ない。から云ふのが河上博士の見方である。『かくて要するに、吾々が勞働の生産力の増加を許すかぎり、それが不變であるといふ條件のもとに始めて維持されてゐるところの、マルクスの表式における各種生産部門の比例的關係は、全く破れて仕まふことになる。けだし、社會の總生産物は $c+v+m$（生産のため消費されたる不變資本と可變資本との和に加ふるに、生産されたる剩餘價値を以てしたるもの）から成り立つてゐるが、もし勞働の生産力が増加するならば、それにつれてV卽ち可變資本に相當する部分のみが、相對的には益ゝ減少することとなり、かくて社會的生産は年々より擴張されたる規模において行はるゝに拘はらず、從つてまた生産せらるる消費資料の價値量は年々増加しゆくに拘はらず、社會成員の最大多數を占むる勞働者階級のこれら消費資料に對する需要は、年々相對的の減少を示すこととなるからである』『これによつて見れば、勞働の生産力の増進は、必然的に、マルクスの表式における生産兩部門の比例的關係を破ることになる。』『勞働者階級の消費不足が、

私はこれを二の點から批評したい。第一、數式に於ける數字の表面から。河上博士によればマルクスに於ける擴張複生産の數式に於ける比例關係は $\frac{v}{c}$ 及び $\frac{v}{m}$ の二の比の不變と云ふ條件の上に立つてゐるから、此條件がみたされなければ、此比例關係がやぶられてしまふ、從つて數式は蓄積の圓滑なる進行を示し得なくなる。私は思ふに、論は餘りに容易である。何故に此條件がみたされなければ、比例關係が破られるか、いづこにその數字の上の論證が與へられてゐるか。私は不幸にしてその影だにも見出し得ぬ。此河上博士の論法にして許されるならば、マルクスに於ける擴張複生産の數式は $\frac{v}{c}$ の不變と云ふ條件の上に立つ、故に此一つが破れても比例關係は維持せられぬはずである。然れども、たとへばバウアアの數式の如き、年々 $\frac{v}{c}$ の變化を許しながら、比例關係を維持し得らるることを示してゐる。これから見ても、河上博士の此點に於ける主張は何等の論據なき獨斷であることを知りうる。かの二の條件の存するところに比例關係が維持せられたのは確である、しかし此比例關係は直接にかの二の條件から導き出されてゐるのではない、さうである以上、此條件なくても、比例關係の維持は可能なるはずである。少くも不可能なりと云ふ論證は出來ぬ。若し博士にして必要とせらるるならば、かの二の條件のやぶらる

[illegible]は生産が需要せらるゝから、消費資料の生産は年々増加する、從つて[illegible]消費のための需要に相對的に減少する、故に消費不足が生じ、比例關係は維持せられずと云ふのである。この議論には二の誤謬がある。（a）生産が擴張せらるゝ時には消費資料の價値量また増加すると云ふことこれが全論の論證の樞軸をなしてゐるが、その誤れることは幾たびか述べたるところである、こゝにはくりかへさず。（b）消費資料は増加するのに、これに對する需要は相對的に減少する。故に消費不足があると云ふ議論には混同がある。然り、なるほど、需要は相對的に減少してゐる。併しながら、河上博士によりて説明せられ前提とせられたる相對的減少は需要が不變資本との比較に於て、又餘剩價値との比較に於て減少することに外ならぬ。而もこの $\frac{v}{c}$ 及び $\frac{v}{m}$ の減少が如何にして直に消費不足を意味するか。需要が消費財生産額に比較して相對的に減少するならば、消費不足があらう。のべられたる相對的減少は、不變資本や餘剩價値に比較してのことである。今、消費資料をあらはすにkを以てしよう。消費不足を直接に意味するのは $\frac{v}{k}$ にして $\frac{v}{c}$ 又は $\frac{v}{m}$ ではないのである、而して、kはc又はmと平行して増減するものではないこと幾たびか説明した。mの増加cの増加に拘はらずkは同一であることがあくまで可能である。さうすれば $\frac{v}{c}$ $\frac{v}{m}$ が増加しても $\frac{v}{k}$ が増加すると云ひ得べき筈はない。需要の相對的減少の一語の中にこれらを混同するのは、粗雜に非ざれば胡魔化し[illegible]此の如く、[illegible]を缺いてゐる。結論としては如何にも人をひきつける[illegible]しかし理論の論據をなさずと極言する人ありとも、博士は何を以て答へられるか。

九

筆をおくべき時は近づいた。私は以上述べたるところを以て、資本蓄積に關する河上博士の示教に答へ、併せて、博士の主張そのものについての批評を盡したつもりである。終りに、私の批評にして河上博士の示教を得ざりし部分について一言したい。

私の前の論文に於て、河上博士に教を請ひたる點は三である。それは前に述べたる博士の論據（A）（B）（C）の各に關してゐる。而しその教示を得て茲に答辯を述べたるは（A）のみである。（B）（C）については教へらるるところがない。（C）は特に重要なるものと信ずるが故に、重ねて述べたいと思ふ。

問題はマルクスの擴張複生産の數式に於ける基本年度の消費資料中次年度の勞働者の消費に充てらるべき一五〇單位の賣行に關する。第二部門の資本家は之を賣らざれば擴張を實現し得ず、而も、基本年度末に勞働者が次年度の消費資料を買ふはずがない。此賣殘りが抑擴張複生産を出發點から不可能ならしめる。かう云ふのが河上博士の主張であつた。私はこれに對して、固定資本更新用の積立金の利用により、

信用の利用により、その他二の方法によりて此困難は除かれ得ない、故に擴張複生產の絕對不可能論は誤つてゐる、と述べた。博士はこれに對して何等の反駁を與へられてゐない。たゞ、擴張複生產が生產力の發展なくとも出發點から不可能である、と云ふ見解そのものは全然、拋棄せられてゐる。私のさきに加へたる批評も承認せられたるものと見て差支なきや、その敎示を得たい。

序ながら、此點について加へられたる猪俣津南雄氏の批評について一言の答辯をしてをきたい。その要點は次の文句に盡きる。『が、此の「多くの人々によりて直に考へ附かるる」であらう所の、信用や商業資本こそは、正にその理由(?)からしてマルクスによつて暫くのあひだ度外視されてゐるものであつた。ルールに違つたゲームは、無效の宣告を受けねばならぬ。只だそれだけではない。その種の第二次的派生的な現象を、氣の附くまゝに譯もなく取入れることは、資本主義社會を其の矛盾相及び調和相に於て、本來的本質的に究める所以でなく、從て、或は在るかも知れぬ剩餘價値實現上の眞困難を見逃してしまう所以である』(『改造』大正十五年一月號八二頁)。私は之に對して答へよう。私は何も資本論第二卷と同一の前提に立つて議論をしてゐるのではない、かゝる前提の下に議論をすると云ふ約束をした覺えはない。信用も商業資本も資本主義そのものの本質から流れ出る手段ではないか、之を取りいるることが資本主義社會を本質的に究める所以でないものならば、先づ資本論第三卷はやきすてらるべきである。猪俣氏はかくて資本論第三卷をやいて然る後に私への批評を下さるべきである。ルールに違つたゲームはなるほど無効の宣告を受くべきであらう。しかしながら、私はルールの下にゲームをしてゐるのではない、一切のルールを撤して、眞劍の、生命のやり取りの勝負をしてゐるのである。生死はあるが無効はない。

猪俣氏は私の主張に對してこの誤れる非難を加ふる前に、まづ自らその見解の中の混亂を取除かるべきではなかつたか。固定資本更新用の積立金を追加せらるる不變資本の代價の前拂に利用しうべき可能の存すること(私の場合に於てはこの積立金を以て、追加せらるる消費財の代價の前拂に利用しうべき可能の存すること)は私といへども決して否定しない。併しながら、これが機構についての猪俣氏の說明は許しがたき混亂から成立してゐる。氏によれば、『いま表式の假定の範圍内で言へば、第一部門の不變資本總額四〇〇〇單位の假りに半額を固定資本と見、更にその半額だけの固定資本分が年々實際に更新されると見ても、一〇〇〇單位の價値に貨幣態で積立てられてゐることになる。

る。ロオザが「たゞ在來の資本の更新に間に合ふ丈けであつて」と言ふのは、二〇〇〇單位の全部が、實際に更新さるべき固定資本の價値を表はすと見る誤謬を犯した爲めと見るより外はない』（『改造』大正十五年一月號）。この中に、許しがたき混亂がある。猪俣氏は不變資本總額四〇〇〇單位中の半額、即ち二〇〇〇單位を固定資本であると假定される。而も年々に更新せらるる部分はそのまた半額一〇〇〇單位であると云ふことであるが、これは驚くべき假定である。年々二〇〇〇單位づゝの消耗部分が生産せられて、僅に一〇〇〇單位のみが更新せられるとすれば、から云ふ結果になるはずである。一方に於ては、年々一〇〇〇單位づゝ從來から存する固定資本が減少することになる。その存續年限をnとすれば、2n年間までにすべての固定資本は全滅してしまふはずである。擴張生産どころの騒ぎではない、生産の廢止そのものが起らねばならぬ。他方に於ては、年々賣れ行かぬ固定資本が一〇〇〇單位づゝ資本家の倉庫に山積する。2n年の終りには工場に固定資本の影がたえてそれだけのものが倉庫の中に晝寝をしてゐることになるはずである。これと關聯したることであるが、『ロオザが「たゞ在來の資本の更新に間に合ふ丈けであつて」と言ふのは、二〇〇〇單位の全部が、實際に更新さるべき固定資本の價値を表はすと見る誤謬を犯』せるものであると云ふ氏の見解はその中に二の誤謬を含む。其一。二〇〇〇單位の全部が更新されずと云ふこと。これが誤りであることは上に述べたる所によりて明である。實際に更新されざるものを買入れる資本家はない。[illegible]害なく円滑に運ぶわけにない、[illegible]がある。其二。二〇〇〇單位の全部が更新せられるならば固定資本の[illegible]用の積立金に固定資本の更新に間に合ふ丈けのものであるとする[illegible]根本に是認せられてゐる。しかしながら[illegible]ロオザもそうであるが、が誤つてゐる。複生産が円滑に進行するためには、生産せられたる固定資本が賣殘らぬことを要し、その爲には年々同一額の更新があることを要する（單純複生産である限り――從ひて擴張複生産中の單純複生産的部分についても）。このことが可能である爲には、固定資本の存續年數をnとし固定資本の年々の補償部分をcとすれば、年々の固定資本生産額を買入るる部分のほか、なほ$\frac{(n-1)}{2}$だけの更新用積立金があるはずである（このことに説明が入用なれば、いつにても示し得るが）。今の場合について云へば假に此存續年數を十年として、$n=10$ ∴ $c=2000$ ∴ $\frac{c(n-1)}{2}=\frac{2000(10-1)}{2}=9000$。即ち九〇〇〇單位の價値だけの更新用積立金があるはずである。尤もこれ以外の可能なる場合の全然ありやなしやは今十分に考へぬいてゐないが少くもこれが最も蓋然的なる場合であることは論證し得る。かくて、二〇〇〇單位の全部が更新せられると此積立金は更新に間に合ふだけであると云ふ見解は甚だしく粗雜なるものである。

十

終りに、私は私見の骨子を述べて結論に代へる。

生產手段の數量（存在額、從ひて年々消耗しゆくものの基本）と年々の生產額とは勿論明に區別せらるべきである。而して生產手段の數量と、年々の消費資料の生產額との關係を見るに、一定の面積の基礎の上に積重ねられたるピラミッドの如きものである。堆積せられたる石塊は生產手段にあたる。生產方法が變化し、所謂勞働の生產力が發展するに及べば、同一の基礎の上に立つところのピラミッドは愈その高さを加へる。此高さを加ふるためには、石塊の產出、即ち生產手段の生產は愈增加しなければならぬ。生產方法がどこまでも進行するならば、此石塊の高さは愈加はりゆく、生產手段の生產はやはり增加をつゞけるであらう。たゞ、どこまで增加するかは生產力の發展そのもの從ひて實は技術の變更そのものが決定する。即ちピラミッドの高まる速さ、究極の高さを決定するものは一に技術の狀態にある。かくて生產手段の增加は必然的に消費手段の增加を來すと云ふ見方は生產手段の存在額について見るも誤りであると共に、その生產額について見るもまた誤りである。生產方法が變化をつゞける限り、生產手段の生產額は消費資料の增加を伴ふことなくしてもこのピラミッドを高めるために增加しなければならぬ。生產方法が變化したるのちには（生產手段が用意せられたるのちには）、以前よりも多量の生產手段を以て同一の消費資料を生產するに過ぎぬ。カウツキイ、ブハアリン、河上博士の見解は此點に關して誤つてゐる。

さりとて、同一の消費資料の基礎の上に（消費資料の需要同一であるのに）、どこまでも生產手段をつみ重ねらると見る見解も誤つてゐる。進みて消費基礎を小くしても更に多くの生產手段をつみうると見るのは甚だしく誤つてゐる。ツガンは此誤れる見解の代表者である。生產力の發展、即ち技術の狀態そのものが此基礎の大さとつみ上げらるるピラミッドの高さとの關係を支配する。技術が許さざるに至れば資本の蓄積は行きつまらざるを得ぬ（人口の增加と勢力關係の作用を別にして考へる）。たゞこれがいつ、又は果して生ずるか否かは全然別の方面より考察せらるべきである。かくて、私見によれば、資本蓄積に於ける一切の命令者は生產力の發展そのものである。此發展そのことが消費の增加なきところに、益々資本蓄積を可能ならしめる。たゞ此技術の要求する以上に生產手段が堆積せらるる場合には、資本蓄積の一時的障碍を生じよう。これは景氣の變動に屬する事項である。所謂一時的恐慌に外ならぬ。これについては私見を詳述する場合を別に有してゐる。

私の見る所を以てすれば、今までの有名なる蓄積理論研究者はすべて事態の眞相を洞察してゐない。其所說は盡くすべて誤つてゐる。幸に識者の教示によりて此自信を打ちこわすことを得ば、深く自ら幸とするところである（一九二八、一一、一三、留守居のあさ九時。三日月村の村居にて）。

時評

トーマ氏と『右翼結成』

山川均

アルベール・トーマ氏は、『國際勞働界の大立物』として通つてゐる。その如くトーマ氏は、國際勞働階級の『裏切り者』として、即ち國際勞働階級運動のトーマスではなくて、、としても通つてゐる。

トーマ氏は勞働階級の『友』だらうか？　それとも勞働階級の『敵』だらうか？　國際勞働運動の少なくとも一部分と、極左的反動主義者を除いての各國のブルジョア階級とは、トーマ氏を勞働階級の『友』だと云つてゐる。これに反して、國際勞働運動の他の一部分にとつては、アルベール・トーマとは、階級的裏切り者の別名以外の何ものをも意味しない。そこでトーマ氏を勞働者の敵とする主張には、たゞ勞働階級の票がある。しかるにトーマ氏を勞働者の友とする主張には、勞働階級の一票と資本家階級の一票とがある。いまトーマ氏の支配する國際勞働會議の票決法に從へば、疑ひもなく吾がトーマ氏は、勞働階級の親友なのである。けれどもこれによつてトーマ氏の本質が、決定的に決定せられたとは云はれない。それは國際勞働會議のあらゆる決議が、何ら決定的な決議でないやうに！

近刊の一雜誌の記事を讀むと、トーマ氏は、衷心から勞働階級の福祉を念じてゐる人だといふことである『朝早く、國際勞働事務局へと歩を運ぶときは、世界の勞働階級の爲めに、今日一日を空費なく勞働し得るやうに念じ、夕、家路に就くときは、果して本日自分の爲したる努力は世界の勞働者の向上解放の爲めに有意義なりしや否やを反省せざる日はない。』これがアルベール・トーマ氏自らの述懐であつた。

このアルベール・トーマ氏が、朝早く國際勞働局に足を運ぶとき、今日一日を、世界の資本家階級のために空費なく勞働し得るやうにと念じ、夕、家路を辿るときには、そのポケットを叩いて見て、本日一

日の勢力によつて、世界の勞働階級の利害を賣つて何フラン何サンチームの賣上げがあつたかを勘定しない日はない——から私に話して聞かせる人があつたとしても、私は固よりこの話を信じない。私はむしろ、トーマ氏自らの述懷の方に、よし多少の誇張と衒示とを差引いても尚ほ信じ易いものがあると云ふことに躊躇せぬだらう。しかしトーマ氏の心術がどちらにあるかと云ふことは、實はそれほど重要な問題ではない。眞實に重要な問題は、今日各國の勞働階級運動と國際勞働階級運動との間に、現に勞働階級の階級的利害に裏切るが如き方向への勢力と動きがあるといふことである。そしてトーマ氏が、『國際勞働界の大立物』として、たまたまこの傾向を象徴する物と見做されてゐることにある。そこで重要なものはトーマ氏ではなくて、トーマ氏が——好んでか、若しくはその意に反してか——代表せしめられてゐるところのこの大きな傾向なのである。

反動主義の高潮にある吾が日本においてさへも、トーマ氏が資本家階級一般、ことにその指導者と、から、盛んな歡迎と歡待とを受けるにしても、これは何らの不思議もないように、吾々には何らの異存もない。吾が國のかような社會的情勢が、勞働者運動そのもの丶內部にも、これに照應した形勢を釀してゐることも固より怪しむに足りないものと結び着けられてゐることである。

今日唱道せられてゐる『右翼結成』とは、無產階級運動の內部に、その一翼としての右翼を形成するといふだけに止まらない。それは組合運動の方面でも政黨運動の方面でも、右翼主義者が組織の上で分立すること——即ち、右翼主義者のみの別個の組合と政黨とを組織するといふことなのである。この事自體の是非善惡は暫らくおき、かような意味での日本の無產者運動における『右翼結成』が、アルベール・トーマ氏との間に、一たいどういふ因緣があり得るのだらうか? トーマ氏の來朝を『期して』右翼結成が實現される! 何故に、『期して』行はれるのだらうか? トーマ氏が、日本の右翼的勢力の組織化を手土產にでもして歸らうといふのだらうか! それならば、トーマ氏の來朝を『期して』この手土產の藁つとを、取り急いで用意することにも、初めて充分な因緣がある。しかしこの場合には、吾々はトーマ氏を、國際勞働局の局長としてよりも、第二インタナショナルのオーガナイザーとして來朝したものと考へることが、一層至當であらうと思ふ。

昨朝の新聞によつて報導せられたトーマ氏のステートメントを讀むとトーマ氏は、國際聯盟の一機關、國際勞働局の局長といふ資格において來朝せられたもの丶ようである。しかしトーマ氏が、同時に第二

[illegible]第二インタナショナルてさへもなく、この要素を少しも不思合にさせん[illegible]ものに要質してゐる。そこでトーマ氏が、國際聯盟の一役員、或第二インタナショナルのオーガナイザーの資格で來朝したからと云つて、敢て怪しむには當らない。

戰前においても、第二インタナショナルは、主として先進資本主義國、從つて歐洲のインタナショナルたる性質を帶びてゐた。第一インタナショナルの崩壞の後は、各國の勞働階級運動は、おの〳〵その國民線に沿うて發達した。そして勞働階級の強大な組織の發達したのは勢ひ先進資本主義國であつた。第二インタナショナルにも、歐洲以外の後進國の勞働階級運動が代表せられてゐたことは事實であるが、決して重要な勢力とはなつてゐなかつた。戰後に復活された第二インタナショナルも、大體において、この性質をそのまゝ復活した。全世界的に對立した二つのインタナショナルを比較してみると、主として歐洲の比較的古るい資本主義國の範圍では、第二インタナショナルは第三インタナショナルに對して常に數量上の優勢を保つてゐた、これに反して第三インタナショナルの顯著な特徴は、後進國と被搾取國との勞働階級を、有力に代表してゐることであつた。これらの後進國においては、謂ゆる勞働階級中の貴族層を發達せしめて居らず、また強大な貴族層を發達せしめる條件に乏しい。

これは又、第二インタナショナルがこれらの國々を閑却した理由で[illegible]際勞働運動におけるこの要素の重要を、急速に増大した[illegible]取國の無産大衆は、、、、、、、のうちに、特殊な意義を持つて來た。かような情勢は、たとへば英國のような老大國における資本主義の凋落と相俟つて、國際勞働運動の重心點に大なる變化を起こし、かつこの變化は今なほ進行しつゝある。最近、第二インタナショナルが、歐洲外のこれらの後進國と植民地半植民地國に意味を向けるに至つたばかりでなく、一種の焦慮を示すにいたつたのは、その爲めであつた。最近の大會においても、特に東洋諸國に對する勢力の擴張が討議され、これらの諸國における國際聯盟と國際勞働局の機關を觸角として、積極的な活動の行はれてゐることは、何人も知るところである。現に吾が國の勞働運動界でも、近頃、『黄色い煙を出す石炭で動く』といふ通用語をさへも生じてゐる。

わが勞働運動界に、この石炭で動いてゐる機關車があるか無いかは、私の知るところでない。けれどもアルベール・トーマ氏が、第二インタナショナルのオーガナイザーとして來朝せられたとするならば少なくとも、それは極めて時機を得てゐたといふことを承認しなければならぬ。トーマ氏は、今度の來朝によつて、多年の宿望の達せられたことを喜ぶと語つてゐる。トーマ氏にこの宿望を遂げしめる絶好の機會を與へたものは、反動主義の高潮、資本の攻勢に對する勞働階級の

全線的な敗退と組合運動の崩壊狀態、これに照應して生長した右實主義、右實の結成を組織化するために最も便利な戰線の分裂狀態にほかならぬ。かような形勢には、固より社會的根據がある。けれども一切の事柄を、最後の分析における謂ゆる社會的根據の直接の結果とし、階級の鬪爭が國際的になるように、階級の裏切りも國際的になる。勞働階級の運動は、左側を通行しても右側を通行しても、やがては國際的な運動となることを阻止することはできぬ。かくて東洋諸國においても、兩インタナショナルの勢力は、第二インタナショナルの一歩進出によつて、益々正面對峙をするにちがひない。けれども一アルベール・トーマを『裏切り者』と宣言することによつて、トーマ氏に象徴せられた世界的な潮流を阻止することを出來ぬ。大衆は何ものかを求めてゐる。もしトーマ氏の反對勢力が、トーマ氏を『裏切り者』と宣言しても、しかも實際の形勢に對する間違つた計算に基づいて、自己陶醉の幻影を追うて行動してゐるならば、大衆は却つて『裏切り者』を支持するだらう。トーマ氏の反對者に取つて必要なことは、宣告することではなくて、・・することである、罵ることではなくて、鬪うことである。

いま二度目の議會的經驗を踏まんとする。この十ヶ月足らずの間に、謂ゆる『政情』には大なる變化があつた。議會は依然として、十ヶ月前の議會と何らの性質の違はぬ議會であり、この議會に代表せられる壓倒的多數の勢力に、何ら本質の上の變動のなかつたことは、云ふまでもない。從つて無產政黨がこの議會において行動する原則の上には、固より何らの違ひもない筈である。

けれどもこの議會の少くとも皮相の情勢には變動があつた。政友會は二二〇名から二二一名となつた。民政黨は、政友會の獲得した以上のものを喪失した。臨時議會の經驗に味を占めた政黨屋は、議員相場の暴騰を見越して、絲目商品的な政黨を二つもこしらへた。いよ〱の取引きの問題までは、多少の波瀾の曲折のあることは無論であらうが、問題は、需要の弱味をもつた側が、どれだけせびられるかと云ふことであつて、落ち着きさきは想像するにかたくない。議會の形勢はほゞ定まつてゐる。この取引の駈け引が、いかに際どい形勢を惹き起こさうとも、それはもはや臨時議會の場合のように、無產政黨八名の投票によつて、在野ブルジョア分派と在朝ブルジョア分派との勝敗が決定しその交替が行はれるような性質のものでないことは儲かである。そこで無產政黨は、この議會では、最初の議會的經驗の場合よ

に自己を[illegible]な效果があつたとされれば、この[illegible]ものをして、その力を「ブルジョア議會主義的に」過大評價する幻想から醒める效果がある。

無産黨議員がキャスチング・ヴォートを失つた結果は、その議會行動の差し當つての具體的な效果を小さくする。しかし無産議員が議院に占める相對的の大いさが、その本來の大きさ——といふよりも寧ろ本來の小いさゝ——に復した時、無産黨議員は初めて、その鬪爭力の眞實の大きさを、最も明瞭な形で示すことができる。

たとへば臨時議會では、無産黨議員の八票の投票の利用の如何によつては、田中内閣の倒壞といふ一つの目的が達せられる若干の見込みがあつた。けれども云ふまでもなく、この八票は、單獨でかような效果を持つのではなくて、在野ブルジョア分派の投票と結合した場合にのみかような效果を生ずるのであつて、この八票にかゝる效果を持たしめるためには、勢ひブルジョア政黨との間の、複雜微妙な關係に入ることを必要とする。勿論、無産政黨が議會の一少數派に過ぎない間は、この議會においてもまた今後の議會においても、これと同樣な立場に置かれることは無論であつて、無産政黨は獨自の階級的立場に立ちつゝ、しかもブルジョア諸分派の間の勢力の權衡狀態を、自己の利益に利用しなければならぬ。それと同時に無産黨議員がキャスチング・ヴォートを失つた結果は、ブルジョア政黨との關係を單純にし、從つてまた、最も單純に、かつ最も容易に、獨自の立場に立つて[illegible]そこで現在の謂ゆる「[illegible]」に着眼[illegible]のない限りに、ここに議會における無産黨議員の行動は、極めて單純なものと思はれるし、また單純な行動をもつて足れりとする。けれども單純な行動の場合にはどその行動が嚴密に階級的立場に立つものであるか否かが、最も廣い大衆の眼に最も單純明白に映ずることを忘れてはならぬ。

この議會期における無産政黨の運動の成功と失敗とは、單純に三つの項目に歸着する。第一には各派議員の間に、どの程度まで一致の歩調が保たれるかといふことである。會期が短かく問題が單純だつた臨時議會に比して、この點では遙かに困難が增してゐる。第二には、無産大衆の政治的要求が、どれだけ直率明白な言葉をもつて、無産黨議員によつて、議會の壇上から表明せられるかといふことである。第三には、諸政黨の共同戰線によつて、どの程度まで、有力な議院外の運動が組織せられるかといふことである。

議會の會期を前にして、日勞黨外四政黨の合同協議が急速に進んでゐることは注目に値ひする。第一回協議の結果によれば、合同は既に半ば以上事實となつたかの觀がある。幸ひにこの合同が順調に成立したならば、戰線の分裂から統一への具體的な傾向として、これを慶賀しなければならぬ。けれどもそれと同時に、これは尙ほ單一政黨への一歩に過ぎぬ。ことにこの合同が、組織上においての分立の方向を代表してゐる社會民衆黨を包容するに至つてゐないことは、この合同が

最も合同の容易な部分に實現せられようとするものであつて、單一政黨への最も困難な鬪爭は、尙今後に殘されてゐることを語つてゐる。

さらにこの合同協議會が（或は今後その事があるかも知らぬが、少くとも第一回協議會においては）社會民衆黨と新黨準備會とに對して、たゞに合同協議への參加を勸誘しなかつたばかりでなく、これに對する何らの意思をも表明しなかつたことは、寧ろ不思議な現象と云はなければならぬ。社會民衆黨が、その內部的事情のために、直ちにこの勸誘に應じ得るか否かは別個の問題であつて、兎も角も、協議會が提議を試むることとは、吾々は寧ろ、當然自明のことゝして豫期したところであつた。新黨準備會はまだ政黨を組織して居らぬ。從つて、合同協議會に正式の參加を求めることは不可能であるが、すでに合法政黨組織の方針を決定してゐるのであるから、合法政黨の成立を條件として、何らかの形で提議を試みる餘地のあることも、吾々の期待したところであつた。ことに新黨準備會の內部には、最近再び、合法政黨の組織に反對する潮流が擡頭し、現に、×××以外の無產政黨の組織を無用とする見解さへも發表せられてゐる。從つて、新黨準備會の內部における合法政黨組織への傾向を支持する意味においても、かかる提議は、必要缺くべからざるものと思はれた。

の考慮から出發して行はれる時に、初めて階級的な立場に立つ合同といふことができ、それは謂ゆる中間派的な結成ではなくて、單一無產政黨への一步としての合同と云ふことができる。吾々はこの五黨の合同をもつて、單一政黨への眞實の一步たらしめよといふ希望をもつて、この合同政黨の首途にはなむけしなければならぬ。

市會の解散

八十名の議員中の三十餘名を失つた東京市會は、事實において、すでに消滅したものである。もちろんこれらの議員の刑法上の罪狀が決定した譯ではないが、市會が事實上、その機能を失つてゐることは明白であつて、この瞬間から（形式上の問題はしばらく措き）市政の權利は當然に市民の手に歸つたものである。

けれども市民の手に議員の解任權の無い限りは、人間の造つた木像が人間を支配するように、市民の造つた市會が、逆さまに市民を支配する。たゞに市會が市民を支配するばかりでなく、半數に近い議員を失つた市會の殘骸の前にすら、市民は何らの力をも有しない。そこで僅かに市民の爲し得ることは、市會解散の要求である。最近、市會の

[illegible]

[illegible]ては、ブルジョア在野政黨も在朝政黨も同じように緊縮の渦中に立ち、同じように民衆に訴へる權利を失つてゐる。これがその他の理由と共に、市會解散運動の起らぬ理由の一つに違ひない。市會の解散を要求する民衆運動を指導し得る權利は、たゞ無産政黨の手に存してゐる。

いふまでもなく、現行制度の下においては、單なる市會の解散によつて、市會を革新することなどは思ひもよらぬところであつて、市會解散運動は、當然に制度改善の要求を伴はなければならぬ。市民による市長の直接選擧、議員の解任權、一定の場合における市民の直接一般票決權の如きは當然この運動によつて要求せらるべきものである。八幡市に起つた選擧區問題の如きも、これに關聯せしめることができる。

僅かに八名の議員を有する無産政黨にとつては（たゞこれだけの理由でも）議會運動の主要部分は、院外的の運動でなければならぬ。無産政黨の組織すべき、議會に對する議會外の運動の目標となるものは少なくない。たとへば暴壓的法律の撤廢の如き、徹底普選の要求の如き、失業問題解決の要求、自作農創設に對立する小作權確立の要求、反動內閣打破の要求の如き、すべての無産政黨の一致し得る主要な項目と共に、市政問題もまた、この運動にとつて絕好の一題目たることを失はぬ。（十二月八日）。

プロレタリア美術展に就て

矢部友衛

一

今度、日本に於ける無産藝術團體である、勞農藝術家聯盟、大衆時代社、全日本無産者藝術聯盟の美術部及び造型美術家協會の四團體が共同して、無産者美術團體協議會をつくり、その一つの仕事として、十一月二十七日から十二月の七日まで十一日間、上野の府美術館に於て、日本に於ける最初の發生である、プロレタリア大美術展覽會を華々しく開催した。

そして此の展覽會の出現は、果然、一般社會層に、侵し難き深刻なセンセーションを捲き起した。

従つて、従來、かゝる運動に對して、兎角、無關心をよそほひつゝあつたところのブルジョア新聞にあつても、何等かの意味に於て筆を揃へて問題とすると同時に、各層からの、主にインテリゲンチアに、

そして、それ等觀覽者の一般は、そこに陳列された作品に對して、嘗ては展望でさへも許されなかつた、所謂、新興階級の魂に依つて滿されたところの、、、、、、、、、、、輝しき作品に面接して、驚異的な眼をみはり、讃辭を洩らさずには居られなかつた。

そしてその中の或者は、近代繪畫史上に重大な波紋を投げた、印象派以後のリアリズム運動の發芽といひ、また或者は遠く繪畫運動の黄金時代であつた、ルネッサンスの再來を暗示するものとして推賞の限りを盡した。

かくて、兎にも角にも、日本に於ける此の最初のプロレタリア美術展覽會が、種々なる意味に於て、未だ充分の力でなかつたと思はれつゝあつたにも拘はらず、かく豫想外の効果を以て、所謂ブルジョア美術の巣窟であるところの、帝展二科等に決定的對立を示しつゝあるもの

[illegible]産階級の政府的進出がそれに對應するところの、現下の一般情勢に、國際的には東洋の世界的市場問題に關して、第二次世界帝國主義戰爭の危機に直面し、國内的には、我が資本家地主の、、、、、は無産大衆に對する、、、、を遂行しつゝある。だがしかも猶、大衆の、、、、、、、、、、、、、、、そして大衆的基礎の上に現實的成長を示しつゝある。

玆に於て、ブルジョア社會の破綻とそして諸矛盾の激化は、我々美術家をしてすら階級的鬪爭に無關心では居らせない。

その最もよき具體的現はれとして、近く一兩年に無産派的美術團が相次いで組織され再組織されるに至つたことを見てもわかる。

從つてそこには、階級鬪爭の藝術的表象に關する社會學的又は政治的概念に於て、それを我々の繪畫上の發展に際し、根本的問題として、考究し糺明し、そして認識し、解決せねばならなかつた。

かゝる事に依つて生ずる繪畫上の傾向にあつては、必然的に概括的に二つの形態を辿るに至つた。

その一つはナップ美術部に於ける、當面の階級鬪爭の諸矛盾を廣汎にプロパガンダしないところの、所謂、狹義の意味に於けるアヂ・プロの武器の藝術と、一方が造型のとつた、社會學的概念に於ける小市民性からして、プロレタリアートの社會學的政治的イデオロギーに[illegible]ロギーの目標及び現況にプロパガンダするところに、その藝術的實踐を辯證法的にむすびつけたところの企圖から出發する仕事の傾向とである。

かゝる傾向内にあつて、從來これ等の自然發生的主張に於て相容れなかつた、孤立的な派生的組織形態が、各々の成長と進展に依り、お互の強力なる統一主體を要望し、それを鬪爭に依つて獲得せんとする機關として、一つのモメントとして傾向的に異なる諸團體のこの集合的展覽會開催の運びとはなつた。

從つて、そこには藝術内容の社會的内容としては、實に嶄新にして、歴史的意義を有するところの、而も他の作家に於て絶體に手の出し得ぬ問題に、勇敢にタッチしてゐる。其點に於てのみ見るもいかに今度の展覽會が價値多くあつたかゞ解るだらう。

かくて、此の展覽會を中心として、我々は我々の繪畫上の戰線に對立する帝展二科其他の、究極に達しつゝあるブルジョア末期藝術に對して、我々の強力なる追撃を成したと同時に、新興大衆生活の、日常生活に、、、、、、、、、、、、意義深き展覽會であつた。そして又一方に於ては、美術史的進化の強大なるモニユメンタルな美術運動の主體確立に重大なる意義を示す性質のものであつた。

そして前にも述べた樣に、此の展覽會の作品に於て、より高度な見

地から見るならば、全體を通じて、美學的藝術的內容に於て、又形式的モメントから及びその內容と形式の統一上に、未成熟の故に若干の矛盾が漂つてゐる事は極めて潰憾であるが、だがしかし、當面の社會的客觀的狀勢から云へば、それは寧ろ妥當と認めないわけには行かないであらう。そして我々は此の事に依つて決して踏み止まるものではない。そして現在に於けるところの、それ等未成熟な雜多なリアリズム運動から、より總合的プロレタリア美術運動の統一へとます〳〵勇敢な實踐を示すであらう。

二

このプロレタリア美術展覽會に關して、直接的な政治的社會的問題として一寸問題になり、二三の新聞紙上で一般に注目を喚起したのは、府美術館にからまる此の展覽會の會場問題であらう。くだらぬ誤解と逆宣傳に對抗するために一寸事實の報告をしておく事にしやう。

會場問題に關するいきさつは、府美術館に造型美術家協會から、同一名稱と主催に依つて申込まれた事に依つて承諾されてゐたのであつたが、我々の協會運動の狀勢の變化と共に、前記の協議會が成立したので、プロレタリア美術展がそれを繼承する事になつたのである。

つかぬ表看板が掲げられたわけである。讀賣紙上に依る、警視廳から府への抗議はまだ眞實の程は判然しないが、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。ところで問題は美術館と警視廳との關係であるが、警視廳は府に對し、何故、會場を貸したかといふ抗議をしたとの事であるが、此の問題は實に奇怪な問題である。美術館は、規約に依れば府知事が館長で、その指令と統制の下にあるとはいへ、實際は我が美術界に於る自治組織になつてゐる事は事明の理である。從つて美術館の評議委員會が、總て、特に會場問題は決定權を掌握してゐる。玆に於ては、これ等の評議員諸君の不斷の信條の如く美術以外不可侵の城廓であつて、それ自體警視廳の容喙すべき限りではない。

若しも今回警視廳が府に對してプロレタリア美術展なるが故に會場問題で差別待遇を强要するならば、全く、驚くべき社會的問題であり、美術界全般の重大問題である。私は今のところ評議員會が警視廳の、、によつて、その美術的權威の誇りの下に確立してゐる自治組織を解體する程、、、ではないと信じてゐる。若し萬一評議員會が警視廳の指令で支配されるといふ樣な場合があらば美術的權威の名にかけて評議員會のみならず、我が美術界全般の大恥辱である。かゝる場合

政治時評

地租・營業收益稅の委讓問題

高橋龜吉

一

政友會年來の約束たる地租及び營業稅の地方委讓案は、いよ〳〵具體的成案を得て近く、新議會に提出せらるゝ筈である。細かな點に於ては、尚ほ、今後多少の變更あるやも知れないであらうが、大體に、案の骨子は決定したものと見てよいであらう。卽ち、新聞紙の報ずるところを綜合せば、謂ふ所の地租及び營業收益稅の地方委讓案の概樣は次の如くである。

（A）地方委讓財源及委讓客體其他

(1) 地租。市町村に委讓し、府縣は之に分賦（附加稅と同じく）する。

(2) 營業收益稅。道及び府縣に委讓し、市町村は之に分賦（附加稅と同じく）する。

(3) 地方に委讓したる地租及び營業收益稅の賦課率及び分賦率に對しては一定の制限を設け、その制限は別に之を法を以て定める。

(4) 地租及び營業收益稅の委讓は昭和六年度より實施。

（B）代り財源の一部（約四千八百萬圓）捻出策としての國稅整理案

(1) 勤勞所得以外の所得に左の如く增稅する

（イ）資產所得

年額二千圓以下	百分の一・二
同　二千圓以上	百分の一・五
同　三千圓以上	百分の一・八

（ロ）營業所得

年額二千圓以下	百分の〇・八
同　二千圓以上	百分の一・〇
同　三千圓以下	百分の一・二

(2) 資產所得及營業所得の合計が一千二百圓未滿のものには免稅すること。

(3) 右新税實施の方法としては現行所得税の中に、新に比例税を設けること。而して、此の改正に伴ふ國税體系の變化に伴ふ形式上必要の改正を行ふこと。

以上に由り、誰にも看取し得る如く、地租及び營業收益税の地方委讓問題は、その委讓是非の問題と、その代り財源捻出の方法如何の問題との二つに分れてゐる。

二

一體、地租及び營業收益税の地方委讓と云ふが如き問題が起るに至つた源は何であつたかと云へば、要するに、地方財政の疲弊困憊そのものであつた。例へば、早く、財政經濟調査會は次の如き意味の整理案を決議してゐた程である。

『我國現時の地方税體系は、國税に對する附加税と、國税の遺す所の税源に對する特別税を以て組織せり。而してその國税附加税は嚴重なる制限に局限せられ、其の特別税亦大なる財源たる能はず。然るに、輓近、地方歳出激增したるがため、之が財源の涸渇に苦しみ、勢ひ、現行戸數割の如き、比較的良税たらざるものに偏重し、又は或種の營業税、雜種税の如き零細なる税種を渉獵して其の財源に充足しつゝあり此の如くにして、今日の地方税は全く歳入の不足に伴ひ、或は增額或は濫設せられ、雜然として其間何等脈絡系統なく、之が整理改善は地巨額の歳出を濫費せしことがその第一原因であり、その第二原因は我が税制の缺陥のため一國の財源が大都市に集中し、地方に涸渇せしことであり、第三の原因は地方就中農村の疲弊である。されば元來ならば、以上の如き地方財政窮乏の對策としては、その由つて來れる根源を極め、それの芟除に全力を注ぐべきであるわけだ。

然るに、既成政黨の之に對する方策は尠からず糊塗的である。即ち民政黨は或は義務教育費國庫支辨、或は地租の輕減を以て之に對し、政友會は地租及營業收益税の地方委讓を以て之に對したのである。即ち地方財政窮乏の根源を芟除する努力の代りに、實質上一種の增税をなし、その新税收の分配を地方に與へると云ふ方法に訴へたのである。

われ等は先づ、この既成政黨の問題の扱方に反對である。

さり乍ら、若し、之を、政友會案と民政黨案との比較價値に限つて謂ひ、乃至は地租の地方委讓と云ふことそれ自身について云へば、地租の委讓（營業税の地方委讓は後述の如きわけで、却つて、地方財政の窮乏を愈々激化するものである）に贊成である。そのわけは、之に由つて、地方自治權を擴張し、地租の不公平極る現在の賦課を公平にし併せて、地方財源を豐富にするからである。右の立場に於て、政友會案が、地租委讓の客體を府縣に置かず、之を市町村に置いたことは當

[illegible]
そのものも、今日の附加税は貧民なる農民のために地方財政を見合せしめし如く、その誤を再び繰返すに終るであらう。

されば、之を地租委讓について見る限り、問題の焦點は、別に法律を以て定めんとする地租賦課率及び分賦率（一種の附加税）の制限の實際如何に在るわけだ。然るに、此の肝心の點が、他日の決定に委せられてゐると云ふことは、今度の地租委讓案の價値を半減せるものと謂はねばならない。蓋し、萬一にも、此の制限が極めて窮屈なるものに終らんか、自治權擴張の名に由つて政友會の提出せし地租委讓案は結局羊頭狗肉の欺瞞に過ぎざるに至るからである

三

以上の如く、地租の委讓及びその方法は、之をその問題に限つて見る限り、大體に當を得てゐる。だが、營業收益税を地租と同じ方法に於て（客體を市町村の代りに府縣とした別はあるが）地方に委讓せんとするに至つては、全くなつてゐないと評する外はない。元來、中央税の地方委讓問題が起つた根本原因は、先にも言及せし如く、地方財政が窮迫して了つたことである。就中、地方財政の窮迫最も大なるは農村地方である。このことは、民政黨が地租の輕減を以て其の對策の一とせることに由つても容易に之を窺ふことが出來る。現に、農村に於ける課税の苛斂誅求は、都市のそれとは到底比較にはならない。見よ、地方の資産家は、之を避けんがために、續々と農村を逃げて都市

[illegible]し、都市殊に大都市に於ては、月收百[illegible]十圓を有しながら、一厘の税をも負擔せざるものはザラにあるのである。

之は又地方々々に於ける附加税率の大小の差からも明かに認めることが出來る。即ち、國税一圓に對する附加税は、東京府市部、大阪府市部の如きが宅地租三十三四錢前後なるに對し、他の縣は大體に五十錢臺であり、その他の地租附加税は東京大阪の八十錢臺なるに對しその他は實に一圓二三十錢臺である。又營業税附加税は東京大阪の二十七錢餘乃至四十錢四厘なるに對し、その他は五六十錢臺である。所得税附加税又、東京大阪の三錢二六厘なるに對し、その他は大體に五六錢臺である。委はしくは左表の通りである。

府縣税附加税率（國税一圓に對し）比較表

	地租附加税 宅地	地租附加税 其他	營業税附加税	所得税附加税
	厘	厘	厘	厘
東京府市部	三四〇	八三〇	四〇四	三六
同　郡部	三八〇	九二九	四九五	四〇
大阪府	三二八	八〇二	二七六	二二
兵庫縣	四九三	一、二〇三	五九五	五二
愛知縣市部	五二二	一、二七四	六二九	五五
同　郡部	五二二	一、二七四	六二九	五五
新潟	五三七	一、三一二	六四七	五七

山梨	五七二	一、三九八	六九〇	六一
岐阜	五二四	一、二八〇	五九〇	六〇
香川	五一一	一、二五〇	六一七	五三
福岡	四〇三	九八四	四八六	四二
長野	五六五	一、三七八	六八〇	六〇
富山	四九二	一、二〇一	五九六	五二

(備考) 大正十五年度地方財政に由る。

之れ、云ふ迄もなく、地方財政就中農村地方財政が疲弊困憊せる反映である。されば、營業收益税の府縣委讓の目的も、要するに、右の如き地方財政の缺陥を矯正するものでなくてはならない筈である。然るに、營業收益税の府縣委讓は全々右の目的とは逆行するものである。

地方財政中、特に農村地方財政が、何故に右の如く疲弊困憊甚しき實情にあるかと云へば、その根因の一は、今日の地方税制が全く都市偏重であるからだ。就中、その最大原因となすものは、所得税及び營業税の附加税制度である。元來、所得、乃至營業收益と云ふが如きものは、一地方的のものでなくて全國的のものである。例へば、岩崎、三井、大倉、等々の所得が何百萬圓を算すると云ふも、その所得は東京市のみに由つて得たものではなくて、全國的經濟活動の結果得たものである。營業收益税の附加税について云ふも同一だ。東京大阪横濱等の大都市に商工營業者が多いと云ふわけは、此等大都市の自然地位地と云ふことの外、或は中央官衙、地方廳舍、學校、兵營、取引所、開港場、交通機關、官營諸工場等々の施設があるからである。云ふ迄もなく、これ等の施設は、國民全體の負擔に由つて賄はれたものである。だが、一度び斯くの如き施設成らんか、國民全體の所得の消費はこれ等大都市に集中するものなること、德川時代の國民總所得の大部分が江戸に於て消費せられたと何等異るところはない。即ち、大都市に於ける營業收益の殆んど全部は、全國民の生産に負ふものである。然るに現行の營業收益税附加税は之をその大都市のみの占有にし、地方民に之を分配してゐないのである。

之れ、都市、就中大都市に於ける地方税率が農村に於ける地方税率よりも遙かに輕微で濟む所以である。税率は輕微でもその總税額は巨大の額に達するからである。然るに、營業收益税の府縣委讓は、此の不公平を矯正する作用をなすものではなくて、逆にその不公平を益々大にするものである。即ち、營業收益税の地方委讓は、從來中央に納めて營業税を、これ迄不當に惠まれたる大都市府縣に與へ、いよ〳〵、從來の不公平を大にする結果となるのである。

に還元[illegible]、[illegible]の一[illegible]

不公平は誰にも明かに分るであらう。

地租及營業税府縣及市郡部別表

		地租(1) 千円	營業税(2) 千円	合計 千円
東京府	東京市	二、三七九	一四、一〇七	一六、四八六
	郡部	三七九	二、一五四	二、五三四
	合計(其他市共)	二、七八〇	一六、三三七	一九、一一七
大阪府	大阪市	一、三七二	八、一八四	九、五五六
	郡部	一、六八九	一、二五七	二、九四六
	合計(其他市共)	三、一〇四	九、六二五	一二、七三〇
秋田縣		一、三三一	三八六	一、七一七
山梨縣		七二九	三四七	一、〇七六
岐阜縣		一、五九四	五九八	二、一九一
新潟縣		三、一八五	九八〇	四、一六五
内	市部	一〇六	四一八	五二五
	郡部	三、〇七九	五六二	三、六四一
群馬縣		一、三〇六	六六八	一、九七四
内	市部	八三	二六〇	三四四
	郡部	一、二二三	四〇八	一、六三一
島根縣		六九九	二四六	九四五
香川縣		一、一〇六	三二五	一、四三〇

(備考) (1)地租は大正十一年一月現在、(2)營業税は大正十二年分

四

然らば、營業收益税の地方委譲に代るに、如何なる案を以てすべき

之を人口割にして、[illegible]に所得税附加税にも之を應用せねばならぬ。即ち、現在の所得税附加税の全部を中央に於て徴收し、以て、人口割にして地方に分割交付するのである。斯くして、始めて、今日の如き農村に不公平極る地方税制は根本的に改革され、從つて、今日の農村地方財政の困憊(今日に於ける地方財政困憊の中心點は之れである)は救濟され得るのである。

いかにも、右の如き改革に由れば、都市財政は今日に比しその收入を著減する。しかし、その減少は、今日農村地主が負擔してゐるだけの負擔を、都市宅地主に賦課し、今日農村人口が負擔してゐるだけの家屋税乃至戸數割を都會人口に賦課するだけで、十分に補はれて尚ほ餘りあるであらう。蓋し、今日、都會の宅地は一坪數百圓乃至數千圓せるにも拘らず、その地主の地租負擔は極めて輕微なる上に、しかも、その附加税が前述の如く輕微であるのである。

× × × ×

最後に、順序としては尚ほ地租及營業收益税委譲後の財源としての税制改革問題に觸れねばならないが、已に、與へられたる紙數を少からず超過してゐるので、之を割愛する。然し一言、政府案が勤勞所得以外に重課する方針を發するが、然し、公債所得を依然百分の二の輕税に課せしこと、及び、不收益財産、就中大邸宅、其他に對する課税を漏らせしこと相續税をその儘にしたこと等々を遺憾とする旨を附記して擱く。

經濟時評

金解禁問題を中心としたる財界今後の展望

杉　山　幹

一、財界を動かす解禁問題

昭和三年中における爲替の波瀾、證券市場殊に國債未曾有の亂高下等々、財界を脅威し萎縮せしむべき種々相に直面して特に痛感せしむるものは金解禁問題の嚮背であつて、昭和四年においても、依然残されたる案件として財界の中心問題たらねばならぬ。この問題の成行如何は財界に直接至大の關係を有するものであるから、わが國における金解禁問題の實相を吟味し、これを主題として今後の財界の推移を展望して見たいと思ふ。

從來金解禁が政府によつて眞劍に問題にされたのは大正十二年に入

至つてゐる。ところが昭和三年二月に至り、政友會と實業同志會とがいはゆる政策提携を行ふや、實業同志會を代表する武藤氏は有力なる金解禁論者であつたため、政策協調を行ふ以上該問題も何等かの形式において實現するものと世上一般に期待するもの多く、同三月末にはこれ等が主因となつて爲替相場は昂騰して、對米建値において四十八ドルといふ新高値を現出し、この頃からこの問題が再び世上に喧傳さるゝやうになつた。更に五月十五日大阪における銀行大會席上三土藏相がこの問題に言及するところあつたが、この時は即行論でないことが判明したため、その後は一時終熄した。ところが下期に入つてこの

か[illegible]かといへば、少なくとも二つの事情を挙ぐることが出來る。一は外的原因であつて、他は内的原因である。外的原因とは、近事諸外國において金解禁を續々行つたこと、即ち一九二五年英國、和蘭等が斷行して以來、ベルギー、デンマーク、イタリー、近くは諾威、フランス、スヰス等が何れもこれを行ひ、文明國として殘るは日本のみとなつたことは少なからず一般を刺戟したのであつた。内的原因とは一種の財界打開策に外ならぬ。即ち現在のわが財界は各方面において行詰り、産業不振、利潤の低下等を馴致し、これを打開するには金解禁の外途無しとしたのである。殊に銀行業者の目的とするところは、その表面の理由は何れにせよ、その動機は遊資の處分、即ち爲替の安定を得て有利に海外放資を行はんとし若しくは金利の昂騰により利潤の增加を計らんとしたことにあるは否まれぬ。かくの如き事情は全く英國等と異るところで殊に銀行業者が卒先してこれを唱導し、しかも正貨流出(即ち通貨收縮金利昂騰)を目標とするに至つては諸外國のそれと全然相違する點であつてこゝにわが國の特異な點も發見することが出來從つて解禁論の財界における地位も窺知することが出來るが、その事情の何れたるを問はず、今においては金の解禁は殆んど輿論となつて來たことは否まれぬ事實である。

三、曖昧なる藏相の態度

これに對し政府の態度は如何といふに、一言を以つてこれを評すれ

に基ずるは三土藏相と日銀當局との關係[illegible]氏は、特別融通の巨額に上る結果、日本銀行の通貨統制力が完全に行はれぬことを理由として尙早論者であつた。この當時における三土藏相も全くこれと同說である。ところが土方總裁となるや、(稍々卽行論)速行といふべき程度に傾いて來た。これは主として副總裁深井氏の說くところであらうが、この時における三土藏相の口吻は井上總裁時代と異なり、現日銀當局に近似せる意嚮を窺ふことが出來るのであつて、日銀當局と相關關係となり、こゝに藏相としての定見なきことを曝露してゐる。更にこれを立證するものは藏相の公開演說である。去る九月十五日大阪における全國交換所聯合會席上においては、財界の現狀を論じて通貨調節力に缺くるところがあるとし、かゝる事情の下に解禁するは其結果において懸念すべきものがあるから、先づ通貨狀態を改善することを必要とし、これがためには日本銀行の固定貸を回收することに努力せねばならぬことを高唱し、金解禁はこれのみによつて出來るやうな口吻を洩らした。ところが九月一日東京市における記念講演會においては、日銀の通貨統制力は回復したが爲替相場が恢復せずまた日支關係にも懸念すべきものがあるから、これ等の問題が解決せざる以上解禁は困難とし、反面この二問題さへ解決さるれば金解禁は實現すべきものなることを闇に仄かしたのであつた。こゝにおいて政府の無定見を遺憾なく發揮したが、何れにせよ、これほどまで金解禁

問題について具體的の意見を公表して置きながら、去る十一月十三日大阪における關西銀行大會席上においては一事案の性質上決定的意見の發表は避けねばならぬと考へます、固より政府は絶えず内外財界の情勢を考察し、諸般の準備を怠らず本問題の解決につきその時期を誤らざらんことを期するものであります」と逃げて了つたのである。これまで幾度か具體的意見を披瀝しながら、該問題に對する國民の疑惑がますく深くなるに至つて、却つてこれを明示せざるは、その影響の大なるを慮れるからといへばそれまでゝあるか、影響の大なるべきことは今に初まつたことでなく、全くその口實に窮した結果と見るべきであつて、これによつて如何に無定見で支離滅裂であるかが窺知される。

四、藏相の制肘する諸勢力

かくの如くであるから該問題に對しては與黨若しくは閣僚等の乘ずるところとなり、彌が上にも問題を紛糾せしむるに至る。久原遞相が個人的立場において反對し、山本農相は或る特殊關係において反對すると傳へらるゝも強ち一片の浮説とのみ見ることは出來まい。更に高橋是清氏が反對論者(尚早論者)であり、また與黨中に反對論も少なくないやうである。

は無いことは無いのである。これは三土藏相の幾度かの演説を通じても充分窺知することが出來る。ところでその時期であるが、これは前記の如く一向定見無く或に通貨統制力回復の時といひ、或は爲替恢復若しくは日支問題解決の時といふ如きであつて、これを見やうによつては何時でも不可でないといふこと、即ち財界に大した衝動を與ふるやうな時で無いならば何時でもいゝといふ意味にも解さるゝのであつて、この場合政府の意思を動かすものは、經濟的の事情よりも寧ろ輿論等非經濟的原因の方が遙かに有力なものではないかと思はるゝのである。然らば昭和四年に入つて輿論が一層旺盛となり且頂劇となつて、しかも財界に大した變動が無いとすれば、解禁斷行は或は實現さるゝのではあるまいか。

五、財界不況の覺悟を要す

若し解禁ありとすれば財界に及ぼす影響は決して少なくない、その影響を詳述するは煩に堪えぬところであるから、こゝにはその主なる一般的のものについて概述するに止める。先づ第一に直接影響を蒙むるものは爲替相場であつて、これは金解禁聲明若しくは斷行何れの方法によるも平價近くまで恢復することは爭はれぬ。この場合爲替銀行の[illegible]

ら、輸入超は[illegible]
これはわが國の證券制度上保證發行を認むる關係から、金解禁により金の流失しただけ直ちに通貨は收縮するものではないが、その傾向を辿ることは明かで、これとともに人氣作用も手傳つて金融は緊縮し、金利は騰貴し、證券市價及び一般物價の低落を招致するは免れぬ。尤もかくなれば財界は一段の不況に陷るため新規資金の需要なく、金利は却つて緩むやも知れぬ。現に英國その他の解禁國においてはその直後において却つて金利低下の事實もあるが、これは極めて一時的のものであつて、大勢としては引締る傾向を辿るものと見ねばなるまい。その他各種事業等に大小の差こそあれ、何れも影響を蒙むるは勿論であるが、こゝには省略することゝする。要するに金解禁は財界を一層不況化せしむることは否まれぬ。

六、解禁せねば財界はどうなる

以上は金解禁を前提として述べたのであるが、第二段として金解禁が行はれぬとすれば財界は如何なる推移を辿るであらうか。これについて最初に考察せねばならぬことは、財界の基調的構成たる正貨、殊に在外正貨の消長である。わが在外正貨は大戰前においては大體二億圓内外であつた、これが戰時好況に乘じて漸次増加して、大正八年十月十八日には十三億五千餘萬圓といふ最高記錄に達した。その後は年とともに漸減し、大正十五年には二億圓臺を割るに至り。その後多少増加したとはいへ、昭和二年下期以來は常に一億圓臺に減少し、更に

でわが國の在外拂ひに國債の利拂のみで昭和四年[illegible]の會計年度末までに三千萬圓内外あり、その後の利拂ひ一ヶ年約八千二、三百萬圓に達するから、利拂ひのみにても今後一ヶ年を支持することは出來ぬ。利拂ひの外、大公使館費用や物品購入費を加算すれば恐らく今後半ヶ年も維持することは困難であらう。のみならず貿易は不振で昭和三年の入超累計二億圓内外と推さるゝにおいては益々その前途を悲觀せざるを得ぬのである。こゝにおいて問題となるは在外正貨の補充策である。金解禁を行はぬとすれば大體次のやうな三つの方法中何れかを擇ばねばならぬことゝなる（一）は國内正貨の現送である。國内の正貨は政府所有において現在約二千萬圓あるから、先づ最初にこれを行ふとするも、これが無くなれば兌換券發行準備たる日銀所有の正貨に手を着けねばならぬ破目となる。（二）は預金部若しくは日本銀行所有の海外における有價證券を買上げて、これを賣却して金に代ふるか、爲替銀行の海外剩餘資金を買取らねばならぬ。（三）は外債募集であつて、政府自らこれを行ふか、滿鐵等をしてこれを行はしめ、政府が買上げるか。これ等三方法の中何れかに出でなければならぬが、（一）の方法は前内閣時代に片岡藏相が金解禁準備のために行つたことであつて、現内閣においてはこの方法によることを潔しとせざるべく、（三）の外債募集は政府として、金解禁準備を云爲する手前としても出來ざることであるのみならず、在外正貨補充のためとすれば條件において非常

の不利に陥るは明かで如何に現政府と雖もこれを忍びてまで敢行する勇氣はあるまい。然らば殘るは（二）の方法あるのみである。この方法を行ふとすれば預金部及び日銀所有の海外における有價證券は二億圓以上に達するから、爲替銀行の餘剩資金を買上げずとも當座は凌げる譯である。

七、解禁下の不況と非解禁の不況

若しこれによるとして、その影響如何といふに、その買上げは政府預金を以つて行ふものであつて、差當り兌換券には影響せぬが、政府預金の減少となればそれだけ他に利用すべき力を失ふわけであるから、傾向としては通貨縮少を招致することゝなる。通貨縮少は當然金利の昂騰となり、物價の低落となつて、前記金解禁の場合と程度の差こそあれ、財界不況の有力なる原因たるに相違ない。更に（一）の方法によつて正貨を現送するとすれば、この場合以上に直接且つ大なる影響を及ぼすものたることはいふまでもあるまい。

かゝる見地からする限り、昭和四年は金解禁するも、せざるも何れにするも不況に陥るべきは爭はれぬところである。然しながら見遁してならぬことは金解禁の方法を執つた場合の不況と、第二段の姑息的方法によつた不況と實質的に大なる徑庭の存するところである。即ち前者の場合は根柢的の不況であつて、既にその時は財界恢復の曙光が萌す時である。然るに後者の場合においては何等恢復の道程に達せずますく\それを深刻化する虞れあるものなることを覺悟せねばならぬ。（三、十二、十）

堀江歸一全集

「豫約募集」全十卷内容（改造社發行）

第一卷　財政篇

一　財政學增訂改版（大正十五年四月）
編者增訂
a　地方財政
b　戰費調達
c　其他

二　財政學綱要（昭和二年五月）

第二卷　貨幣及金融篇（上卷）

二　銀行論（昭和二年五月）

三　ダンバー氏銀行論（明治三十六年十一月）

第三　貨幣及金融篇（下卷）

一　海外金融市場（明治四十年一月）

二　中央銀行と金融市場改訂版（大正四年五月）

三　金融及金融機關（大正十三年五月）

四　金融と恐慌（昭和二年九月）

『堀江歸一全集』

内容説明



第一卷　財政篇

財政に關する充分の理解なくしては、完全なる經濟現象の把握は望むに由がない。本卷に收むる「財政學」は、該博なる博士の知識の中、最も重きを占むる分野であつて、博士が斯學の最高峰をなせることは、何人も疑はざる所であるが、而も本書の中には紛々たる理論闘爭は勉めて避けられ、始終溫健なる學説が示されてゐる。その特色は、全く我國の事情に立脚する點であつて、類書に多い翻譯的臭味は全く皆無である。勿論外國の實狀、特に博士の通曉する英米獨の實狀は本書の中に豐富に示されてあるが、その窮極の目的は、畢竟之によつて、我國の實狀をよりよく理解せしむるに在ると言へるのである。

猶ほ本書は寶文館出版「財政學」の最新刊を基礎とし、更に博士が時事新報社發行の經濟學講義錄中に記述された部分から補充的材料を收載した。これによつて、寶文館版にはなかつた「地方財政」及び「歐洲大戰費調達法」を附錄として收錄する事が出來た。又「財政學綱要」は右著の壓縮であり、鳥瞰的に斯學の全野を望見するに便なるを思ひ、特に採り入れた次第である。

第二三卷、貨幣及金融篇（上、下）

我國に於て既に公刊せられた貨幣及び金融に關する諸書の數、決して少しとしないけれども、議論の空疎に流れ、實際的價値の乏しいものが極めて多い。我國の貨幣本位制度が必ずしも完全の域に達したものと云へず、貨幣・銀行・爲替に關する政策にも大なる過誤の存するが如きは、一に是等の方面に於ける一般的知識の缺乏せる結果に他ならない。この點に於ける國民的缺陷を補足するの用を致すものとして第一に推さるべきものは堀江博士の貨幣及び金融一般理論の諸著書でなければならない。

博士は現代資本主義の中樞的要素たる貨幣及び金融の組織竝に作用について、常に我國竝に世界諸國に於ける活現象を把へ、現實的實際的の解剖批判を加へて常に我國經濟界及び學界を誘導扶掖せられた。一方においては、斯くの如き個々の問題の實際的研究に對して多大の貢獻を爲すと共に、又他方これら個々の現象の研究分析に滿足することなく、現代經濟組織に於ける貨幣及び金融の系統的組織的研究を一個の體系として發展せられた。茲に改載せらるゝ「貨幣論」「銀行論」は即ち博士の三十年に亘る研究の結晶である。この兩書の我國經濟學に於いての地位は、宛かもかの獨逸におけるフェルヘリッヒ、米國に於けるキンレー、ラフリンの大著に該當するものである。而して個々の特殊研究に至つては、世界金融界の最も重要なる事象の檢討であると共に、博士の研究集積は自ら現代日本金貨史を構成するものである。博士の博學多才は、一切の金融現象を論究闡明して餘ますところがない。故にこゝに所收せらるゝ諸書を繙讀するものは、自ら現實的見地に立脚する理論と現代に於ける金融現象とを最も的確に把握することが出來るものである。金融恐慌の餘波未だ治まらざるとき、何人も本書によつて、我國及び世界に於ける貨幣及び金融問題の歸趨を知るべきである。

第四、五、六卷　國際經濟論（上、中、下）

各個人間の相互依存の密度と範圍との增大は歴史の必然的傾向である。尠くとも、過去に於ける經濟組織の發展に眼を轉ずるならば、右の傾向の歴然たるを見出す。中世に於ける都市經濟組織は近世に至つて、國民經濟組織に置き換へられた。更に、それは、世界經濟に進展し、その密度と範圍とは一層擴大されつゝある。從つて、一國家内の各個人の生活動と安定と發展とは、當該國産業竝に金融の國際經濟上の地位、狀態の變動に如何に密接に依存して居るかは一般世人の想像以上である。

然れば爲政家竝に直接國際貿易、金融に從事する者は勿論、一般に經濟社會に活動しつゝある者は、國際經濟に關して概括的知識を有することとは必要缺く可からざることである。殊に歐洲大戰以後に於ける我國經濟社會の沈滯は一般景氣變動の法則を破つて、異常の長期に亘つて存續して居る。この國民的經濟受難の秋に際し、この難局より脫する手段として、國民一般が國際經濟に關する概括的知識を獲得することは急務中の急務と謂はねばならぬ。何となれば、この確實なる知識に基いた各個人の經濟活動と俟つて、初めて我國の國際經濟上に於ける地位の確保、從つて各人の生活の安定と發展とを獲得し得るからである。

斯る意圖に基いて、本全集第四卷の卷頭に博士積年の結晶とも看る可

き「國內經濟」「讀書篇」にして、「世界經濟と國際金融」に於いて、讀者は、腦中の重要問題に關し、讀者により詳細なる研究を見出し得るだらう。次に、右二者より得た基本的知識に依り、「國際經濟政策」「本邦通商條約論」「關稅問題」の諸書を通じて、我國國際貿易の明治年間に於ける發展を知り得ると共に、更に第六卷に收められた「世界の經濟は如何に動くか」「國際經濟と國民經濟」の諸著を通じて、大正年間、殊に大戰以後の我國國際經濟の變動を知悉し得るだらう。是等の一般法則に關する知識と、過去の歷史に對する知識の兩者を俟つてこそ、初めて將來に於ける我國國際經濟の趨勢と、これが對策とに就いて正確な判斷を下し得るのである。

第七卷　社會問題篇

勞資協調主義の淺薄なるに同ぜず、勞働組合運動の自由を叫んで、生前遂に博士の到達せられたる所は、一つに國家資本主義の提唱である。昔つて經濟的自由主義の畑に育ち、遂に國家資本主義の熱心なる者となれる博士の社會思想は吾々の先づ聽かんと欲する所である。然かも單になる理想の裡にのみ止まらんとはせず必ずしも博士の欲したる所では高遠な社會問題の現實的解決、社會改造に關する國家的方策の確立に對しなく博士は寧ろ大なる興味を感じて居られた。勞働問題を中心とする博士の政治經濟的思想が、時に時事問題の批評の裡に躍如たるものあるは蓋し此の故である。博士既に亡き今日、其の諸著作の集成せられて茲に再び社會改造に關する博士の提案を聽き得ることは、少くとも社會問題に興味を有する同好の士と共に吾々の最も欣びとする所である。

第八、九、十卷　雜纂及び日記、書翰

第八、九卷に收むる所の諸著は、總べて博士一流の透徹せる觀察眼を以つて、各國に於ける經濟上の時事問題を解剖し、批判し、之が救濟策を提案したものに他ならぬのである。從つて、本卷は『雜纂』と稱さんよりは、寧ろ『各國經濟事情研究』と題するが至當であるかも知れない。

是等の著書よりして、各國經濟事情の明確な知識を得ることは、單に經濟學者の理論構成の基礎となるのみならず、又實際家の將來に對する方策の指南車となることは言ふを俟たない。

以上の諸著に於て、博士の該博なる經濟理論は知悉し得るけれども、更に人として博士の內的生活を窺ひ得んが爲には、他に『日記』及『書翰』がある。『日記』及『書翰』は博士の內的生活の一端を赤裸々に知らしめるのみならず、進んでは、博士の經濟理論の正確なる理解を與へるものである。蓋し、總べて、社會科學は自然科學と相違して、研究者の內的生活、人格、人生觀に依つて、夫々特色付けられるのであるから、本篇に依つて博士の人格なり、又人生觀なりを知ることは博士の經濟理論の特色を充分理解するを容易ならしむるであらう。

豫約規定

□體裁　本文四六判九ポイント組、一冊頁數平均約八百頁乃至千二百頁、上製頗美本。

□頒布方法　全十冊豫約者のみに頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

□刊行期日　昭和三年十二月第一回を刊行し、爾後每月一冊づゝを刊行し、昭和四年九月を以て完結す。但第一回配本に限り申込順により配本す。

□申込　先づ御申込みの際申込金として金貳圓五拾錢を御送り下さい。之は最後の月の會費に計算しますから最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。

御申込金け中途御解約の方へは御拂戾し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません。）

□會費　（一）每月拂　一册に付　金貳圓五十錢

（二）全　拂　全十册　金貳拾四圓

（每月一日迄に御拂込下さい）

□送本料　會費の他に送本料として一册に付廿四錢、尙書留送附を希望せらるゝ向は別に書留料拾錢を御增し下さい。東京市內六錢、書留は六錢增。

□拂込方法　振替貯金又は爲替でその月の一日までに前金するよう御拂込み下さい。但し郵便切手代用は一割增に願ひます。

□申込締切期日　昭和三年十二月二十五日限

堀江博士の追想と本全集に對する激賞

後世に傳ふる業績

東京商科大學教授 法學博士 山崎覺次郎

明治二十年代までは、我國の經濟學者の數がなほ少なかつたが、其の輩出し始めたのは同三十年代からで、堀江博士も其一人である。立派な書物や論文を續々公にせられて忽ち名聲を博され、爾來大正を通じて昭和二年の冬卒然遠逝せられるまで、第一流の權威として仰がれて居つた。博士の研究は其範圍甚だ廣く特に專門と思はれるもののみでも、貨幣論銀行論を始として財政學に及び、社會問題も好んで論議せられた。而も單に理論のみに止らず、時事に就ても絕えず意見を發表せられた。其上に博士は極めて遒筆であつたので、其著述の多いことは實に驚嘆の他はない。而して此等の勞作が何れも論理明斷で文章の流暢なることは、何人も認める所である。されば廣く耽讀せられて、經濟學の進步殊に其普及に資したことは尠少でないと思ふ。併しながら、幾多の [illegible]

……績を永く後世に傳ふる所以で、洵に機宜に適したことゝ信ずる。

不朽の精神力の遺産

前日本銀行總裁 井上準之助

堀江博士全集の出づるに當つて、轉た感慨に堪えない。博士は前途多望の身を以て突然長逝されたが、併し博士に於ては、人間の生命の短くして精神の不朽なるを思はしめるものがある。

博士とは生前面談の機會が多く、其の國際金融に關する著書は、出版の都度殆ど全部に渉つて通讀した。博士の幾多の著書と月々の新聞雜誌上の評論は、其の精力の絕倫、觀察の鋭敏、常に事物の眞相を確かと捉へてゐる事を示してゐる。殊に博士が他の學者と異る點は、其の經濟財政の實相に精通せられゐた事で、大小雜多の經濟事象を捉へて眞摯精細なる批判を加へ、堂々所信を披瀝される態度に、 [illegible]

……士の不朽の精神力の遺產たる全集は何人も熟讀すべきもので、特に實際家の味讀すべき良書である。

旺盛なる研究心と鋭き觀察力の結晶

慶應義塾々長 林 毅陸

故堀江歸一博士は經濟學者として日本の學界に特殊の光輝を放つて居た。博士は實に慶應義塾の生みたる經濟學者中、最も早く盛名を天下に馳せ、義塾に大光彩を添へた。其の旺盛なる研究心と其の鋭き觀察力とは殆ど驚嘆に値するものあり、又其の深邃なる學殖を傾けて著作を爲すや、文章常に甚だ明快なるを以て特色とした。而して多年の研究の結晶は無數の有益なる著書となれる外に、各種の實際問題に對する得意の論評は積んで山を成さんとせり。今郎ち之を集めて全集の發行を見るに至れるは誠に喜ぶべし、敢て之を江湖に推奬する。

また街頭の先覺者

奥村信太郎

堀江君は十七歳の時に、アダム・スミスの

[illegible]學界の寳典とも云ふべき[illegible]て死んだ。單に書齋の人でなく、[illegible]の先覺者として實際問題を縦横に論評した經濟論は、綜合すれば好個の現代經濟史とも云へるであらう。私は今その全集の成るを見るにつけても、今更ながら傷心の想に堪えない。

不朽の記念碑

武藤山治

金庫空を告げて後の經濟は既に遲し、と碩學セネカは言つたが、二千年前の彼が言葉は今日猶溌剌たる眞理である。大凡國民にして勤勉の精神と經濟の思想なくば、如何なる沃土に住むとも富み得るものではない。昔伊太利のナポリの俚諺に「地を掘け土は直前に笑ひ出さん」といふのがあつたほど、ナポリは收穫の利豐かな地方であつたが、その住民は逸樂懶惰を事とし貧乏であつた。又世界の寶庫とまで稱へらる、印度住民の現狀も、之れと去る遠くはない。古來豐葦原の瑞穗の國に住んで來た吾等の祖先は、餘りに幸福であつたが彼の北欧民族の如き堅忍不拔の精神や、經濟思想に缺くるところがあつた。その爲めに國家經濟の改革や、其經濟的大發展の機會が屢々失はれた。我國に於ても徳川の鎖國政策の如き、實に我國經濟的發展を阻害せる是れより甚しきものはなかつた。明治維新の大改革は政治上の大變動と同時に、經濟上の一大

[illegible]經濟的[illegible]から起つたものでない故に、一面國を開いて世界各國と貿易を始め、國家國富み榮えるに至つたが、然かも日々官民の間に行はるゝ事柄は、眞の經濟原理に反するものが多い。それにもかゝわらず我國民は、昔から經濟觀念に乏しい爲め、其過誤を容易に悟り得ぬのである。故堀江博士は夙に此點に着目され、その該博なる智識を以て或は口に或は筆に、現代最も要望されて居る經濟學上の智識を、吾國民の間に普及された功績は實に大なるものである。博士今や去つて亡しと雖も茲に博士の全集の刊行を見るに至つたことは、博士の爲めに永久の生命を與ふるもので、此全集の刊行は故博士の不朽の紀念碑を建てるものであり、且つ國民經濟思想發達の上に大に貢獻するもので、私の特に賛意を表する所以である。

高邁なる經世的光彩に充ち滿つ

鈴木文治

堀江博士は單に該博深遠なる學殖蘊蓄を有する學者たりしのみならず、一切の活問題に對して、明快にして時流を抜く識見の所持者であつた。而してその意見を吐露するに常に

[illegible]味に於て博士、發表せられた[illegible]の著書論文は單に學問的遺作たるに止まらずして、實に高邁なる經世的光彩を放つて居る。

不朽の使命を持つ名著

慶應義塾 法學博士 氣賀勘重

（前略）堀江博士は、大正十一年夏、動脈硬化症に罹れるを見出したる後に於ても「飲食物の衛生は充分にやるが、頭の方は使へるだけ使つて、研究の結果を纏めよう、纏まりさへすれば、何時倒れても遺憾はない、中途までだけでも行つて見よう」と云ふ考の下に、依然として執筆を斷たなかつた事實は、同君の熾烈なる學者的良心、鬱勃たる研究慾が、悲愴なる決意の下に、年と共に彌々昂進せるを物語つて居る。

此不屈不撓の學者たり、思索家たる堀江君が、其一生を通じて、文字通りの心血を濺がれたる著作六十種は、今や「堀江歸一全集」全十卷の中に蒐錄せられ、然かも至廉の價格を以て、諸君の机上に提供せられんとして居る。自分が不文をも顧みず、此處に推奬の辭を草する所以は單に一片の私的友情に出づるに非ずして、名著の有する不朽の使命に想到せるが爲である。

株式會社 博進社洋紙店

東京本店
東京市神田區駿河臺
電話代表番號自一一七一
神田(25)一一七二番至一一七七

大阪支店
大阪市東區瓦町二丁目
電話本局 長六五五五番 六五五六番 六五五七番 六五五八番

神戸支店
神戸市榮町六丁目
電話元町長一六六六番 一六六七番

名古屋支店
名古屋市東區宮町一丁目
電話東長一八〇〇番一八〇一番

福岡支店
福岡市博多行町
電話特長一九番

新時代の日誌!!

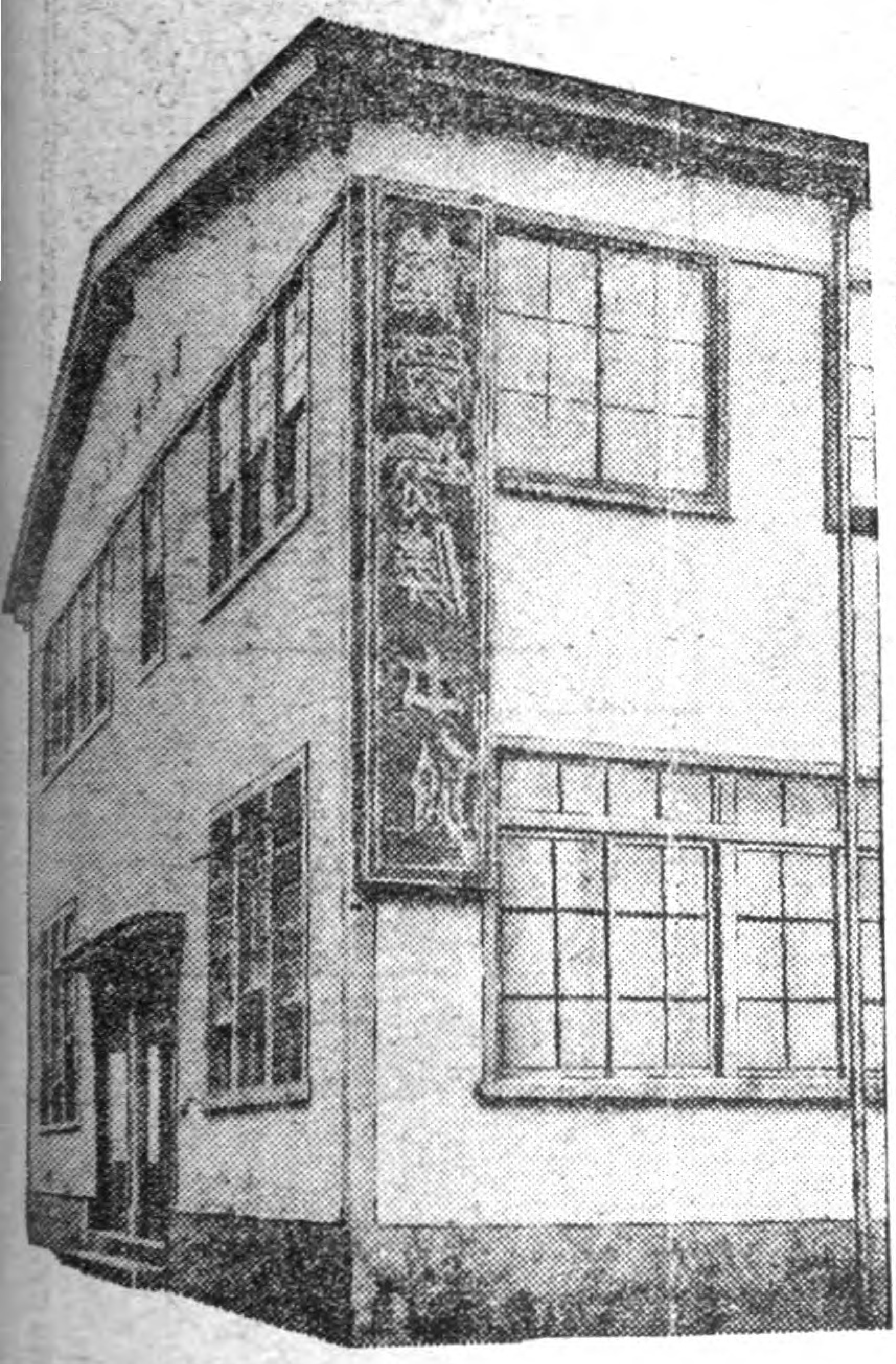
いづれも先驅的使命を帯びたるもの

豫定日誌	定價七十錢
農業日誌	定價一圓廿錢
家庭婦人日誌	定價八十錢
台所勘定帳	定價六十錢
小形ポケット用 青年日誌 スカウト日誌 女子青年日誌	定價各四十錢

發行元 株式會社 **文運堂**

本店 東京市神田區駿河臺北甲賀町 振替口座東京一九七〇〇番
(大阪市東區瓦町二丁目

營業
學用品
萬年筆



故文學博士芳賀矢一遺著

最新刊

日本文獻學・文法論・歷史物語

故文學博士芳賀矢一先生の人と學問を語る好箇の記念として、この意義深き斯界獨歩の研究を、大方にデヂケートすることの出來るのは、わが社のよろこびとするところ。內容は、いづれも、著者が晩年、東京帝國大學文學部に於てなせる講義であつて、未だ教室以外に公にされたことのないもののみである。

日本文獻學 これは恐らく日本最初の出版物であらう。國文學研究は主として文献に頼らなければならない。日本文學を云爲せんとするものは、先づこれを讀む必要がある。

文法論 深切周到な體系的文法指南の書であつて、その間國語學史をも知らしむるもの、國語研究家、文檢受驗者の好參考。

歷史物語 歷史物語の源流成立より說き起して、榮華物語・大鏡・水鏡・今鏡・增鏡等のそれぞれに亘つての周到なる研究。

菊判四七八頁
全一冊
定價二圓八十錢
送料二十七錢

最新刊

國語と國民性・日本漢文學史

國語と國民性 國民性の研究を國語の特殊性から出發して試みたもので、音韻組織、單語の排列、文の組織敬語、枕詞掛詞、漢字漢語、國語の造語法、單語の意義、國體と文化、自然美、思想、姓、名等について國民性との關係を說く。

日本漢文學史 上古・中古・近古・近世を通じて漢詩文家を列擧し、その學派、傳記は勿論、その學問、詩文章に就いて詳論したものである。

菊判四四六頁
全一冊
定價二圓八十錢
送料二十七錢

東京 九段坂下　**富山房**　振替東京五一〇番

支那は動く（その一）

前田河廣一郎

1 上海行

私は、東京の一切を振り捨てるやうにして、支那の旅へむかつた。それは、一つには、私の思想上の自己矛盾に對する闘爭の方法でもあつた。私は、急に動いて見たかつた。尠くとも、もつと大きく動いてゐる物に接したかつた。果して、支那が、その適宜な動きを示してゐるかゐないかは、自ら目撃しないではわからない。遠感器官のない動物のやうな私は、支那といふ國は觸つて見なくてはわからない國だと、久しい間、思つてゐた。そして、突發から、小さな私自身の動きもはじまつた。

携帶品と云つても、手巾が二枚、綿の勝つたスコッチ服、鳥打、靴、旅費を入れた財布──絕對に必要なこれだけが、身についた全部であつた。出先のことである。多少雨催ひがしてゐたので、洋傘を抱へて出たものの、後に晴れたので、知人のところへあづけて置いて、完全に手ぶらになつた。名刺ですらも、三枚とは持ち合はせては居らなかつたのである。この姿は、十年前に、天洋丸で横濱へひよつこり着いたばかりの、アメリカ歸りの私を髣髴させた。

途中、見舞ひのつもりで立寄つた、別府の友人は、遉かに驚いたらしい。彼は、屢々ロシヤへ携帶して行つたといふ一個の古鞄を貸し與へ、齒磨楊子、櫛、寢卷、シャツなどを整へた上に、一本一圓強のステッキをまで買はせて、どうやら紳士めいた外見を、巧みに造り上げてくれた。ちようど、大阪で打電して置いた用件の返電と、支那に關する新聞の切拔帳とが、妻からその友人あてに屆いたので、鞄に耻ぢない内容も具備したわけである。病軀を押して、友人は長崎の埠頭まで、私のきわめてわけのわからない旅を送つてくれた。病氣見舞に立寄つた筈の私が、かへつてこの人の細かい旅慣れた神經を働かせてしまつたことは、今でも悔いてゐる。

かうして、普通上海へ行く人から見れば、殆ど偶然の寄せ聚めとしか思はれないであらう出發から、私の支那旅行は始まつたのである。──つまり、私は、政治的にも、思想的にも、地理的にも、いろいろ

な情緒の上からも、支那と日本との間に存在すると稱せられる距離の感覺を、出來るだけ無視或は縮少したいと思つたのである。

　それでも、汽船がドックを離れるときには、愚かしいほどセンチメンタルになつてゐた。私は、アメリカの苦勞以來、すつかり瘦せ細つて、遠くからはその白い齒だけが殊に目立つて見える友人の姿の、だんだん小さくなつて、數百條の赤青黃のテープの間に埋もれさうになるのを見たときは、押へつけてゐたものが撥ね上がつて來るやうな、感傷の激揚を覺えた。元來、このテープなどといふ小ブルジョア的な感情の表現がよろしくない。私の側に、怒ぼつた手つきで、この色紙の屑を胸一杯にたぐりよせて泣いてゐる女がある。

　女よ！　むだな淚を流すな！

　汽船は圖太い聲で、長崎を蹴飛ばしてゐるではないか！

　私は、思ひきり高く鳥打を振つた。友人のステッキが、昆虫の脚のやうに、遙かにきくきくと動いた。――離れても、同志だ！

　私は、衝動的にペンキ臭い船室へ戻つて、大きい支那の地圖を眺めた。

　さて、私は、支那について何を知り、何を研究してゐたらうか？いつかの機會に、レニン、スターリン、ブハーリンの支那に關する論爭や論文を讀み、スコット・ニアーリングの近著『支那は何處へ？』を卒讀しただけが、最近の私の豫備知識である。これらの書類が出版さ

態に這入つてゐる。私に、ほんたうの支那が摑めようか？

　ただ、私には、これだけの自信がある。――それは、私は、支那の歷史や風景や政府の要人を見に行くのではないといふことである。私は、動いてゐるままの形で、今の支那を見よう。流轉の支那、大過程を過程しつつある支那、それを私は見たいのである。もし、廣東政府のコムミュニスト運動がテーゼであつたとすれば、列國の資本關係に制肘されてゐる現在の南京政府はそのアンテ・テーゼである。この必然的對立の後に來るジン・テーゼは何であるか？　その暗示でもいいから、私は知りたいのである。そして、その變革への動搖を見ることだけでもが、すでに、この私の小さな日本の知識分子としての煩悶の大部分が拭ひ去られるにちがひない。

　突然ではあつたが、こんなことを考へてゐた私は、大きい聲で、地圖にむかつて呼んだ。

『支那！――』

　と、前のベッドに船暈で眼を瞑つてゐる筈の男が、眼鏡をはづした近視眼を瞠つて、怪訝さうに地圖をたたむ私の手元を瞶めた。

『上海は始めてでござんすかい？』

『……面白いところらしいですね？』

　私は、その場合、自分の考へに一番遠いことを訊きかへさねばならなかつた。

るといふ口笛のもとに、鳥打帽をかぶるとデッキへ出た。
支那の空は曇つてゐた。

2　揚子江

霧雨が降る。その下を、黄ろい水が、ただ、のんのんと流れてゐる。ごく簡單な、畫にならない景色である。

この黄ろい水を、人は揚子江と呼んだ。流れは、さう云はれて見ると、水平線から船をめがけて、中高かに、途方もない大洪水のやうに押し寄せて來るのである。それにしても、河にしては、河プロパーを構成する兩岸といふものが見えないではないか。岸のないアマゾンも、ミシシッピーも、ちよつと想像しにくい。

私は、軍事探偵のやうに、地圖を出した。五百六十萬分の一にまで縮少された揚子江口は、陸と陸との間に、支那人の耳搔き道具の這入るほどの缺隙を示してゐる。それを、五百六十萬倍する……つまり、揚子江といふ河は、私の河に對する觀念を、遙かに凌駕した水流であつたのである。揚子江口は直徑六十三哩である。

私は、通すがりのアメリカ人に云つた。

『御自慢のミシシッピーよりは、ちよつとばかり安ろいやうですね。』

米人苦笑、話頭をフーバーの當選に轉じた。

こちらには、日本人の日光嫌ひ、雨嫌ひの一群が、デッキの隅に塊まり合つてゐる。

『……のんきなもんだよ、支那人は！　この揚子江だがね、こいつが毎年きまつて氾濫するんだよ。――すると、これもきまつて南岸の方に土砂が積もつて洲が出來るが、北側の方の土地がどんどん減つて行くのさ。それでも、百姓は平氣で北岸の土地へ物を植ゑてるんだよ。』

『土地が廣ろ過ぎるんだね、つまり。』

『俺等だつたら、早速南の方へ移つちまうかな。』

『そこがお前、支那の支那たる所以さね。――だから、少々位ゐ滿洲をどうしたつて、些かも痛痒を感ぜずと云つた風さ。――やかましいのは、毛唐なんだよ。奴等が妙な嫉妬を起しては騷ぎ立てるんで、支那人も近頃は生意氣になつちまつたんだね。……』

これらの帝國主義者と離れて、よりローマンテイックな性情を持つたらしい人間が、ニコチンで朽ちた歯の間から、次のやうな事柄を物語つた。不幸にして、このローマンテイストが長崎人らしかつたので、私の耳には、云ふことの半分も理解されなかつた。だが、話の筋は、ごく簡單なものだ。ずうつと奥支那の百姓は、家鴨が孵化すると、澤山の雛を驅り立てては河を降つて來る。氣の永い旅だ。一日ぶらりぶらりと雛ッ子を竹で追ひ立てては、岸傳ひに歩るいて、夜るになると鳥といつしよに野宿する。腹が減りア手當り次第の物を食ひ、休みたくなれば土手で晝寝もする。そして、この一行が上海へ着くまでには、雛ッ子はもう立派な家鴨の大人になつてゐる。それを賣つては、百姓はまた内地へ引返へす。

この話が、どこまで眞實性を帶びてゐるかは、私の保證の限りではない。しかし、要するに、人は揚子江を眺めてゐるとつひかういふ話をしたくなるらしい。

たしかに、この河だけは、古代からの感覺を傳へて居る。私達、近代文明に攻め苛まれてゐる人間でも、なほ且つ肉體の組織に、精神の働きに、いろ〱な思想の動きに、全く水の流動性の支配から脫しきれないでゐることが、よくわかる。そして、突如として、かういふ大河の動き行く姿に接した刹那に、私達の近代的な感覺を掻きわけて、水に對して持つ、水から這ひあがつた哺乳動物の憧憬と恐怖とが、私達の胸に跳り出すのであらう。……

奇怪な形のジャンクが、汽船に追ひ越されて、後退するやうに進んでゐる。青い、汚い、だぶだぶの上着を着て、日本の船夫とは反對な操作で、これも別な個所へついてゐる櫓を二人がかりで押してゐる。ジャンクの船首には、鷄の白眼のやうな珠が刳り拔いてあつて、マストには破れた雨傘のやうな帆が、雨に濡れて黒光りに光つてゐる。汽船のあほりで、この古典的な船舶は、黄ろい激浪の上に、くらくらと翻弄されてゐる。帆綱を執つてゐた一人の船頭が、仰山な身振りで、何か高らかに叫びながら兩手を擧げる。いかにも、支那人らしい動作である。——やがては、この小さなクラブも、すべての物と支

た水のうねりを敲いて、私をして思はず、その水面に、昔から巨億の人口を支持し、バートランド・ラッセルをして、『政治的な内容であるよりも、一つの文明である』と歎ぜしめた、不斷の變動のうちにも永久の生命力を湛へ來つた『支那』を、ぼんやり描き出さしめたのである。

この無限の揚子江のむかうには、何があるだらう？——どんな社會が？　どんな文明が？

私も、いつの間にか　先方を先方をと跳躍する旅行心理に支配されてゐる自分を見出したのであつた。

3　黄浦江

汽船は、上海へ着いた。

めちやくちやに雨が降つてゐる。

N・Y・K埠頭の反對側の岸は、浦東と呼ぶのださうである。場所の關係から、私は、その浦東を眺めてゐた。スタンダード・オイル會社、三井洋行、川崎ドック、英米シガレット會社、……これらの名稱が、倉庫や工場や造船所の壁に屋根に、大きい白字で拔いてある。私は、これらの名稱は、支那を半植民地化しつつある、世界資本

つら窓孔のある、家のやうな大砲をむき出しにして、錨を擧げたり擧げなかつたりしてゐる、巨鯨のやうな怪物の群である。それらの怪物には、英、米、佛、日、支の海軍旗がぶら下がつてゐた。そして、自分の躰軀の大きさを誇る巨人の群のやうに、めいめいに出來るだけ自分を大きく見せやうとして、河口一杯に停泊してゐるのである。

私はこの時、始めて、支那の新しい國旗を見た。少し太陽の光芒は玩具めいてゐるが、滿地紅といふのがわけもなく威嚇的である。ところが、支那の軍艦は、どこかの老朽艦をでも買はせられたかのやうに、頗る古ぼけてゐて、鋲がゆるんでゐはしないかとさへ疑はれた。その上の軍人！　支那にも水兵は、やはり在つたのだ。

私の同船者は、昨日黃檗を嚼いたとはちがつて、急に元氣づいた手つきで、あれが軍艦、それが正金、これが上海廣東銀行、それからこちらのは三井、インド銀行……などと、雨に燒やけた海岸通りを指さして教へてくれた。

高い時計臺が聳えてゐる。寺院の尖塔もある。それから、典獄的なアメリカ資本主義の城砦である、尊大ぶつた、眞四角なビルディングス。それらの凹凸のラインは、幸ひにして雨の簾を透かして展がつてゐるので、さほど空間の爭奪戰に從事してゐる函と函との積み重ねのやうには見えない。それから、遙かに外國の共同租界だけあつて、この都の壁は、アメリカ流にやたらに『For sale』だの『To let』だの『[illegible]』だのといふサインの[illegible]といふお上品さはある。又、それだけに、公然と累積され、建設され、獨占された富が、港内の武力によつて保護されてゐるのかも知れない。

私の眼は、自づから上海港の下部構造に移る。

無數のジャンクが人間、果物、棉花、鐵材、積荷、布類、野菜、米穀を滿載して、狂人のやうに手を振り足を動かす支那人の勞働によつて、江上を走つてゐる。その間を、タッグ・ボートやランチが、山犬のやうな吠え聲を立てて自動車みたいに飛んでゐる。サンパン、これは白黒黄の斑紋を持つた、不思議な蚤である。この水上の蚤は船から船へ、汽船から陸へと、航路も方向も見えないやうに漕ぎ廻はつて、舳と艫とを押し合ひながら狼狽してゐる。河の兩岸には、木の葉を揮ひ落とした密林のやうな檣が、總體でゆるやかな左右動を營みながら立つてゐて、陸の用件が濟み次第、雨傘のやうな帆を張ると、中流をどこへともなく消えて行く。一艘の船が解纜したあとには、迅速にほかのジャンクが割込んで來る。やんわりと支那趣味にあるそのままの曲線を描いた舳の船があると思へば、その舷には血眼になつて、頭を突出した近代の苦力が、いまにも、

『打倒帝國主義！』

と罵りさうな表情をして立つてゐる。

旗、檣、帆桁、櫓、帆、煙筒、通風筒、大砲、フラッグ・ポスト、ゼッテー、無數の大小各樣の船體、船形。――これらの下に、や

はり黄濁した、鹹味を帶びた河が、騷々しく引掻き廻はされ、粉みぢんに押揉まれ、がわがわと排泄され、ありとあらゆる都會の落ちこぼれを泛べながら、海へ海へと流れてゐる。そして、その上には、秋の雨が黑い線を曳いて落ちてゐる。

私達の汽船は、今、すべての物體を貫ぬく鈍痛の呻めきのやうな汽笛をあげて、N・Y・K埠頭へぴたりと橫づけになつたのである。それが終ると、殆ど同時に、チエーン、クランク、ドア、跫音、機關の惰力が響き出し、やがて私の耳には、一閃に切つて墜した堰のやうな、すさまじい悲鳴と哀願と怒罵をこめた、無數の人間から發せられる各種各樣の言語が反響して來たのである。

右舷へ歩み寄つて、ちよつと下を覗くまでもなく私の眼に入つたのは、今にも船體へ肉迫しさうな勢ひで動搖み犇めき、わづかに不恰好な制服を着た工部局の巡捕や稅關吏に押し戻されて足摺りしてゐる、大部分は裸足に爪先草履ほどのわらんじを穿いた、瘦せ細つた苦力の大群であつた。

これが、私の眼に耳に觸れた最初の中國國民の群集であつたのである。

4　苦力

苦力は、人間にして、犬と馬を兼ねる。同時に、彼等の沈湎してゐる無組織勞働狀態は、不拂勞働其他による一般的搾取の好標的たらしめてゐる。

彼等は、特殊な勞働の必要上、自分達と同じ車輛に乘つてゐない。單純な徒歩者を見ると、野犬のやうにむらがつては、有りつたけの聲量を絞つて呼び掛ける。煤ぼけた街そのものに沈澱しさうな服裝顏色をしてゐるので、聲だけが彼等の存在を對手に告知する唯一の傳達機關であるらしい。一人が大聲を立てると、それに負けまいとするほかの多數が存在する。ものの一分間も同じ場所に停立してゐようものなら、私達の周圍は騷々しい筋肉勞働の競賣市場に化つてしまふのである。もし、この際、客がすこしでも彼等の取引關係に興味を感じやうものなら、敏感な彼等は、殆ど轅を客の股倉へ押込みさうな勢ひで、ナイーブな乘客の爭奪戰を開始する。

上海といふ都會は、世界のどの都會にも見受けられないほど道路を大切にする處らしく、人間は、これら二萬臺からあると云はれる黃包子によつて、些かの步行だもせずに銅錢若干をもつて次から次へと移行出來るやうになつてゐる。さて、この日本の人力車からあらゆる虛飾的要素を剝奪したやうな車輛へ、客が片足を踏み込んだと思ふと、苦力の馬としての活躍がはじまるのであらう。

生物學上、人體の骨格に最も近似してゐるものは馬の骨組であるといふことを、私はどこかで聽き覺えてゐるが、苦力の疾走力はたしかにそれを證據立ててゐる。二本の手を云々する必要はない、それはしつかと轅を握り且つ車體と乘客との重量を前方へ曳き動かすための作用[illegible]

[illegible]ではないか！ それから、[illegible]一つの[illegible]を[illegible]げる飛躍を振り捨てて、運動そのもの丶持つ加速度的に全身を陶酔させるのである。停留へ行く？——そんなことは問題ではない。それは競馬馬が、一鞭あてられると暗雲に四足を動かして驀進する本能を持つてゐるのと同じことだ。

そんなわけで、彼等は一旦客を取つて駆け出したら、實に樂天主義者となるのである。私は屢々一定の目的地點へ徒歩すべく出發して、彼等に道を擁せられて困つた揚句、その一錢に便乗して黄包夫先生の愉快げな飛躍振りを歎賞してゐるうちに、目的地點とは全然反對の場所へ到達してゐることを發見せねばならなかつた。

かうやつて苦力を甘やかすことは、階級倫理の上から云つて、實に怪しからぬことであるにちがひない。が、しかし、彼等が、客（即ち賃銀の支給者）を得て意氣揚々として、最初は輕ろく、次第に車輛の自轉力を利用して快速に、殆ど完全にも近い上海の大通りを、常に素足で、竿に草鞋穿きで（日本の資本家よ、彼等にゴム底足袋はあまりに高價過ぎるのである！）、しんしんと風を截りながら、前途にあるものは自動車、電車、馬車、黄包子のいづれを問はず、大聲叱咤して驅け進むときの一時的な快樂を罪と知りつつも許さぬわけに行くだらうに！ 彼等の全筋肉は前方への努力に集中する、彼等の長髪はダンスに夢中になつたモ・ガのやうに波打ち、彼等の鼻孔は急速に開閉する、彼等の前途には交通整理の印度人巡捕以外に何の障害物もない、そし

[illegible]の快感を自覚してゐるのである[illegible]

だが、私達は、かういふ[illegible]な推移に満足するわけには行かない。——何故に、かくも多數の苦力が、かくも交通運輸の便の發達した上海に於て、わづか銅錢の十や二十個をもつて奴隷的驅使に甘んじなければならぬ現狀に在るか——それが、第一の問題であらねばならぬ。

これらの黄包夫は、きわめて中世紀的な雇傭關係の下に、車を所有してゐるボスのために車賃借賃を拂ふべく稼いでゐるのである。ボスは數百台の車を有つてゐるものもあれば、わづかに五六十台で商賣を始めるものもある。ボスは、停車場附近その他の要所に車屋を開業する。その挽子として應募して來る者には、十六浦界隈や浦東の貧民窟、それからいつも上海には浮動人口を營んでゐる無數の地方出の小百姓などがある。友人の紹介を通じて傭はれる種類が多いさうである。彼等に課せられる一日の車使用料は、二三年前までは三級に別たれてゐて、六十錢八十錢一圓と、租界を多く廻はれば廻るほど多額の料金を納めねばならなかつたが、昨今はもつと増收させられて、七十九十、一圓十錢位の比率になつてゐるさうである。これは毎日、時間を定めて徴收される。午後二時の交替もあれば、四時の交替もある。その際、銅片をもつて、車賃借料を收めない者、收める能力はないと推定される者は雇傭關係を解かれる。

車台、鑑札、税金と總くるめにしても、いくらにもなるまいと思は

れるこの黄包子に、日々平均九十錢づつの二重取をしてゐるボスの存在も封建的なものなら、その制度に競爭で搾取されに聚まる苦力も、ルムペン性プロレタリアの最惡標本であることは云ふを俟たない。

蘇州河の上流、小沙渡の渡し場の北方や楊樹浦路の裏通り一圓に、私達は古るびた犬小舍のやうな、蒲や竹を編んだ一聯の掘立小舍を發見する。これこそは、日夕上海の街に人力運輸の勞働を營む苦力諸君の寢所であるのである。床のない地べたに雨が降つて糞尿の汁が漲らうと、あらゆる疫病がそこから都會を襲はうと、彼等の或る者が肺病に罹つてゐようと、支那第一の貿易港である上海は、この騷がしい蟲けらのやうな苦力達の生活狀態を顧みるべく餘りに急がしいのである。だから、ちよつとでも小氣の利いた日本語の旅行案内などは、『最下級の人間であるから廉恥心など有る筈はなく性質は惡くこそなるものの好くなることは有り得ない』などと、典型的な小ブルジョア的口吻をもつて彼等をいぢめ拔いた上にも漫罵の唾を吐きつけるのである。

これらの苦力は、果してそれほど無自覺であるが、犬と馬とだけの特性に甘んじて居るか？　スコット・ニアーリングは、一九二五年の五三十事件以後の上海のストライキに人力車苦力が『外國人を引く』ことを拒絕したことを報告してゐる。それから、ごく最近の話であるが、彼等のボスに收める料金がいつも銅錢によつてのみ計算されるので、小洋二角（二十錢銀貨）の換算が、四十七枚であるといふ彼等の主張と、四十八枚であるといふボス側の主張とが衝突して、黄包子ストライキが起つたこともある。これは、彼等の間に組織といふものも指導者もなかつたので、たうとう敗けてしまつたが、必らずや彼等の間に勃々とした反抗意識の横溢してゐることを物語る證據である。

一日九十錢程度の料金を收めねばならぬ彼等が、時に執拗であり、强壓的でさへあることは、彼等の動物にも等しい生活狀態と照應して見て、十分に反抗意識の自然發生的表現であるといふ事實を裏書するに過ぎないのである。

5　食慾人

支那人の食物調理法は、世界的に有名な技術であり、藝術でさへもある。

肉類、魚貝、野菜、穀物の夥しい量の集散市場である上海に、食物の料理法と料理店の發達するのは頷ける現象であるが、その背後に、これらの食料品を攝取する偉大なる食慾がなければ、その發達は企圖すべくもない。食物、料理、食慾――この三つは不可分離的な三角關係を有する、人間發達史の一面である。

私は、蘇州河の河岸に立つて、程近い青物市場へ、上流からジャンクへ積んで來る白菜や米の陸揚げをよく見物した。どこの陸揚げ作業にも應用されるリレー・システムが、こゝにも使はれてゐる。船夫が白菜の山の上に立つて、自分の母親らしい女に一個の白菜を投げると、婆さんはそれを嫁らしい若い女に抛りつける。それから、一枚の

殿の上に足場を[illegible]
仲買人らしい男が、この野菜の玉を手にする。そして、最後の運搬夫がそれを一輪車の手押車に積み込むまでには、四五間の距離で、白菜の外葉が二三枚がとこは裂けて地上に落ち散らばる。さういふ落ちた葉を専門に拾つて歩く乞食の群が河原と鋪道の上にちやんと待ち構へてゐて、決してこの食物の一片をだに無駄にしないのである。市場は、神田あたりの青物市場とほゞ同ことで、たゞ支那家屋の棟の高い收容力の大きい點が異つてゐる外、市場に通有な掛け聲や、蔬菜の新鮮さや、蹂躪された腐つたバナナや饐ゑた下積の野菜の臭ひは誰もが知つてゐる通りの光景である。

この街は、ゆるい地盤に年々幾吋づゝか低落して行くといふ豫測の下に建築された、四川路橋畔の支那郵便局の裏通りにあたる。

次に、私は、下宿に程近い關係から上海一と云はれる虹口市場を見物した。この市場は、およそ人間の口にし得る限りの食料原品は細大漏さず供へてゐることで有名なのであるが、一町四方三層のだだつぴろいコンクリートの大建築で建坪千五百坪、十萬兩の建築費と云はれてゐる。第一階は肉類、魚貝類の屋臺店で充滿してゐると、二階は悉く野菜商のブースで占められてある。面白いことには、この三階が、階下で賣る食料品を、如何にして安値に且つ輕便に食ふべきかを教へるやうな、大少無數の料理カウンターや燒賣屋によつて賑はされてゐることである。肉屋の方は、店を出すと一ケ月十五弗からの場代

[illegible]うちには、[illegible]を出してゐる支那[illegible]さへある。ここは夜の十二時には閉場してしまふので、夜の間の雜沓と云つたら、全く身動きも出來ないほどである。人間の袍衣やヅボンの間から、奇怪な動物が長い尾を垂れて、商人の手に見せびらされてゐるのが眼につく。山猫である。すこし狐に近いやうな動物で、牙を食ひしばつてだらりと買手の腕にしなだれ掛るさまは、尠からず食物とは縁遠い物のやうに思はれる。鼠色のちくわのやうな物が水に蠢動してゐる。支那の海鼠である。前を行く支那人は、尖がつた耳を立て、圓筒形の鼻を開いて、今にも咆り出しさうな豚の頭だけをぶら下げて行く。西洋人の女が、しきりに剝いだ獸を値切つてゐる。あらゆる種類の舌だけを、ひかひかした鈎へ釣るして賣つてゐる肉屋もある。舌といふものの長さを、私は始めてこの市場で知つたのである。

肉食を珍重がる人は、この市場へ來るが良い。又、肉食を嫌惡する人も、この市場へ來る必要がある。ここでは、あらゆる動物の臓腑や血管や四肢蹄類が、寶玉店の彫工が、一ミリの金粉をも愛惜するやうに、臭氣や穢物や生温かみや血痕とは無關係に、頗る科學的な取扱ひを受けて商品となるのである。豚の血液を四角い鍋へ凝凍させて、碁般の目のやうに庖丁を入れた前を、氣の弱い日本の主婦は眼を瞑つて通過するであらう。鷄の生きたままを買つて、商人にちよつと刃を當てて貰つて、鷄が苦しんで鮮血を滴らしてゐるのを平氣でぶら下

げく行く支那人を見て、西洋人は野蠻と云ふであらう。しかし、すべては食慾のためである。食慾の否定を否定した惡食主義のためである。

三階は、銅片若干を持つた轎飯の食へない種類の勞働者、浮浪人、小商人には食慾の天上界である。細長い料理場兼食品陳列所を圍んで、うす汚ないベンチが列を造つてゐる。そのブースの上には出來るだけのスペースを利用して、美麗な屋號と、料理品のメニユウが書いてある。數個の銅片をもつて、人は一碗の饂飩を購ふことも出來れば、ヘツトと煮え湯と醬油で味つけたワンタンや伊府麵を注文することも出來る。剝り立ての豚のチヨツプは、あまりに新らしいために、肉が締まり過ぎて齒に立つ位である。數人の大の男が、黑光りのする台を圍んで、黑味噌を塗つた大餅の前で、茶碗の糸底大の燒賣を捻つてゐる。近隣の女房達や日本の婦人などが、稍しどけない風をして、燒賣の蒸し立てを持つて、嚢中の銅貨をちやらつかせてゐる。焦げつく臭ひ、滾ぎつた湯の香り、肉を刻む音、葱を擦る響、辛辣な薑や葱の刺戟、喧びすしい會話の上に、客、料理人、給仕達が、時々刻々に床へ向つて手鼻を飛ばす音が、何かを注射する器械のやうにしつツ〱と聞えるのである。

私は、この建築のまん中の切り取りに切り拔いた四角なスペースを、三階の欄干から俯瞰して、眼下の肉類マーケツトの賑を、腰を下げた黑衣のカソリツクの尼僧が、豚の切れつぱしを養兒院のために買つて歩るくのや、肉屋が半月形の庖丁で、手際よく豚の身から生皮を剝いで、それに附着した脂肪を掻き集めたりしてゐる姿を目擊した。

これらの肉類は何處から來るか？ 滬寧鐵道の貨物列車に、家畜類の充滿してゐるのは見受けた。しかし、この家畜類はどこで屠殺されるのか？

或る日、私は、麥倫路の屠殺場へ向かつた。普通のちよつとした工場と同じやうな高い外壁をめぐらして、正門に鐵柵の扉を構へた一軒の大きい邸が殺伐な屠殺業に從事してゐる營造物であつた。門前には、どこの街角にも見受けられる小さな群集が、わいわい云ひながら內部を覗いてゐた。無斷でずいと這入つて行くと、別に咎める門番もなく、午日の強く照りつけたコンクリートの鋪道には、ぷーんと鼻を衝つ血の香りだけが漂つてゐた。私は、血糊でべとべとする石の上を滑らぬやうに、足場を探ぐつて行かねばならなかつた。鋪道の兩側に、低い入口を持つた三棟ほどの白壁の屋舍が聯なつてゐて、その內部には、屠牛の皮をせつせと剝いでゐる者や、豚や羊の胴體の上へ乘つて、土足でうんうん踏みつけながら、掻き切つた喉笛から血を噴出せしめてゐる者、泡立つて上膊だけが魔女の髮のやうな深紅色を呈した血の洪水をがわがわ掃いてゐるものや、ものの半丁もあらうと思はれる羊の腸を日向で糸を繰るやうに引き延ばしてゐる者の姿などが、點々として刹那的な映像を眼に描いた。

一棟の建物の中には羊の群がうようよしてゐた。屠夫の一人が、牡

羊の頭を撲へて、[illegible]前から[illegible]それを[illegible]
てて牡羊が追ふ。屠夫は、この可憐な死刑執行前の[illegible]を利用するのである。別に手取りにするまでもなく牡羊は牡羊の後について、屠殺場である屋舎内へ這入つて行く。そこに機械といふものよりも人間の勞働を重んずる支那人の習慣として、私達ストック・ヤードを見た者の眼には必要以上に居ると思はれるほどの人間によつて、二疋の羊は手取り足取り捉へられて刑の執行を待たねばならないのである。死刑と云つても、これほど無雜作に、これほど冷靜な執行方法はないのである。牡羊は一人の屠夫に兩脚を取られたと思ふと、ちよつとした臺の上にごろりと仰向けに寢かされる。まるで、醫者が患者の手術を行ふ時のやうに簡單である。同じ屠夫は作業服から鋭利なナイフを出して、一寸ほど動脈を切つたと思ふと、その上をぐんと踏みつける。それを後方から悲しげな赤らんだ眼付で牡羊が見戍つてゐる。やがて、踏みつけられた羊は、一定量の出血がやむと、何かの袋のやうに隅の方へどしんと投り出されるのである。必然に、牡羊は、牡羊の死んだと同じ徑路を辿る。

牛の殺ろされるのは、これよりも原始的である。私は一頭の逞ましい牛が曳かれて來るのを見た。一人の屠夫が、その牛をちよつと壁際へ押しこくつて、手綱を壁へ結ばりつけると親密な動作をもつて動物の兩眼をふさぐのである。この動作の間、もう一人の屠夫によつて、鍛冶屋のハムマーみたいな道具が上方に狙を定めて身構へられてゐる[illegible]もう一、二撃が打撃されるまでもなく、牛は頭蓋がほぐれたやうにくたくたと斃れてゐるのである。ハムマーの屠夫は、今度は堅い双鋸と持ち代へて、喉を切り裂いて血を排出すると、早速その後脚の腱へ棒を貫いて、綱で宙に釣るすと、第三の屠夫が腹を一文字に立割つて凄さまじい音響とともに墜落する人間大の内臓類を、多量の水や血液といつしよに食み出るままに切り去つてしまふ。一人の屠夫が、その臓腑類を兩手で抱いて日向へがわりと投り出す。まだ排泄作用を止めてゐないぼうからからは、黄ろい水が玩具のポンプのやうに彈き出されてゐる。——門の裏側には、外皮を失つて、生々しい白眼を剥き出したままの牛の頭蓋骨が、累々と地べたへ投り出されたままになつてゐる。

豚や羊の呻吟の音に送り出されて、私は、この上海人の食卓を準備する最初の料理場を出た。

昔から支那人の殘忍性といふことが傳へられてゐる。しかし、この場合でも知つたとほり、私はそれを唯物性と云ひたいのである。彼等の執刀するや、必らずしも動物に對する意識的殘忍性をもつて臨んでゐるわけではないのである。必要に應じては、喰ふべき食物を如何なる手段を講じても喰ふのである。同じことが、冷靜なる彼等の料理法にも及んでゐる。三疋の蛇を浸して呑ませる蛇酒のことは別としても、彼等が物を料理するにあたつては、終日同じ動作を繰返へし同一

麺棒を捏ねてゐても、毫も倦怠の色が見えないのである。單調に押しひしがれざる國民は偉大なるかな！

上海目抜きの四馬路界隈は云ふに及ばず、私は市中いたるところ、人間の家屋が三軒と列んでゐる場所に於て、その一軒は必らず飲食店であるのを認める。勿論、家により流儀によつて、その店の料理品目と料理法は違ふが、彼等の板前といふものは決して日本の料理店のやうに店の奥深く秘められてあるのではなくて、これ見よがしに街路へ突出するやうにして公衆の面前で、出來るだけ客の眼につくやうに行はれるのである。それから、どんな不潔不浄な物と雖も、支那人にとつては、本質的に不潔でも不浄でもないといふことは、一面徹底した、胃腑的唯物主義的見方であると思ふ。

上海で飲食店といふもののない街區は、わづかにバンドを帯とした一側の商業金融界の一劃に過ぎなからう。それでも吹き溜められた落葉のやうに、ビルヂィングとビルヂィングの間隙には、怪しげな揚げ物屋ワンタン屋などが奇聲を張り上げてゐる。一日私は平和記念碑の前で、鬱蒼としたワンタン屋が、見るからに油ぎつた屋臺店を展開してゐるのを眺めてゐた。この男はあばた面で、時折四邊へ向つてこんな發音の縺れ聲を聞かせた。

『U―owh, Wan'ah meiyn!』

しやに濡れた拭巾で、前の客の食つたままの茶碗をぐるりと一撫で撫で廻はすと、何やら二三語の腹立たしさうな會話の應答があつたのち、一と匙、豚の脂肪を掬つて茶碗の底へ押し込み、その上にでろでろした醤油めいた黒汁を滴らし、若干のワンタンを投じて、颯と煮え湯を灌き込むのである。その料理的動作の最中でも、湯氣で鼻孔が潤されて些かなりと鼻水がもよほす時には、遠慮なく手鼻をかみ散らすことは常識である。やがて、この一碗のワンタンが銅片幾個かと交換されて、青黒ろいシャツ一枚の苦力の腹腔に滑り込む。この幾カロリーかの供給によつて、件の苦力は再び客の包圍に從事するといふことになる。

もし夫れ、眞に支那人の消化機關の健全なことを知らうとすれば、必らずしも私達は小有天とか、致美齋とかの料理店へ行つて、富豪の大盤振舞を實見するにはあたらない。むしろ、小路や袋町やちよつとした廓の門内に、鷄小屋のやうな長い列を造つて、汚水と惡雜巾とにまみれた食器で、鼻孔を擴大して怪しげな食物を貪り食つてゐる勞働者浮浪人乞食などの群集を見てゐた方が、いかに支那の胃袋の大きいかを窺知し得るのである。上海から食料品店と茶館、料理屋、ランチ・カウンター、バア、酒樓と日本料理屋などを除き去つたなら、私達は、この都會二百三四十萬の人口の幾パーセントが殘留するかは疑

知れない。

6　日貨と日本語

方々で、流行のやうに日貨排斥が行はれてゐる。ボイコットをしても、ボイコットを告知すべき紙がなくなつて、勢ひボイコットを商人の組合に仲裁して貰つて一時妥協せねばならぬ支那新聞社の例なども、むしろ勇壮なる喜劇と云ふべきである。たしかに、現在の支那が日貨ボイコットによつて、究極は支那を侵略しつつある日本の資本帝國主義に、平和の戰爭を挑むことになるのであるといふ見透しは議論の餘地がないものとしても、これだけが必らずしも日本の資本侵略を阻止する戰術でもなからうし、その裏面で小細工的な借款問題などが、他のより進取的な資本帝國主義國と提携されてゐるなどといふ風聞のある間は、結局、見透しの危やふやな排斥沙汰になつてしまひはせぬかと思はれる。尤も、時の要人が一部の黨派の人氣に應ずるための政策としての日貨排斥といふやうなものが、今の國民政府部內に起こし得るものとすれば、それは、國民政府の組織のルーズなことを證據立てる以外の何物をも示さないであらう。

私は、上海に於ける支那人の日常生活に、彼等の一部がヒステイリツクに排斥する日貨が、どんなに入組んだ關係を織つてゐるかを、ごく日常の例で云つて見たい。

北海道の鰑鯣は、昭和二年度に於て百七十一萬圓の輸出額を見、そ[illegible]調料類を充たす日本製インキよりもずんたんにあらゆる商店に氾濫つてゐて、上海城內のもの寂びた食料品店にさへ一個位何かで置かれてゐたのを目撃した。試みに、めし時に市街を散歩して見ると、他人へ自分が米の飯を食つてゐることを見せつけるのが一種のデリケートな名譽にさへなつてゐる小商人や職工、苦力などが、それぞれの店頭乃至は街路で、立ちながら往來を見廻はして、茶碗に白飯と汁の鰑鯣の一切を入れて大口を開いて飽喫してゐるのを發見する。

福州路や北四川路邊で、旺んに樂隊入りで販賣されてゐる綿物、木綿、メリヤス類のうちで、どれほどまでが日本製の品であり、どこまでが純支那工場製の品であるかは、統計の嫌ひな支那人は數字で示してゐない。しかし聽く由によると、日本の木綿も最近は京都あたりの工場で、仲々念の入つた加工加減で、適宜な染色を施こした上に、どんすのやうに毛ば立たせる術を發明して、模造品と斷り書きしにかせずにか、ともかくも支那へ輸出されるといふ向もあるから、一見きらびやかに見える支那綾被の馬褂も、そんな物に刺繍でもしたのかと思はれぬこともない。疑へば疑ふほど、疑はしくなつて來る代物は、日本製の輸出品である。

上海目拔きの地點に、三軒の最新式なモダーン振りを發揮したデパートメント・ストアがある。この永安公司、先施公司、新々公ひた三大商館を引くるめて、私の知り得た當時には、約五百萬弗からの

本の雜貨が這入つてゐるそうである。この莫大な數字の雜貨は、決して日本人によつて購買されるのではなくて、大部分は支那人の家庭に入り、その幾パーセントは租界の西洋人の手に渡るのである。これを別にしても、日本租界を通じて消費される日本商品の數も決して尠いものではない。私達は、ちよつとした煙草屋へ這入つても、そこに列べてある人形や玩具が純日本製品であるのに驚く。

私の知人は、或る支那人の工場から、一臺のベッドを買つたが、そのベッド・ポストとなつてゐる嚴丈な角材は、北海道の樫の木であつたのである。滬寧鐵道の食堂車で使用してゐた大型の水呑コップを、どこで製造したものかとボーイに訊くと、彼はアメリカ製だと、何か一時日本に舶來萬能が流行した當時のやうな口吻で述べてゐたが、私の同伴者は、それが滿鐵經營の一會社によつて拵へられるガラスであることを看破するのに一分時とは必要しなかつた。裝飾品になればなるほど、日本製品が半分がた支那人中流どこの小ブルジョア生活を粉飾してゐるやうに見受けられる。

次に、私達の最も看過することの出來ないのは、日本語の問題である。

或る時、日本に亡命してゐると傳へられる郭末若が『支那を征服するものは日本の帝國主義ではなくて、日本語でせう。』と苦笑したことがあるそうだが、現在、支那に於ける日本語の勢力の偉大なことは、實際、當の日本人が驚いてゐるのである。この頃、井上紅梅といふ支那に長く滯在してゐる人の話を聞いたが、この頃のちよつとした西洋の新著の反譯と云はれるものは、悉く日本語からの重譯で、その文脉から見て一目でそれが日本語からの譯であることが判明する、どうも支那語は歐文を直接に移植するにはぎこちないらしい――といふ話である。

上海に永住して日本書籍店を經營してゐる某書店主の談によれば、支那の學生や要人等が訪問して來て、書棚を見廻はしてゐるうちに、題目が大概漢字である日本の思想書類を、一種の好奇心をもつて抽き出して内容を瞥見してゐるうちに、知つてゐる二三の名辭にで出遭はすと、何かしらぐいと心を惹くものに行當つたやうな氣になる。半分は假名が邪魔で讀めぬのが癪に觸り、他の半分は新しい思想に觸れたいといふ知識慾から、つい日本語の文法書と、思想書類とを同時に買つて行つて研究するやうになるのださうである

この種の心理的推察は別としても、一九二八年六月に、南京中華全國聯合教育大會といふものが催されたことがあつた。その席上、浙江大學の某教授が、時の排英思想に關聯して、學校課目から凡て英語課を全廢すべしといふ案を提出した。まさに歐洲大戰當時のニュー・ヨークの排獨運動と好一對である。と同時に、日本の大學を卒業して文學士の肩書を持つてゐる、春暉中學の范壽康といふ教師は、日英兩國語を半分づゝ課目として置いたらどうかといふ折衷案を出した。が、時期は恰も濟南事件直後のことで、政治的にはかなり感情的にさへな

つてゐる最近の支那人間には、排日[illegible]を中心とする我が日本に[illegible]ないといふ議論が有力になつた。そこでいろ／＼議論された結果、日本語は學課の隨意課目として、全國の中學以上、實業學校をも引くるめての教育に採用されることゝなつた。この頗る曖昧な折衷案の折衷案は、その實、仲々あなどり難い實在性を持つた要求であつたらしく、現在、上海唯一の大出版會社である商務印書館の如きは、自ら日本人を傭つて文法その他の教科書を編纂し、それを日本人の文選を職にした多數の支那人印刷工の手を經て出版し、その賣捌數は全支那に亘つて何十萬部といふ部數に上つてゐるそうである。

同じやうな事柄について、私は九月十二日附の『東京日々』新聞が書いてゐたのを見たが、事實上、最近の支那人の日本語研究熱は一と頃の日本に於ける英語研究熱を憶ひ出させるものがあるのである。創造社同人達の日本の小説の反譯は、もうかなり日本でも云ひふらされたことであるから今更贅言を要しないとしても、羽太鋭治氏の性慾研究書が、原著者無記名で反譯されてゐたり、山川、猪俣兩先輩の著書が邦譯化されてあつたり、かくいふ私の戲曲なども『新的歴史戲曲集』といふ題下に、十一月十三日に（私の誕生日）出版されてゐたりする。――さて、かういふ日本語の智識を、支那はどこへ向けて行くといふのか？

7 跫音

[illegible]を驚かせるものはあるまい。

それもごく平明に分析して見れば、一二三の[illegible]して起きてゐるのであるが、ともすると、私は濟南事件で、日本軍の機關銃に脅やかされながらも、軍樂を奏して前後十七回も、波濤のやうに寄せては寄せ、寄せては押寄せたと云はれる國民軍の足並を憶ひ出すのである。

日本の都會のやうに、ごろた石の散亂する上を、下駄足駄がくらんちくらんちの音を響んで近づくのはさまでではない。何となれば、私達は、その際、直覺的に足下の道路の構成を知ると同時に木製の履物の起こす抵抗音によつて、彼我の距離を知ることが出來るから。――磨きあげたやうなアスフアトの路面に、ひたひた、しんしんと傳はる素足の音、それに混じつて支那靴の砥のやうな路上に吸ひつく音、加ふるに大時計のセコンドを刻むやうな靴の音――それらが、同時に多方面から、自分の方へ歩み寄つて來て、擦れちがつては離れ、離れては又同じ組合せになつて擦れちがふのは、ちよつと異常な神經を昂奮させずには置かない現象である。

私は、折々これらの跫音に耳をすましてゐて、決してそこには日本の盛り場や大通りに於けるやうな遊戯といふものゝないことを知つた。さうでなくてさへ、閑散な音を立てたがる木製の履物であるのに、日本の駒下駄日和下駄足駄などを穿くことは、先驗的に云ひたいほど『急ぐ』といふ觀念と相背戻した行爲を敢るやうに思はれるの

である。一體に、近代の支那人は、直線的に歩行を運ぶ癖があるらしい。日本の群集ならばきつと衝突して、叮嚀な喧嘩の二三度は繰返してゐるだらうと思はれる紛沓の中でも、私は一度なりと支那人とつきあたつたことがなかつた。人は交通道徳の發達した上海は別だと云ひたがるが、私は、それよりも、これらの跫音も二樣に聽き分けたいと思つてゐる。——仍ち、素足の音は、生活難のために飛ぶやうに忙しいのであると同時に、支那靴乃至は西洋靴の方面は、執務上、營業上、その他の時間的繁劇のために閒歩することを許されないのである、と。

8　騷音

騷音が上海の雰圍氣であるとすれば、騷音は支那人の思索形式である。

何かの物音で夜の明ける前の都會は、必らず何かの物音で夜明け前になる。その間、絶對靜謐な時といふものは、恐らく五分間とは有り得ないだらう。

支那人の騷々しいことは、その言語が主として發音によつて對手に意味を通ぜしめる必要を日本語以上に感ずるからでもあらうが、私の見たところでは、彼等には沈默の思考の出來ない性向があるらしく思

行爲が、一般の街の支那人を支配してゐるやうに思はれる。三人の支那人が集まれば、そこには活潑な會話が交換される。そこへ女が一枚加はりでもすると、四人は一群集になつてしまふ。支那の女の騷々しさ、發言權の要求の度合の多さははたから見てゐても聞にうるささうである。街中で、よく苦力と女とが口論してゐるのを見ると、双方ともしやべりにしやべり立てた揚句、いつの間にか女の雄辯に捲くし立てられて、さしもの苦力もほうぼうの體で逃げて行くといふのが多い。もしそれでも苦力側が我執を張れば、短勁猪のやうな女の足がしたたかに男を蹴り飛ばしてゐるのである

最初のうち、私は上海の大通りを徒歩してゐる人間のないのを見て、眞當不思議な國へ來れば來たものだと思つたことがあつたものだ。もし、一つの都會で、そこにある萬物が悉く舌を備へたお伽噺の邦であつたとすれば、それはたしかに上海である。

日本の天秤とは反對に、反つた方を裏返しにした竹や木の棒を擔いで、重そうに荷を攪はして通る人夫は、一人で『えー、ほう』といふ掛聲をして歩るく。二人で一個の荷を中間に運んで行く時は、前の者が『えー』と云ふと、後棒が『ほう』と囃す。それが四人か五人の苦力が、日本の荷馬車代りに（上海には馬車馬の外は馬は絶對に荷馬車に使はれてゐない）肩へ綱を張つて車を曳いて通る場合には、もうそ

[illegible]
れらのさらにある通行者の間を、自由手十文字に縫つて、これらも[illegible]を妨げることに於ては、他の荷車の苦力にも負けを取らぬ黄包車がある。彼等は無軌道電車の通つてゐる片側の道を、三條も四條もになつて、互に先を抜から抜からうとして競走するところから、衝突を未然に防ぐためにだけでも、かなりの警笛を濫費して御互に警告し合はなければならない。世界で一番に雑沓してゐる上海の市内に、最も交通事故の尠いのは、實に工部局の巡捕が一つの街角に四人も五人も交通整理をしてゐるからだけに止らず、實に、各種の運搬に從事してゐる勞働者や苦力が、あらん限りの大聲を擧げて危險信號を交換するからにもよるのである。

この人間の音聲の激流は、兩側の棟高な、煤ぼけた、やたらに金粉を塗りこくつて、墨痕淋漓と屋號を認めた店舗から、やけに反響して來る物賣り、商人、顧客、道行人などの嵐のやうな鬧音の堤防によつて、より高められ、せき立てられるのである。

面白いのは服屋の多い福州路附近で、一軒一軒立ち列んだ支那の服屋には、若い店員が積み重ねられてある既成品を取り上げては、殆ど完全な獣に近い Sing song 調をもつて、客の注意を惹いてゐる光景である。同じ方法で、私は、靴下や銅片袋を商つてゐる行商人を、ほかのもつと淋しい街に見受けたこともある。

私の下宿してゐる旅館の窓の下は、純然たる支那人の一小區劃にな[illegible]から、その[illegible]に、[illegible]聽いて起き、夜更けて三四時頃まで、何か書いたりして起きてゐると、日本のちよぼくれのやうな木魚の小さな樂器をかち合はして、ワンタン麺を觸れ歩く行商人の聲を聞くのである。この早朝と深夜との二つの觸れ聲の間に、一日殆と十五六時間といふものは、殆と廿四五種類の美聲を張り上げたり、濁音を喉一杯に吐いたり、さまざまな樂器を鳴らしては鸚鵡のやうに叫んだりする行商人の物音で占領されてゐるのだ。幸ひにして、支那語が一つもわからない私であるから、蓄音機のアリアでも聽き流してゐるやうな氣持でゐるのであるが、もしこれが一々その觸れ聲の意味がわかつて、何を鬻いでゐるかが想像出來たら、さぞ下宿を替へてしまつたことであらう。

永らく支那にゐる日本人の殆と大多數が、始めて會つたときには、途方もない大聲を立てる粗雜な神經の持主であると思はれるのも、かういふ騷音の環境にあつて、リズムの高い支那語を使用してゐる結果であることを思へば、頷けないこともないのである。

9　紡績工場

私は、例の五三事件の發祥地だと云はれてゐる、某紡績會社の工場を見物した。私を案内してくれたK――君は、日本でも有名な新進詩人で、そこの職工長をしてゐる人と懇意な間柄であつた

私達は、例の狂人のやうに疾驅する黄包子に乘つて上海の西端まで走つて貰つた。明るい小春日和の日で、見渡す限り工場地帶である郊外のその邊には、ゆるやかな紡績機械の音が、低い支那風な土塀の蔭から四邊にゆつたりした波紋を投げてゐた。空の兩端のぴんと彈ね反つた支那の屋根と、細かいうるこのやうな黑い瓦と、眞白な低い土塀と、轆々した黑土の起伏と、疎らな落葉した立木と——すべてが、現代支那の無産階級運動とは何の關係もなささうな、ただつぴろい、閑寂な廣場の平和を構成する道具立にしか過ぎない。ただ、そこに何かしら近代文明の持つ不穩さを漂はすものがあつたとすれば、それは巨記の眠さうな機械の ヰヱアイイ と、所々に屹立した煙筒から吐き出される煙だけであつた。

私達は、一つの工場の正門へ近づいた。裏門にならぬ前に、十坪ほどの空地があつて、そこは工場の塵埃捨場になつてゐた。異樣な人だかりがしてゐるので、何氣なくその群集の前に立停つて見ると、私は思はず二三歩更らに近寄つて自分の視覺の正しいかどうかを確かめねばならなかつた。

コークスや灰や紙屑によつて、鼠色に煤つてゐる灰の山の上に、三十人ほどの青少年が、ぼろぼろの破れ布を着て、てんでに下げた籠や[illegible]らの群集は、殆どブルジョアの子弟がラグビーに夢中になつてゐるやうに、互に手取り足を押へて我先きにと屑籠の下へ走り寄る。ぼろぼろに焦げた綿片、細い鐵線の曲がつたのや、蝶番の半片そんなものが、五六十本の手によつて奪ひ爭はれた結果、今小山ほどの高さに捨てられた塵埃の量は瞬く間に減つてしまつて、あとには未練がましくもう一度掘り返へしてゐる小さな子供が殘つてゐるばかりであつた。

『どうするんだらう、あんな物？』

K——君はいぶかつた。

『こんなに廣々い土地を外國人に取られて、自分達はその工場から吐き出される塵埃を爭つて拾つてるんだからな——。』

私は惻々としてこの上云ふことを知らなかつた。

會社は、案内してくれた某氏の話によれば、今は殆ど共産黨要素を排除してしまつたが、まだ若干の根が殘つてゐて、李某といふ工人がその微弱な努力を牛耳つてゐるさうである。しかしこれは日本人の職工長の觀察であるから、どこまでその組織が表面的活動を休止してゐるのか、さういふ細胞組織に關する知識は彼にはなかつたらしいのである。

私達は、會社がストライキに遭遇しても自供自足出來るやうにと、[illegible]

[illegible]から見つて、どれだけの莫大高になるといふことが[illegible]へ漏れることは、つまり献賓の秘密なのですから——従つて、時折御出になる御方でも滅多に御案内しないことにして居りますのです。』

かういふ職工長の言葉も、轟々とした機械の騒音のために幾度か訊ね返へさねば耳に入らなかつた。米國産の綿だといふが、貧民長屋でほどいた蒲團のやうに、汚らしく積み重ねてあつた。その一枚一枚を、黒い幅廣い舌で吸ひ取つた機械は、見る間に壓搾空氣で鐵管の中に吹き入れられ、その吹き分けの作用の間に、重い屑や夾雑物は床下へ彈き飛ばされるのであつた。すべてこの工場には、綿の重量を一定の標準に保つべく、温濕兩様の装置がしてあつて、這入るとむつとするほどの熱さが、飛散する纖細な綿屑といつしよに皮膚に洋服に執拗くこべりつくのであつた。職工長は、黒いストーヴのパイプのやうな鐵管の蓋をあけて、綿が雁のやうにたぎり落ちるさまを見せてくれた。それを精製して、一枚の薄雪を切り取つたほどの綿のシートにすると、第三の工場では多數の支那人女工が複雑な機械の前で、シートが白蛇のやうな綿の棒になつたものを、スプールに掛けて、糸とするべき第一の纖維を織つてゐるところへ出た。

支那人女工は、先年列國租界で協定したといふ十四才以上の年齢に該當するらしくは見受られたが、何せ戸籍面といふもののない支那人人口には、的確に十四才といふ年齢を指定するに困難な場合もあるさうか[illegible]、

『なに、支那人は平氣なもんですよ。日本人ほど衛生思想が發達してこないんで、肺病などは苦にしないんです。ですが、この點だけは吐かせないことにしてゐます。一日大概日給四十二錢位のものですが(どうです、日本人でこんな薄給に堪へ得る職工はありますか?)一度床へ唾を吐いたものは半減位の罰俸にするんです。まあ、大概それで云ふことは聽くやうですがね。』

といふ問答しか得られなかつた。

スプールのぢやきぢやきと動く力に應じて、今まで綿の屬性を離れなかつた太い眞白い棒が見る見る脆弱さうな糸になつて行つて、それが自動的に圓錐形の獨樂のやうな道具に巻きついて行つた。女工達は、機械にひんぷんとして降り灑ぐ綿花を拂ひ除け、糸の原料がなくなると機械を休ませて、別の原料を供給して行つた。この第三工場の機械は英國製であつた。續いてこの最初の糸が、二本三本と撚り合はされて、次第に強い糸となり、最後に糸枠へ掛けられて、適宜な試驗を經たのち、重量が計られた上に荷造りされるまで、私達は四、五、六、七工場と、約千人近くの女工や男工達の働いてゐる間を縫つて、いかにも視察者らしい外見の自分達を恥ぢながら歩き廻はつた。

未熟な果物のやうに核心から青みがかつた十二三才の支那人女工が、くたびれた重い足を曳摺つて、女監督の前で泣きさうな顔をし

て、不氣で纖維屑を吸ひ込みながら働いてゐる光景は、いつまでも私の眼に粘ばりついて放れない映し畫のやうな感じがする。

大きいモーターで、工場内の空氣をかひ出してゐるといふ四方形の煙筒を睹上げた私は、その煙筒塔の全面に海藻のやうにふわふわ浮きながら附着してゐる、黄色い綿の糸や綿の紙が、風に吹きちぎられて輕る輕ると飛散するのを見ると、その綿の分子を呼吸する無數の若い肺臓の色を聯想して、ぺつと唾を吐き出した。

『近頃は支那人の工場も大分進歩しまして、かなりな成績を上げては居りますが、何しろ機械が古うござんして、競爭にはならんやうです。』

電車道まで案内してくれた親切な職工長はいろいろなことを教へてくれた。

しかし、この親切な職工長も、資本主義の概念は、やがてその生產力の矛盾となり、それによつて搾取される無產階級の對立鬪爭を喚起する運命にあり、それが機械を操縱するのが支那人職工であり、機械と勞働力の生產爲の剩餘利得を收めるのが日本人であらうとも、又、その反對であらうとも、國民性の如何に拘らず、資本と勞働との、、、、、であるーーとは告げてはくれなかつた。(つづく)

女優五景

岩田豊雄

女優にもいろいろある。

「大女優」

死ねば勲章を貰ふと云ふやうな女優のことである。女優と云へばすぐに彼女の名を思出す女優のことである。單に舞臺ばかりでなく、社會でも大きな役割を演ずる女優のことである。主人公にしか扮することのできぬ、彼女のお好み次第に戯曲を變へてしまふ、手のつけられない女優のことである。

こんな女優は近代劇と性が合はない。從つて、この頃殆んどその跡を絶つた。日本には固よりこの種の女優はゐない。大女優はさておき、我國の女優は發生後未だ日が淺く、單に女優としてのアネクドオトに缺乏してる。そこで、話はとかく西洋のこととなる――。

佛蘭西でサラ・ベルナアル、伊太利でエレオノラ・デュセ、英吉利でエレン・テリイと、から誰でも近代三大女優を算へるが、細かく割つて考へると、デュセやテリイは非常な名女優ではあるが、所謂大女優のやうに世の中へ「出娑婆る」女ではなかつた。そこへゆくとサラは眞に大女優で、名聲の上から云つても、世界の何處の隅へも響いた名である。「サラベルナール」――奇拔な裝束の一商人が、男性には絶對に用のない道具に、かういふ名を冠して賣出したのを記憶される仁もあると思ふ。

サラも若い時の寫眞をみると相當の美人だが、名を成してからは、「漫畫家と大の仲良し」といふ面相に變じた。頰骨は鷲の如く張り、眼は獅子の如く窪み、歯は奔馬の如く突出した。生來顔の面積の廣い女であるが、それに比較して、四肢が短かつた。さうして畸形的に細かつた。どうみても樣子のいい女と云へなかつた。

そのサラが一世の名女優と謳はれた所以は、第一に聲――。サラと云へば人はすぐと「金の聲」と云ふ極文句を思ひ出す。金鈴を振ると云ふよりも、地に於ける最も貴い聲と云ふ意味である。お次ぎが――

「戀の女王」

身振りの皇女に

これもよく人口に膾炙してる——この文句の作者は「シラノ」を書いたエドモン・ロスタン。

しかしその位では、なかなか大女優になれない。

サラは大實業家のやうに精力絶倫で、大政治家のやうに非常識で、大宗教家のやうに憶面がなく、大詩人のやうに自信が強かつた。彼女の一生は活動と我儘の一生である。一八六二年に十八歳で佛蘭西座の舞臺を振出しに、七十九歳で死ぬる前年まで、彼女は一回も休止したことのない演劇的器械であつた。容貌が衰れば、男役を買つて出た。右足を切斷されても、義足をつけて舞臺へ現した。彼女がワイルムと撮つたこの手術後の[illegible]



サラ・ベルナアル（死ぬ數週間前撮影）

業の蹤を調べてみると、來ないのはわが東京ばかりと云ふ氣がする。亜米利加には三度行つてる。全歐羅巴はもとより、メキシコ、ペルウまで歩いてる。

かうした大女優が役不足で駄々を捏ねるなぞは極めて當然である。

一八七九年に佛蘭西座の一行が倫敦へ巡業した時に、初日の直前に出場を拒絶して既に問題を起してる。その翌年、巴里へ歸つてからのことだが、幕内主任と喧嘩して、出演中の佛蘭西座の舞臺から飛出してしまつた。これは大に世間の批難を起した。（エミイル・ゾラだけが彼女の辯護者だつたと云ふ）、劇場側は訴訟を起した。結局十萬法の損害賠償と五萬四千法の契約破棄の罰金が彼女に課せられた。その頃の金としては大した金額である。

思出はあるかも知れないが、……—

彼女は既にアトリエを持ち、繪や彫刻の技術を習つた。その作品展、作詞、感想録をも書いた。但しさう云つて威張るほどの能力があつたかは疑問である。とにかくサラはその絵を賣つた。賣つてなほいくらか儲かつた。なぜなら、熱中した彼女は直ちに亞米利加巡業に飛出し、九十萬フラン法外に稼いできたからである。

舞臺で度胸も一と云はれた。嘗て古典劇「フエードル」を演じた時、彼女の朗々たる「金の聲」を以て、

一文字幕の臺詞には
電燈が三つ消え侍べる、
電氣係に罰を喰はせて給もれ。

と叫んだが、恍惚たる見物は一向これに氣付かず、消えた電燈は直ち點火の運びに終つたと云ふ。

後年デ・ナシオン座を手に入れ、おのれの名を冠したのが、今もシャトレエ廣場に建つてる大劇場サラ・ベルナアル座である。それは彼女の劇場と云ふよりも彼女の王國で、その專制と驕慢とはファシストの獨裁王を凌いだ。彼女の好きな灰色の驢の英國馬車が劇場の前へ止ると、すべての從業員が整列した。彼女はすぐ舞臺へ駈上つて、俳優たちに身振りやメリハリの嚴格な稽古を要求する。眞赤になつて怒鳴るかと思ふと、けろりとしてお茶を飲む。樂屋へ這入つて、次興行の舞臺裝置下圖をみる。氣に入らないと、畫家の前面でチョキチョキ下繪を鋏で切つてしまふ。それから書齋の五階まで駈上つて、文學者の卵を叱り、衣裳はもとより道具のことまで指図を出す。樂屋へ戻つて、百通は優に超る手紙を讀みながら、床山や衣裳屋に文句を云ふ。それが濟んでまた舞臺へ行つて、大道具、小道具、電氣係に前後の駄目をおす。樂屋で夕飯を食ふ間も、喰べるか笑ふか、一瞬も彼女の巨大な唇は結ばれない。出演時間がくる。幕合ひには訪問客の群。舞臺主任との打合せ。十一時過ぎに閉場てから、またさうした活動が繰返されて、彼女の英國馬車が走出すのはいつも午前三時。家へ歸ると客間で待つてる劇作家先生が、恭しく新作の五幕物を讀みあげる。もしそれが氣に入つたとなると今度は——。要するにサラは容易なことでは寢室へ入らないのである。

乞食に一萬フランやつてしまつて、そのかわり翌日下男に給料が拂へなかつたと云ふ話もある。「御機嫌いかゞ？」と云ふだけの手紙を、ポストに入れずに、わざわざ人を汽車へ乘せて遠くへ送つた話もある。

しかしサラも女である。戀愛がなければならない。一八八二年に彼女はダマラと云ふ溫厚篤實な俳優と結婚してゐる。それはいいが、その時彼女は既に一人の男の子を連れてゐた。そこに隱れた醜聞が想像されるが、遺憾ながら過去の塵に埋れてる。但しその後のサラの戀愛は甚だ奔放である。彼女の戀人はマダムかマドモアゼルに限られてゐた。殊にサラ・ベルナアル座の若い女優たちは、一度は座長を御介抱申上げる義務があつたと云はれる。

それから例のモオリス・ロスタンとの話——モオリスは「シラノ」の作者の息子で、親父は劍客を屢々詩化する位の作家だから、逞しい髭をぴんと跳ねあげた美丈夫だが、息子の方は薔薇色のふくよかな頰に、キユウピイさんのやうに邪氣ない眼差の美少年である。一體サラはエドモン・ロスタンを「あたしの作者」と呼慣はし、往來甚だ頻繁で、從つてモオリスは五歳の時からサラを記憶してゐる。その「偉い小母さん」はモオリスの長ずるに及び、彼の書いた「榮光」其他を演じて天晴れ一人前の作家にしてやつたと同時に、一人前の男にもしてやつたと云ふので、すつかり評判が立つた。その時のサラは既に七十歳に達してたのだから、單に噂としても驚嘆に値ひする。彼女は椿姫やラ・トスカのやうな可憐な役をも得意としたが、ハムレット、小ナポレオン、ロオレンザチオのやうな純然たる男役に扮して成功を博した。生活に於ても彼女は半ば男の領分を侵してたと思はれる。

僕の滯佛中アナトオル・フランスが死に、ピエエル・ロチが死に、モオリス・バレスが死んだ。いづれも盛大な葬儀が行はれたが、サラの時のやうな雜沓は呈しなかつた。佛蘭西ばかりでなく、倫敦のウエスト・ミンスター寺院でも彼女の追悼式が行はれた。彼女の勳位オフイシエ・ド・ラ・レジオン・ドヌウルの如きは、寧ろ小さな輝きに算へねばならない。

ストラスブウル通りの雨

ぴしよ、ぴしよと雨が降る。

ブウルヴアル・ストラスブウルと云へば、巴里の中央に位しながら、場末の匂ひがぷんと鼻をつく。家並が細々として、十九世紀の埃と煤がまだそこらの軒先に澱つてゐる。いかがわしい寶石店。しみつたれ洋服屋、安キヤフエ、安飯屋。安いものなら、なんでも事を缺かない。黒繻子に黒毛皮の婦人外套が百法で買へる。五法のダイヤモンド白金の指環も賣つてる。人間もあまり値の高さうなのは歩いてゐない。

そこへ、ぴしよぴしよと雨が降る。

「畜生！」と一人が空を見上げる。

「いけすかよ、」と一人が帽子の雫を拂ふ。

天氣さへよければ、この一群はただ往來を歩いてる。百歩にして歸り、百歩にして戻り、この界隈を離れぬやうにして、時が來たら「市場」へ集ればいい。雨はこの一群をキヤフエに驅込むべく餘儀なくさせる。食前酒一杯三法——なんと悲しい散財であることよ。「わがこころにも降る雨」どころの雨ではない。

そのかわりこんな日にストラスブウル通りのキヤフエへ行けば、一目で「役者の市」の眞相がわかる。

採光の悪い舊式キヤフエの内部に、これら「商品としての俳優」が、ぎつしり詰込まれてる。話聲と煙草の烟だけは景氣がいい。踊子と[illegible]を嗅はりながら、ボクタを飲んでる。

[illegible]
六人並んで席を占領してゐる女優諸君の服装は、[illegible]揃つて、三等に夜汽車で揺られた後のやうに草臥れてる。男優諸君も大同小異、ただ鳥打帽と人絹襟巻だけが、いやに派手な柄なので目立つ。

「余人でもござらん。芸術家でござる」

彼等、彼女等のすべてが、いかに見すぼらしい服装であるにせよ、またいかに青春を通越した年齢が多いにせよ、彼等彼女等の残らずの顔に、さういふ文句が誇らしげに書いてある。さうしてまた、彼等彼女等の全部が、腹の底では「或る日」の到来を信じてゐる。固く信じてゐる。或る日が来れば、劇場支配人なんてものは、あべこべにこつちが顎で使つてやりますよ——とかく天下は廻り持ちさ」。

実際、悪いことに、その例が絶無ではない。お祭りの掛小屋芝居のなかから、カミイユ・カルヴなぞと云ふ女優が飛出してゐる。此間日本へ来た名提琴家チボオは、永いことキヤフエの楽士で埋つてゐた。ただそれは、何千人に一人、何年に一度、あまりに乏しい実例でしかない。恐るべき大部分は、一生を「鳴かぬ蝉」として終るのである。

びしよびしよと雨が降る

ところで、太いステッキに半ゲートル、親指をチヨッキの腕穴へ引掛けながら、劇場支配人がやうやく姿を現す。支配人とは云つても、ストラスブウル界隈からモンマルトルへかけて散在する小芝居、寄[illegible]

[illegible]には、巴里の舞台[illegible]地方行の話がまとまる。

「君、じやあランスへ一晩稼まう」

「貴嬢はナンシイで二日唄つて下さい」

で、それらの「幸運者」はすぐとその場から旅仕度——と云つても、着のまま停車場へゆきさへすればいい。さうしてかれ等の巡禮が始る。かれ等の乗る汽車の腰掛は勿論板張りであり、泊るのは陰しげな木賃であり、喰べるのは不潔な一膳飯屋であることは云ふまでもない次第である。

しかしさう云ふ支配人の撰擇が何に依つて行はれるかと云ふに、多くは顔馴染みで通つた筋をとるのだが、市の立つキヤフエの給仕が、相当に桂庵の役目を果すのだと云ふ。それらのキヤフエでは、普通のキヤフエのやうに、給仕が約一割のチップを貰ふ權利を持つてゐない。無い奴は払はないでいいことになつてる。しかし有る奴は——普通或は普通以上のチップを置く奴は、給仕の覚え目出度く、真先きに支配人に接觸の機會を拵へてくれるので、一足早く買口がつくと云ふ話である。

——夕方になる。もうどんな支配人も姿を現す時刻ではない。また明日の市場の開くのを待つ外はない。売残つた大部分は、悄々としてキヤフエから雨の往来へ散つてゆく。

「ちよいと、今晩あんたの家へ泊めてくれない——あたし行く處がないんだから」

「まあ、お前さんの聲で、お前さんの藝で、そんな事を？………」

「………」

仲よくお揃ひに踵の潰れた靴を曳きずりながら、二人のマドモアゼエルは地下鐵の穴へと忙いでゆく。

びしよびしよと、雨が降る。

女優と流行

帝劇の女優は眼鏡をかける。そこらの新劇女優は氣の觸れたやうな洋裝をして歩く。しかし誰も眞似をしない。少くとも東京や大阪の「社交界の花」や葉たちは、敢へてこれを逐はうとしない。してみると、日本の女優は流行に對して、まだ支配の力を持つてゐないのである。それは何に由るか。女優そのものの社會的勢力の微弱は勿論第一に考へねばならぬが、歌舞伎劇上演のみ徒らに多く、流行と直接關係ある現代衣裳が俳優を裝ふ機會の少いことも大きな理由である。さうして偶々舞臺へ現れる現代衣裳は、常に流行遅れである。昔は「路考茶」なぞと云ふ流行色が舞臺から起つた例もあるやうだが、現在では劇場と流行は全く絶緣關係に立つてる。廣い意味に於てこれは一種の不具的現象である。さうして將來の流行の中心に立つものは、やはりわが女優さんたちであらう。なぜなら、外國の例と云ふものは頗る規模面に日本の例となることを例とするから。

外國の劇場へ行つてすぐ氣付くことだが、女主人公に扮する何孃の衣裳は、何町何番地の何店の創製に依ると云ふやうなことが、プログラムの本文に印刷してある。もしそれ演劇雜誌に至つては、半分は流行雜誌で、有名な女優の艶姿がその衣服、その帽子、その手袋、その靴、その靴下、そのコルセットの商標と共に宣傳されてる。われわれにとつては甚だ目障りだが、その國の女性はこれに依つて流行の第一線を窺ふのである。

ことに巴里は流行のエルサレムだけあつて、女優の舞臺衣裳は注目の的となる。流行の魁が先づ舞臺に於て試される。一體巴里の流行は色や形に於て大體の規準はあるが、決して劃一的ではなく、變種の多いことが尙ばれる。そこが流行店のつけ目で、これが當店の「新形」でございと廣告に努める。また事實、よきクレアシオンを出すべく、その苦心と競爭は大抵でない。さうして花形女優は引張り凧で、それらの「新形」を着せられる。そのかわり、その衣裳をそのまゝ頂戴するばかりでなく、別に報酬をも貰ふ。なかなかいゝ商賣だが、流行店の方ではこれを最良の宣傳方法としてる。但しこれらは「マダム・なにがし」と云ふやうな一流の個人商店で、デパアートは餘りやらない。

さうして、それが今迄の傾向であつた。ところが最近、全然反對な傾向が劇場の流行店の間に起つて來た。つまり女優の舞臺衣裳に依つ

[illegible]云ふのである。

その第一の理由は、彼等の一番の顧客である「社交界の花」たちが、舞臺で「新形」が披露されるのを喜ばなくなつたからだと云ふ。なぜなら、最近佛蘭西政府はさう云ふ「新形」に對して、或期間その裁縫店の登録權を認めた。直接個人に賣る場合はその保護を完全に受けるに拘らず、一旦舞臺と云ふ公開の席に現れると、初日から三四日目には既に模倣が市中で行はれる。それ故「社交界の花」たちは、最早それを身に纏ふことを潔しとせぬ。第二に、巴里へは米國を筆頭に各國の流行店の「型盗人」が、大勢入込んでゐるが、彼等に一番早く盗まれるのは實に舞臺の上からだと云ふのである。

勿論これは流行店の方の云分で、劇場側は大に非を唱へてゐるが、一葉落ちて天下の秋を知る――日本の花柳界がまつたく流行を落伍したやうな變遷が、巴里の女優を見舞はないといふことは、決して斷言を許さない。

劇場的戀愛

劇作家と女優――一番美しい組合せは、チエホフとオリガ・クニッペル。近代露西亜の生んだ最大劇作家と最大女優が家庭をつくつたのだから、目出度い限りである。お次ぎに、ダヌンチオとエレオノラ・デユウセの戀があるが、かのファシストの禿頭劇作家は唾棄すべき浮氣[illegible]

[illegible]の作者アンリ・バタイユ[illegible]エと浮名を流した。巴里[illegible]ギットリイは、標本的巴里美人のイブオンヌ・プランタンと結婚して、似たもの夫婦の鑑を示してる。その他、ブウルバアル芝居の名花マダム・シモンとフランソア・ポルシエ。美貌と、才氣で鳴らしたコラ・ラパルスリイと、劇詩人リシユパンの子で同じ職業のジヤック・リシユパン。いづれも伉儷睦じい。内實はともかく、女優と劇作家の戀は鳴物入りの華やかさがある。

男優と女優――そろそろ話が地味になる。なぜなら俳優同志の艶聞と云ふものは、決して世人が想像するほど多くはなく、偶々兩者が結付く場合は、技藝や人格に對する尊敬とか、或は劇壇生活に於ける相互の利害の接近とか、さういふことが主なる動機となるやうである。だから兩者は必ず結婚し、相共に舞臺で働く。さうしてこの現象が、近代劇俳優のうちに多く見出されるのは、興味ある事實と云はねばならない。

シユザンヌ・デプレと云へば、十目の視るところ現代佛蘭西第一の名女優であるが、「ノラ」や「ウオレン夫人」を當藝とする如く、彼女の特長は殊に近代劇に於て發揮される。容貌農家の主婦に似て、藝風亦甚だ健實である。彼女はもと帽子工で中年から舞臺生活に入つたのだが、その動機は實に、三十年一日の如くイブセンに終始してゐる劇

作座のリユニエ・ポオとの戀愛に始つてると云ふ。兩人は直ちに結婚し、共に制作座の舞臺で奮闘し、今では一方は劇壇の元勳、一方は大明星として謠はれてると同時に、二人ともすつかりいゝ爺さん婆さんになつてしまつた。

また露西亞人ながら、巴里新劇壇に貢獻尠からざるジョルジュ・ピトエフも、彼の昔の戀人であり現在の妻であるリュドミイラと、睦じく舞臺で働いてる。藝では細君の方が優れ、見識では亭主が勝る――共に極めて謙遜な藝術家肌の俳優である。それから新進のアトリエ座の主腦シャルル・デュランも細君にして主席女優たるマルセルと、車の兩輪の如く活動してゐる。マルセルの藝は近來頗る評判がいい。以上三つの例に就て考へるに、いづれも俳優としては細君の方が少々番付が上で、そのかわり美人或はそれに近い容貌は一人も持つてゐない。みな〳〵健實なる女優である。要するに、佛蘭西では俳優對俳優の結婚は成績がいゝ。相倚り相扶け、藝道に勵んでる點、敬服に價する。この質素なる一群に祝福あれ。

いゝ支配人（或は舞臺監督）といゝ女優――これは寧ろ笑話に属すべき題目である。一體外國の劇場支配人は、藝人と事務家とが變な工合に混合調和した、鵺のやうな人物が多い。極めて打算的で、目から鼻へ拔ける如くして、何處か間が拔けてる。彼自身がそもそも滑稽な存在である。さうして、支配人對俳優の關係は、餘りに物質的に約束されてる。そこに殆んど戀愛を釀成すべき雰圍氣を缺いてる。しかし兩者の接觸が事務に多端なところから、戀愛以下の關係が生ずることは珍くない。よく通俗小説に出てくるやうな、惡漢の劇場支配人が實際世間に絶無とも云へまい。ミュジック・ホールの女優志願の娘が、支配人の不當な要求を許した後で、

「お次ぎが作者に、管絃樂長に、舞臺監督と――それだけですか？他にあるなら、どうせ序ですから」

ピアンストツクの笑話にこんなのがあつたが、それよりも、次ぎなる「實話」の方が急所を衝くものではあるまいか。

十九世紀末の流行劇場、巴里の「フオリイ・ヌウヴエル」座の支配人室の壁には、常にかういふ掲示があつたさうである。

「支配人にいかほど親切を示さるるとも無用に御座候。支配人は斷然劇場内に於て情人を採用せざる旨　及廣告候也」

よい役を延して貰ふべく、給料を殖やして貰ふべく、女優たちの「不當な」運動が支配人を忙殺した結果であらう。

今昔女優氣質

「――あたしはサン・クルウ離宮の大きな一室に案内されました。あたしはただ一人殘されました。あたしは怖はくて、がたがた慄へました。あたしは深くカシミヤの面紗を降して、寢台とストーブの間に置いてある肱椅子に身を縮めてゐました。やがて隣室に通ずる扉が開きました。絹の靴下、白繻子の半ズボン、緑色の上着、赤い襟章――

片手に帽子、片手に鞭を持つて、皇帝が這入つてきました。

彼はあたしを見て、彼獨特の朗らかな微笑を示しました。さうしてあたしを大きな長椅子へ導き、いとも不遠慮な態度で、あたしの面紗を引剥ぎ、床へ投捨てました……」

十九世紀前半の有名な悲劇女優、マドモアゼル・ジョルジュ——詳しく云へばマルガリツト・ジョルジュ・ウエイメルは、彼女の回想録のなかにさう書いてゐる。總督とはナポレオン・ボナパルトのことである。その時彼女はまだ十五歳と六ヶ月にすぎなかつた。



マドモアゼル・ジョルジュ

いま殘つてる肖像をみてもわかるが、マドモアゼル・ジョルジュは、希臘彫刻的な頗る端正な容姿の美人であつた。十一歳でアミアンの劇場で初舞臺を踏み、十四歳の時には既に巴里へ來て、佛蘭西座で好評を博した。驚くべき美貌であつたことが、彼女の人氣を涌かした原因らしい。そこへもつてきて、ボナパルトと云ふ大層もないパトロンができた。彼女はめきめきと賣出し、一躍して巴里劇壇の花形となつた。年少ながら、彼女は主席女優のデュシエノアに競爭を挑み、立派にこれを蹴落してしまつた。

盛名が一世を風靡するに從ひ、彼女の我儘と豪奢は際限がなくなつた。ボナパルトに對してさへ、彼女は從順を守らなかつた。彼女は一八〇四年に、或る舞踊家に戀し、その跡を追つて、露西亞へ行つてしまつた。ボナパルトは美事砂をかけられたわけだが、しかも三年經つて彼女が再び巴

里へ歸つてきた時、哀れなる皇帝は彼女の請願に抗し難く、佛蘭西座に對して、マドモアゼル・ジョルジュが外遊中の給料は完全に支拂ふべきものとす、と云ふ命令を下すことを餘儀なくされた。彼女の凄腕も想像に餘るが、ボナパルトもよくよく腰の弱いところがあつたとみえる。

しかし僕の語らうとするところは、寧ろこれから始まる。

マドモアゼル・ジョルジュは、ボナパルトがセント・ヘレナに流された後も、オデオン座からポルト・サン・マルタン座に轉じ、嬌名を恣まにしてゐたが、次第に年波の寄するにつけ、二人の大敵が彼女の前に現れてきた。

その一つは今日なほ名女優の名を謠はれるラシエルの出現であり、もう一つは救ふべからざる彼女の肥滿であつた。

舞臺の強敵固より恐るべし——美人の脂肪化はさらに迷惑な運命である。ことに彼女は悲劇女優である。遂に彼女の肉體は、馬車の乘降りにまで人手を借りねばならぬほど、膨脹してしまつた。容姿の美を失つたのみならず、極端な肥滿は、俳優の生命とする聲までも、彼女から奪つてしまつた。かうなると話は早い。巴里劇壇から忽ち彼女の名が消えてなくなる。地方の都會の劇場へ彼女の看板が掛るうちはまだいい。やがて杳として消息が絶える。生死さへわからない。彼女が存在したことさへも、人は忘れてしまふ……。

年は移り、世はナポレオン三世の治下となつて、或日、チュイルリイの政廳に扶養の請願にきた、七十二歳の老婆があつた。それが、文字通り食に飢ゑた、マドモアゼル・ジョルジュであつた。そこで役人は彼女に、オデオン座の便所番の職を與へた。例の、戸口のところに腰かけて、出てくる客に手拭を渡しては、一二枚の銅錢にありつく商賣である。

こんな例は少いにしても、往昔の女優の運命は、數奇なることを常とした。彼女等の舞臺に溢れたロマンチスムは、同樣に彼女等の生活にも漲つてゐたとみえる。黄金時代に榮華の頂を究めるかわりに、老後の計なぞを考へる才能は持合せてゐなかつた。詩や小說の榮えた頃で、經濟學はまだ今日の隆盛を示さなかつたのだから止むことをえない。

ところで現代の女優だが、これは單に花形として持囃される二三人の最近の消息を紹介するに止めておく。

佛蘭西國内はもとより、米國にまで艶名を馳めた美人女優セシル・ソレルは、セギユウル伯爵と結婚し、その記念に「セシル」と云ふ壯麗なヨットを拵へて貰つて、「紺碧の海」で愉快に遊んでゐる。

舞踊家としても、歌劇女優としても、美人としても有名なマリイ・クスネゾフは、大音樂家の甥であり、陸軍大將の子であり、且財産家であるマスネ氏と、最近華燭の典を擧げた。

ミュジック・ホールの女王ミスタンゲットは、美人でもなく、若くもないので、近頃パンドオルた瀟洒なホテルを買入れた。舞臺を引退したらそこの帳場に坐る由(へ續し)

海の生存競爭

三浦定之助

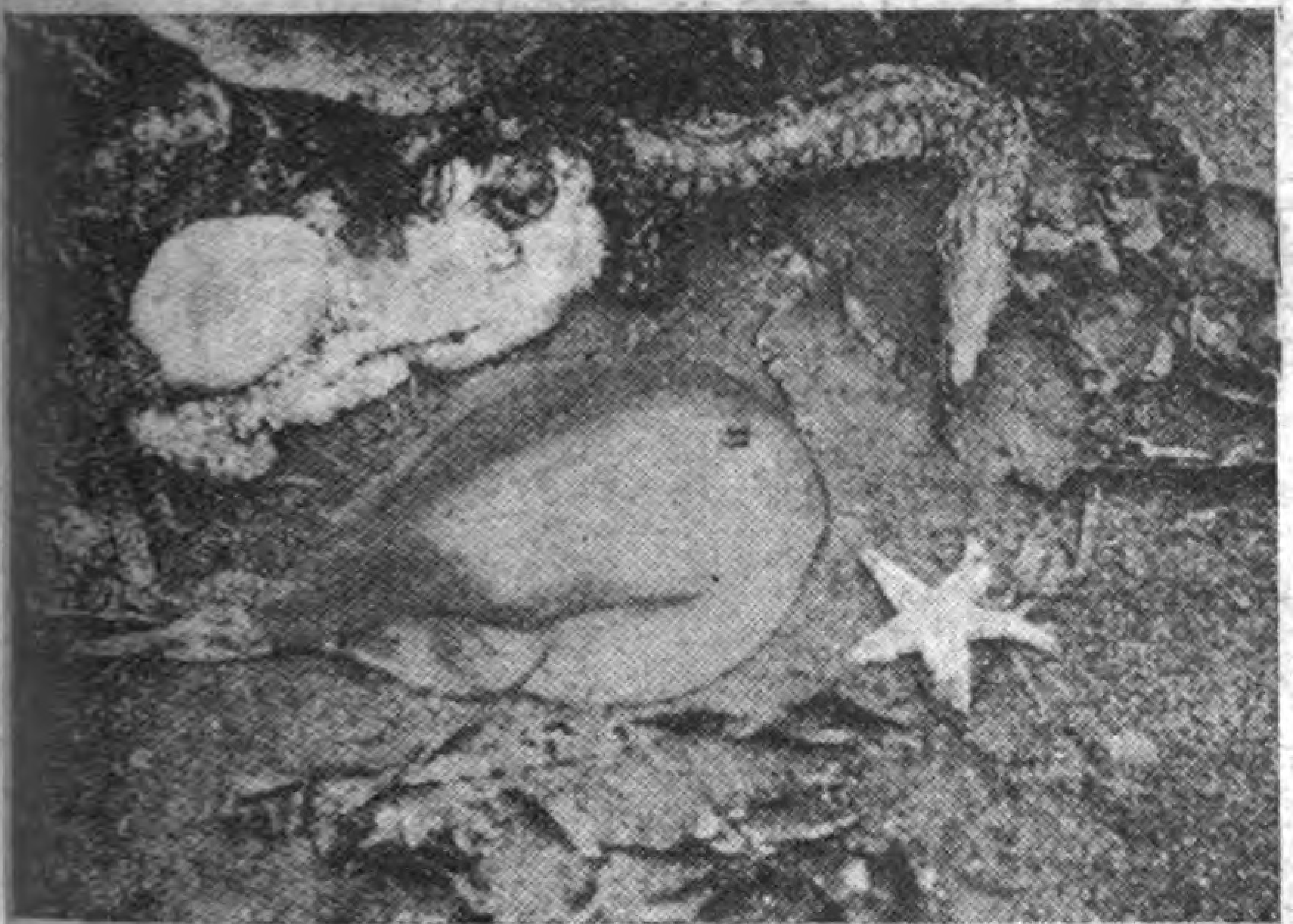
海の面積は廣い。地球全面積の三分二を占むると云ふ。此廣大なる海底には陸上に於ける動物に劣らぬ澤山の動物が住んで居る。其種類に於ては又數に於て、大は鯨より小は鰕に至る、實に—無盡藏—なる一言の他に之れを表示するの言葉がない。陸上動物は飛ぶ鳥の外主として地表面に居る。否、鳥と雖も大部分は地表面附近に居るが、海の動物は海面附近、いかつをの如きの上層魚から五〇〇尋の深所に棲むめぬけだいやむつに至る各自ら好む海深がある。海中の各深さの層は魚の抱擁力である。之れを考ふる時は魚類の生活區域は陸上動物の生活區域に比して幾百倍なるを知らないのである。然しながら海廣しと雖も棲む魚類多ければ狹隘を感ずるは理の當然である。之を以て弱肉強食適者生存自然淘汰と云ふ様な事が最も猛烈に行はれ、其游泳區域が自から定まり、之に適當したる保護色擬態又は攻撃防禦の爲め何らかの武器を有せざるはないのである。快速力を有するもの、鋭い齒を有するもの、猛毒を含むもの、堅く甲を武裝するもの等色々各自便利な體形を有するが、中には最も文明的な電氣を利用するものも數種ある。海水中の様な電氣の良導體の内に於て之れを利用する事は、文明を以て誇る人類さへも出來ない所で、僅かに嚴重な水防裝置によりて海底電線を通ずる事が出來るのみである。然るに魚類幾萬年の昔から海底で幾萬ボルトと云ふ高電壓の電氣を使用するはお茶の子である。今其代表のしびれえいを擧げよう。

しびれえい

電氣を用ふると云へば甚だ高等な魚類の様に思はれるが、其實魚類としては下等動物扱ひされて居る。漁夫が之れを捕へたり足で踏んだりすると、何萬ボルトと云ふ電氣ショックを與へて（或ひは五萬ボルトとも云ふ）氣絶せしめる事もあると云ふ。然し二回目からは斯様な強いショックは與へないので潜水子が船上で觸れて見ると肩の附近迄強いショックを感ずる丈けである。潜水子が海底で銛で突いたりすると鐵の柄から電流は海水中に消散して何等のショックも與へない。斯様であるから何時の間にか漁夫はしびれえいと名づけたのであらう。

學者は電氣えいとも云つて居る。

しびれえいの體長は一尺位もあると大きい方である。體色は薄紫の灰色で、普通のえいであると尻尾に長い猛毒の槍を持つて居る。目は甚だ小さく、各鰭の力も弱く、海底で泳ぎ逃げても潜水夫が後から追ひかけて突き捕る事も出來る。彼の普通見られるものは、砂底で岩礁附近のよく小魚の集まる所である。勿論去る八月號に紹介した猛魚うつぼと出會する機會なども非常に多いのである。うつぼは蛇の如き形狀をして鋭い齒と强い尻尾を有し、後半身は常に岩礁の間に隠し自由な前半身を延ばし何時も好敵手の到來を待つ、恐しいもの知らずの寧ろ無鐵砲の魚で、其附近を過ぐる何魚にも戰をいどむもの、一方しびれえいは團扇の樣に扁平で、甚だ小さい目、弱わ〳〵しい尾鰭而して海底波浪の爲め半分埋れて居る如何にも薄のろらしい形狀であるが、文明の利器を有し、何れよりとも嚙みついて見よ！　一瞬にして彼の强い電擊は相手を斃すであらう。兩者共に逃ぐる事を知らない猛者である。之れ潜水子の日頃より渴望して止まない海底劇の一幕である。



うつぼとしびれえいの對陣

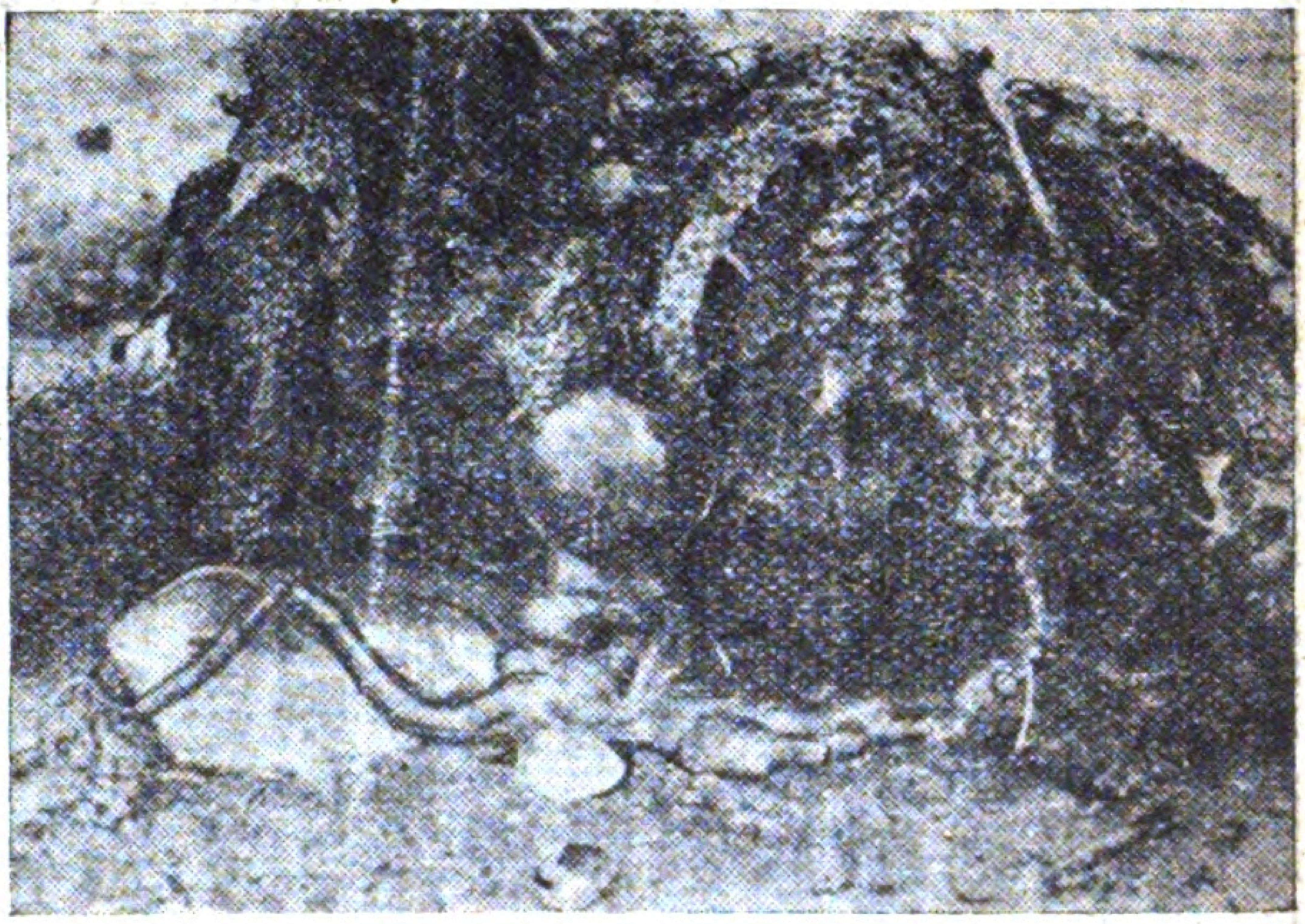
此兩者を如何にして立ち合はせるか？　うつぼの如き敏捷なものを捕へるには、突くか又は鉤を喰はせるか、何れにしても無傷の儘でとることは出來ない。又網でとつて之れをしびれえいの前に置く時は彼うつぼは相手と戰ふどころか、後をも見ずに岩礁の間に飛び込んで決して出て來ない。之れはしびれえいを喧嘩好きのうつぼの前に連れて行くより方法がない。扨てしびれえいを捕へて糸で尻尾を結び、之れを銛柄の一端に結びつけ靜かにうつぼの前に置く。うつぼは潜水子が近づくものだから段々と岩の下に引つ込んで仕舞ふ。而してえいが動かない樣に之れを結んだ銛の柄を砂中に突き挿して潜水子が離れて見て居る。と、うつぼが段々と前半身を延ばして來る。しびれえいが逃げ樣としてもぢ〳〵する。之れを見付けるや否や、うつぼの强猛性は即時に之を襲擊せしめる。彼れの强い齒がしびれえいの肉に深く通る、彼の强い尻尾でずる〳〵と穴の中に引き込む。しびれえいの弱い鰭は徒らにばた〳〵するのみ。電氣は如何したのか？　しびれえいの薄のろから電氣をとつたら何の取柄がある。そしてうつぼには電氣などは何でもないのか？

[illegible]一撃に[illegible]うつぼの一撃[illegible]あつた[illegible]これに[illegible]一寸た二合はせ方が悪かつた。しびれえいは側腹には其電撃が非常に強いが其直後には甚だ弱い。斯様にしてしびれえいは捕へられて糸で縛られて持ち歩るかれたので彼の蓄電池は空つぽであつたのであらう。彼の蓄電池を充實した儘で立ち合はせなければならない。自然に斯様な機會に出會ふ事は絶望だ。其後機會なくして二年を過ぎた。幸ひ今夏しびれえいを岩礁の附近に見出した。幸運にも三間はかり先方に絶大のうつぼが、好敵手を探がして岩の下から半身を出して居る。今度は潜水子はしびれえいを其後方からうつぼの方に追ひ出さうとしたが中々動かない。足で其尻尾を踏まねば動かぬであらう。夫では彼の蓄電池は空になるであらう。今度は方法を換へて電氣屋の最も好むえびを捕へ糸で縛り遠くから竿の先に吊して彼の前に置く。恐しいもの知らずの電氣屋が餌に釣られて、弱い鰭を動かして食ひに行く。潜水子は彼の泳ぐ位の速力で餌をうつぼの方に進める。斯うして蓄電池を充實した儘の彼れをうつぼの前に導く事が出來た。猛魚うつぼは目前で電氣屋の薄のろが御馳走を喰べて居るのを見ては見逃す事が出來ない。一瞬にして彼の強い鋭い歯が電氣屋の前面凹溝を突きさした。しびれえいが何時もの弱い鰭でばた／＼二三回動いたが動かない。彼の薄のろが感覺が鈍で、鋭いうつぼの一嚙を前面に受けても痛くないのか？うつぼは如何した。今度は動かない。嚙みついた儘だ。何故例の如く匿れ家に引き込まないのか。潜水子が近づいて鋏先きで動かして見るところに[illegible]位では決して死なぬ、[illegible]に呆氣ない死に方た。然し小時にしてうつぼは鰭を動かしたよろ／＼と岩の下に這ひ込んだのを見ると彼は假死の狀態にあつたものか？潜水子が斯様な事をやつてる内にしびれえいは逃げて仕舞つたが、自然の狀況では斯うしてうつぼは喰はれてしまふのであらう。

たことしびれえい

うつぼとしびれえいは前述の如く一も二もなくしびれえいの勝ちになつた。然らば矢張り文明の利器を備へて居るものは魚類でも一番強いかと云ふに、相手の武器によつては強いもの、必ずしも強くない。たこの如く始めから足の一本や二本は犠牲にして居るものがある。お腹が空けば自分で自分の足をも食ふと云ふ、而して後から足は何本でも成長して來ると云ふ便利なものがある。しびれえいが居るとたこが岩から出て行く。例の如く惡戯者が喧嘩を仕掛ける。薄のろな電氣屋は忽ち彼の足で絡みつけられる。遂にはたこが彼の背中に居据はつて仕舞ふ。電氣屋が弱はい鰭でばた／＼するが、たこの他の足が岩礁を確かと押へて居る。小さいたこであるとしびれえいの背中に据つてえいがばた／＼泳いで歩るくのに負さつて居る。潜水子が捕つて見ると已にしびれえいの背中の肉は酒杯一つ程食ひ取られて居た。彼の電氣は如

何にしたか。何も役に立たないのか？否彼れはたこの足で絡まれた頃好機逸すべからずと全身の電力を注いだらう。然し彼の足は不死身だ。何んでもなかつた。電氣屋の蓄電池が空らになつた頃彼の背中にのつて居る横着物がばり〳〵と背の肉を喰ひ始めた。何故に此食ひ始めた時、即ち不死身でない掛替のないたこの頭腦中樞に電擊を與へなかつたか？　たこが美肉を以て彼の背に載つた。電氣屋一流の電擊を與へた。背中の美肉は死んだらう。そろ〳〵下して食つてやらうか位にしびれえいが思つて居る頃、不死身のたこがばり〳〵背中を喰ひ始めたのだ。もう十八番の蓄電池が空つぽだ。之程の文明の武器を貰



たこのしびれえい襲擊

しびれえいの食餌法

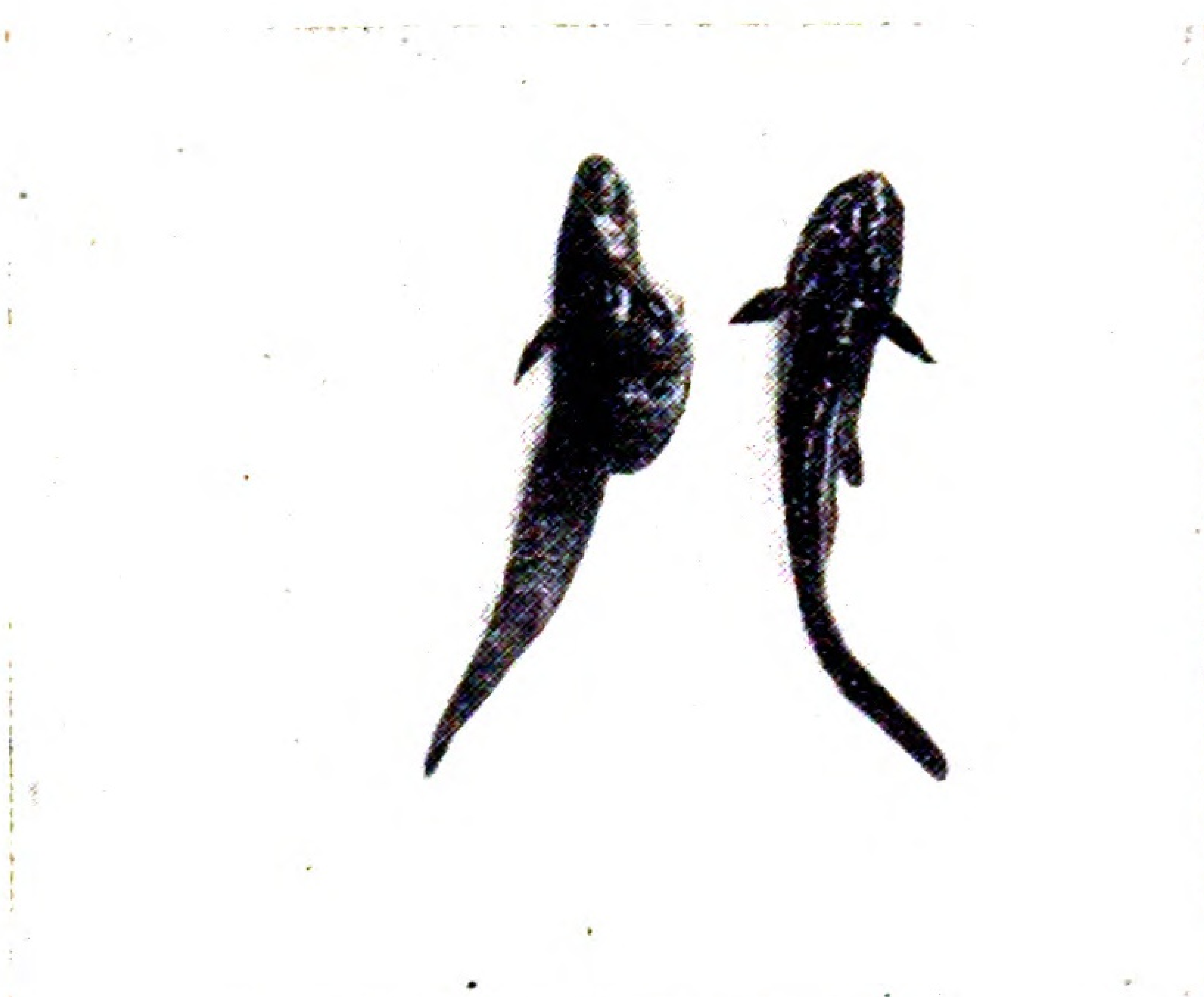
しびれえいは前二者の様に食ふか食はれるかと云ふ様な甚だ危險な生活法を常にやつて居るのでは勿論ない。斯様な事では生物が適者生存と云ふ事は出來ない。彼れは常には小魚を食餌として居る。小魚を捕へる時には電氣も何も要らぬので、彼れが岩礁附近の砂底に全身に砂を薄すく掩ふて小さい目だけを出して注意して居ればいい。砂で掩ふ事は甚だ容易で、彼の團扇の如き圓形の圓邊にある鰭をばた〳〵と五六回も動かすときは彼の全身は見えなくなつて仕舞ふのである。然して小魚が附近を通過すると其儘徐々と接近し、不意にぱたりと彼の身體を起すと海底と彼の扁平なる腹面の間には大きい口が出來て一度に數疋の小魚が彼の腹下に敷かれるのである。彼の腹の皮は厚くて粘液が發する。彼等小魚は直ちに死するので之れを前方の口中に送つてゆる〳〵と喰ふのである。潜水子がしびれえいが小魚を押へ込んだ直ぐ後から行つて小魚をとつて見ても、此等の小魚は其鰓の邊に粘液が附着して窒息して生きては居ないのである。而して其腹面の皮は中々厚く無感覺らしく、種々の猛毒を含んだ刺をもつ小魚をも平氣で押て居るのである。次圖はしびれえいがごんずいと云ふ背鰭の刺に猛毒含む小さいなまずの様な形狀をした魚を食ふて居る所である。此小へ


ごんすいを屠へんとするしびれえい

いた跡に此小魚が死んで捨てゝあつて、海水浴などに裸足で海岸散歩などして、之を踏んで痛い目に合つた人も澤山にあるのである。しびれえいは小魚を腹下に押へて特意の電撃で一度に殺すと云ふ説もあるが、潜水子の見る所では、其直後も彼が強力な電氣を使用する事が出來るので前者を眞としたのである。

ごんずい

前篇に、猛毒を有すると云ふごんずいと云ふ魚が出て來るがこれはぎぎよとも云ひ、六月産卵の頃は砂底あじ藻の中にも居るが多くは漁礁の外縁で一尺位高さの魚棚の間に群集して居る。魚棚と云ふは漁礁が海水に浸蝕されて固い所だけ殘り、丁度物置棚の樣になつて居る所である。ごんずいは大きいのは八寸に足らぬのがあるが普通には五寸以下のが多い。體が黒色又は泥黒色で、吻端には六本の大きいひげがあり、之れより體側面に添ふて尾迄黄色の奇麗な側線の樣なものが矢張り六本、前後に貫通して居る。頭が大きくてなまずの樣な形狀であるが、前者と違つて、他の魚類など食はない。主として各種の魚類の仔魚又は海藻に附着して居る小虫を食して居る。其卵は黄褐色で甚だ大きい、徑が一粍もある。一體魚類の卵はふかとかえいなどを除いては甚だ微粒であるが、之れは體小なるに係はらず鮭について大さい卵を持て居る。而して猛毒を含む毒刺は背に一本、並びに胸鰭に各一本づゝ、計三本である。毒刺の先端は逆目に歯があり、先端鋭い部分の外は皮に匿れて居る。其毒刺は唯一つの武器であつて、鰭ら軟かく且弱い。泳


ごんずいの雌雄

く速力は勿論云ふに足らないが、狭まい岩礁の間にあつて屈曲回轉甚だ自由である。右寫眞は一は雌ごんずいの胞卵を孕めるもの、一は雄魚である。其熟卵は甚だ美味である。尙ほごんずいは魚類の內でも味のよい魚、殊に秋季に其味最も佳、而して料理としてはごんずいの味噌汁として稱美せられる。春は其味惡く殊に産卵期のもの然りとする。

ごんずいの害敵防禦

ごんずいは斯く美味な肉の持主で、游泳が遲鈍であるから色々な魚類から襲はれる。彼の頼みとする所は三本の毒刺である。害敵の之れを窺ふものある時又は潜水夫の彼の群に接近する時は、ごんずいの群は岩角の下又は魚棚の狭まい所に益々濃密に集まる。而して殆んど數十疋又は百數十疋の群が固つて團子の如くグル／＼と廻はつて泳ぐのである。潜水夫が棒を以て其群の中央を押す時此棒をグル／＼と廻はる。殆んど無我無中で之を廻はる。岩角から徐ろに棒を離して其下に手網を敷いて置いても網など何の懸念もなく只棒を廻はる。漁師は其習性を利用して海底にごんずいの群を見る時は、長き竹竿を其中に立て、魚群が之が周圍を廻はるや徐々に引き揚げ、長い柄の手網を以て掬ひ捕ること容易である。何故ごんずいが斯樣なものを廻はるか。今潜水子か獰猛なうつぼを餌で突いてばたぐる奴を此ごんずいの群に入れる。ごんずいがぐる／＼と廻ると餌先のうつぼは已にぐつたりとして死にかゝつて居る。彼の皮膚の赤い點々はごんずいの毒刺の傷を痛

するのである。斯くてごんずいの害敵に對する動作は濃厚たる一團となつて全游力でぐる／＼舞ふ事で、如何なる強敵と雖も此ごんずいの一團に首を入れるや否や幾百本の毒刺は立ちどころに見舞ふので、恰も陸上の蜂が唯一疋の力では甚だ弱いものだが、其巣をおびやかすものあらんか、尻に毒劍を以つ多數の力を以て防ぐ如くである。

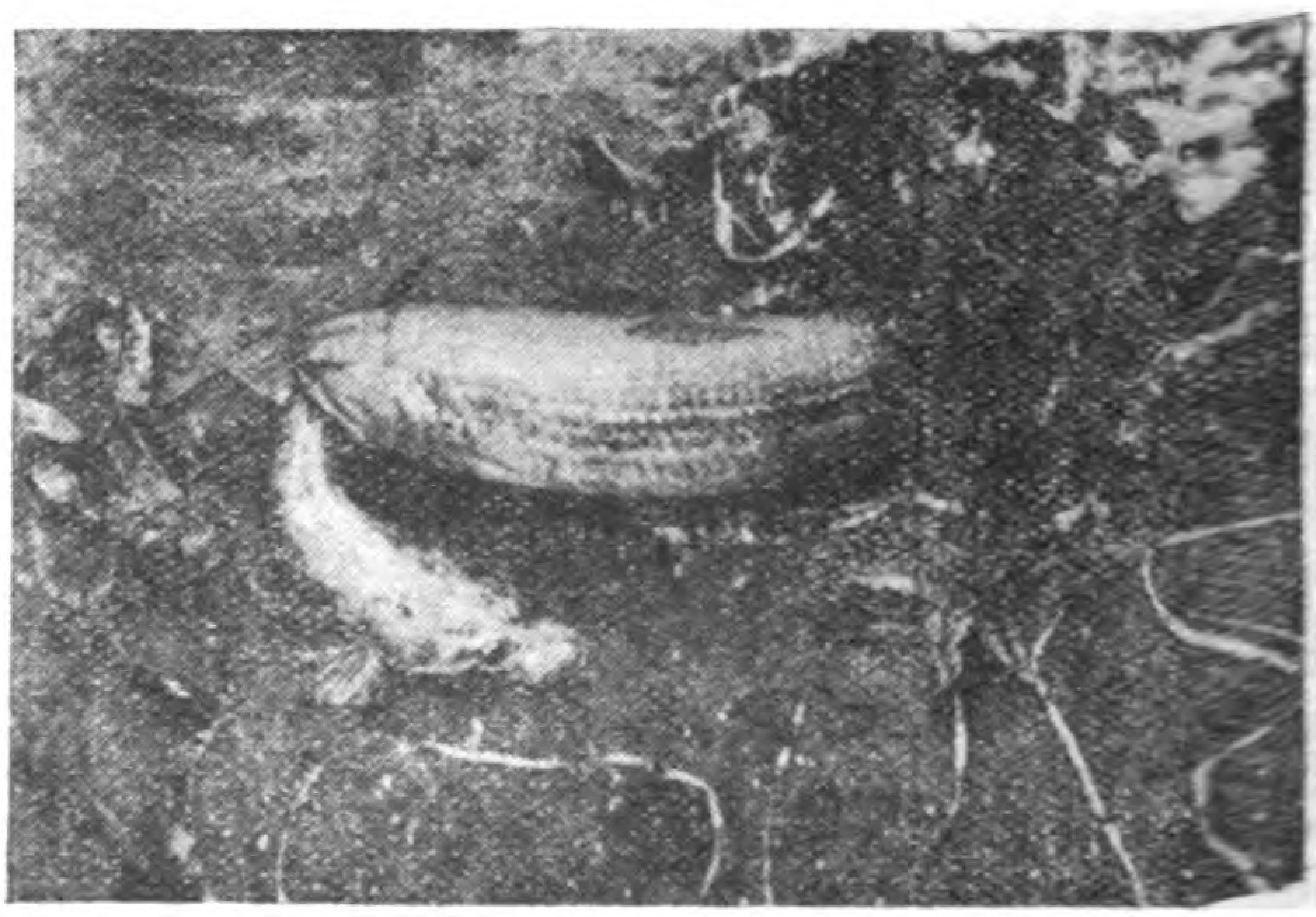
ごんずいのひげ

ごんずいは其口の周圍に丁度どぢやうの樣に六本の肉質の強いひげがある。人間のひげなら何の役にも立たないが、ごんずいのひげは其手である。又は食物を口中に運ぶ所の箸又は匙に相當するものである。ごんずいは鰭が弱く速さが遲く、他の魚を攻撃する樣な力がない。然し又しびれえいの樣に砂に匿れて、小魚共を一擧に斃死も押へる腹藝は勿論ない。又假りに小魚が彼の毒刺に當りて死するとするも、之れを噛み喰ふ樣な齒もない。彼の餌料は、濃密な海藻の間に居る漸く目に止まる樣な小さい仔魚とか、又は小えびの樣なものである。之等は他魚の入り來られない樣な狭苦しい岩の隙き目とか海藻の密林に無限に居る。ごんずいは斯樣な小さいものを一疋づゝ拾つて口中に入れるのでは年中食つて居ても滿腹する事はなからう。之れ、彼の口の周圍のひげは非常に敏活に動いて之等の餌料を海藻の葉又は岩の間隙から、丁度箒で掃除する樣に、大きい口の塵取りを開いて此內に取り込むのである。其他岩礁の小穴や珊瑚礁にはごかいやみゝずの樣な

蟹虫が藻山に居る、而して穴から僅かに頭部を出して餌料を求め居るが、潜水夫の如き指で其先端を押して引き出す時直ちに切れて出て來ないが、一度ごんずいの敏かく而して微妙なひげで押へられると之等の蠕虫は苦もなくズル／＼と引き出されて口中に運ばるゝのである。故に之等の豊富なる食量の爲めにごんずいは食量難と云ふ事を知らない幸福者である。故に彼の毒刺は害敵防禦専門の道具である。

ごんずいの害敵

ごんずいは多數群集するときには斯の如く有利なる防禦法を知つて居るが、食餌を探がすときには一疋又は二疋位づゝ砂泥底又は海藻の間に旅行する。殊に五六月頃になると産卵の爲め特殊の餌料蠕虫を要するのと、又此頃は梅雨時期で降水多く淺海は濁るから他魚の攻撃を受くることが少ない。殊に此頃には海藻は切れて流れる時期であつて、丁度陸上の春は海底では秋である。流れ藻に匿れながら遠く漁礁から一里も離れるものがある。而して普通と雖も晝間は害敵の難から一角に群集するが、夜間は又遠く離れ／＼になつて好きな餌料を求める。斯様に一疋づつ離れると彼の唯一の防禦法は何にもならない。勿論彼は猛毒を含む毒刺を三本も背負つて居るが、それを使用するの道がない。時には一本の毒刺位は害敵に向つて用ひられるだらうが海底は中中の猛者揃ひで僅かの傷位平氣である。前述のたこ、しひれえい、うつぼの如きも大敵であるが之等は漁礁の間に於てゞあつて、砂底又は砂泥底にあつては大なるめごちとかとうぎす、あなご等が夫々ある。左圖はめごちとうぎすであるが、兩者の間に大格鬪が起る事は圖を見て明かであらう。之れ等は何れ他日に記するが、一見其顔を見たゞけで、其獰猛さが解るであらう。此等砂底の猛者は敏捷に又鋭利なる齒を有し且つ大食家である。時には自身と等身大より少し小さいごんずいを呑み、其尻尾は口中に少しく出て居るものを見る事もある。且彼等の胃嚢は甚だ丈夫でごんずいの鋭い毒刺位何んでもない。少しの傷たに負はないのである。而して一疋か二疋位離れたごんずいは甚だ遲鈍で且つ馬鹿なもので潜水夫など行つても逃げる事を知らず、僅かに流れ藻の下などに頭を匿くし體の後半は其儘に露出して居る。而して假りに潜水夫が流れ藻を一尺ばかり前方に引きぬくとごんずい

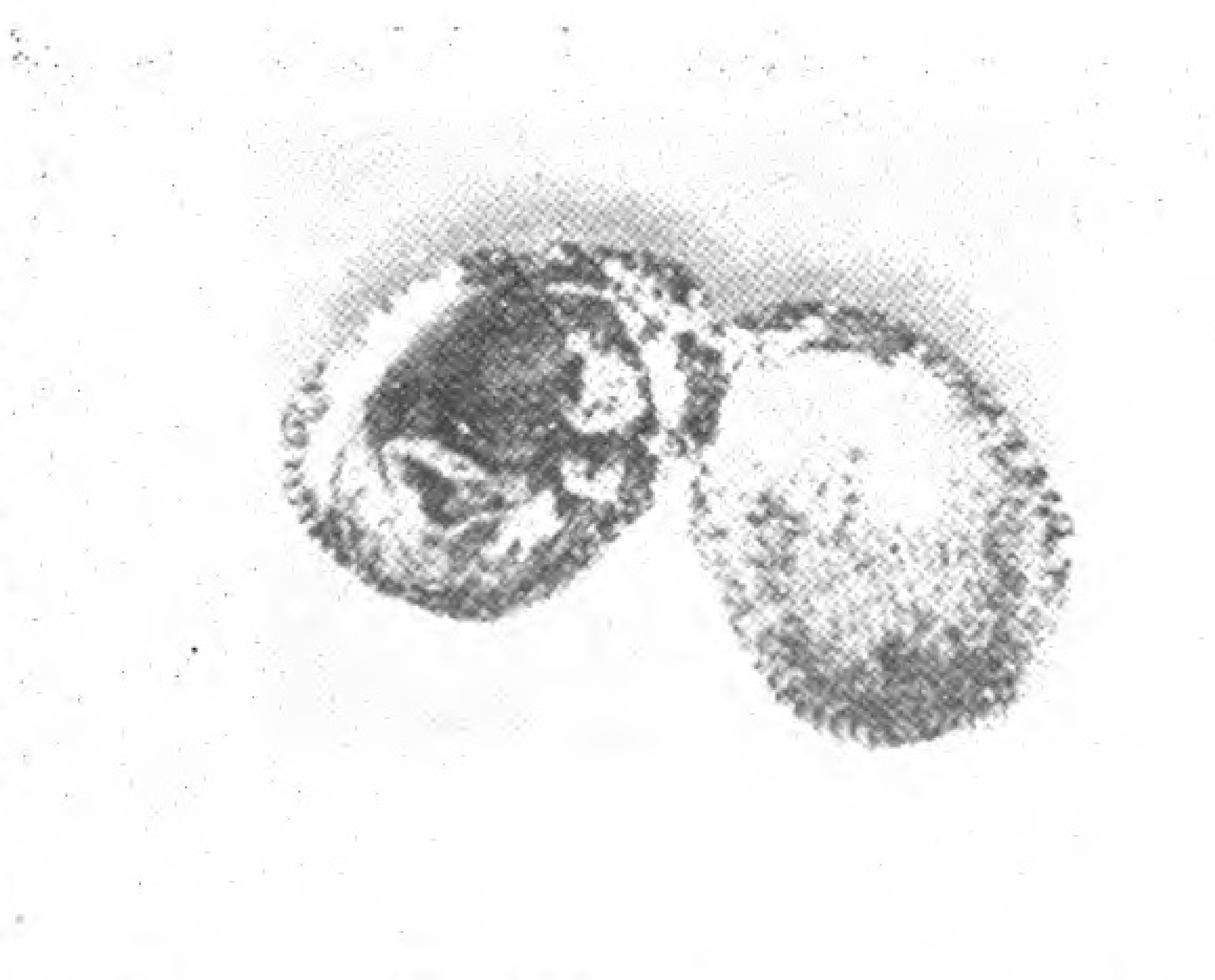


めごちとうぎすの大格鬪

は逃げもしないで再びばた／＼尻尾を動かして流れ藻の下に頭部を突き込む位が關の山である。

ごんずい彼僞善者か？

今迄の所は甚だごんずいに同情した樣な記事になつて居る。彼は毒刺あれども自ら進んで敵を斃して之れを食ふに非らず、たゞ侵略者あらばこれに備ふるのみ。弱き者相助け合ふて敵に當り、互に侵さず、而して食餌を求めて出づれば害敵滿ち／＼たりと云ふ樣である。然しごんずいは凡ての魚の仔魚を好んで食する。海中の魚類は悉く其仔魚は產み離しである。親魚が產卵するや已に其海底を去つて何處にあるかを知らず、其子は海藻の葉や岩礁の割目に附着し漸くにして潮流に漂はれず、波浪に揉まれて數ケ月の間暮すのである。六月頃海藻の藪の中には鯛の仔　ぶりの仔　かれいの仔其他各種の魚類の仔類は雲霞の如く幾億なるを知らないのである。而して之等海中の塵埃の如き仔魚は害敵を避くる事を知らず、又自分等を保護りて吳れる何物もないのである。ごんずいは容易に何の努力もなく之等の仔魚で滿腹する事が出來るのである。之等の仔魚の親から受くる迫害を、その子に恨みを晴らす積りか、之れでは人類道德から見ると、餘りに下劣なる行爲ではあるまいか。潜水子が海底で此等の有樣を見て忍びざるものがあるのである。今一例としてたこの仔魚がごんずいに食はるゝ有樣を述べて置かう。たこ、彼れに惡まれ者であるが他の魚にも優りて子煩惱である。彼れは產卵するに多くは巢を組む。或ひは石を積み重ねて害敵から侵入を防ぐべき城砦を築くもの、或ひは貝殼を利用して自ら其内に入り、產卵し孵化して一人前になりて食を求め得らるゝ迄此内に居て一歩も外出せず、我子の發育を樂しんでゐるものもある。上圖はいいだこの貝殼の家であり、小だこが其内に蟠居するを見るであらう。此内には何萬の卵が孵化されて泳ぐ樣になつて、生存競爭の世界に出て行く。而して親だこは此内に居つて、二枚の殼を開閉して、食をも取らずに瘠せ衰へて保護して居る。而して仔魚等が一粍位になり泳ぎ得る樣になると蜘蛛の子の如くバラ／＼と出て行く。石の砦又は貝殼の間から此等捕るに容易に美味なる仔魚が飛び出す。



いいだこの貝殼の家

何條ごんずい僞善者の見逃すべき、たこ塚の周圍に澤山集り來るは勿論で、若い貝殼の間に頭でも突き込んで其仔魚を捕らうとすると、親だこは怒つて直ちに閉鎖するであらう。然しながら其周圍一尺位の距離にあつて其飛び出る仔魚共を片端しから平げて行く、其のごんずいの行爲の恨みても餘りある事よ。而して親だこも亦馬鹿か。今迄狹まい一室に閉ぢ籠り、食ふものも食はず愛育した子供等が、他の

か一人はかり向うに大口を開いて居るごんずいの奴どもに食はれて居るではないか。何故に仔魚の放蕩を止めないのか。而して鬼共が行つて仕舞つてから再び安全に仔魚共を旅立たせないのか。然したこ共は平氣である。卵子産れて三日にして斷崖より其仔を捨つると云ふ、**而して無事なるものを後繼者として殘すと云ふか、たこ其積りか。母親**の許を立ち出でごんずいの薄のろに食はるゝ様なものは他日たこの體面を保ち得ないなんて云ふ事はあるまい。

又は巣の中に居てよく云ふ事を聞く仔は可愛いが、一人で飛び出して行く奴は勝手にしろと云ふのか。

今たこが巣籠り中、即ち卵が孵化せざる時は、彼れは決して其家を出ない。潜水子の惡戯者が此母親を貝殼から取り出して見ると、彼れは一生懸命に可愛い子供の家を探すであらう。而して見付けるや否や此内に飛び込んで二枚の貝殼を閉鎖するであらう。子を可愛いと云ふ事を知つて居るのか。未だ疑問である。今たこの母親を取り出して、今度は潜水子は其貝殼の内から卵を全部取り出して元の位置に置くとする。此際たこの仔魚どもは全部死滅して甚だ氣の毒ではあるが……たこの母親が如何にするかを見よう。之れを探し當てるや喜んで前回の如く飛び込んで兩蓋を閉ぢて仕舞ふ。何の爲めだ。可愛仔供はもう居ないではないか。或ひは云ふ仔魚は居らなくとも舊巣は戀しいのだらう。又は潜水夫から自分の身を守る爲めに城砦の中に入つたのだらう。人間ならば色々な事を想像するだらう。然し吾々は想像で判斷する事は止めよう。此たこを翌日又其儘にして置いて潜水子に[illegible]した海底に行き再び見ると、居る／＼元のたこが。之れで身の安全を計る爲めでない事が直ぐ解るであらう。其後二三日間繼續の潜水作**業を中止したので、其後又前の場所に行つて見ると依然としてたこが居る。彼の仔魚は一匹も居ないではないか。或ひは又卵を産みつけて**居るやも知れないから之れを取りて貝を割りて見るも一粒の卵も見ない。斯くして船上に持て來たらたこは愈々自ら殼を出た。今度は貝に入れ様としても這入らない。細い糸を以て二枚の貝殼を縛りて此内にたこを入れ元の海底に置く。翌朝に至り此細い糸を切りたこが居るや否や。斯くするとたこは直ちに飛び出して海藻の中に何處ともなく逃げ去つたのである。之れからは魚類の認識なんて面倒臭い問題になるのだが、此處には唯彼等は本能のまに／＼機械的に、其命ずる儘に働くのみであると云ふ一説を以て結んで置く。

我が學界の世界的權威

本多博士と畑井教授と

鈴木廣治

廣瀨川に沿うて、片平丁の蒼と した杉並木の邊を、朝な〳〵定刻に、晴れ曇る空合間はずの洋傘右手に赤鞄を偏片（かたへら）、長大軀を心持ち頭前に、小刻みな足取を、米ケ袋の邸から交番前の勾配のなだらかな小砂利道を、研究所通ひの本多光太郎教授を見ぬ日もない。

教授の仙臺生活は、東北理大創設にスタートする、初期理大が、日淺くして、尙其眞摯な研究は世界的視聽の認識を得、百花燎亂の華々しい黃金期を現出した、爾來十七年、教授の前半劃期的勞作による探究も此年月の間に業積されて居る。

東京理大物理の學窓を出たのは明治三十年



本多教授

れた磁氣研究の基調は既に此に根柢して居

一九一六年紀要（サイエンスレポート）所載「强磁性の理論」は、現理學部教授大久保準三博士との共同成果として、學界に其價値を重からしめた。以來、孜々として不斷の努力は、合金の實驗・合金の力學的方面・鐵鋼狀態圖考察に及び斯界に寄與貢獻の續出を見て居る。

是より先、大正五年帝國學士院より、鐵に關する研究に對して賞牌、十一年倫敦アイアン・アンド・スチール・インスチユートから最高名譽表彰の、ベツセマー賞に續き、同年帝國學士院會員への薦引等、藉甚として斯學第一人者の定石たる觀をなした。

大正八年鐵鋼研究所の創設から綜合的な金屬材料研究所として完成に至り、世界的視野に聳立する現在は、冶金・製鋼・鑄物各部、輕金部の新設も近かるべくして鐵鋼其他金屬材料の科學的研究の世界的冠位に値

し、米のビユロー・オブ・スタンダード 英の

究り大成、科學的理解力、發明的能力の偉大なるに、歐米斯學者の驚嘆に價して居る。從來、やゝともすれば、Humility を附して見られて居た本邦學界の爲に、萬丈の紅焔を禁じ得ない。

頃日、ベルリン在留研究員の書信によれば、スエーデン國の、ノーベル賞候補者として、印度、カルカツタの、ラーマン氏と共に噂に上つて居るとのこと。

明治三年生れとせば、六十歳の峠を越しかゝるところ、生國は三河、俺が國の偉人は、徳川家康と本多光太郎博士と、郷土人の誇らかさも更なること。

物理の教授時代、午後の學生研究指導に、開口一番な常套言「どうだなあ」の發端語が實驗經過を問ふ日毎の連發として學生連の微笑を誘ひ、やがて教授に捧ぐるニツクネームとなつた精力的(エナヂテツク)な根氣强い學究的の半面像には、春風駘蕩な寛容性は、家庭人として、情味滿ちた好々爺だ。眞冬の夜を徹して愛犬のお産に面倒を厭はぬ程の童心。愛宕山麓、川沿ひ邸の、南面、廣い芝生に降り積んだ雪の面に立ち雪拂ひに餘念ない冬枯朝の姿も懐かしまれる。

的に刻印されて居るらしい、亞炭層の智探、

大學御用商の長男坊、共に「光太郎」と命名して、世に榮ある老博士のごと、吾子の生先もかく幸多かれかしと祈り名づくる人の子の親心を、御本尊の光太郎先生はご存じあるまいが。



小春日和の凪ぎた正午──楓の落葉も吹き飛ばされ盡した研究所の玄關先、疎らな小枝を通して射差す溫い陽を浴びて、ベンチに靠れ、微笑を帶びて若い所員と語る甜ひの姿にも、近來頓に老の影次第に忍び寄る見ゆ、慈顔の

研究場裡を國外に求め、世界的な進出に學界驚異の目を見張らしめた邦人として、最近不幸研究に殉じた、ロックフェラー研究所に醫學博士野口英世氏、片方、ウヰスター研究所に、動物學の畑井新喜司氏の業積を指すに異論はあるまい。後者の畑井氏は、大正十二年、東北理大生物學教室開設主宰として歸朝した。

畑井教授

明治九年、青森を生地とし、二十五歳、米國イリノイズ洲シカゴ大學の特待生として、卒業後オハイオ州シンシナチ大學に教授分担をなし、二十八才、動物學及神經學の兩科に就て、ドクトル・オブ・フヒロソヒーの學位を得、其後、ペンシルバニア大學附屬ウヰスター研究所の生物學一般及び神經學研究指導を續けつゝ、此間斯界の多大なる注目を將來され、祖國の官學(アカデミイ)に迎へらるゝ、榮えある今日を到來した。

風彩に拘泥せぬ、見るからに古色蒼然な中折帽を頂き、摩擦されつくした折鞄(ケース)を抱いて、無雜作な早足で研究室に吸ひ込まれる樣

に消える教授の後姿——。

先年、聖上陛下御前講演の光榮に浴し、其「白ねづみ研究」は帝國學士院賞として表彰されて居る。近來、ロックスフエラー財團、齋藤報恩會と提携、人類生物學(Humanbiology)の研究を開始し、シンシナッチ大學ルプラン教授を招聘、人類に關する事實を科學的に究明し、其結果、概括的法則を歸納するに務めて居る——所謂、人類學・人種衞生學・優生學・民族心理學の部門も包含されて居る。

長岡半太郎博士

二神哲五郎

教授の研究、沙喫類、海鼠に關する微妙な

長岡先生は長崎縣の出身で、先生の嚴父長岡治三郎と申す方は明治維新の際地方の勤王家の主領として働かれた武士であつた。

然し先生は東京の湯島小學校に學ばれたそうだから早くから國を出られたものと思ふ。

先生は慶應元年八月生で明治二十年今の東京

考察は青森縣淺虫温泉の所在、波打際の臨海實驗所にて成されて居た、此の高層の窓から遙か津輕海峽の碧波を切つて進む連絡船も見える。

近く、環虫類蚯蚓研究に沒頭されて居る。

北米の空、南洋の極てと、隣家に行く氣安さに旅にある日の續く忙しさから歸れば、家庭的團欒を、明るい灯の街に散策妻の寛ぎ姿を見出す宵もある。朗らかな、齒切れよい、澄みきつた學識は、明るい性格を象徴(シンボライズ)して居る。

祖國に迎へられた教授の上に多幸あれ。

なられて大正十五年名譽教授となられた。

現に帝國學士院會員、ケンブリッヂ大學名譽教授たるの外日本及外國の數多の重要なる會員委員を勤め、尙理化學研究所主任、研究員東京帝國大學地震研究所研究員として研究に從事して居られる。

文を讀み外國の諸賢と對面し我國威を發揚されること實に多大である。

教授としては學生を指導すること極めて懇切、子弟に接するに何等の懸隔も無く我子に對するが如くである。

先生は近代稀に見るの大才を抱きながら刻苦精勵されること到底常人の及ばざる所で物理學上の論文の數は實に百八十七、數に於ては勿論質に於ても優に世界一流である。最初の論文が出て以來本年迄四十年で、最初の十年には二十一、次の十年には四十九、次の十年には四十一、最近の十年には七十六の論文を出され老いて益盛であることを物語つてゐる。又先生の該博なことは受持つて居られた學科でも分る。即ち電氣磁氣學、光學、電波輻射論、相對律及萬有引力論、電子論、量子論、この上に最新の物理學研究論文輪講を担任して居られた。

先生の仕事の中特に有名なものは大學卒業後間もなくなされたものでは磁氣及地球物理に關する研究で、日本の重力の測定は先生の指揮の下になされたものであり、又先生はある意味での地震學の元祖である。明治三十

現論的に扱ふことは困難なかつたのだ。明治三十四年にはインダクタンスを計算する上にθ函數を巧妙に應用され現今世界至る所で電氣を扱ふ者はその御蔭を蒙つてゐる。最近計算に必要なるθ函數の表及インダクタンスをたゞちに求める表を製作された。同三十四年原子といふものには中央に核があつて周圍を電子が運行してゐるものであるといふことを言ひだされ、これが近年の原子構造論及スペクトル學の發達の源をなしたのである。ポアンカレーは彼の著書 Valeur de la Science 中に特筆賞讃してゐる。其後引續き現今に至る



長岡教授

まで[illegible]線の微細なる構造及ゼーマン效果は特に有名なもので ある。最後に彼の有名なる水銀を金に變換する仕事は直ちに工業的に出來なくても學問上重大なことは今更申す必要もない。

理化學研究所長岡研究室は上にこの不世出の先達あり、下に勤勉なる助手ありて日日に新しきを求めて研究にいそしんで居る。

昭和とグローリー

石川欣一

御大典を記念する意味で、グローリー・昭和の兩新煙草が發賣された。所が兩方とも一向賣れぬさうである。このことは新聞に出てゐた。僕自身も、銀座の大きな煙草屋を二三軒まはつて見たが、番頭さん達、どの店でも、いや、まつたく新聞の通りですといつた。

兩新煙草の中で、昭和の方が殊に賣れぬさうである。それには理由がある。元來賣れぬ不二の葉でまいたといふのだから、專賣局の方では五錢安くしてやつた氣でゐるかも知れないが、吸ふ方は正直だ。買ふ筈がない。

グローリーは昭和にくらべると賣れ行きがよいといふ。これにも理由がある。バットを卸さないからである。バットはあるにしても一度田舎を廻つて來た、フイルムでいへば紅葉のあるのに雪が降るでなくて、月が照るのに雨が降るやうな奴を置くのだから、新鮮なのにくらべては不味い。そんなことならグローリーにしようといふことになる。

それはそれとして、僕は昭和・グローリー共にいゝ名前だと思ふ。從來の煙草、口つきはまだいゝとして、兩切の名前は、實に意味をなさぬ。アルマ、ナイル等は產地に關係があるが、スター、エヤシツプ、ゴールデン、バツトと來ると――もつともこの最後のものには一種のなつかしみは覺える――一體どんな氣まぐれで、どんな理由で、こんな名をつけたのだらうと思ふ。命名者の精神分析がしたくなる。これに對して、昭和・グローリーは如何にも御大典にふさわしく、平凡ではあるが、從來の、殊に兩切に於るやうな、不氣味さが無い。

新の意匠だつて、さう悪くはない。昭和はいさゝか洗濯石鹸の包み紙を、グローリーは[illegible]菓子を連想させるが、まア、この位なら我慢出來ぬこともない。只氣になるのは、グローリーの箱の英字だ。バットのそれに比較して、如何に分りやすく、輕薄であるかは、あながち僕がバット黨だから感じるばかりでもあるまい。まつたく、粘土をこねたやうな陰影つき金文字のゴールデンバットといふ英字、有名な「吸ふと寄るぞ」――これは僕の發見ではない――なる標語の英字、これ等は、君、世界中の煙草に向つて誇るべき、ユニークな煙草藝術だと思はないか――

――とか何とか、如何にも一本七厘らしい氣焰をあげた所で、この日本では仕方がない。本當にうまいと思ふ煙草が無いんだから。愛用十年のBBBオウンメーク・イングランドに詰めた黒猫の味、ヴアージニアの太卷の最初の一吸が與へてくれる甘凉の味、それ等に緣の遠い今の身分、煙草を語るといふのがそもそもの間違ひだ。ピン！と來る酒でつゝくはま鍋の、あひ間あひ間に吸ふのなら、昭和結構、グローリー萬歳、文句は申しますまい。

女性の模索時代

金子しげり

□

チエホフの「櫻の園」の幕切れは、櫻を切り倒す斧の音だ。崩壞しゆく日本の家族制度は何の音で表はすのが一番ふさはしいだらうか。とまれ資本主義の波が日本だけを訪はなかつたのではない以上、日本の家族制度だけが崩壞から取殘される事はない。

變形的に發達した日本の資本主義は、最近まで封建的な姿を多分に殘してゐた日本の家庭を、急激に崩壞せしめつゝある。農村の娘は工場に、都會の娘はショップガールに、タイピストに、さらに有夫の女もあらゆる職業に、その流れ出す力は、決して阻止出來るものではない。

大家族制度は都會に於ては已に全く影を潜め、小家族の家庭そのものが又經濟的不安に脅かされてゐる爲に、離婚率增加し、同じ原因が男子の晩婚を據なくせしめる事は他方に於て賣淫制度を益々盛にせしめ、カフエーの繁榮は驚くばかりである。

かくて日本婦人は將に一の變革期に臨ませられて居る。この時期に於ては、戀愛も、結婚も貞操も、家庭も子供も、全ては舊いものが毀れる。勿論新しいものがそれに代る筈であるが、その過渡期はかなり長いから、從つて過渡期の矛盾は多くの悲劇を生み、多くの犧牲を拂はせる。

私たちの周圍には、それらが渦を卷き、急速度で流れ去る。

□

この混亂期に於ける女の生活は、大部分が模索である。例へば昭和三年の婦人讀書界に[illegible]たやうな新しい、[illegible]タイプの女性[illegible]結婚一は、一戀愛の道一は、踏まれたのだ。

舊い戀愛は破つたが、新しいものはまだ築かれないといふ女が多いからだ、あれ等を讀んで、早速型通りの模倣に入つて行つた若い女を、幸か不幸か私たちは周圍に見出す。

原阿佐緒氏の行爲も、柳原義江氏を逐うた秋子氏の行動も、今日、決して新しい態度ではないけれども、舊い生活を弊履の如くすてゝ次の生活に、自由を求める姿には、昔日のやまとをみなの弱々しい影はひいてゐない。

戀愛、結婚、離婚の自由は、已に一部分の人々の間には行はれてゐるといへるのだ。

少し前、妻の俸給の問題が論じられた事があつたが、夫婦間の性的交渉に對しても、物質的報酬を支拂はせてゐる若い妻の存在をも私達は今日では知つてゐる

勿論、當事者同志が同一程度に理性も感情も解放されてゐる事は難しい。從つて、中を獲る爲の抗爭は相當に大きく、常に

の悲劇を醸し易い。

そこで、それらの煩はしさから遠く在る女同志の共棲生活、といふやうなものが、最近日本にも増加して來て居る。これも一種の新しい傾向といへるだらう。

〔二〕

性行爲を理智的にみる事は一應は正しい。然しこの事はこれを機械的に取扱ひ易いといふ事實を生み易い。その結果は、已に日本にも、自分の女性としての健康保持の爲に、戀愛抜きの性行爲を必要とする女、或は亦、、、、、、、、、、、、、、、にする女たちさへ存在するに至つて居る。

同じ矛盾が男性側に現はれる事は一向珍しくないが、その最も皮肉な一例は、一番婦人を認め、その解放のプログラムを明示してゐる無産運動の陣營中に於て、やはり性慾整理の名の下に、女を買ふ事實が多々存在する事であらう。デミドウイッチの「亂婚裁判」はそれが故に、日本でも多く女性に讀まれたのであつたではないか。

何をいふにも日本の女性史を繙くならば、全く最初の一二頁を除いた以外は、全部男性支配の歴史なのであるから、今日理性の上では立派に婦人の解放を認めてゐる人々でも、一度感情の問題になれば、二千五百年來の男性の血に左右されるのは、ある程度まで止むを得ない事ともいへるかも知れない——が。

女の方でも、案外新しい思想家などゝいはれる人の中にも、戀愛などにかけては近松型の人がゐたりする。

一體兩性問題といふものは、人間のあらゆる問題の中で、一番難しい問題ではないのだらうか。經濟組織の變革によつて來される未來の社會でも、この問題では中々割り切れない事が多いのではなからうか。だから、ロシアでも、コロンタイが「赤い戀」をかけば、一方「亂婚裁判」も出るといふ譯で、日本などはそのまだ〳〵ずつと遥か前のところで、あゝでもない、かうでもないといつて居るやうな、それで亦、とてもこういふ問題は、簡單に頭の中で割り切れてゐるらしい人もゐて、甚だ以て混沌としてゐる。

矢張り模索時代は、鼎なるかた、かも知れない。

〔三〕

女たちの模索に對して、聲を涸らして迷ひをときたがつてゐるものゝ随一は婦人雜誌であらう。婦人雜誌が資本主義社會では一個の商品以外の何物でもない事は解り切つた事だが、最近の婦人雜誌の大きな一の役割は、崩壞しゆく家族制度に對して、これを防ぎ止めやうとする點にある。

『婦人よ、家庭に歸れ。』

これが彼等の標語である。勿論この婦人雜誌も、職業婦人號を特輯して最近の婦人の進出ぶりを紹介したり、賞を懸けてスポーツを奬勵したり、一見、標語とは矛盾する方向に出づる時もあるが、これはそれ〳〵の方面に於て購讀者を獲る爲の販賣政策なので、大體は矢張り最も多數を占める家庭婦人を目懸けて編輯する事が刻下の婦人雜誌經營の秘訣であるから、黴びかゝつた良妻賢母主義などは

新時代にふさはしい[illegible]に飾りかへて、家庭婦人第一の大藏の下に收容を整へる譯である。

何處の出版物で何千圓溜めた話とか、何圓で出來る結婚衣裳とか、醫者にかゝらずに病を癒す法とか、有名な料理屋の料理法公開や好きな數だけ子供の生める法、如何にしたら夫の愛を取り戻し得るか、などの實に微に入り細を穿つた內容は、一口にいへば、如何にしたら今日の壞れかゝつた家族制度を支え得るかの具體案の羅列に他ならない。

模索の苦惱に耐へ得ない女のためにこれは全く一種の甘い菓子である。

□

昭和四年は日本の女の上に何々を齎すであらうか、それは今日測り知る事は出來ないけれども、この年も私たちはこの過渡期の騷音の中に暮さねばならない事だけは確かである。そして恐らく騷音は益々囂しく、流れは愈々急速になるだらう。模索時代は續く、である。

私こそは、未來の世の中を暗示し得る具體的な事實を一つでも多く見出したいと切望する。消費組合運動の如き、その一つである。それが理論の殿堂の玄關口をうろ〱して居る間は、まだまだ婦人大衆のものにはならない。今年こそはそれが巷に出る事を希はずにはゐられない。勞働婦人の合宿所、乳幼兒の托兒所、授産場なども同じ運動に附隨して實行の緒についてほしい。

いふまでもなく資本主義社會の中で、それらを建設する事は全く容易ではないが、事實が教へる力は大きいのだから、一日も早くそのプランなりとも示される方がいゝのではないか。

昭和三年度に於て著しく進展した自由主義的婦人運動も恐らく、四年度に於ては更に進出の度を增すであらう。日本の社會進化の上に、日本の婦人インテリゲンチアが、當然の使命を果す日が來てゐるやうにも考へられる。

[illegible]に屬する問題についても、本社は更に近に討議さるゝ機會があつたい。

實際、何が新しい女性的なものであるかについて、まだ今日の私たち女共は、しつかりと動かないものを把握してはゐないといふ事は過言ではない。私たちは從來の女から、封建的な、ブルジョア的な全てを捨てさる事に躊躇はしない。然し後に殘るだけが、本當の女であるか、或は又、永年の間に失ひつくした本當の女があるか、或は亦まるで新しい女がそこに加はるのか、女性の智慧は今日かすか乍らにそれを直觀せしめるけれども、これが明確に女たちに指示せられなくてはならない。

その事は、女性の問題の中では何よりも大切な事で、女たちは意識的にも、無意識的にも常に絶えず待ちつゞけてゐる事なのだ。今年といふ年が、その意味で何か光を女性の上に與へてくれる年になつて欲しいと、いま私は思つてゐる。



現代の歌舞伎

灰野庄平

一

現代の歌舞伎は電燈の中の歌舞伎である。明るく露はれて居る。而もそれには現代の器械の陰影がついて居る。

此の歌舞伎が日本の現代の演劇を代表して居るものである。最近市川左團次一座がソヴイエット聯邦に聘されて其處の舞臺で演じたものは忠臣藏であり、娘道成寺であり、修善寺物語である。此の歌舞伎である。

代表して居るだけではなくて、歌舞伎は殆んど現代の劇壇を獨占して居る觀がないではない。歌舞伎座、帝國劇場をはじめ一日千人以上の觀衆を收容し得る大劇場が東京の中央に六つある。此等の劇場に於て殆んど毎月上場される演劇は大部分歌舞伎である。

此等劇場の興行日數を二十日乃至二十五日と見、入場觀衆を收容可能人數の六分の一と見なしても、

江戸歌舞伎の爛熟時代と目される文化年間の三座の大きさを見るに間口十二間乃至十三間半、奥行二十一間半乃至二十二間、棟高二丈八尺七寸乃至二丈九尺五寸である。之を現在に比較すると、第一階建坪九百十坪、本館の屋根の高さ百尺なる歌舞伎座が當時の三座を悉く併せて優に收容し得る筈である。東京を中心とする歌舞伎俳優だけを數へても略五百五十人に達して居る。

歌舞伎は今外觀に於て、物質的實力に於て空前の繁榮に達して居ると見ることが出來る。

此の全盛の歌舞伎に對して、現代に生存する人々は如何云ふ態度を探つて居るだらうか。

歌舞伎に、世界に共通する現代人の精神と直接の交渉があるかとするものが、その一である。歌舞伎には日本傳統の精神が傳はつて居る、又その形式には日本特有の美が含まれて居る、保存しなければな

か[illegible]

と[illegible]默々と從ふ十萬の觀衆こそ、實に[illegible]

にのみ順應する觀衆であらうか。

其に斯くつて歌舞伎の正體を見ると、不思議なことには、それは年々歳々變つて行つて居ることに氣がつく。

昭和三年十一月の歌舞伎座に於て演じられた與話情浮名横櫛の源冶店の一場を見ても、明らかに此事が感じられる。

市村羽左衞門の切られ與三郎と、尾上菊五郎の蝙蝠安、市川松蔦のお富との間には、等しく歌舞伎と呼ばれながらに、明らかに一と時代の相違が技藝の上に確然と認められる。技藝の巧拙若しくは年齢の相違ではない。

團菊と共に歌舞伎は滅して居ると云ふ論者もある樣である。けれども『高時』の天狗の舞の囃子を聞いても九代目團十郎と云ふ人の持つた歌舞伎の味が髣髴として來る。又、『牡丹燈籠』のお露お米の亡靈の出る際に用ゐられる何處か片附いた拍子の中に媚いた味のある囃子を耳にすると五代目菊五郎の趣味の幽靈を今に感じる。それは歌舞伎以外のものではない。けれども團菊の死と共に歌舞伎は一皮、衣を剝いだに違ひない。中村梅玉、中村歌六、淺尾工左衞門を亡つたことで歌舞伎の時代は一つ新らしくなつて居る。市川團藏、市川段四郎を失ふと共に歌舞伎は更に轉じて居る。尾上松助を失つて歌舞伎は又面目を改めて居る。又澤之助、工左衞門、訥朝等が宮戸座に據つた時其處に或

三[illegible]

時[illegible]

年、な右衞門等に演じた舞臺畫樣には一種の[illegible]

此人々が集つたとしても恐らくは當時の味には再び齎されて來ないであらう。今、羽左衞門梅幸によつて代表される歌舞伎の一つの時代がある。それも次第に變つて行くに違ひない。

保存さるべき江戸歌舞伎が斯の如く變轉して行つて居る。更に、新作に據つて歌舞伎俳優の演ずる處は、殆んど何物をも消化して行かうとする勢ひが見える。而も、その演じられた新しい物に何處か歌舞伎の影が離れない。保存論者も反對論者も等しく疑惧の念に驅られるのは此點である。默々として從ふ十萬の觀衆は、此の進み行く正體に追隨するのである。演劇に追隨するものと見るべきである。保存論者と反對論者と等しく歌舞伎と見做すものは、脫ぎ捨てゝも脫ぎ捨てゝも、陰の如く纏うて行く歌舞伎の衣ではあるまいか。

衣か肉體か、更に歌舞伎について詮索をすゝめて見度い。

二

過去二十年の間にあつても、觀衆が殆んど、歌舞伎に對して無批判に渇仰して居る時代があつた。

其時代に於ても伎藝の巧拙に關する批判は勿論盛んではあつたが、歌舞伎が時代精神と氣息相通ずるものか如何かと云ふ根本的な疑と

惧は持たれなかつた時代であつた。所謂知識階級も繪畫彫刻を鑑賞し、音樂を樂しむ樣に歌舞伎劇場に出入する事を恥とした程であつた。其の當時には、舞臺以外にも、劇場の至る處に歌舞伎的な氣分が浮遊して居た。若い人達は片しやぎりの音に胸をときめかせながら自分の桝へ急いだ。

次の時代が來た。藝術界を支配して居た現代意識が此の別天地へも押し寄せて來た。智識階級は歌舞伎の内容を象徴的に觀る道を拓いて行つたのである。その人達の考へ方の底には、『進化は螺旋形を描いて行く、その中を永久の人生が流れて居る。或る階段に進んだ現在は、時代と境遇とは形を變へて居ながら丁度その下の螺旋の位相にあつた過去と、永久の人情に於て共鳴する點がある』と云つた哲學が潜んで居た樣である。俳優に現代の精神に關する理解があつて、近代の神經と感覺とを表現力に備へて居たら、十分に此の共鳴を訴へることが出來ると考へた樣である。俳優と云ふ良マイクロフォンで、過去を現代のレシーバアへ送られると云ふ考へだつたのである。武士時代の宿命を自然の不可抗力と同樣に觀たり、盛綱や松王の迷を、現代倫理の正義と人情の岐路の單純化と觀たりする道である『お國と五平』に描かれた人情の融合に、列國間の離合關係を觀た外交官もあつた『沼津』の不作か、股五郎の落ち行く先を、重兵衛に教へる方法に、一種の效

る意味を讀んで行く方法は稍進んで行くかも知れない。しかし直截と前進に焦燥して居る現在の風潮はヴェールを振ひ落して物の赤裸々な姿を見やうとして居る。

第三の時代は來て居る。現代の精神を表はすには現代の形式がある。何を苦しんで過去の形式に現代を覗いて發見しやうとする窮屈な思をすることが要らう。現代の作品が發表されて行く、現代の作品が現代の形式を以て演出されて行く。いきほひ歌舞伎の路は保存の一途に限られて來ることになる。

此處で、「歌舞伎は衣か肉體か」の考へと落ち合つた。

歌舞伎の存在を保存の一途に限るとせば、脱ぎ捨てる衣を、脱がせずにそのまゝに保存して行き度いことは山々である。けれども、歌舞伎は生き物である。『美よ止まれ』と命じて、凝固したものを博物館の硝子棚に保管して置くと云ふことは出來ない有機體なのである。舞臺の保存は舞臺に待たなければならない。舞臺を支持するものは觀衆である。舞臺に現代と氣息相通するものがなかつたら、觀衆は默々として去るだけである。歌舞伎は衣を脱ぎ捨てゝ時代を追はなければならないのである。歌舞伎は衣であり、同時に生きた肉體だからである。

三

[illegible]様な一新面を拓いて來た[illegible]のであり、[illegible]は[illegible]に[illegible]女性の如く、適應性に富みて、又昔々が想像する現在の支那の如く、茫漠とした複雜性を持つて居る藝術である。此適應性と複雜性を以て[illegible]時は、此藝術の伎藝上の獨特な味を包むことが出來やうが、特質の一角を摑んで來ると、同時に他の多角を逸すことになつて行くのは當然である。しかし、適應性とそれから起る複雜性とを擧げたのみでは、特質を鮮明に浮上らせる手段とはならないから、逸らす處の多くあることを知りつゝ、一角を摑む方法を採らなければならない。

歌舞伎は裝飾的である。お國歌舞伎の草創時代にはファナチカルな力で觀衆を魅した處もあつたかも知れないが、山三との提携に於て能の要素を採容れて居る。能は形に於て裝飾的である。お國歌舞伎は之を崩し柔らげて居る。能の硬直的靜的男性的なるに比して婉曲に動的に女性的である。遊女の歌舞伎に至り若衆歌舞伎に至つてはすべて容姿を以て緯とし舞踊を經として居るから、その形と動きとが裝飾的要素を豐かにしたのは當然である。地藝の努力卽ち自然味の尊重が恰も此の裝飾的要素に對する反動運動の樣に受取れない事はないが、これとても、裝飾的要素の基礎があつての地藝であることは、主張者の藤十郎、あやめ等の論出に殘された姿を見れば容易く首肯されることである。

[illegible]しても[illegible][illegible]事の[illegible]が、等しく[illegible]を持つて[illegible]、[illegible]と、[illegible]度と、間とに於て能とは異なつた裝飾的要素を歌舞伎の領域に築いて來た。

浮世繪との提携は、歌舞伎の形と色彩と、これ等の組合せの調和とに於て實に豐饒な原野を拓いてくれた感がある。

此の浮世繪の提携と裝飾的技藝の愛好は、個々のきまりと云ふが如き無意味な（見方によつては無意義な）休止を作り出し、色彩の配合を幼稚な程度に止め、舞臺を平面的に靜へる病所を醸し出して居るが、隈取と云ひ、臺の形と云ひ、身振と云ひ、見えと云ひ、登場人物の配置と云ひ、或時にはこれ等が、象徵的表現法となつて、調和した裝飾技藝を磨き上げたものだと稱讚される。

裝飾的なことを歌舞伎の空間的な特色とすると、時間的な特色として、律動的であると見ることが出來る。

歌舞伎はその出生に於て既に原始的な樂劇であつた。[illegible]、六法の分派を經て、人形の移植となり、劇場音樂に於て長唄、常磐津、清元の發達を見るに至つて律動的の傾向は、せりふに於ても、動きに於ても濃厚の度を加へて來た。此等の直系である所作事が、律動的であることはいふまでもない。歌舞伎が科白劇の分派を生じ、その科白に

寧ろ主要な部分を占めるやうになつても、その律動的な特色は複雜に分化して、その科白の中に溶け込み或は摑み込まれて、全體に律動的な影を饒かにして居る。

『間のわるい役者』と云ふことは、歌舞伎の備へて居る微妙な拍子や休止若くは精神的な動律を體得する本能に鋭敏でない爲に、舞臺の有機的な雰圍氣から取殘される感を與へる俳優に對する侮蔑の意味であつて、裝飾的な要素に對する本能に鈍い爲に、『形が崩れる』とか、『恰好が惡い』とか、或は『繪にならない』とか云はれる事と同樣に、或はそれよりも更に根本的な缺陷である樣に考へられる處から推しても、如何に此の動律が歌舞伎と密接な關係に立つて居るかが覗はれる。

歌舞伎の動律は、しかし器械的な若くは、レギュラーな律ではない。拍子と云ひ、間と云ひ、抑揚と云ひ、緩急と云ふ、音樂に備はる要素は備へながら、能樂の樂律ほどにも之を墨守することはない、律はありながら不即不離の關係に置かれてある。此關係に、俳優箇々の役の解釋が活動する自由が留保されて居る。其「間」其「抑揚」に精神味が託される事になる。

動律が視覺上の裝飾的要素と結びついた動きと線にしても、所作事でない限り、決して純粹舞踊の如く、律に則したものではない。裝飾的であり、動律的であると云ふことは樣式的であると云ふことで盡きるかも知れない。寫實的模倣でなく、一種の主觀的表出だと云ふことから樣式藝術であると云ふことが出來やう。但し、一つの好態で統一されたかつた樣式であり、又雜駁た散文的要素を多分に挿んだ樣式である。

歌舞伎の樣式が他の樣式演劇のそれと異る所以は裝飾要素、動律要素そのものが、獨自であつて、細やかに他と異なつて居る事にあるのは言ふまでもないが、又歌舞伎の他の特質が此樣式と融け合つて之を染めてゐるのに依ることも爭はれない事である。

所謂『いゝろけ』もその一つである。一種の優美感觸である。性感をその底に潛めては居りながら、性感を露はに出すことによつて、取り逃してしまふ程の詩感が、その中心となつて居る優美な感觸である。

「女形は色がもとなり。元より生れ付いて美しき女形にても取廻しをりつぱにせんとすれば色がさむべし、又心をつけてしなやかにせんとはばいやみつくべし。」――あやめぐさ

これは女形に限られたことではない。技藝よりは容色を偸び、變態な同性戀愛生活を裏面に持つて居た若衆歌舞伎の俳優及びその直系である若衆方に、此「いろけ」の珍重されるのは當然である。戀愛情事を主要な技藝の區域として居る和事師にこの特質が缺く可からざる財產である事も亦當然である。藤十郎が伊左衞門の役に、自分の足の寸法よりは一寸はり小さい草履を穿いたと云ふ事なども、此の爲の用意に外ならない。

「いゝろけ」は媚めいた優美感を中心として、極めて脆く亘り、その言葉は極めて微妙かに濫用されて居る。これが歌舞伎の色彩感を限定

[illegible]に居ない。

露骨な肉感となつて迸しり、又遊里趣味が戯の中心ともなり或は随所に散在して居る。明治以後の倫理觀に素直について來た人にとつて、大都市中央の劇場に、此の華やかな巷の光景が展かれ、或は純粋な戀愛よりはずつと踏み込んだ、亂れて、萎えた男女の生活が、一種倫俗的な意向を以て扱はれて居ることに、その初め踏み越え難い理解の障壁を感じるに違ない。此處に歌舞伎に纏うて居る爭はれない江戸時代の特相がある。

歌舞伎は文化指導者ではなく、教化機關ではなく、江戸時代の民衆の娛樂であつたから、其處に江戸時代民衆の文化が反映して居るのである。經濟的餘裕にありながら、武士階級の前に膝足をのべる事の出來なかつた町人の覇氣と活力とに對する安全瓣は遊廓に於て開かれて居た。此の町人を觀衆の主要部分とする歌舞伎に遊里趣味が色濃く行き渡つたのは當然のことである。

歌舞伎の女性を表はす女形にとつて、遊女の役が珍重されて來たと云ふことは、遊女が當時の女性として最も女性味を持つて居ると考へられた爲に、之を卒業する事が自ら他の役を易々とこなし得る資格となる、と云ふ意味のあつたことは云ふまでもないが、一つは歌舞伎の狂言に遊女の役が、主要な部分を占めて居たことにも據ろ、と見な[illegible]る。此の女形が歌舞伎にとつて重要な地位を占めて居る爲に、[illegible]全體に一種の特色が生じ、更に歌舞伎を特殊な運命に追ひ込んで居るとも見る事が出來る。

此等の要素と並んで歌舞伎を豐かに色づけて居るものは荒事の要素である。活力横溢した男性味の讚美がその内に籠つては居るが、京阪地方に於て生長した實事武道の如き男性味の含む『分別』臭さを捨てて、放膽である。素朴な稚氣があり、童話的英雄味を含み、遊戯分子を多分に含んで、その口に上す所謂『つらね』の如きは八分通りナンセンスである。その出生の刺激となつた金平淨瑠璃は、淨瑠璃としての源が上方にあり、又そのつらねに六方言葉の脉があり、その用ゐる筋隈にぼかしを加へた頃より上方風の柔和味が、その儘に圓味とぼかしを加へて居るとは云ふものゝ、これ等はその養分となつたもので、荒事の花は、勃興機運にあつた江戸の地方色の産物である。之を家藝とする市川家が殆んど代々江戸歌舞伎の牛耳を取つて來たことから推しても、此要素の歌舞伎に及ぼした影響を察し得る。

又舞臺藝術としての特質としてよりも、戯曲としての歌舞伎の特質であり、之が舞臺藝術としての歌舞伎の特質に及んだものとしては、義理の對立の問題なことである。

反對感情を抱く兩派の對立と云ふことは歌舞伎に限られたことではなく、戲曲に於て、多數の觀衆の興味を凝集させる慣用手段であるが、歌舞伎に於ては、俳優に特質の分業が初まるや間もなく敵役を生じて居る程に、此の對立が明らかになつて居る。その役は惡人であつて、觀衆の憎惡の的に立つ事になつて居る。此敵役が更に細かく分化して實惡、色惡、實敵、平敵、半道等を生じて戲曲を複雜にし、舞臺の色彩を豐富にして居る。

猶讀み本と共通する點ある玄怪味、之と色彩を異にした妖怪味、滑稽味、洒脫味等々、數へて來ると盡きない樣にも思はれる。此等すべてを蔽うて、歌舞伎全體の表はす美は、理想の美でなく、一種卑俗調を帶びた美であると云ふ見解は首肯に價する。

卑俗味は江戶時代の演劇藝術に限られた特質でなく、或る藝術の發生時代及び頽廢時代に、自ら附纏ふ影ではなからうか。田樂にもあつた、狂言にもあつた。高級の明るさに達しないものに附き纏ふ垢であり、頽廢から生じた皺ではなからうか。歌舞伎に入つてからも、初代團十郎が上方へ上つて、『諸藝振田夫にして口上いやし』と云はれて居る。化政時代に入つて、贅を裏に包む通に逸れ、刺激の上に刺激を求める痲痺狀態の影がさして來て居る。天保改革以後には衰頽に苦が味が露はれて居る。此等が歌舞伎の卑俗味を作つて居る。

此等を通じて江戶時代に醸された一脈の色彩が纏まつて居る。田樂と共になり、猥雜と醜る形態は何代の間にも明らかで、あらゆ、これは歌舞伎を包む衣である。剝げばその下から異形と似通うた色を備へた衣が再び露はれて來る。肉體についた衣である。

四

歌舞伎の頭は焦慮して時代と共に走らうとして、頻りに蟬脫して居る。歌舞伎の尾は、獨特の衣を保存しやうとして惱んで居る。胴體はその中間に立つて、前せんか止まらんかと惱んで居る。

觀衆は默々として之を觀て居る。

歌舞伎保存すべきものとせば、今がその時ではなからうか。女形は未だ健在である。その特質を豐に備へた立役はある。但しこれ等の人もやがて凋落する時が來る。此等の後とても、歌舞伎は存在しやう、しかし名だけの歌舞伎となることはなからうか。

能樂の樂師が云つて居る。古面を見ると、伎藝について教へられる所が多いと。保存は生きた興行以外に物質的保存の設備が必要である。

但し歌舞伎は保存すべきか蟬脫して進むべきか。之を默々として劇場に入り劇場を去る十萬の觀衆に問ふ。

世界各國最近の動向

總選擧を前にせる英國

蠟山政道

一

一國の動きが、多かれ少かれ、他國に影響を有つ今日の時代に於て、總選擧といふことが、その動きの焦點として見られるのは、怪むを須ひない。曾つては、全く一國限りの出來事であつた總選擧も、少くとも今日の歐洲に於ては、その影響は國際的であると見られ得る。そのことは、歐洲戰後に於て行はれた歐洲主要國に於ける總選擧の歷史を顧ると明かだ。國境を異にした國々の選擧民が同じ政情の脈搏を有するかの如く、或は強く或は弱くはあるが、一國に於て保守的な政黨の勝利は他國に於ても比較的同じ傾向を有する政黨に有利な結果を與へる。一九二三年から四年にかけての自由主義の勝利は、英國に於て勞働黨を、佛國に於て急進社會黨を中心とする內閣を作らしめた。而して又、その後に於ける反動の浪はやはり各國を見舞つた。今年の春獨佛に於て行はれた總選擧の結果を見ても、前者に於て社會民主黨の進出と國權黨の凋落とは、後者に於てポアンカレー政府の再勝利を見たとは云へ、その態度を著しく自由主義化せしめた。佛國政治の一根幹たる鐵工業が、歐洲鋼鐵トラストを通して、獨逸の鐵工業と協調を遂げつゝある時、ブリアンとストレーゼマンとの間にも一脈の通ずるものが存し得る譯であらう。之を以て直に自由主義の擡頭と言へないまでも、保守的な政黨にとつて幾分風向が變つて來たことだけは確かな徵表である。なぜなら、通貨安定の問題はあらかた片がつき、今は再び歐洲經濟界を國際的に結合し始めると共に、石炭業や精糖業やの如き各國とも共通に苦境に在る產業問題を有してゐる。歐洲の政治は微かながらフエデラリズムの糸によつて結ばれつゝある。相反する主義を有し、相容れない政策を行ふ所の政府が併立することは、最早各國家にとつて不利益となれる時代が到來しつゝあるのではあるまいか。勿論歐洲にも共產黨のロシアやフ

アシストの伊太利が儼として存在してゐる。が、それはこの豫想を否認するものではなく、それらの國々が他動的若しくは自動的に自らを孤立せしめてゐることを示すものに外ならない。相互關係の存する限り、又は存しようとする限り、他國民の政情の動きを無視して、自國民のみの夫れを決定し得ないのである。然らざる限り、無用の紛爭と軋轢とを重ぬるの外はなく、內治外交共に停頓の止むなきに至る。

然し乍ら、かやうな國際政治の呼吸を共通に感じ得る爲めには、そこにデモクラシーの政治的訓練と長い間の國際的經驗が存在しなければならぬ。又既に述べた如く、國際間の經濟的關係の密接さが各國民の政治的意識を變革せしめて居らねばならぬ。かやうな條件の未だ具はらざる場合に於ては、各國家の奏でる政治的行進曲は、まちまちで毫もそこに階調を期待し得ない。そこには「自主」や「獨立」の名の下に低級なる國家政治の横行が許容されるのは止むを得ない自然の數であらう。現に、我々は之を歐洲以外の世界、即ち北米合衆國を含めての太平洋方面に之を見る。それは飛躍を許さない進化の階段である。從つて、歐洲の出來事が、重大なる影響を東洋諸國の內政に齎らすといふことは在り得ない。ただ、今日は過去に比して幾分か、將來は現在よりも一層、東洋に於ても歐洲の出來事が、又その反對の場合が、互に影響を有し又有するであらうことは斷言し得る。その一例として我が對支外交を擧げて見る。支那をめぐる國際外交に於て、日本及び米國の外交は從來全く相一致しない軌道を步んで來た。華府會議以後その軌道の範圍は餘程狹められて來たけれども、內面的に何等の協調は無いと言つてよい。そこへ英國の立場が加はる。英國は北支那及び滿蒙に於て日本の立場に同じ、中支及び南支に關する限り、米國の立場に近かつた。而して今日も全體として日米兩外交に對してキヤスティング・ヴォートを握つてゐる。從つて、この歐洲に於ける一國の內政的變化の如何は、支那關係に於て日本の立場を間接に動かす力を有してゐることになる。早い話が、保守黨政府は現內閣の對支外交を是認しつゝあるけれども、勞働黨內閣は眞向から反對するであらう。なぜなら、この事は憲政會內閣當時の對支不干涉主義の實行だけでも、從來不當と思はる位單純に日本政府を攻擊して來た英國勞働黨の批評を餘程緩和せしめるに役立つた事實のあつたことからも察せられる。新聞の傳ふる所によれば、今日我が官邊の一部に日英提携論が再燃しつゝあるとの事であるが、勿論それはその內容の如何によつてのみ批判さるべきであらうが、現在の如き保守黨內閣の存續を假定した上でも、一箇の話題に止まるであらうし、況んや勞働黨內閣の下に於てをやである。今日に於てすら、極東の一國に對する歐洲一國內の政變は既に決して無關係ではない。

更に、も一つの例として我が勞働運動に對する影響を考へて見よう。我が勞働運動の指導分子は、大體に於て思想的宣傳家たるの域を脫せざる智識階級出身の少數者によつて構

成されたことなどの爲に、大衆の生活に直接影響のある政策を中心とする政治運動にまで發達するには多くの障碍をその內面に有してゐる。外國に於ける過去又は現在の社會思想及び運動理論には異常な興味を有し、各自好む所のものを模倣して異を立て互に他を排することには熱心であるが、一國の責任ある政治的經綸の具現者としての勞働諸政黨の活動には餘り興味を有してゐない。總て發達の初期にある勞働運動及び運動者の常として止むを得ない所であらう。從つて、一九二三年の英國勞働黨の第一次內閣成立が我が勞働運動に與へた影響を回想して見ても、ただ勞働黨が始めて政權を握つたと云ふこと自身に刺戟を受け、當時英國勞働黨の歷史を紹介した著書論文も相當に出たが、政權を握つて何を如何に爲したか、と云ふ政治の內容に就ては殆んど無關心であつた。即ち自國の場合に於て苦心してゐる經驗を外國の夫れと比較すると云ふ程度に達してゐなかつたし、況んや共に共通の政策を行ふと云ふやうな實力も氣持も有してゐないのである。然し乍ら、我國の勞働運動は、その後幾個かのセクションに分裂しながらも、已が守る所を守つて行くと云ふ態度を左右兩極に於て見出され得ることの原因の一つは、外國に於ける實例の示す力に負ふてゐると考へられる。左翼の夫れがロシア共產黨の完全なる模倣とのみ言へないやうに、右翼の夫れも英國勞働黨の忠實なる追隨者であると言へまいが、その何れもが據り所のあるやうな自信を示して互に讓らないのには、そうした外國の實例に負ふ所があると見て差支ない。そこで、結局は今日見るやうな中間的な小派が解消して、共產黨派と勞働黨派との二つになるであらうが、そうした機緣を與ふる因子として外國に於ける共產黨の成否と勞働黨の成否とが大に働くことは想像せられる。具體的にどの政黨が眞に英國勞働黨のやうな政黨になるかは問題であるが、そうしたものゝ成立し發展し行くことだけは疑ない。從つて來るべき英國の政變を機會として、若し勞働黨の大勝が見られるならば、必ずや我が右翼の無產政黨の指導者の地盤は更に強固のものとなるであらう。かやうな意味に於て、いろいろの方面から、大にしては政府の外交政策の上に、小にしては無產政黨の動向の上に、多少の關係あるものとして、英國の總選擧とその結果とは我々の興味を惹くに足るものがある。

二

總選擧の結果に就て豫言を試みることは本文の目的でない。多くの人は勞働黨及び自由黨の進出に就て語り、二者を合すれば悠に絕對多數を獲得するであらう、即ち今日保守黨の有する絕對多數の破られることだけは確信されてゐるやうである。そこで、若し勞働黨が單獨で內閣を組織し得ない場合、自由黨と提携若しくは合流する問題が種々論議されてゐる。然しかやうなことは、本文の趣旨からどうでもよい。ここでは、ただ總選擧を前にして政權を爭ふ二政黨の活動の基調が奈邊に存するか、國民がそれを如何に理解しつゝあるかに就て語つて見ようと思ふ。なぜなら、

民衆の理解ある支持のみが、眞に大なる事業を行はしむるものであるから、總選擧によつて勝利を得る前に民衆の訓練と理解とを確保した政黨が眞の勝利者なのである。從つて、前回の如く、ジノヴイエフ事件などによつて獲得した多數の浮動投票の如きは保守黨に對して眞の力を與ふるものでない。勿論かうした種類の投票が勝利を決定する力を有してはゐる。ここに現在の議會制度が投票箱デモクラシーの汚名を負はねばならぬ缺陷がある。然し、かうした浮動投票と雖も、ただ彼等に積極的の考へが無い丈けであつて、消極的には自己の「好かない」ものを排斥すると云ふ傾向に於て働いてゐるのである。であるから、勞働黨が「赤化」の逆宣傳に於て一敗地に塗れたとしたならば、浮動的な民衆によつて嫌はれてゐるボルシエヴイズムとの關係に就て自らを是正し、是等の點に就て大衆をして正確な智識を有たしむるに缺くる所あつたと云ふ責は免れ得ない。そこに彼等の主義とするデモクラシーの見地からしても、傷すべくして傷されざりし大衆の政治教育が不充分であつた證左がある譯である。

大體に於て英國の如き比較的政治的訓練の進歩した國に於ては、大衆は政府の事業成績及び政策効果の問題を基準として判斷する。社會主義乎國家主義乎と云ふやうな新らしい問題が、政治教育の充分發達しない時に、突如として選擧戰のスローガンとして叫ばれると民衆のサイコロジーは混亂と恐怖に陷つて群集心理に近い行動が現れ、保守主義は思はない勝利を得る。然し、今日に於ては、最早かうしたスローガンは英國の選擧民を脅かす力は無くなつた。そこで、再び昔の傳統的な冷靜な判斷に立ち返つて、社會主義の實際政策と保守主義の實際方策及び近時新たなる政策を掲げつゝある自由主義とを比較するやうになつた。

然らば如何なる具體的な問題が選擧戰の題目となるであらうか。又現になりつゝあるか。この點に就ては、細目の問題になれば人々の意見に岐れてゐるであらうが、根本的な問題は、英國産業の將來と云ふことであると見て誤りはなからう。英國産業の衰退と云ふことはよく言はれてゐることであるし、又その覇權の失墜と云ふこともよく説かれる所であるが、かうした説明は決して事柄の眞相を充分に傳えてゐるものではない。成程失業者は多い。最近では百三十萬に上ると云ふ。然し、これらの事實が他國と比較して經濟力の減退を意味するものとせば、決して眞實ではない。なぜなら、失業者の例にしても、その失業者に對して一週間二十志以上の失業保險金を支給してゐるものは、その産業であることを知らねばならない。又人々は外國貿易の減退を論じ、外國投資額の減少を擧げる。然し、これと雖も受取勘定は、貿易外收入を除いても依然としてプラスであつて、しかも年々増大し行く食糧品その他の輸入品の支拂をした上である。又その反面に於て外國投資額は少くはなつたけれども、國内投資額は年々増加して行つてゐることも忘れてはならない。英國の産業の沈衰なることはしかく簡單

[illegible]の種類とその地位の上に生じ來つた避け難き變化なのである。それは一種の産業革命に外ならない。一言にして盡せば、主として外國の市場を目的とする重工業に生じた所の困難である。その顯著なるものは石炭、鋼鐵の如き事業である。從つて或る特定の地方が專らそれらの事業に依つて立つてゐるが如き場合には、鑛山や工場の閉塞によつて多數の失業者を出し、その救濟に要する異常な負擔の爲めに苦しむに至つた。その費用を支出しなければならぬ産業は、その結果として更に外國市場に對する競爭能力を弱められると云ふ二重の困難に逢着したのである。

この輸出貿易の救濟と云ふことが現在英國の最大な政治問題なのである。保守黨政府は、これに對して二つの政策を示した。一つは、産業防衞法の擴張である。これは、一九二四年の總選擧に於て公約した手前、保護關[illegible]由に依つて實施されたものである。然し乍ら、この法律の保護を受くべき産業の種類を擴張することは、今や前陣の如く表面の一理由たる貨幣價値の不安定も解決されたる今日では、正面から保護政策を採用することゝ同じことになる。これは流石に、保守黨内に於ける一派の強硬なる主張にも拘らず、ボールドゥイン首相の公然と贊成し得ない所である。ヤーマスに於ける保守黨年次大會の決議に於て鋼鐵業の保護が主張されても、政府はその實施は新に設けらるべき委員會の決定に俟つこととしてその責任を廻避しつゝあるの狀である。

他の一つの政策は、保守黨内の自由貿易派の主張にかゝる産業負擔の輕減策である。前の政策が外國品の輸入を防止することによつて自國品を保護せんとするに反し、これは外國品にかゝる租税の輕減てふ名の下に、實は[illegible]地方税改正案に含まれたる[illegible]の豫算案に示されたる所に依れば、農業に對する四百七十五萬磅を全廢し、工業及び交通業に對する四分の三の二千百萬磅を減額しようと云ふのである。主として産業救濟の見地に出でたものであつて、地方税全體に亘る社會政策的見地は毫も存してゐない。

右の二箇の政策は必ずしも排他的のものでなく、兩者共に併用し得るものたることは明かであつて、結局は共に産業保護政策のカモフラージに外ならない。而して注意すべきは、この政策の根本が、現在の英國産業の地位に生じつゝある推移又は變化を永久的のものと見ず、政府の保護施設によつて現狀のまゝに於て苦境を脫し得ると云ふ見透し又は見解に基いてゐることである。然るに、この見解に根本的に異れる立場を執れるものが、自由黨と勞働黨とである。兩者は今春以來共に調査

書又は綱領政策を發表してゐるが、共に英國産業の上に見舞へる苦境は決して一時的のものでなく、その變化は恒久的な産業組織又は系統の見えざる革命であると見做す點に一致してゐる。從つて、それに對する匡救策は、保守黨の執る如き保護政策と異り、産業の系統そのものを變化せしめ、或は既に行はれつつある變化を積極的に指導するといふ見地に立つてゐる。斯くの如く、自由黨がその傳統的立場たる自由放任政策を全く棄て、國家の積極的任務を容認するに至つたのは、注目すべき現象と言はねばならぬ。

自由黨と勞働黨とは、右の如く産業系統の變化に對する見解に一致するのみならず、外國市場と英國産業との關係に就ても略ぼ同じ立場に在る。卽ち保守黨の如く外國への輸出貿易の偏重に反對し、寧ろ英國産業の生くる道は、既に今日の不況にも拘らず益々發達しつゝある內國市場を目的とする産業の開發に重きを置くべしとなしてゐることである。この點に就ては、自由黨の代表者たるケーンズ、レートン等の見解と勞働黨の代表者たるスノーデン、ブレルスフォード等の間にすら大なる距離は存しない。然らば、この二者の分れる所は何處に存するかと云ふに、それは內地市場開發の手段に於て根本的に相容れない程度の相違がある。

自由黨は國有政策の對象として僅かに土地及び炭坑を擧ぐるに止まるに反し、勞働黨は炭坑、土地、鐵道、銀行その他重要なる工業に及ぼさんとするものであつて、前者が國有を以て止むを得ぬ手段と見るに反し、後者は可及的に行ふべき原則と見るの差異がある。單にその範圍の差異に止まらず、その經營方針に就ても前者は生産者たる勞働者代表の積極的參加を認めず、責任を主として國家官吏の手に置かんとするの立場をとつてゐる。之に反して勞働黨は出來る丈け勞働者代表の直接參加による經營統制の實を擧ぐることを主張してゐる。從つて兩者は或る個處に於て一致せる政策を示してゐる場合に於ても、その政策に對する心的態度は方向を異にしてゐると言つて差支ない。これらの事柄は、この二政黨が、保守黨てふ共同の敵に對する點に於て一致し得ても、根本的には協調し得ぬ契機を有してゐることを物語るものである。

以上は、要するに、英國産業の將來に對する三大政黨の根本方針を述べたに過ぎぬが、その方針を具體的に示す爲めには、それと關連する總ての場合に觸れる必要があり、結局は社會全體の構造に觸れることゝなる。マクドナルドが今秋バーミンガムの年次大會に於て勞働黨の新綱領たる『勞働黨と國民』の提出理由を說いた際に、「これは來るべき將來に於ける英國社會の新らしき構想である」、と言つたのは寔に至言である。惟ふに政治運動はアーキテクトニックな思想によつて導かれねばならない。自然法則の應用たる建築技術學の如く、社會法則の適用による社會構造學が學ばれねばならぬ。凡百の社會事象を對象とし、凡百の問題を一連の脈絡ある系統の下に解決して行く所に政治運動としての勞働運動の任務がある。英國社會の事象は我々日本の

[illegible]國の民衆が今や来る五月、遅くとも夏中に行はるゝ總選擧を前にして、冷靜に然かも熱意ある態度を以て、一大政變を齎らすべく夫々[illegible]して[illegible]学ぶに足るものである。

（十一月二十七日）

最近獨逸の勞働界

石濱知行

千九百二十八年十一月九日は、キールに於ける海兵の暴動をもつて序幕としたドイツ革命の十週年紀念日であつた。この十年の間にドイツの勞働運動は果して如何なる方向に向つて進みつゝあつたか――ここには極く最近の勞働運動の狀態をより詳細に示すことによつてその間に於ける勞働界の推移を略述しやうと思ふ。

資本主義は利潤追求を第一の要旨とする。しかし、生產力の異常の發達は資本の有機的構成をより高級化することによつて、漸次利潤率を減少せしめる。利潤率の低下は、資本主義そのものの存立を危うくする。殊に歐洲大戰は、歐洲列國の資本主義に對する大打擊であつた。殊にそれは戰敗國に於いて甚しかつた。急激なる資本主義崩壞論が出でたのもこのころであつた。しかし、資本主義は、やゝ立直つた。所謂安定がそれである。それに、資本主義諸國が、前世紀の末期殊に現世紀の始めから勃興した產業のカルテル及びトラスト化――乃ち獨占による價格のツリ上げによつて利潤を高くせんとする努力――を歐洲大[illegible]運動[illegible]列强に、この二つ[illegible]ら資本主義を救ひ得たのであつた。

ドイツは戰敗國として軍事的政治的にのみならず、より大規模に經濟的に破壞された。加ふるに戰後の賠償金の支拂は、ドウズ案によつて一時救濟されたが――この列强のドイツ救濟も、ドイツ資本主義崩壞による共倒れを防がんとせしもので、ドイツの經濟的救濟そのものが決して目的ではなかつたのだ――しかし五年の猶豫期間後は毎年十二億五千マルクを戰勝國に提供しなければならぬ。

この經濟的危機から自らを救ふがためには、ドイツは生產の上に大改革を加へる必要に迫られた。これドイツが戰後に於いて、强度の獨占化、及び合理化運動をなした所以で、この二つともアメリカにより傳來したものであつたが、今日に於いてはむしろ、ドイツに於いて兩者共典型的な發展をなしてゐるのは主として、それがためである。

さてこの、資本家による合理化運動は、ドイツ勞働者の上に如何なる結果を齎らしたか。資本家は合理化を行ふに當つて、それに反對したる勞働者に、物價の下落、賃銀の高騰を豫言した。しかし結果は、物價は高騰し、その高騰率は賃銀の上昇率を遙かに越え、從つて實質上の賃銀はむしろ低下してゐるのである。加ふるに勞働時間は延長し、勞働者の一人當の勞働力はより以上に費消すべく余儀なくされ、又多くの失業者を出さしめてゐるのである。例へば、ライン・ウエストファリア地方の鑛山業の七十パーセントを產出する聯合鋼鐵工場は、千九百二十六年から二十七年の間に、生產は三十七パーセント增加したにも拘らず、勞働者は僅か八・八パーセントだけ增加したに過ぎぬ。またルール地方のヴエスターグ工場では、千九百二十六年からその生產が二十七年にかけて八萬六千百三十九噸から、十一萬二千二百九十七噸に增加したに

これは各有名なるドイツ製鐵工場に於ける勞働者一人の平均生產量である。

工　場	1926 六月	1927 五月
ホッヒユーメル聯合	63.6噸	100.3
ヴエスダーグ工場	64.7	96.2
ニーダーライン工場	31.4	40.8
ヘーシユ工場	105.7	120.1
ヘンリックス工場	40.8	66.4
テイツセン工場	115.5	141.7
ウニオン工場	77.5	91.2

これを見るときは、合理化は勞働力をより強度に使用すること、勞働者より見れば如何に多くの餘剩勞働を行ふか、が推察されると思ふ。又他の統計に左の如きものがある。

年　度	石炭採掘量單位百萬噸	年平均勞働者數
1924	94.12	398115
1925	104.10	399621
1926	112.11	388757
1927	118.02	374097

るわけである。その他、病氣率、傷害率、も合理化が行はるゝに至つて一層增加を示してゐるのである。(Sobottka Die Kupitalische Rationlisierung und ihre Folgen für die Arbeiter scheft ニヨル)

かくして、合理化は、資本家にとつては合理的であるが勞働者にとつては、不合理極まるものと言はなければならぬ。資本主義の安定は、勞働者の生活をして一層不安定なるものとなしたのである。

のドイツ勞働界は、資本の攻勢、勞働爭議、左右兩翼勞働者團體——組合で言へば獨逸一般勞働組合とその反對派、政黨で言へば社會民主黨と共産黨——間の鬪爭の歴史である。今次にその重なる出來事、殊に最近一年間の重なる勞働界の出來事を述べやう。

千九百二十六年は、ドイツの景氣がやゝ良好であつたので、勞働界も活氣づいた。十一月のハンブルグ港勞働者の罷業及び十二月の織物工業に於ける多くの罷業はその重なるものであつた。

千九百二十七年は、それを繼いで多くの爭議が行はれたが、その中で最も重大であつたのは、八時間勞働制についての九月に於ける鐵鋼爭議と十月十七日から二十四日迄行はれた中部ドイツに於ける六萬八千人の褐炭勞働者の罷業であらう。今後者について言へば元來中部ドイツの勞働者は前に八時間勞働制を奪はれ、賃銀も亦頗る他に比して低廉であつた。千九百二十七年の始めには一時間當りの勞賃は、四七・二フェニッヒ乃至五七・二ソエ・フとであつたが、六日交渉の結果、二パーセント丈け増加した。それに滿足せずして、更に交渉を開始したので、勞働大臣は調停人をして、調停せしめた。調停人は、六乃至七パーセントの増給案を提議したが、勞働團はそれを拒絕して、十月十七日六萬八千人が罷業を行つた。そこで大臣は、兩當事者及び調停人を集めて仲裁々判を行つた。裁判の結果に對して、雇主は反對したが、勞働團は不滿足ながらそれを認めた。十一パーセント増給、一九二八年八月迄有效、といふ判決は、雇主の拒絕にも拘らず、大臣はそれに強制力を附與した。

千九百二十八年に入るや、劈頭、同じく中部ドイツ乃ち、マグデブルグ、ハルレ、及びデッソー・アンハルトの地方に金屬工の大罷業が行はれた。一月早々、ドイツ金屬工勞働組合は一時間十五フェニッヒ増給案を提出した。資本家側は三フェニッヒ案を出して妥協を申込んだが、組合は、勞賃が永くあまり低廉なりし理由を以て之を拒絕した。組合は勞働者に訴されて十六日罷業を宣した。之に加はりしもの二萬人、雇主側はその地方のすべての工場を封鎖して三萬人をロックアウトした。この組合は元來社會民主黨系なので、ハルレを中心として有力なる共産黨はじめ諸社會主義團體の援助を忌避した。それにも拘らず、共産黨は協同組合を通じて極力應援し、ソビエット・ロシアまた二萬マークを送つて應援した。ドイツ鋼鐵カルテルは雇主側を援け、その諸地方の雇主組合も共同して雇主側を援助した。危機迫ると見るや、勞働大臣は一月十八日、五フェニッヒ増給案を提出した。雇主側は大臣をして強制調停をなさしめんとしたのだ。組合はこれ以上抵抗することは團體契約の可能を無にすることを恐れて、この調停勞賃に應じて罷業を終結した。この罷業に於いて特に目に立つのは、社會民主々義者と共産黨との鬪爭である。あらゆる場合を通じて、社會民主黨に屬するこの組合は共産黨を排擊、中傷し、ハルレを社會民主黨の勢力下に收容しやうとした。この鬪爭の不統一は、罷業

の効果を非常に弱めた。一方伯林の道具製造工は、前年十二月、一時間一マーク五〇フェニッヒの均一最低賃銀、ステュック・アルバイトの廢止、勞働條件の確立を雇主に要求し、越えて千九百二十八年二月二十七日、千人が罷業を開始した。シーメンス・ハルスケ及びシーメンス・シュッケルトは、工場閉鎖をもつて威嚇した。罷業團は更に殘れる三千人の道具工を招集して、之に應じた。三月十日、罷業團の要求を無視せる調停案が出たが、組合はそれに屈服して、爭議を閉ぢた。

　四月に入つてルール地方で、炭坑主と坑夫との間に爭議が起つた。事の起りは、四月三十日に前協定が消滅するので、勞働者側はその改定に當つて有利なる條件を獲得せんとしたことに發する。その要求は、勞賃十五パーセントの増給、地下勞働七時間、地上勞働八時間勞働日、であつた。雇主側は勞賃値上は之を拒絶し、時間も八時間乃至八時間半と主張した。勞働大臣は調停者をして、地上勞働時間を一時間減じ、勞賃八パーセント増給、といふ調停案を出さしめた。兩者は之に應せずして、一方は罷業を以て、他方は工場閉鎖を以て威嚇し合つた。結局、勞働者側は罷業を遂行し得ずして、僅かなる勞賃増加を以て爭議を終つた。

　四月十七日、ドイツ内務大臣ウカス・コイテルは、左翼の戰鬪的鬪爭團である赤色戰士同盟（Rote Front Kämpfer Bund）の解散を、聯邦維持法第十七條第二項によつて、宣言した。この同盟は、國粹黨の私設軍隊、シュタール・ヘルム團、共和制維持派の私設軍隊、ライヒス・バナーに對應するもので、プロレタリアートの防衛團兼鬪爭團體である。現在二十八萬の同盟員を有すと言はれてゐる。この解散は、來るべき五月二十日の總選擧に對する政府の政策であつた。しかしこの宣言は、勞働者の反對に合ふて遂に、取消された。この解散宣言に於いて社會民主黨員たるプロシヤ政府の大臣グルソエジンスキーが糸を引いてゐるとの噂高く、左翼勞働團體は、それを猛烈に攻撃した。

　五月廿日共和國建設以來第四回の總選擧が、行はれた。その結果社會民主黨は議員數を二十六パーセント増加し、共産黨は二十パーセントを増加した。ドイツ國粹黨は二百萬票（三〇パーセント）を失ひ、議員數は百二人から七十三人に減じた。その他の人民黨、中央黨、民主黨の資本家黨は投票數を減じた。いま重なる政黨の投票數及び當選議員數の前回との簡單なる比較表を左にかゝげやう。

	一九二四 投票數	一九二四 當選員數	一九二八 投票數	一九二八 當選員數
社會民主黨	七・七八八・二五〇	一三一	九・一二一・四三八	一五三
ドイツ國粹黨	六・二三三・二五五	一〇三	四・三五九・五八六	七三
中央黨	四・〇六一・五九三	六九	三・七〇五・〇四〇	六二
人民黨	三・〇二七・一三三	五一	二・六六九・五四九	四五
共産黨	二・六七九・四三九	四五	三・二三二・八七七	五四
民主黨	一・九〇二・六四六	三二	一・四九二・八九九	二五

　この選擧の結果は、ブルジョア諸黨の衰頽と勞働者黨の勝利を明白に物語つてゐる。殊に壓迫を受けつつ鬪爭を續けて來た共産黨の増大は注目に價する。千九百二十八年實業家

[illegible]ン內閣、等に渡つた政權を再び社會民主黨のミュラーの指導下に戾つたわけである。社會民主黨、共產黨の增加と國粹黨、資本家黨の減少は、合理化運動の行詰り、國粹黨の不評判を物語つてゐるものと言はなければならぬ。

九月三日から四日にかけて、ハンブルグで獨逸一般勞働組合（A. D. G. B.）の年次大會が開催せられた。その席上決議案として大會を通過したものは次の如きものである。

（イ）經濟民主制（Wirtschaftsdemokratie）の獲得。
（ロ）公共教育制度に關する勞働組合の職能
（ハ）社會立法制度の確立及び自治。
（ニ）八時間勞働日。
（ホ）五月一日を法定休日とする。
（ヘ）勞働銀行の發達援助及び利用。

このA・D・G・Bはアムステルダム系の勞働組合で、これらの決議については、左翼よりの非難の聲が高い。

ウエストファアリア等の地方の製鐵業に於ける勞働者對雇主の爭議は、十月初旬以來漸次惡化し來つた。調停員は、一時間二フエニヒ乃至六フエニヒの勞賃値上を許可せんとしたが、雇主は、かゝる條件の下に於ける生產では世界の製鐵市場に於いて競爭し得ずとの理由を以て、之を拒絕し、十一月一日、工場封鎖を斷行し、勞働者を全部解雇した。解雇されし勞働者、製鐵業關係十二萬五千人、加工業十萬人、合計二十二萬五千人の多數に上つた。勞働者側は、このロックアウトを違法なりとして損害賠償の訴を提起せんとしてゐる。この工場閉鎖は永續せざるべしとの觀測が行はれてゐる。政府は、向寒時に於けるかゝる多數の失

に提出し、[illegible]

——以上がドイツ勞働界の簡單なる最近相である。合理化によつて一時安定したと稱せられたドイツの資本主義は、勞働者勢力の增大による合理化行詰りの結果如何なる經過を辿るか。勞働者に對する資本の攻勢はなほ續くか、それとも更に死物狂ひの亂舞をなすであらうか。社會民主々義者と共產主義者との戰線內に於ける分裂抗爭は、對資本家との關係に於いて、今後如何なる經路をとるであらうか。ドイツ勞働界は、これらの點に於いて、今後も亦多事多難なる經過を經ることであらう。

支那今日の政治社會運動

濱野末太郎

一、支那社會運動の特殊性

滅滿興漢の旗印から五族共和のスローガンに看板を塗代へ、更に以黨治國を指導原理とするに至つた中國革命十七ヶ年の國家生活の發展過程を共和形成期、南北交爭期、民衆運動期、國民革命期と段階付ける論者もあるが上下三千年てふ長い歷史の支那に於て、殊に現革命を尙ほ一つの鬪爭過程と見る私は十七年と云ふ短期を一期に總括して中國革命の搖籃期とする、此の間に發生した政治的、社會的問題も概括的に觀測するならば登場人物と場面に若干の相違はあつても、その內容に就ては走馬燈の如き轉開に過ぎず、唯だ時と共に運動の尖銳化を見る。

卽ち民國八年に其端を發した五四運動は民國四年の五九運動の反覆であり、十二年の二七事變は十四年の五卅事件の前驅であり、十六年二月廣東の淸黨事件は同年五月長沙に於ける排共暴動の反影である、而して支那歷代の易姓革命は別として辛亥の役後支那革命が持つ特殊性――民族解放、反帝國主義、半植民地に起りつゝある革命、ブルジョア革命、ブハーリン）――は支那最近の政治社會運動の上にも反映しつゝある、國民政府考試院長戴天仇氏も曾て支那の社會運動を三つの意義に分けて

一、民族平等と國家の獨立を要求する反帝國主義運動

二、軍閥、官僚、資本家の如き唯さへ貧乏な支那の生產階級の膏血を絞る一切の寄生階級の存在を否認する運動

三、勞働階級の生活改善を要求する運動

としたが、私は今最近數年間に起つた支那政治、社會運動を對外的（戴氏の分類の一に當る）對內的（戴氏の二、三）に分つて記して見やう。

二、對外的運動

近年支那の對外的政治社會運動としては、民國四年日本の廿一ヶ條要求問題に端を發して居る、同要求の調印された五月九日を國恥紀念日として五九運動が起され、それが輿論喚起の動機となつて對日經濟絕交となり、打倒帝國主義、回收旅大の強硬論となり、次で山東問題に絡まる五四事件と伴つて五四、五七、五九國恥紀念運動は支那の年中行事と化した。當時此等の運動の中心をなす者は學生で、全國學生聯合會が牛耳を執つて民衆運動卽學生運動、學生運動卽社會運動の觀を呈したが、民國十三年頃より國民黨の中央への政治的進出と共に其運動は組織的となり、其方法は具體化し日貨排斥の如きも最初は示威行列の余波遊戲的氣分で帽子、燐寸、セルロイド製玩具等の日貨の燒毀にあつたが、今日國民黨特別市黨部反日會の指導する日貨抵制運動は輸入日貨沒收、該貨物原價の三倍乃至五倍の罰金賦課、日本船に旅客を乘せた旅館から運賃二倍の徵收を實行し、此等罰金を救國基金として撤底的排日に努むる等極めて深刻化したもので、夫れだけ日本の經濟的打擊は決して尠くない（註）。

（註）上海市民が民國十七年六月――九月の

[illegible]額は銀元八七、六〇〇元、銀兩一五九、八七七弗に達す、又昭和二年度の日本の對支貿易は輸出入共前年度に比して夫々八三、一三八、〇〇〇圓、 二六、六四四、〇〇〇圓の激減を示した。

民國十三年五月露支協定による對等條約の大綱成るや支那國民の發憤自協愈固く、同年七月には北京に反帝國主義運動大聯盟會議開かれ、列强の侵略政策の撲滅と不平等條約廢除の宣言をなすと共に世界の被壓迫民族に對する檄文等を決議し、その實行方法として

一、遊行示威を擧行し「打倒帝國主義」の口號を高呼し、各地に於て反帝國主義のビラを撒布し、帝國主義の罪惡を講演し、各種不平等條約の廢止を主張すること

二、帝國主義各國の貨物を絶對に買はず、又それに生活品を供給せざる事

等を可決した、更に翌年二月上海內外綿會社工場に起つた罷工事件、延ては邦人經營紡績工場の罷工が間接原因をなして所謂五卅事件[illegible]の罷市となり、共同の敵帝國主義國に對する支那無產階級運動者と所謂愛國主義者との共同戰線は成立して運動は全面的となり、全支那に漲る反國際資本主義のゼネラル・ストライキを現出し、從來は中國〇〇の名に於て『工人們、農人們、學生們、一切被壓迫民族』てふ革命的民衆へ呼かけられたものが、此時は全國民衆への呼かけとなり、其鬪爭の目標もこれ迄は孫文の謂ふ所の『汝の力を唯一の敵に集中せよ、一度に多くの敵を作るな』の策を奉じて來たが、五卅事件後は日英兩國に勿論米、佛、白、伊等を含む八ケ國に向つて挑戰的態度に出た、列國殊に英國の對支政策も此事件を劃期として方向轉換を余儀なくされ、帝國主義的侵畧は名を文化事業に藉る平和的侵略と化した。玆に於て支那はその反帝國主義運動に一歩前進的成効をしたものと云へるが、その半面には勞農ロシアの後援、米國の懷柔的對支親善策、獨逸の監視的態度等が之が牽制に大に與つて力あつた事は勿論で

三、對內的運動

反帝國主義運動は對外的だが實際的効果は對內的で打倒軍閥は畢竟其楯の半面である、國民黨が曾て排日運動と共に媚外賣國の張作霖打倒を高調し、排英政策に伴ひ其走狗吳佩孚の討伐を主張したのは之が爲で、首都南京を初め各商埠、省城の內外至る所に「打倒帝國主義」「打倒軍閥」「打倒共產黨」の三標語が主として壁書しあるは全く對內的目的の表示と見られる。

打倒軍閥を叫ぶ國民政府の軍領も名は國民革命軍でも實は私兵に等しき軍隊を擁して政治に干與する點に於ては吳佩孚、張宗昌も蔣介石、馮玉祥、李濟琛も舊新の別はあつても軍閥たるに選ぶ所はない、而かも蔣氏が國民黨員にも非ざる張學良を政府委員に任命した如きは設んば張氏が三民主義を奉じ、東三省に靑天白日旗の揭揚を約した所でそれは國民政府の墮落であつて進出ではない、孫文の建

國大綱中に示された方針により軍政期の政治を行ふもの故兵力の使用は止を得ぬと云ふかも知れぬが、現實の國民革命軍は一部は蔣氏の兵であり、一部は馮氏の軍隊であり、一部は閻錫山の手兵に過ぎない。之を國民黨若くは國民政府生粋の革命軍と見るは非常な認識不足である、從つて支那の革命事業は對外的反帝國主義運動には成効したが對內的軍閥打倒運動には失敗した。之は支那が半植民地の國たることのみを知つて依然半封建的社會である事を忘れ、〇〇運動が多く反帝國主義に偏して反動的封建勢力――官僚、軍閥、豪紳――の存在を輕視したに因る、後者の打倒は革命の看板を借りて革命を破る新軍閥官僚の手では行はれない、これには眞に覺醒した民衆の力により而して現時の國民黨指導者に代るに革命的指導者を以てせねばならぬ、之れ現下及び將來の支那革命にとつての緊要事である。

對內的運動として大に考察すべきものは勞働運動だが、之を罷工の見地から觀ると、民國八年上海に起きた機械工の罷工がその曙光である、一方歐洲大戰の終局と共に戰場から歸還の約十四萬人の勞働者が「赴歐勞工團」なる近世勞働組合を組織し、他方國民黨が其對內政策の一として『勞働法を制定し、勞働者の生活狀態を改善し、勞働團體を保障して其發展を扶助す』る事を聲明して以來、勞働運動は頓に其勢を增した、殊に一般民衆が大戰の影響を受けて「高價なる生活」に苦しんだ事と、外國資本家の支那勞働者に對する階級的、民族的兩方面よりの二重の壓迫は流石鈍重な支那人をして漸くその實情と大同團結の必要に眼覺させ、罷工數、參加人員は年每に增し、其度每に組織化され且つ戰術は巧妙となり、殊に五卅事件を一劃期として勞働運動は愈活潑となり範圍は益擴大し、同事件後僅々十二日間に上海だけで百十九の罷工行はれ、參加工十五萬九千六百人に達した、此他廣東、天津、九江、靑島、漢口等に於ける罷市罷工亦未曾有の數に上り、其要求條件は主として工人會代表權の承認、賃銀値上と待遇改善であつたが、其七割は目的を達した、其結果は愈々罷工の頻發を助長し、民國十七年一月より九月に至る間に上海に於ける罷工のみで百三十一件、被害工場商店千七百三十三軒、罷工人員廿萬四千五百六十三人に及んだ。

此の間十月三日に突發した上海郵務局員二千八百名の待遇改善要求の罷業は政府機關の執務停止と云ふ問題だけに當局は淞滬警備司令部の手をかけて極力之を彈壓し、一方御用組合たる職工會を督勵して事務の整理に當らせると共に、他方國民黨中央黨部より李交通部次長を煩はして罷工團と交渉せしめた結果、十月六日より復業させる事にして一先づ鳧は付いた。併し該罷業は表面勞働爭議であるが內實は多分に政治的意義を含み、コミンターンの指令を受けた蘇兆徵一派が郵務工會の要求提出を利用して劃策した形跡がある、同時に國民政府が浙江派、西山派を中心とする右翼の政權把握後反動政策に陷し、孫總理制定の工會條例や黨務の決議等を無視して工

[illegible]者に[illegible]警備司令が僅に[illegible]を發布して出版物檢閱を嚴重にし、民衆訓練委員會が民衆運動組織に關して農民、工人、學生等の橫斷的團體組織を禁じ．政府常務委員會が政府又は公用機關に服務する者の罷工を絕對に禁止して從業員の絕對服從を規定した如きは、國民政府今後の社會運動に對する方針の奈邊に存するかを窺知するに足る。

要之國民黨も孫文在世當時は容共政策を採つて「二稱成の政黨」であつたが、國民政府となり殊に廣東の淸黨運動、長沙の共產黨驅逐事件以來は極右傾し、在野黨時代の民衆運動擁護政策から之が抑壓政策へと急角度の方向轉換をなした、之は主席蔣介石一派が其政權の維持に必要な財政的援助を彼の鄕里寧波の財閥と上海總商會を中心とする富豪に仰ぐ以上當然の歸趨であり、其政策は財閥と新軍閥の提携によるブルジョア・デモクラシーに還元されつゝあるを見る、唯だ反革命的な陣營の中にあつて彼等が內禁烟（阿片）禁賭、[illegible]運動に努力し、帝國主義者との鬪爭を繼續しつゝある一面の解放戰に私は支那革命と社會運動の前途の光明を見出さんとする．

孫文は曾て廣東で私に革命事業の困難を語[illegible]フレーズして「一萬事を[illegible]」と結論したが、私は今にして再び此言の意義益々深きを想起する。（十月十五日）

獨立への印度の動き

ラス・ビハリ・ボース

印度の面積は約ロシヤを省いた全歐羅巴程どあり、人口三億一千九百萬人以上もあるので、その政局については勿論具體的に委しく述べなければ解らないが、限られた紙數もあるので、簡單に印度の政局は如何なる方面に進んでゐるかを述べやう。

一體、國が廣くて人種言葉風俗習慣が異つてゐるので、印度の統一は餘程困難であることは、英國人によつて世界に向つて宣傳され、そのために他の國民にも事實の樣に思はれてゐる。然し實際的には印度に於ては異なる點より一致の點が多い。例へば風俗習慣傳說などは全印度に亘つて一致してゐる。言葉も地方によつて多少異つてゐても、印度一般に知られてゐるヒンヅスタニ語（これは東京外語校で敎へてゐる）さへわかれば、印度の最も南の極く僅かの地を除けば、全印度に通用し得る。地方に於いて言葉は異つてゐても、その名詞は八割、形容詞は十割共通であつて、唯動詞の變化だけが異つてゐる。人種の方に

於ても同じ事で、異つた點より一致の點が多い。宗教的には人口の約三分の二以上にバラモン教であり、八千萬は回教であり、殘りは種々な宗教である。そのバラモン教だけ一致すれば印度は大多數の國民の一致をし、印度の統一がそれだけでも明瞭なことである。事實上から言つても、政治的見地から、バラモン教も回教も一緒になつて祖國の爲に盡してゐる。その具體的な一例を擧れば、民間印度人の政治的な中心機關であるところの"Indian National Congress"(印度國民會議)の昨年の會長は回教徒の首領であるアンサリ博士であつた。

英國は西暦一七五七年に始めてカルカッタ地方を侵略し、それ以來全印度を征服するには丁度一百年かかつた。卽ち一八五七年迄に全印度を征服したのである。これを見るに英國は唯武力を用ひて印度を征服したわけではない。武力なれば五年か十年にて印度を征服する事が出來やう。然し英國は外交力及び離間政策を用ひて印度を征服したのである。一七五七年頃の印度の狀態は日本の御維新直前の狀態と同じで、各地方に於て地方長官は皇帝同様に振舞ひ、自分の勢力及び領土を擴張するために互に爭つてゐたのである。これにつけこみ英國は地方長官と地方長官とを戰はせて兩方を衰弱させ、兩方の領土を占領したのである。假に外交力と云ふ言葉を用ひたがこれは英語の Diplomacy のことで、この言葉の意味は、明らさまに云へば僞りの技術である。つまり僞りの技術に熟練しなければ偉い外交家にはなれない。英國は離間政策及び外交力の二つを利用して印度を征服したのである。一八五七年に始めて印度人等は英國に自分達の生得權を奪はれてゐた事を自覺し、一致して全北印度に英國に對する謀叛を起した事があつた。この事件は英國の歷史では Sepoy Mutiny つまり印度兵の謀叛と云つてゐる。然し實際はこれは英國に對する印度兵のみならず民間全體の謀叛であつた。當時英國の軍備が出來てゐたので、この謀叛は失敗に終つた。そのために虐殺された老若男女の數は莫大なものだつた。一時は全印度に亘つて恐怖時代が現はれたので、それ以來一八八五年迄印度には政治的な運動は殆んど無かつたと云つてよい。一八八五年に始めて印度國民會議が生れ、第一回の會議はボンベイ市に開かれた。この會議の目的は印度に於ける英國統治の改革であつた。これに參加した人々の數は餘り多くはなかつたが、それ以來每年年末に一回この會議は開かれてきた。現在の所これは印度の民間的政治中心機關で、革命黨も國民黨も穩和黨もこれに參加するのである。この會議に通過した決議案に皆は贊成しなければならぬ事になつてゐる。會長は每年全印度の推薦によつて定る。而してこれに印度の各州から代表者が參加するのである。

一八八五年から一九〇五年迄印度の政治運動は生温く繼續した。印度國民會議の決議は通過しても、それを實行する力が無かつた。所が一九〇五年に(當時印度總督はカアゾン卿だつた)印度政府はベンゴル州を二つに分けることを決定した。その表面上の理由に、

[illegible]常に發達したので、支配の便宜上から二つにした方がよいと云ふわけだつた。當時印度の首府はカルカツタであつた。カルカツタはベンゴル地方長官の駐在地である。ベンゴル州の人々は教育的に發達してゐたので、カルカツタの輿論は優勢だつた。然しベンゴル州を二つに分ればは人口も少くなり輿論の力も衰へる。のみならず輿論の力のない所へ首府を移す考へも政府は持つてゐたのである。政府のかかる行動に對するベンゴル州の印度人達は始めて大いに反對の氣勢をあげ、政府に向つてこの再考慮を願つた。然し政府は頑として之を聞かなかつたので、ベンゴル州に於て反英運動が起り、結局全印度は覺醒し印度として獨立しなければならぬ事を考へたのである。丁度當時日本と露西亞が戰爭をして居り、その結果も印度青年に餘程の影響を與へたのである。武裝のない（印度に於て印度人等は拳銃短銃は勿論短刀も持てない事になつてゐる。先月一人の印度人がベンゴル地方で[illegible]の罰金に處せられた。[illegible]役に處せられる）印度人としては獨立權を回復するには、一番必要なものは一般國民の覺醒であつて、その爲に幾つかの新聞を發刊し、英國が如何に政治的に經濟的に教育的に印度人を壓制したかを論じ、國製品の奬勵を主張し、英國製紡績の排斥を鼓吹し、國民學校の設置を促進する事につとめた。所が、、を持つてゐる英國は片つ端から國民運動を鎭壓し始め、禁錮、家宅搜索、逮捕、笞刑、投獄などは毎日の事となり、數千名の印度人が犧牲を拂ひ、、、印度青年も、、、、、、、、、、、、、、、、決定し、、、及び、、を集め、秘密に、、、、、、、、、を始め、印度人を無暗に、、、、、、、、、、、、、し始めたのである。その結果は一九〇五年から一九一四年即ち世界戰爭の始つた年迄に、、、、、によつて、、、、、、、、、、役人が多數あり、一九一二年印度總督ハーデイング[illegible]發の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、歐羅巴戰爭が始ると、英國は印度の秩序の爲に非常に心配し、殊にシンガポールに於ける印度兵の謀叛、及び一九一五年二月のパンジヤブ州に於ける全北印度に亘つて印度兵と聯絡した印度青年の、、、の發覺で政府は大いに狼狽し、印度人に向つて聲明書を出し、印度人達が今、、、、を中止して世界戰爭に英國に援助してくれゝば、戰爭が終つたら英國は必らず印度に自治を與へると誓つた。印度人等は これを信じて 、、、、を中止し、出來るだけ英國を援助した。即ち印度は戰線に百二十五萬人の印度兵を送り、一億圓の金を寄附し、數十億圓の食料品及び原料を提供した。而して世界戰爭中の印度兵の死傷率は七割以上だつた。戰爭が終り、印度人達は英國に向つて約束通り自治を與へてくれる事を要求した。然るに英國は約束を守らず唯一九一九年に子供だましに印度の政體に僅

かの改革を與へただけであつた。そこで全印度は非常に憤慨し反英運動は又盛んになつたので、英國は行政的な命令の下に戒嚴令と同樣な法律を印度に提出し、この法律によつて普通の巡査も逮捕狀なしに人を捕へる事が出來、裁判官の令狀なしに家宅搜索が出來、行政的の命令で人を無期拘留しておく事が出來、行政官は裁判官に代つて裁判することが出來た。これによつて從來英國に對して好意を持つてゐたガンヂイ氏は、初めて英國が如何に惡性を持つてゐるかといふ事がわかり、進んでその惡性の打破と印度の獨立權の回復との爲に一生を捧げる事に決定して印度獨立運動を導き始めた。當時印度の各町村に演說會が開かれ、政府のかゝる壓制的な法律に關する抗議を申し込んだ。パンジヤブ州の有名なる町のアムリタサールでも五千名の市民が集つて演說會を開いた。その目的はこの法律に抗議を申し込む事であつた。處が英國人のダイヤル將軍は、、、、、、、、、、、、發いて逃げやうとしてゐるにも拘はらず、、。又ゲジユランワラといふ地方では英國の飛行家が飛行機の上から武裝のない群集に向つて、、、、、、、、、、、、、、、。かゝる事件はこれだけではなかつた。印度の各地方に於ても、、、、が行はれた。英國政府はダイアル將軍の行動を非難して免職させたが、然し民間の英國人の方からはその人を表彰し二十萬圓の金封を提供した。これによつても印度に對する英國人一般の心理狀態がわかるのである。かかる事件は一面から見れば印度として悲しむべき事であるが、他方面から見れば不幸中の幸であつた。卽ち印度はこの、、、によつて百年位の進步をしたのである。かかる事件によつて印度の奧の方の農村の人々迄も自覺した。そしてこの後印度の國民運動はガンジイ氏の下政府はあらゆる手段を採つた。然しこの運動は今日迄に全印度に擴り、印度が獨立し得ない限り止まないのである。

以前に述べた通り、英國は一九一九年に印度改革案を印度に提出した。この改革案によつて印度中央政府及び各地方に一種の議會制度が提出されたものである。例へば印度中央政府に上院下院がある。そしてこれを選擧する權利を持つ印度人の率は僅か百分の二に過ぎない。この上院下院に官選及び民選の議員があつて、上院の多數は官選議員であり、下院には民選議員が多數である。然し滑稽な事には、上院下院を通過した法案も印度總督が否決することが出來、事實上にも否決してゐる。又上院下院に否決された法案を印度總督が施行する事が出來る。そして事實上施行してゐる。一言で云へばこの議會は討論會に過ぎないので、實際上の權力を何も持つてゐないのである。地方議會も中央議會と同樣である。今年二月にこの議會制度を調査して、印

[illegible]サイモンといふ英國人の委員長のもとに委員會が印度に到着した。處が印度としては、問題は自治權ではなく完全な獨立である。二十年前ならば印度は自治權で滿足したかも知れぬ。然し今日に於ては完全な獨立でなければ決して滿足しない。昨年の暮に開かれた印度國民會議は既に「國民會議の目的は印度は完全なる獨立を獲ることである」といふ決議が通過された。サイモン委員會がボンベイに上陸した日、ボンベイ市のみならず全印度に亘つてハルタルが行はれた。（ハルタルの意味は印度人の全活動を中止する事、即ち勞働者は勞働をやめ、商人は店を閉ぢ、交通機關は運轉を中止する等、一種の大示威運動である）ボンベイ市の印度人達は黒い旗を立てゝ「サイモンを歸國させろ」「印度は完全なる獨立でなければ滿足せず」「印度の憲法は印度人によつて作るべし」といふ文句を書いた旗を立てて大示威運動を行ひ、その結果、、そ[illegible]員會はボンベイから何處へ行つても同じ樣な排英運動に逢ひ、結局印度人の共同を得ずして歸英した。先月改めて又サイモン委員會が印度へ來たが、前と同じやうな現象に遭遇したのである。これを見れば印度としては完全な獨立を得ない限りは、滿足する事が出來ないことが明らかになつたのである。

英印の間に今二つの問題が持ち上つてゐ[illegible]一つに英國は印度を友達にしておきたいのである。印度が遲かれ早かれ獨立する事に明らかになつてゐる。英國の方から印度に獨立を與へれば英國は印度を友達にしておくことが出來る。然し印度が自力によつて英國から獨立權を回復すれば、印度は英國の敵になつて行かねばならぬのである。

アメリカ社會、政治の現段階

佐佐弘雄

一、スミスの國家社會主義

米國大統領選擧は、例の如く、果てしなき喧騷と浪費の後に、兎も角、一先づ終了したのである。その選擧戰渦中の最も人氣の焦點であつたことが、スミスの敗退とフーヴァの當選であることは云ふ迄もない。けれども此處に注意す可きは、スミスの敗因中の一に數へられる國家社會主義呼はりが不當であることは、尚フーヴァを以て繁榮の偶像とすることと五十步百步であることである。そして又若し此の事が兩者勝敗に對して多少の原因力

を與へてゐたものと假定すれば、この人氣の焦點なるものがいかに笑ふ可き、且つ又、見當違ひの焦點であるかと云ふことである。

先づスミスに就いて言はう。スミスは人も知る如く、タムニー・ホールと關係淺からぬ、海千山千の闘士、果敢辣遂の政治家である。東京市議でも三舍を避けるタムニーの歴史はウエルネルの書を開かないでも餘りに周知の事柄ではある。西部及び南部の民主黨員すらスミスを此點を以て嫌惡したのは、ニューヨーク兒の反感と同樣理由なしとしない。某々氏を東京市長に推薦するとしても市民が承知しないであろう如く、多年州政に盡力したからと言つて、否、州政に關與したが故に、スミスを拒否し得る權利が紐育市民にないと言へるであらうか。民主黨南部の强固なる地盤の大龜裂は外にも宗教上の原因があるが、これもその一つとして擧げ得るほど、スミスの大いなる弱點であつたのだ。

[illegible]だ、スミスがあるこ

であり、禁酒法緩和論者である以外に、同時にタムニーであることは餘りに公知のことであつた。タムニーが國家主義になること、それは徹頭徹尾不可能とは言へまいが可能でないことも亦明瞭である。

十月卅日、バルチモアで「余はK・K Kの如き團體の支持を得て當選する位なら潔く大統領選擧に敗北を見んことを欲する」(大阪每日新聞)と獅子吼するスミスは、そのK・K・Kから、"Nigger-lover"と野次られることを恐れて、黑人問題に觸れざらんとしなかつたであらうか。(American Review of Review)

農村救濟政策に就いて彼の言ひ得べきこともクーリツヂや、ジャル デインと大差はない。況んや「共和黨の如く歐洲諸國に對しては平和策を說き他方南アメリカに對してドル外交を敢てしてゐるが如きは矛盾も甚しい」(大阪每日)と論ずる彼もフイリッピンに就いて何を言ひ得るであらうか。

惟ふに、此等の點を考へないでも、共和黨

——そしてそれは確かに批判さる可き要點ではあるが——直ちに國家社會主義の稱號を與す可く妥當ではないのである。

進步黨(Progressives)はハイラム・ジョンソン、ラ・フオレットの一九二〇年創設せる所謂第三黨であつて、獨裁政治、特權の排除、民主主義政治の確立その他社會政策を主張する(一九二四年クリーブランド大會後のラ・フオレット宣言參照)立場から、大統領選擧を、二大政黨の間に介在して爭ひ、五百萬近き票を得た新興政黨であつたが、今回は、ウオルシユ(Frank. P. Walsh)司會のもとに大會を開き、民主黨に合流す可きことを決議してゐる。進步黨並にその他の自由主義者連も、一面これ等の勢力を過大視したスミスの接近政策の爲めに、合流する態度をとつた。けれども、その眞意は「two old and rotten parties」——二大既成腐敗政黨に對するプロテストの意味で社會黨のノルマン・トマスを支持し度いと思ふが、又同時に、「八年前は社

ーンー・リナステツゼンに投票せ[illegible]め・否年前には・ラフオレツトに投票したのだが一と愚痴を言つてゐるネーション誌にその一斑を發見し得ると思ふ。そして又同時に此の愚痴は先きの尊稱? の當らざる所以を立證するものなのだ。けれどもネーション誌は尚進んで謂ふ。「フーヴアは成程事務家であり、事業家である。が併し米國は精神と卓見を要求する」だから「單に舊秩序を支持」するのみの、且その「知識的完全に信頼し得ない」ところのフーヴア氏には「決して投票すべからずと云ふ點で吾人は一致する」のであつて、此の意味に於て「Hooverism」に對し一度でいゝから民主黨を立たしめ度い」と。(September "Nation") 無知と言へなかつたのはアメリカ人の、——日本人のではない、——幸でなければならないが、精神よりも事務家が實際必要であつたことは致し方のないことであつた。兎も角もこの反フーヴア主義と云ふ消極的理由が彼等をスミスに合流せしめたのであることが明瞭である。故にかの尊稱? に價

しなか[illegible]り、自由主義的であり、正義的であた二個神と卓見」であつたことは否み難いのである。然らば彼等にとつてタムニー、ホールの一精神と卓見」以下と映じたところのフーヴエリズムとは果していかなるものであらうか。

二、フーヴエリズムとは何ぞや

フーヴアを繁榮の偶像と思ふのはアメリカ人の幸福である。そしてその幸福感に依據し、逆に、これを助長し、發展して、アメリカニズムを昂揚するものこそ、フーヴエリズムに外ならない。フーヴエリズムとは、ジヤーナリスト。シモンドの "Hoover as Europe sees Him" (American Review of Review) にあるやうに "100% Americanism" と云ふことであらうと思ふ。シモンドの「英人の性格にとり稍奇異な、異常な、全く不可解な」アメリカニズムは云ふまでもなく戰債抹殺などに贊成しない、フーヴアを得て、その最高能率を發揮するであらう。ミスリー州

[illegible]リンス・オブ・ウエールスに投票するーと言つたさうだが、これが單に奇矯の言に過ぎたいことになつたのは、アメリカニズム萬歳でなければならない。

併し乍ら此處に二個の問題がある。兎も角一アメリカニズム=フーヴエリズム=繁榮主義として、第一に、フーヴアの繁榮論の根柢如何、即ちこれがスミスを見事に誤解したアメリカ人の二度目の誤解ではないかと云ふこと、第二には總體アメリカ社會に於ける現在の繁榮なるものの意義如何と云ふ二個の問題がある。吾人は先づ第一の問題を此處に檢討して後第二の問題を解剖して見ようと思ふ。

選擧戰の際フーヴアはニユーヨークに於て「勞働と繁榮」について實に大膽極まる演説をしてゐる。この演説は三個の要點から成り立つてゐる。

(1) 失業者に就いては、一九二一年は五乃至六百萬の失業者があつたのに一九二五年には冬期の定例的失業者數を加へても百八十萬

に過ぎない。

(2) 賃銀は戰後の事業不振ありしにも不係ず今日に及んでは五〇%實質的賃銀が增加してゐる。

(3) 自己の貢獻に就いて最後に大いに述べ立て、共和黨政治は失業者救濟會議を開き、勞資双方の代表者を集めてフーヴア自身議長となり一九二一年五乃至六百万の失業者ありしを一年間で五百万就業させたのである。

併し乍ら此の奇蹟的大功績は果して事實であろうか、ネーション誌その他の研究を綜合すれば、それが決して事實に附合してゐないことを發見するであろう。

(1) 失業者は一九二一年秋の公式の發表によると三百五十萬であつて、一九二五年には勞働局の發表によると四百萬である。いかに失業者數がフーヴアの任意に改變されてゐるか！

(2) 賃銀は、シカゴ大學教授ポール・ダグラス研究によると（“American Economic Review” March 1926）一九一三年から一九二六年に亘つて一五%增加したにとゞまり、一九二六年以後は極く僅少である。ヌジュルガン・クチンスキー、並びにマーゲリツト・スタインフエルドの研究、（A. F. L. パンフレツトNo. 6）によると工業勞働者は一九一四年に對比して一九二四年には三五%、一九二四年に對比し一九二七年には一%增したゞけである。弗の價格の變動等をも考慮しなければならないので、フーヴアの五〇%增加なる係數は利潤增加率とでも間違へたのかも知れない。

(3) 貢獻については、一九二一年三月共和黨政府成立し九月ハーディング Employment Conference を開始したのであつて、一九二一年十月から一九二二年十月の一年間には百五十萬人就職したのみである。これは“The Monthly Labour Review”.（Dec. 1922）の精確な計算に基く係數である。かゝる委員會の設置を見るだけ米國民は幸福であるがフーヴアの示した係數は余りに幸福すぎると曰はなければならない。

スミスを支持した一千五百萬の國民投票に比し二千萬の大衆の支持を得、選擧委員數八七に對し、四四四の壓倒的多數は、此種の數學的基礎の上に樹立せられたのである。實にフーヴエリズムはかゝる勇敢なる計算に立脚して發足したる現代の奇蹟である。此練達の事務家、有能の官吏と稱せらるゝフーヴアの國策がこのスタートを離れていかなる方向に發展せんとしつゝあるか。吾人はこの問題に觸れる前に先つ所謂第二の問題の檢討に進まふ。

三、米國產業の狀勢

普通米國の繁榮は斷片的の知識で印象づけられてゐる。例へば「百萬長者（年收五萬弗以上のもの）は紐育二、八〇〇人、ペンシルヴアニア一、〇五二等を筆頭に全國一一、〇〇〇人を數へる」と云へばなる程と感嘆する。又フオード自動車會社が一九一七年から一九二三年に至る七年間の純益が五〇億二千六百萬弗餘で、一九二二年の一年は一億一千

[illegible]せられる。これ等の數字は確かにアメリカ繁榮の象徴的數字ではある。けれども吾人は尚一歩進んで、系統的な係數によつて精確な知識を探求しなければならない。そうでなければアメリカの社會狀勢の眞の姿は把持することが出來ないのである。

先づ概括的に云ふならば、アメリカ工業統計は次の如き狀態である。

（一九一九年を一〇〇%とし自後毎年平均率）

年次	基礎工業の生産率	工場雇傭率	工場給與支拂率
(1920)	105	103	124
(1921)	80	82	84
(1922)	98	90	89
(1923)	110	104	113
(1924)	108	95	104
(1925)	116	95	107
(1926)	120	93	110

故に一九一九年に比して重要工業の生産率平均は一九二六年には二〇%増加し、給與率も一〇%増加してゐるが、雇傭率は四%減少してゐることを注目しなければならない。實數にどうかと云へば一九二二年から一九二五[illegible]メリカ電話、二十の大會社の純收入は二〇億七千萬弗餘で利子、配當を十四億弗餘支拂つてゐる。（The American Labor Year Book 1925. P.9-11）

而して、勞資間の收入の分配はいかなる割合であらうか。經濟的事業の主要なるもの各種に就いての全國的調査によると、一九二三年七〇〇億弗の收入を勞働三八二億弗、資本は三一六億弗を得、割合は、前者五四、七%後者が四五、三%であると聯合商業委員會は報告してゐる。資本側の收入は利潤、利息、地代等を含ましめてゐるのは當然であるが、勞働の側には會社の職員、商店員、所有主等の取得するサラリーを計算してゐるのは不當であつて、五四、七%の約半數はこのサラリーと見る可きであると年鑑は指摘してゐる。（ibid P. 19-21）兎も角もアメリカ工業の係數は漸増しつゝある。その價格についての分析的統計を示すならば、次の如くである。以下ウラジミル・ヴオインチンスキーに[illegible]う。（[illegible] Vormarsch der V. S.）

北米合衆國工業生産價値（ミリオン弗を單位とする）

年次	生産物價値	原料品價値	新價値	賃銀（右の内）
(1914)	24.066	14.242	9.823	4.063
(1919)	61.889	37.045	24.814	10.453
(1921)	43.427	25.155	18.272	8.193
(1923)	60.258	34.481	25.778	10.999
(1925)	62.714	[illegible]5.936	26.778	10.730

右の年次毎に弗の價値が變動してゐるから一九一三年の弗で統一して計算すると、新しく生産された價値（新價値）は次の實數で上向してゐる。

（ミリオン、一九一三年弗）

一九一四年――一〇、〇二三

一九一九年――一二、〇六〇

一九二一年——一二、四三〇
一九二三年——一六、七三九
一九二五年——一六、八三七

一九一四年に比すると一九二五年は六〇%の割合で價値を增加してゐる。更に彼の示す數多の統計は一層米國產業の現勢を明瞭にするであらう。併し乍ら斯る漸增的產業の向上的係數に於て勞働者の狀態は果してどうであらうか。

四、勞働者狀態

農村の狀態は、農村救濟問題が相當重大なる政治問題となつてゐる點から察知し得るやうに、悲境にあると云へる。一九二一年に一、三六三の破產者、一九二二年は三、二三六に、一九二三年には六千に近く一九二四年には、七、七七〇に一九二五年には七、八七二を算するに至つてゐる。(Labour Year Book) 勞働者の狀態が惡化す可きは云ふ迄もない。五百五十萬人の農業勞働者について見るに次の

年次	(1909)	(1913)	1919	(19·6)
購買力變動率	+2.7	100	-5.2	-6.4
購買力率	103.7	100	105.2	93.6
生活費率	88.7	100	188.3	175.2
賃銀率	92	100	198	164

故に購買力の率は益々減退し、一九二六年には、六、四%減を見るに至つた。(Labour-Year Book. Current History, Sept. 參照)

反之して、工場勞働者は、前述したダーグラス教授によるも、一九二四年には一九一九年に比し二八%の「購買力の增加」を賦備されたる賃銀勞働者は一般に享受してゐる。「運輸勞働者の實質賃銀は二二%增加し、結局平均二七%位の增加であらう」と言つてゐる。(Labour Year Book) 此等工業勞働者の賃銀率を表示すれば次の如くである。

	一九一三	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八	一九一九	一九二〇	一九二一	一九二二	一九二三	一九二四	一九二五	一九二六
實質的週賃銀率	一〇〇	九九	九七	九〇	七九	七五	七四	九五	一一一	一〇八	一一五	一二五	一二六	一三三
生活費率(勞働省調)	一〇〇	一〇三	一〇五	一一八	一四二	一七四	一九九	二〇〇	一七四	一七〇	一七三	一七一	一七六	一七六
週賃銀率	一〇〇	一〇二	一〇二	一〇六	一一二	一三〇	一四八	一八九	一九三	一八三	一九九	二一四	二二二	二三三
一週の勞働時間率	一〇〇	一〇〇	九九	九九	九八	九七	九五	九四	九四	九四	九四	九四	九三	九三
一時間賃銀率	一〇〇	一〇二	一〇三	一〇七	一一四	一三三	一五五	一九九	二〇五	一九三	二一一	二二八	二三八	二五〇

(Woytinsky 前掲 Gesellschaft の論文による)

週實質賃銀が一九一三年に比し一九二六年には三三%增加してゐる。此の係數を別途の目、實質賃銀の外社會賃銀 (Social Wages) に就いても記述して見よう。社會賃銀とはハ

賃(〇〇〇〇) [illegible]の[illegible]老年、不疾、[illegible]に家族の生活だけではなくて、死亡者の原因で勞働し得なくなつた場合の保證として子孫の教育を必要とすると云ふ理論に基くのであるが、ヤングの所謂「勞働意思あり能力ある健全なる社會の各構成員の當然受く可き收入」と言へるものが即ちこれである。賃銀統計に社會賃銀をも考慮するは何んと云つても、良き狀態を意味することを否み難い。然らばこの三種賃銀の各種產業別の比率はどうであらうか。(Current History 前揭書)

工業	年次	名目賃銀數	實質賃銀率	社會賃銀率
全工業	1914	589	100	100
	1927	1.301	135	114
自動車工業	1114	802	100	100
	1927	1.603	120	101
食糧品業	1914	565	100	100
	1927	1.226	130	109
木材工業	1914	516	100	110
	1927	1.107	129	108
製紙工業	1614	635	100	100
	1927	1.572	144	121
纖維工業	1914	449	100	103
	1927	1.027	135	115
煙草工業	1914	435	100	100
	1927	857	118	100

斯くの如き賃銀の狀態は、その數字のみを[illegible]を得たいのであるけれども、一九一四年から一九二六年に六〇%を增加した價値生產の影に、高度の機械化、電化、(電化は全動力の六〇%以上であらう)の實質の勞働時間の短縮(七〇%)並に勞働の生產能力の增大(四〇%)のひそんでゐることを看過してはならない。(前揭：Gesellschaft：參照)

故にヴォイチンスキーも言つたように、合衆國の產業的進步は顯著であるが、それは「增大する失業によつて齎らされる。而も此の現象は決して一時的の現象ではなく、工業發達に伴ふ、峻嚴な歸結である」何故ならば發達に際して必ず人間の代りに機械が代用されるからであつて、技術の進步は必ず次の如き急速なる變化と結合するものであるからである。その變化は即ち「國民大衆の需要と消費の增加、又は實質賃銀の增加、勞働時間の短縮にも不係ず、生產は最早や從前必要とした勞働力の分量を必要としない」ようになることである。この現象を經過的に觀察するの[illegible]入[illegible]大すると外になく、一面產業の發達と集中はこれを助長するであらう。」資本主義の矛盾」とヴォイチンスキーは結んでゐる。(前揭：Gesellschaft：參照)

斯くて吾人は明瞭にフーヴァの所論が第一に虛僞の數字であつたばかりではなく、第二にその繁榮が必ず失業者群と結合す可き陰影を賊することを究明し得たのである。ある論者(American Review of Review)がノルマン・トマス等がニューイングランドや、紐育の失業者數を指摘せるを反擊して、これは單に資本家が殊に纖維工業等に於て、南部で企業するを有利と認め南部に企業を盛んにしたため發生したところの地方的一時的現象に過ぎないと云つてゐるのも此の種の誤謬を犯してゐるものである。

トマスを初めとして、農民勞働黨のウェッブ、社會勞働黨のレイノルツ、共產黨のフォスタアは皆大統領候補として、此の失業群の

根本的乃至一時的救濟のために戰つてゐた。併し乍ら云ふ可くそれは余りに微力であつてデブスの曍を擧すとすら出來なかつたであらう。アメリカ勞働階級の一般的政治行動の不振が此處にも反映してゐるはかりではなく、スミスも弗外交と罵倒せるところのフーヴエリズムは今や其政策を大規模に宣揚せんとしつゝある。

五、新政策の宣揚

十一月十一日米國在鄉軍人會主催の第十回休戰記念祝賀會に於て、フーヴアは果然「世界各國の正當防衞の標準に照して米國は當然更に多くの巡洋艦を所有す可き權利を有すること明白である」と强調してゐる。而も此の海軍擴張案は、たとへ、米國が現在英佛軍事協定を廢棄し外交的に妥協的態度を示してゐても、兩院通過の可能性は多分にあるであらう。一九二六年に一九億弗の對外投資をやり、百拾億弗の戰債を除くも、尙百參拾二億

優越は金融的支配より軍事的優越に轉換し行くであらう。

フーヴアが南米訪問の企劃を有し、これはモンロー主義を一歩すゝめて、南北兩米「融和共同を主眼とし經濟的文化的政治的一致融和」を主張するフーヴエリズムの發揚を意味するであらうと評判されてゐる。ハーデイングの國際聯合案に類する机上の空論以上のものであると想像される。何故ならば、米國對外投資全額、四十八億弗はラテン・アメリカへの投資であつて、三十五億弗資を投資せるカナダ、ニユーフアウンドランドを倂せれば、全米大陸の聯邦の成立は不可能ではない。三十八億の投資を受くる(戰債の外)歐洲、十億を受くるアジアに果していかなる脅威を感ずるであらうか。金融支配の軍事支配化はいかなる階にその契機を藏するであらうか。軍備を思ひ、南米を望見するフーヴアには、顧みて國內に緊案持續案の發見を努力してゐる。ニユーオルレアンに開會中の各州知事會議に對し「各州當局並びに公共團體は中央政府と協力の上公共及び半公共的な新規建築事業計劃約三十億弗を繰り延べ」而して「全國的建築資金準備基金を創設して萬一に備へ」失業增加の不景氣時代に備へる所の案を案出してゐると傳へられる。斯くてフーヴエリズムは內外に猛威を振ひその覇權を確立するに至るであらうか。?!(一九二八、一一、二五)

伊太利國民思想の新方向及巴爾幹の近狀

吉田彌邦

一、多雜多事の伊太利

てビイネーテイ(黑殼木)をバックとしたヴア

中に[illegible]家の眼中には又言ひ知らぬ恭敬の感を惹起せずには居れないのである、是れ往昔法皇が宗教權と俗權の二大權を掌握して、天下に君臨し君主の君主として其の威權を恣にし、或は他國の元首が伊の元首を訪問せんとした際にも、法皇の氣に向かない時は斷然之に抗議した如く、彼の眼中には帝王も大統領もなかつたのであつたが、世の移り變ると共に、今や法王は其の俗權をさつぱりと打棄て世の誤解を招かざらんが爲に、バチカン宮殿外一歩も外に踏み出さず、專ら世界人類の幸福と平和の爲に靈事しゐることを顧みれば、寔に今昔の感に堪へないからである。又吾人が「ジヤニコロ」の丘に登りて、遙かに羅馬の廢墟の邊を見渡すに、其の周圍に在る羅馬最盛時代を飾つてゐる老大な記念的建築物の傍には、最新式の大厦高閣が新たに建造せられつゝあるのを見受けるのである。何んぞまれ世態の變遷、萬有の新陳代謝の激しいことぞや、と呟かざるを得ないのである。斯くの如きことに[illegible]ない、詰局叙上の事實に能く伊太利盛衰興亡の歴史を一眸の下に展示し或は戰勝の榮光、或は戰禍の悲慘、或は國論の沸騰、或は猛しき社會運動の事跡などを追想せしむるものである。實に羅馬帝政二千年後の今日と雖も尚伊太利は多難多事の國である。

二、國民希望の焦點

偖て伊太利と云へば單純な一國家の如くに考へらるゝも、事實は然らず、曾ては此の僅かに三十一萬二千粁平方の國土内に十有數の國家が夫々分立してゐた。而して今尚「サン、マリーノ」共和國の如きは名目上一小獨立國として伊太利北部の「フオルリ」と「ペザーロ」兩縣の間に介在してゐる。面積五十九粁平方、人口一萬二千を有する斯る國家すら傳統的に殘存してゐる狀態であつて、如何に伊太利人が今迄國家の統一を希求したかは想像するに難くない。如何なる歴史を繙ても伊太利人至上の理想は、伊太利に侵入し伊太利に[illegible]を[illegible]して、伊太利に居[illegible]利人の手によつて支配する單一國となさんとするにあつたのである。斯くて一八六一年三月十四日「トリーノ」に召集された議會が、滿場一致ヴイツトリオ・エマヌエーレ第二世に伊太利國王の稱號を奉つた時までは、常に伊太利に於ける輿論や又社會運動は、或は墺太利或は西班牙或は佛蘭西等の羈絆を脱して、國家統一を企畫せんとすることのみに集中した。是が爲に幾千の愛國者が暗黑なる古城に幽閉せられ、或は絞首臺上の露となつたのである。而して斯かる幾多の辛酸を嘗めた伊太利が、今を去る六十數年前全く國家の統一を遂行したが、次で起る國民の希望及其の輿論は何邊に向つて進んだか？結局當時尚墺太利の手に奪取せられてゐた舊領土回復事業の遂行に集中せられたのである。斯くて歐洲大戰に際し戰場に向ふ兵士も又家に留まりて戰士の後援を行ふ市民も、彼等が一齊に高唱した叫は「トレント」、「トリエステ」の二語であつた。是の叫は由來大

自然が、此の二地方を伊の領土として版圖に入れたものであるから、墺の手より飽までも之を奪回せんとする熱望の發露に外ならぬのである。今や伊太利は「トレント」、「トリエステ」を回收し更に「フイユメ」、「ダルマチヤ」の一部も其の手に歸した。更に其上何物を欲せんとするのであるか、六十萬の人命と國有財産の半ばとを失つて戰つた伊太利は、兎に角永年の熱望であつた舊領土の恢復が仕遂げられたので、六十萬の英靈に對しては、精神的に慰藉することが出來得るであらうが、偖て戰爭の爲に使ひ果した國帑の補塡や生き殘つてゐる蒼生の生活を考へねばならなかつた。殊に物價は國内に於ては戰前に比して幾倍の昂騰を來し、國民の生活は日々に威嚇せられてゐる、斯の如き戰後の大問題に對抗するには非常な困難を感じたのである。

三、ファシスティ黨の出現

歐洲大戰中伊の內閣閣班に列し最も若輩を

日——一九一九年六月二十三日）が平和會議に於て、ウイルソンなどの主張に苦んで掛冠後はニッテイ、ジョリッテイ、ボノーミ、ファクタの諸閣が相續き、それより現在のファシスティ內閣に及んだものであつたが、ニッテイの如き、又昨年物故した、ジョリッテイの如き其の學識經歷に於ては何れも伊の政治家中錚々たる人物であつたに拘らず、其の政權時代社會運動の潮流に當つて之に能く對抗することが出來なかつたのである。勿論此の潮流は歐洲大戰後獨り伊太利とは云はず、何れの國に於ても直接間接に戰禍の影響として惹起しない國はない。斯る混沌時代に當り、伊國に於ても社會問題は到る處に頻發し過激分子の跳梁跋扈は無鐵砲な運動を開始し、或は國體を危機に導いたとも云ひ得らるる運動が行はれた。此の場合前記の諸內閣何れも時局を收拾し、人心を鎭靜することが出來なかつた。此の場合突如として出現したのは世に國粹黨と併せらるゝ、ファシスティ黨員より依て紛亂を極めた思想運動は全く平定し、伊太利國家は危機より救はれた。

四、國民の好望するものは平和

實に戰爭直後の伊太利は彼のファシスティ評論者中其の筆鋒の鋭さと、又論旨の正確なることに於て第一人者の觀ある「ピエトロ、ゴルゴリーニ」（Pietro Gorgolini）の著書中に『ニッテイ」はエミリア、ローマニヤ、トスカーナ、マルケ、ウンブリア、ロムバデルイア、ヴェネト、ピエモンテ、ブリアの諸州を混亂に陷し入れ、此の諸洲に於ける過激主義者は人の物を奪略し、同盟罷業を事とし、盜賊を働くともニッテイの政府は法の力に依て其の責任者を罰することを爲さなかつた』と大に憤慨して居る如く、如何にニッテイが政權中過激主義者に對する取締の不行屆であつたかが窺はれる。又其の當時の伊太利が如何に混亂してゐたかを推知せらるるのである。筆者の羅馬滯在中に於てもニッテイが國

であるから、戦争の渦中にあつて非常な苦心

五、人心の動きは産業へ

今や伊太利人心の趨く方向は、殺伐な劍戟の閃く處や、過激な思想を包有する者の集る場所では決してない。而して只管眞面目な生活改善に努力する社會に向つて進まんとして居るのである。今試みに羅馬にて發行する重なる新聞「ジョルナーレデイタリア」「メッサゼーロ」、「イデア・ナチョナーレ」、又英蘭の「コリエーレ・デルラーセーラ」、「イル・ソーレ」、ナポリの「ジョルナーレ・メリディオナーレ」、其の他諸多の新聞雜誌の所說は、或は物價騰貴に對する對策、或は發動機又は電氣工業の擴張、或は體育の奬勵、或は對外問題、植民及移民に關する對策等日々其の論說の筋書は千差萬別であつても、歸する處は眞面目な對生存方法を指導してゐるのを見る。斯くて幾分にても人心に悪影響を與ふと考へられた出版物は何人に所屬するなどに用捨なく其の記事は差止められるのである。

由來ファシスティ黨の綱領の一として著明なるは『勞働を通じて平和有り、勞働は不和の中に在り』(La Pace attraverso il lavoro, il Lavoro nella Pace) と、結局勞働により平和と健全なる幸福を鼓舞せんとするにある。

大戰中壯丁が軍事に召集せられ、軍需品の製作や其の他戰爭に關する諸多の事業の爲めに、人手が非常に不足を來したが、戰後は伊國に於ても他の歐洲交戰國と同様に非常な失業者を出し、是に對する處置が施政中最大急務であつた。而して國內各中心地方には、各種の社會事業が設けられ、國民生活の方策を主として考へた。殊に着目すべきは下級官吏に對する組合である。例へば鐵道從業員、郵便配達人の如き給料は安くても、普通の自由勞働者より其の體面を一層顧みねばならぬ階級者の救濟に力を盡した事である。而して彼等の爲には、非常な巨資を當局官省より支出し大々的消費組合を組織し、限りない物價騰貴に對抗して、良好な成果を收めたる。又普通勞働者に對しても同様に救濟的設備が相當に行渡つて居る。斯くて下級勞働階級者の生活狀態は、想像以上氣樂になつたと考へらる。それは彼等勞働階級は四方に發展しつゝある鐵道及自動車道路工事や或は郊外に膨脹しつゝある家屋の建築などに於て、割合に歩の良い賃銀を得られるからである。而して矢張り中流社會が此國に於ても概して苦境にあるは事實である。

實に伊太利の國土は狹く、人口は多いので從來幾百萬の移民を海外に放出し其の調節を取つてゐたのであつたが、近年米國移民に非常な制限を受けるので、伊の海外移民は從來の如く北米に向はない。斯てどこまでも內地に於て其の生活の安定方法を發見せねばならなくなつたのである。

從來伊太利財政の大恩人と見るは、移民の送金、觀光者の齎らす觀光費であるが、今は夫丈けで伊の收支の差を償ふことが出來ない。實に伊國の產業は何れの部門に於ても、英佛白の如くに進んでゐないので、近年の統計より推せば大略輸入額が我が邦貨に換算して二十億圓に對し輸出額十五億圓と見るべき

食糧である。特に[illegible]で、勘からず輸入を行つたのである。[illegible]る一九二五年以來國家施設として、穀物戰と稱し、國の津々浦々に至るまで耕地整理や埋立工事を爲し、一畝の痩土と雖も餘さず穀物の栽培を行つて居る。殊に近來水力電氣の應用、或は發動機具機械の製作が非常に進歩し、又商業の發展の爲に地中海を中心とする諸港に商務官を派して、盛んに貿易を奬勵してゐる。其の他蠶業の奬勵に努め、絹を賣つて石炭を求めよとの標語も、國內一般に普及せられてゐる。加之現時人造絹絲は英獨を既に凌駕し、米國の生產額を壓せんとする狀態を呈して居る。斯くて今や善良なる伊國民は區々たる思想に囚はれず、ファシスティ內閣の綱領である「平和は勞働の內に在り」との方針に向ひつゝあるものゝ如くに思はれる。實に五年の久しきに亘つて行はれた歐洲大戰は、世を擧げて人類生活に戰禍の最大悲慘を味はしめ平和の大切なるを知らしめたのであるから、戰爭の禍中にあつて非常な苦難[illegible]道を求めん爲に從來よりも更に國民[illegible]實な產業の方面に心身を傾注せんとすることは至當の理由であらねばならぬ。

六、巴爾幹の近狀

簡單に巴爾幹と云へばそれだけだが兎に角三十八萬粁平方の面積に二千萬の人民が棲息し、ユーゴスラビア、ルーマニア、ブルガリヤ、アルバニアの四王國と土耳古及希臘の二共和國とが夫々分立してゐるので國家間には常に複雜な問題が發生し、葛藤の絶へざるは止むを得ざることと言ふべきである。

七、ユーゴスラビアとルーマニア

此の兩國は何れも戰勝の結果意外に領土を擴大して、所謂領土成金である。先づユーゴスラビアは元のセルヴイア、モンテネグロ、ダルマチア、クロアチア、ボスニア、ヘルゼゴヴイナ等十有餘の小國又は小地方の一團であつて、森林に富み從つて木材が各停車場附[illegible]セメント製造[illegible]ルダラードの如きにダニユブとサーヴア河の交叉點に位し、水利の便利を得て相當の殷賑を呈して居る。又ルーマニアも戰後非常に領土を擴げ主都ブカレストは人口六十五萬を有する巴爾幹の小巴里と稱せらるゝ美しい都會である。殊に石油の噴出量豐多で、國家經濟の中心は此の石油に依つて保たれて居る。然し戰費の跡片付が今尙國家財政を極度にまで困憊に導き、先には十二ヶ年間債務の履行を延期すると云ふやうな法律を出し、債權者の要求は一時停止を餘儀なくされた。同國に於ける貸借信用なるものは非常に減退したものと言ひ得らるゝ。ユーゴスラヴイアの對外狀態を案ずるに、曾てより懸案中のフイユメは先年適確に伊國に割讓し、其の後一時伊國との間に一寸暗雲の起つた事もある。今はフイユメと云ひ、トリエストと云ひ同國有の港を失つたので、アドリアテイツクの沿岸ナレンタ河口に於て商港を建設せんと焦慮して居る。

同國は前述の如く幾多國家の寄合であつた。其の統治及國民の和合は餘程困難視されて居るのである。又ルーマニアも嘗にベッサラヴイア問題の爲に露と葛藤を生じてゐたが今や此の問題も調節され平穩な狀勢に復してゐるものゝ如くである。

八、ブルガリア

先年早春二月の交筆者はブカレストより間道を通つて「ルスチヨコ」を經てブルガリアの首都ソフイアに向つた。ブルガリアの領域に這入ると其の邊の未開と蠻風には相當不愉快を味つた。斯く謂はゞブルガリア國全體の文化の程度が非常に後れてゐる樣に聞ゆるも然らず、同國は教養の點に於て、恐らく現時の巴爾幹諸國中第一に位するものであると思ふ。只だ地方的に開けないところがあるのである。實際ブルガリアは一九一二年以來彼のバルカン戰爭に引續き歐洲大戰の渦中に投じたので、同國に取つても最も大切な烟草の名産地であるマセドニアを失ふとか、又巨多の戰費の負擔とか幾多の災厄に遭遇したが、國民は常に堅實な意志を保有し、是等の災厄は畢竟天命と諦め何等不平を抱かず、夫々其の勞働に勵み、質朴な生活に滿足し、只管國運の挽回に努めて居る。此の國が他と葛藤を構へるは、歐洲大戰の結果として希臘に割讓した、彼の大切なマセドニア問題に基因するのである。又産業の方面に於て此の國は紙卷烟草の製造に優れ、其の廉價と風味の佳なる點は恐らく他の追隨を許さないと云つても差支がない程である。斯くて國家の法律にてシガーは製造せられず、紙卷烟草のみが專門である。薔薇油、皮革の製造是亦著名であつて其の原料を取引する顧客は主として佛伊の兩國である、又是等兩國が大戰後此の國に勢力を扶植せんとして腐心して居るのである。

九、土耳古

此處には主題を巴爾幹とせる見地より亞細亞土耳古は論せず、專ら歐羅巴土耳古、即ち君士坦丁堡のみに就て考へて見たい。同地は大戰後、戰敗國として非常な疲弊の極に達し、一市場は睡眠狀態を呈して居るが、近年此の地に於ても漸く經濟的に覺醒し五十年間全く眠つてゐた同地の商業會議所が幾分の活動を開始してゐるのである。元來土耳古人は多年征服者たる順況に馴れてゐたので、商利と云ふやうな方面には非常に迂遠である。而して彼等の最大理想は其の職業を官吏即ち文武官の方面に求むることであつた。斯くして若し官吏たることを得なければ農民として暮らそうと云ふやうに、商業に從事することを是迄非常に嫌つてゐたのである、然し商業嫌ひの土耳古人も時代の趨勢に抗することは出來ないで、近來商業に從事する者の數を增したが、此の國民の美德は矢張武士的の氣風がどこまでも彼等の振舞ふ行動に付纏ひ、商道德を重んじ商人としての信用は頗る厚いのである。

一〇、希臘とアルバニア新王國

巴爾幹諸國中彼のルーマニアでも、ブルガリアでもセルヴイアでも小國ながらも何れも

君主政體を民衆に基礎し[illegible]てゐる。アルバニアも最近王國を樹立し新國王を推戴するに至つたので、從來右方左方に搖いてゐた國民も堵に安んじて其の業に勵むことが出來るのであらう。此の時に當り獨り六百萬の國民を有する希臘が王政を廢し共和政府に改めたが、依然國内の紛擾は休むことがない。先年筆者がサロニカに滯在し宿を去つてアテニに向つた翌日、同市に暴動が起つた樣なこともあつた。不幸にも斯く内憂外患に多忙な同國に於ては新進的產業の發展を認めらるゝやうに向ふことは至難である。

アドリアティック沿岸の山地であるアルバニアは元巴爾幹に於ける土耳古の一州であつたが一九一四年以來政治的に一國として存立を始め、又一時は伊太利の保護國であつた。元より面積三十五粁平方の地に百萬の人民が住んでゐる一小國であるが、前述の如く最近共和政體より君主政體に改められ、國王には是まで大統領であつたアーメト、ヅオグ氏が去る九月一日午前九時同國首府ティラーナに[illegible]民國は從來巴爾幹諸國の例に漏れず内爭外患の絶えない國であつたが、ゾオグ氏の統領就任後先づ第一に國民軍の編成、次で青年團の組織を完全に遂行し、而してこの常備軍に依て内國的反亂は十分に鎮壓せられ得るのである。又青年團は山地の僻陬に在る一村落の子弟にも一樣に、國民的紀律及近代的教育を施され、近時大に見るべき成績を擧げた。是等の二大事業は氏の施政中最大の功績として見られ國民の信望を得たものである。叙上の如[illegible]國も、皆君主を奉じ共和の制度を見たのであるから、爾後益々發達するに至るものと思惟せらる。要するに爲政者を排斥するよりか只管不平を高唱して、國家の機關に支障を與ふ者に與みするものゝ多き國民は、到底自滅の運命を免れないものである。此の意味より筆者は勃牙利國民の質實剛健なるに贊同すると同時に、新君主國アルバニアに幸あれとその前途を祝する者である。

フランス社會運動の一瞥

小牧近江

この國の社會運動の二大潮流をなすものは左翼の共產黨（P・C・F）並に統一勞働總同盟（C・G・T・U）、右翼の社會黨（S・F・I・O）並に勞働總同盟（C・G・T）であることは例年に變りない。無政府主義系は表面相變らず活潑の如くでこそあれ少數派である。

共產黨系から云つて見ると、例によつてごたごたが絶えない。狼時代である。明確な理論の爭ひといふよりもむしろ、個人の勢力の消長が主なる對立の原因となつて來たやうな

のがこの國の特徴といへやう。フロサアールのいはゆるジョオレシスト一派を追ひ出したのが、かつてのトロツキイ系だつたスヴアリヌ、ロリオ一派、それのまた右翼を追ひ出したのがスュザンヌ・ジロオ並に戰線統一の急先鋒だつたトラントだつた。かくて、フランスの共產黨は一時、スュザンヌ・ジロオ、トラント、それにこの國青年共產黨の創設者ジヤツク・ドリオのいはゆる三頭政治によつて指導されやうと思はれたが、この派のあまりに、中央集權的なことや、政治の鬪爭の目標があまりに御先き走りすぎ非大衆向きだつたことや、役員組織が非組合員偏重主義だつたことなどが、一九二五年十二月の大會で問題となり、ついで翌年のリル大會でも相當論議されたが、徹底的に之が清算を見るに到らずして幹部派の勇退となり、現幹部派のセマール、トレズなどがその後釜にすわつた。しかるにその後トラント、スュザンヌ・ジロオの舊幹部は黨內にあつてさきに除名された日和見組たので、今年一月の黨大會は遂ひに極左派の一掃を期し、その血祭として前記スュザンヌジロオ、並にトラントの兩ウルトラを除名してしまつた。

フランス共產黨議員は今年四月廿九日の總選擧の結果、一九二四年五月十一日の總選擧の二九名から十四名に約半減した。それは小選擧區單記投票による新選擧法によるの結果で、かかる共產黨員撲滅選擧法の通過に貢けんしたのは社會黨であつたことを忘れてはならない。今回の選擧法にして、さきの大選擧區比例連記投票にあつたならば共產黨は優に六十五名の選民を獲得したであらうこと確實とされる。フランス共產黨はその議員數こそ半減したが、投票總數は前の選擧より約十萬增加してゐるのである。尙ほまた、下ライン縣サヴエルヌに於てアルザスの自治候補者にして反軍國主義の旗幟明かなダーレー氏が共產黨の支持の下に民主派のアルトルフエ氏を凌ぐ一七〇〇票の差で見事當選してゐるといが、なんといつても院內共產黨にとつての損失はヴアイアン・クーチュリエ、ルノオ・ジヤン等の落選であらう。ヴアイアン・クーチュリエはバルビュスとともにこの國左翼文壇の重鎮であり、議會の少壯花形だつた。ルノオ・ジヤンはフランス農民運動の理論家であり「祖國は危殆也」で有名な雄辯家だ。だがこの兩腕をもがれたが如き老カシヤンもジヤツク・ドリオの潑溂たる勇猛さには大に氣を强くするところあるだらう。モロツコ出兵反對運動と、支那革命に特別の理解を有するこの若きパリ選出議員は、フランスきつてのアンチ・ミリタリストであり、ついこの十月廿五日そのことで出獄した許りだ。

フランス共產黨は去る十一月三日から七日にかけて中央委員會を開催し主としてモスクワの第六回世界大會の決議を討議しこれを可決した。討論中アリス・ブリセ、ピヨ、ギゼル等の少數派は右翼の警戒を力說するところあつた。委員會は個人中心の排擊を打きつて

方面闘争を採用することを申合せ、新幹部は次期大會に於てこれを新たに選出することに一致した。

つづいて十一月四日パリ及びセーヌ州の勞働者、農民の通信員總會が開かれたが、これはこの組織が出來てから一週年記念に相當するもので、この種の企てとしてフランス最初の大會だつた。

C・G・T・U は十月廿五日から廿八日にかけて中央委員會をパリに開いたが、その主なる議題は資本主義の合理化、戰爭の危機等だつた。書記長ラカモンによると、今年正月から十月中旬までに到る同組合の關係した爭議は五〇四件だつたが、その六割は完全に爭議團の勝利となつてゐる。資本家の中には爭議の勃發をおそれ自發的に賃銀の値上げをなしたものがあつたが、常に、、、、、、、とする勞働者にとつて賃銀の値上げが爭鬪力を緩和するものではない。否、資本主義の合理化や、、、、、、、ためにも、それと密接な

報告してゐる。

セ・ジエ・テ・ユ は反帝國主義運動、失業反對、サウイエト・ロシア防衞、等々のために共産黨と歩調を取つて常に勇敢に闘爭して來た。それにも不拘、約五十萬と算せられてゐた組合員が最近相當の減少を見たのである。ことにその打擊とされるところは金屬組合の損失である。約一萬人の脱退を見たのである。

しかし鐵道評議會員選擧や鑛山代表者選擧では非常に好成績を擧げてゐるやうな反面もある。要するに、統一勞働總同盟がその活潑なる行動にも不拘、かくの如き結果を見たのはアジ・プロを過重し組織運動を等閑視したからである。また、指導機關と組合との聯絡がとかく圓滑を缺いたがためである、等々だとされる。

次ぎに右翼側の現狀を述べると、フランス社會黨はこれを三つ乃至四つのグループに分かつことが出來る。最右翼のルノオデル、ボオル・ボンクールを代表する入閣派乃至はブ

[illegible]中心とする左翼。ジロムスキイ一派の最左翼の名、閃光派がそれである。

フランス社會黨は今春の總選擧の結果一〇一名となつた。一九二四年五月の總選擧の一〇二名に比すると一名の減少となつたわけであるが、今次の新選擧法で二八名增加してゐるのだから（總計六一二名）これとて感心した結果ではなかつた。ましてこの黨の地盤ともいふべき、ノール、パ・ド・カレー、オート・ヰエンヌ、ロワール、ソーヌ・エ・ロワール諸縣の勞働大衆を尠からず共産黨に蠶食されたことは致命的であるといはねばならぬ。勞働大衆を失つた社會黨はプチ・ブルショア層に進出してゐる。

共産黨の反帝國主義黨、階級對階級黨であるのに反し、社會黨は殖民主義黨であり、（同黨のアレキサンドル・ヴアレンヌは印度支那總督だつたが昨年辭職した）協調主義黨である。ポオル・ボンクールの態度がジユネーヴに

フランス政府を代表してゐるは人の知るところ。そればかりでなく、彼は老若、男女、勞働者引くるめの擧國皆兵主義、軍事教練の實施の張本人だつた。この黨は軍備、スパイ政策を含めたブルジョア政府の豫算を完全に通過させてゐる。この黨は又產業の合理化に積極的支持を惜まず、モロッコ、シリアの出兵反對並に支那革命の支持に對する共產黨との協同鬪爭を一蹴してゐる。この黨の表面の政治的指導はブラム一派の中間派乃至は獨自主義派によつて代表されてゐるが（ブラムは今次の選擧で落選した）事實上はブルジョア政黨の左翼である急進社會黨並にあらゆる眞面目な共和主義者との合流派であり、階級對階級を標榜する共產主義との對立派である。

五月廿六日のツールーズ大會、並に七月十三日の評議委員會でジロムスキイ、セヴェラツタ等の階級鬪爭說の高唱があつたが、結局大した動搖にはならなかつた。これらの極左派は共產黨との提携によつて歪んだ社會黨戰線を盛返さうとするのだつたが、結局これもブラム、ポオル・フオールの僅かのデマゴギイによつて黨員の脫走を防衞せんとする彌縫策と五十步百步のデマにすぎない。

セ・ジエ・テ、即ち改良主義勞働總同盟の政策は勞資協調主義、產業の平和化、共產主義排擊の點に於て社會黨と先づ變りがないといへる。こゝには國際聯盟に於けるフランス帝國主義の代表ポオル・ボンクールの代りに、ジユオが君臨してゐるまでのことである。ただ、この國の勞働總同盟と社會黨との間に何等かの差異があるとしたら、社會黨側の黨內左翼放慢主義に反し、總同盟側は組合內異分子の積極的排擊がそれだ。C・G・Tの內部にはかねてから『統一の友』なる十二三組合から組織されてゐるグループがあつて、機關誌『統一』を發行し、組合戰線の統一を主眼として併せてC・G・Tの協調主義反對を標榜し來つたが、昨年の大會で同少數派の無力が暴露するや、幹部側は俄かに高壓的に該統一派を放逐せんとしてゐる。

フランス總同盟の現勢力は約六十萬と稱される。左翼の統一總同盟に比して稍々有力なのは一に近年公吏組合同盟と、プチ・ブルジヨア階級の使用人に手を延ばしたからであるとされる。從つて、この總同盟の構成分子はますます勞働大衆よりプチ・ブルジョア層に及んで來てゐることは社會黨と相似てゐる。

總同盟は勞資の協調主義の具體策として、使用者側と改良主義組合との間に一方、全國的な共同勞働契約を成立させると同時に、他方、強制調停制度を目論んでゐる。之に加ふるに彼等の唱ふるところの勞働管理なるものも畢竟勞働組合が分裂しその九割が未組織者であるこの國に於て、改良主義である總同盟のみをしてブルジョア政府の御用黨となし、その優越權によつて他の組合を切崩さんとする高等政策だとされる。蓋し、最近の北部及びボルドー等に於けるC・G・Tストライキ破りはその露骨な現はれといへやう。

かかる現狀であるのだから、フランスに於ける左右兩總同盟の統一問題は昨年七月のC・G・T大會で兩派の鐵道勞働者同盟の角勢

現下のロシア國情

昇曙夢

一時相當問題にされたソヴエート政府部內の內訌もトロツキイ等反幹部派の追放と共に稍落着いたやうであるが、最近また新たに農民政策に於てルイコフの右傾政策とスターリンの左傾政策との間に衝突を來し、之がため最高政治幹部(九人)が左右兩派に分裂して互ひに策動してゐるので、政情は依然として安定してゐない。由來農民政策はソヴエート政府の癌で、なかなかうまく行かない。若しルイコフのやうに此上農民に對して緩和政策を取つたら彼等の間に小ブルジョアを增長するばかりで、ソヴエート制度の徹底を期することが出來ない。と言つてスターリンのやうに工業政策に偏して農民壓迫の手段に出たら全人口の大半を占むる農民が又々僻忌の氣風を生じ、農產品の輸出貿易に直ちに惡影響を來す恐れがあるから、絕えず政策の動搖するのも無理はない。既に是迄も農民政策は幾度かの動搖變遷を見、その度每に半ばは農民の無理解から失敗に終つてゐる。例の幹部派と反幹部派との爭ひも主として農民政策に對する意見の相違から來たのである。即ち反幹部派は何處までも工業政策に重きを置き、農民の中堅であり且つその大多數を占むる中農階級を大農と同じく搾取的ブルジョアと認め、從つて是等農民に供給する工業生產品の價格を出來るだけ釣上げると共に農村への課稅を重くしようとするに對して、幹部派は中農階級をプロレタリアの味方とするには彼等への課稅を輕減して餘剩穀物の自由取引を許さねば[illegible][illegible]ある。[illegible]は內政問題、世界政策などに對してトロツキイ一派はあくまでも幹部派の政策を資本主義への逆轉軟化であるとして戰時共產主義への復歸を強硬に主張し、共產黨規を破つてまで分裂行爲を止めないので遂にトロツキイ一派を追放に處したのである。然るにそのトロツキイ一派排斥の張本人であつたスターリンが今ではトロツーキイ主義を採用してルイコフへの對抗上左傾政策に出てゐるのは面白い現象である。

ソヴエート聯邦の財政經濟狀態は目下悲觀狀態にある。最近豫算は年々膨脹し、歲入は不足を告げ、紙幣の增發、公債の發行相續き其他物價の暴騰、食料品の缺乏、ルーブルの外國相場の下落等數え來れば甚だ樂觀を許さないものがある。最近數年間に於ける聯邦の單一豫算を見るに、その膨脹振は輸出入各四十億から五十億、六十億、七十億と上つて來

てゐる。斯かる膨脹は素より一般國民經濟の膨脹に基因することは言ふまでもないが、就中巻大なる建設事業及び急激なる國家の工業化計畫が巨額の資金を要することを注意せねばならぬ。ソヴエート政府の發表してゐる處では、全國工業化の目的のために最近年々十億留以上を投じて居るとのことである。この外電化事業にも年に數億留を投じて居り、現に昨年度の國民經濟方面への投資金は合計十二億留を突破してゐる。是れは勿論各種の工場を新設し、機械や裝置品を外國から購入するための投資が大部分であるから、將來のためには極めて結構な譯である。謂はゞ是れはやがて收益を擧ぐることの出來る資本金である。然るに今のところソヴエート聯邦に於ける國營企業の諸工業は、石油、石炭、製鐵業の如き天惠を利用し得るものを除いたら、良成績を擧げてゐるものは極めて尠ない。それには役人の商業で經營が下手な點もあるが、第一黨員が首腦部を占めて、實際の專門技術家や手腕家を疎んずる傾向のあること、理想と主義とに囚はれ過ぎること、ソヴエートの國是として勞働條件の改善に急にして自然工業の採算的基礎を危くすること等が、不成績の主なる原因となつてゐる。それに政府の方針として外國に安いものがあつてもそれを買はずに國內で製造しようとするから、何時も凡ゆる品が拂底して値段が馬鹿に高い。

ソヴエート・ロシヤでは工業國營であり又農產物の買付けも大部分國家の手で行ふから是等需給の關係も圓滿に行かねばならぬ筈であるが、それが甚だ不圓滿である。卽ち農產品は之によつて都會地や工業地帶を養はなければならない關係上、その價値は法外に安いが、反對に工業生產品は乏しい原料と生產力とを以て造られたものであるが故に馬鹿に高價で、この兩者の開きが甚だしく大きいのである。例へば工業品は靴一足四十留とすれば農產品は黍一布度一留といふ比例で、殆んど權衡が取れないのである。そこで農民の不平がある。農民はたとへ安い價格で穀物を賣つても、第一農村に必要な工業品が拂底してゐるから、買ふべき品物が無い。自然農民は穀物を賣り惜しんで隱匿する。ために政府の穀物買付成績は極めて惡い。そこで政府が考へたことは公債政策である。最近幾度か公債を發行して、殆んど強制的に農民に賣り付けることにした。(今では公債は總額十五億留に上つてゐる)。農民は止むを得ず品物を買ふ代りに公債を買つて、汗の油の產物たる穀物を賣らねばならぬ。斯かる狀態では精勵して耕作に從事するのは愚だとの考へから、一體に農業に對して昔ほど力が入つてゐない。肥料など高い金を支拂つては到底引合はぬから施肥しない。若し穀物に餘りがあれば賣り惜しみ又は隱匿して容易に出さうとしない。これには勿論農民に理解の足りない點もあるが、政府の工業偏重主義も大に祟つてゐる譯である。その結果は直接穀物の輸出に影響して、戰前七八百萬噸の穀物を輸出したロシヤが、一九二六年十月から二七年九月に至る一ヶ年には二百五十萬噸に下り、更に一九二七年十月か

ら二八年九月までの一ヶ年間に[illegible]萬噸を輸出したに過ぎない。流石の農業國もこの年には米國から麥粉を輸入しなければならない狀況であつた。之を一九二七年十月から二八年八月まで十一ヶ月間の貿易額に就て見ても、

輸出	六八〇、〇〇〇、〇〇〇留
輸入	八五四、〇〇〇、〇〇〇留
輸入超過	一七四、〇〇〇、〇〇〇留

となつてゐる。この輸出不足は主として穀物の激減に因ること前述の通りである。この狀況は既に昨年秋頃から兆してゐたのであるが更に今年になつて何うしてもドイツに返還しなければならない借金があつたとかで、急に現在の如き極度の財政難に陷つたのである。

この難局を切り拔けるために、ソヴエート政府は外資吸收を緊急事として、最近劃期的な積極的利權政策を樹立し、之を世界に發表したことは既に周知の事實である。即ち今年七月二十四日ソヴエート聯邦政府の閣議は、利權提供區域に關する計畫に就き中央利權委[illegible]に關する全體的根本條例並に運輸、商業、燃料工業、電氣事業、林業、農業、漁業、棉花栽培、製糖、牛乳加工業から共產經濟方面の事業に亙つた根本條例を認可し、九月十五日の『イズヴェースチヤ』其他の新聞紙で新利權政策の內容を發表した。斯く積極的に國內の利權を擧げて、從來仇敵視して來た外國資本の前に提供しなければならなくなつた國內の事情を考へると同情に値するが、一方その實績は餘程危まれてゐる。今迄のところで見ると、資本主義諸國に於ける反響は餘り香しくない。そればかりでなく、國內に於ては資本主義に特典を附與せんとするこの積極的利權政策に對して、勞働階級が民主的自由擁護戰を起す恐れがあり、又一方民衆の國政監督を唱道しながら、勞資階級戰に於ける勞働者の威力を切り崩さうとするこの退嬰政策に對して、斷乎たる反對運動が豫期されてゐる。

共產黨がその後繼者として青年共產聯盟を[illegible]て、之を[illegible]一の方便と考へたことに、今日如何なる結果を胚胎したかを見るに、二種の矛盾した結果に到達したやうである。即ち都市勞働者の子弟たる青年共產聯盟（コムソモール）は彼等の先輩たる現在の黨幹部の右偏的政策を以て共產主義の敵であると見做し、甚しく現在の黨幹部に不滿を抱いて、寧ろトロツキイ等の左派即ち反幹部派を思ふ風がある。之に反して農民の子弟たる青年共產聯盟は彼等の間に教育が普及し智識の程度が增進するに伴つて愈々都市對村落の矛盾に覺醒して來て、その教育が進むに隨ひ都市と農村の反目が益々高まるといふ狀態である。が、更に憂ふべきことは、ソヴエート社會の中で最も健全なる分子として望みを囑されてゐたこの青年共產聯盟（二百萬人）が最近周圍のデカダン的風潮に感染して、著しくその綱紀が頹廢して來た一事である。即ち彼等青年男女の間に近來革命精神を沒却して聯盟を脫退する者が多くなつたばかりでなく

或はヴオーツカに浸り或は自由戀愛に溺れ、揚句の果は自暴自棄になつて厭世自殺を遂ぐる者が多くなつたのである。この風潮を今ロシヤではエシエーニン主義又はエシエーニン的傾向と言つて、大きな社會問題となつてゐるが、それは革命の現實に幻滅して二三年前悲慘な厭世自殺を遂げた農民出身の革命的情熱詩人エシエーニンの影響を指して謂つたのである。實際今日のロシヤの敏感な青年男女は彼等の崇拜して措かない天才エシエーニンの心事に深く共鳴して、同じく理想と現實との惱みから自殺する者が多い。文壇では最近このデカダン的な新しい青年男女の氣風を取扱つた所謂世態小説が流行で、非常に廣く讀まれてゐる。と同時に一方政府當局者及び有識者の間では、この風潮を一刻も棄ておき難い社會問題として大に之を憂へ、その對策として何等かの新しい道德の指標を與へて、彼等の行動を指導しなければならぬといふ議論が高く、その結果昨今急に『道德とプロレタリア生活』、『新生活と青年』、『勞働婦人の新生活』といふやうなパンフレットの出版を見るに至つた。

孤兒救濟問題には相當の力を盡してゐるらしく、數年前街頭や停車場毎にうぢや〳〵してゐた乞食は、今では餘り見受けられないが失業者は今でも可なりに多く、百萬乃至百五十萬に上るだらうと言はれてゐる。然しこれも今年二月から實施し始めた七時間勞働制が完全に行き亘つたら、交代頻繁の爲め勞働者の數も増加するから、失業者救濟事業も幾分緩和されるだらうと豫期されてゐる。一兩年前猖獗を逞うした浮浪漢、不良少年は政府の徹底的對策によつてあらかた片附いたやうであるが、ウオーツカの弊害は近來益々甚しくなつたやうである。レニングラード市の衞生醫大會の報告によると、一ケ年間に官憲に拘引された泥醉者の數が、モスクワで十萬人、レニングラードで十一萬三千人、その中十二%は婦人である。また各市の兒童につき調査したところによると、全く酒の味を知らぬ者は僅か十一%で、毎日酒を常用する兒童が十%もあつたさうである。ウオーツカ飲用による弊害は風紀、衞生上は勿論、勞働規律を紊し、生産増進にひどい打撃を及ぼすので、政府や共産黨幹部は法律の力だけでは追つつかないとあつて、言論機關は勿論、職業組合、黨機關の力を藉りて「自己批判」を標語に目下アルコーリズム退治に全力を盡してゐる。

盲學者坂西教授の妻

村島歸之

始業の鐘が一わたり鳴り渡つて、無數の學生がおのがじし吸ひ込まれるやうに、それ〴〵の教室に這入りをはつたあと、日曜日のやうに靜まりかへつた校庭の一隅、研究室の方から、一人の學生に手を引かれた白皙痩軀の一教授が、靜かに歩みを運んで來る。落付きのある足どりではあるが、しかし何となく、たど〳〵しい運びであることに氣付くなら、殆んど同時に、その教授の瞳が、冷たい眼鏡の影にあつて、永久に閉されてゐることをも知るであらう。

やがて教授は、學生に手をとられた儘、とある教室の教壇に立つた。ノートを見る視力をも失つてゐるのだから、手には一片のメモさへ持つてはゐない。飽くまで白い、凛とした顏を眞ッ直に向けて、靜かに口を開く。

こゝは神戸高商の一教室、今は「經濟史」の講義の時間。そして教壇に立つ盲學者こそは、同校の矜り坂西由藏教授である。

◇

『坂西先生見せましよか、
　色が白うて背が高うて
　隨分お品もよいお方
　玉に疵だよ、目が近い』

今から約十年も以前――新會の藤原米造代議士などが、未だ金釦を胸に光らせて上筒井の學生街を濶歩してゐた頃――高商の學生によつて唄はれてゐた「ナッチヨラン節」の中に、斯う詠まれてゐるやうに、坂西教授の眼鏡は、隨分古くから有名であつた。

ナッチヨラン節に唄はれた頃の教授はまだ失明はしてゐなかつたが、強度の近視眼のために、教室でも四十度近くまで睛をかゞませねば、書物の文字が見えなかつたので、一時は、教壇のテーブルの上へ、淨瑠璃語りが用ふ見臺を置き、その上へ書物をのせて講義をしたことさへあつた。

又、こんなこともあつた。

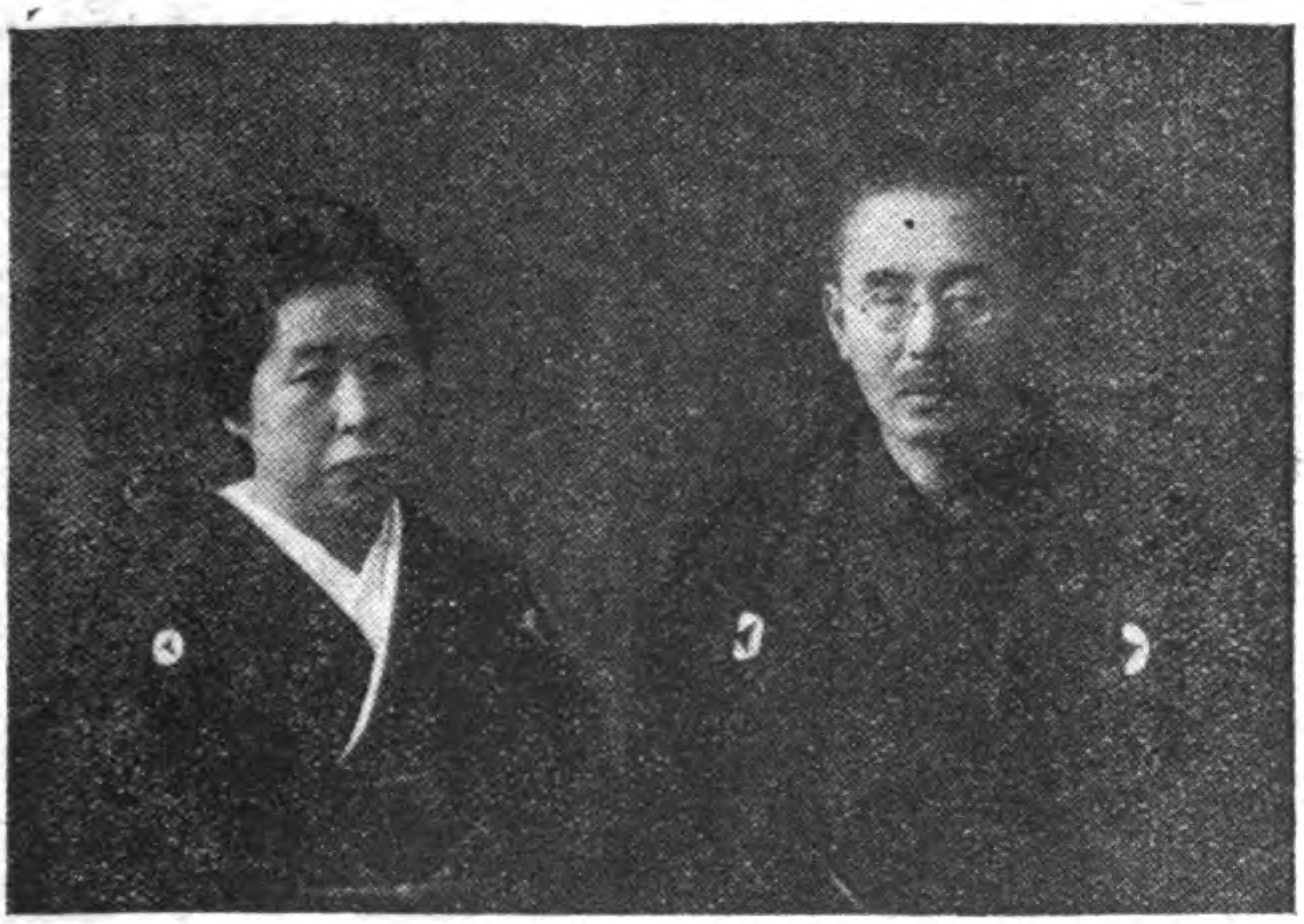
明治大帝御大葬の夜、高商では運動場で遙拜式を擧げた。篝火が三箇所に焚かれた。夜陰天地を罩めて、あたりは寂として聲がない。八百の學生は水を打つたやうに靜まりかへつてゐる。その靜寂の中に、教授連は順次に神前に出て玉串を捧げた。

坂西教授の番が來た。わづかに篝火の光が式場を輝してゐるだけである。教授はまづ自分の直立してゐる場所を胸の中で測定した。祭壇は正面にある。教授團はその前方に左右に分れて平行し、向ひ合つて侍立してゐるのであらう。そうすると、自分は約五六歩前進した後、右向け前へ！をするならば　おのづから祭壇の前に達する譯である。教授は幾何學的に、直線に進んで直角に折れた。然るに、教授は祭壇に達する前に早くも何物かに衝突した。それは教授にとつてあり得べからざる存在であつた。「抑も何物ぞ」と、凝視すると、それは教授團の前面にゐた筈の祭官であつた。

『つまり、教授團が平行して立つてゐると思つたその假定が誤つてゐたのでした。教授團は祭壇を中心に、左右に斜めに八字型に開いてゐたのです。だから直線に進んで直角に折れゝば、向ひ側の教授團の前方に衝突するのは當然だつたのです』

教授は幾何の定理を說明するやうにして物語つた。

この外、いろ〳〵と罪のないゴシップが少くない。しかし、僞造ゴシップは更らに多い。或は同僚の頭へ紙屑を打つけて「何です」と怒鳴られ『や失禮、君の頭か、僕は紙屑籠と思つたよ』といつたといふ話。或は宴會の席上、部屋を間違へて隣室へ座り込んだといふ話。等、等、それはいづれも茶目學生の創作である。



坂西教授夫妻

◇

閑話休題。

さうした種々のゴシップをさへ生んだ教授の眼疾は時のたつにつれて進行する一方であつた。そして大正十年には遂に右眼が化膿のため摘出の已むなきに至つた。でも未だ左眼があつた。教授の燃ゆるやうな學究的精神は隻眼をぬかれたぐらゐで挫折するものでは素よりなかつた。それからは隻眼——それも極度の近視——をして二倍の能率をあげさせた。しかし視力は教授の學問的熱意に追隨することが出來ず、遂にこれに押し仆されて了つた。

[illegible]て視力は次第に[illegible]なくなつて行つたが、十二年には電燈の光さへ、ハッキリとは見えぬまでに惡化して行つた。京大の市川博士は『大事な眼、唯一の眼です。是非手術しませう』といつて手術を勸めた。教授は狼狽てないで訊いた。

『手術したら、必ず視力が囘復するでせうか』

『左樣、電燈の光が見える位にはなるでせうと思ひます。』

『ならぬかも知れないのですか』

『ならぬ場合もあります。又却つて惡化する場合もありますが』

その答へで教授の決心がついた。どうせ捨てた眼だ。拾うて甲斐のない眼なら、捨てやう。眼は閉ぢても、心の眼、腦髓の中の眼は開いてゐる。それで善い！　肉眼に見える世界よ、おさらばだ。

◇

大正十三年、教授の視界は永遠に閉ざされた。永遠に永遠に開かれることがないのである。

『勿論、娑婆氣が全然なくなつた譯ではありません。視力をやらうか——といはれたら、喜んで貰ひます。或る雜誌に、澤市の眼があいて、さてあたりを見廻して見ると、餘りにも世の中の穢たないのに愛想をつかし、眼の開いた事を悔いた——といふ筋の讀物がのつてゐましたが、あれは目開きの創作であつて、盲人の心理を無視し、澤市の心持を蹂躙したものです。澤市が希望したであらうやうに私も矢張り[illegible]一番いゝことでせう』

めしひは見ることを忘れんや……[illegible]の句が思ひ出された。

『しかし、視力があるといつても、失明直前のやうに、薄ら明りの世界たら、むしろ、見えぬ方がよいと思ひます。幾らか見えた頃は、我慢から他人の厄介にはならぬぞと力んで、無駄な努力に精力を散らしました。ノートのヘッチングを、特に目立つやうに毛筆で書いたりしたのもその頃でした。今はもうさうした無駄がなくなつて、一筋に勉強が出來ますし、目あきの世界に劣らぬ盲人の世界が展開されますから大して苦痛とも考へません』

◇

見えない者の見る世界！　それは見える者の見ることの出來ない別の世界である。教授はその世界について語る。

『先天性の盲人と違つて、私はこの世界を見て知つてゐますから、概念がハッキリ殘つてゐます。で、もの〻形なり、彩なりを、その概念にあてはめて、かうもあらうか、あゝもあらうかと想像して見るのです。つまり、見えない中で見てゐるのです。見てゐるといふのが惡ければ、見てゐる氣持といつてもいゝでせう。その見てゐる氣持の世界が、私達の見てゐる世界なのです。今、私はあなたと對談してゐますが、私はあなたを見てゐるのです。あなたには、以前お會ひしなかつたから、あなたのお顏は知らぬ筈ですが、私には、私のみの見る「あ

なたの顏」が見えるのです。現實の世界に對して、幻想の世界とでもいふのでせうか。夢も見ます。そこは全く明るい世界です。夢以外の世界は勿論闇ですが、その闇も決してグレーではなく、白い感じです。そしてそれが黒く變つて行くのです。

人生觀や世界觀が失明によつて變つたかと仰るのですか。それは少しも變らぬといつて差支へないでせう。私の失明が急激に來ないで、徐々に來た事と、既に相當の年齢を重ねた所の失明であつた事とが、私の考へを變へさせなかつた理由なのでせう。若し人生觀や世界觀が變つたとしたら、それは盲人としてのひがみが出來た時ではないでせうか。思索が深くなつたらうとは、屢々人から問はれるところですが、私としては別に深くなつたとは思ひません。

慾望にも大して變化はありません。成程、繪畫を見る明が失はれました。それは殘念な事のやうですが、しかし、從來はどうだつたかといふと、大して繪畫を見てはゐなかつたのですから、結局同じ事です。圍碁は下手乍ら打ちました。が、全く打てぬ今日となつても、さして執着心も持つてはゐません。かうして失うたものの極めて僅少なのに引替へ、この頃はラヂオを聽くので、多くの娯樂の處女地を開拓することが出來、世間が擴まつた心地がします。長唄、義太夫、浪花節、小唄等、等、嘗て耳にしなかつた多くのものが、新に私の世界に這入つて來ました。讀書も補助者のおかげで事を缺かず、喰べものも、からだが健康なので快然としておいしく喰べられますし、睡眠も十分にとれますから、不足をいふ廉もないといはねばなりますまい。」

◇

教授は頭腦の飽くまで明晰な、學者的良心の熾烈な、そして意志の極めて牢固な、温厚なる人格者である。これ等の教授の人格的諸要素は、失明に臨んでも、教授をして意氣を沮喪せしむることなく、却つて學問の殿堂に精進する熱意を昂めしめたのであらう。

教授の學問に對する熱愛の情は驚く許りである。現に、失明後も毎週三時間、經濟史の講義を擔當してゐるのみならず、二時間の研究指導にも臨んでゐる。そして講義や指導のない日も、毎日缺かさず研究室に通うて、助手杉村伸氏の援助によつて、山なす書籍の中に埋れ乍ら、孜々として研究に餘念がないのである。

それ許りではない。教授は完全に兩眼の視力を失つた今日、なほ著述の筆を執つて倦むところを知らない。教授の名著「企業論」「日本經濟史論評」に次で、大正十四年六月上梓された「經濟生活の歴史的考察」に收むる論文二十一篇の内、數篇は失明前後の口述筆記若くは自身の筆になるものである。原稿は勿論、普通の原稿用紙では文字の位置がハツキリしないので、封筒を縦に半截したほどの短册型の紙を安定させて置いて、その上を小指を以て距離を測りつゝ鉛筆を走らせて行くのである。只だアルハベツトのIの點や、Tの横棒が時に見當外れのところに行つて、淨書の夫人や補助者を煩はす事もあるといふ。

こゝらで筆を夫人の上に及ぼさねばならない。

[illegible]

り、數代さんの間には二男三女がある。長男新氏は昨年東大醫科を卒業して現在は横須賀高等女學校の教職にあり、長女啓子さんは兵庫縣立高女の高等科に、二女明子さんは神戸市立第一高女四年に、三女昭子さんは同二年に、そして末の二男正さんは附近の筒井小學校尋常一年生で、一家は和氣靄々たるものがある。

失明、寡言沈默、謹嚴、冷靜、枯淡、——さうした教授の輪廓を傳聞し、始めて教授を訪うた日、筆者は、心ひそかに、劍を詩籍に代へた机龍之助とその住居とを胸に描いて行つた。(教授よ、夫人よ、許して下さい)然るに、神戸市坂口通、郵便局横の坂道をだら〳〵と降りて、如何にも學者の住ひらしい、がつちりとした教授の玄關先で、にこやかな夫人に迎へられ、更らに應接間に初めて教授の溫容を仰ぎ見るに及んで、餘りにも自分の豫想の裏切られた事に苦笑したのであつた。

數代夫人は美しく、そして氣品のある奧樣で、はたちを過ぎた子息の母とは思はれぬ若さに見える。五人の子女の養育だけでも並大抵ではなからうに、夫君の失明によつて、どれだけ心身を勞されたことであらう。大きい試練に會つて、しかも見事、その苦難を突破して來られただけに、人間の練れてゐるのはさすがである。或る學生は「奧さんには「小母さん」といつてお小遣でもねだりに行けるやうな氣安い感じ

[illegible]

◇

數代夫人は岡山縣久米郡[illegible]の生れ、十六歳の春、婚約の成ると共に坂西家の養女として入籍し、坂西氏が中學を卒へ、東京高商に入學するのと相前後して、夫人も東都に遊學し明治女學校に入學した。約婚の坂西氏は下宿に、夫人は寄宿舍にあつて、相離れて住んではゐたが、互に勵まし、勵まされつゝ、一すぢに學業に精進した。夫人の通學してゐた明治女學校は巖本善治氏の經營するところのミッションスクールで、お茶の水、跡見兩女學校と鼎立してゐた。就中、明治女學校は新しき女學校として知られてゐた。夫人よりも數年上の級には羽仁もと子女史や、今東京に「愛の家」を經營して居る畑山專太郎夫人なども居た。その頃、同女學校は巢鴨にあつて、通學生は袴をはいて通つて來てゐたが、寄宿生は帶をお太鼓に結び、袴をはかずに廊下傳ひに教室へ這入つたものであつた。髮は「揚げ卷」であつた。中で、ハイカラな生徒は、前をふくらかす結ひ方をしてゐた。夫人はその當時から地味の方で、寄宿舍では「柔しいお姉さま」として下級生たちから慕はれてゐた。かくして明治三十三年春、夫人は女學校を卒へ、坂西氏に先立つて歸郷し、家事や裁縫のお稽古にいそしんだ。さうかうする内、坂西氏も高商本科を卒へ、續いて專攻科を卒業し、明治三十七年八月二日・創立間のない神戸高商の教授として招聘せらるゝや、

夫人は昨日までのいひなづけから今日は少壯教授の妻と變つて、新家庭を神戸に形づくられたのであつた。筒井筒の昔から氣ごゝろを知りぬいた二人であつて見れば、全く隔てのないなごやかな生活を營むことが出來た。學者としての坂西教授の前途の洋々たるのと相俟つて、坂西家は正に幸福といふ幸福を悉く家中に收めた感があつた。

福田門下の逸才として、教授は明治四十年三月、獨逸留學を命ぜられルヨ・ブレンターの膝下にあつて研究を續くる事四年、同四十三年六月に歸朝したが、その頃から右眼が惡かつた。或時、不圖、左眼を覆うて書物を見たところ、殆んど焦點を結び兼ねるのを發見して、今更らの如くに打ち驚いた。教授許りではない、夫人はそれと聞いて、富士山が消えて無くなつたやうに驚いた。

『眼を大切にしませう。私で用の辨ずるやうなものは、私があなたの眼になつてお讀みいたしませう』

といつて、印刷の鮮明でない新聞や雜誌などは、努めて夫人が代讀することにした。しかし、夫人の心づくしも眼疾の進行を阻止する事は出來ず、右眼は摘出の已むなきに立至つた。夫人は若し自分の眼と入替へることが出來たら――とさへ思つた。

◇

殘るは左眼一つ。これだけはどうあつても惡くさせてはならぬと、夫人は、いよ／＼熱心に眼の代役を勤めるのであつた。でも、既に眼疾よつて來た。

果然教授の視力は全く消滅した。その日、教授が見えなくなつた眼を強ひて見ひらきながら、指を動かしたり、兩の掌を上げつ、下げつしては、少しでも視力が殘つてゐはすまいかと試して居られるのを目撃して、夫人は胸のつぶれる思ひを禁じ得なかつた。

　それとなく父は火鉢に手をかざし
　　指動かせて眼を試みる

長男新君の示す歌を見て、夫人は泣くにも泣けなかつた。その時である。夫人は自分の心の中での叫びを聞いたのは。しつかりせよ、あるじの眼はつぶれても、お前の眼は二つまで揃つてゐるではないか。泣いて涙でぬらす眼ではないぞ。けふからはあるじの眼ともなつて四つの眼の働きをするのだ――。

夫人は俄然として元氣づいた。殊に肝腎、失明した當の教授が女々しい繰言一つもらすことなく、心の活眼をひらいて更らに學問に勇往邁進せんとする意氣の壯なるを、目のあたり見ては、夫人は身の引きしまるのを覺えた。

でも、柔しき女性として、時に夫人の袂をぬらす日もないではなかつた。

失明後、教授は、責任の重い教授の職を辭して講師となることゝなつた。おかみでは氏の多年の精勵の功に對して、特に勳四等に敍し瑞

[illegible]たる趣旨の七賢の美しさや、さま〲の巧な意味に妙なる由るなかつた。夫人はいろ〲と説明を試みたが、素より、見るが如く傳へるすべはなかつた。そのもどかしさ、やるせなさに、夫人は説明しながら、つひ熱い涙の頬に傳ふを覺えた。

◇

「泣いてゐるどころぢやない」――心の聲が、直ぐ涙の堰の戸を立てた。いよいよ良人の眼が永久に視力を失つたとすれば、夫人の眼が、學者の眼とならねばならない。その眼は英獨の専門書を讀破せねばならない。たとへ文法は知らずともよい、少くとも原書のリーデングの出來るだけの語學の力が眼になければならぬ。ところが、英語は兎も角として、獨逸語は殆んど讀めない。これでは良人の眼たるの資格がない。――さう氣付いた夫人は、人知れず、獨逸語の獨案内などを購求して來て熱心に勉強した。しかしそれだけでは單語は覺えられても、肝腎、各フレーズの正しい發音は修得出來兼ねた。そこで大正十五年夏夫人は健氣にも晝の片付けの濟んだ夕方から、若い學生と相伍して、程近い神戸下山手の神戸基督教青年會の獨逸語講習會に通ひ、アー・ペー・チエーから勉強した。三十、四十を過ぎてからの語學の勉強は、十代、廿代の勉強に比べて數倍の努力が必要だつた。けふ覺え込んだと思つた發音も單語も、翌日は綺麗に忘れて了つてゐる事が少くなかつた。これではならぬと思つて、繰返し〲教科書を讀み、暗誦[illegible]が續いて、[illegible]五分間とは、じつと眠の前へ坐らせてはくれない。學[illegible]、家族の起き出る前、煮物の煮え立つのを待つ間、買物への途上の電車内、夜は小供たちの眠つた後、それが夫人のわづかに殘された學習の時間であつた。かくて數ケ月の努力の結果、漸く原書のリーデングが出來るやうになつた。夫人の讀んだ獨逸語が完全に夫君の頭に受付けられたのを知つた時、心からの悦びが涙となつてはふり落ちた。

しかし、語學の修得だけではまだ不十分であつた。夫君の専門書を購讀するためには、その専門知識にも或る程度の諒解がなければならなかつた。夫人はどうかして、經濟學の全般に亘る概略の知識を得たいものと願つてゐた。あだかもよし、大正十三年九月神戸高商において文部省主催の第一回成人教育講座の開かれるのを聞いて、夫人は約二百名の男子と共に勇躍してこれに出席した。講師は夫君が經濟原論や人口論などを擔當して居たのを始めとし、齋藤常三郎氏の憲法、丸谷喜市氏の勞働問題、工場法、瀧谷善一氏の外國貿易、増井光藏氏の商業政策、原口亮平氏の會計學、田崎愼治氏の海運政策等、等のいづれも神戸高商の教授達であつた。講習を了へて後、夫君の學問に對する理解が、躍進的進歩をとげたことはいふまでもない。

JOBKの學術講演や語學講座は今も、夫人の最も熱心に耳を傾けるところのものである。

かうして夫人の眼は、夫君の眼の代用としてその職務を十分に發揮

するやうになつた。しかもそれは家事育兒萬端の仕事をした上の仕事である。夫人はその負ひきれぬほどの重荷を呟き一つもらすことなく、敢然として負ひ通して來たのである。

『夜は大概十一時頃まで讀みます。若しも原書がもつと十分に讀めたら、どんなに善からうかと、いつもさう思ふのでございます』

夫人はつゝましく語られるのであつた。

新聞や雜誌の朗讀は無論、夫人の仕事である。

『おかげで近頃は私も政界の模樣や、支那のことまで知るやうになりましてございます』

と夫人の微笑まれるのを、教授が引ついで

『失明前は、新聞の細かい字が讀みづらいので、大概標題だけですましたのですが、近頃は、自分の眼を勞する必要がないので贅澤になつて、內容も悉く讀ませますので、世の中の事柄も、從前より遙か詳しく知るやうになりましたよ』

教授は專門知識以外の世間的知識範圍の擴大を、愉快げに物語つた。その半面に、夫人の並々ならぬ努力が窺はれる。

◇

『失明して見ると、聽覺は從前よりも遙かに敏感になるのは當然でせう。人の肉聲がその人を知る唯一の手がゝりですから、聲のよし惡しや高低でいろ／＼とその人を想像します。私の世界では、聲の惡い婦人は婦人たるの[illegible]

[illegible]りますまい。』

人の聲には、[illegible]

――と、或る詩人のいつた[illegible]の

を使はねばならぬのだつた[illegible]素

『都會の雜音も耳に立ちますが、[illegible]に思ひます。以前は、電車を目のあたり[illegible]つて耳に這入るといふことはなかつたのですが[illegible]ないで、只だ噪音のみが耳に這入るのですから[illegible]に盲人としての練習が不十分で距離の測定が出來[illegible]電車が呪しいのです。それで學校への往復もなるべく[illegible]やうにしてゐるのです』

『山登りは、以前は學校の登山部長などもやつてゐて、よく出[illegible]したが、失明後も一二度、同僚につれられて摩耶山や再度山[illegible]した。矢張り壯快です。低地と違つた感じを味ふことが出來[illegible]しかし何も見えないからつまらないだらうといふ人もありま[illegible]などは失明前と雖も、遠望は餘り確かではなかつたのです。[illegible]巓から大阪灣を見ても、そこはソフト・フォーカスになつて[illegible]た。でも、それがいふべからざる美觀だつたのです。その茫ツ[illegible]展望は、失明後の今日でも、十分に味得し印象することが出來る[illegible]す。旅行にも出かけました。學生たちと一緒に。九州と四國へ、講演に[illegible]です。南洲翁の墓にも詣でました。一つ二つと石段を登つて行くと、[illegible]墓を見た實感が湧くのでした。[illegible]

りますよ』

かうして教授が種々雑多に能率を擧られるだけに、随伴者の立場にある夫人の心づかひは一層であつた。教授が在宅されゝば、指揮として、助手としての心遣ひがあり、留守をされると、行先で間違ひでもありはせぬかと、心がゝりで、氣の安まる暇とてもない。

『でも、かうして主人が元氣で勉強してくれられるのを見てゐますと、自分の苦勞などは少しも氣になりませぬ。ただ、夜遲くまで讀物などを讀んで居りまして、翌朝は主人や子供たちの通學の準備のため、眠りが足りませんので頭がぼんやりいたします。それが苦といへば苦でございませうか』

◇

夫人は失明の夫君と四人の子女を抱へて、しかも女中一人置かず、一切を一人で切盛して行かれるのである。氣の利かぬ小娘などでは、教授の世話の行屆く筈はなく、却つてその心持を紊す惧れがあらうとの心やりからである。

『主人が斯うしてゐるのだと思ひますと、物見遊山に行く氣も致しませぬ。美しいものも、面白いものも、主人と一緒に見ればこそでございますもの。——

私はもうどうでもよろしうございますが、只だこどものために、せめて……と思ふことがございます。お父さんに手をひかれて、うれしさうに外を歩いて居られるお子たちをお見受けしました時など、ね。——』

教授失明後こゝに四年、春が來て花が咲いても、秋が來て月が照つても、それ[illegible]

て、これに教授の生活に續くのである。

『御大典の祝賀で市中が賑かだと申して、末の子供がせがみますので、或る晩、外へ出て見ましたが、大倉山のイルミネーションの美しさに、あゝ、主人の眼が見えて、親子揃つてこれを見ることが出來たら……と思ひますと、瞼が熱くなるのでございました。』

夫人は又しても、不憫な愛兒の身の上を思うて、涙を落されるのだつた。それを教授があとを續けて

『實際、奉祝踊りとか、行列とかだと、假令足音だけでも聞けますが、イルミネーションのやうに、直接視覺に訴へるものは全くその實體が摑めません。殊にそれが新奇なものであつて見れば、想像して樂しむといふことも困難ですから』

と註をつけた。

『しかし、見る事は出來ないでも、讀物やラヂオを耳に聞いて、それで食事がおいしく喰べられたら、それで我慢が出來やうといふものです』

教授が強い言葉を吐く後を、夫人は又やさしく

『でも、食事は食膳の彩りの美しさが、一層味ひを添へるのでございますのに、主人にはそれが見えませんので殘念でございます。で、主人の喰べます前に、これがトマトで美しい紅色をしてゐるとか、これは新鮮な青豆で、見るからに味覺をそゝるとか、いろ〳〵と說明をいたしますの』

『さうなんです。說明なしで食べると、味ひは全く半減して了ひま

す」。

全生全靈を捧げたやさしい夫人の說明なればこそだ。夫人の食膳の說明は一味の素」でなければならない。

「子供が新しい着物を調へました時など、主人が一目見てくれたら、子供もどんなに嬉しく思ふだらうと、またしても愚痴が出ますが、さういふ時は、お父さんに觸つていたゞいておいでといつて、主人の傍へやるのでございます。しかし、これも十代までの子供の事で、二十四五にもなつた子にはさうもなりません。先日も、長男が學校を出まして、始めて背廣服を着て戻つて參りましたのでしたが、主人にはそれが見えませんので、せめては觸つて貰ひたいと思ひましたけれど……」

「私の遠慮から觸らなんだのです。小さい兒なら鼻をつまんでやる事も出來ますが、二十四五にもなりますとね」

わが子の紳士姿を、胸に想像するだけで、觸ることもし得なんだ教授の胸中は察するに餘りある。

「こどもの顏も四年前に見たゞけですから、その後、どんなに變つたか、少しも判らないのです。十九になる娘も、私の前では未だ十五才の顏をしてゐる譯なのです」

日毎に美しくなつてゐる令孃たちの顏を、一目でも見せたいと願ふのは、只だに夫人と令孃自身のみではない。

◇

「こども達も大分大きくなりましたのでぼち〳〵、私の手傳もしてくれり、附近の市場へ買物に出かけたり、爲たきものをいたしましたり、短時間に出來るだけ多くの仕事をしやうと想つて一生懸命でございます。そして三時になりますと、主人が戻つて參りますが、その時には買物にも行かず必ず家にゐて玄關に迎へる事にして居ります。私が留守のところへ戻つて參りますと、主人も慰められぬ物足りなさを感ずるらしうございますから……」

勉強を了へ研究室からわが家に歸つて、柔しい妻の手に迎へられる夫君坂西教授の滿足！ 世界中の何者にも代へ難き信頼の手を良人から差し延べられる坂西夫人の幸福！ それは何に譬へやうもない嬉く、美しい場景ではあるまいか。

「或る書物に、一人の盲人が妻を信頼する事が出來ないで、脇で針仕事などをしてゐますと、此方へ來て本を讀めといつて傍らへ置かねば安心が出來なかつたと書いてありましたが、宅は全く反對ですつかり信頼してくれてゐますので、本統に仕合せです。私は心からそれを感謝して居るので厶います」

夫人の言葉をそのまゝ、教授の方へ向けて、「失明なさつてから奧さまへの感謝が高まつて參りましたでせう」と問ふと

「いや、論理的に考へれば、感謝すべき結論になるのでせうが、さうした感謝などといふことを意識したことがありません。そこが夫婦の情愛とでもいふのでせうか」

感謝されない感謝、意識されない感謝、それこそ感謝にまさる感謝でなければならない。夫人はそれをどんなにか悦んで居られることで

英米新聞談片

高石眞五郎

[illegible]から私の帰朝を待ちかねて世界のジャーナリズムに就て[illegible]といふ懇切な勧めを受けたけれども、私は世界のジャ[illegible]といふ代りに[illegible]

試に現在ロンドンで發刊されてゐる新聞紙を見ると、まづ夕刊に於てパル、メル、グローブ、ウエストミンスター・ガセットの如き、[illegible]の論、いはゆるニユースペーパー・オブ・[illegible]、[illegible]

[illegible]

して内外のニュースを正直に報道して、材料の扱ひ方を地味にしてゐる新聞紙は多く讀まれてゐないのである。即ち昔風の新聞紙が好まれずにいはゞ米國流（その實は大分違ふが）の興味主義の新聞がいま風靡しつゝあるといへる。

こゝに「米國流」といふことを書いたが、それは興味本位の共通してゐる點において、かりにその語を使つたので、英米に流行する新聞の内容に至つては決して同一でない、極めて簡單にその相違點を擧げれば、米國の新聞は「見出し」が大きくて且つ「小見出し」の十分なことは別として、各記事が冗漫と思はるゝほど詳細に書いてある、私達から見るとその記事を書く人がどうしたら長く書けるかといふことを苦心する以外に努力した處はないやうに思はれるほどである。之に反して、英國のは面白く書くといふことを主とし且つ常に簡潔たらんことに心がけてゐる跡が歴々としてゐる、これ丈けの相違で英米の新聞紙がひと目で非常に違つて見へる、しかしどちらも興味を主としてゐることに違ひはない。

かくの如く英國の新聞紙が、内外の政治、社會各方面の出來事を記錄的に取り扱ふ風から脱して、專門的の記事はそれ〴〵專門の發刊物に任し、新聞としてはそれ等の出來事の中から一般的に利害關係があり、又社會人に興味のある事柄を拾ひ上げて、その日その日だけの讀[illegible]ことになつたことは、たしかに[illegible]の大きた變化の一といはねばならない。

しかし之は新聞社がさう導いたのではなく、無論世間がさうさせたので、その點において更に注目すべき現象であろうと思ふ。

しかし此中にあつて、タイムスのみが依然として昔風の記錄主義網羅主義の新聞紙たる質を維持してゐることは、まさに萬綠叢中紅一點の觀がある（體裁に多少の變化は來してゐるが）、そして新聞界の人も世間の人もタイムスに對しては滿腔の敬意を拂つてゐる、タイムス紙がその舊來の質を維持してゐることは、經營者の奉公的理想の堅固なことに由來してゐるのであろうけれども、之を經營の上から見ても誠に賢明の方針といはねばならない。何となれば、タイムスの發賣紙數は、一時ノースクリツフ時代の風船玉的膨脹を別とし、近來は昔よりは遙に増加し、今迄見なかつた家庭に多く見受けるやうになつた事、そして廣告が更に有効率を増したと言はれてゐることに依つて、その繁榮を知ることが出來るからである。タイムスの位地は正に獨特であり、英國の國寶ともいゝ得られる、一方に新聞の餘りな通俗化がタイムスをして此地位を得しめたので、此事實もまた一の注目すべき現象であろう。

新聞が議論や意見の機關でなく、報道興味本位で多く賣らねばなら[illegible]物になれば、それが他の[illegible]と同じやうに、マネーメーキングの[illegible]

機關紙となることは當然な事柄といはねばならぬ、そこで此の傾向と同じやうに、理財の才のある經營の上手な人々が之に眼をつけて、新聞屋となることも之又自然の成行である、さうした事から、新聞社が事業會社のやうにだん／＼と優秀な經營者の手に吸ひ込まれて行き、延て多くの新聞社が極めて少數の優秀な經營者に買收され、あだかもトラストのやうな狀態を新聞界に現出しつゝある。現に英國の目星しい新聞は僅かの例外を除いて、悉く甲か乙か丙かのグループに吸收されてしまつてゐる。いま英國の新聞界の巨頭ともいふべきものを擧ぐれば、僅に三者である。一はノースクリッフ卿の弟に當るローザーミヤ卿、二がビーヴアーブルク卿、三がベリー兄弟である。此人達が儲かつてゐた新聞も損をしてゐた新聞もおかまひなしに買收して、或は全然買ひつぶしてしまつたり、或は新しき經營法によつて無より有を生ぜしめる怪腕を振つてゐる、ロンドンの朝夕刊の重もな新聞紙は悉く此三のグループの何れにか屬してゐる。

新聞事業が純粹な金儲けの方法になつたといふ事を證據立つる最も適切な例は左の事實によつて明白である、

最近デイリー・クロニクルが或保守黨の代議士に買取られた、デイリー・クロニクルは前にも書いたやうに長い歷史を持ち、又自由黨の機關新聞として全國に緣の深い固い讀者を持つてゐたのである。然るにそれが保守黨の代議士に買收されたのである。何人も自由黨紙のために一掬の淚を禁じ得ない氣がしたであらうか。それがどうである、經營者を替へた宣言と共に發表された文言によると、デイリー・クロニクルはその社論において何等の變化を見ず、今後も從來と同じポリシーを以て進むものであるといふことが書いてある。社主が保守黨のしかも代議士であるに拘らず、その人の經營下にある新聞が政黨の機關新聞時代と同一政治主義を以て進むといふに至つては、新聞事業が純然たる商賣にならない限り說明し得ざる奇現象である。世人は之を怪んだか、どうか、事は私の英國を出發する直前に起つたから、之を知ることを得なかつたが、隨分おかしなものである。此代議士は製紙事業に成功してから、雜誌を買收してまづ雜誌界に腕試しをし、遂に新聞界に乘り出したのだといふことである。

今一の實例は、デイリー・メールとデイリー・エキスプレッスの關係である。メールとエキスプレッスは前にも書いたやうに、今英國における最大發行部數を有する二の新聞で、その體裁內容議論まで瓜二つともいひたい位によく似た新聞で、從つて正面衝突をしてゐる激烈なる競爭相手である、兩紙の競爭の事は後段に少し附け加へるから茲には述べないが、此二つの新聞が左樣に激甚な競爭をしてゐたから、資本において交錯してゐる點があるに至つては私達には寧ろ滑稽に思はれる。それはデイリー・メールが、いひ換へればローザーミヤ卿の社長であるデイリー・メール社が、その競爭相手のデイリー・エキスプレッス社の株を相當多數に持つてゐることである、私の手記には數字がないから、明確には此株の割合を示し得ないが、その株數がかな

り多數であることは、此持株のバックに依つて、ローザーミヤ卿の代表者が一人エキスプレッス社の重役になつてゐることで分る、競爭相手の新聞社を代表する重役か、他の競爭相手の社に存在するといふのは隨分おかしな事ではないか。しかしデイリー・エキスプレッス社長の直話によれば、同社の重役會は社の樞機などに當らざるのみならず、重役會議は單に事業の報告をするに過ぎないとのことである、そして重大な決定は、社長副社長と營業局長の三頭に依つてなされるとのことである。

之は要するに、エキスプレッス社の普通株の五十五割は、社長ビーヴアーブルク卿の所有する處で、如何なる場合でも彼が事實上の支配權を持つてゐるからである、さうであれば他社を代表する重役が居ても、邪魔にはならない譯であるけれども、何れにしても競爭相手の新聞社が、反對側の新聞紙に出資し、平氣で配當を受けてゐるなどは隨分變つてゐるやうに思はれる。

そこでデイリー・メールとデイリー・エキスプレッスの競爭振りを一寸書いて見る。此二の新聞の競爭振を叙せば、その他の新聞の競爭振も大概想像される。

デイリー・メールの發行部數は時今約百九十萬ばかり、デイリー・エキスプレッスは約百四十萬である(何れもチャータード・アツカウンターメールは一ケ月に一度位づゝ、その發行部數を紙上に公表して、英國第一のサーキュレーションを持つてゐることに對し、絕へず讀者の注意を薄らげさせないやうにしてゐる。これをエキスプレッスから見れば、エキスプレッスがいかに活躍の樣子を見せても、その發行部數に於ては、到底メールに及ぶものでないといふことを誇示されてゐるやうにしか取れない。事實においてメールの目指す處はそこにあるであらう、さうなればエキスプレッスも默つてはゐられない、之また頻繁に發行部數を發表する。但しエキスプレッスは單なる發行總紙數を發表するに止めず、十日毎の或は一ケ月毎の紙數の增加率を發表してゐる。そこがエキスプレッスの覘ひ處である。何となれば、エキスプレッスの紙數增加率は近年非常なもので、よし總紙數においてはメールに劣けて居ても、この增加率に至つては、驚くべき數字を示してゐる、かやうにエキスプレッスはその紙數增加率の大きな事に、宣傳の主力を集中してゐるが、その遣り方も非常に挑戰的で露骨である。一面二段拔きの記事とし、その中には明白にデイリー・メールの發表した月々の發行部數を借用に及んで、その增加率を割出し、その增加率と自分の紙數の增加率とを比較して、この通りの差であると赤裸々に發表してゐる。無論、某紙など〻語を濁らさず、明々白々にしかもゴシツクの大字を用いてデイリー・メールの名を引張り出してゐる。

それで購讀勸誘の大きな運動として、エキスプレッス社は[illegible]

[illegible]熙や祕蜜か戰闘人士のコンモンセンスにアッピールするのだと背き語へてある。のみならず、エキスプレツスの新聞社は他紙のやうに懸賞などをやつて無理に讀者を製造した結果ではないといつてゐる。之もデイリー・メール其他の新聞に當つてゐるのである。私達が突然としてこのエキスプレツスの記事のやうな訃告のやうな反面を見ると、たゞその露骨さに打たれて呆然とする外ないが、同時にこんな事を書いたら、定めてメールがかつとなつて、何とかかとか喧嘩を買つて出るだろう。そうしたら納まりがつかないことになるだろうといふやうた感じを禁じ得なかつたが、さて翌日以後のメールを見ても、何等之に對して相手になつてゐない。まるでそんな記事などは見なかつたといふ風である。

之は恐らく何とも否定も辯解も出來ない事實であつたからであらうか。メールとても他日何か動かぬ材料を得れば、同じやうに競爭紙の弱點を衝くに違いないと思はれる。けれども此一事は新聞の競爭の激甚なことを雄辯に物語るものであると同時に、英國人が無理にけんくわの爲めにけんくわをしない國民であることを示すものといつてよかろう。讀者がこの露骨な自己宣傳、他紙攻撃をいかに傍觀してゐるかといふに、大多數はやつぱり感心して、その有利な材料を公表する新聞に引きつけられつゝあるやうである。何となれば、かゝる自己吹聽や他新聞の攻撃は決して私のロンドンに滯在してゐた間だけに行はれ

[illegible]日これの[illegible]てメールを[illegible]すに至つたのには、私にはこの[illegible]成功したものと思はれるからである。それに[illegible]して面白いことに、此兩紙の對抗狀態に對して、モーニング・ポストのやうな眞面目な一流の新聞が口を挿み、なるほどエキスプレツスの増加率は驚異なものだといつたやうな論文を發表して、そこにもメール、ポストの論戰を釀成したことである。

之を要するに、日本では新聞同志の事柄は善かれ惡しかれ、互に餘り觸かない風であるが、英國では善い事は勿論、惡い事でも遠慮しないといふ風がある。

尙ほデイリー・メールとデイリー・エキスプレツスが事業的に競爭してゐることは、讀者に對する無料傷害保險である。これは極めて簡單で、新聞の購讀者がその購讀期間中に鐵道その他の事故に依つて負傷し若くは死亡の場合、此讀者に對し新聞社が保險金を拂ふといふのである。いふ迄もなく讀者は新聞を繼續購讀してゐるといふだけで、一文の保險料を支拂ふ必要はないのである。新聞の定期購讀料が保險料に當るわけである。傷害に對する各場合は煩瑣であるから略すとし、大づかみにいへば、茲にデイリー・メールの讀者が、鐵道事故のために死亡したとすれば、その遺族は一萬二千五百磅の保險金を貰ふのである。卽ち邦貨にして十二萬五千圓の金が貰へるのである。これは私の

ロンドン滯在中二回ほどあつて、一回はデイリー・メールの讀者から四人の死者を出して、一時に五萬磅の支出をしてゐる。英國でも此金額は大きいとされて居り、從つて之が爲めに新聞社の受けつゝある負擔は隨分大きなものである。而してこの大袈裟な無料保險はメールとエキスプレッスがやつてゐるが、エキスプレッス社の責任ある人の話によると、此無料保險のために同社が支出する金は、一週ざつと一萬磅で一ヶ年に約そ五十萬磅になるそうである。保險は無論保險會社が新聞社から保險料を徴して引受けるのであるが、新聞社としては、此特惠を受くべき讀者の名簿整理其他のためにも多くの人手を要するので、右の如く費用が嵩むのだそうである。デイリー・メール社は財政の極めて豐な社であるから、それほどに感じないかも知れないが、エキスプレッスに取つては隨分苦しい競爭であると思ふ。競爭當事者に言はせると、この競爭はまるでお互に咽喉を切り合つてるやうなものだそうだ。それでも今更ら引込みが出來ず、兩者ともにやつてゐる。

此外小さな程度の傷害保險は殆ど各紙がやつてゐる。全く一種の流行とも見るべきであるが、新聞社側をしていはしむれば、已むを得ない對抗策に違ひない。何故なれば、かう廣く行はれては、それを以て特別に讀者を開拓するわけに行かないからである。

かくして新聞經營はます〳〵金を喰ふやうになつて來たが、一方には優勝劣敗の原則が完全に働いて、自然淘汰がどんどん行はれてゐる。即ち新聞の數がだん〳〵減つて行くのである、新聞の淘汰で最も目立つのは、ロンドンにおける夕刊新聞界である。あの大きな都會に僅に三種の夕刊新聞があるに過ぎないことは寧ろ驚異であらう。しかもその三つの一であるスター紙はスポーツを特色とする特種の讀者を有する新聞で、一般的に讀まれてゐるのは、イーヴニング・ニュースとイーヴニング・スタンダードの二種に限つてゐる。だから少し誇張していへば、ロンドンには二つの夕刊しかないといへる。で、イーヴニング・ニュースはローザーミヤ卿に屬し、スタンダードはビーヴアーブルク卿のグループに屬してゐる。ロンドン及びその附近の新聞の大需要地に二つの夕刊しかないことは、營業的に見て非常な好都合の狀況であるに相違ないが、讀者としては物足りなさを感ずるであらう。殊に前に書いたやうにパル・メルだのウエストミンスターといふやうな所謂意見の新聞が悉く失くなつてしまつた今日、一層その感が深いであらう。けれども新聞經營が大きな資本を要するやうになつた今日、そして世人の對新聞好尚が變つて行く以上、此傾向は尙ひろがるであらう。

次に米國の新聞界に就て少しく目についた事を書いて見る。米國の新聞はいふまでもなく、國土が廣く輸送に時間のかゝる事と、各州がその地方自治に於て、經濟組織において又社會に於て、殆ど獨立的である關係から、全國に行亘るといふ如き販路を持つてゐるものはな

[illegible]如かない。既に新聞通信の機關が[illegible]に發達してゐるから、各州ともに比較的廉價な費用で材料豐富の新聞が出來る。かういふ理由から米國新聞の發行部數は勢ひ小さく、最多のものでも七八十萬を出でぬであらう。米國の新聞が他州にまで讀者を有することは大なる誇で、この誇を恣にしてゐるものは、恐くニューヨーク・タイムス位のものであらう。聞く所によるとニューヨーク・タイムスの他州に出る數は、全紙數の凡そ二割に當るさうである。ニューヨーク・タイムスの地位は、必しもロンドンのタイムスのやうではないが、米國において其信用と勢力とに於てロンドンのタイムスに比すべきものを求むれば、誰でもニューヨーク・タイムスを擧げることを躊躇しないであらう。これも米國に取つては、誇とすべき言論機關たることを爭はれぬ。

かくの如く、米國の新聞紙が一般に小さな發行部數を持つてゐる反對に、その頁數の多いことは又驚くべきものである。之は今に初まつたことでないから、茲に特に記す必要はないが、たゞ尨大なる紙面をこしらへる傾向が益々強くなつて、日曜の新聞の如きは二百頁近くもあつて、二種の日曜新聞を買ふと持運びに困るほどになつたことは驚くの外ない。日曜新聞の大きいことは、たゞ如何にしてかやうな新聞が獨り米國のみに榮えるのかと、外國人を思迷はしめるのみであるといふ外に、何の批評も下し得ないが、平日の新聞もその內容は隨分盛澤山である。夕刊といへば、ちよつと晩餐後に眼を通すものだとい[illegible]る[illegible]とする。

米國の新聞が紙數の多くなつた沿革原因をその道の人に聞いて見ると、第一は廣告の多量であるといふことである。いひ換へれば、廣告が記事を增加し、それが紙面膨脹の因になつたとのことである。詳しくいふと、案內廣告は別として、彼等のいはゆるヂスプレイの廣告、即ち意匠をこらした商品の廣告は、廣告面につめこめられることを廣告主が好まない、その面に僅かでも記事の配せられることを要求する。尤も一面通しの廣告も澤山あるが、之とても反對の面若くは裏に記事欄のあることを撰ぶ。かういふ風に廣告の引立役として記事をこしらへねばならぬ事情が生じて來たのである。

そこで社會萬般の事相を必ずしも興味によつてのみ拾ひ上げず、記事をこしらへるといふ見地から網羅するやうになつた。そして紙面が十分にあるために、その網羅した事件も簡記主義ではなく、詳記主義で、前述の如く長く書くのが記者の仕事ではないかと思はれるやうに詳細を極めるのである。

新聞に書いてあることを悉く讀まうとする者には迷惑至極であり、又事實上毎日讀了するといふことも不可能であらうが、その代りその記事に掲げられた事柄に利害を有し又は興味を持つてゐる者には、內容が豐富であるだけに、非常な參考ともなり、又滿足を與へ得

るのである、私はかやうな網羅主義で詳記主義の新聞が、忙がしい米國民に受けてゐるかといふことに就て、同業者に向つて度々質問を發して見たが、其答は殆ど皆同じであつた。曰く、米國の新聞をみんな讀む人はない、新聞に從事してゐる吾々でも讀みはしない。自分の讀みたいものを撰んで讀むのである。てうどメニユーに書いてある料理が悉く料理場に用意されて居るやうに、讀者は此メニユーを見て好きな物を註文して食べるのである。新聞は一切をそこに並べる、讀者は讀みたいものを讀むのである。それであるからその撰擇に便利なやうに、大見出し小見出しに苦心し、殊に小見出しはそれを讀めば、記事の概要が分るやうにこしらへられるのである、といふのである。なるほど之はさうであるやうである。

米國のやうに國が廣く複雜した社會で、色々な事件や人物が、全國的に喧傳され、それがいはゞセンセーションを起して、誰の口の端にも上り、その事件や人物が小さな社會でいひはやされるやうに集約的に扱はれる現象は、全く新聞の詳記主義に負ふものである。いひ換へれば、比較的に小さな事であり、關係人物もつまらないとしても、その事その人物に就て詳記してゐる間に、偶々世人の何かの好奇心に投じて、騷ぎが大きくなるといふ場合も少くない。であるから、事件そのものが大きく、登場人物が多數の注意を惹くに足るやうな場合には、騷ぎは驚くべく大きくなる。リンドバーグの大西洋橫斷といふやうな事件に至つては、事件そのもの、性質と新聞の扱ひ方とが兩々相結んで、とても國を擧げて大騷ぎを演ずる。リンドバーグでは通信社の連中が今でも泣いてゐる。それは今日でもリンドバーグに對する「警戒」をゆるめず、彼の行動を報道しなければならないためである。ゴルフのアマチユアー選手ボビー・ジョーンスがはじめて英國で世界の選手權を獲得して歸つた時のニユーヨークの歡迎騷ぎは、丸で凱旋將軍パーシングを迎へるやうであつたさうである。之は新聞が紙面の廣いのに任せて總ゆる記事を書いて、世人の心を浮き立たせたからである。かういふ風であるから、大統領の選擧戰も、黨のノミネーションから公選まで半年以上といふものは、大統領候補がくしやみをしたことまで記事にするといふ有樣であるから賑かさは喩へやうがない。これでは米國民が納得の出來るまで大統領戰に關する智識を得ないでは居られないわけである。要するに、新聞記事の多方面と、そして内容の豐富といふことは、米國新聞の特徵であり、他國の眞似得ない處である。

米國で英國の新聞のやうに、簡潔で、どの記事にも一通りは眼を通せるやうな新聞をこしらへたら賣れないだらうかといふ質問を私の發したのに對して、ニユーヨーク・タイムス主筆のオグデン氏は、それはニユーヨークで嘗て試みられたが、失敗に終つたと答へた。そしてニユーヨーク・タイムスの方針は、如何なる記事でも、その記事に利害關係の深い人が讀んで滿足するやうに詳說することを主眼としてゐ

る［illegible］

くれた。

そして之は獨りニューヨークの新聞に限らない。都鄙ともに同じである。蓋し勢力とアクチヴヰチーに於ては、米國の新聞は世界第一であるといへよう。

米國の新聞も無論營利的であるが、面白いことは、例外はあるが多くは黨の機關であることである。機關といつても必ずしも金錢的補助を受けてゐるのではなく、自ら共和黨なり民主黨の旗幟を鮮明にしてゐる。此點において意見の新聞たる實を示してゐるが、隨分思ひ切つた黨本位で、あれでも新聞の賣行に影響しないだらうかと思はれるやうなこともある。

それから米國でも、各都市とも新聞の數はやたらに多くない。存在理由のないものは存在しないやうである。從つて財政狀態は一般に堅實であるのみならず、信用があり又は人氣のある新聞は、非常な利益を擧げてゐる、立派に商賣になつてゐる。

之は勿論廣告の潤澤なことに最大の原因がある。一體アングロサクソン國民は、非常に廣告の好きな國民のやうに思はれる。商賣の繁昌と否とは、殆ど廣告に依つて決せられるやうである。英國でも廣告は盛である。けれども米國に至つては、殆ど廣告萬能とでもいひたい程廣告を極度に利用してゐる。之は歐羅巴の大陸には到底見られない處る。前に書いた如く［illegible］といふ一事だけで、廣告力の旺盛を十分に知ることが出來よう。

新聞の廣告に就ては、詳しく書けば色々の相違があるが、たゞ一寸奇異に感ぜられることは、米國新聞の廣告の大部分が地方的のものであることである。いひ換へれば、何れの新聞の廣告もその地方にのみ關係のある事柄を以て滿たされ、全國的に顧客を求めるやうな商品の廣告の少いことである。之は前に記した處によつて當然肯かれることであるが、要するに、米國の新聞紙がその販路を殆どその發行地の外に限られ、全國的に普及しない關係から、廣告主も全國的に宣傳を要する物に對しては、新聞の廣告面に依賴しないためである。新聞の廣告中には例外はあるが、案内廣告は勿論全然地方的である。その他の廣告は多くは商店のものであるが、それは特定の商品を廣告するのではなく、その店の品を廣告するのである。いはゞその店を廣告するので之又地方的である。故に化粧品だとか、家庭用品だとか、新案品とか全國的に顧客を要求する種類のものは、新聞の廣告には來ないのである。かくの如く新聞廣告の範圍が制限されてゐるにも拘らず、廣告量が上記の如き大量を示してゐることは、いかに米國民が廣告を好み、又之に引きつけられることの強いかを語るものである。

序であるが、右に書いたやうな全國的に顧客を求める商品の廣告は、主として雜誌に掲げられるのである。雜誌はその性質上大多數は

全國的のものである。そこで新聞と雜誌とは互に衝突することなく廣告のフキールドを開拓することが出來る。

雜誌の廣告といふものは之又驚くべき量である。有名なサタデー・イーヴニング・ポスト誌の如きは、その發行部數が二百萬と稱されてゐる。之はいふ迄もなく、新聞と違つて全國に讀者を有するからである。從つてその廣告は大したもので、今申込んで直に掲載されるなど、いふことはない。又その料金に至つても眼の飛び出るほど高い。此週間雜誌は美麗なアートペーパーの隨分部厚のものであるが、定價は僅に五セントである。人の話によると、今の發行部數ならば、たゞで讀者にくれても十分な利益を上げ得るが、たゞでは疎末に扱はれるから、殆ど名義だけともいふべき代價をつけてゐるのだとのことである。その他にも經濟的に成功してゐる雜誌は數多くある。

米國における廣告界の繁昌は、殊に戰後米國の富力充實、商賣繁昌の賜であるに相違ないが、それは一方には新聞雜誌の方からの刺戟によることも少くないと思ふ。而してそれが又新聞の事業としての盛大の因をなしてゐる。

ノーベル賞を得た

諾威の閨秀作家

宮原晃一郎

今年發表のノベル賞文學部の受賞者の一人は諾威で最大の小説家として知られてゐるシードグリッド・ウンセット夫人である。夫人は千八百八十二年の生れで、その出世作は千九百十一年に出した「イエンニイ」で、次に出した「春」、千九百十四年）と共にその文壇に於ける位置を確實ならしめた。

夫人の大作は、その歴史小説「クリスティン・ラヴランスダッテル」で、三部から成つてゐる。第一部「花の冠」は千九百二十年、第二部「主婦」と第三部「十字架」は千九百二十二年に發表された。これと「オーラウ・アウヅンスウン及びその子達」（一九二七）といふ作が彼の女の名作として持囃されてゐる。

夫人の作を流れてゐる思潮はカトリッシズムである。典型的主婦として、隠忍自重、堅實にその家庭を守つて行く、云はば舊來の道德になづんでゐる女性が夫人の理想であると云へよう。元來プロテスタント教の國である諾威で、カトリック教の凝り固つたやうなウンセットの作は批評家の間などには餘りに好評を博してゐないのは是非もないことであらう。

然し、歴史小説家として、そのリアリズムの立場から、詩味豐かな筆致と、非常に洗練されたその公用語（諾威には固有の諾威語ランスモールと公用語リクスモールとで、丁抹語の幾分轉化したものとの二種がある。イプセン、ビョルンソンを始め、大部分の文學はリクスモールで書かれてあるが、近頃は國民藝術の主張が盛で、ランスモールを用ゐる作家にも偉大なものが輩出してゐる）とは、讀む人を魅惑せずには措かない。

ウンセットが女流作家であつて、カトリック的藝術によつてその特色ある地歩を占めてゐるのに對して、瑞典のセルマ・ラーゲレヴ女史がその反對のプロテスタントの立場から、宗教的雰圍氣のうちに、家庭的作品を多く出してゐるのは、スカンヂナヴイヤ婦人達の思想的傾向がやはり家とか教會とかいふものを中心にしてゐて、嘗てイブセンによつて描かれたラヂカルな思想の種子が案外に萌き土に育ちなかつたもののやうに考へられる一言にして言へば、スカンヂイナヴイヤ女性の思想的傾向は概して右してゐる、守舊的であるやうだ。

ウンセット夫人の文體は往々冗漫で、言葉に洗練が施されてゐないといふ非難がある。けれども古代の物語サーガを基にした、簡潔で歯切れの善い文章に、適宜方語をまぢへた彈力のある彼の女の公用語は時文の範とするに足るものであるといふ。

歴史小説家として必要な智識と、その時代を現に目の前に見てゐるやうに感ずるイリウジョンとはウンセット夫人は、その父が非常にすぐれた天才的考古學者であるところから、夙に幼い時から、古代北歐語を學び、石碑の文字のルーンや、古詩エッダや、古譚シャルなどに親み、十分に養ひ育てられたので、なか〳〵多分に備へ持つてゐて、巧みに詩と科學とを調和し、過去を描いて、現實に過るが如き他に比類ない特技を有してゐる。

なほ夫人の作の特色は、追に閨秀作家のことて、女性がよく描けてゐることである。既記「イエンニイ」の主人公イエンニイの如き又「春」の主人公ローザの如き、更に「クリスティン・ラヴランスダッテル」の中のクリスティンの如き、いづれもがスカンヂナヴイアの良妻賢母型婦人の面目が如實に窺はれる。

健康保險法の現在及び將來

高田義一郎

數年來の懸案であつた健康保險の問題は、「健康保險法」、「健康保險特別會計法」、「健康保險法施行令」、「健康保險法施行規則」等に依て、「本法は大正十六年一月一日より、之を施行す」と豫め定められてあつた如く、改元された昭和二年の元旦から、愈々實施せられることになつたのである。

その實施に先つて、醫師側に於ける、之に對する不安の念は、非常に大きなものであつたが、その一部を代表するものとして、大正十五年十月中に發行せられた、某醫學雜誌の評論を抄記するであらう。それは「醫業受難の秋」と題し、更に「政府は、保險範圍擴大の意圖あり。醫業の拘束益々甚しからんとす」といふ小見出しを附けたもので、次の如く結んであつた所の極めて悲痛なるものである。曰く、

「(前略)湯澤保險部長は、口を極めて今回の健保醫療請負は、少しも醫業を壓迫するものではないと云ふ。また北島理事長の說く處によれば、今回の請負金額は公正であつて、決して減額診療でもなければ、輕費診療でもなく、從つて社會奉仕ではない。普通の料金を以て普通に治療をするに過ぎないと呼號して居る。形式は或はさうであるかも知れない。併しその實際問題としては、醫業に對する重大なる拘束を意味するものである事は、一點の疑ない處である。見よ、半里以內に於ける無車馬賃往診、四里以內に於ける寒暑晴雨晝夜を問はざる往診の義務、醫療報酬の現收せられずして、一二ケ月後に延期せらるゝ事、種々の手續に煩累さるゝ苦痛、四六時中、保險署より干涉制肘せらるゝの不愉快、また勞働者が權利として誇り、醫家が義務として屈せざるべからざる不愉快、其の他、醫療給付の請負によりて蒙るべき醫家の業務上に於ける拘束や制限は、十指を屈して猶ほ餘りあるのである。

此の如く觀じ來れば、健康保險によりて受くべき醫業上の拘束、困難、苦痛、煩累は、決して輕々に看過することを許さないのである。此の秋に當り、長袖者流の名ある刀圭家は、依然として今に猶ほ覺めず、袖手傍觀して此の拘束を甘受せんとして居るのである。嗚呼危哉。醫業受難の秋」

從來藥九層倍と云はれながらも、醫師であれば美衣美食して、出入必ず車馬に依る裕福な生活が出來るものゝ樣に考へられた時代を思へば、此の評論は決して誇張の言ではなかつた。近時、一般の人々の醫藥に對する知識が進むにつれて、有識階級には自ら藥石を使用する者の數次第に加はり、啻さへ醫師の生活の昔日の如くでない矢先に、日本醫師會の代表者と、多數の團體との間に契約が出來て月俸百圓見當の人々から醫師が直接に診療の報酬を要求することが出來ない樣になつたとは、確に大なる打擊であつた。非常に困窮

な階級は最初から開業醫の門を叩かなかつたし、又富貴の人々も亦開業醫とは沒交渉で、皆侍醫又は家庭醫を傭用して居るから、開業醫としては、所謂中産階級と最も交渉が深厚なのであつた。而して月俸百圓内外の人々は即ちその中産階級の大半を占めて居るのであつたのに、之が健康保險の範圍に屬してしまつたのではないか。「醫業受難の秋」の聲は恐らく最も卒直なる叫びであつたらう。日本醫師會と診療契約を締結した健康保險組合の數は、昭和二年五月に於て、海軍共濟組合、富士製紙會社を始として、已に百に近く、各組合の支部や支店の從業員は、全國に溢れるばかりであつて、その後如何に增加するかは到底豫想出來ない所である。而して、醫師の診療に對する報酬は、最初左の如く定められたのであつた。

診察料

初診料	二點
往診料(半里以内)	三點

半里を超ゆる場合は、半里又はその端數を增す每に、二點を加ふ。

(半里を超ゆる往診の場合に於ける車馬賃は、患者の負擔とす。)

同一家屋に、二人以上の患者ある場合は、その人數に應じ、一點宛を加算す。

初診の場合は、別に三點を加算す。

午後十時より、午前六時に至る間の往診は五割增とす。

藥治料

内服藥(一劑一日分)	一點
頓服藥(一回分)	〇・五點
外用藥	
含嗽藥(一劑)	一點
洗滌藥(同)	一點
罨法藥(同)	一點
浴　藥(同)	一點
塗布藥(同)	一點
撒布藥(同)	一點
膏　藥(同)	一點
坐　藥(同)	一點
點眼藥(同)	一點
點耳藥(同)	一點

(藥品容器代を含む)

文書料

診斷書料(疾病診斷書死亡診斷書)二點

(健康保險事務に關する證明書、意見書は之に含まず。生命保險、恩給、徵兵事務に關する特別の診斷書料は、請求者より別に支拂を受くるものとす。)

處方箋　二點

死體檢案料　十點

(檢案場所の里程に應じ、往診料の例に依て點數を加算す。夜間の檢案は五割增とす。)

檢査料

ワッセルマン氏反應		十點
採血料		二點
ウイダール氏反應		三點
腰椎穿刺檢査		十點
尿、糞便、喀痰、血液、等の顯微鏡的檢査		二點
尿の化學的檢査	定性檢査	一點
	定量檢査	二點
胃並に十二指腸液檢査		十點
細菌學的培養檢査		十點
レントゲン檢査	單純檢査	十點
	造影藥使用	二十點
レントゲン撮影	カビネ	十五點
	八ツ切	二十點
	六ツ切	二十五點
	四ツ切	三十點

食道ブージー檢査　三點
食道鏡檢査　十點
直腸鏡檢査　五點
尿道鏡檢査　十點
膀胱鏡檢査　二十五點
視力檢査　五點

注射料(藥液の價を含む)
皮下注射　二點
リンゲル氏液注射　十點
生理的食鹽水注射　十點
葡萄糖液注射　十五點
筋肉内注射　二點
靜脈内注射　五點
サルバルサン注射　二十點
狂犬病豫防注射(十八回にて)　七十五點
ヂフテリア血淸注射　十五點
連鎖狀球菌血淸注射　二十五點
破傷風血淸注射　三十點
治療用ワクチン注射　二點

處置料
外科繃帶交換料　甲六點、乙三點、丙一點
産婦人科處置料　甲五點、乙二點
膣洗滌料　一點
皮膚科處置料　甲七點、乙三點、丙一點
泌尿器科同上　甲五點、乙二點
尿道洗滌料　一點
眼科處置料　甲五點、乙二點
點眼洗眼料　一點
耳鼻咽喉科處置料　甲五點、乙二點
同塗布料　一點
胃洗滌料　四點
浣腸料　二點
洗腸料　四點
導尿料　四點
瀉血法　三點
輸血法　百點
應急的人工呼吸　十點

切開料
小切開　五點
中切開(皮下組織に達するもの)　十點
大切開 { 局所麻酔にて行ふ廣汎なるもの　二十五點
　　　　全身麻酔、又は腰椎麻酔にて行ひ深部に達するもの　四十點

異物摘出料
表在し、局所麻酔にてするもの　五點
深部に在れども、局所麻酔にて行ひ得るもの　二十點
全身麻酔にて行ふもの　五十點

外傷治療
小外傷　三點
中外傷　十點
大外傷　甲四十點、乙二十五點

物理的療法
電氣療法　一點
レントゲン治療　十點
マッサージ　二點
熱氣浴　二點
藥湯浴　三點

手術料
下顎骨折手術　八十點
耳後瘻孔縫合術　三十點
眼窩手術　八十點
白内障手術　八十點
眼瞼手術　甲五十點、乙三十點
眼筋手術　八十點
涙器手術　甲五十點、乙二十點
顏面整形術　甲百點、乙五十點
トラホーム手術　十點
眼球内異物摘出　甲二十點、乙五點

其の他多數の手術に關する規定は、全部之

を省略して皆々百點を超ゆる手術中、少數のものゝみを參考の爲に抄記し置くに止める。

穿顱術　百八十點
眼球手術　百五十點
慢性中耳炎根治術　二百點
喉頭內手術　百二十點
食道內手術　百二十點
臍ヘルニヤ根治手術　百二十點
鼠蹊ヘルニヤ根治手術　百二十點
結核性腹膜炎手術　百二十點
四肢切斷術　百五十點
四肢關節離斷術　百五十點
動脈瘤手術　百八十點
股關節離斷術　二百點
眼窩手術　二百五十點
舌癌根治手術　二百五十點
肺臟腫瘍摘出術　四百點
胃腸吻合術　三百五十點
胃內異物摘出術　三百點
胃潰瘍切開術　三百點
胃切除術　四百點
腸吻合術　三百五十點
破裂腸管縫合術　三百點
腸內異物摘出術　三百點
蟲様突起切除術　二百五十點
蟲様突起炎性膿瘍手術　二百點
急性穿孔性腹膜炎手術　三百五十點
膽石手術　二百五十點
膽嚢摘出術　四百點
腹式子宮全摘出術　四百點
腟式子宮全摘出術　三百點
子宮外姙娠手術　三百五十點
子宮又は其附屬器腫瘍摘出術　甲　三百五十點　乙　二百點
膀胱全摘出術　四百點
膀胱結石腹式手術　二百點
腎臟摘出術　三百五十點

等、其の他省略

此の一點なるものは、各府縣に於て一定しないのであるが、最初の豫定では平均して二十錢內外になる位に考へられて居たのであつた。處が事實は中々さうは行かず、漸次低下して、甚だしい場合には、僅に五錢程に至つた地方も出來て、醫師の大部分を占めて居る內科醫師が、最もその打擊を受けたのであつた。

それは右の表にも見らるゝ如く、內科醫の手に依つて行はるゝ事柄は、皆點數が少い爲に、それでは到底立ち行かぬといふのである。內科醫も入院させればよからうと考へる人[illegible]十二點と定められた入院料には、別に一入院に付ては、緊急の場合を除くの外、道府縣醫師會を經て、所轄健康保險署長の承認を受くるものとす」といふ規程があつて、中々許可されない事になつて居たのである。

內科醫は困つても、點數の多い種々の手術をのみ取扱ふ外科、眼科、婦人科その他の諸科はよからうと考へられるが、之に對しても亦「百點を超ゆる處置、又は手術は、二十圓を超ゆるものとして、緊急の場合を除くの外道府縣醫師會を經て、所轄健康保險署長の承認を受くるものとす」といふ規程があつて、同じく紛糾が續くのを免れ得なかつたのである。

即ち、最初政府と日本醫師會との契約當時の豫想として、被保險者一人につき一ヶ年七圓四十二錢を負擔せしめ、醫師は約三割方安價に診療して、多數を以てその缺けた所を補ふといふ、一擧兩得の計畫は、見事に裏切られたのであつて、中にも面倒になつたのは往診の問題であつた。

半里以内の往診の車馬賃は、患家で負擔する必要のない事、前掲の通りであつて、回數の制限も何も無い。從つて醫師を訪づれて待たされるより、臥床のまゝ往診さす方が氣樂であるといふ患家は良いが、困つたのは醫師であつた。謝絶すれば不應招の告訴をされる。前以て健康保險の加入者としては、その證書を醫師に提示すべきであるのに、さうすることは兎角、醫師から差別待遇をされる恐れがあるといふので、無斷で數回往診をさせて後に、支拂の日に及んで始めてその事實を告げたりする者が續出したので、實施第一年の十月に、早くも往診料に關して、

「半里を超ゆる場合、往診時間以外の時間、又は被保險者より特に時間を指定せられたる場合に於ける車馬賃は、患者の負擔とす」

と、追加するが如き必要に迫られたのであつた。

醫師が診療費の請求を、報告書と共に、取扱の翌月五日までに詳記して、之を所屬の郡、市、區醫師會に送附し、健康保險署から若干日を遲れて支拂はれることも、煩瑣の手續を厭ふ醫師の多數には、非常の苦勞であること勿論である。それから診療の範圍を如何にすべきか、或は療養の繼續日數を如何にすべきか等、種々問題のあることは省略して、茲に唯一つ面白い插話を附記して置きたいと思ふのである。

健康保險の被保人の中には、相當氣の荒い人も多い。而して「乃公はいつでも、すぐに醫者を呼び寄せる權利がある」と、大に力んで、──少くとも、醫師が感じて居る義務觀念とは、比較にならぬ位の程度に於て、大に力んで──居るものが少くない。その態度が、從來の患者の醫師に對する態度と、著しく違つて居るのである。そこで、從來は、醫者の玄關には患者の多數に集ることを示さんが爲に、開業政策として、なるべく多數の下駄を故意に陳列したのに反して、現今では、わざ〳〵玄關の下駄を──前と同一の開業政策の爲に──少くする醫師が出來て來た。その理由を質せば、

「下駄があまり多いと、健康保險の人々が多數に來て居るものと思はれる。健康保險の人人が居れば、從來の普通の患者がいやがつて來ない樣になる恐れがある」

と答へたのであつた。

「そんなに厄介ならば、健康保險醫となる事を拒絶すればよからう」と思はれるのであるが、形式上なるべく全部の醫師を悉く之に充てる主旨であつたので、之を拒絶することは恐らく大衆から「生意氣な奴だ。尊大な醫者だ」と睨まれるであらう。醫師は人氣商賣であるから、睨まれるのは不得策だとして、皆「健康保險醫」の表札を掲げて居るのである。

但し、此の表札は、從業醫師の數だけ掲げる必要はないので、副院長以下の醫師を雇用して居る醫師に於ては、表札は掲げながらも自ら陣頭に立つことは無いのであつて、苦慮は自分單獨に開業して居る醫師の上のみにあると見るべきであらう。

醫師の側に不滿があるならば、それだけ反

對策に[illegible]らうと考へられるが、事實は必ずしもさうでにない樣である。それはつまり醫師が如上の立場から、快くその要求に應じないとか、或は應じ得られない事情の爲に、延いて被保險者の不利となり、不滿となるものと推定せられる。その半面を見る爲に、被保險者から新聞社に寄せた文字を見ることにしやう。

(甲) 掛け損の保險。

私は去る七月(昭和二年)S紡績會社の醫師から、「肋膜炎一週間休養」の診斷を與へられ、實家も附近なので歸宅して休養中、四日目に激しい腹痛を感じたので、町醫の診察を仰ぎましたところ、胃腸カタルが併發したのでありました。

町醫にかゝる時、會社から旅行先治療承認書をもらひ、被保險者證と共に醫師に提出したところ、その醫師は、健康保險で治療を受けることに對して、反對の意見を細々と發表されました。曰く、

『カゼ位なら健康保險もよいが、貴女のやうな病氣では、到底治る見込が無い。といふのは、保險醫が一人の患者の治療代とし[illegible]費を與へられる[illegible]ない、[illegible]でも掻き廻して飲ませる位のものだ。吾々はそれでもよいが、勞働者こそ悲慘なものだ』と。

私はかうした醫師の言葉を耳にした時、何とはなしに涙を催したのであります。如何になんでも、現在病氣が判明して居るのに炭酸水を甘んじて服用しては居られません。タトヒ入質してなりとも、本當の藥を服みたいと思つたのであります。

一方S會社に對しては、保險金を掛けた私でありますから、手當を受くべく、醫師の診斷書を一枚金一圓づゝ支拂つて、三回も四回も欠勤屆に添へて提出して置きました。併し會社では、今日に至るまで再三の請求に拘らず、遂に傷病手當をくれません。その理由は、被保險者證によつて醫藥を服用しなかつたから、タトヒ診斷書が出て居ても、また死亡しても、證に依つて醫藥を服まぬ時は、手當は出さぬといふのであります。勞働者としては、これ以上談判すると、危險思想とされて、總てに不利益でありますから、結局泣き寢入りにして居ます。併しながら苟しくも政府から出た法律で、[illegible]險金を[illegible]されるだけで、掛たといふ結果を生んで居るのであります。のみならず、勞働者の幹部には、病氣欠勤の第一日から手當を出して居るといふことを、耳にして居ります。健康保險は、果して如何なる目的の法律か、社會局に對して御伺ひする次第であります(平塚某女――二・十二・一七日、東京日々「角笛」)

(乙) 職工の希望。

(前略)……　　として默認出來ないのは、健康保險醫である。被保險證を持參して投藥を乞へば、

「かゝるものを持つて來ては、治療すべき患者も見殺しにするより他はない。」

と放言する者さへあるといふ。薄情なること、此の上もない。

此の醫師の言は、人道上憎むべきではあるが、彼等のみが惡いのではない。健康保險制度に欠くる所があるからである。第一に無料診察、無料施藥なるが爲め、耐へ得べき輕病者も醫師に走り、甚だしきに至つては僅な風邪でさへ保健醫の門を叩くのである。これが爲に出費のみ大となり、從つて

醫師の受くべき藥代も僅少で、延いては前述の如き薄情の言を放つに至るのであるまいか。要するに健康保險醫に與ふる藥代の半額は保險署より出費し、半額を被保險者たる職工が負擔するやうに改正すべきである。かくすれば弊害は必ず除去されるであらう。保險料の增額のみが手柄ではない。職工の中には、中流の子女も交つて居る故出産手當や傷病手當を受けずとも、左程困窮しないものがある。たとひ下流の職工として藥價の半額位は手當金より裕に支拂ひ得るであらう。職工にとりては、藥價の半額負擔よりも、保險料の高率が何よりの過重負擔であらう。(下略)(福井縣一職工。二一〇・一六日、東京朝日)

現行の健康保險法なるものは、要するに醫師並に被保人の兩方に、問題の種を蒔いたもので、之が爲に喜ぶものは無い樣である。即ち今後大に改善しなければならないが、此の第二の投書の改革意見の如きは、大に吾人の肯綮に値したものである。現在のまゝでは、寧ろ醫療を必要としない程度の輕い場合に、横着な被保人が誇張して醫師を呼びよせるが爲に、實際上醫師の手を多く要する、正直な被保人には、反つて利益を與へない機會が生じ易い樣である。若し前說の如く、半額を被保人の負擔としたならば、之が爲に無用の、或は必要以上の醫療の要求が減少して、それだけ本統の患者に多くの機會を附與するに至るであらう。現在の制度には、今後幾多の改正を必要とすることは、多數の人々の認むる所である。

忌憚なく云へば、現在の健康保險法は明に失敗である。その證左としては被保險者から苦情が百出して、保險料の滯納が起り、被保險者に對しては醫師が利かない樣な藥を與へるといふまでの不平の叫びがあるのも、全部弱者のヒガミに基くものと云へない所があるらしい。しかも診療醫側の苦情も少くなく、新潟縣の如きは健康保險醫のストライキとも云ふべき同盟休業を起した位である。

それは實施後、未だ日が淺いからであると簡單に辯護するのには、餘りに事故が多過ぎるのである。不正行爲の爲に健康保險醫を差止められるもの位は、法の部分的改訂に依つても矯正し得られやうが、本法をして現代多數の人々が疾病治療に對する不時の支出の夥多に苦しむのから救濟しやうといふ目的を達せんが爲には、現行法の根本的改正を必要とするであらう。部分的の改訂位では、到底所期半分の成果だも得難いであらう。單に健保組合と醫療契約した數の增加のみを以て、その成功を云々するのでは、決して正鵠を得た解釋とは云はれない。

若し外國の直譯と云はれる健康保險法に、成功と云はれる日が來れば、それは日本の國情に適合する樣に、妥當なる幾多の根本的改正の加へられた後でなければならない。本問題は決して區々たる開業醫の生活のみに對する大問題ではない、それは國民多數の疾病治療上に、至大の影響を及ぼし、延いては國民の體質向上の方面に關係する所重大なる問題であるから、その根本的改訂を一日も速にして、多數の國民をして、不時の疾病に對する後顧の憂無く、安んじて各自の業務に從事せしむる樣になる日のなるべく早く來らんことを切望せずには居られない。

婦人坑内勞働禁止に關する 内務省令を駁す

加藤勘十

一、改正案の正體

婦人の坑内に於ける勞働並に鑛山に於ける深夜業が、如何に母性としての婦人の健康を奪ひ、生命を脅威するの甚しきものあるかは、已に幾多の統計的事實の有力に示す處である。されば、世界各國ともに、安き賃銀をもつて酷使し得る婦人勞働者を雇傭することの有利なるを意識しつゝも、所謂人道的見地から、夙に婦人の坑内勞働を禁止してゐるのである。然るに、我國に於ては今漸く具體的問題たらんとしてゐる有樣である。九月一日附内務省令第三〇號を以て公布されたる『鑛夫勞役扶助規則の改正』がそれである。改正案の主要なる點は

一、坑内勞働時間を坑口計算十時間制としたること但し例外として坑内見張計算を認む

二、女子及十六歳未滿の者の午後十時より午前五時に至る深夜業を禁止したること但し二交替の場合は十一時まで、坑外作業に對しては二交替の場合は十二時まで、三交替の場合は徹夜作業の例外を認む

三、女子及十六歳未滿の者の坑内作業禁止但し薄層（註一尺五寸層）採掘の炭坑については適用せず

四、實施期限を二ケ年猶豫したること、但し深夜業禁止は三ケ年猶豫

である。

本改正案は内務省令とは云ふものゝ、其の實體は三井、三菱、古河等の代表的鑛山資本家を中心として形成されてゐる石炭鑛業勞働事情調査會——この構成員には社會局の官吏及び協調會代表者を含む——の主張を法文的體裁を整へたものに過ぎない。**見よ、其の全**項を通じて如何に多く資本家の利己的打算に制縛されてゐるかを。

吾々は鑛山勞働者の生活線の向上のために且つ母性としての女性を坑内勞働の危險と非衞生から解放するために、久しい間、婦人の坑内勞働の禁止を叫んで來たのである。然るに鑛山事情の一般に理解せられないためと、鑛山資本家の強力なる抑壓のために、遺憾乍ら一般世間の問題となり得なかつたのである。だが、時代は進展する。何時までも資本家のみの我慾が貫けるものではない。

彼の國際勞働總會は一個の國際的勞資協調機關に過ぎないが、列國の帝國主義的野望を平和の假面をもつて粉飾し、資本主義の不安定から來る國際的不安を一掃せん焦燥から、社會政策的政策をもつて、勞働階級を瞞着せんため、屢々改良主義的政策を加盟各國に強

制？　することがある。我國に於ける婦人深夜業禁止（工場）を明年七月一日から實施せしむるに至つたのも、この國際勞働總會の決定に餘儀なくされた結果である。

工場に於ける婦人の深夜業禁止が、縱んば國際勞働總會の決定に動かされたる結果であるにしろ、其の立論の基礎は人道的見地にある。人道的見地から、工場に於ける婦人の深夜業が禁止されたる以上、工場に於ける深夜業の及ぼす影響よりも、遙かに慘酷な影響を與へる婦人の坑内勞働並に鑛山に於ける深夜業も亦當然同時に禁止されなければならぬ性質のものである。然るに、事實は、紡績資本家が彼等の利益の若干を犧牲として婦人の深夜業禁止の改正法律案に賛成し、正に實施の期に迫られてゐるに對し、鑛山婦人勞働問題のみが、數年先きの問題として取扱はれんとしてゐるのである。吾々は玆に如實に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、する事實を見るのである。

私は左に鑛山に於ける婦人の勞働狀態の若干を略述し、果して内務省令──石炭鑛業勞働事情調査會の主張──が現下の情勢に於て妥當なる改正案なりや否やを檢討せんとするものである。

二、鑛山勞働者としての婦人の地位

鑛山（炭坑）に於ける婦人勞働者の地位は、其の勞働の性質上、坑内に於ては從屬的勞働即ち先山（男子）の手子（後山）、支柱夫の手子、其他の雜役に從事し、坑外に於ては、主要作業である撰炭（撰鑛）作業に從事してゐる。鑛山に於ての婦人勞働者の數は

業別、性別勞働者總數（十五年六月現在）

業別	勞働者總數（千）	男子（千）	女子（千）
金屬山	四六、九二三	四〇、九六六	五、九五七
石炭山	二三五、〇四四	一七四、〇一五	六一、〇二九
石油山	六、四〇六	五、八八七	、五一九
其他	五、一八九	四、七五二	、四三七
計	二九三、五六二	二二五、六二〇	六七、九四二

右の數字に示されたる如く、總勞働者數の二割三分一厘を占め、且つ其の大部分は炭坑に働く勞働者である。從つて鑛山婦人勞働者の問題は、炭坑婦人勞働者の問題であつて、これが解決を見るならば、他の鑛山に於ける問題も自ら解決さるべきである。從つて本論に於ての研究の對象は全く炭坑に於ける問題に限られてゐるのである。

炭坑に於ける婦人勞働者を更に年齡別、坑内外別に分類するならば、四萬二千二百十四人（坑内）一萬八千八百十五人（坑外）即ち六九・二%（坑内）三〇・八%（坑外）の割合となり、更に坑内婦人勞働者中七千二百九十二人（一七・二%）、坑外婦人勞働者中五千五百五十人（二九・五%）合計一萬二千八百四十二人（二一・〇%）の二十歳以下の妙齡の少女が含まれてゐることを見なければならぬ。又、これを他の産業に從事する婦人勞働者の數と比較して觀るに、

産業別婦人勞働者數（十五年十月一日現在）

産業種別	數（千人）
機械機具工場	一七、七二一
化學工場	三一、四四九

飲食物工場	一五、九五五
[illegible]業工場	四一、一六七
特別工場	、三八三
染織工場	八一三、二六五

右の如く婦人勞働者の大宗たる染織工場を除いては、何れも石炭鑛業が包擁せるだけの婦人勞働者を使用してはゐないのである。この比較表に現はれた點から觀るも、炭坑に於ける婦人勞働者の問題は、勞働問題として重要なる部位を占めてゐる。從つて、また資本家が石炭鑛業に及ぼす影響——主として經濟的の——を恐れて、理論的には婦人の坑內勞働並に深夜業の禁止を肯定しながら、容易に實現せしめない所以も其處にある。

人の妻として或は人の娘として、尊き母性としての使命を果さなければならぬ婦人の地位を尊重するならば、少し位の經濟上の打算を犧牲としても、慘酷なる婦人の坑內勞働の如きは速かに禁止せなければならない筈である。が、今日の資本家には利潤の打算が第一要件で、勞働者の向上とか保健とかは殆んど金錢においてゐない。吾等は資本家の利潤よりも人が生命の尊いと云ふ觀點から、彼等をして正しき主張の前に屈服せしめなければならぬ。

イ、危險な勞働

暗黑な地底にカンテラ一つを命の綱に働いてゐる勞働者が、どんな危險に曝されてゐるかと云ふことは、坑內を見た人でないと想像さへも許されぬのである。私は坑內勞働の危險を物語るものとして、ロイド・ジョオジの一句を引かう。彼は石炭鑛業の災害から勞働者を救ふべく炭坑國有制度を實施せんと、サンケー委員會の委員を任命した當時の總理大臣である。彼は總理大臣として自ら坑內勞働者の狀態を視察して、其の感想を語つてゐるが、次の一節は其の一節である。

『石炭產業の變災は他の何ものよりも、戰場のそれに着眼してゐる。唯、兵士と坑夫と兩者の相違は、坑夫には休戰の救ひが決して無いと云ふことである。彼(坑夫)は降服する時機すら表はすことができない云々』と。

實際、何時何處でガスが爆發するかも知れない。ロープが切斷するかも知れない。炭車が轉覆するかも知れない。落磐があるかも知れない。白日の下に於ての作業ならば、人々の注意によつて多くの場合、變災を防止し得られるであらうが、暗黑のドン底では、充分に注意力をすら働かせることが出來ないのである。落磐、瓦斯爆發、炭車轉覆、ロープ切斷等々は鑛山特有の變災事情である。試みに最近數年間に於ける變災回數並にこれがために勞働者の生命の失はれたるもの及び傷けられたるものゝ數を左に示して見よう。

(一) 變災勞働者數

年次	回數	即死者	負傷者數	勞働者總數	對總數負傷者割合
大正十一年	一七〇、二七四	六三人	一七一、三〇二人	三〇〇、七六一人	五、七一
十二年	一八六、九六三	七四一	一八七、八七〇	三三二、三八七	五、六七

十三年	一七五、〇八〇	九〇三	一七五、七〇三	三〇五、二五三	五、七八
十四年	一八七、〇二六	七八六	一八七、五一三	三一〇、四二六	六、〇六
十五年	一五八、三三二	八〇一	一五八、四七六	二九三、九六三	五、四三
平均	一七五、五五二	七六八	一七六、一七二		五、七三

これによつて鑛山勞働者受難の有樣を明瞭にすることができる。この數字は全鑛山勞働者の受難表であるが、最近五ヶ年間に於て、一年平均七百六十八人の生命を奪ひ、十七萬六千百七十二人宛を負傷せしめてをる。卽ち全勞働者の五割七分三厘までは變災受難者である。他の如何なる危險な作業と雖も、この鑛山勞働者の危險とは比ぶべくもないのである。右の內、十五年度災害中より炭坑勞働者の災害率を抽出するに、卽死者七百十二人（八割八分）、負傷者十四萬三千百二十九人（九割〇三厘）の高率を示してゐる。されば、全鑛山勞働者災害の九割までは實に炭坑勞働者の負擔しなければならない危險率である。

炭坑勞働者のこの堪へ難い重い危險率を更に坑內外、男女性別について、其の內容を驗しよう。

（二）炭礦勞働者性別災害表（十五年度）

區別		死亡（人）	重傷（人）	輕傷（人）	總計（人）
坑內	男	六〇六	二、四九三	一〇五、八〇八	一〇八、九〇七
坑內	女	六九	九六四	一二、一二〇	一三、八五三
坑外	男	三一	二五一	九、八六八	一〇、四[illegible]
坑外	女	六	五五	一、八八九	一、九五〇
計	男	六三七	二、七四五	一一五、六七六	一一九、〇五八
計	女	七五	、六九	一四、〇八九	一五、七六五

右に明かなる如く、炭坑勞働者災害率の九割一分六厘は坑內に於ける災害である。作業の危險率から觀れば、坑外作業は他の工場作業と多くの相異を見ないで、獨り坑內作業のみが、かけ離れて危險な狀態にあることを見得るのである。坑內勞働者の勞働者總數に對する災害率は七割六分六厘卽ち勞働者千人につき七百十六人の多數が死傷者である。

これを工場勞働者の危險率と比較して見る

（三）工場に於ける勞働者災害表

年次	變災回數	卽死者（人）	負傷者數（人）	勞働者總數（人）	對勞働者總數割合
大正七	二八四	二七六	六三、五六二	一、〇八六、八五六	〇、〇五六
八	三一七	二二四	六〇、六八七	一、一五九、七一三	〇、〇五三
九	二五九	二七一	七二、三七一	一、〇六五、四四七	〇、〇六七
一〇	三七九	二三四	四三、三三九	一、〇五四、九九四	〇、〇四一
平均	三〇九	二五一	六〇、二二八		〇、〇五五
一五	七一八	二八五	三七、九八三	一、一九四、二八三	〇、〇三一

備考、本表ハ五〇人以上使用工場勞働者ニツイテ

本表によれば、工場勞働者の危險率は勞働者千人に對して僅かに五十五人である。十五年の數字は一層低下して三十一人を算へるに過ぎない。工場衛生の設備も與つて力あらう

が、これを炭坑勞働者の千人に對して七百六十六人の災害率と比較して餘りにも著しき相違ではないか。

更に炭坑と工場とに於ける負傷者の比較を求めるならば、炭坑は重傷者（三〇日以上治療を受けしもの）總數三、三六三人即ち坑夫一萬人に對して百四十七人の割合であるに對し、工場に於ては重傷者總數一、六八五人即ち勞働者一萬人中僅かに九人の割合である。重傷者の比率が炭坑と工場とでは一四七人對九人である。この數字は其の儘兩者の危險バロメーターである。又、石炭百萬噸に對して勞働者の命がどれだけ刻み込まれてゐるかと云ふに、これを諸外國との比例に求める。

（四）石炭百萬噸當り變死者數

年次	米國	英國	佛國	白國	日本
九	人 三、四五	人 四、一二	人 七、三三	人 七、三三	人 三四、三九
一〇	八、九二	四、〇二	——	六、〇九	二四、八七
一一	四、一五	三、八五	——	六、〇七	二〇、三二

茲にもまた炭坑勞働者の慘苦を物語る數字を見るのである。一塊の石炭の中にも現實に炭坑勞働者の生命が叩き込まれてゐることを誰か否定し得よう。

斯く殆んど言語に絶する危險に直面して作業しつゝある炭坑勞働者は、更に他の如何なる勞働にも見ることのできない非衛生的條件を餘儀なくされてゐるのである。私は續いて數字に現はれた衛生上の條件を檢討するであらう。

ロ、驚くべき非衛生的條件

坑内に於ける通風、採光、溫度、濕度、空氣等々其の總ては人の生命を奪ひ、健康を傷ふ惡魔のそれでないものはない。通風の不完全のために窒息したり、窒息せないまでも呼吸困難となつて作業不能に陷つたり、命の綱のカンテラの火が消滅したりする個所も決して珍らしくない。斯る場所に限つてまた溫度も必ず高溫度を示すのである。人間——健康な普通人——が働くに適當な溫度は攝氏十五度（華氏六〇度）位が一番理想的であると云ふが、日本の炭坑で二〇度以下の切端——採炭場——などは全く見ることが出來ない。普通の切端で二十五六度から三〇度位である。甚しい所になると三十五度乃至四〇度に達する高熱度の作業場も尠くはない。四〇度と云へば正に華氏の一〇〇度以上である。俗にアカマル——腦霍亂類似症——と云ふ病氣は、斯る高熱度作業場に於ける勞働の結果として起る特殊の病氣である。

斯く幾多の極端な非衛生的條件は、不知不識の間に勞働者を死の淵に追ひ落しつゝあるのである。炭坑勞働者中疾病のために生命を奪はれつゝあるものの數は決して少くはない

（一）炭坑に於ける死亡者

年次	死亡者數	勞働者數	對一萬人比率
一二	人 一、六三五	人 二六八、七七一	〇、〇〇五八
一三	一、七七四	二五一、〇六九	〇、〇〇七〇
一四	一、五三三	二五三、八九八	〇、〇〇六〇
一五	一、四二一	二三五、〇四四	〇、〇〇六〇

備考本表死亡者數ハ災害變死ヲ含ム、

右表に於けるが如く炭坑勞働者は毎年一万人に對して六七十人の割合で死の轉歸を取つてゐるのである。また、其の罹病率を年次別

に見るに、

（二）炭坑に於ける罹病者表

年次	患者（男）數	同上百分比	患者（女）數	同上百分比
一一	二二〇、八〇五人	一三三、四%	一〇一、五八一人	一四四、五%
一二	一九〇、六六四	一〇九、五	九〇、六九二	一一九、二
一三	一七六、三〇四	一〇六、七	八三、二〇四	一一四、五
一四	一七六、〇六八	一〇六、五	八〇、三七〇	一一四、九
一五	一七三、六六五	一〇九、四	六九、二五九	一一五、二

である。即ち男女勞働者ともに、災害に因る危險以外に、非衞生的條件のために高度の罹病率を示してゐるのである。男性は百人に對して百十人、女性は百人に對して百十五人程度の驚くべき高率を示してゐる。恐らく他の如何なる種類の作業と雖も、炭坑勞働者の如くに高度の罹病率を有するほど、非衞生的な條件に泱ひされてゐるものはあるまい。男女勞働者の罹病率の高低は、女性が炭坑勞働――坑内勞働――に適しないと云ふことを證明するものである。然らば工場に於ける罹病者率はいかなる數字を示すであらうか。

（三）工場勞働者罹病者表

年次	罹病者數（男女共）	對一萬人割合
七	二六八、六七三人	二、四七二人
八	一九三、四三九	一、六六九
九	二〇八、六九一	一、六二〇
一〇	一七一、九八一	一、六三〇
一五	一七四、三四八	一、四八八

即ち工場勞働者の罹病率は勞働者百人に對して僅かに十六七人の程度に過ぎない。これを百人に對して十人以上の罹病率を有する炭坑勞働者と比較するとき、私は、誰でもが炭坑勞働者のために一掬の涙をそゝぐことを惜しむものはあるまいと思ふ。

ハ、長い勞働時間と安い賃銀

極度の危險と非衞生の中に苛酷な勞働を有しつゝある炭坑勞働者は、せめては勞働時間でも短かく、賃銀でも高いかと云ふに、これまた都市工場勞働者と比較して驚くべき惡條件を强制されてゐる。

坑内に於ける勞働時間は常一番制、二交替制、三交替制等によつて異なり、又、作業の性質――採炭、支柱、運搬、雜夫等々――によつても異るものがある。從つて坑内勞働時間の調査は困難であるが、今便宜上社會局の調査を基準として見るに、調査人員三萬八千八百三十四人（大正十二年七月十七日現在）中

六時間以内のもの	三分
十時間以内のもの	六割二分
十一時間乃至十六時間のもの	三割五分

の數字を示してゐる。又、資本家側――鑛業勞働事情調査會――の調査による坑内婦人勞働者の就業時間を見るに（十三年十一月現在）

八時間以内のもの	一、九三三人	五分
八時間乃至十時間のもの	一六、七九三	四割四分
十時間乃至十二時間のもの	一九、六四一	五割一分

である。この社會局及び資本家の調査による明暸なる數字から吾々は何を學ぶことが出來るか。其處には苦惱に喘ぐ慘めな勞働者の姿を發見するのである。斯る長時間勞働が勞働者の健康に及す影響の如何に恐るべきものであるかは、前揭諸々の統計的數字が如實に物語つてゐるのである。

[illegible]働者の稼働日數に[illegible]賃銀收入と密接な關係をもつてゐるが、炭坑勞働の如き過激な勞働に於ては、一般工場勞働者の如く皆勤――公休を除いて――を見るが如きことは全く不可能である。日本の炭坑の平均稼働日數は十七日位とされてゐる。稼働日數の少ないことは當然に收入に影響し、炭坑勞働者の生活が極度に窮迫缺乏の狀態にあるはこの故である。

炭坑勞働者の平均賃銀收入は某大鑛業會社が實際支拂ひたる總額から計算して一圓五六十錢程度である。一圓五六十錢の賃銀で假りに二十日働いたとして漸く三十圓內外ではないか、これで家族を養つて行ける筈がない。勢ひ妻、子を死の淵目がけて勞働に追ひやらざるを得ないのである。炭坑資本家は勞働者が妻子を働かせることを當然と心得、苟も勞働能力あるものは、全部を擧げて勞働に從事せしめて、其の一家の生存を可能ならしめんとする方針を取つてゐるのである。即ち今日の炭坑勞働者の賃銀支拂の標準は、勞働に對[illegible]働かして一家族の生存を保たしめんとする家族標準の支拂方法を取つてゐる。斯る、、、、、、、、、、、傳統的に婦人を坑內に働かしめる習慣を生み出すに至つたのである。

賃銀が勞働に對する正當な報酬として支拂はれるものであるならば、今日の炭坑勞働者の勤勉なる勞働は、優に自己一家族の生活を支持し得られたければならない筈である。

以上述べる處は數字に現はれたる炭坑勞働者の實態である。右によつて賢明なる讀者諸君は、何が故に婦人の坑內勞働並に深夜業を即時に禁止せなければならぬかと云ふことを理解されたこと、信ずる。

これに對して資本家は如何なる理由をもつて、この母性保護と云ふ重大なる人道上の問題を阻止せんとするであらうか。

三、資本家側の主張

時代思潮を理解することの出來ない固陋な資本家は、婦人の坑內勞働を禁止することは、[illegible]故に反對するなど稱する連中もある。斯の如きは嗤ふに構へたる囈語として齒牙にかける必要はないが、多くの資本家は『人道上の立場からするならば、これに反對する理由は毛頭ない、だが、日本の炭坑事情は外國の炭坑事情と異るものがあり、若し即時に婦人を廢して男子をもつて之れに代ふるとするならば、生產費の著しき膨脹を來たして炭坑を維持することが出來ない。だから、徐々に設備を改善して、其れから後に廢止することにしたい云々』と云ふのである。而して、彼等の反對意見の主要なるものは、左の數點に要約せられるのである

一、坑內作業の機械化――a、作業方法の改善、b、配車作業の圓滑、c、切端運搬の機械化

二、男子勞働者を以て補充す――a、住宅の改善增築に要する費用、b、募集費の增加、c、賃銀の增額

然しながら、斯の如きは婦人坑內勞働禁止の反對理由とはならないのである。坑內作業

の機械化は、資本主義發展の當然の傾向であつて、殊に今日の如く資本主義が高度の發展を遂げて獨占時代に入つた時代に於ては、益々熾烈な勢ひで產業の合理化――勞働の機械化――が行はれることは、あらゆる產業を通じて見得る現象である。

日本の炭鑛業が、坑內作業の機械化を行はんとすることは、產業合理化過程の必然的現象であつて、婦人の坑內勞働の禁止をまつて行はるべき事柄ではない。從つて機械化――合理化――に要する費用の故に、婦人の坑內勞働禁止の反對理由とはならないのである。

また、婦人の坑內勞働禁止後、男子をもつて必要量を充たすは當然であるが、之れに要する費用が果して彼等が稱する如く、住宅費に數百萬圓、募集費に數十萬圓、賃銀增額に數十萬圓と云ふ巨費を必要とするであらうか。彼等は自己の保守性の故に出來るだけ現狀維持の偸安を貪らんが爲に誇大な經費の見積りをやつて鬼面人を脅すの類でないかと思ふ。例へば機械化による勞働力の減少、能率の增進(採取の强化)、稼働日數の增加、負傷疾病に要する費用の節約等については殆んど述べる處がないのである。

次に深夜業禁止の問題に對する彼等の意見は、坑外撰炭作業――坑內作業は全體として禁止になるものとして――に最も重大なる影響があるが、撰炭作業は其の性質上男子をもつて代ふることは困難であるから、勢ひ深夜業禁止後に於ても、現狀通りの能率を擧げんと欲すれば、可なりな設備を改善せなければならぬ。其の設備改善に要する費用の故に、現狀維持を欲すると云ふ極めて蟲のよい意見である。

凡そ如何なる事柄でも、これを改革せんとするならば、何等かの意味において若干の犧牲は已むを得ないことである。其の犧牲を拒否するが如きは、明かに改革についての意思を有せざるものと斷ぜざるを得ない。撰炭場の若干の設備の改善位は大した勞苦ではない筈である。要するに、彼等の主張は產業合理化の大勢に反し、姑息なる現狀維持による採算上の利益を失はざらんとする點にあつて、苛虐なる勞働の慘苦から、可憐な婦人勞働者を解放せん手段としての坑內勞働並に深夜業禁止に對し、これを覆へすに足る何等の根據を有する反對論ではないのである。

殊に、工場法と鑛夫勞役扶助規則とは從來形影相伴つて、工場法が改正さるれば扶助規則も必ず改正されて來たのである。然るにこの重要なる婦人並に年少者の保護に關する事項についてのみ、改正工場法が正に實施されんとするに當つて、扶助規則がこれに伴はないとは何事である。如斯きは餘りにも鑛山勞働者を侮辱するものである。

四、改正扶助規則の批判

改正扶助規則を一見して直ちに看取し得ることは、この法規が、勞働者のために勞働條件を改善し、母性としての婦人及び發育途上にある年少者の保護と云ふ、所謂勞働者保護法規としての性質を脫却して、恰も、資本家が自己の利潤を追及するに急にして、、、、、、、、、、、、、合理化運動を促進し、協力

し、整頓せられたもの[illegible]かと云ふ疑ひをいだかしむるに充分なる法規であると云ふことである。

日本の石炭鑛業は、他のあらゆる產業が合理化運動の急旋回を展開してゐるに對し、依然として封建的因習に囚はれた經營形態を採つてゐる。例へば外部的に石炭鑛業會と稱する强固なる聯合體を形成し居るとは云へ、其の發生が合理化達成の一機能として生れたるものでないためか、他の產業に見る如く、カルテルとしての働きを充分に發揮してゐない。寧ろ坑夫の爭奪防止と云ふやうな封建的役割さへ演じつゝある。又、經營の內部的にも、資本主義の、、、、形態としての合理化と相矛盾する封建的殘存を多分にもつてゐる。かうした諸多の封建的殘存を一掃し――三井、三菱等々――、、機能の最高能力を發揮せしめんとする努力が、炭坑業者の間に行はれつゝある。彼等は現狀維持による利潤の追及と資本主義の一般的潮流に促進されての合理化運動と、この兩者の中間に介在してゐ[illegible]が保守的封建的な炭坑界に於ては正に革命的現象である。

產業の合理化は(イ)機械力をもつてせる人的勞働の驅逐――失業者の族出、(ロ)勞働能力の最高發揮――勞働者の健康を犧牲とする、(ハ)經營の科學的管理――あらゆる冗費の節約――等々を重點として行はれる。而して我が炭鑛業は自己の存立のために、急激に合理化を展開せざるを得なくなつたのである。が、經營組織內に牢固たる細胞體を形成せる封建的殘存勢力は容易にこれを一掃することが出來ないのである。資本家はこの封建的殘存勢力を一掃しなければ、完全な合理化を達成することができないと云ふことを、充分に意識してゐる。けれども、これを爲し得ないのである。この封建的殘存勢力を驅逐し得ない資本家は、それによつて失ふ利潤を、勞働者のより以上の搾取によつて補塡せんとするのである。其處に極度の酷使が展開するのである。

[illegible]產費の五〇%乃至七〇%を占めると云はれてゐるが、日本の如き低い賃銀で、果して生產費の何パーセントを占めてゐるであらう。假りに勞働者一人當り採炭能力を〇・五五噸とし、賃銀を一圓五十五錢として、これが生產費の五〇%を占めるとするならば、日本の石炭の一噸當り平均價は五圓五十八錢となる勘定である。石炭の現在相場と照合して果して如何なる關係にあるか。これを追究すれば、相當面白い展開を見せるであらうが、私の目的は石炭の市場相場と生產費との關係を求めることにあるのでなく、勞働者の賃銀が、生產費中に占める部分よりも、封建的經營による經費の方が比較的高率を占めてゐるであらうことを探究し、而して、私のこの推理が根據あるものとするならば、炭坑の合理化の展開は當然にこの封建的殘存の一掃に集中せられなければならぬことを明かにするにある。

然るに、資本家どもは賃銀が生產費の大部

分を占めると云ふ抽象的一般的規定に囚はれて、賃銀收得者である勞働者を眼の仇きにして、極度の壓制を行はんとしてゐる。かうした資本家の意圖を、、、、の名によつて保進協力援助せんとするのが、改正扶助規則でないかと思はれるほど、それほどに資本家的表現である。

即ち第一の坑内勞働時間『十時間制』の制定であるが、これこそ最も露骨なる資本家的欺瞞である。『酷烈な坑内勞働に時間を制限して一定時間以上働かしめないことは、勞働者を資本家の搾取から保護する』これが表面の理窟である。且つ其の説明によれば、『最初の入坑から最後出坑までの時間を十時間と規定するのであるから決して已得權を冒されるやうなことはない』と云ふのであるが、坑口計算の原則は『坑内見張』計算の例外で、脆くも粉碎されてしまつてゐる。

元來、、、、、、、、をもつた資本家が、自己の有利に利用し得る法規をどうして利用せずにおくであらう。形式的立案者がこの點に留意せなかつたと云ふならば、餘りにも『お人好し』であつたと云はなければならぬ。

今日、坑内勞働者が坑内に在る時間は、縱へ十時間であらうと、十數時間であらうと、實質的に稼働する時間は六時間前後である。若し今日の勞働狀態で眞劍に六時間以上も働くと云ふなれば、勞働者の生命、健康は急速度に廢滅に向つて突進するであらう。即ちどんなに無理をして働かうと思つても、身體の疲勞はその無理を通させないのである。今日の坑内設備の不完全は、不必要に勞働者を坑内に在らしめるのである。坑内設備、炭車の配給を改善するならば、今日よりもより少ない時間をもつて、より多くの能率をあげることは決して困難ではない。

勞働者をして坑内に留る時間を短縮せしめたならば、其の保健の上からも、明日の勞働の能力の上からも、どんなに好ましい結果を見せるであらう。然るに、『十時間』と云ふ長時間を規定するならば、資本家は必らず法規の命ずる處として『時間一杯』の勞働を強制せずにはおくまい。斯くして其の勞働者は苛酷な勞働のために精魂かれ竭し、健康衰へて廢殘の如く放逐せられるであらう。さうして次から次へと新らしい勞働者——産業合理化のため失業者は續出してゐる——は資本家の搾取の犧牲として自己の生命と健康を獻げるであらう。

斯く時間的に積極的に、、、、、を加へるか、さもなければ、十時間制を賃銀算定の標準として消極的に酷使の鞭を振ふかも知れない。何れにしても、彼等が自己の有利のために逆用することだけは恐らく間違ひなからう。

從つて若し坑内勞働時間制を決定せんとするならば、勞働者の實際の勞働力を基準として決定すべきであつて、漠然、從來の慣習などに從つて制定すべき筈のものではない。吾々が坑内勞働時間を坑口計算六時間制を主張してゐるのは、勞働者の人間としての生活を基準としての計算に據るものである。今日の工場に於ける實際勞働時間との均衡上、坑口

[illegible]已むを得ないと云へるが、『十時間制』と云ふが如き勞働者を愚弄するの甚しき制度に對しては、吾々は絶對に反對である。

且つ『坑内見張』計算の例外――がこれが常例となる――を認めたことは、入坑、出坑の途中に於て起る變災に對して、扶助の責任についての資本家に遁辭の口實を與へるものである。この點について立案者は嚴に責任を負はねばならぬ。

第二の深夜業禁止の問題であるが、これは主として坑外撰炭作業に就ての問題である。然るに本規定によれば、二交替の場合は十二時までの例外規定、三交替なれば永久――期間を定めてとは云ふが――に徹夜作業の例外を認めてゐる。坑外作業の九〇%以上を占める撰炭作業に徹夜作業の例外を認めて、何んの深夜業禁止ぞ！　お臍が茶をわかすではないか。工場法に於ては三交替によるとも徹夜業の例外を認めてゐない。然るに本規定に於てはこれを認める。何處に深夜業禁止の趣旨[illegible]、、、、、、、するものと云はざるを得ないのである。

第三の婦人又年少者の坑内勞働禁止の問題であるが、これこそ、本論の主眼とする點であつて、私の全力を盡して上來述べ來つた處である。改正規定は二年間の猶豫期間をおいてゐるが、私は即時斷行すべきものであることを強く主張する。改正規則はこの問題についても主要なる場面に於て、露骨なる、、、、、を曝露してゐる。即ち薄層炭採掘に於て完全に例外を認めて何等の制限を設けなかつたことである。

地の底にうごめく婦人の健康のために、坑内勞働を禁止せんとならば、斯る薄層炭の作業こそ第一に禁止せなければならぬ性質のものである。然るに、若し斯る薄層炭坑から婦人の勞働を禁止することになれば、其の炭坑は絶滅の運命を見るであらうと云ふ、全く資本家的理由によつて、何等の規定を設けなかつたことは、本改正規定のたゞでさへ、一個[illegible]のものにしてしまつたのである。[illegible]忍なる資本家どもに、勞働者搾取の上に法的理由を加へしめることゝなつては寧ろ勞働者に取つては有害でさへもある。

之を要するに、以上各項を序列に從つて批判するとき、どの項目にも、明白に資本家的カラクリが藏せられてゐるのを見るのである。私が本改正規則を目して勞働者保護法規にあらずして、資本家の合理化運動を、、、、、、、、、、、、、、、、、、、であると云ふ所以である。(一一、二〇)

新人評

畫壇の青山熊治君

白瀧幾之助

明治三十四五年頃だつたと思ふ。東京の私の下宿へ郷里から二人の青年が訪ねて來た。その一人が青山熊治君であつた。青山君は兄弟が多く、その長兄は私と同年だつたので、幼い時から知つてゐたが、青山君は三番目の弟でずつと年下だつた爲よくは知らなかつた。そしてその時始めて會つて、畫家志望であることを知つた。私は青山君に限らず誰にでも言つたことだが、畫家の修業といふものは非常に困難で、學校に居る間は格別の事もないが、卒業後獨立してからは他の學科とは違つて、大變苦しいものであることを謂つて聞かした。私は自分にも辛い經驗があるので、あまり畫家志望を勸める氣にはなれず、一たん引きとめてみた。然し青山君は本來繪が好きで、是非共修業したいと言ふので、それ以上止める事も出來ず、その位熱心ならばやつてもよいが、然し決して想像してゐる程樂ではないから、餘程固い決心を持つてやらねばならない事を話した。たしかその時、青山君は日本畫をやつた方がよいか、西洋畫をやつた方がよいかと尋ねたかと思ふ。そして自分は今は日本畫がよいが將來西洋畫の方が或は成功が早いのではないか、といふ樣な意味の言葉を洩したかと思ふ。



青山熊治氏

然し、その當時私もまだやツと一人糊口が出來るか出來ないかと云ツたような身分だつたので、青山君に物質的なお世話は何一ツ出來なかツた、それで其頃高木誠一君が肖像畫抔を盛に描いて居られたので其弟子となり、同君の義俠に依ツて書生に置いて貰ひ、デッサンの稽古を積んで終に美術學校へ入學する事が出來たのである。

丁度三十八年米國セントルイスに萬國博覽會が開設されたので之を機會に私も高木君も渡米する事になツたので青山君は轉じて嘗て吾々が世話になツた額緣屋長尾氏の居候となツたのである。その後の青山君に就いての確かな事は知らぬが、何でも青山君はその後非常な苦學を始めたのである。その時分に色々な奇行などもあつたらしいが、殘念ながら私の留守中の事なのでさつぱり知らない。

私が外國に居るうちに文展なるものが始まり、新聞などでその噂を見ると、青山君は「坑夫」といふ繪を出品してゐる。私の郷里は生野だつたので、[illegible]青山君も郷里で描[illegible]

[illegible]名作展に出たもので、私もあの展覧會で始めて見たのだが、實はそれを見て驚いた位である。

私が外國から歸つた時、第六回か第七回の文展かと思ふが、青山君はホアンチユ（酒の名）といふ題で支那の賭博の場面を描いた。その以前から、福岡方面を遊歷してゐた樣子で、福岡に於ても大勢の人達に知られるやうになり少しは貯蓄も出來、其處で外國の名畫をコッピイして學資を得る途を作り、それで外國へ出掛けた。露西亞を經て行つたので、ペトログラードの博物館の繪などもコッピイしたわけである。フランスに着くと不幸にも世界戰爭に出くはした。青山君は美術館にある名畫をコッピイすることをあてにしてゐたのが、戰爭のため美術館が閉され、學資を得る元手がしめられたわけで尠からず困窮した。そのため隨分みぢめな生活をしたやうだつた。然し元來磊落な人でもあり、それでゐて仲々堅固な志を持つてゐたので、色々な辛酸をなめつゝ長い間ふみ留つて密かに研究を重ねた。その苦しかつた事情を私は唯話を聞いただけだが、其頃の留學者はよく知つて居られる筈である。

その後歸國して、一昨年「高原」を出品した。那須へ遊びに行つてみてその高原の感じを出したものであつた。それは非常な好評で美術院賞を獲た。昨年は嘗てロシヤかどこかでみた馬の牧場に於ける感じを描くかたがた馬を描いたらしい。このほんものの繪は今もつて未完[illegible]ものにな[illegible]。それから今年は[illegible]わけである。

ざつと以上の樣なことであるが、一言にして言へば、青山君は磊落不羈ではあるが、非常にやはらかなデリケートな感じを持つてゐる人で、殊に漢詩などを大變愛讀してゐる。あるところは聊か良寛といつた風もあるが、非常に構はぬやうでゐて、一面又非常に潔癖なところがある。見たところ髯はぼうぼうで着物などには留意しないかと思ふと、仲々潔癖な點もある。丁度見た處鐵拐仙人の樣で會つて見ると處女の樣な人である。兎も角見かけにはよらぬ氣分の人である。

畫風は一時外國に居る間ルノアールに私淑した形跡は見えたが、天性デッサンの良い人で、先年のアイスの作を見ても、あれほど立派なものを若年で描いてゐる。あれなどはリユクサンブルグなどの繪と比較しても少しも遜色はない。始めはルノアールに私淑したらしいが、寧ろシヤヴアンヌなどにも似通つた點がある。一昨年の作品などにさう云ふ氣味が表はれてゐた。ところが本年の作品には、ほんとの持前の極く確かな寫實を土台として、少しも近頃流行る樣な歪んだ樣なものなどに傾かず、頗る眞面目な土台の上に大きな氣分を表はしてゐる。誰が見ても本年の作が堂々たるものであるといふ事には異議がなからうと思ふ。あれは大いに若い人達のいい刺戟にもなり參考にもなつたらうと私は思ふ。

創作家大佛次郎君

千葉龜雄



大佛次郎氏

大佛次郎君については、いつも谷讓次君を連想する。林不忘の、牧逸馬の谷君である。谷君を始めて長谷に訪問した頃、谷君の長谷川海太郎君が、大佛君とよく間違はれて困つた話をした。いつぞやも東京から、見知らない女學生が突然尋ねて來て、文學の話から、ダンスのテクニツク、エトセトラ、鎌倉の日は長しといへども、どうも滔々として質問は盡きないのである。メリケン型の巻き舌では、滅多に引けをとらない林君だが、地の林君は、ナイイヴで、少女のやうなはにかみ屋で、口數が少ない。默つて聞いて居ると、モダアン娘の調子がどうも變である。これは可笑しいな。開き直つて、一體、貴孃は、誰れを訪ふたのかと尋ねると、貴方は大佛次郎さんでせう？　いや私は、谷讓次の、牧逸馬の、林不忘の、長谷川だと言つて聞かせると、いや貴方は、谷さんの、牧さんの、林さんの、長谷川さんの、大佛次郎さんでせうと主張して、容易に戰線を退却しない。弱つた。大佛君の方に、かうした人達の群が、さう多數に訪問することだらうとの事であつたが。……それは僕の關係したことではない。

ことほど、大佛次郎と、谷讓次と、牧逸馬と、林不忘が、地の鎌倉でさへ交錯して居た插話をいくつも聞いたほどだから、外土地で僕などが、度々、說明役を勤めたのも無理はない話。何せ、どつちもペンネイムである。門札に、野尻淸彥、長谷川海太郎などゝあつては、どんなコオナン・ドイルだつて、滅多に正體を推理されたわけのものではない。

ところで、大佛君と林君とが、偶然にも隣り合して住んだ頃があつたさうな。多分材木座だつたらう。何かの折に、二氏が顏を合せても、ついぞ名乘合ひもせずに、その中に、長谷川君が長谷の方へ引越し、最近までそのまゝに經過した。今は谷君は夫人と一緒に、好い氣持ちで世界の横にらみをして居る。

僕の創作的想像力は、この兩雄だんまりの場を刹那に網膜のレンズにぼんやりと影像させて、輕い微笑をうながしたのである。その後、始めて大佛次郎氏の若い野尻淸彥君に逢つて、なるほどだと合點が行

まで、それにも飽りたのであらうか、なるほどこの[illegible]君と、[illegible]には、お
互い、お方君と云つてすべ。[illegible]して合はさうな、悪く言へば習れた……そ
の人の作ではない、と氣が付いたからである。

何故といつて、私の知つた大佛君は、あの聰明な、かゞやかしい黒い瞳をくるくるして居る大佛君は、これはまた何といふ、ナイイヴな、善良な、内氣な人格だらう。それだけでは同じ氣持ちを、林君を、同時に大佛君に發見するのである。違ふのは林君が黒く、大佛君が白いところ。……また林君は日本橋の眞中に生れて、中學を出て直ぐアメリカへ行つた。大佛君は、法科大學を出て外務省に居た。林君は英文學、大佛君は佛文學、そこで、二君の環境と教育に感化された差異をはつきりと認めて、それだけの興味をも感ずるのであるが、――どうも、こんな詮索をするのが僕の悪い癖だ――それほどの聰明を持ち、それほど外交的である筈の大佛君が、そして「鞍馬天狗」以來、大衆文學には、もう押しも押されもしない權威を立てた大佛君が、まるで無名の文學青年でもあるやうに、謙遜で、大家ぶらないのに敬服したのである。同じ意味で、畫家の岩田專太郎君にも、敬意を表して居るのだが。

大佛氏が、どうした動機に大衆文學を書き出したか、歴史は知らない。私は「鞍馬天狗」を始めて讀んですつかり魅入られたのである。その頃は、地震以後の劍劇小説がやつと流行り出して、自信のある作家達は、爭つて劍劇を書き出した。その後から後からと出る劍劇小説の中で、やはり斷然拔けてすぐれて居るのが「鞍馬天狗」だつた。[illegible]の騎り拔けて居るのと、性格の躍出では、とても[illegible]の自由自在さがあつた。違つた構想と、リズムのある文體で、「女性」の國枝史郎君の「蔦葛木曾棧」が、それと對抗するぐらゐのものだつたらう。ただ「女性」はやゝ一般的だが、「鞍馬天狗」の載つたのは、「寸鐵」や、「ポケット」なので、「女性」のほど、讀書界に廣まらなかつた。しかし、博文館の諸雜誌は、大佛次郎を文字通りに專有した。誰れの思ひ付きであつたか、發見であつたか知らぬ。この發見者は、立派に雜誌編輯者としての一機能を備へた人だと思つて居た。案の定、大佛次郎の外名で、いや、大佛次郎の外に、別の匿名の、流山何太郎とか何、何とかいつたいくつもの使ひ分けで書いた作物は、どれもみなといい當りをとつた。あの頃は大佛君も、隨分滅茶苦茶に書いたものらしい。ドイルのホオムズが、死んでまた生き歸り、「リタン」が出て、最近の「スウパア・スウス」までが出るやうに、「鞍馬天狗」も、續々續編まで盛んに讀まれた。その一部を、大佛君から寄贈された記憶もあるが、その前に讀んで了つたほどの大佛宗でもあつた。――だからとて、寄贈されたのに、無性で御禮をしなかつた理由にはならぬが。

何にしても、劍劇小説家、大衆小説作家が無類に生產される。誰れがこの中で拔ひ殘されるか。僕は、こんなつまらない興味で、澤山の大佛小説を、忙がしい中で讀んで居た。讀んでも居る。――ところで大佛君は、また新聞小説を――その頃は――一つも書いて居なかつた。

の作家を、新聞に引つぱり出さぬ法はない。と、僕は考へたのである。大衆作家が多いと云つても、やはり限られて居る。この作家ほどの特異な、そして豐富無盡藏な、作風を新聞で紹介せぬのは嘘だと思つたのである。で、意志を通じて見ると、先約が一つあるとの事。下手に自慢はせぬことだ。世間は廣い。やはり眼があるとペシヤンコになつた。ことだが、その後、暫く經てから、「照る日、曇る日」が、「朝日」に出始めた。その前の行友李風氏の「修羅八荒」も受けは受けたが、「照る日、曇る日」ほどの、明確な印象を與へ得なかつた。「修羅八荒」は、場景の變化が多いので當つたが、「照る日、曇る日」は、人物の箇性の具象性において、水晶のやうに稜角が透明である。で、「照る日、曇る日」は、「大阪每日」に出た吉川英治氏の「鳴門秘帖」に相對して、前者の男性的な堅剛性、後者の女性的な彈力性、それを、小田、岩田兩氏のそれぞれの繪法の特殊態が助けて、大衆讀者界未曾有の狂嵐を湧き起した。

大佛次郎なる作家は、こゝで金剛不壞の存在を、始めて公衆の前に公言した。それからの氏は、いやな語彙だが——大衆文壇の流行兒、寵兒となつた。そこで「赤穗浪士」である。これは大佛次郎が、これまでの作家的經驗と、人生的思索と、有りあまる精力を集注した、氏にとつては最も有意義な一つの紀念塔であらう。餘談にわたるが、大衆小說家の有數な極めて少數は、或る種の藝術派作家などは相手にもならぬほど、驚くべき研究家であり、讀書家である。これは大へん意味の深い事象であるが——が、その大衆作家の中でも、大佛君ほどの讀書家は無いであらうし、藏書家もまた無いであらう。大佛君の圖書室その他は、書籍の重みで、床が拔けさうになつて居る——とゴシツプ的に話した人があるが、氏自身もそんな話をして居た。氏が每月買ひ込む書籍量は素晴しい。いつかも、大佛君が丸善から、二千圓ばかりの繪畫集を一部買込んで、「何れ圓本の金がとれたら拂ふ」と云つた相だなどゝ、或るゴシツパアが態々報告して呉れた。圓本云々は話のつやだらうが、何にしても買ふ。氏の本領は佛文學だが、外の國語にも練達してる。だから範圍か滅法に廣い。初期頃の氏の作物は、どうかすると、藝術派の構想もちらちら見えたが、此頃はすつかり姿を消して、どこまでも自分のものとして消化して居る。そして、聞くところ、氏は割合に社交嫌ひらしい。この點では、林君は絕對的のやうだ。……創作の時間も大したものらしいが、その外は讀書をするのだから、氏の進境の鮮やかで、將來に望みのあるのももちろんであらう。

さて「赤穗浪士」であるが、この題材を提供した「日々」社の創意もえらい——僕は居なかつたから知らぬ、——が、大佛君の成熟を劃期するには持つて來いの題材だつた。氏のこの頃の轉機は大衆小說を、藝術小說までに推上げやうとする企圖にあるかに見える。それには、廣目屋のやうに、空虛で、がちやがちやした外面のテンポばかりを狙はず、事件と人間心理の自然性をうらづけて、そこに人生の必然性を發現するかに見える。六づかしい關係に入つて來た。だから今

までの劇小說的規範に照應すれば、テソポがいくらか緩漫になつたやうに見えるが、藝術家や智識階級の前に、すぐれた藝術的大衆小說として提供され、大衆小說もかうしたものならと素晴しい敬意を表されたにも些かの無理がない。それに大佛君の作物の他の精彩は、何と云つても、多角な人物をいくらでも創造して來て、それぞ〳〵動かない役目を與へ、統一した舞臺の上で、上手に、有効に、潑溂と躍動させる技能にある。それに、構想がべらぼうに雄大である。と云つても、どの作もが、全然統一が採れて居るとは云へぬ。難を云へば「赤穗浪士」にだつてあるが、あゝ大きな舞臺になると、逆理もまた眞なりといふ事もある。また作中の人物に人間性を完全に與へる創造力が、氏の大衆文學の特に傑出した一點であるが、技巧の進展でも、「鞍馬天狗」時代から全たく別人である。それから、氏は、地位から云へば、まあ濫作せねばならぬ境遇にある。なるほど隨分書くが、書いたものにソツがないのも氏ほどの作家はない。と云つて、濫作はどつちから見ても好い物ではないが。などゝ云ひ乍ら、よく濫作を註求する中の一人の僕でもあるが。

今「大毎」に出して居る「ごろつき船」も、規模の雄大と、氏の自信は相當なものらしい。かくて、大衆小說を藝術小說に推上げる氣持ち、藝術小說を大衆的に建直す氣持ち、この二つの流れが、氏の狙つて居る當來の事業ではなからうか。そこに僕なども喜ばしい期待を持つて居る。令兄抱影氏が英文學者で、星の研究家たるは誰も知る、次郎たる崎藤村が法科から出て、文壇の重鎮であるかも知れない。それに美くしい夫人の氏に對する誠意は、外目にも羨ましい。女學生諸孃などは、あまり訪問せぬがよからう。これは冗談。

名ばかりの庶民金融と其改善策

――中小商工業者への警告――

前川繁一

一

又しても年末の支拂ひに苦るしみ、又しても屠蘇の用意に事を欠く我々庶民階級は、毎年歳末の苦るしみを味ふ毎に、毎年新しい年を迎ふる度毎に「來年こそは！　今年こそは！」と幾度決心した事であつたろう。幾度勤倹貯蓄を心に契ひ、幾度奮闘努力を神に誓つた事であつたろう。然も年は變り、年一年と此の契ひを重ね、奮闘努力を續け通ぬると雖も、庶民階級の大部分は依然として歳末の苦痛を繰り返へし、依然として年始の契ひを繰り返へすのみ。一向に歳末債鬼の苦痛から救はれず、一向に生活状態は改善されぬ。否寧ろ益々生活苦を増すの状態にあるのはどうした事か、殊に御維新後六十二年目に廻り來つた戊辰の年として、又國民擧つてお祝い申し上げた御大典御擧行の年として、幾久しく忘るべからざる昭和三年が將に終らんとするに際して、情けなくも生活苦の爲に親子相抱いて情死をしたり、強盜！　窃盜と云つた樣な、いまわしき事件が餘りにも多く日々の新聞紙上を占有するのはそも何を意味するのか、此の現状を見、彼の佛蘭西下層金融委員の決議「社會の暗黒と罪悪とは、總て下層金融の欠乏に胚胎する」を思ひ、又遠くは千七百四十六七年の頃、飢餓と高利の負債に苦るしみ切つた獨逸の庶民階級の惨状――その惨状を目撃したライフアイゼン氏とシュルチェ氏が義憤の情禁じ難くして起ち、相共に庶民金融の改善に出職奮闘、遂に獨逸の庶民階級をして債鬼の手より逃がれしめ、以て今日全世界に盛たる庶民金融機關（信用組合、信付金庫の如き）の基礎を作れるが如き、近くは米國に於て依給生活者に對して無擔保金融を開始せるが如き、彼れを思ひ之れを思ひ合せて、吾人は昭和四年の新春を此所に迎ふるに際し、官民一致協力して大いに爲すべき或る重要事項の存するを痛感させられるのである。

二

勿論我が國には一千二三百もの銀行があり、本支店、出張所、代理店を合すれば其の店舗數は一萬一千餘を算して、全國一市町村に約

一回づゝと云ふ勘定になる。信用組合が又一萬二千[illegible]十三に達するからこれとても一市町村に一個以上と云ふ計算になる。其處へ持つて來て信託會社が三十七箇あり、營利質屋が一萬七千八百五六十、公益質屋が約五十を算し、無盡會社が二百五十一あり、金貸業が又五萬七八千の多きを示すのであるから、金融機關の數に於て何等不足がないばかりか、寧ろ其の多きに驚かざるを得ない位である。而も政府は口を揃へて國民に勤倹貯蓄の要を説き、庶民階級に對しては特に生活の改善向上に貯蓄の必要を力説して已まず、國民の貯蓄、殊に庶民階級の貯蓄は年一年激増しつゝあるのである。然るに庶民階級は一向に生活の改善向上を見ず、庶民金融難は一向に緩和されぬ。寧ろ生活狀態はより苦るしく、庶民金融難は[illegible]一層甚だしきを加へる。今や我が國に於ては國を擧げて中小工業者の資金難を説き、小農家の金融難今日より甚だしきはなしとまで強調せられ、所謂庶民金融改善の急務なる事を痛感するに至つたのである。茲に於て政府は昭和三年一月、所謂一年の計は正月にありで、大いに庶民金融を改善緩和すべく、先づ小農家の資金難を緩和する爲には米價低落應急資金として三千萬圓、中小商工業者の金融救濟の爲には五千萬圓、何れも預金部の資金を低利で貸付ける事にしたのである。さうして之れ等の資金はまたゝく内に貸付け濟みとなるだろう事を豫想し、政府は第二次、第三次の中小商工業資金の融通をすら心密かに準備して居たのであつた。然るに其の後約半歳を經過した七月十日の貸付實績を見るに、米價低落の應急資金として小農家に貸出すべき三千萬圓に對して、僅かに申込額の半分にも足らぬ千三百萬圓であるのはまだしも、中小商工業者に對して融通すべき五千萬圓に至つては、僅かに六分の一の八百五十萬圓より借り手がないと云ふ有樣であつた。當初の豫想を裏切る事斯くの如く甚だしきに狼狽せる政府は、此の貸出成績の不良なる原因が貸付方法及び貸付條件の惡しきに存するに心付き、小農家に對する融資も中小商工業者への貸付も、共に償還期限の一ケ年を三ケ年に延長し、特に中小商工業者への融資に就いては、勸銀、農銀、興銀等の各經由銀行の内で、興銀經由の分は興銀の業態からして有價證券其他確實なる擔保なくては貸出し難く、到底擔保信用の薄弱なる中小商工業者が借りたくも借り得ないのに心付き、興銀經由の分は更に普通銀行をも經由し、興銀が普通銀行の手形を再割引するの形式に依り、普通銀行は中小商工業者に對して無擔保でゝも此の資金を貸し出すと云ふ事にしたのである（普通銀行經由の分は從來預金部が五分の利子、興銀が五厘の手數料を取つて居た以外に、普通銀行が三分の手數料を取る事になつたから、借受人の支拂ふ利率は年八分五厘となつた）斯くの如く貸付の方法及び貸付條件を變更したばかりか、政府は[illegible]一因として融資が一般に諒解されて居ない事にも存するとして、商工、大藏兩當局は各所に勸、農、興の各銀行及び普通銀行の當事者を招致して其の徹底を期し、且つ當事者の努力を要望したものである。

然も此の貸付條件の改善も、此の政府の努力も遂に少しの効果なく、其後五ヶ月を經由した十一月末までに普通銀行の手を經て中小商工業資金の貸付けを了したるもの、僅かに長野縣に六萬圓の一口があり、新潟に極めて少額の申込みがあつたばかりで、益々成績は不良であると云はれる。中小商工業者を始め一般庶民階級が、極度の金融難に陥つて居る事は何人も之れを認めて居る所、然も政府の此の融資の散々なる不成績はそも何を語り、何を意味するのであらうか、吾人が政府と共に留意せねばならぬ所は蓋し此所に存する。

三

我々は先づ第一に果して庶民階級の金融難が事實であらうかを確めねばならぬ。第二には我國には前述の如く多數の金融機關が現に存し、加ふるに盛に貯蓄を奨勵して生活の改善向上に不斷の努力を爲すに拘らず、何が故に庶民階級の生活狀態が改善されず、何が故に庶民の金融難がより益々增大するのであらうか、而して第三には庶民階級が極度の金融難に困り抜いて居ながら、何故政府の貸付を受けないのか、借り受ける意志があるのかないのか、借りたくも借り得ないのか等を十分に研究せねばならぬ。之れ等の點を研究する事は、取りも直さず政府の融資の不成績を好成績に轉化せしめ、庶民階級をしてやがて金融難から逃れさせ得る結果をも生むのである。

四

我が國に現に存する金融機關は、其の數に於てこそ遺憾なく、寧ろ過多に失する位であるが、庶民階級の金融上一つとして役立つものはないのである。啻に庶民階級の金融機關として不備不完全であるばかりでなく、一つとして庶民階級の資金搾取機關たらざるなく、一つとして庶民の資金を枯渇に導かざるものはないのである。日本銀行や正金銀行は庶民階級に直接關係なきものとして玆に觸れずとするも、勸業銀行、興業銀行、農工銀行、北海拓殖、臺灣銀行、朝鮮銀行の各特種銀行は、たゞ僅かに産業組合、耕地整理組合其他の組合に對して、又は十人連帶の借入申込みに對して夫々資金を融通する以外は全然擔保信用の薄弱なる庶民階級に資金を融通せず、たゞ僅かに認められた各組合を通じての庶民への融資も、又十人連帶に依る庶民への貸出も、事實に於ては殆んどお話しにもならぬ狀態であるに拘らず、庶民階級よりの資金吸收は預金の名を以て全力を擧げて吸收しつゝあるのである。普通銀行に於ては特種銀行と異り、庶民階級とは餘程緣の深いものではあるが、それでも物的の擔保信用の薄弱なものに對しては殆んど金融の便がない。即ち普通銀行は九十億三千萬圓の預金に對して貸付總額は七十六億圓であり、その七十六億五百萬圓の貸出の內で、半分以上を占むる手形貸付と一割七八分を占むる證書貸付は原則として擔保貸付であり、當座貸越はその銀行と當座取引を有するもののみ

に堪へられた金融の利便であり、コールローン[illegible]あり、たゞ僅かに庶民階級が借り得る利便は手形の割引と信用貸付及び手形貸付の例外的一小部分に於てのみ之れを發見する程度のものであつて、普通銀行の總貸付額から云ふ時には、庶民に對する貸付は正に九牛の一毛に過ぎない。而も庶民階級から吸收する預金は種々の手段方法を以てあさり盡すの狀態なのである。一方庶民階級の金融機關として立派に看板を掲ぐる貯蓄銀行も、庶民階級よりの預金吸收には有りとあらゆる手段を以て努力し、現に十一二億圓もの預金をかき集めて居るに拘らず、貸出額に至つては總額に於て約四分の一の三億圓そこ／＼に過ぎず、他は擧げて之れを大商工資金化し、中央地方の放漫財政の助長に役立てゝ居るの狀態である。斯くの如く我が國の銀行と云ふ銀行が、庶民に對して資金を供給する事非常に薄きに反して、庶民の資金を搾取する事實に大なる上に、庶民階級の資金を搾取する一方である所の郵便貯金、國債、地方債、社債、株券が年々增加してより益々庶民の資金を枯渇に導き、其の間に私設質屋や金貸業が絶えず高利を庶民から搾取し、庶民階級の自力、相互救濟機關であるべき筈の產業組合が、出資額一億六千三百八十九萬九千圓、貯金七億八千百四十萬圓、借入金が一億一千五百五十萬圓、合計十億六千三百四十萬圓もの資金を有しながら、貸付金は僅かに六億四千百六十萬圓に過ぎず、手形の割引額を加へても八億一千萬圓程度であつて、二億何千萬圓と云ふものは低利で銀行預りしたり有價證券に投資してそれだけ庶民階級のため[illegible]て生ずる組合員への貯金利子の[illegible]、更に組合員に貸付くる金利の利子を高める事に依つて研究すると云ふ理窟である。信用組合の中央金庫機關である所の信用組合聯合會及び產業組合中央金庫に至つては更に甚だしく、府縣區域の信用組合聯合會四十七に於ては、貯金が一億二千四百萬圓借入金が三千五百萬圓、合計して運用し得る資金が一億六千萬圓近くを算するに拘らず、組合に對する貸出金は三分の一の五千三百萬圓に過ぎず、殘額の一億一千萬圓は之れを銀行預金や有價證券に投資するの狀態であり、中央金庫は昭和三年三月末現在の資金が七千萬圓近くあるのに對して、諸貸出金は四千萬圓程度で他は御多聞に洩れず銀行預金や有價證券に投資して居るのである。斯くの如く我が國の金融機關と云ふ金融機關が、擧つて庶民階級の資金を枯渇せしめる樣な狀態に在り、我が國の經濟組織そのものが、庶民階級の資金難をして年一年甚だしからしむる樣に出來上つて居るのである。

斯くの如くしてさなきだに金融に苦しみつゝあつた庶民階級が、昭和二年春の金融恐慌から來た資金の偏在、即ち貯金するなれば大銀行か郵便貯金若くは信託預金にと云ふ風に國民の思想を變化せしめ、金融恐慌前に六十六億六千萬圓を示した五大銀行以外の普通銀行の預金が、昭和三年八月現在では六億四百餘萬圓も激減して六十億五千餘萬圓になつたのに反して、五大銀行は金融恐慌前の二十二億圓が七億二千萬圓も激增して二十九億三千萬圓となり、五大銀行の貸出が僅々

六千八百萬圓の増加であるのに對して、五大銀行以外の普通銀行の貸出が實に十六億一千餘萬圓も激減し、貯蓄の一方行爲である郵便貯金は金融恐慌前に比して昭和三年の十月には約六億圓を激増して十七億五千六百萬圓になつたと云ふ風に、庶民階級に對する金融は極度に減少するに反して、庶民階級から離れ行く資金――吸ひ取られて行く資金は急激に増加し、今や庶民階級の金融は極度に行詰りを來たして居るのである。

五

以上の如く庶民階級の極度の金融難が事實であるに拘らず、何が故に低利で融通せんとする政府の預金部融資が不成績に終つたか、云はずもがなの貸付け方法其の宜しきを得ないが爲に外ならぬ。換言すれば勸銀なり農銀及び興銀を經、又は普通銀行を經由するからである。更に云ひ換へれば大人が小供の身の丈を思はず、大人ならでは手の屆からざる高所に菓子を上げて小兒に與へんとするの類を敢て政府が行なはんとするからである。庶民階級は空腹に堪へず、政府の差出した資金に飛び付きたいのである。況んや政府の融資せんとする資金が、五分五厘乃至八分五厘の低利であるのであるから、庶民階級は何うかして此の資金の融通を受けんものと小兒が棚の下に密集して騒ぐのと同樣に、勸銀なり興銀及び普通銀行の店先き迄は早速に驅け付けて見るのである。然しながら到底小兒は高所の菓子を手にし得ないのと同樣に、物的擔保信用のない庶民階級は、物的擔保信用がなくては振り向いてもくれない銀行から資金を借りる事が出來ないのである。勿論勸銀なり農銀は十人連帶の借受申込者には擔保なくとも貸出す事になつて居り、普通銀行經由の分も無擔保貸が出來る樣にはなつて居る。然しながら元來が何れの銀行も確實な擔保貸をするのが原則であり、よし政府の命なりとして預金部資金の無擔保貸を取扱ふとなつても、其の手數料が少くて熱が入らず、況んや萬一回收不能に終る樣な事があつては大なる損を負擔せねばならず、一方には自行資金にすら投資難で困り拔いて居る狀態であつて見れば、預金部資金の融通を斡旋するよりも先づ自己の資金の有望な投資先を得ん事に努力するのが人情、假に預金部資金の仲介融通を依頼されるとしても、萬一の回收不能から來る自己の損失負擔を免れんが爲に、よし擔保こそ取らずとも、擔保を取つたと何等異ならない方法、即ち物的擔保信用の確實なもの、若くは擔保信用の十分なものに保證せしめんとするのは人情であつて、勢ひ其の貸出の手續きが非常に複雜となり、到底庶民階級の手におへない事になるからである。

六

庶民階級の金融難を救濟するには先づ何よりも物的擔保信用を要せずして金融し得るの途を考究せねばならぬ。此の意味から云へば現に一萬二千四百四十三も存する信用組合は、其の設立の趣旨から云つて

最も理想的のものと云ひ得る。然し信用組合の現狀は必ずしも庶民金融機關として推賞する程の資格を有しないのは甚だ遺憾千萬である。其の貯金が少くて組合員の多くが銀行預金や郵便貯金を喜び、組合員中二割六七分もが全然組合に貯金せざるもの〻存する事、組合が又組合員を危險視して組合員から資金を吸收して之れを大商工資金化して恥なき事、組合が組合員の貯金と貸付との利鞘を五分も六分も取つて恥ざる事等、改善を要する點枚擧にいとまなしの現狀である。然しながら現在の信用組合を十分に改善するか、又は庶民階級の自治的團體、或は直接各府縣若くは市町村をして預金部資金融通の仲介斡旋を爲さしむるに於ては、少く共銀行を經由するよりも良好な成績を擧げ得よう。然も銀行を經由する爲に要する手數料が不用となり、それだけ庶民階級の利益が增大する筈である。要するに今や我國の庶民階級は極度の金融難に苦るしみ拔いて居るのであり、政府の融資不成績は庶民金融の研究に一大好材料を提供したものと云はねばならぬ。故に之れ等の點に鑑みて根本的に庶民金融の改善確立を計る事が急務中の急務なのである。

冬十首

北原白秋

石庭に冬の日のさし露はなりまだ凍みきらぬ青苔のいろ

庭苔に木の根影ひく朝の間は冬も幽かに美しくして

木の間洩る冬の朝日のすがしくて時たらぬ土のかをり息づく

つくづくと歩みとどめて眺めけり躑躅も薄く霜に染み出ぬ

うれしくも薄日さし來る椎の根に心寄せつつ冬はこもれり

葉闌けし木斛の葉の閑けさよみ冬ながらに晴れし日にして

輝かでにほふあたりのおだやかさ冬の日ざしぞ和ぎたまりたる

向ひ見る冬の梢となりにけり細みつくして眺めすさりぬ

日に頼む一木赤松寂けども遙かにうれし一木赤松

常ならず物の騷けくきこえ來て今宵の雲は凍みさゆるなり

近詠

窪田空穂

我が住める目白臺秋深し

路挾み屋敷樹高し鱗雲おびただしくも空に
光れる

秋の日の光に醉へる夕雲か沈みて光る屋並
のはてに

目白臺小路にさしくる秋の日の我の眼蓋に
眠け濃す

秋空に溶けては青き日の光路ゆく我の頰に
あたたかし

澄み深き今日の空かも高槻の一葉一葉のき
はやかに浮ぶ

槻の木の枝を離れし二葉三葉人行かぬ路に
落ちて音を立つ

家に籠りて

老い八つ手群れて暗しと我が見しにひそか
につけぬ青白き花

木下蔭ひろがりいでて秋深く濕れる庭を青
くせむとす

ひらき急ぐ芭蕉の卷葉ひらきあへず一ひら
の雲入日に焦ぐる

くれなゐのどうだんのもみぢ葉雨に濡れ獨
り住む我に冷やかに燃ゆ

阿蘇山の歌

中村憲吉

草千里ヶ濱

阿蘇山の見ゆるかぎりは草の山み空にちかき馬飼ひどころ

山のうへに草千里濱とは寂しけれ雲たちまちにひくく時雨れつ

とほり行く草千里濱しぐるるや下りてあそべる馬の影みず

霧小雨牧場にいななく駒居ぬはいづれの山のかげに群るらむ

奥ふかき草千里濱の雨にあひ道べに立ちし雉子をぞ追ふ

くさ原の盤紆はろけし雨のなかとほき小山に馬あらはるる

大空に阿蘇の草山かぎりなし放ちの馬らとほく遊ぶべく

古坊中の道

豐[illegible]て牛を[illegible]に[illegible]るとは[illegible]みちに逢ひわかれたり

中岳のけむりがちかき草野はら三十六坊いにしへの跡

砂千里濱

いづ邊よりゆゆしき霧か山のうへの霧の砂原に行く手をまよふ

山のうへに海濱ありと思はねども霧さめ潤ふ霧の砂濱

天つ霧あたりを鎖おてかしこきや火口にちかく地の底ぞ鳴る

霧原を雲くらく掩ひて風はやし行く手のひ[illegible]

霧小雨くらく繁けれ霧路には硫黄のにほひ吹きそめにけり

天つ風吹きかはるらし目のまへは霧押し排きてすがしき砂原

來ろ人も霧の晴れ間に見えわたり一目にひろし砂千里濱

思はざる霧のなかより大き巖みちを塞ぎてあらはれにけり

石川啄木全集

啄木石川一の夭折は萬人をして愛惜せしめ、その作品は全大衆の胸奥を銜いて歇まず。詩人として、將又一個敏感なる社會思想家として彼の藝術と思想ほど、月と共に年と共に益々その光を放ち、熱を添へてゐるものが、他に一人でもあるであらうか。極端なる貧困と、執拗なる病魔に血みどろになりながらも、やむにやまれぬ情熱をもつて「明日」に生きんとし、慘澹たる心身兩面の烈しい苦鬪に、若やかなる生涯を捧げた痛ましき先驅者、新らしい啄木の時代は遂に到來した。こゝに我社が永き歳月に涉る準備と苦心の下に、十有餘年埋れてその行方の知られざりし珠玉の遺稿を、遺憾なく網羅して諸氏の前に捧げ得ることをこよなき欣快とするものである。新らしく發見せられたる三十餘篇の創作、五百餘首の短歌、四十餘篇の評論、百數十通の書簡には、彼が新らしき時代に呼びかけて、何を語らんとし、何を叫ばんとしたものか？ 久しく文壇に論爭の種を蒔いた彼が晩年に把持せる思想を解く鍵こそは、本全集を措いて他に絶對にないことを斷言す。從來の全集によつて天才啄木の半面を知れる諸氏、本全集に依つてのみ初めてその全き姿を仰ぎ見ることが出來るであらう。

豫約規定

體裁 本文四六判九ポイント、パラルビ附、一册紙數平均六百頁以上、裝幀壯麗無比。

頒布方法 全五巻、豫納者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

刊行期日 昭和三年十一月第一回を刊行し爾後毎月一册づゝを刊行、昭和四年三月を以て完結す。

申込 先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尚、申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません。）

會費 （一）毎月拂壹册に付、壹圓、（二）一時拂（全五巻）四圓八十錢。

送本料 會費の外に、左の送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尚書留を御希望の向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市内六錢、書留六錢增。

拂込方法 振替貯金又は爲替で其月の一日迄に着金するやう御拂込み下さい。但切手代用は一割增。

◇豫約募集

申込〆切　昭和三年十二月廿五日限

東京芝　改造社

石川啄木全集總內容

（[illegible]新らしく本全集に收容さるゝもの。）

第一卷（小說集）

雲は天才である。葬列。△漂泊。病院の窓。△菊池君。二筋の血。天鵞絨。△刑餘の叔父。△その人々。鳥影。葉書。（十一篇）

第二卷（小說・小品集）

（小說）赤痢。足跡。△故郷に入る。△無題。道。△底。△札幌。△靑地君。△不穩。我等の一團と彼。△夫婦づれ。△父と子。△窓。△連想。△宿屋。△酒田川丸の船客。△村長の上京。△古外套。△束縛。△島田君の書簡。△金字塔。△空想。△父の杖。△追想。△エピソオド。△塵の悲み。△無題六篇。

（小品）△あきの愁ひ。△牧舍の賦。△高調。手を見つつ。（三十六篇）

第三卷（詩歌集）

（長詩）あこがれ（第一集）。△秋風高歌。△西伯利亞の歌。あこがれ以後（第二集）。黃草集。ハコダテの歌。△幽思。心の姿の研究。詞（補遺）。呼子と口笛。散文集。（百六十一篇）

（短歌）△秋草。△五つ星。△にしき木。△玫瑰。△ほとゝぎす。△雜詠。△綠叢。△明治四十一年の作。△同四十二年の作。△同四十三年の作。補遺。△雜詠。「一握の砂」。「悲しき玩具」（一千五百八十九首）

第四卷（評論・感想集）

△詩談一則。△樗牛會に就て。△漂民村より。△秋草一束。わかば衣。閑天地。△岩手縣師範學校校友會雜誌を讀む。△「小天地」豫告・卷頭言・社告。△古酒新酒。△「紫玉遺稿」序。△林中書。△六月（明治四十年）の雜誌界。秋風記。綱島梁川氏を弔ふ。一握の砂。△初めて見たる小樽。△主筆江東を送る。△超人と凡人。雪中行。△小樽日報と余。△豫算案通過と國民の覺悟。△新時代の婦人。△雲間寸觀。卓上一枝。悲しき思出。△日曜通信。△胃弱通信。△汗に濡れつゝ。△百回通信。△北海の三都。△ヒマナ時。△樗牛死後。△文泉氏に與ふ。△大硯君足下。食ふべき詩。きれぎれに心に浮んだ感じと回想。文學と政治。一年間の回顧。卷煙草。性急な思想。△文學の値下。△我が最近の興味。硝子窓。紙上の塵。△吉井君の歌。△窓の內・窓の外。△暗い穴の中へ。△農村の中等階級。一利己主義者と友人との對話。歌のいろいろ。△歌集「嘲笑」序。時代閉塞の現狀。郁雨に與ふ。△第十八號室より。△トルストイ翁の論文。△平信。△病室より。△新しい歌の味。（五十九篇）

第五卷（書簡集）

書簡（三百十六通）（內百四十六通未發表）。

年譜（金田一京助編）

○各卷詳細なる解說を附す。

啄木。人及び作品

自分の生活の折々に

菊池寛

僕は詩歌は餘り好きでない。只石川啄木の歌集のみは青年時代の僕の愛誦禁じ得ざるものだつた。それは歌といふよりも歌の形式に盛られた小說の斷片だつたからでもあらう。

自分は「一握の砂」「悲しき玩具」の歌を今でも數十首覺えてゐる。中につき「眼閉づれど心に浮ぶ何もなしさびしくもまた眼をあけるかな」の一首の如き、自分の生活の折々何百度頭に浮んできたかわからない。

啄木の歌

北原白秋

啄木の歌は一見蕪雜なやうで、なかなか隙を見せぬところがある。兎に角一氣に貫いた精氣、また氣韻といふものがある。尋常の技巧で無い。その多くをただの投げやりと思ふと間違ふ。何れにしても本來の蕪雜とか厭劣とかでは無いのである。矢張り詩人としての彼の技巧を經て來たうへの一種の自棄的な技巧である。彼の追隨者が何年經つても彼の歌のかの技巧にすらも及び得ぬことを思ふがいい。彼の靈魂は歌を通じてはじめて彼としての光を放つた。ことにその晩年に於て。これは一に貧苦と病苦とのお蔭であつた。彼の歌には生きんとする人間としての眞實、社會人としての覺醒、熱情、愛、光があつた。之に纏る生來の反抗心――いささかなる――階級意識が切に彼をして、常に青天の一方を翹望させた。兎に角、彼の歌に於ける一種の眞率なる精氣はこれらの諸感情の綜合から凝つて發したものに外ならぬ。これが故に人にうたはれるのである。

快適な晩年の印象

土岐善麿

僕は金田一京助氏に比べると、啄木の晩年に交遊があり、彼の生活は依然たる窮乏の中にありながら、その思想においても、その人格においても、その性情においても、尊敬し得る啄木となつてゐたことは、僕にとつての幸ひである。啄木に對して僕は一度もいやな思ひをしたことが無い。社會認識の上においても兄事するに足りた。

啄木の位置

平林初之輔

詩人啄木を思ふ時、私は常に俳人一茶を思ふ。一茶は封建制度が生んだ民衆詩人であつた。啄木は資本主義の日本が生んだ最初の民衆詩人である。一茶も啄木も權威に對する反逆兒であつた。だが一茶は側面から反逆した。啄木は眞正面から反逆した。一茶は短歌の傳統的形式を破り、その中に眞を、そして何よりも民衆の聲を、叫びを、懷疑を、要求を導入した最初の人である。啄木以前に啄木なく啄木以後に啄木はない。彼こそは舊文學と新文學とのターニングポイントに彗星のやうに現はれた天才であつた。

眞實の力

金田一京助

純に育つた若い藝術至上主義者が、眞直に現實へぶつつかり、一枚づつ我と我が衣を脫捨て、眞裸にまでなつて、そこから、必然なものを我が手で一枚一枚身に取つてつけて行つた。少しも胡麻化さず、我の命じるがまゝに完全に一つの端からぐるつと一廻りして他の端へ出て、人生の爲の藝術を強調する強い社會人になつて行つたまで、石川君生涯の作品は、眞實を生きつゞけ若き命を削つた尊い生活の金字塔である。讀むものがまづその眞實に眼を衝かれる所以である。

一時代を劃す

藤森成吉

明治以後の詩人中、啄木こそは少數屈指の一人だらう。彼の歌壇に於ける地位は、當時の小說壇乃至文壇に於ける國木田獨歩に甚だ似てゐる。その感受の尖鋭、その情熱の高揚、その發想の自由と新鮮、そして、又それらの特異性によつて全く一時代を劃した點等に於いて。——社會思想的な方面では、むしろ獨歩よりずつと我々に近くさへある。無論時代で。それにあまりに若く死んだから、その作物には、内へ内へと自分を掘つて行く氣もち——一種の小主觀——と同時に、若い年齢に特有な人生のヂレツタンチズムが可成り著しい。然しあの時代にあれだけの新境地を開拓した事は、實に偉いと云はなければならない。眞に青年の力と云ふものを見る氣がする。

人生情熱

萩原朔太郎

石川啄木の事業は、散文に於ける國木田獨歩に比較される。二人共、藝術を完成した作家ではなく、むしろ我々の文學から、眞の人生熱情を呼び起し、それの全く缺乏してゐる

日本に於て、文學の本質たるべき眞精神を、最初に高調したところの詩人である。すくなくとも日本の新しき文壇は、啄木の最初に踏み出した出發點から、改めて出直さねばならないだらう。

胸に響く

與謝野晶子

至純な熱情、敏活な才力、上品な自負心、一片の反抗氣分、また反對に恬淡な一面、是が數奇短命に終つた青年詩人啄木さんの性格であつた。此様な性格を十分に發揮し得なかつた遺憾はあるにせよ、其れのみづみづしい萌芽を以て滿たした『啄木全集』は、何時の世の新人の胸にも響いて好感を持たれる。最も長い間親しくした友人の私は、玆に層一層完備した全集が出て不朽の記念塔となつた事を喜ばずにはゐられない。

風貌

吉井勇

北海の寒さを語る啄木の
寂しき眉を見るよしもがな

啄木石川君は私の亡友の中でいつまでも忘れることの出來ない唯一人の友である。私の

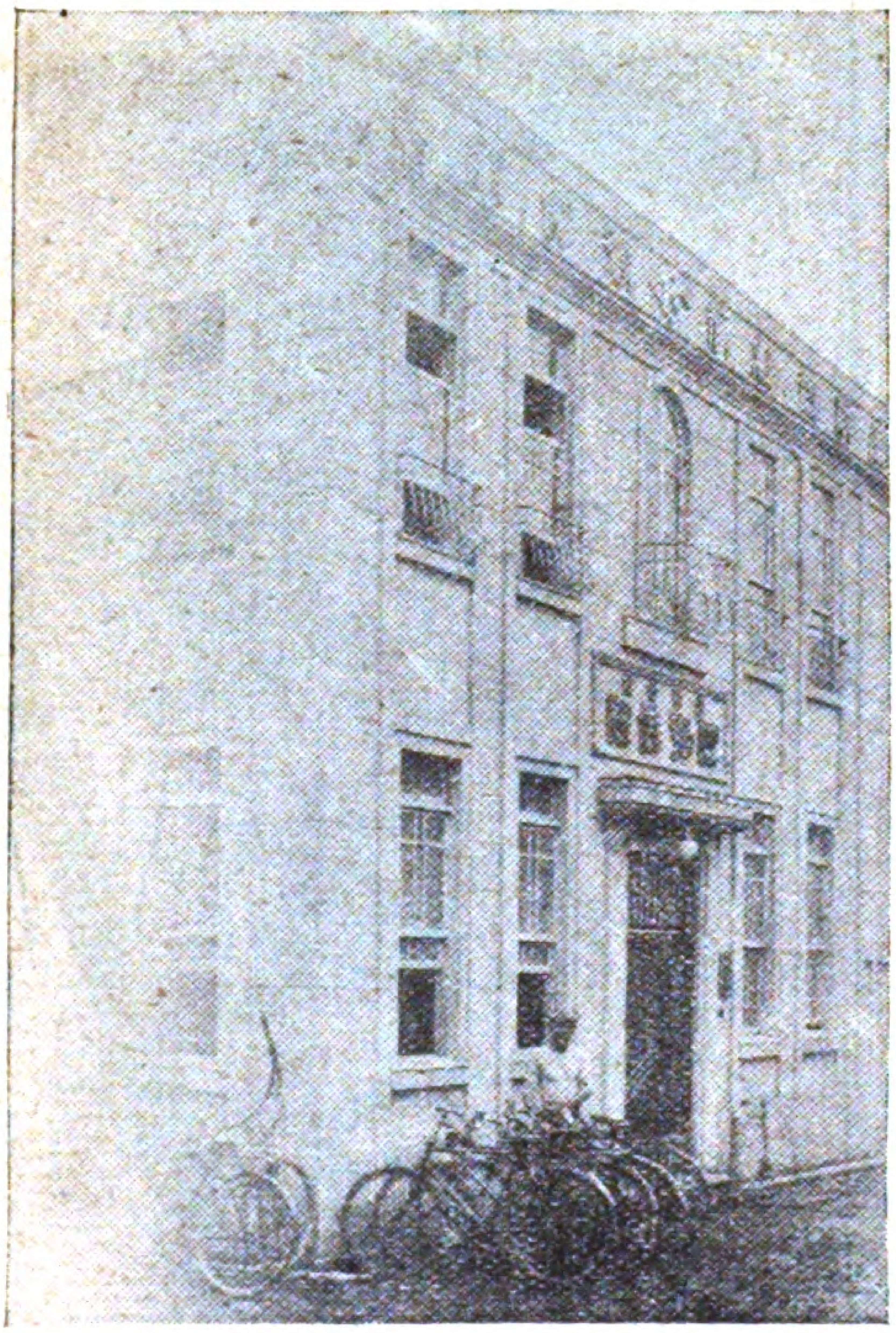
[illegible]しい青年であるにも拘はらず、何處か志士的風貌の方がより強く印銘されてゐる。晩年はあまり歌を語らなかつた。激越な調子であの紅脣を衝いて出るのはいつも次の時代にかゝる經世の問題であつた。才人で美貌の持主だつた彼は又多くの少女に愛された。私はその秘話を思ひ出して一面の風流兒としての彼の面影に限りなき愛着を覺える。

明日の必然

中野重治

啄木は一切の空想から自らを奪還した。抽象された當爲としての善と美とを放擲した。そして最後に、そして初めて、そして確實に「必要」を把握したのである。必要とは實に「必然以外の何ものでもない。必然こそ最も確實な理想である。「我々は一齊に起つて先づ此時代閉塞の現狀に宣戰しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に對する組織的考察に傾注しなければならぬのである。」

明日の考察！



營業科目

成田鐵道會社廣告一手扱
代々木乘合自動車廣告一手扱
板橋乘合自動車廣告一手扱
甲洲街道乘合自動車廣告一手扱
京濱乘合自動車廣告一手扱
東京浴場組合本部公認廣告取扱
全國各都市浴場廣告取扱
ポスター配付新聞折込廣告取扱
各種屋外廣告及一般廣告取扱
裝飾用電氣工事及美術看板製作
廣告文案圖案作製廣告人夫請負
各書店宣傳囑託
新潟乘合自動車一手扱

國有鐵道廣告承認取扱
東京市電氣局電車內廣告指定取扱
東京市電氣局乘合自動車廣告一手取扱

合資會社
巴弘告社

神田區淡路町一ノ一
電話神田(25)一四四三番


新潟毎日新聞


中國新聞


釜山日報


大分新聞


鹿兒島新聞

出版
宣傳用
染色旗

五十嵐の宣傳用品

布類を原料として染色又は印刷を以て加工せる店頭、街上の宣傳用品其種類數十

△昭和三年九月より十一月迄に於ける弊店の業績一端▽

改造社・經濟學全集
新潮社・蘆花全集
雄辯會講談社・修養、講談二大全集外九雜誌
先進社・子供研究講座
朝日新聞社・常識講座アサヒ日記
勸業銀行・御大禮記念債券賣出し
以下略

以上の販賣店々頭又は街上に於ける宣傳用品の一切を引受



カタログ
郵券六錢

營業所
東京市日本橋區箱崎町
電話茅場町一四九三番
振替東京七九〇六九番

五十嵐商店

工場
日本橋區蠣島町一ノ七四
本所區石原町六二番地
府下奥戸村細田七二二番地

世界大衆文學全集

第十一回配本（十一月下旬）第十七卷

九十三年

十九世紀ロマンチシズムの驍將として、文名世界に赫灼たるヴイクトル・ユーゴーは、憂國の志士、正義人道の豫言者であつた。彼が晩年の傑作として、優に「レ・ミゼラブル」を凌ぐ名作として稱讃されたのが、この「九十三年」である。「九十三年」即ち千七百九十三年は歐洲全土を震撼した佛國大革命の血腥い爛熟期である。著作はこの一年を背景として、自身の體驗や、實境を多分に織り込んで、人生の種々相を精叙し、罪惡極りなき封建制度の沒落と、新社會の創建とを物語り、大革命當時の佛蘭西が徴に入り細に亘り、紙上に一大パノラマの如く躍出してゐる。

ユーゴー著
早坂二郎譯

第十二回配本（十二月下旬）第二十六卷

ルコック探偵 河畔の悲劇

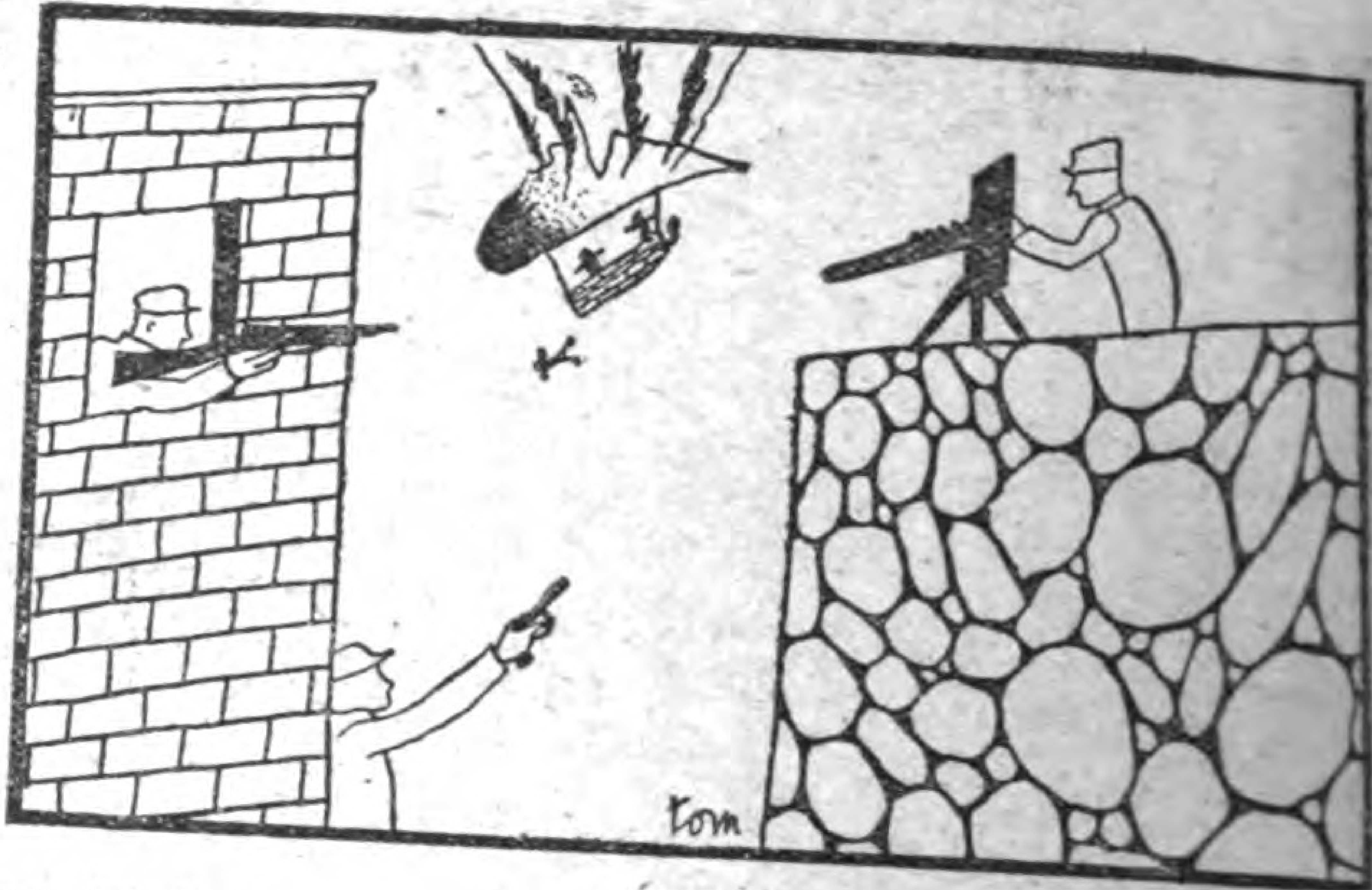
本格探偵小説の元祖ガボリオーの代表的傑作が、こゝに收錄した二篇である。
前者は、英氣潑剌の青年探偵ルコックが、巴里郊外の酒場に起つた三人殺しの事件を引受けて、旅藝人メイと自稱する奇怪な四人と、變幻出沒極りなき其一味とを向ふに廻して、虚々實々の腕比べ。
後者は、風光明媚なセエヌ河畔の貴族の庭園から發見された死美人に端を發し、戀と嫉妬の渦中に紅涙を絞る波瀾重疊の難事件に、ルコックが、颶風の如く飛躍する物語。

ガボリオー著
田中早苗譯

戰爭

列國軍備の現況と新兵器の整備

陸軍省軍務局長　杉山元



一　戰前と戰後の軍備

文化の進展に伴ひ、平和を追求するの念慮は增進し、隨つて人間の爭鬪性をいやしむの思考も加大しながら、依然として人類は戰爭を繰りかへす事實を前にして、戰爭の是非恒久平和の途如何は、古代希臘の文明以來、口に筆に論究せられた問題であり、ことに歐洲戰爭の範圍の廣大と、その慘虐の深刻さとは、世界の有識者をして眞劍に此の問題の歸結を得ようと企てしめたのである。彼の歐洲大戰後組織せられたる國際聯盟の如き眞に戰爭の生むだ、尊き平和事業の一と謂はなければならぬ。

併しながら、不幸にして此の歸結は、今尙到達せられてはおらぬ。國際聯盟自體が、世界の現況上「各國は、その國の安全擁護と國際義務の遂行に差支なき程度」の軍備を有するの已むなき事實を認め、而も此の軍備を、最少限に縮少すべき幾多の會商協議があつたにかかはらず、列國の軍備は歐洲戰前に比して、反つて增大の實數を示しておる。卽ち

英國は戰前に比して、兵數四萬五千を減じてはおるが、砲數に於て百門、飛行機に於て約千五百、タンクに於て約四百台を增し、

米國は兵數に於て八萬を增し、砲數に於ては實に戰前の三倍强たる四千五百門を有し、飛行機に於て約千六百、タンクに於て約三百五

十臺を加へてゐる。

佛國は兵數に於て十八萬を減じたが砲數は戰前の二倍約三千門を有し、飛行機に於て約四千、タンクに於て三千四百臺を增加した。

數に於て既に右の如く、而も過般決裂した、ゼネーブの日英米三國海軍々縮會議は、赤裸々に、列國各々他國の軍備縮少を望んで、自己のそれを欲しなかつた眞相を暴露し、その當事國たる英國の一國務大臣チャーチル氏をして、

「或る動物集會で、軍備縮少が議せられた。獅子屬たる獅子と猫とが發言して、象、河馬、牛などの角や牙の撤廢を主張したが、象や牛は反つて獅子の爪を非難し、且猫類の嘴と爪との危險を說き、各々自己の武備を防禦的として、他のそれを攻擊的なりと論じ、文字通りの怒號叫喚ものすごく、將に血の雨を降らさんとしたので、園丁が集會の中止を命じ、各々をその檻の內に引上げしめて、ようやく事なきを得た。」

と巧なる諧謔を以て、之を批評せしめた程である。

固より吾人は、列國軍備の現況を目して、歐洲戰前の軍備擴張競爭時代に還元してゐるものと斷言するものではない。否一面に於て戰爭の勃發を防がんとする努力の張つてゐることを是認するものである。國際聯盟に於ける軍縮準備委員會が幾度か暗礁に逢着せるに拘らず非常の努力と熱心とを以て其の事業の完成に努めつゝあるのも其の一例證である。併し乍ら國際間の信賴の程度、經濟的產業競爭の推移、民族自負の優越感等が、自から各國をして、一步一步、軍備の充實に進ましめてゐる現狀も無視することを得ないのである。彼のゼネーブ會議に於て英米總噸數の增加に比例して、我が海軍軍備の擴張率を認めんとし「かくの如くんば軍備縮少の會議にあらずして軍備擴張會議ならずや」との我が齋藤全權の痛烈なる抗議を喚起せしめた事實は天下周知の事柄である。

數上に於て然り、而して歐洲戰爭の經驗と、近代科學の發達から推論した將來戰の性質に鑑みて、列國の軍備が等しく國家總動員の基調の上に置かれてゐることは、とくに我が國民の注意を要する所である。勿論我が國防施設と雖、鋭意國家總動員の根據の上に置かれる樣努められてはおる。が併し既に歐洲戰爭に於て、一度國家總動員を實施し、その經驗に基き、新施設を企劃してゐる列國に比して、一日の短あることは之を認めざるを得ない。加之國民一般のこれに對する關心も、尙甚だ緣遠きものあることを、感ぜざるを得ないのである。

さらば今日を擧げて四圍の實況を眺める。

二　列國の軍備

米國。抱擁する絕大の富力を背景とし、所謂「世界一」の氣力に推されて、偉大なる戰備擴張が、海の彼岸に建設されんとしてゐる。

十二艘、五千噸級[illegible]二十[illegible]隻、[illegible]
艦二十二隻の建[illegible]七百[illegible]、[illegible]
艇二千五百[illegible]二十[illegible]隻[illegible]
隻八[illegible]隻、[illegible]
[illegible]

[illegible]十[illegible]日の第十五[illegible]共産黨大會[illegible]ウオロシイロフ[illegible]たる前提の下に、

一國民の[illegible]書に、[illegible]上の基礎の上に立案し、實施せられなければ[illegible]比[illegible]工業の發展とその軍事化は必要[illegible]、その特[illegible]資[illegible]

創設者たるホッカー[illegible]、[illegible]案し、操縦者なしの多數の小飛行機に爆彈を搭載し、[illegible]て操縦し、所望の方向と距離とに飛行せしめて、一時に多數の爆彈を

米國民が八千萬[illegible]の[illegible]を[illegible]として、[illegible]

は、その陸軍軍備は地理的關係から動もすれば閑却せらるゝ傾きがある。然るに此の英國の陸軍軍備が、今や世界列國の軍備、就中兵器の整備に、劃期的の變革を與ふる先驅をなしてゐることは、見逃し得ない點であり、約言すれば所謂「軍の機械化」と呼ばれ各兵種をタンク裝備たらしめんとするものである。新兵器整備の重要なる一部をなすものである關係上、稍詳しく之を説明する必要を感ずる。

三　列國新兵器の整備

新兵器整備の一は、前述の「軍の機械化」である。

自動車の發達は、大戰間に於て異常なる躍進をとげ、佛國自動車隊は六千臺の自動車を以て出征し、十萬臺餘の自動車を以て戰爭を終つた。英國は約五萬臺、米國は約四萬臺を以て戰爭を終つてゐる。而して此の自動車の應用による戰車の出現が、戰鬪法乃至築城法に、一大變化を及ぼす端緒であつたことは、今更申すまでもない。即ち發動機の勢力は、最早空中と、戰場の後方とのみに止まらず、遂に戰場の眞只中に突進して來たのである。

歐洲戰爭の直後、英軍參謀本部は、懸賞論文を發表して、「英國將來の陸軍軍備を如何に改善すべきや」を一般に問うた。而して半歳の久しきに亘つての審査の結果發表したものが、實にこの「軍の機械化」を主張したものであり、歐洲戰爭の經驗と、近代科學の進歩とを推定して、[illegible]タンク、[illegible]

器の採用によつて、戰備が一變たる觀あるを避くべきことを論じたものであつた。かくの如き新軍の建設は、莫大の經費を必要とし、當時戰後の各種平時事業の恢復發展を要する時期に於ては、とくに一種の空想と看做されたのであるにかかはらず、英國參謀本部が、敢てかくの如き所論を採用し、之に實現を圖るの擧に出でたことは、頗る世人の注目を惹いたのであるが、爾來十年、英軍は徐々ではある、着々と、この「軍の機械化」に向つて一歩一歩を進めてゐるのである。

然らば「軍の機械化」とは如何の問に對し一言以て答ふるならば、人員の損害を節減すると共に軍隊をして全然道路を離れて行動し得るようにすることである。

作戰兵力が小であり、從つて採用の所謂一種の敵に依ること得た昔に於ては戰爭と交通網との關係は、必ずしも絶對的ではなく、大兵の集中の爲に、道路の補修、鐵道を行ふたのは、かの奈翁戰に始まつたとさへ云はれてゐる。然るに世運の進歩に伴うて、作戰兵力が增大し、糧を敵にのみ依ることが出來ず、後方より戰鬪員の糧食を輸送することが必要となれば、なる程、作戰と交通線とは、離るべからざる關係を生じ、日露戰爭の如きは、兩軍共に此の極端なる事實を示し、奈破崙時代及その以前に見られたような神出鬼沒の作戰は最早や殆ど不可能になつたとさへ考へられたのである。

然るに五年の永きに亘り損害多き陣地戰に彷徨せざるを得ざるに至[illegible]

[illegible]をして交通線より孤立せしむる外途がない。之によつて始めて陸戦のような神出鬼没の作戦が可能となり、戦争をまたたく内に終始せしめることが出来ると斯様な結論に達せしめた。さここそ、道路外を自由に進退し得るタンクが創意せられ之によつて歩兵を運搬し、砲兵をも運動せしめ、糧食運搬の輜重縦列をも、かくの如き種類の車輌編制に改編して、軍の運動を極端に自由ならしめる、之が英軍の企圖しつつある所である。

かくの如くして、英軍は現に戦車二二〇輌、装甲自動車二〇〇輌を以て、タンク戦の研究につとめ、その砲兵は次第にタンク式の自動車牽引に改められつつある。米國は戦車三六〇輌を有し、戦時に於ては歩兵一師團毎に軽戦車一中隊(二十五輌)を配屬することに決定し、露國に於てすら、戦車一八〇、装甲自動車三七〇輌を有して英國の顰に倣はんとしてゐる。

新兵器整備のその二は航空機である。

航空機の日進月歩の現状は、既に國民周知のことであり、現に太西洋と太平洋とは、之によつて横断せられてゐる。旅客飛行船は獨逸と米國との間を往復した。欧洲戦の末期に、かの有名なる戦闘飛行機の創設者たるホッカー氏は、「砲身を要せざる砲弾」としての飛行機を考案し、操縦者なしの多数の小飛行機に砲弾を搭載し、之を電気によつて操縦し、所望の方向と地點とに飛行せしめて、一時に多數の砲弾を[illegible]り、遂にその事なく終つてしまつたが、この[illegible]飛行はその後既に米國の試験を経てゐる。

而して飛行機上と地上とのラジオ通信の成功から「将来の各種司令部は、空中に位置する」ことになるであらうとさへ論ぜられはじめた。

現に英國千五百機、米國千六百機、露國千二百機と云ふ數が算へられてゐる。

新兵機のその三は、實に化學兵器、即ち毒瓦斯の研究及製作之である。

一九一五年四月二十二日、獨逸軍がこの化學兵器を使用したことは、火薬發明以来の兵器革命の端緒を開いたと云ふも過言ではない。當時この新兵器の出現に驚かされた協商軍は、徒に非人道の名を以て、獨逸軍を悪罵したのであるが、今や各國共に、将来戦に於ける主要兵器の一として之が研究に日も足らぬ熱心を示してゐる。

斯様にして、既に今日でさへ、一噸の爆弾を搭載し得る、普通の爆撃飛行機十臺内外の撒布する、六噸のホスゲン又はイペリット(共に呼吸器を犯す毒瓦斯)は、全東京市の市民をして、三十分内に殲滅せしめ得る能力を有するに至つてゐる。米國エッチウット工廠だけで此等毒瓦斯の日製量、八十噸以上の機能を保有してゐると傳へられる。

米國が八千萬圓の豫算を初年度費として、化學兵器の設備に充て、毎

年二百五十萬圓以上を之に注いでゐることは前述の如く、英國が毎年二百五十萬乃至二百六十萬圓を、露國は一九二六年度に於ては五百萬留を昨年度に於ては七百萬留を之に使用してゐる。而も昨年一月十七日の紐育タイムスは、獨逸に於て驚くべき二種類の瓦斯が發見され、その一は從來のあらゆる毒瓦斯を全然無効ならしむる藥用瓦斯であり、他の一は全軍を四時間の間昏睡狀態に陷らしめ得るものであつて、眞に戰爭を最も人道的に終結させるものであることを報導してゐる。

新兵器整備のその四は電氣兵器である。

英國の一電氣學者は落雷の學理にもとづき、將來は電氣擊が砲擊にかはられるであらうと唱へてゐるが、この兵器の將來は、未知數である、それ丈け、又測り知り難きものがある。

四　我が陸軍軍備の狀態

限られたる頁の内に、あはただしくも列國軍備の實狀と、新兵器整備の景況とを述べた。

而して此の世界列强軍備の趨勢に對應して、如何に我陸軍の施設を改善すべきやは、歐洲戰後多年の問題であり、研究考慮されたことであつたが、國家財政の狀況は遺憾乍ら多額の費用を國庫に俟つことが出來ず而も大震災の影響を見るに及んで遂に自ら四師團の兵力を節減して、此の新兵器整備に振り向け、以て國防威力を减ずることなくして、よく近代科學戰を以てする、戰爭行動に應じ得る最小限度の基礎的建設に努めたのである。斯様にして、漸く飛行中隊十個を增設し、戰車四十輛其の他若干の新兵器を整へ得ることにはなつた。併しながら、これ實に、有事遺憾なきを期する準備の基礎であつて、準備そのものの實備ではないので歐米列强の新兵器整備に比してまだ／＼大なる懸隔があるのである。特に最近飛行機の進步に伴ふ我國土防空の施設は不完備にして企圖心ある敵の航空爆擊に對しては我國土は丸裸同然の危險狀態に暴露して居り其の上我國家屋の大部が木造建築なる事が一層此の危險さを深ふして居るのである。開戰の當初東京を始め我國工業の中心地たる名古屋、阪神地方又は北九州地方が大規模なる敵の空襲を蒙り大打擊を與へられたりとせん乎戰局の前途懼懷すべきものあるは自明の事柄である。又此の空襲が瓦斯を利用せられ國民が之に對する防備に無關心であつたとしたならば其の慘狀は如何でせう。此等の點は我が同胞國民の、深く銘記されんことを望んでやまない所である。然らば之が準備如何と云へば、深く科學の進步に留意して、基礎の擴充に努むると共に、國家の總動員準備を遺憾なからしめ、以て平時の研究に基づき、一旦緩急の際、急速に新兵器整備に應じ得るが如く劃策そのよろしきを期することである。

吾人はおくればせ乍ら、學校教練と青年訓練との施設により、よく列國の精神的國民訓練の平準に後れることなきを得た。而して更に國防施設の有形物質の整備を遺憾なからしめ、以て金甌無缺の國防の確

……らざらんことを深く自ら戒むると共に、廣く國民に此の戰爭準備の為……の本質に盲從せんことを戒めて已まないのである。

國際戰爭と國際無產者運動

山川均

□

近代無產者の組織せられた運動が、戰爭に對して一定の態度を定めなければならなかつた最初の機會は、普佛戰爭であつた。二年前に開かれた國際勞働者協會（第一インタナショナル）のブラッセル大會の當時、ヨーロッパには既に獨佛間の戰爭の危機が孕まれてゐた。そこでドイツ側から提出せられた戰爭問題が、この大會の重要な議案となつた。歐洲列國の間に戰爭が勃發した場合、勞働者は如何なる態度を取るべきかといふ問題に對して、この大會は、（一）戰爭の根本原因は現存の經濟制度にある、從つて經濟制度の變革を見ぬかぎり、戰爭を根絕することの出來ないことを認めると同時に、（二）勞働者は戰爭を阻止する「實際的な、正當な、直ちに實行し得る方法」として、××××すべきことを決議した。

この決議は、爾後、國際無產者運動が戰爭に對して、大體において一貫して取るに至つた態度を、初めて公式立てたものであつた。しかしながら、いよ〳〵普佛戰爭が勃發すると、インタナショナルの陣營内でも、意見の動搖と相異が現はれた。

獨佛關係がいよ〳〵緊張して來ると、兩國の勞働者の間には、互いに戰爭に反對して國際的團結を固めるメッセーヂが交換された。のみならず戰爭が勃發すると、フランス殊にパリの勞働者は、第二帝政を覆へして××××共和政を布告し、これによつてドイツと媾和する有ゆる機會を伺つてゐた。そしてドイツ政府が媾和の提議に應ぜぬ場合には、ドイツの民衆に對してゞはなくドイツ政府に對して革命的戰爭を布告する、といふのが彼らの意圖であつた。

一方ドイツ側では、ホルヘルム・リープクネヒトとベーベルとは、ナポレオンにもビスマルクにも均しく反對するといふ立場から、北ドイツ國會で軍事費に反對の投票をしたが、ラッサーレの影響下にあ

る、ドイツ社會民主主義運動の謂ゆるアイゼナッハ派は、軍事費に賛成した。その理由は、ナポレオンの勝利は、フランスに於ける勞働者の運動を破壞し、全ヨーロッパをナポレオンの專制勢力の下に屈從せしめ、かつドイツの分割を招くといふにあつた。

これに反して、インタナショナルの内部におけるバクニンの一派は、プロシヤの勝利は、社會革命の勝利を五十年間遲くれしめるものだと考へた。バクニンは、ドイツ軍の撃退とヨーロッパに於ける社會革命の點火とを、引き放すことのできないものと見、そのために大衆を組織する運動に着手した。

そこでロンドンに在り、そしてマルクスの影響の下にあつたインタナショナルの總務委員會が、この戰爭に對して、どのような態度を取つたかは、極めて興味のあることである。總務委員會の對戰宣言書は、（一）ナポレオンとプロシア政府とを等しく責めてはゐるが、ドイツに取つては防衞戰の性質を帶びてゐることを認めてゐる。それと同時に、ドイツ勞働者に向つては、（二）もしこの戰爭を防衞の範圍を越えて進擊戰に變ぜしめるなら、その勝敗の如何を問はず、ドイツに對するロシアのツアリズムの影響は增大し、勞働者の禍害となることを戒めてゐる。佛軍の敗戰のために帝政が倒れて共和政が宣布せられると、總務委員會は再び宣言を發表し、ドイツの對佛戰爭は、これによつてもはや防衞戰の界限に達したと、プロシアの好戰的朋黨がこの戰爭を征服戰に變ぜんとしてゐることを警告し、ドイツの勞働者がアルサス・ローレン併合に反對して蹶起することを要求した。

總務委員會の宣言は、マルクスの筆になるものであつた。マルクスは、この戰爭が、ドイツ側にとつて防衞戰たることを認め、從つて防衞の範圍内では、ドイツ社會民主黨が國民運動に參加することを是認すると同時に、國民的利害とプロシア王朝的利害との相異を强調すること、アルサス・ローレン併合反對運動、フランスに於ける共和政治樹立と同時に媾和を締結すること、戰爭中といへども、獨佛勞働者の一致を斷へず現はすことをもつて、ドイツ社會民主黨の任務と認めてゐた。

かようにマルクスは、戰爭に反對はしたが、その立場は、單なる人道主義者や平和主義者のそれとも違つてゐた。マルクスは戰爭をもつて人類の不幸災厄として、たゞその上に淚を流す態度は取らなかつた。マルクスは、フランスがドイツの侵略戰のために粉砕される結果は、フランスをしてロシアの懷に投ぜしめ、歐洲における反動の中心たるロシアの專制主義の勢力を增大し、ことにアルサス・ローレンの併合は、佛露の同盟した勢力とドイツとの新たな戰爭を意味するものとして警戒した。これと同時に、ドイツに取つてこの戰爭が防衞戰たる範圍においては、それはドイツの國民的統一への一の過程であつたこと、そして歐洲における主要な國々が、その內的統一を完成することが、無產階級運動の發展のために缺くべからざる條件であつたといふことから、マルクスの看過しなかつたところにちがひない。[illegible]

[illegible]マルクスを汎ドイツ主義者として非難した（例へばギヨームの『[illegible]』[illegible]主義マルクス主義、ラスキンの『インタナショナルと汎獨主義』を看よ）。

□

第一インタナショナルの崩壞後は、完成せられた國民的國家へおのおのの內部において、この國民的な線に沿ふて、無産者運動の發達する時期であつた。しかし無産者運動の國際主義的傳統は、この時期にも忘れられないで、やがて第二インタナショナルの組織を見た。それにもかゝはらずこの時期の特徵は、國際主義よりも、寧ろ無産者運動の國民的な發達であつた。

同時に國際戰爭の性質も變化した。先きの時代にあつては、戰爭は或る範圍までは、近代的な國民國家の完成せられる過程であるといふ性質を存してゐたが、この時代になると、かくて完成せられた國民的國家と國民的統一との條件の上に成長した資本主義が、さらに國民的な境界を破つて成長する必要に迫られて、他國の資本主義の同一の必要と衝突するために、たえず各國の無産者を脅かすところの戰爭となつた。そこで第二インタナショナルの每回の大會には、常に國際戰爭が重要な議題となつてゐる。

これらの大會の決議は、大體において、彼のブラッセル大會の決議の公式を守つてゐた。卽ち一方では、國際戰爭が資本主義の必然の結果であることを認め、戰爭に對する最良の鬪爭方法は××××××[illegible]について、[illegible]たとへばドメラ・ニユウエンユイス[illegible]に代表さられた思想——××××、××××のやうな、無政府主義者の主張から、最も徹底的な改良主義的な主張にいたるまで、色々の思想が大會に現はれた。一八九六年のロンドン大會の決議は、常備軍の廢止と民兵制度の採用、宣戰の布告に人民の發言權を與へること、强制力ある國際仲裁々判所の設置を具體的に要求してゐるが、無産階級は議會に多數を占めることによつて、初めてこれらの目的を達成することができると云ふ點では、極めて空想的なものであつた。戰爭防止の方法としての××××の問題は、數次の大會において自然的な論爭を惹起した。（×××××說が、ドメラ・ニユウヱンユイスやエルヴエラの無政府主義者と、社會黨の溫和派として知られてゐるジョーレスなどによつて主張せられたことは興味がある）。

この間にも世界戰爭の姿は漸次に鮮明を加へて近づきつゝあつた。そして一九〇七年のスツットガルト大會は、世界戰爭に對する第二インタナショナルの態度を、最終的に決定したものと云はれてゐる。「若し開戰の脅威が迫つた場合には、各國における行動を整調する機關としての國際事務局の助けにより、階級戰がどの程度に切迫してゐるかといふことゝ、並びに一般政治上の情勢とにかんがみ、最も適當と考へられる一切の方法により、戰爭を防止するために有ゆる努力をすることは、關係各國の勞働階級と議會におけるその代表者との義務

である……それにも拘らず一度び戰爭の勃發した場合には、彼らの義務は、急速にこれを終了せしめるために行動し、大衆を×××、×××××の×××××ために、戰爭によつて造り出された政治上經濟上の××××××するために全精力を傾倒することである。」

この決議は、さらにコペンハーゲン、バーゼルの二大會によつても確認せられ、ことにその第二節は、左翼分子の努力によつて插入せられたものであつたが、尙かつ世界戰爭に對する一般的な態度を定めること以上の實劾を持たなかつた。そしてその遂行は、各國における特殊な形勢に一任せられてゐた。そしてこれはやがて各國の排外社會主義者が、この決議に對する義務から免かれる大きな破れ目であつた。ことに興味のあることは、普佛戰爭の場合とは、戰爭の性質が一變してゐたにもかゝはらず、戰後における第二インタナショナルの內部においては、誰れが防禦者であるか、誰れが戰爭の責任者であるかゞ、最も白熱的な討論の主題となつたこと、そして防禦戰の名によつて、互ひに戰爭の責任を免かれようとしたことである。

第二インタナショナルに組織せられた國際無產者運動が、いかに世界大戰を防止する力が無かつたかは、人々の記憶に新たである。それと同時に、世界戰爭に對する態度の相異は、この瞬間から、第二インタナショナルの內部に對立し、かのチムメルワルト、キエンタールの會合を經、さらにロシヤ革命を經て、第二第三兩インタナショナルの對立する濫觴をなした。

いま國際無產者運動は、この兩インタナショナルの對立した新たな陣營をもつて、一步一步、近づき來る第二の世界戰爭に當面しつゝある。

生存競爭としての戰爭

駒井卓

生存競爭と云ふ語は云ふまでもなくダーウヰンが之を用ゐて以來始めて今日のやうに多く使はれるやうになつたものである。其內容は可なり廣く解すべきもので、動植物の種族又は個體が生存及生殖のために種々の困難と闘つて之に打勝たなければならない。此事實の全體を指して生存競爭と云ふのである。

例へば野鼠がこゝに一匹生れたとすると、それが死なずに生活をつ

づけて行くためには、草木の葉や種子を探して喰はなければならぬ、又其食物を同類の他の鼠や、同じものを食ふ他種の鳥獣や昆虫等と競はねばならぬ。又自分が猫や梟に喰はれないやうに逃げ隠れる事が必要である。又其体の内外に寄生する種々の寄生虫や、黴菌等に対して抵抗しなければならない。それから又寒くなつたり水がなくなつたりする時にも[illegible]に[illegible]なければならない。種々食物[illegible]こゝに同じ[illegible]種々の[illegible]一[illegible]

者が生存に不適当な者として除き去られる。そして[illegible]一層増加して終に激しい生物各個間の競争が起ると云ふのが[illegible]これがダーウヰン等の自然淘汰説である。

今日では自然淘汰の説にもはや昔程の勢力はない。然し生存競争と云ふ事が生物の個体や種の間に行はれる事、又それが生物の進化に大切な意味のあると云ふ事は恐らく大概の生物学者が認める事であらうと思ふ。

そこで人類の社会は生物一般と少しも変りはない。人間の一人一人が[illegible]前述べた[illegible]と同じやうな[illegible]の[illegible]

ある。それだから戰爭は自然界の法則でもあるし、又將來の人類の進步のためにも必要なものであると、かう云ふ論法がよく軍國主義者たちに用ゐられたものである。之を一寸聞くと尤もなやうにも聞こえぬ事はないが、今少し深く考へて見ると全く取るに足らぬ論である事が直に分る。

一概に戰爭と云つても種々あつて、內亂もあれば國と國との間の戰もあり、ナポレオンの戰爭や歐洲戰爭のやうに聯合國と聯合國との間の戰爭もある。又骨や石のかけらでこしらへた槍や刀で突き合ふ蠻人の鬪もあれば、爆彈や毒瓦斯でやり合ふ此頃の戰爭もある。どの種類の戰爭であるにしても、それが交戰團體及個人に取つて激烈な生存競爭である事には間違はない。けれども其結果は果して民族又は人類の進步に貢獻するかと云ふと、少くとも、今日の戰爭では全く其反對である。

先づ團體に就て考へて見ると、今多く交戰團體となる國なるものを生物學的に見ると、殆んど何の統一もない個體の集合體である場合が多い。それは今の國と云ふものは大抵人種とか民族とかの別によつて出來てゐるものではない。歐洲戰爭の聯合國側には殆んど世界のありとある人種が加はつてゐたし、中歐同盟側にも中心となつたチュートン族の外にユダヤ人もトルコ人も居た。それだからたとへ一方が敗けて同民族が皆殺しになつたとしても、ちやうど雜草の生えてゐる中の畠を[illegible]

生物學上云ふ品種の淘汰にも何にもなりはしない。

尤も昔の戰爭では、又今でも蠻人の間の戰爭では之と異つていくらか生物學的に意味のある品種の選擇と云ふやうな、畠の雜草を引き拔いて有用な草だけを殘しておくに似たやうな働きをしたに違ひない。然し此場合にも考へなければならぬ事は戰爭と云ふ生存競爭の一種によつて撰擇せられる主な標準は、人類の文化を進ますやうなものとは餘程縁遠いものである。なるほど人間も野蠻時代には此競爭の淘汰作用の御陰を被つてだんだん進步をしたものであらう。然し或程度迄發達して眞の人間らしい生活をし人間らしい發達をするためには戰爭は邪魔物になつて來た。どこの國の歷史を見ても文化は戰亂の際に見て發達してゐる。內亂があつたり外國と戰つてゐる間は決して文化は起らず、平和になつて始めて其芽が現はれる。又折角咲いた文化の花が兇猛な好戰民族によつて踏みにじられた例は幾らもある。要するに戰爭と云ふ生存競爭の形式は野蠻の種類の間、又は野蠻時代の民族の間には適當な淘汰の標準を供したものであらうが、文明人の間にはもはやその向上進步のために極めて有害なものとなつてゐると云はなければならぬ。

以上は人類の團體として考へた事であるが、次に戰爭が各個人に對してどう云ふ作用をするかと云ふ事を考へて見ると、昔の戰爭のやうに一騎打で勝敗を決する、腕力か劍鬪とあまり變らないものであると[illegible]

[illegible]
[illegible]の[illegible]は主に腕力であり又見[illegible]性、排他性等云ふ屬性になり易い[illegible]である。比較的文化人であつた平家が蠻勇の源氏に滅ぼされたのを見ても明かである。

處が此頃のやうな戰爭となると、個人の差別に殆んど關する處でない。戰場に出たものは體力や智力の差別など全く問題でなく、毒瓦斯や爆發に會つては、人間の肉體などストーブの石炭の間に焦げる髮の毛ほどのものでもない。然しそれでも又個人間の差が問題になる事もないでもないが、それは徴兵の時に體力の甚だ劣つたもの不具白痴のもの等が殘されて死を免れると云ふやうな事で、即ち此頃の戰爭は劣つたものを殘して優れたものを亡ぼすと云ふ妙な淘汰をやるのである。或は又所謂擧國一致の名の下に、民族の中で最も獨創力に富み、最も思慮あり勇氣ある分子を×したり××したりする。歐洲戰爭でも此適例が方々の國にあつたが、之等戰爭の行ふ淘汰の逆作用の一である。

かやうに團體として見ても又個人として見ても、此頃の戰爭は決して人類の將來を幸するやうな淘汰作用をするものでない。

然しそれでも戰爭はたしかに人間に取つて生存競爭の一種には違ひない。然しそれは前の野鼠の例に比べると、昔の一騎打が鼠の同類の噛み合ひたら、近頃の戰爭は鼠チフスの流行か、強い鼠害の襲來のやうなものである。此後の場合の脅威は全般的で、個々個體間の差など問題[illegible]
[illegible]ように、人間に取つては最悪である。[illegible]年のやうにイ[illegible]が流行して人類の生命に危害を及ぼす時、又は害蟲が多く發生して農作の食料を喰害する時等國際的に之を研究し驅除する手段を取るやうに、今や人類は互に和睦して此共同の大敵に向はなければならぬ。人類の歴史あつて以來これほどの恐るべき敵は未だ曾てなかつた。正に

「人類が戰爭を滅ぼさなければ、戰爭が人類を滅ぼすのであらう」

而も此敵は人間の外より來らずして内より起つたものである。それだけ征服する事が難いに違ひない。或は悲觀論者の考へる如く、爭鬪本能は人性の髓心にこびりついたものでとても之を除く事は出來ないものであらうか。人類の運命はそれ程までに此本能に詛はれて同類鏖殺迄到らなければ止まぬものであらうか。今ある所謂文明人等は初め劍を持つて立つたがために、終に劍によつて滅びて此地球の上から跡を絶ち、其代りに他の點では聊か劣つて居ても、爭鬪本能のも少し少い人類が現れて其柔和である故に此地を嗣ぐやうになるのでなからうか。これでも確に適者生存であり自然淘汰である。人類の運命を脚色した劇がこれ程皮肉なものであるべきかどうか知らぬが、何れにしても自然は公平であり又假借する事を知らぬ。

鬪爭組織の社會形態と戰爭

長谷川如是閑

一

軍事專門家は、動もすれば戰爭のみが決して鬪爭の最惡のものでないといふことを云はうとする。彼等はいふ。社會には、戰爭以上に殘虐な鬪爭が行はれてゐる。「商業にしても、決して一般に考へられてゐるやうな平和なものではない。商業の成功とは何を意味するか？ 競爭者よりも安値で賣るといふことは、競爭者よりも安い生產費で生產するといふことだが、安い生產とは、今日では、他の條件が同一ならば、主として次の二條件に繫る。それは安價な勞働と、上等な機械とである。而かも、如何なる商業競爭に於ても、勝利を得るためにはどんなに澤山の生命が犧牲とされたかわからない。少しでも新らしい機械が出來れば、無數の稼ぎ人は失職群となつて、どんなに澤山の男や女や子供らが饑餓に陷つたかわからない。然し、これはたゞ勝利者の側の損害である。全產業を沒落させられた敗者の側の損害はどんなものであらう。商業によつて生じた損害數を正確に計算したら、恐らく戰爭によつて生じたものよりも少くはあるまい。實際、改良された機械は、水雷又は重砲と同じく破壞の機械である。水雷が艦船を破壞してその乘組員を海底に葬ると同じやうに、新機械は舊機械を破壞してそれを使用してゐる勞働者を驅逐する。都會は、恰も砲彈や爆藥で粉碎されたやうに、商業の損失及びその結果たる人口減少のために沒落させられる」云々。（ケンブリッヂの軍事史專門家フオーテスク教授）

二

日本の所謂軍事教育の當事者なども、右のやうな口吻で「教育」してゐるらしいことは、軍人が屢、そのやうな理屈によつて軍事行動が鬪爭の一樣式としては、露骨ではあるが、それだけ寧ろ罪惡の大ならざるものであることを說いてゐるによつても察しられる。

それは必ずしも誤つた見解ではない。私有財產制度に依る社會形態の出來た後の社會に於ける所有の爭ひ、言ひかへれば、社會人間相互の個人的乃至團體的利害の爭ひは、實際、あらゆる點に於て戰爭より

[illegible]斷不斷的で、所謂「不和」時代と雖も、或ちこの損害を續出せしめることを已めない。常に社會を惱してゐる戰敗者は武器による戰爭の犧牲者ではなく所謂平和的な經濟爭奪戰の犧牲者である「社會政策」とは決して戰爭の犧牲者を持て餘した結果の産物ではなく、平和時代の戰敗者を如何にすべきかの問題である。軍事專門家が、戰爭は鬪爭中の最も悲慘なるものではないといふのは、ある意味に於ては正しい。

軍人のさういふ見地――それ敢て軍人に限らず、多くの人が抱いてゐるであらう見地だが――は、常に悲慘な鬪爭の行はれてゐる社會に於て、戰爭のみが廢滅さるべき道理はないといふことを主張するのがその目的なのであるが、それは餘りにわかり切つたことで、社會が利害の無制限な鬪爭狀態にある以上、戰爭も亦その鬪爭の有力な一形式として續けられることは當然である。

社會の鬪爭狀態は、然しながら、決して人間社會に必然なものではなく、特にある社會制度に關聯したものであることは、近頃の研究者の一致してゐる點である。文明人は近代の始めに、航海術の進步につれて、頻りに野蠻人の領域を犯したので、その怒りに觸れ、屢攻擊されるので、野蠻社會は常に戰爭を事としたものであるといふのが、近代の始めに於ける想像であつた。即ち『自然狀態』に於ては人間は互に鬪爭するといふのが傳統的な見地で、ルソーのやうに自然狀態に於ては完全な平和が支配したといふのは寧ろ空想によつたのであつ[illegible]に明かにされるに及んで、守舊的見地は事實によつて論破されることとなり、社會觀念についての革命的變化が成立した。近代の社會觀念は、全く人間社會に關する科學的認識の發達によつて成立したものであつた。

それには種々の異なる特徵をもつた多くの思想系統があるが、それらを通じて一貫する傾向は、鬪爭組織としての社會の進化を承認してゐる點である。古來決して、社會は鬪爭に始終するといふ觀念のみが成立してゐた譯ではなく、多くのそれに反する社會觀念が存在してゐたが、然し、それは現にある社會の中心組織以外の過程を觀察又は想像する能力をもつた天才の思想で、社會そのものは、有史以來、鬪爭組織のそれをその主たる統制形態とした『國家』といふ形態がその最も完全したものであつた。だから國家形態を生活してゐる社會人は、觀念的逍遙の場合の外、非鬪爭的な社會を考ふることは出來なかつた。されぱこの時代に於ては哲人、新人等の非鬪爭的社會觀は、概して觀念的逍遙――頭腦の散步――であつた。

三

が近代になつて生じた幾多の非鬪爭的社會觀は、全くこの逍遙とは動機や性質を異にするものであつた。第一に、そのすべてが人類學的事實から選擇してゐるといふことだけでも――モンテスキューのや

うな新らたな社會觀をたゞ傳統的國家形態の型のうちに成立せしめやうとした人でさへも、その根據に人類學的事實をもつてゐた——その實際的の意味を推想せしめるに足るが、然しこの新しい科學的見地を近代人が獲得したのは、決して所謂知識欲といふやうな本能の作用ではなく、近代人の、從つて近代社會の生活の領域が、地理的にも、又行動的にも變化したゝめであつた。この生活領域の地理的の變化と行動的の變化とは、互に相待つて、近代社會の成立を條件づけたものだが、この二つの條件の細密な記述は、それこそ近代史の負擔してゐる浩大な仕事で、それを單純な文字でいひ現はすことは不可能である。けれども、それをある一つの角度から見た、その經過の中心傾向を約言すれば、闘爭形態としての社會に新らたな闘爭形式を運び入れたことであるといふことが出來やう。

中世の終りに於て、ヨーロッパの諸强國がその舊國家的經濟組織——即ち國內的及び國際的掠奪の組織——に於て全く行き詰りとなつたことを感じ出した時に、彼等の取つた新行動は、その掠奪の對象を、國內又は隣國に求めずに、言ひかへれば、既成國家に求めずに、當時まだ國家的範疇のうちに入れられてゐなかつた遠洋の諸邦に求めたのである。それらの國々は、當時にあつては、グロチユースのやうな國家道德家もこれを國家と認めず、それらの國々の人民はこれを人間と認むべきか何うかを疑つてゐた位であるから、ヨーロッパ諸國は、その掠奪の對象をこれらの方面に向けることを躊躇すべき何等の理由もなかつた。されば當時の國家は、相競つて遠征隊を組織し、西印度、東印度、南洋、極東の方面にその國家行動を發展せしめた。

四

かくの如き舊國家的行動が永久に、有效に、持續されたならば、決して前にいつたやうな近代的社會觀は何人の腦裡にも浮んで來る筈がない。何となれば、社會は依然として舊式の闘爭狀態——武器による掠奪——によつて組織立てられて行く筈だから、毫も社會の傳統的闘爭形式を疑ふ理由も必要もないわけである。國家は掠奪的遠征により、商人は海賊的貿易により、繁榮をつゞけて行くならば、社會の闘爭形式は、封建時代のそれと何の變はりもないに相違ない。

所が、最も大規模な國家的海賊組織たるアルマダの艦隊が破れて、海上の交通が比較的自由になつてからは、各國は、國家として、個人として、又海賊として、縱橫無盡にその遠征隊的行動を發展せしめた結果、一方では國家的範疇以外の諸國家の資源を枯渇せしめ、又、軍事行動の世界的擴大となつて、範疇國家の經濟を超越する困難に遭遇するに至つたと同時に、他方では、これらの新天地から掠奪することの代りに、それを開拓してその資源と勞力とを搾取することの利益が認められ、各國は、始めの掠奪獎勵に反して、漸次に、舊式の掠奪組織を禁制する態度をとるに至り、武力の濫用者は屢本國の叱責を蒙らねばならぬことゝなつた。イギリスが武力でインドを取りながら、そ

[illegible]
この過渡期の已むを得ざる結果である。
かくして掠奪が貿易の形に變化すると同時に、軍的遠征は、商業的遠征と變り、軍國國家は商人國家——資本主義國家へ——と變つたのであるが、この時期に於ける商人國家は、まだ大資本の獨占が始まらず、所謂自由競爭時代であつたから、獨占のための鬪爭、即ち商人國家の政治的領域を世界的ならしめたる組織——帝國主義組織——を必要としないので、何はさておき、商業の安全を妨げる戰爭に反對したものである。國內の組織が自由主義であらねばならず、國際關係が平和的通商であらねばならぬといふ時代がそこに成立した譯である。果して然りとすれば、その時代に於て、世界一般に、非鬪爭形態としての社會觀念の勃然として起つたのは蓋し當然のことゝいはねばなるまい。

五

それにも拘らず軍事專門家の說く通り、社會は依然として戰鬪形態として活動してゐる。のみならず、資本主義の國際化と獨占化とによつて、經濟的活動の範疇が國家を超越すると同時に、獨占的地域の爭奪が超國家的即ち世界的に行はれ、他人の國も自分の國も見さかへなしに、經濟的活動の舞臺とする必要から、一旦、商業競爭に化した鬪爭形式は、逆戻して、帝國家的鬪爭形態、即ち戰爭の大々的勃發となつた。で世界的の反動時代をもちきたしたわけであつた。

[illegible]その主たる鬪爭形態とする組織に[illegible]であらうか？ それに[illegible]る。
否、問題はそれではない。戰爭が必然の永久の現象か、何うかといふことは、畢竟、鬪爭形態の社會組織が必然か何うかといふ問題に繫つてゐる。
この問題は科學的にも空想的にも極めて複雜且つ難解で、目下盛に研究され、又研究を××××つゝあるが、然し、その歸決は甚だ簡單である。一言でいへばそれは鬪爭形態の社會組織を支持する階級の生存力が強いか、非鬪爭形態の社會組織を支持する階級の生存力が強いかといふ事實によつて決せらるべき事柄である。
然し、何がこの二つの階級の生存力の強弱を定めるか？ 問題はそこで再び近代的社會進化の歷史的事實に關聯して來る。かさうなると、やはり論及の時間が與へられてゐないので、これも一言で片づければならぬ。機械と勞働力とを中心とする生產組織によつて生存する社會統制に依賴せんとする階級が、これらの生產要具を非科學的に、反社會的に濫用する組織に立脚する社會統制に依る階級よりも生存能力に富むであらうことは、一二世紀前に、貿易による商業組織の階級が、掠奪による軍國組織の階級よりも生存力に富んでゐたことを示した歷史を見ても察しられる。

近き將來に大戰爭小戰爭の數々がそこかしこに起ることはあらう。然し闘爭組織としての社會形態の進化が見究められれば、戰爭の將來も見究められる。

戰爭と國民經濟

阿部賢一

英國人の食卓ほど珍味佳肴で飾られる處はないと云はれてゐる。成程そこには世界各國からの到來物が形と色と味の珍らしい競技をやつてゐる。英國人は世界のブルジョアとして飽くなき饗饌に醉ふたのである。然もその富の流入は過去三百年に亘つての戰勝の產物であつた。

英國の詩人——自から海員生活の經驗があり。米國では皿洗ひまでしたメスフイールドの「積荷」の詩がある。故厨川白村君の譯によれば

I

浪路はるかなオオフア（舊約聖書に出て來る金銀珠玉の產地）から
日うららかなパレスタインの港へと漕ぎかへるニネベ（昔のアッシリアの首都）の舩
積荷は象牙、珍獸奇鳥、白檀、杉材。また白葡萄のうまさけ

II

パナマの地峽より來り
棕櫚みどりする海邊を過ぎて熱國の海にひたれる西班牙の巨船
積荷には金剛石、綠玉、紫水晶、黃玉、肉桂、金貨のかずく

III

潮に汚れた煙筒の英國船
風吹きすさぶ三月の日を
海峽を突き進む
積荷はタインの石炭、鐵軌、鉛鐵、煉炭、鐵器、さては安價なぶりきの盆など

古代から、現代に至るまでの歐洲の海運の變遷を、そして經濟の發達をよくも短かく強く云ひ表はしたものだ。そしてまた潮と煤煙によごされた近代英國そのものの繁榮が、家庭の食卓に、室內の裝飾に、又商店の裝飾に映じたのであつた。そしてその貿易路は戰爭によつて

舞臺を世界に持つアングロサクソンが世界をテーブルとし、自ら客として如何に世界を味食したか。戰爭はその本能であつた。征服はその信仰であつた。マクゾーレルのジオンブルによれば英國人は植民すると必度二つのものを設ける。教會と運動場を、と。そしてその上に添へるユニオンジヤックこそは常にその得意とする巨棒の懸章であつた。

古くは海賊主義の戰爭から、近くは資本主義の最も直接なる、最も大びらなる且つ大規模の搾取の過程としての戰爭は英國の歷史が物語つてゐる。そして英國の勞働階級も世界掠奪の割前に與つてゐたことは云ふ迄もない。無論割前だから有り過ぎる譯はないが——。

併し役者は變り、舞臺は廻る。英國の資本主義的帝國主義が二十世紀に入つてから褪色を帶びるに至つたのは已むを得ない。特に世界大戰後に於ける英國の風向は、外では米國に押され、內では失業と不安に襲はれてゐる樣は戰爭に疲れたる幕府末路の面影を偲ばしめる。が、何は兎もあれ、英國の歷史は戰爭と經濟との一つの大きな連鎖を何物にも勝つて語つてくれるやうである。スペインの無敵艦隊を屠つてから、その實利本位の巨棒は世界の隅々までの寶を振り出す打手の小槌となつた。印度も濠洲も加奈陀も、さては南アフリカ、香港を足溜りとしての支那と云ふ風に一戰は一州を、一爭は一國を加へた。ただ下手に戰爭をしてアメリカを失つただけである。そして其のアメリカは今や金力で以て世界に金利貸的魔手を延ばさんとしてゐる。身を

戰爭と一口に云つても、それには種々の意義があるが、戰爭は作爲的に仕掛ける者があつての事である。

戰爭の原因は二つ。一は征服慾、二は實利の獲得である。とピグー教授は云つてゐるが、それもそうだ。併し近世の戰爭はこの二つが一つとなつてゐる。否、實利の獲得即ち經濟こそ戰爭の誘發動機である。無論戰爭を仕掛けるものが明らさまに經濟的利益の掠奪を標榜はしない。恐らく鬼神も三舍を避けるやうな烈辭壯語が列べられるに相違ない。

それが成功すれば儲けだ。この儲けの意思が獨逸の戰爭經濟學を生んだ。戰爭は元手入らずの生產である。もと〱國家そのものが資本だ。資本運轉の最も經濟主義に適つたもの、勞少なくして效多きものは戰爭である。勝戰は最善の生產であると云ふのがそれである。英國はこの意味での大商人であるがこの歷史的事實を經濟學的に理論付けようとしたのが獨逸のディーチェルその他の學者であつた。世界大戰爭までの獨逸の一切の指導的精神はこれであつた。戰爭に勝てば敵の植民地はこちらへ來る。その富は凡ゆる產業を繁榮せしめるだらう。それに賠償金でも存分に取れれば……と取らぬ狸の皮算用とかで一切の軍國事務を經營したのであつた。この超樂觀思想は財政々策にも現はれた。何も國民の膏血を絞らなくても、國民に花を持たし公債を持

たして戰費を調達しよう。國民に苦痛や迷惑をかけずに速刻歐洲中原を平定し、徐ろに英帝國分割の策を講じようと云ふ腹であつた。一つの思惑である。ところが思惑は向ふから外れて、却つて獨逸國民は列國の餌となり終つたのである。世界大戰で最もよき取引をしたものは何と云つても商人英國だ。その代りにもつと恐るべき敵を海の彼岸に祭りあげたとは云へ――。

× ×

肥肉は常に豺狼の狙ふところとなる。豐饒なる土地、底知れぬ鑛脈、汲んで盡きない油田、涸れしない森林等々は直接に狙はれるところである。そしてこの肥肉が新鋭の武器によつて國々から料理せられたのは十九世紀以前である。それ以來はアフリカを舞臺に、南洋を舞臺に、更には支那を中心に、同一物を狙ふところの列強の鬪爭は殆んど周期的に行はれたのであつた。

然もそれは單なる肥肉の爭奪ではない。已むに已まれぬ人口増加と經濟的生産力の發達に押されて然るのである。

人口數の膨脹はその出口を求める。それは創世紀以來の原則であり、又その故に部落間に戰爭が起りもしたであらう。併しながら經濟の發達は取りも直さず一定地域により多くの人口を養ふことである。都會が多くの人口を養つて行けるのはそれだ。商工國が農業國よりより人口を包擁し得るのはそれである。經濟の發達は、それ故に、人口の捌

である。併し人口の増加よりか資本の蓄積過程の進行は、あらゆる理窟と人情を乘り越へて前進するの追進力を有してゐる。金融資本は自由に國境を越へ皮膚の色の相異を越えて何處へでも利益と安全を求めて動くから多分に國際的ではあるが、それが何かの特定の事業に投ぜられて産業資本となれば、例へば製造工業とたればその資本の性質は金融資本のやうに融通無礙のものではなくて一個々々の商品となつて出來上り、恐ろしい競爭場裡に自身を見出す性質のものとなるのである。その事業を護る爲には國家の保護も必要とする。海外市場を確保するためには戰爭も辭するところでなくたる。生やさしいところで關税戰爭の危險が横はる。

いやそれ計りではない。戰爭によつて多くの壯丁が犧牲の祭壇に上らせられる他面には、軍神のお蔭で陰にひそかに私腹を肥す者もあると云ふことである。世界大戰、それは一千萬を越ゆる人間を殺し民衆を塗炭の苦痛に投じながら如何にそれが少數企業家の致富に役立つたか。謂ゆる成金階級はその證據ではなかつたか。――つまり軍需品製造業者や陰然の運輸業者の××××××したところの×××××や×××の××は經濟的先進國に於て最も注意しなければならぬ點である。かく資本家的社會に於ては、資本の力に人間が弄ずられて血を見るに至る危險がある。然も民衆は與らずに――。

× ×

[illegible]
草後一部民のお國家の特色を私は輕蔑しようと云ふのではない。決してそうではない。併しながら民族的國際性と資本主義的進出力の相縫ふところ、中陸に、また東洋に戰禍の豫感を懐かしめないであらうか。この意味で現代の世界で戰爭に緣のありそうな國は何國であらう。小國は別として大國だけについて云へば、まづ米國、英國、佛國、伊太利そして我國であらう。獨逸や中歐諸國は手足を捥がれてゐるから戰爭の力がなく、露國は內政のためにウッカリ外に戰を起すことは出來ない。たゞ內には莫大な豫算を國備費に割きながら外に經濟的發展を餘儀なくされてゐる國々はまづ以上の五ヶ國であらう。そして將來の戰爭の危險がこれ等の國々を見舞ひつゝある。

併し戰爭は經濟的に大投機である。しかも戰爭が物的利益や經濟的厚生をもたらして、民衆をもその餘澤に浴せしめることの出來た時代は去つた。領土割讓は今日の世界の輿論と列國の猜疑が許さなくなつて來た。代償なしに賠償を掠取することは許されない時勢だ。大戰以前の戰爭經濟學はその權威を全然失墜してゐる。

大戰以前には、世界各國の經濟關係があまりに密接であるから戰爭は不可能であるとなす論者、例へばノルマン・エンゼルが多くの賛成者を持つた。にも拘はらず大戰は自然の破壞力として起つたが、その大戰は尠なくとも戰爭は儲けにならぬといふことを證明するに役立つた。敵も味方も傷ついてその苦痛から戰後十年にして尚ほ癒へない。

[illegible]し[illegible]たところの[illegible]大なる[illegible]と、それに[illegible]、[illegible]度の機械と、物價の騰貴と、[illegible]の増加と、[illegible]頽廢と、物質文明の失敗とではなかつたか。然も今や何の備への世界大戰であつたかを反省すべきに拘はらず、次の戰爭を性懲りもなく準備しつゝあるが如くである。

× ×

我國の經濟は一戰毎に飛躍的發展を遂げたことは事實である。御維新で自身の殼を破り、日清戰爭で世界に於ける自己を發見し、日露戰爭で資本家的經濟の一躍を見た。世界大戰によつてまづ漁夫の利を占めた。それも一朝の夢ではあつたが——。

戰爭はわが資本主義經濟組織の發育の苗圃であり、×××××の××はその××であつた。その、お蔭によつて世界の番付にでも幕內の金持大名を造り上げたが、わが民衆の生活も慥かに多少の向上をなしたのであつた。

併し柳の下にいつも鰌がゐると思つては間違ひだ。すでに世界は萬里隣前であつて、あらゆる交通々信の機關は昔の一國を一村に、昔の世界を一國に縮めつゝある。世界の眼があまりに多い。夜郎自大で以て、武を經濟の一手段であると考へてゐては危險此の上もない。戰爭經濟と刀が分業化しなければ世界相手に自己の經濟を伸張することは六ケしい。

ナイフを持てば一寸机の端でも切つてみたくなる。空氣銃でも持てば猫でも打つてみたくなる。武器は兇器であると共に凶器だ。凶器は魅力を持つ。之に人は囚はれる處がある。理に基かない武器の運用は自からを損傷するに終るのである。

戰爭が國民經濟に與ふる影響の現實は、戰爭によらざる生活の發展を考へさゝずには措かないのである。

列國海軍の情勢と太平洋問題

海軍中將　左近司政三

一、列國海軍の情勢

人類の生活様式と、人種民族間の優越感と、宗教が現在の如くである間は、如何に理想的な平和論が唱導されても、それはむしろ一個の空想に過ぎないのみならず、理想と現實との間には、常に非常な距離のあるものであることを考へる時、吾人は衷心から、世界の平和を翹望する點に於て、敢て人後に落ちるものではないけれ共、然かも國家自衞の方面から見て、ある時機の完全に到達するまでは、到底軍備を怠る事の出來ないことを痛感するものである、まして現在の如く、物質的文化の進步に伴なひ、世界の距離が時間的に縮少せられ、地下の物資が無制限に使用せらるゝと共に、自國民のあらゆる要求を滿足せしめ[illegible]

展とに汲々たる狀況に在るを思ひ、かつ、過去三千三百年間に、戰爭の絕無たりし事が、僅かに三百年内外に過ぎざる、嚴然たる事實から歸納するも、吾人は、國家の存立と自己の生存發展とのため、必要なる國防機關の充實を忘るべからざるは、自明の理であると思ふ。國際聯盟や國際司法裁判所の如きものが、絕大なる權力を有し、世界のあらゆる國家が、之れに加盟し、之れに服從し、然かも當路者が眞に人道的宗教的立場に立ちて、各國が何等の野心を包藏する事なく、世界に眞個の平和が樹立維持せらるゝに至らざる限り、吾人は眞に自己防衞の力のみは、如何なる場合にも、完全に具備して置かればならぬとおもふ。

然して翻ッて歐洲大戰後より、現在に至るまでの、列國海軍の情勢[illegible]

[illegible]

は、[illegible]の[illegible]との一戰に[illegible]する[illegible]に[illegible]る[illegible]。さらば、[illegible]の[illegible]の[illegible]は[illegible]。

英國

華府會議によつて、米國と對等の主力艦を有するに至つた英國は、既に二ヶ國標準の建艦政策を執るの必要もなくなつたのみならず、一面に於ては、一國標準に甘んぜざるべからざる國情並びに歐洲方面に於ける情勢の變化より、多大なる戰艦を有するに及ばざる事となつたため、勢ひ補助艦、特に巡洋艦に於て、絕對優勢を期せんとするは、世界に跨る殖民地や、屬領島嶼の保護をはじめ、外國との交通貿易等の關係上、誠に無理からぬ問題にして、かの壽府會議に於て七千五百トン、六吋巡洋艦を主張した所以が、如此意味に於けるものなるを思ふ時、吾人は我國情に鑑みるも、英國のため頗る同情に堪へざる處であるが、然し太平洋に絕大なる利害關係を有する意義に於て、英國が、其の將來を慮つて、新嘉坡に大根據地の建設を行ひ、昨年十月、既に大洋艦隊の到達を見、本年よりそれを使用し得らるべきのみならず、他の主要工事も既に着々進捗中なるを見るのは、「英國の太平洋に於ける利害關係は大きい、英國の將來に於ける役目は、英帝國の基礎を固めると共に、支那をして、その獨立を遂げしむることである。此意味に於て、新嘉坡は特に重要である。吾々は此處に大なる船渠と、石炭貯藏所を設けて、基礎を固めなくてはならぬ。新嘉坡は一方英國が極[illegible]い[illegible]つた[illegible]に[illegible]して[illegible]ることは出來ないのである。

又一九二五年より、五ヶ年計畫を以て建造を開始した補助艦艇は、前計畫起工又は竣工し、現在に於ては

巡洋艦	八隻	驅逐艦	九隻	潛水艦	十二隻
其他	八隻				

は起工濟にして、大部分は本年完成すべく、

巡洋艦	五隻	航空母艦	一隻	驅逐艦	十八隻
潛水艦	十二隻	其他	七隻		

は、何れも近く起工せらるゝものとおもはせる、

かくして、壽府會議の決裂に伴なひ、舊式諸艦艇を廢棄して、新式艦の改造や、新式兵器の採用や、教育制度の改善等によつて、內容の充實及能率の增進に努めて居るのは、流石に光輝ある傳統を有する英國海軍として、目覺ましいものがあるのみならず、航空方面に於ても、著しく其勢力を充實して來た。特に、「サルモンド」空軍中將が調査の結果提出した意見によると、濠洲の空軍擴張は、素晴らしい程度のものとなるかも知れない。九ヶ年後に完成の曉に於ては、現在に於ける經常費の、五三一、〇〇〇磅に比して約一、一八三、〇〇〇磅を要する豫定だといふ。亦以て其一般を推知するに足らう。

米國

歐洲大戰中世界第二位の海軍力を有した獨逸が慘敗の實績から見て、何れの國にも劣らざる海軍を建設せむことに苦心せる米國は、華府會議後

一、所謂五五三の比率を、各艦種充實計畫の基礎とす
二、艦隊の訓練を勵行し、特に大部隊の太洋作戰と毎年一回の大集合訓練
三、艦隊根據地等の整備擴張
四、艦隊附屬航空隊の擴張
五、毒瓦斯、航空機、其他新兵器の研究改良

等に異常の努力を拂つて來たが、壽府會議の決裂を見るや、一昨年十二月十四日、米海軍卿は、突然、

一萬トン巡洋艦	二十五隻
嚮導驅逐艦	九隻
潜水艦	三十二隻
航空母艦	五隻
總計	七十一隻

を、七億二千五百萬弗を以て建造せむとする大擴張案を提出した結果、下院の大修正を經て、巡洋艦十五隻、航空母艦一隻を、二億七千四百萬弗を以て、三ケ年間に建造するに決し、遂に下院を通過し、昨年五月三日上院に提出された。然るに之は重要なる他の國內問題もあり、一部平和論者の反對もあつて、次期議會まで延期さるゝに至つたもの丶、米國が如何なる抱負を以て、かくの如き大計畫を提出したかに付つては、壽府會議決裂の前後關係より見るも、蓋し想像に難くはないが、米國の立場及四圍の地理的關係から洞察すれば、むしろ當然の歸結ではあるまいかとも思はれる。かの英佛海軍協約問題に對して不同意を唱へ、遂に去る十一月十三日、英國首相「ボルドウヰン」をして、議會に於て、

「英佛海軍協定は、壽府に於ける軍縮會議が、全く行き詰りに陷り、延て軍縮事業全體をして危殆に瀕せしめむとした空氣を打開せんとする、正直且率直なる意圖に出たものなりしが、右協定は失敗に歸したるを以て、今一度始めより遣り直す必要あり」

と聲明せしむるに至つた關係を思ふ時、吾人は、英米間の之等の經緯に就て、更に顧みる處がなくてはなるまい。

佛國

地中海西部に於ては、伊太利、西班牙の南部海軍に對し、北海太西洋方面に於ては、主として獨逸海軍の復興に備へねばならぬやうな立場に在る佛國海軍は、之等各國の海軍政策に變化なき限り、主力艦の如きは、當分其建造を中止し、全力を補助艦勢力の充實に注ぎ、特に潜水艦艇、航空機を以て、水上武力の缺を補ひ、最も經濟的に實効を收めむとして居るもの丶如く、大戰後

一、航空隊の大擴張
二、[illegible]、[illegible]タンクの新設

三、[illegible]
等を根本方針として、一九二二年より、一九二六年に亘る第一期計劃により、約三十四隻の補助艦艇を建造し、更に一九二四年より、一九三二年に亘り、第二期計劃として、巡洋艦六隻、驅逐艦三十九隻、潜水艦三十二隻、其他合計九十二隻の建造計劃を有するのみならず、外に十七隻の沿岸防禦用潜水艦をも建造中である、亦以て佛國の意氣込を察知する事が出來るとおもふ。

伊　國

ムッソリーニ首相の英斷が、あらゆる方面に徹底的手腕を表はせるは目覺ましいものであるが、海軍の方面に於ても專ら力を補助艦の增勢に注ぎ、一九二二年より、一九二八年に亘る五ケ年計劃の建艦に對し、一億八千萬利內外の經常費と、一億八千三百萬利の臨時費とを以て、巡洋艦五隻、驅逐艦潜水艦各二十隻宛及び其他のもの若干を建造中の處、一九二七年三月に至り、該計劃の一部を變更し、既定計劃による一萬トン未起工巡洋艦三隻の代りに、五千トン級四隻を建造するに決したのみならず、驅逐艦も千三百五十トン級未起工の分は四隻の代りに、二千〇十トン級十二隻を建造するに改め、潜水艦に於ても、機雷敷設潜水艦一隻を增加した。從つて、一九三〇年頃之が完成の曉に於ては、巡洋艦六隻、驅逐艦二十八隻、潜水艦二十一隻の新銳なるものを有することゝなる筈である。

日　本

[illegible]
華府會議の精神及條文を最も忠實に履行し、一部の艦[illegible]、一部のものには、時世の進運に伴なふ改良を加へ、又八八艦隊附屬の補助艦計劃にも多大の變更を加へ、巡洋艦、驅逐艦、潜水艦及特務艦の合計噸數に於て、約二萬七千噸を削減したのであつた、即ち

七一〇〇トン級巡洋艦	四隻	
一〇〇〇〇トン　同	四隻	
驅逐艦	十四隻	
計	二十二隻	約九萬噸

であつて、華府會議の決裂後も、何等の變更を加へずして曩に議會の協贊を得る補助艦補充計劃をも遂行中である。此補充計劃なるものは、二億六千餘萬圓を以て、五ケ年間に、巡洋艦四隻、驅逐艦十五隻、潜水艦四隻、敷設艦一隻、航空母艦一隻、砲艦二隻、計二十七隻を建造せむとするもので、勿論英米等との造艦競爭を意味するものではなく、單に老朽により落伍する舊艦の必然的補充であつて、我國は、平戰兩時を通じて、國民生活の必需品及其の原料たるべき諸物資の輸入を絕對に必要とする關係から、主力艦の耳目となつて、直接戰鬪に從事する補助艦以外に、猶交通貿易の安全のため、有力なる補助艦を要するからである。換言すれば、他の國の如く、自國の威信のために要する海軍でなく、前既に述べたやうに、偏に國家國民生存上の要求に應ずる爲めのものであるからである。かの華府會議に於て、英

國が、優大なる交通線保護の爲めに、補助艦特に巡洋艦の絕對優勢を主張したそれと同意義に於て、むしろ英國より以上に、我國は補助艦を必要とする國情に在る事を知るならば、如此補充計畫は勿論絕對に必要なものであることを諒得すべきであらう。

二、太平洋問題

歐洲大戰を一轉機として、列國の「バランス・オブ・パワー」に一大變化を生じたるのみならず、華府會議を經て、日英米の海軍力には、其の移動兵力の上に制限を生じ、屬領島嶼に防備制限區域を制定せられ、加ふるに日英同盟の自然的消滅によつて、太平洋には新たなる問題が擡頭して來た。而して殆んど其中心とも認めらるべき地理的關係に在る我國は、同時に又然かも往古より特別なる關係に在る友邦支那を隣りに控へて、益重要なる地位に立つに至つたため、我國の海軍が一層重大なる責務を有するに至つた事は、國民が特に考慮せねばならぬ點であると思ふ。

殆んど世界第一の海軍となり、亞細亞人の移民制限を敢行した米國が、今正に支那の門戶開放に向つて、あらゆる力を集注し、且支那との交通貿易に、偉大なる發展を見つゝある時、八十年來支那の內地に大勢力を扶殖し、之を其對外貿易の大々的得意先きとせる英國との關係を考へ、且附近の距離に在りて、貿易上有利なる地理的關係を有する我日本との所謂三大海軍國が、太平洋上に於ける相對的關係は、何と云つても、回向院の大相撲の如くであらねばならぬ。

試みに地圖を披いて、仔細に太平洋に於ける我國と各國との、地理的情勢を熟視し、且、太平洋を取圍める各國、及び洋中に散在せる各島嶼に於ける列國軍備の施設を考究し、靜て我國の國情をおもへ、いやしくも、國家の存在と發展とを希ふものたらんには、誰か此重大なる關係に、悚然たらざるを得るであらうか。

歐洲大戰後、太西洋艦隊の勢力を極めて微弱なるものたらしめた米國は、艦隊の大部分を太平洋に集中して來た。其爲めに要する軍港要港の施設には、改善に改善を加へ、優に太平洋を橫斷して其勢力を洋上全般に擴ひはじめたのである。

かの「メーヤーアイランド」「プレマートン」「パナマ」「サンデイエゴー」等の軍港は勿論、桑港より二千百浬を隔つる前進根據地たる布哇「オワフ」島の眞珠軍港、及、それより東洋方面に向ふ線上には、「ミツドウエイ」並びに之れより二千三百浬を隔てゝ「ガム」島がある、更に千五百浬にして「マニラ」に達する。之こそ支那方面へ發展の足掛りともいふべきもので、灣內の「カビテ」「コレキドル」に海軍根據地の設備を有し、堅固なる要塞を以て圍まれて居る。卽、桑港を起點として、布哇、「ミツドウエイ」、「ガム」を經て北島に至る點石を以て、太平洋を橫斷連絡し、加ふるに「サモア」及び「アリユーシヤン」によつて、其南北を包圍して居る。

英國を見れば、有名なる大軍港香港の南方には、新嘉坡の軍港擴張

[illegible]「スエズ」「アデン」「コロンボ」等、[illegible]に面する諸港によつて、亞細亞連絡の鎖環を掌握して居る有様に、むしろ羨ましい程である。而して我領土は、僅に、「香港」「マニラ」の線を底邊とせる正三角形の頂點に位して居るのである。

もしそれ、東洋に於ける列國艦隊の平時的勢力を以て、直ちに我海軍の現勢力に比較し、列國本土の海軍力は、所謂長鞭馬腹に達せざるものと思惟し、我海軍のみ、獨り四邊を睥睨するの偉觀を有するが如く安心するものありとせば、それは思はざるも甚しきものと言はねばならぬ。抑も海上兵力の特徴は、其の無限なる移動力である。日露の役に、かの「バルチック」艦隊は、何等の根據地を有せざるに拘はらず、能く一萬八千浬の波濤を蹴破して、東洋にまで進出して來たではないか。況して、前述の如き點在を有する艦隊は、如何に堂々として、要する地點に殺到し來り得るかは、言はずもがなの事である。

故に、縱令、防備制限地區の設定ありとは云へ、主力艦に於て五對三の比率に制限されたる我海軍が、國家自衛の見地と、領土の狹隘と、人口の増加と、人口稠密の濃度と、資源の貧弱と、海外發展の關係と、通商貿易の保護増進等より見て、如何に補助艦の充實を要すべきかは、むしろ議論の餘地なき問題といふべきであらう。補助艦を以て、單に、戰鬪的任務のみを有するものと考ふるが如きあらば、それは大なる誤りである。其平時的任務が、前述の如く重大なる方面に在るのを知らば、太平洋に於ける列國海軍の對立が、我國に及ぼす影響は、只に

[illegible]どれだけ苦しむことであらう。[illegible]「エムデン」一隻が南洋方面に暴威を振つた時、我財界には如何に大きな動搖があつたであらう。文化生活や軍事需要品として欠くべからざるゴムは何れから輸入されつゝあるか、棉糸、羊毛、石炭、油、米、麥、鐵、ニッケル、木材、肥料、藥品等殆んど衣食住の原料は、何れの方面から、如何に莫大に輸入されつゝあるか、然して一朝此輸入が杜絶せば、吾人は何によつて生き、何によつて立たむとするのであるか。

要するに、太平洋の問題は、殆んど日本の死活問題であつて、言換すれば、海上權掌握の有無が、吾人の存否を決定するのである。

茲に於て吾人は、衷心より、列國との平和を熱望するものであると同時に、我國の存立上必要なる程度の海上武力は、常に遺憾なく整備せざるべからざるを主張するものなのである。巨額の軍事費を要するといふ點よりのみ立論して、徒らに軍艦の建造を不生産的なりとするが如きは、柄の半面をのみ見たる偏見である。我貧弱なる國力を以て、三大強國の一に數へられ、僅に同向院の大關的位置に在つて、押しも押されもせぬ強國的威信を有する所以のものが、只三大海軍國の一なりといふに胚胎せるのを思はゞ、「サイレント、プレッシュアー」の威力が、如何に大なる影響を、我國家と國民の上に及ぼせるかの實情を知るを得べきであらう。太平洋問題は、單に海軍のみの問題ではないけれ共、最大なる交渉を有するものが、恐らく、海軍力の如何であるのを痛感する爲め、敢て此言を爲した所以である。

改造社に寄す



『理想に向つて進み、現實を理解せよ！』

こは我らが大ジョオレスのなせる遺範である。

而して、また、これこそは何處においてもかくある可き我らの針路であらねばならない。

理想に向つて進めよ！そは我らの一致を意味する。日本人も、ヨーロッパ人も、あらゆる人種の民族が同じき信念と社會正義を確立せんとする同じき意志をもつて、偉大なる人類の平和を遍照せしむることである。この高遠なる目的を間斷なく披瀝し、我ら一切の日常行爲をそれに從屬せしむることである。

現實を理解せよ！　そは眞心をもつて傳統と、慣習と更に勞働し辛苦するあらゆる民衆の苛酷なる條件の理解につとむることである。而して、この相互の認識の上に友愛的な信頼を築き、その信頼によつて凡てを同じきレベルの正義と文明にまで引きあげることである。

もし、我らにしてこの範に忠ならば、玆に我らの使命は有効に果し得ること必矣。

於東京、一九二八年十二月十日　アルベール・トーマ

Pour Kaizō Sha

« Aller à l'idéal et comprendre le réel! »

C'est la formule que nous a léguée notre grand Jaurès. Elle doit être, ici comme partout, notre règle de conduite.

Aller à l'idéal! C'est-à-dire : nous unir tous, Japonais, Européens, peuples de toutes races, dans une même foi, une même volonté d'établir la justice sociale, de faire régner la grande paix humaine ; nous efforcer sans cesse de mieux définir ces notions et leur subordonner tous nos actes quotidiens.

Comprendre le réel! C'est-à-dire chercher à comprendre sympathiquement les traditions, les moeurs, les dures obligations de tous les peuples qui travaillent et qui peinent ; fonder sur cette connaissance mutuelle une fraternelle confiance et par cette confiance, les élever tous vers le même niveau de justice et de civilisation.

Si nous sommes fidèles à cette règle, nous remplirons efficacement notre mission.

Albert Thomas

10 décembre 1928
Tokyo.

自傳的に見た日本社會主義運動史（一）

堺利彦

目次

『改造』に連載する機會を與へられた。後それは（大正十五年九月）單行本として改造社から發行された。然しそれは私の自傳の前半に過ぎなかつた。そこでその後半が、こゝに今、こうした形を以て出現する機會を得たのである。

最初、私は「この自傳が、明治大正の社會史として、社會運動史として、多少の意義あれかしと望んで」置いた。そして又、『前半』の序文に「『後半』は自然、社會主義運動史になるわけ」だとも書いて置いた。そこで今この『後半』の表題が、『自傳的に見た日本社會主義運動史』となつた。

私は『堺利彦傳』の序文に、クロポトキンの自傳に序したブランデスの言葉を引用して置いた。「この自傳の著者は自己を語る事を好む人物でない。この自傳の中には、自分の姿繪を眺めるといふ趣きが少しもない。懺悔もない。感傷もない。惡たれもない。自分の罪惡も語らないし、自分の美徳も語らない。彼は讀者に對して卑陋な打明話をしな

[illegible]

サリしたクロポトキンの『懺悔』が、私など…[illegible]…かない所である事は、同じく私が『傳』の序に書いて置いた。

從つて私のこの『運動史』は、『自傳的に見た』と云ふばかりでなく、甚だ多くブランデスの皮肉な嘲笑に値するものになるだらう事を私は恐れる。『自分の醜姿を眺めるといふ甘い所も澤山あるだらう。好んで自分を語るといふ馬鹿な癖も屢々出るだらう。多少の懺悔、多少の感傷、多少の甘たれもあるだらう。卑陋な打明話も出て來ないとは限らない。それでゐて、僞善、修飾、辯解、隱匿の數々もあるだらう。』私はその通り『傳』の序にも書いて置いた。然しそれがそのまゝ、一個の小人たる私としての眞實であるなら、何とも致方がない。

兎にかく私は、成るべくありのまゝに、成るべく無益な事を省いて、この自傳的運動史を書いて見ます。

昭和三年十一月末、堺利彥。

一　あこがれの萬朝報

明治三十二年七月一日、私は黑の絹セルの脊廣――生れて初めての洋服――を一着して、あこがれの萬朝報に初日の出勤をした。年正に三十。精密には廿八年七個月。月給四十圓。事務の擔任は當分の所、『三面の雜報』或は『軟派の手傳ひ』と、文學評論。別に『懸賞小說選評委員長』を仰付けられた。社長黑岩周六氏が、それより數日前の初見參の時、『その一癖あるべき面魂を以て、然しながら頗る瀟洒た明晰を備へ、[illegible]得るを待て』と書かしたこと、『堺利彥傳』に記した通りである。是も仕方なし、姑らく隱忍すべし。』私は日記にそう書きつけた。

七月三日の萬朝報に私の『入社の辭』が載つてゐる。可なり氣取つた物の言振りである。『予今新たに萬朝報社に入る、萬朝報社に於ては固より一毫の重きを加ふるに足らず、然れども予としては讀者に對する當然の責任なかるべからず。萬朝報社員としては、予は萬朝報社の機關の一部として、萬朝報社の目的を達するに努めざるべからず。然れども予一個人としては、別に文士として社會の一員たる當務を盡さゞるべからず。今後予が萬朝報の紙上に於いて、果して何等の事を爲すべきかは、豫め言ふ可らず。只以上の見を以て進退の節と爲さんと欲するのみ。』（堺枯川）さぞ小生意氣に見えた事だらう。

當時の萬朝報社は東京市京橋區三十間堀町三丁目一番地の角、今の後藤金庫支店の處にあつた。外見はチョットした二階建の西洋館だが、內部はずいぶん汚ない、總て薄暗いやうな、一個のあばら家に過ぎなかつた。昔、少年の時、神田淡路町の如何にも汚ない共立學校で、この廢墟の中から英傑が生れるのだと、若い大學生の教師からおだてられて、その汚ない事に却つて感激を持つやうな氣分になつた事を思ひ出した。こゝでは今、この汚ないあばら家が、一世をヘイゲイする萬朝報社として、却つて私のあこがれをそゝるのであつた。

編輯部は三十疊敷ばかりのスリキレ疊の一室で、そこに數十個の小机を三區劃にして置き並べ、硬派、軟派、探訪（或は三面外勤）と呼ばれた三種の記者達が窮屈そうに坐つていた。暇な時には、その位置のまゝ仰向に寢ころんだりして居るのもあり、或は戯むれに、うしろの人と脊中をコツキ合せたりして居るのもあつた。硬派の豪傑幽府眼君と、軟派の愛嬌者水谷幻花庵君とが、よくそのコツキあひをやつてゐた。この編輯部を見おろす樣にして、一つの橫長い漢文の額が掛つてゐた。『眼に王侯なく、手に斧鉞あり。』これは『朝報』の社會に對する態度として、屢々引用された字句であつた。その字體が又頗る勁拔であつた。

萬朝報は元來、『よろづ重寶』といふ極めて通俗なしたしみやすい一面を持つと同時に、又『マンチヨウ』の『毒筆』として、謂ゆる『惡辣』な一面を持つてゐた『蝮の醜六』とすら呼ばれた黑岩氏は、恐喝の常習犯であるかの如く目されてゐた。殊に私の兄が萬朝報にはいりかけて居た時、『君子之に居る、何の陋か之れあらん』と云つて居た事を私は覺えてゐる。そんな負惜しみの減らず口でも叩かないでは、まだその頃、マンチヨーにはいる事が、世間體として餘りカンばしくたかつたのである。その萬朝報が漸く勢力を得るに從ひ、曾ての『惡辣』が今は『峻烈』として威嚴を持つ事になつて來た。萬朝報は遂に幸田思軒氏を記者に聘して、大いに信用を博し、名聲

黑岩社長は漸く新人物の採用に依つて萬朝報の氣品を高めようと苦心した。『宗教界の奇傑』と稱された內村鑑三氏が、遂に呼び迎へられて朝報記者の席に就いた。內村氏と黑岩氏とには、峻烈の一面に於いて相通ずる所があつたと思はれる。何しろ萬朝報は內村先生の入社に依つて大なる面目を施した。私が萬朝報にアコガレを持ちはじめたのも、その頃からであつた。

二　朝報記者の顏ぶれ

私の入社した時、硬派の記者としては、小林醜二郎（天龍）、圓城寺清（天山）、幽府種德（犀東）、內藤虎次郎（湖南）、久津見息忠（蕨村）、幸德傳次郎（秋水）等の諸君があつた。小林君は朝報社の元老で、善く云へば磊落無礙、惡く云へば懶惰頽廢の俗人型で、何でも頻りに大きく吞込む癖があつた。私もこの人から色々將來の事を吞込まれて入社したのであつた。『宜しい、僕が決して惡くはしない。今度は實際、人の爲に官を設けた形だからね』などゝ私は望を寄せられていた。彼は『小バ醜二』と呼ばれ、又『大頭氏』と仇名されていた。彼が爛醉して、その不釣合に大きな頭を振り立てつゝ、自慢たら〳〵、何か頻りに辯じて居る時など、それは實に愛嬌ある滑稽の奇觀であつた。圓城寺君は進步黨系に屬する、早稻田出身の政治家で、風采堂々、顏廣く、色白く、洋服はフロックコートに限り、和服ならば必ず五つ紋の羽織

[illegible]異は、フロックのズボン[illegible]一[illegible]事[illegible]、そしていつこ
も靴の代りにスリッパ様の物をはいて居る事であつた。これは彼が職務上、社から人力車を給されて居たので、殆んど全く徒歩の必要がないのと、諸方で靴をヌイだりハイたりする面倒を省く爲であつた。そしてそれらが總て、鷹揚な品格ある、紳士らしい態度と考へられて居たのである。天龍、天山の二君は『兩天』と稱されて居た。それほど二君は有力だつた。

ついでに、社給の人力車と云へば、松村某君の如き、經濟部の外勤といふ職務上、常に一人の車夫をかゝえ、氣のきいた洋服姿で得々として出入して居たが、その車夫の月給と旦那の收入とが、正に同額の廿五圓であつた。つまり松村君は社から五十圓貰つて、その半分を車夫に與へて居たのである。これは正に、石田三成が島左近を抱えた心意氣にホウフッたるものだなどゝ、同僚から冷かされたりしていた。

それから國府犀東君は東洋的の豪傑肌であり、内藤湖南君は支那風の學者質であつた。共にキックツな漢字、漢語、漢文を弄する事を以て有名であつた。ステーションの事は『車站』と書かれていた。

久津見蕨村君は政治、文學、教育、宗教、哲學等、多くの方面に於ける可なり大膽な自由思想家であつた。彼は全くの獨學者であつたが、英文の書物は相當らくに讀めていた。彼は私に取つては、大阪以來の先驅であつたが、初め彼を、ずいぶん甚だしい失意の中から萬朝[illegible]引きあげたこともあつた[illegible]に立つたのだが、彼は決して、その文筆上の成就に於いて、彼を推薦した者をも彼を引きあげた者をも辱かしめなかつた。然し彼は生活上に於いても可なりルーズな自由主義者で、結局そこに何かの破綻を生じたわけだがそれにしても彼は幸徳秋水と共に、兎にかく當時の萬朝報に於ける新思想の代表者であつた。惜しいかな、三十二年の秋、彼は遂に朝報社を去るの止むなきに至つた。

幸徳秋水はその時既にほゞ明白な社會主義者で、私としては初から彼を第一のタヨリとして居た。彼は小男の土佐人で、私より一歳若く、何處か弱々しく見えるヤサ型の體質であつたが、その薄い茶褐色の顔色と、その切れの深い光る目とに、一種の凄味が現はれていた。

三十二年の春、萬朝報の新書略評欄に於いて、秋水は豐原又男著『資本と勞働の調和』を批評した。豐原氏は『故佐久間貞一氏（秀英舍社長）に從つて勞働問題を研究し』た人で、『佐久間氏の遺志を受けて此書を著』したのであつた。秋水は其の志を諒した後、然しながら勞資の調和は永遠の調和に非ず、勞働者が、、、、するまでの階段に過ぎずと爲し、著者が社會主義を排斥したのを批難した。彼は又同じ欄に於いて、村井知至氏の著『社會主義』を紹介した。實際この書は當時に於いて最も善き社會主義の宣傳本であつた。秋水は又『鐵道車掌の陰謀』と題し、東京馬車鐵道の同盟罷工計畫を評論し、その

教訓として、(一) 資本と勞働の衝突軋轢が長じ來れる事、(二) 私人をして公共的事業を特占せしむるより生ずる弊害の大なる事の二箇條を擧げた。又その頃、朝報紙上に於いて、沈冥子(實は厥村)と、大塊生(實は秋水)との間に、貧富問題の解決に關する、數回の論戰があつた。その要點を摘めば、前者は『富者の財を貧者に分て』といふ、『批評家の立場』であり、後者は『貧者を富ましむるの制度組織を立てよ、即ち社會主義を實行せよ』といふ、『勞働者の立場』であつた。

然し秋水にはまだその頃まで、舊式の策士風が可なり多量に殘存して居る所もあつた。現に私の日記の、三十二年十二月九日のくだりに左の如く書いてある。『近來益々幸徳と親しむ、幸徳は政治家を以て自ら任ず、此頃奇計を以て犬養と岡崎に說くと稱す』とある。そしてそれに私の批評が加へてある。曰く『自任は可也、功名に急なるは不可也、然れども亦其才を喜ばざる可らず。』私の批評にもミエがあるらしい。更に同年九月廿五日のくだりには左の如し。『昨夜、秋水と語る、秋水も亦功名に急なるもの也。彼外交史を著さんと欲して出版肆なきを憤る。曰く、是れ予が無名なる故也と。名を得んが爲に書を著さんと欲すれども、名なきが爲に出版するを得ず、是れ彼の資本なきが故に商業を營むを得ずと嘆ずる商人に同じ。』功名にはやる秋水も、それを非とする私も、實は同じく功名病の患者であつた。

又た經濟部の主任には高等商業出身の天城安政君があつた。天城君一切、知らん顏をしていた。只だ折々奇怪な一二句を放つて、獨ら笑つていた。私はこの人に笑はれるのが、いつも薄氣味わるかつた。外に英文欄の記者として、山縣五十雄、斯波貞吉の二君があつた。二君が又穩健な新思想のゼントルメンであつた。

軟派には大元老として有名有力の三木愛華君があり、次席元老とも云ふべき、溫厚の長者片山友彥君があり、前記の愛姬者水谷幻花庵君があり、キザの雄名を天下に馳せた、大ハイカラの松居松葉君があつた。そして私が一枚その間に加はつて、どうやら水に油の形であつた。少し後に伊藤銀月君がはいつて來て、銀色燦然たる、あの名文を見せた。外に、當時まだ一外勤として俊敏の氣を示してゐた松內則信君(後の『東京日日』の長老)があつた事を思ひだす。

內村鑑三氏はその頃、朝報社から離れて、東京獨立雜誌を發行して居たが、黑岩氏との緣が全く切れたわけでも無かつた。現に英文欄の山縣君の如きは、內村氏の系統に屬する人物だつた。

斯くて私はあこがれの萬朝報に入り、多士濟々たる同僚の間に立つて、『姑らく隱忍』して『其の處を得るを待』つ事になつた。

三　過渡時代初期の煩悶

朝報社に於ける私の仕事は、實際つまらないものだつた。縣賞小說募集に『何等かの生氣を吹入れよう』と、試みても、眼目だつた事よ

[illegible]
あこがれの萬朝報は早くも既に失望の萬朝報に變じた。少しく日記を檢べて見る『毎日出社、何かと落ちつかず、碌々日を送る。』『予は朝報社にて何事を爲せしや、自ら顧みて赧然たらずんばあらず、家事俗事、我も亦老いんとする乎。』『我萬朝報社に入りて既に百日ならんとす、そもそも何事を爲したる乎、……自ら忸怩たらずんばあらず。』『我は朝報社に於て何を爲すべき乎、朝報は到底久戀の地にあらず。』『三面編輯につき黒岩君の意見あり、今後時々集合相談するに決す、……今後は少し本氣にやらざる可からざるに至れり、……されど我は猶ほ多く氣乗がせざる也……三木、片山等、到底事を解する能はず。』『例の通り何事も出來ず、……萎微不振とは全く我身上の現狀なり。』『貴族院傍聽に行くこと止みになれり、朝報社若し永く我を馬鹿にせば我は久しく止まる者にあらず。』斯樣な小不平を以て此の年は暮れた。最後に黒岩氏に對する人物評がある。『黒岩、奢侈の風あり、又嗜好に耽るの弊あり、朝報社の成功は既に渠をして懈怠の念を起さしめたるか。』として又いよいよ終りに『到底久戀の地』云々が繰返してある。

『堺利彦傳』の結末に、私は次の如く書いて置いた。『あゝ堺利彦よ。……君には……可なり正直な心があつた。そこに君の「野心」が生じた。謂ゆる政治家を望まず、單純なる文學者に滿足せず、只の新聞記者でも物足らず、何か少し別にやらねばならぬといふ、少なくとも、小さな「立身出世」以上の「野心」があつた。』『君の平凡にして主我の徑路として多少の意義があるだらう。君の後半世に於ける[illegible]時代は、即ち右の如き……個人的の立身出世思想から中流階級本位の社會改良主義に移り、更にそれから一轉して社會主義者になるまでの、四年間の過渡時代である。』如何にも、前記の如き隱忍の間に於ける小不平は、即ちこの過渡時代の初期に於ける、半無意識的の煩悶なのである。

四　妻の病、子の死、友の死

然し私の不平と不振には、外にも原因があつた。私の妻は肺尖カタルの氣味で、夏中、鹽原に暑を避けて見たりしたが、はかばかしい事もないので、今度は大森停車場から六七町ばかりの處に、田と畑の間の藁葺の百姓家を借りて住みこんだ。その頃のその邊は、まだ全くの田舎であつた。

所が、かてゝ加へて、八月の末、二歳の子不二彦が急にヒキツケを起した。腦膜炎であつた。九月の初、東京病院に入院した。望があると云つたり、無いと云つたりして居る中に、ズンズン日が立つた。或時は只だ昏々として眠り、或時は思ひだした樣に顏をしかめて泣くのであつた。十月になつて退院したが、それは全く何の見込も立たないからであつた。『不二死せんとす、金盡きんとす、秋來らんとす、而うして予は老いんとするにあらざるか。』

その前、私には少しばかり金があつた。毛利家から歴史編輯の賞與として頂戴した一千圓が、まだ大ぶん殘つていた。然るにそれが、子供の病氣で忽ち消えた。『歳末近きに在り、之を如何せん、××の如きは金五十圓貸せと言ひこしたり、いつまで千圓があると思ふぞ、千金忽ち散じて元の木阿彌たる處、即ち枯川が枯川たる所以にあらずや。』

その頃、或人の見舞に答へた俳句。秋風に肥える人の子、人の妻。秋風に臥の子等は眞ッぱだか。秋風に堅實の子の力みかな。蒼白き我子の顏やそゞろ寒。肌寒や妻の肋の骨見ゆる。――妻は心の痛みの外、頻りに胃痛を訴へだした。我子の看病の疲れの爲、いつか自分の病を重らせたのであつた。

十二月廿二日『午前九時十分、不二終に死す、些の苦痛の狀なし、美知子など今更に打泣く也、嗚呼二年間の一夢。』

『不二の死の記念として我は烟草を禁じたり、幾度か思ひ立ちて實行を續け得ざりし事、此度は不二の死の記念といふ事の爲に大いに力ありて、容易には破らざらんと思はる。すべて不二の死を以て我が心界の革新の時機となさんと欲す。』(この禁煙は十年あまり續いた。私の喫煙と禁煙との、約十年を一期とする交代については、猶後に記す。)

『秋水の書至る。秋水不幸痛心の事あり、我家の葬儀に列せざるを謝す、嗚呼好男子、家庭の平和を得ず。』彼はこの年の夏、二度目の結婚をしたのであつた。家には老母があつた。

『十一月廿八日、桜田藤太赤十字病院に死す。』彼こそは眞に惜しい友人であつた。彼と私との交りについては、『傳』に記してある。彼は内村氏に傾倒し、又黒岩氏に推服していた。彼こそは眞に朝報記者として大いに働き得べき男であつた。惜しいかな、時を待ち得ないで死んだ。彼の『將に死せんとする時、諸友人に告げて曰く、久しく諸君の世話になつた、諸君願はくば健康を保ち、自ら正しうして天下の事に當れ』と。彼の意氣と、純情と、少し誇張した志士振とが、そこに現はれてゐた。後に私はツクヾ思つた。彼こそは確かによき社會主義者になり得べき素質を持つてゐた

五　廣義の社會改良

明治三十三年一月、『社會改良』の叫びが期せずして朝報社の内外に動いてゐた。『宴會改良の聲』が枯川に依つて朝報紙上に紹介された。酒飲の横暴無慚に對する抗議であつた。『宴會の不完全』が秋水に依つて論評された。『送別會にせよ、懇親會にせよ、品位と秩序全く缺乏して、亂暴狼藉なる驚くに堪へたり。』秋水は殊に藝妓と戯むるゝ爛醉者を痛罵した。我々は公會と私宴の別を説くのであつた。これらは内々朝報社中に於ける大頭氏その他の爛醉常習者に當つたのかも知れない。

然し秋水の改良主義の内容は極めて廣大であつた。彼は『時間の約束』の守るべきを論ずると同時に、直ちに其の筆を以て『金錢廢止の理想』を説いた。曰く、十九世紀は自由主義の時代であつたが、二十世紀は社會主義の時代である。それが『新氣運』である。彼は更に進

んで『金錢廢止の社會』を說いた。それは『[illegible]、、、、、[illegible]するに[illegible]るのみ。』『働かざる者は食ふことを得べからず。』これ『天地の大法』なり。『個人をして自由に金錢を生產資本として使用せしむるが爲に、之を持する者は皆徒手して食ふ』ことを得るのみならず、『更に他の衣食の、、、、、、去る』のである。

秋水の改良主義は更に進んで、『勞働は耻辱なり』と喝破した。『勞働は神聖なり』がまだ少しも皮肉に聞えない時代であつた。彼は又、『賭博の公行』を論じ、『治安警察法案』を批判した。それらも矢張り當時に於ける『改良主義』の發現であつた。五月の萬朝報は又『×××』と題する一篇を載せた。署名はないが、明かに秋水の筆であつた。『進步は常に×××××』『××は故意に作爲すべからざると同時に、其の起るや決して防遏すべからず』『之を利導せば、能く平和の進步てふ光榮を得べし』『若し之を××××せんと欲せば、則ち××××あらん。』八月の朝報は又『非戰爭主義』を主張した。それには秋水の署名があつた。

この頃、河上清 翠陵氏が新たに朝報に入社した。『余に他の長技なし、只正義の爲に鬪ふを知るのみ』といふ抱負であつた。彼は靑山學院出身の靑年であつた。彼は先づ『社會改良者の資格』を論じ、板垣伯一派の同氣倶樂部が『社會問題の討究』と『社會風俗の改良』を企てて居るが、『その人物皆不可なり』と斷定した。彼は恐らく、主義の根底なき社會改良は駄目なりと考へたのであらう。『未成年喫煙禁止法案[illegible]』についても更に一[illegible]、[illegible]社會主義者の[illegible]を[illegible]したのも、多分彼であつたらう。彼は又足尾銅山の鑛毒問題を論じ、『國家の利益を名として一鑛山師に私する』政府の政策を攻擊した。彼は又『現代の奴隷制度』を論じ、『ツラストの萌芽』を說き、『×××の廢止』を唱へ、『リープクネヒトを弔ふ』の文を作つた。彼は既に明白な、勿論當時として稍や道德的傾向の社會主義者であつた。

四月、『內藤湖南、國府犀東、退社したり、黑岩、終に士を遇するの道を知らず、我等亦いづれの時、彼の侮辱に遭はんも知れず。』この時の事情は今忘れてしまつたが、雪村の時とは違ひ、我々の同情は全く去り行く人々の上にあつた。然し二君と漢詩人本田種竹君との送別會が同時に開かれたのを見ると、これは編輯の實務に役立たぬ名士連が何かの機會に追はれたものと見るべきであるかも知れない。何しろ朝報社と黑岩氏とに對する我々の信賴と評價が、折に觸れ事に當つて動搖するのであつた。この事實は、黑岩氏の兩面、——舊い朝報に引きずられる一面と、新らしい朝報を代表する一面、——生得本來の專制君主的の一面と、甘んじて（或は勉強して）士に下るといふ英雄志士的の一面、——その兩面が出たり引込んだりした事を示すのかも知れない。然し又、二君が舊分子と對立する新分子でありながら、他の新分子と比べる時、一種の豪傑的、保守的、高踏的、從つて非實用的の要素であつたといふ事が、根本の原因であつたかも知れない。

六　不徹底な中等主義

枯川がこの年の一月一日の『よろづ文學』欄で『日本の家庭』第一號を評したのは偶然でなかつた。『家庭』といふ題目が『社會改良』の一部として撰ばれた形であつた。新年の懸賞小説にも『好家庭』といふ課題を出して居る。加藤眠柳氏の小説『戰ひの人』を評しては、その『思想の健全』を賞し、『家庭の讀物の缺乏』が之に依つて補はると云ひ、『ヴイカ、オブ、ウエーキフイルドを讀むの感あり』と云つてある。秋水もそれに贊成であつた。次いで枯川は德富蘆花氏の小説『不如歸』を激賞した。世間の多くの小説は、『其の眼識』が『政治上社會上に及』んで居ないが、『不如歸に於て其の遺憾少し』と云ひ、『家庭の讀物』としてそれを推薦し、そして其の著者に對して、『何ぞ其名の寂寥たるや』と憤つている。蘆花君の名はその時までまだ『寂寥』だつたのである。

枯川は次に『小有居漫錄』といふものを飛々に書いて居る。『小有居』或は『小有村舍』とは、彼が大森の家につけた名であつて、『水竹亦小有』といふ古人の詩句から取つた簡素の趣きであつた。『酒亦小有、書亦小有、錢亦小有、俠氣亦小有、名譽心亦小有、怨亦小有、德亦小有』と日記に書きつけた事がある。漫錄の內容には『非人力車主義』『非下女主義』などいふものがある。『昨夜、秋水の家に飲む、天山、香谷、及び我。三人、小有居漫錄の事につき我を詬る。天山は我を消極主義なりといふ。秋水は我を以て獨り自ら潔うするに止まる者といふ。香谷は只我を偏屈なりといふ。皆可也。此夜稍醉うて大いに論じ、頗る快を覺えたり。』と日記にある。

三月初旬の日記に『涙香、編輯意見を發し、分課を新定すべしと云へり、彼が道樂をやめて編輯に力めんとするは喜ぶべし』とある。涙香は黑岩氏の號である。この分課の結果として、四月以後、枯川は第一面に於ける『內外思潮』欄の受持となつた。『緒方流水と同役也。』三面記者がヤット一面記者に昇進した形だつた。

內外思潮欄に枯川が紹介批評したもの。ゾラの近作フエコンヂテ（繁殖）の梗概。そこにも社會主義的傾向はあつた。次に某雜誌の『近世社會主義の二誤謬。』これは『國家社會主義、若しくは謂ゆる社會改良家の假面を被りて、純乎たる近世社會主義の進路を阻まんとする。』を指摘したもの。雜誌『ほととぎす』の『一片の落花、一穗の木の芽の如き、單純にして自然なる』寫生文の讚美。枯川自身が雜誌『大帝國』に書いた『中等倶樂部の記』の紹介。これは『中等社會の習慣、趣味、品位、面目を保』つ事に依つて、『上下二階級の改良進步を期待』するといふ、例の中等主義の主張。秋水、天山、香谷等は即ちそこを、それぞれの意味に於いて『詰責』したのである。要するに枯川はまだ其の邊をうろついてたのである。後に彼が『鐵骨倶樂部』の記に於いて、謂ゆる灰殼黨と對立し、『鐵骨に盛るに文明心を以てす』と云ひ、『頑冥迹にあらざる鐵骨黨』『英雄豪傑にあらざる鐵骨黨』

[illegible]的保守主義』『[illegible]的進歩的主義』の臭味が多量に存していた。

それかと思ふと、枯川は又『米國に於ける社會主義』を紹介して、『我輩は必ずしも此の如き温和なる主義を最善なりとは信ぜず、又將來に於てそれが勢力を得べしとも想はず』と云つて居る。但しそれが『無暗に急激なる論者を誡むるに足る』とも云つて居る。

枯川は又『風俗改良案』と題して、種々なる題目につき多くの改良案を提出している。後に問題となつた茶代廢止の事や、言文一致の事なども、既にこゝに現はれている。『下女問題』も『思潮』欄で屢々論議された。

然し要するに、枯川はまだ、未熟な、不徹底な、或は微弱な、温和な、或はケチくさい、中流階級的な、小改良主義者に過ぎなかつた。曾て黒岩君が彼に向つて、『私は初めあなたをレニエントな方だとばかり思つて居ました』と云つたが、惡い意味に於いて正にそれが當つていた。レニエントとは、寛大寛仁を意味し、温順温和を意味し、やさしい人、慈悲深い人を意味するのだが、醫學上にそれを名詞にして『緩和劑』と呼ぶ所に、最も皮肉な諷刺がある様な氣がした。

七　水浴、自得、從軍、夜勤

又少し日記を抜く。一月一日『元日より社務に服す。晩、社の新年宴會あり、人多くして混雜甚だし、興は殆んど無し。』美知、此頃[illegible]語る、秋水班[illegible]にして修養少し、自ら云ふ。レストレスネスに苦しむと。』

十九日『芝高輪十七番地に轉居したり、今度は品川停車場より汽車にて東京に通ふなり。』廿四日『近傍小兒多し、泣聲しばしば聞ゆ。』廿七日『此頃寒甚だし、水浴甚快也。』

三月三日『いそがば廻れ、是れ我が今日のモットーなり……彼是自得の處少からぬ心地す。』四月廿三日『英文を讀むに、つくづく讀書力の不足を感ず。』五月十二日『近來やゝ酒を飲む、再び禁酒の必要を生ずる時あらんも知れず。』五月廿八日『此頃社務として英文の雜誌を讀む、是は嬉しき事務なり、レヴイウ・オブ・レヴイエス、リテラリ・ダイジエスト、エクレクチク・マガズイーン。』

八月十一日『六月中旬より七月下旬までの間、我北清地方に從軍したりしかば云々』これは北清事件の爲、朝報社から派遣されたのであつた。短刀、ピストルまで用意して、勇ましげに出發したが、一向つまらなくて程なく引返したのであつた。『從軍は愚なる事なり、それも相當の待遇を受けば知らず、新聞記者としては愚なる事なり、又記者として戰鬪線に入るべきか否かは予未だ容易に答へ得ず、兎にかく此度の予の從軍、新聞社の爲に云へば失敗也、但し予一身の爲に言へば兎も角も面白き經驗を得たり、又朝鮮の釜山、仁川、清國の芝罘、太沽、天

津を一見したるの利益は甚た大なるべし。』『從軍中、尤も閉口したるは食物也、支那米殆んど食ふに堪へず、暑中下痢を催して身體衰弱し、到底久しく居るに堪へざるが故に、天津落城を機として歸り來し也。』

八月廿三日『北清派遣の軍隊が新聞記者に對して禮を缺きたる事につき、我は一昨夜紅葉館の同志記者會に於て演說したり、明日又會合して相談する筈なり。』この事件は餘り要領を得ないで終つたが、兎にかくその時の軍隊の無禮は甚だしく、從軍記者は皆な不平滿々で引揚げたのであつた。それに私としては、旅費以外、電報料を給せられて居なかつたので、從軍記者の任務は大部分、果されないのだつた。

『記者として戰鬪線に入るべきか否か』については、一つ話がある。天津の我が攻圍軍では、新聞記者の宿所にも折々城內から流彈が飛んで來たりして居たが、或日、都新聞の記者たる田川大吉郎君が、戰線を見に行くと云つて、君も行かないかと私を誘つてくれた。私は行きたくなかつた。新聞記者がわざ〳〵危險區域に身をさらすには及ばないと考へていた。田川君はヘルメット帽をかぶつて、獨り悠然と出かけて行つた。それが羨ましいような氣持もした。少し自分の臆病を恥ぢるような氣持もした。田川君は總ての事に用心ぶかい人だが、自分の運命には強い自信を持つて居るように見えた。私はむしろ命を粗末にする方かも知れないが、わざと鐵砲玉の前に立つ氣にはなれなかつた。

今一つ、私が田川君や、時事の安藤君や、報知の石川安次郎君等と一緒に、天津邊はまだ危險だと云ふので暫く芝罘に留められて居た間に、私等よりも後から日本を出發した從軍記者達が、却つて私等より先に、直接天津へ進んでしまつた。それで先發の私等がまだ何等の通信も發し得ない中に、後發の連中の通信の方が、先に內地の新聞に掲載された。そこで內地では大いに不審を起した。從つて流言が傳はつた。奴等は危險を恐れて天津に進み得ないのだと。私の妻などはそれを聞いて甚だしく氣遣つた。後に私は、彼女の日記を見たが、若し夫に卑怯な振舞があつたのなら、自分は自殺する積りだつたと書いてあつた。それを讀んだ時、私は特に驚いた。餘りに思ひがけもない事だつた。然し私の心には、それにつけても、田川君と戰線に同行しなかつた事を少し悔いるような氣持もあつた。

八月十一日『社の受持又かはる、今度は編輯事務なり、鈴木と二人でやれとの事なり。』九月十八日『金不足なり、心中の煩悶は多からず、讀書を樂みて事に急ならざるが故に稍心の安き所あり。』『明治三十三年の暮。』『又歲暮に遇ふ、感如何、只やうやく老いんとするを思ひて氣のせく心地するのみ、さりながら今はさすがに、小さき虛名を求むるの念は少なく、成功に急なる念も薄し。』『佐藤一齋の言志錄を讀む。』『美知此頃はやゝよし、然し猶氣遣はるゝは咳の多く出づる事なり。』『此頃は第三版の編輯に從事するが故に夜勤なり。』『今月

八　再來の内村鑑三氏

九月十六日、『内村鑑三氏再來す（周六手記）』と題した一文が朝報に現はれた。『社會と戰ふに熱心なること内村鑑三氏の如きは蓋し罕なり、氏は誓ひて以て社會を改良せんと欲するなり』『嘗て此心を以て朝報社に來り、又此心を以て朝報社を去り、躬ら東京獨立雜誌を發兌せり』『東京獨立雜誌は『猛犬孤鶴に據るの概あり』しが、本年初夏故ありて廢刊したるに依り、『朝報紙上、將に再び膽汁の如き氏の苦言を見んとす。』『内村氏は『余は初めて社會改良の秘訣を心會し得たり、徐ろに之を實地に施さんと欲す』と云ふ。その『語氣に依りて察すれば、精神的の團體を作り、更に苦行を以て社會と戰はんとするに在り。』そしてその精神は即ち『共和主義』である。

黑岩氏のこの文章には甚だ多くの暗示があり、含蓄がある。内村氏は大なる抱負を以て朝報に歸つて來たものと考へられ、黑岩氏は深き默契と期待を以てそれを歡迎したものと考へられる。内村氏が『精神的の團體』と云ひ、『苦行』と云ふのは、恐らく歷史上に於けるクロンウエルの事跡などを連想したのであらうが、實際上には、後に現出した『理想團』の漠然たる前影であつたのだらう。そしてこゝでも矢張り『社會改良』が旗印になつている。

然らば『社會改良の秘訣』とは何かと云ふに、内村氏はそれを次の[illegible]社會を改むる[illegible]改良は決して[illegible]改良は[illegible]個人を[illegible]らなければならない。』『一人の善人を作りし者はそれだけ國家社會を改造せしものである。』この個人的社會改良主義の中に、内村氏に獨特なる、一種の強い力が現はれていた。

斯くて内村氏は『小善』の德を說いてゐる。彼は今の社會に於いて『大善』を行ふことの『不能』なるを說き、『如かず小善を講ぜんには』と云ひ、『實は善に大小はない』と云ひ、『下婢と下男とに不親切なる政治家は國民に對しても不親切である。』と云ふ。

彼更に『小善の快樂』を說いて云ふ『志す所、功名にありとは、東洋の志士とか稱ふ横暴者の皆切望する所』であるが、『功名なるものは實は毒物であつて安慰劑でない。』『小善の快樂は嫉妬羨望の伴はない快樂で』あり、『眞の快樂』である。『大善は新聞紙の吹聽するもので、小善は神と我の心の外、人の知る事の出來ないものである。』小の字は實に内村氏の誇りであつた。

内村氏は更に『小新聞たるの名譽』を誇つていゝ『小新聞』は『中以下の社會』に讀まれる。それは『最も正直なる、最も勤勉なる、最も潔白なる社會ではないか。』『彼等は實に未來の新日本を作る元素』である。これは實に小新聞たる萬朝報の爲に氣を吐くものであり、同時に又その將來に於ける理想を揭げたのであつた。

内村氏の文章は實に『膽汁の如』くであつたが、又實に短銃の如く

でもあつた。彼は堂々たる論文を書かないで、短評を書き、小品を書き、隨筆を書いた。而もそれを無雜作な、然しながら力のある、言文一致の談話體で書いた。内村氏の個人的改良主義と、秋水等の社會主義とは明らかな對立を爲して居た。例へば『金錢問題』について内村氏は云ふ。『金は天よりの賜物である。』『國として兵器軍艦の必要があると同じ』く、金は個人の『獨立の爲』に必要である。故に『金を使ふの道は實は之を得るより六ケしい』のであると。之を秋水の唱へた『金錢廢止の理想』と比べる時、そこに面白いコントラストが生ずるのであつた。然し又、内村氏の戰鬪的な所、一世を敵として戰はうとした所、その平民的な、野人的な、そして常に小の字と下の字とに親しむ所などが、兩者間の共通點であつた。

九　黒岩の意氣、幸徳の前進

黒岩朝報社長は内村氏の再來に依つて意氣大いに揚るものの如く見えた。十一月の初、彼は『尊公自重論』といふ八回續の大論文を朝報に載せた。

元來、黒岩氏の文章は簡潔である。萬朝報といふ四ページの小新聞は必然的に簡潔を要求した。その要求に最も善く應じた者は黒岩氏自身であつた。然し黒岩氏の文章は簡潔と同時に周到であつた。あらゆる點に於いて、かゆい所に手が屆いていた。讀んでくゝめろような所

として、それぞれに精妙を極めていた。彼は曾て我々に教へて云つた。讀者をして長きを感ぜしめないなら、文章は幾ら長くても構はないと。『尊公自重論』は實に短きを覺えしめる長篇であつた。

一體に黒岩氏は餘り多く論文を書かなかつた。彼が最も多く書いたのは小說の反譯であつた。朝報の紙上に、涙香譯と署名した小說の無い日は滅多に無かつた。實際、それが朝報の讀者を引きつける最大の力であつた。然し彼は往くとして可ならざるはなき才筆家であつた。例へばその頃、彼は連日、朝報の第二面の雜報の下部に、『机の塵』と題する斷片的雜錄を書いた。皮肉で、痛烈で、堪らぬほど人を嬉しがらせた。『机の塵』は忽ちにして有名になつた。星亨を痛罵し、伊藤博文を翻弄し、自由黨の墮落を慨慨した所など、恐らく、あらゆる他の堂々たる攻擊文よりも有効であつたらう。或時、彼は『駿臺車』に試乘した實驗的隨筆を書いた。洒々落々、淡々悠々、そして其の間に藝妓と紳士を點綴して、彼等が如何にこの駿臺車を利用し得るか否かの暗示を與へ、輕い皮肉とユーモアをたゞよはせた所に、何とも云はれぬ輕妙さを見せていた。彼はたまに論文を書いたが、書けば必ず人の注目を引いた。要するに、萬朝報の紙上で、黒岩氏の書いたものだけが、その大小硬軟に係はらず、いつでも特別に光つて居るのだつた。

そこで『尊公自重論』は、その稀な論文、殊に最も稀な長論文であつたが、その要點は、日本政府有終の美を成すが爲、殊に公德の甚だ必要

を擧げて之に代ふるに志士仁人を以て宗教家教育家に任ずることを得ず』と結んである。

是より先、福澤諭吉氏の『修身要領』なるものが發表された時、朝報はそれを批評して云つた。これは『近時の教育界に於ける貴重の齎物』には相違ないが、然し何處かにまだ靴を隔てゝ痒きを掻くの感がある。それは只『個人の獨立自尊』のみを說いて居るからであると。この批評は多分、河上君の筆だつたらうと思ふ。すると黒岩君が暫くしてから、『志仁堂主人』といふ署名で、『獨立自尊とは何ぞや』と題し『彼の派の獨立自尊と云ふは、藝妓の稱する「獨立自尊」なるものより以上なるには非ず』と痛罵した。そこで黒岩君は、三田派のお題目たる個人的の『獨立自尊』と對抗して、公を重んじ、社會を本とする、『尊公自重』の新モットーを掲げたわけであつた。或は大いに此のモットーを流行させる積りであつたかも知れない。兎にかくそこにも矢張り、後の『理想團』の豫備的聲明があつたわけである。そして又そこに內村氏との默契が存在したのだらうと察せられる。

この形勢に連れて、秋水等も亦いよく其の歩を進めた形がある。彼は腐敗墮落の政友會と對立する進歩黨に向つて、『何を爲しつゝありや』と問ひ、何ぞ『世界主義、平和主義の旗幟を持して、人道公義を主張せざるや』と責め、現社會に於ける『自由競爭の弊害』と『貧富の懸隔』を擧示して『社會平等の主義』を高調した。彼は又『歳末の苦痛』について論じ、『永遠に歳末の苦痛を脫するを得せしむる者、唯、・・・・・・の一事あるのみ。[illegible]曰く『當時の井上詩集黨や、當時の自由黨改進黨や、何ぞ一進して民主的社會黨たらざるや。』

ここには又、後に秋水等の組織した、『社會民主黨』に對する、前影的表現があつたわけである。

十　社會民主黨創立の噂

明治三十四年一月一日、萬朝報の『言論』欄は、『廿世紀を迎ふ』と題してあつた。蓋し秋水の文である。『客員內村生』は『隱士の新年』を語つてゐた。一月十八日の『言論』には『滿洲奪はれんとす』と題してあつた。これは多方、愛國的政治家なる圓城寺君の憤慨だつたらう。朝報の有力なる言論記者としては、今や一人の圓城寺を除けば、他は幸德、河上の社會主義者であつた。

新年以後に於ける內村氏の文字を瞥見する。『寒中の快樂。』『冬季亦我等下層の民に多くの快樂を供せざるにあらず。』『炬燵の微温亦以て家人の心を繫ぐに足る、之を中心に放光的に座を占め、人生を談じ、或は嘆じ、或は笑ふ。』『此日本的の團欒に亦歐米人の知らざる快樂あり。』『其他讀書の快樂、焼芋の快樂、大福餅の快樂あり。』內村氏の素朴な、『下層』的な、そして極めて詩人的な方面が誠に善く現はれてゐる。

『開いたり、開いたり、櫻の花は開いたり、日本魂は開いたり、嗚

嗚呼何と美しいかな。……然れども、三日を出でずして散り去らんため、人畜が養ふに足る實一つをも遺さずして。』『政治で政治を改良しやうとするは、薪で薪を消さうとするのと同然。』『忠君愛國を名として貧者より宗教を奪はんと欲する哲學者は、彼の貧者よりその衣を掠ぎ取らんとする高利貸の如きもの。』『我々は或る場合に於ては、外國人を雇ひ來つて、大臣や官房長の賤職を彼等に授ける時がある乎も知れない。』社會主義思想とどうしてもピッタリ合し得ないといふ點よりも、大體に於いて、痛切に共鳴し同感し得る點の方が多かつた。

秋水はその間に於いて、『平民の理想』として貴族院の廢止を要求し、『我は社會主義者也と宣傳するの信念と熱誠と勇氣あるの人に非ざれば、未だ以て勞働問題の前途を托するに足らざる也』と宣言し、更に『、、、、』と『自由民權』は既に『過去のもの』に屬す、『今後の事業』は、『別に嶄新たる新主義、新理想を揭げて起つに在るのみ』と聲明した。

秋水の新著述『帝國主義』が單行本として發行された。彼の功名的野心が稍や報いられた。彼の謂ゆるレストレスネスが稍や降せられた事が想像される。內村氏はこの書に序して次の如く云つた。『君は基督信者ならざるに世の所謂、、なるものを憎むこと甚だしく、君は曾て自由國に遊びしこともなきも眞面目なる社會主義者なり、』『この獨創的著述を世に紹介するの榮譽に與りしを謝す』內村氏としては、曾て米國に遊んだ基督教信者でなければ、眞面目に、、を憎み得る筈がない樣に思はれて居たらしい。然しそんな事はまだどうでもよい。兎に角內村氏は熱心に秋水の立場を支持したのであつた。

この時、河上翠陵君は『排帝國主義』を朝報紙上に論じて秋水と相應じた。又阿部磯雄氏の新著『社會問題解釋法』を同紙上に紹介し批評した。五月九日、彼は『生命ある新政黨の必要』を論じて曰く、『社會民主黨の創立の如き、是豈に時勢の必要に應じたるものに非して何ぞ。』社會民主黨創立の時は、この時既に傳へられて居たのである。

その頃、黑岩氏は高山互樂著『聯珠眞理』の序を朝報に載せた。『聯珠』とは五目並べの雅名であり、高山互樂とは黑岩氏の變名に過ぎなかつた。黑岩氏に、『嗜好に耽るの弊』がある事は先に指摘した。謂ゆる『聯珠』は、花や碁と同じく、否それ等にも增して、數年間に亘り、彼の時間と精力とを費さしめることが實に多大であつた。彼の序に曰く、『予は總て遊戲を好む。此書の如く「著書」の名に副ふ者、他に多くあるを見ず。』(互樂)生が慘憺の苦心に幾日の寢食を忘るゝ如くなるを見たり。』『最早聯珠は汝の精力を加ふるを要せず、更に他の有用なる事業に向つて之を加へよ。』聯珠の法則は實に、黑岩氏の凝り性に依つて、その究竟の處まで研究し盡されたのであつた。彼の友人が久しく彼の爲に深く惜んで居た所のものを、彼自身も固より知らないでは無かつた。彼は今や『他の有用な事業』に向つて、その『精力を』加へんとするのであつた。彼の友人等は皆た深く彼に囑望した。萬朝報社に大なる機運が開きかけて居た。

十一　傾向、小人、瘠我慢、首都と地方

然るに、明治三十四年の私は、相變らずまたマゴ〳〵して居た。『三十を過ぎたる男子いたづらに又屠蘇汲みてめでたしといふ。』『今年はフロックコートを着用に及ぶ。』『酒、酒、近來やゝ飲むこと多し。』

四月三十日『予は昨日から芝仲門前一丁目十四番地吉岡マス方の二階に住んでゐる、六疊二間、一間は予の室で、他の一間には志津野又郎と坪内吉太郎とが居る、……今に蓑田充夫もこゝに來るといふ、小さな梁山泊が出來たのである、……甚だ愉快な生活だ。』

『美知は一人で鎌倉長谷大佛横町に家を持つてゐる。ミチの健康が回復せず、……それで鎌倉にやつてゆる〳〵養生させようと思つたのである。丸を連れて行つて二人で暮してゐる。……風呂も内で立てる事が出來る。』

『予は此ごろ手紙日記等を言文一致體にする事を力めて居る。』（これについては、後に改めて書く。）『此ごろ碁を打つ、その勝負について思ふは、予は實に小人である。』『此頃内職に時間を取られて讀書の暇なし。』

『予は一體、何をして生涯を終るのであるか、此のごろ頻りに煩悶に堪へぬ、六七年前、大阪に居つた頃、道德上、宗教上の事について頻りに煩悶した事があつたと覺えて居るが、今は道德宗教上の事については考へが定まつて少しも煩悶せぬ、只事功を立てることについて何[illegible]けれども何をしてよいか分らぬ、又何もなし得る事がない、予は遂にこんな煩悶の中に老いてしまふであらうか、予はそれほどの愚物凡物であらうか、年已に卅二、深く考へねばならぬ。』私はまだこれほど迷つて居た。秋水の謂ゆるレストレスネスを感じていた。目の前にぶらさがつて、既に少しは手を掛けて居る物を、まだシッカリつかむ事が出來なかつた。何といふ馬鹿だらう。

一月廿四日、福澤諭吉の『瘠我慢の説』に關する私の紹介と批評が朝報に載つている。これは色々の點に於いて、當時の私を（私の程度を）見るに足ると思ふから、その要點を記しておく。『瘠我慢の説』は、勝安房、榎本武揚等の進退の跡について、福澤さんが昔し書いて置いたものを、死期の近づいた今、世に發表したのであつた。

福澤説は云ふ。立國は私なり公に非ざるなり、然れども哲學の私情は立國の公道なり、立國の大本としては瘠我慢の主義なかるべからず、然るに勝伯榎本子の事迹は此瘠我慢の士風を害したるものなり。之に對し、德富蘇峰氏は云ふ。瘠我慢は大切也、然れども之を小處に用ふる者は小人たり、之を大處に用ふる者は大人たり、勝伯は瘠我慢を大處に用ひたるのみ、世に聰明を除外したる瘠我慢ほど危險なるものなし。要するに、福澤は勝を以て外に降るの實例と爲し、蘇峰はそれを内に和するの教訓と見たのである。然し蘇峰に一つ見落した點がある。勝が一戰を試みざりしを惜むの口氣が福澤にあるのは、

只國民を戒めんが爲で、實際の詐文ではなく、福澤も矢張り勝を人傑として其の功德を認めて居る。只福澤は、『獨り怪むべきは、氏が維新の際に曩の敵國の士人と並立ちて得々名利の地位に在るの一事なり』と云ひ、勝の僞に謀るに『自ら省みて罪を引き、……吾身の擧動は一時の權道なり、……後世子孫之を再演する勿れと、……單身去つて其跡を隱すことあらんには』と望んでいる。究極の眞意はこゝに在る。聰明を除外した瘦我慢を獎勵する恐はあるには相違ないが、然し意氣地を除外した聰明ほど下らぬものはない。これら聰明の人にして、世界の大勢を說き、全人類の進步を說き、世界統一の夢を說き、容易に現時國家の獨立を解散せんとする者なきにあらず。予輩は蘇峰君の聰明說よりも、福澤翁の瘦我慢說の方が、遙かに多く今日の社會を益することを信ずる者也。――堺が猶ほ國家主義的傾向を存する點と、容易に瘦我慢的精神を棄て得ざる點と、然しながら又、聰明なき保守主義に與し得ざる點と、結局、勝の行爲を是認して、只將來を戒める爲に責を引かしむべきだといふ、妥協的判決に歸着するより外なかつた點とが、今日私の興味を引くのである。

二月廿日『地方と首都』と題する堺の稍や長い論文が朝報に載つている。彼の書いたものが言論欄に現はれたのは、これが初めてであつた。首都は文明の中心、勢力の中心である。然し都會は花であり、地方は根幹である。都會は地方人の消費所であり、地方は都會人の供給所である。首都の權力が過大なるは不可である。都會に於ける當世紳士の趣味禮容は不自然であり、虛飾である。首都を崇拜するを止めて、首都を救濟するに努めよ。地方人は都會人を教導するの責任を自覺せよ。――但し文體はまだ言文一致でなかつた。

堺はこの前年にも、鐵扇子の署名で雜誌『保止々己須』に共鳴し、文學界の東京閥を排して、田舍の新鮮な空氣を入れたいと云つている。こゝらにも矢張り例の中等改良主義の氣味合が見える

十二　社會民主黨の創立と解散

明治三十四年五月二十日、社會民主黨の結社が屆出でられた。黨員として公表されたものは、片山潛、安部磯雄、木下尙江、幸德傳次郞、河上淸、西川光二郞の六名であつた。同日、その宣言書が、片山氏發行の雜誌『勞働世界』の臨時發刊を以て發表され、同時にその一部、或は重要部分は、萬朝報、每日新聞、報知新聞、新房總、東海新聞の五新聞紙に揭載された。

私は今その『勞働世界』の臨時發刊の一枚を目の前に置いて、それを見つゝ此の記事を作つて居るのだが、それは四六四倍版の四ページ物で、全體が薄茶色に古びて居り、一部分は焦茶色に汚れて居る。宣言は廿二字詰、四十行、四段組、三頁に亘る、可なりの長文で、第一頁四段の中、上一段が花枠附の表題で、そこに横組の初號活字で『社會民主黨宣言書』とあり、第二段の初に二號活字で『社會民主黨の宣言』とあり、本文は總て五號ルビ付で、章の別はなく、全文を通じて十七節に分れている。これは特に重要の歷史的資料であるから、全文を載せたいのであるけれども、それは他日單行本を編纂する時の事として、こゝにはその要點を略記しておく。然しそれすらも猶ほ長きに

対することを覚ふる。

第一章と目すべき部分の三節一段は序言ともいふべきもので、次の一節を以て始まつている。

『如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは實に二十世紀に於けるの大問題なりとす、彼の十八世紀の末に當り佛國を中心として歐米諸國に傳播したる自由民權の思想は、政治上の平等主義を實現するに於いて大なる效力ありしと雖も、爾來物質的の進歩著しく、昔時の貴族平民てふ階級制度に代ゆるに富者貧者てふ、更に忌むべき恐るべき者を以てするに至れり、抑も經濟上の平等は本にして政治上の平等は末なり、故に立憲の政治を行ひて政權を公平に分配したりとするも、經濟上の不公平にして除去せられざる限りは人民多數の不幸は依然として存すべし、是れ我黨が政治問題を解するに當り全力を經濟問題に傾注せんとする所以なりとす』

次に第二三節を抄録すれば左の如し。

「今や我國（の）……政治機關は全く富者の手中に在るもの丶如し、……衆議院と雖も其内容を分析すれば悉く地主資本家を代表せるものにあらざるはなし、……然れども記憶せよ、國民の大多數を占むるものは田畠に鍬鋤を操る小作人、若しくは工場に汗血を絞る勞働者なることを』『彼等は實に財富の生産者なるが故に、將來の社會組織に於いて重要の地位を占むるに至るべきは論を待たず』『我黨は玆に多數人民の休戚を負ふて生れたり、然れども貧民を庇して富者を敵とするが如き狹量のものに非ず。』『其の志す所は我國の富強を謀るにあれども、然も外國の利益を犠牲に供して顧みざるが如き[illegible]、貧富の懸隔を打破して全世界に平和主義の勝利を得せしめんと欲するなり』

第二章と目すべき部分は、先づ黨の『理想』として次の八個條を擧げている。

（1）人種の差別、政治の異同に拘はらず、人類は皆同胞なりとの主義を擴張する事

（2）萬國の平和を來す爲に先づ軍備を全廢する事

（3）階級制度を全廢する事

（4）生産機關として必要なる土地及び資本を悉く公有とする事

（5）鐵道、船舶、運河、橋梁の如き交通機關は悉く之を公有とする事

（6）財産の分配を公平にする事

（7）人民をして平等に政權を得せしむる事

（8）人民を平等に教育を受けしむる爲に國家は全く教育の費用を負擔すべき事

然しこの理想は『今日これを實行するの難きは論を待た』ないから、左の『綱領』に依つて『實際的運動』を試みると云ふ。

（1）全國の鐵道を公有とする事

（2）市街鐵道、電氣事業、瓦斯事業等、凡て獨占的性質を有するものを市有とする事

（3）中央政府、各府縣、各市町村の所有せる公有地を拂下げる

事を禁ずる事

(4) 都市に於ける土地は舉げて其都市の所有とする方針を採る事、若し之を速に實行する能はざる場合には、法律を設けて土地兼併を禁ずる事

(5) 專賣權は政府にて之を買上ぐる事、即ち發明者に相當の報酬を與へ、而して人民には廉價に其發明物を使用せしむる事

(6) 家賃は其家屋の價格の幾分以上を徵收する能はずとの制限を設くる事

(7) 政府の事業は總て政府自ら之に當り、決して一個人若しくは私立會社に受負はしめざる事

(8) 酒税、醬油税、砂糖税の如き消費税は之を全廢し、之に代ふるに相續税、所得税、及其他直接税を以てする事

(9) 高等小學を終るまでを義務教育年限とし、月謝を全廢し、公費を以て教科書を供給する事

(10) 勞働局を設置して勞働に關する一切の事を調査せしむる事

(11) 學齡兒童を勞働に從事せしむることを禁ずる事

(12) 道德健康に害ある事業に婦人を使役することを禁ずる事

(13) 少年及婦女子の夜業を廢する事

(14) 日曜日の勞働を廢し日々の勞働時間を八時間に制限する事

(15) 雇主責任法を設け、勞働者が服役中、負傷したる場合には、雇主をして相當の手當をなさしむる事

(16) 勞働組合法を設け勞働者が自由に團結する事を公認し、且つ相當の保護を與ふる事

(17) 小作人保護の法を設くる事

(18) 保險事業は一切政府事業となす事

(19) 裁判入費は全く政府の負擔となす事

(20) 普通選擧法を實施する事

(21) 公平選擧法を採用する事

(22) 選擧は一切直接とし、且つ無記名とする事

(23) 重大なる問題に關しては、一般人民をして直接に投票せしむるの方法を設くる事

(24) 死刑を全廢する事

(25) 貴族院を廢止する事

(26) 軍備を縮少する事

(27) 治安警察法を廢止する事

(28) 新聞紙條例を廢止する事

次に第三章と目すべき部分は、『此の如く社會主義を經とし、民主主義を緯とし』たる我黨に對し、『頗る過激なるもの』との『誤解を有するもの』もあらうと云ふので、それについての詳細の說明になつて居る。それが凡そ八段二ページに亘つている、左にその要點を抄錄する。

『……抑も現社會の組織は個人競爭主義にして、金權も政權も一方に集注し、多數の人民は奴隸の如き位置に立』てり、『今や器械の發明益々精巧を極め、……勞働者は益々……工場工業に從事し、……勞働なるものは一の商品と同じく、……一朝需要の途絕えて工場閉鎖せらるゝに及べば、數萬の壯丁は……飢餓の苦境に陷らざる可らず』、是れ現社會組織の不完全なるが爲めなり

「……・……、……、……に……、……、一都會に於ける大地主の如きは其適例』であり、其他、鐵道、電氣、瓦斯等の如き、『獨占的性質を有するもの、私有を許すは、即ち少數者を特に庇保する所以なり』

『普通の生産事業も近時漸く獨占的性質を現さんとするに至』れり、

『彼のツラスト…を見よ』斯くて『資本家と勞働者の區劃益々判然し地主と資本家は生財の二要素を占有し、勞働者は其生産物の大部分を彼等に納むるにあらざれば其使用を許さ』れず、我黨は『土地、資本、勞働の三者を協同一致せしむるは人民多數の幸福を増進する所以なりと信ず』『社會主義は決して資本及び土地を無視せんとするものにあらず、唯資本家と地主を、、せんことを期』す

『更に進んで社會主義は分配を公平にせんことを目的とす。』『現社會に於いては『報酬は必ずしも其人の勤怠賢愚に依ら』ず、『人生の禍福は…恰も富籤を引くの觀あり』『出發點を異にしたる者を捕へ來て、これに競爭を試みよと言』ふは殘酷なり、『現社會の自由競爭なるものは一として此種の競爭にあらざるはなし』我々が消費稅に反對し直接稅を主張するが如き、『何れも公平なる分財を施行するの手段』なり

『社會主義の抱負は何人にも職業を與ふるの保證をなし、…充分なる衣食住の供給をなし、疾病老衰等に對しては丁寧なる手當を爲すに在り』『故に社會主義の社會は即ち一大保險團體』なり、

『人或は社會主義を誤解して、全社會の財産を悉く沒收し、更に之を全口に平分するものなりと云へり、然れども是れ誤謬にして殆

「……人は先づ人々をして平等に教育を受くるの特權を得せしめざるべからず』理想としては『義務教育の年限を少くとも滿二十歳までとな』すべきなれども、姑く高等小學終了に止む

『人の生を此世に享くるや、貴賤貧富の差別あるべき理なし、…貧富の懸隔は…尙ほ幾分か忍ぶべき所あり、然れども、、、の如きは』許すべからず、『故に…第一着手として、、、、、、、、するは自然の順序なり』

『次に民主々義が極力反對せんとするものを、、、なりとす』、、、、、する表面の口實は、、に備ふるに在りと雖も』其實は『、、、、、、市場を開かしめ、以て其貨物の販路を擴めんとするか、若しくは內國に於ける、、、、、、、、、、』『是れ即ち資本家てふ階級を保護せんとするものにして、平民は之が爲に堪へ難き租稅を負擔しつゝあるなり』『若し、、、、、、、するあらんか、其結果や實に恐るべきものあり』『我黨は、、、、、、、、、、に至らしめんことを期す』

『吾人の說は頗る急劇なりと雖も、而も其手段は飽くまでも平和的なり、吾人は絕對的に、、を非認するものにあらずや、、の上に於て已に然り、況んや個人の間に於ておや、彼の白刃を振ひ爆裂彈を投ずるが如きは、虛無黨或は無政府黨の事のみ、我社會民主黨は全然腕力を用ゆることに反對す』『吾人は劍戟よりも銳利なる筆と舌とを有せり、、、、よりも尙ほ有力なるべき立憲政體を有せり』

『帝國議會は吾人が將來に於ける活劇場なり』それが爲には『普通

選擧を斷行』し、『公平選擧法を採用』するの必要あり『然れども教育なき人民に選擧權を與ふることは多少の危險なきにあらず』『殊に今日の如く貧者が全く富者に壓抑せられ居る場合に於ては、彼等は必ず資本家の意向に從つて投票せざるを得ざるべし』故に『彼等に適當の教育と訓練を與ふるは刻下の急務なり』『吾人は彼等が自由に團結し得るの法律を定めんことを望む、團結は勞働者の生命にして……唯一の武器なり』

猶『宣言』の終に簡單な『黨則』が載せてあるが、第一條には『我黨は社會主義を實行するを以て目的とす』とあり、第四條には『一定の職業を有する者、會員二名の紹介を以て、入黨を申込み、評議員會の決議を經たる時は會員たることを得』とある。

この社會民主黨の結社と、その宣言の發表とに對して五月廿日の萬朝報は『新政黨出づ』と題して、大要次の如く論じた。『政黨に高尚の主義ある理想あらん事は、吾人の久しく渴望せし所なり、今や社會民主黨なる新政黨の組織せらるゝに會ふ、夫れ或は庶幾からんか』其の宣言綱領を讀むに從來政黨の宣言綱領と甚だ其選を異にする者あり』『從來政黨の主義綱領と稱する者、千篇一律、漠然たる數行の抽象的文字を臚列するに過ぎず。』然るに『民主黨の宣言は之に反し、堂々數千言、其主義理想と實際的經綸に就て極めて詳細なる方針意見を發表し、一に之に依つて終始せんとするの概あるは、其意見の當否は姑く措き、先づ吾人の心を得たる者也。』彼等は社會主義を經とし、民主々義を緯とすと呼號す、……現時世界文明の大勢は明らかに此等大主義を歡迎する者なるは疑ふべからず、獨逸の新社會民主黨は……今や獨逸議會に七十有餘の議席を有するに至れり、我國民主黨にして眞に正義なる主義方針に依つて……渝るなくんば、其發達決して難きにあらざるべし。』

然るに時の政府たる伊藤内閣の内務大臣末松謙澄は、即日社會民主黨に解散を命じ、宣言書を沒收し、それを掲載した諸新聞を罰金に處した。斯樣な穩健な平凡な内容のものが、當時に在つては、矢張りそれだけの處分を受けねばならぬのであつた。

「社會民主黨」は唯だ其宣言を天下に發表せしのみにて滅亡したり、然れども其一たび世に公にせらるゝや、社會は靑天に霹靂を聞けるが如く驚きの眼を開いて之を迎へたり。』(石山旭山著、日本社會主義史)

堺はこの時、黨の成立と同時に入黨する打合せになつて居たが、禁止の爲め果さなかつた。彼の日記の廿二日のくだりに次の如く書いてある。『今朝末松の處に行つて全力を盡して鎭壓すると云つて居る。末松は内務大臣として、全力を盡して鎭壓すると云つて居る。末松も目先の見えぬ事を云つてゐる。丁度、昔の人が自由民權家をいやがつたやうな事を云つてゐる。仕樣がない。末松曰く、社會黨は列國共に持てあまして、全力を注いで鎭壓に力めてゐる、何も物ずきにあんなものを日本に持つて來なくてもよい。列國同樣、我が政府も全力を注いで鎭壓せねばならぬと。丁度昔のメテルニヒが云つたやうな調子だ。』末松は堺に取つて、同鄕の先輩としても、又毛利家の維新史編輯所總裁としても、深い因緣のある人であつた事、『傳』に記した通りである。

× × × × × × ×

社會民主黨が禁止されてから一個月あまりの後、萬朝報を中心として『理想團』が組織された。

る。これ等のものは實にメイエリホリドが革命後のソウエート演劇に與へた寄與であり、また同時に世界の演劇藝術に與へた貢獻でもあつた。

メイエリホリドの位置について

秋田雨雀



メイエリホリド

私はメイエリホリドの所謂「劇場の十月」の時代を見ない。私達の見たメイエリホリドは大獅子吼の後の沈靜の時代であつた。十月革命後のソウエト劇壇に第一聲を擧げ、「劇場の美學」の代りに「社會の嵐」を吹き込んだメイエリホリドの仕事は、一九二〇年のウエルハーレンの「曙」以來去年のグレボイドフの「智慧からの悲しみ」まで約八年の間に十二篇ほどの大作を上演してゐる。單に劇場美術の上からばかりでなく、近代のあらゆる藝術の歷史の上に殆んどその比を見ないほどの活動といつていゝ。メイエリホリドの演劇の上の仕事はソウエート・ロシヤではもはや殆んど絕ち切ることの出來ない根を持つてゐる。ソウエート・ロシアの現在の左翼的演劇に關係してゐる作家、俳優、美術家で直接、間接にメイエリホリドに影響されてゐないものはないほどだといはれてゐる。メイエリホリドの演劇上の功績は、第一に劇場の幕を切落して、舞臺自身にソウエト・ロシヤの使命を呼吸させたことである。第二は劇場の中に蓄積された粉飾的要素を驅逐して幾何學的要素を入れたことである。第三は俳優の演技に所謂「ビオ・メカニズム」のプリンシプルを確立させたことである。第四は劇場に於けるコレクテイウイズムを完成させたことである。

然し私達がメイエリホリドをモスクワの劇場で見た時は、彼はひどく疲れてゐるやうに感ぜられた。メイエリホリドはそのシーズンの間にはオストロフスキーの「森」、ゴーゴリの改作「檢察官」トレチヤコフの「支那よ、吼えよ」及びグレボイドフの「智慧からの悲しみ」を上演してゐた。私はこの內後の三つしか見てゐない、然し私にもメイエリホリドの開拓して來た道の全長がほゞ理解されたやうに感ぜられた。彼にとつては、今は一つの大きな嵐の後のやうに感ぜられた。メイエリホリドが「智慧からの悲しみ」の初演に舞臺上に立つて觀客に何か言つてるのを見ると、病んでゐる獅子のやうに感ぜられた。然しこれは一つの豫感に過ぎなかつた、然し演劇の實際はその事實であることを確めた。「智慧からの悲しみ」は明かに失敗であつた。この失敗は何から來てゐるか？　私はメイエリホリドの持つてゐるテムペラメントから來てゐると思つた。彼はイデオロギストとしてはコムニストである、無論彼は黨の人でもある、然し彼

れの素質はそれを裏切つてゐる。メイエリホリドの演出には演劇のテクニクの上での「十月」は感ぜられても、眞の意味での「十月」は全く感ぜられなかつた。ニヒリステックな要素、エロテシズム、感覺の不統一性、こんなものは、あの「檢察官」に於いても表はれてゐたが、「智慧からの悲しみ」では一層烈しかつた。ソウエト・ロシヤの左翼的演劇の持つ共通性である「健全性」や「明さ」には彼れに於いては少しも演ぜられなかつた。「智慧からの悲しみ」はソウエト・ロシヤの社會的狀勢から甚しく逆行してゐる。これは寧ろメイエリホリドには恐く待ち設けなかつたものであつたに相違ない。

　メイエリホリドは「ソウエトには自分の演ずべきほどの戯曲が存在しない」といつて、ドイツへ行つたために、メイエリホリド劇場が閉鎖されるかも知れないといふ噂さをきいた時、私はすぐに、ゲルツエンの家に於ける學者達の「智慧からの悲しみ」に關する批判會の一夜を思ひ出した。この批判會ではメイエリホリドは完全にソウエト・ロシヤの外にゐると思はれた。

　然しメイエリホリドのこの位置は單に「智慧からの悲しみ」の不成功から來たものではない。メイエリホリドが種子を蒔いたといはれる左翼劇場例へば革命劇場、ワフタンゴフ劇場、其他の移動劇場の進出と、甞つてメイエリホリドが手袋を投げた右翼劇場の左翼への進出である。その二三の例は藝術座及び小劇場の目醒しい活動であり、最右翼の劇場といはれる大劇場さへ、革命的オペラを創作して非常な成功を收めてゐる。メイエリホリドはその觀客としては、殆んど勞働階級を吸收する力を失つてゐる。觀客は殆んどスペシアリストの群といつてい〻、然もそのスペシアリストの群さへも、最後の演出に對しては手を振つたのである。メイエリホリドの絶望はソウエート・ロシヤの創作力の欠乏を少しも意味するものでなく、メイエリホリドの仕事の一段落をつけたといふ事實を示すに過ぎないのである。このやうな藝術上の問題さへも、ソウエート・ロシヤに對する逆宣傳に利用される恐れがあるから、私達ははつきりとその眞相を見なければならない。

　この稿を終へた時、高橋晩成君によつてメイエリホリド復興の報がもたらされた。それによると、メイエリホリド劇場の閉鎖に關する教育人民委員會中央藝術局の決議に對して共産黨青年聯盟、職業組合、各新聞社及び對外文化聯絡協會、其工場やクラブ等からメイエリホリド存續の提議が出たので、九月廿八日黨、勞働組合諸機關、モスクワ諸新聞代表者からなる藝術評議會を開催し中央藝術局のメイエリホリド座解散決議に抗議した。採決の結果メイエリホリド座は從前通り存續されることになり、メイエリホリド自身も健康回復次第モスクワに歸ることが希望された。メイエリホリド劇場はメイエリホリドの指圖の下に、同劇場にとつては記念すべき作物であるマルチネの「夜」の改作「大地は逆立つ」オストロフスキーの「森林」にボクダサリヤンやエルドマンの新作を加へて花々しく開演の運びに到つたといふことである。この事實によつて、メイエリホリドの事件は、ある人々のいふやうにソウエート・ロシヤの創作の衰頽を意味したものでなく、メイエリホリドの位置及び政府とメイエリホリドとの經濟關係によるものであることが明瞭にされた。私はメイエリホリド及びその一座の若い時代の健康なる活動を希望して止まない。(一九二八一一、三〇)

王正廷論

大西齋



王正廷

一

本論の主人公と私とは、大正十一年頃、北京において、頻繁に會見もし、議論もした。今、人物論を書くことになるといろ〱の思出が浮んで來る。彼れの印象とも何ともつかぬものから、國民政府の外交を双肩に擔つてゐる現在の地位に就いての感想といつたものを、雜然と書いて見ようと思ふ。改造社の期待さるる命題の本旨に副ふかどうかは、私には分らない。讀者の便宜の爲めに、先づ、彼れの略歴を書き付ける。

生れは浙江省奉化縣、前清中北洋大學に學び、卒業後湖北高等學堂に教鞭を執り、後日本に留學、日本より更らに渡米してエール大學を優秀の成績で卒業、歸國後上海中國キリスト教青年會の幹事となる。民國革命の勃發に際し、黎元洪の下に活躍して、湖北軍政府の外交部長となり、民國元年北京第一次內閣の工商總長代理となる。次いで國會召集とともに參議院副議長に當選、民國二年袁世凱のために國會解散の厄に會つて上海に歸臥、袁歿後入京また副議長となる。民國六年國會また解散。廣東に奔つて非常國會の副議長となる。七年南方政府より米國に派遣さる。八年巴里會議に北京政府より全權に任命、九年實業界に入る。十年[illegible]、十一年三月山東懸案事宜督辦任命、六月山東交渉の全權となる。十一年十一月汪大燮內閣の外交總長就任、同十二月山東協定全部調印、汪內閣辭職に際し十日を限つて總理代理、十二年一月內閣更迭とともに司法總長に任命され一週間にして辭任、十二年十一月日本震災後の情況視察のため渡日、歸國後露支交渉事宜督辦となる。十三年三月カラハンと露支豫備協定に署名して不成、顧維鈞に引繼ぐ、十三年馮玉祥のクーデターに依り、黃郛とともに活躍、黃內閣の外交兼財政總長に就任、段執政々府成立と同時に辭任、關稅特別會議の開かるゝや許世英內閣の外交總長に就任、引續き關稅會議に努力す。十五年三月の政變に依り國民軍撤退するや辭職して上海に去る。馮玉祥軍の河南進出とともに十六年蔣介石との間に聯絡の役に當り、馮の下に隴海鐵道督辦となる。十七年五月三日濟南事件の爲めに黃郛外交部長の失脚するや、六月十四日正式に國民政府外交部長に就任（支那人名鑑に據る）

閱歷はざつと以上の通りである。彼以外の米國レターンド・スチューデント出での外交官として、知名の先輩を序でに一寸擧げてみる

と、古いところでは唐紹儀・伍廷芳があり、北京外交系として重きをなしたものに、顏慶惠・顧維鈞があり、現駐米公使の施肇基及び前國民政府の外交部長にして、目下駐米特使たる伍朝樞がある。國民政府を中心にその外交部長になつた者を數へると、陳友仁——伍朝樞、黃郛、王正廷といふ順序である。

二

さて、いよ〳〵本論に入る。王はその閲歴の示すやうに、最初南方派に屬し、外交官が振出しであるが、外交官から政治家、政治家から實業家、實業家からまた外交官生活に舞戻り、うだつが上らぬと見れば、南方派を颯々と見切つて、北方派に鞍替へし、更らに潮時を見計らつては、南方に復歸するし、轉々として變通自在なところ、テイピカルのオッポチニストである。一つの主義に忠實なるに彼れは余りに目先きが見え過ぎる。併し、外交官として彼れを見れば、公平なところ、今日の支那において最もはまり役者だといつていいだらう。

王の名聲が、世間一般に高まつたのは、大正八年、支那全權として巴里會議に顧維鈞と轡を並べ、日本全權を相手に廻はし、列國環視の裏に大見得を切つてからである。これが當つて本國でやんやと持て囃やされ、巴里會議の因緣から、彼れと顧維鈞とは、爾來支那外交界に不思議に先役を爭ひ、得意と失意の鎬を最後まで削り合つた。大正十三年、王正廷とカラハンの間に、露支豫備協定が成立したに拘らず、署名のことから端なくも内閣内に異議を生じ、突然、調印を取りやめることになつた。カラハンはこれに憤慨して、最後通牒を北京政府に叩きつけ、三日内に調印を迫るといふやうな非常手段を取つた。王正廷は、これがために辭職するに至つたが、この原因は別人ならぬ顧維鈞の功名爭ひからケチを付けたのが元(もと)で、王の功勞は鳶が油揚げを攫(さら)ふやうに、顧のためにまんまとしてやられた。

顧維鈞は直隷派との關係を恃み、吳佩孚の後押しで、王を尻目に出世して、遂に總理にもなつたのであるが、地方軍閥と始終した爲めに、結局は、全然立場を失ひ、最早や恐らく今後の活舞臺に浮び上る氣はないであらう。顧との競爭において、最後の勝利は畢竟王が博した譯である。王が馮玉祥に走つたそも〳〵の一つの動機は、吳佩孚と顧との關係に對するセイも、與つて力(ちから)があつたであらう。私の會つた印象からして王と顧を比較すると一つは男性的、一つは女性的、一方は政治家肌一方は事務家的、王にはヤンキー式の輕快さがあり、顧には小心翼々の氣眞面目一方で、老練と乳臭との差がある。

三

王正廷との比較においては、人物・才幹その他の點において、優るとも劣らぬものは、前任者黃郛である。彼れは外交總長となること前後二回であるが、よく〳〵運が惡い。一回は北京における張紹曾内閣の時であるが、當時國會の可決せる旅大回收案を日本に提起して一蹴され、その後間もなく辭任せざるを得なくなり、極めて短期間の外交總長たるに過ぎなかつた。第二回は蔣介石再起後の外交部長としてであるが、五月三日の濟南事件の爲めに致命的打擊を蒙むつて、これまた呆氣なく掛冠するに至つた。黃の前任者は伍朝樞で、蔣介石が武漢政府と分離し、南京政府を組織するや、外交部長に親任せるも、蔣介石

の失脚と運命を共にし、仕事らしい仕事を爲す暇が無かつた。

今日の王と比較して好個の對照を爲すものは、一時目醒ましい活動をなした武漢政府の外交部長陳友仁であつた。加奈太邊に生れ、歸國後は英字紙ガゼットを主宰して辛辣の筆を振つた。支那語は殆ど話せない男であるが、孫文に見込まれて秘書となり、民國十五年國民黨と共産黨の合併が成り、廣東政府の新たなる組織とともに外交部長となり、武漢進出後、英國を手玉に取り、思ふ存分に振舞つたのであるが、彼れの外交手腕といふよりも、共産黨の空氣につれて跳つただけで、更らに本當のことをいへば、赤露外交の忠實なる手先きを勤めたといふまでだ。

巴里會議で書生論を振廻はした當時の王正廷と、今日の王正廷とでは余程違つてゐる。それを一緒にして同じやうに考へるのはちと可愛相である。大正十四年、彼れは巴里會議以來始めて日本と實際問題解決の衝に當り、小幡公使との間に山東問題の細目協定を無事に成立させた。當時小幡公使とは、毎日のやうに顏を合はせて、爭論もやれば喧嘩もやつた。ところが、男性的な[illegible]ないで、喧嘩もやる代はり、徹宵痛飲して談笑の間にも話を進めるといふ風で、案外面倒な難問題が、スラ〳〵解決していつた。小幡公使も王との交渉には張り合ひがあり、パキ〳〵解決に運んだので、「王正廷は思つてゐたより存外話せる男だよ。人間もしつかりして、顧維鈞などとても比較にならぬ」と、度び〳〵口に出して推賞したものだ。最近日本との交渉が行詰つてゐるのに手を焼いた王正廷が、小幡君でも南京に來てくれゝばいゝがとこぼしてゐるさうだが、小幡大使にはいまなほ知己の感があるであらう。山東問題に次いで、大正十四年北京に關税特別會議が開かれた。この時日支の關係は、非常に良好であつた。日本の日置全權が關税自主の承認演説を會議の劈頭に試みて、支那側を歡喜せしめた爲ではあつたが、山東問題解決の好印象のほとぼりが倘さめなかつた事も拒まれまいと思ふ。

四

それが國民政府となり、王正廷が外交部長となつてから、田中内閣との間に何一つ甘く行かない。丸で藤八拳と狐拳の勝敗爭ひ同[illegible]日本當局から見ると、王正廷がかり細工をやり、或は人氣取り本位で策を二三にし、或は自己の地位擁護のために心にもなく左傾派に迎合してゐるやうに取れるが、必らずしもさう計りではない。王正廷の外交手腕は、國民黨の對外方針に依つて厳重に牽制され、拘束され、自由に埒外に出ることを許されないのである。日支通商條約の廢棄呼ばはりは、日本から見て、奇怪至極の沙汰であるが、不平等條約撤廢を一大スローガンとする國民政府自身の立場からすれば、先方としてはやむを得ないものがあらう。緩急を辨へざる廢棄手段の可否は自ら別問である。國民政府の外交部といつても、事實外交をリードするからくりとたつてもゐなければ、權能ももつてゐない組織があつてみれば、王正廷として、黨部の方針や意向に從つて動くのは、怪しむに足らない。最近左傾派の勢力漸次加はり、日支交渉の停頓を招來せる原因である濟南撤兵を、突如要求する程、王正廷が俄かに硬化したのは、一つに内部的事情に基くものといはれてゐる。無論さうした關係もあるであらう。王正廷と

しては、歸り新參であり、色々氣兼もあらうし、また黨内外に反感をもつてゐるものも尠くないであらう。王の國民政府外交部長をかち得たのは、馮玉祥の勢力を背景としてであることは確かである。當時王の入閣をもつて馮玉祥の南京國民政府における增大と見られ、今日もなほ王は馮の代表と一般に目せられてゐるが、馮とは無論よく、蔣介石とも同鄕の關係があり、機を見るに敏なる彼れが蔣、馮兩者の間の接觸にぬかりのある筈なく、從つて彼を簡單に馮の代表とのみ觀測するには、彼自身の心事と關係はもつと複雜なものがあらう。私の見るところでは、彼れの立場は、日本との外交に關する限りにおいて、毫も行き詰つてゐない。何となれば、日本外交との對立乃至は反撥は國民黨對外方針の然らしむるところであるからである。英米との外交においては、中味は兎も角く、彼れは一應立派に成功してゐる。彼れに取つての問題は外になくて內部關係にある。最近ベルギーおよびイタリーとの條約が、國民政府內部で反對に會ひ、批准問際に延期され、修正を兩國が背んじなければ無效とせよと强硬なる主張を爲すものがあり、王の地位はために、窮地に陷らんとしてゐるとの報がある。またこの裏面には、王を快よしとしない連中が、國民黨の生拔きなる伍朝樞を迎へんとする運動と關聯してゐるとの說がある。これらを綜合して考へると、王の地位もだんだん危く、何時動搖しないとも限らないとさへ思はれる。

五

外交の實際に通じ、而かもやゝ老練を加へ、且つ日本のことも比較的呑み込んでゐるのは王正廷である。國民政府の外交部長として一番適任者といつて過言ではないであらう。併し、適不適は問題でなく、國民黨の內部關係によつて左右さるゝから、王の地位は、今後ますます〳〵その不安に度を加へぬとも限らない。王正廷が若し失脚すれば、誰が王正廷に代はつて、國民政府の外交部長の椅子に就くにしても、王正廷よりは、更らにずつと左傾被ぶれの政策を例外なしに實行しかねないものであること。しかもそのごとの確實さは豫じめ斷言して差いて、恐らく間違はないだらうと思ふ。(完)

政界展望臺

馬場恒吾

田中久原の金權政治

田中久原の共同經營に依る金權政治は今歡樂の頂上にある如くして、實は、其中に自己崩壞の要素を醱酵しつゝある。鼻歌を吟ひつゝ、沒落すべき所に沒落するのである。

現に政友會の長老と云はるゝ岡崎邦輔氏は此頃の政治は厭になつたとつくゞゝ歎息する。其理由は以前にも政黨には金が付きものであつた。併し金丈けで政治家が勢力を得るものではなかつた。此頃のやうに金さへあれば、直ちに大政治家になれると云ふのでは、心あるものは政界の隱居になるより外はないと。

然るに政海は滔々として金權に向つて、物すごき勢で渦卷いて行く。久原遞信大臣は實業家出身である丈け、此渦卷きの中心人物となつてゐる。

御大典中に彼れは住吉の邸宅に朝野二千人の客をした事がある。其時の費用を物好きに勘定した者がある。曰く京都大阪の一流の藝者五百人、これを其道の通人に聞くに一人五十圓はかゝる。即ち二萬五千圓。京都から特別列車を仕立てゝ出した。鐵道省の役人だつた政治家の評價に、普通ならば、かうした列車を仕立てると三萬圓は要求される。山海の珍味は勿論だが、オレンヂは米國加州、林檎は加奈陀からと云つたやうに、これも各々出來付きだ。總ての費用十萬圓は下るまい。震災手形で約、、、、から國家の厄介になつてゐる久原としては少くとも不謹愼だと。

この宴會があつた夜、久原遞相は憲政一新會の田中善立氏等と會見して、對支問題を中心として提携する事を約した。田中氏の談話として新聞は報じて曰く、政治運動には金が要る。その金の出所を詮索する必要はないと、名古屋の新聞には、憲政一新會の金は辻嘉六氏が宮崎縣の錫の山を久原に渡して作つた金のやうに出てゐる。

引續いて久原は京都に居る床次氏を訪問して支那問題を語つた。其時の新聞には此會見では提携も何にも出來なかつたと語られてゐる。併し此新聞への發表は久原、床次兩氏申合せの結果である。例へば久原

の云つた首相へ屆け濟みと云ふ言葉は床次氏が此言葉を案出したのだと傳へられた。果して後になつて田中首相と床次との會見があり、床次は其足で久原を訪ねた。床次の支那行きの話しは最初に久原が床次を訪ねたときに薦めたと推察せられてゐる。

一體かうした金が何處から湧いて出るか。

例へば鐵道省が百五十輛の電氣機關車を必要とする。平生ならば、其注文の大部分は比較的設備の整つてゐる三菱、三井系の工場に行く。所ろが、此中百輛は久原の日立鑛山の工場に注文された事實がある。電機業者の語る處に依れば、電氣器械は遞信省の監督檢査の下にある。だから遞信大臣に睨まれては器械の合格が六ケ敷い。それ故に久原の工場に注文する方が便利だと。これは別に久原の責任ではないが、さうした事情で、産業界不振の今日でも、久原の工場は日夜兼行の大繁盛だ。

日本郵船會社が米國航路に必要なる優秀船を作らんとする。それが大阪鐵工所に注文される。大阪鐵工所は久原系である。

吾々は金權政治の何物であるかを見せ付けられてゐる。將來も尚此上に見せ付けられる可能性がある。

例へば金錢萬能を信ずるものは、金さへあれば選擧に勝てると思ふ。それ故に、田中久原の政權は來るべき議會を解散する作戰に出でずやと疑はれてゐる。彼等の頭には民意を尊重するとか、政策で爭ふとかの作戰は浮んで來ない。政權を握つて、金の出來易い時期に總選擧を行ひ、以て此不安の政局を安定せしめると云ふのが、彼等の最も早く考へ付く戰術である。それ故に、議會解散の説が現はれて來た。

かうした金權政治は其本質の中に社會の、、を惹き起す作用を有つてゐる。啻に國民の無産大衆がそれに反感を起すのみならず、同じ支配階級にあるものでも、金權の直接の恩惠に浴せざるものは自然に反對勢力を結成する。例へば同じ政友會内部に於ける久原系と鈴木喜三郎系の利害の衝突がそれである。久原は田中首相をして今暫らく現在の地位に居らしめ度い。其内に自分の羽翼がなれば、自分が政友會總裁若しくは總理になり得るからである。鈴木は之に反して、田中が今引退すれば自分が政友會を統率するけれども、暫らくすると久原が統率の役に回はるだらうと思ふ。此對抗が政友會内部に不安定の空氣を漂はしてゐる。

前には政友會の策士小泉策太郎氏が總選擧に際して巨額の金額を田中に提供せんとした。田中は自分には用意が出來たからと云つて、其提供を拒絶した。それから、田中と小泉の感情が疎隔し、小泉は脱黨するに到つた。これは誰れでも知つてゐる事實である。所ろで今から思ひ合はすと、田中の用意と云ふのは久原の金であつたであらう。一つの金は他の金を排斥す。久原の金は引力と同時に反撥力を發揮してゐる。

田中は久原を外務大臣にせんとして、元老西園寺公に持込んだ如く

[illegible]なつた。其代りに、田中に向つて、今に重要な時局なるが故に、首相が尚暫らく外相を兼任してゐる方が望ましき旨を云つた。所ろで、これが滑稽な結果を生じた、と云ふのは田中をして外交は俺でなくてはならないのだと云ふ自惚れを起さしめた事である。

金權政治はかくして自己崩壞を急ぎつゝある。だが併し、假りにそれが急に崩壞せず、金權政治が極端に勢力を張り、金權に阿附せざれば、人にして人にあらずと云ふ社會狀態が出現したとしても、それは決して日本の政治的改革の來る時期を遲くするものでない。或は却つてそれを促進する機會となるのである。

床次氏の支那行

床次竹二郎氏の支那行きは今から六年前、後藤新平伯（其時は子）が露西亞のヨツフエ氏を日本に招いた故智を繼承したものと稱聞する。ヨツフエの來る前、日本と露西亞との關係は極端に惡るかつた。西伯利亞出兵が祟つてゐたのである。ヨツフエ後藤の談判は不調に終つたけれども、それが日露諒解の緒となつた。其時から、兩方接近し初めて、今は帝國主義的列國中、日本が露西亞と最も親交ある國の一つだ。内心は兎も角として。

日本と支那との關係は、ヨツフエが來る前の日露の關係のやうに惡化してゐる。こゝで、床次が支那に行き、そして各種の懸案を片付けこれを一轉機として日支關係がよくなるであらう。さうなれば日露關係を好轉せしめた後藤子ほどの功はあると。この説は床次氏がまだ民政黨に居る時分から唱へられてゐた。

この説は一寸面白い思ひ付きと云つてよい。併しヨツフエを日本に呼んだときは後藤子は一個の浪人であつた。或意味に於て、日本の民衆の一人と云ふ格であつた。所ろで、床次氏が支那行きを發表したのは、彼れが田中首相に會見した機會に於てゞあつた。田中首相も賴んだと云はず、床次氏も賴まれたと云はないが、支那は政府の意を受けて來るとしか見ないであらう。内田康哉伯が歐洲に行き、林權助男が滿洲に行つたと同じ格に取扱はれる。

それでも、床次氏の支那行きに依つて、日支關係が好轉するならば、此旅行は必ずしも非難するには當らないが、吾々は此行が却つて火に油を注ぐ結果になりはせぬかと思ふ。

日支關係の惡化したのは山東出兵と、張學良に對して南北妥協を阻止した爲めである。それのみが原因でなくとも、それが重なる原因である事は何人も疑はない。田中外交の強硬政策が祟つたのである。

床次氏は民政黨を脱黨するとき幣原外交の軟弱さを罵倒した。それが今度田中首相と外交問題に共鳴して支那行きとなつたとすれば、それがどうして日支感情の融和になるか。後藤子が良かれ、惡かれ、親露主義で一貫したのとは譯が違う。殊に床次氏が賴みにして行かうと云

ふ李烈鈞は今失意の人だ。失意の人同志が愚痴ばなしをしても、天下の大勢は動かない。

支那の大勢は今は殆んど日本の力ではどうする事も出來ない方向に動きつゝある。

支那は今一黨專制になりかゝつてる。一黨專制の國が今世界に鼎立してゐる。露西亞の共產黨專制、伊太利のファシスト專制、支那の國民黨專制がそれである。專制はそれが誰れの專制であつても、專制する方には都合がよからうが、專制される身には成り度くない。吾々は專制と聞いた丈けでも窒息する感じが起る。民衆は、、、、、、、、に向つて爭つて來た。今後も其戰ひを熄めないであらう。

と云つて、支那が國民黨專制になるのを、日本がどうする事も出來ない。一黨專制ならば一黨專制として交渉するより外はない。

日本に於ける無產政黨が分裂してゐる如く、國民黨内にも右翼、中間派、左翼、共產黨がある。表面は單一に國民黨員と稱してゐる。全國代表會議が黨幹部を選擧し、黨幹部が政府を指揮する。其形式はソヴイエトに似てゐる。

蔣介石は共產黨を壓迫した。併し共產黨員は國民黨内に侮るべからざる勢力を有してゐる。新年早々に開かるべき全國代表會議に於て共產黨が優勢ならば、今の國民政府はどう顏振れが變るか判らぬ。從つて、此代表會議以前には、國民政府の主腦者も、思ひ切つた行動は出來ない。寧ろ代表會議を前にして戰々兢々たる有樣だ。

日本のやうに田中大將の號令で、政友會全黨員が右に向き、或は左に向くとは組織を異にしてゐる。國民黨に諒解を求めるには、其表面の首腦者よりに寧ろ書記局、又は細胞に諒解を求めねばならぬ。

それは床次氏の爲さんとする所でもなく、又爲し得る所でもない。蓋し彼れは表面に立つ名士と會見して、そして幾許か日支關係を視察して來るであらう。其視察して來た結果を何う使ふかは興味ある問題だ。

彼が新黨を樹立したときはさうする事に依つて、彼れは内閣が取れると思つてゐた。今はそれが夢であつたと判つた。併し床次自身が此夢を捨てたか否かは疑問である。若し支那から還つたとき彼れが尚此夢を見てゐるとしたら、彼れは支那で視察した事を内閣の攻擊材料に使用し、そして内閣を倒壞する事を企てるであらう。

若し此夢が醒めてゐたとすれば、彼れは同じ材料を以て田中に迫り、平穩に内閣を讓渡せよと彼れの得意とする所謂黑廻しの相談を始めるであらう。

若しそれも成功せずとすれば、彼れは外交に於て田中内閣を援助し或は外務大臣になつて入閣する手段を採る。

それ故に彼れの支那行きは、日支關係の好轉よりは、彼れ自身の身の振り方の好轉に役立つべく計畫されてゐる。

學園の自由何處にありや

實に此推移を[illegible]思つたのだ。併し[illegible]、、、、、、

自由なるべき學園に於て[illegible]

學生が少しく左傾的な思想を懐くと、學校は直ちに之に退學處分を喰はす、學生が間違つた思想を懐いて居るならば、それを正しき方に直してやるべく、教育するのが學校の役目ではないか。學校にそれを直してやる力がないと云ふならば、何ぞ自から信ずる事の薄きや。若し又それを直ほすことが面倒いと云ふならば何の爲めに、學校を建てゝゐるのか判らぬ。恰も病院が少し六ヶ敷い病人には片端から退院を命ずるやうなものだ。病院でも、さうした事をする病院は營利主義だと云はれる。學校が其眞似をするのは、自から學問の權威を否定してかゝるものだ。

昔しは學園の自由を以て誇りとしてゐた早稻田に於ても、其學風の變化が目立つ。

早稻田大學は前に社會科學研究を一掃した。今度は思想の右傾にも左傾にも關係なき雄辯會と新聞學會を消滅せしめんとしてゐるかの如く見へる。新聞の報ずる所を見るに雄辯會の會長、新聞學會の會長が辭職した。學校には教授若しくは講師を會長とせざる學生團體の存在を認めぬと云ふ規則がある。だから會長を失つた此二團體は最早公認團體ではなくなるのである。

何故に會長は辭職するか。それは學校當局と、其學校當局の意志に從はざる學生の間に立つて、板挾みの地位に居惡くかつた爲めであらう。だが併し、若し學校當局が自由に奔騰する學生團體の存在を嫌ふ[illegible]長たることを辭せしめ、さうして其學生團體を自然消滅に歸せしめる事が出來る。早稻田の場合がさうであつたか否かを知らぬ。只一般の空氣が其疑ひを起さしめる。

昔しは官立學校より私立學校が自由であつた。今は其反對だ。何となれば官立は國費に依つて經營されるが故に、資本家が直接に學校に干渉する憂ひがない。之に反して、私立學校は資本家の寄付金を貰ふ必要があるが故に、資本家の御機嫌を必要以上に顧慮する傾きがある。米國の私立大學を見れば、其色彩が鮮明に判る。學校の校舍は益々大きく、獨立の精神は益々細る。

僕のやうに、大隈老侯時代に早稻田の書生だつた者は、今日の早稻田に行けば只其輪廓の美に驚くのみだ。

だけれど、彼の老侯が反り身になつて、口をへの字に曲げて、如何なる權威にも頭を下げず、天下を睥睨して、隱然一敵國の樣子をしてゐた事を思ふと、今昔の感にたへない。

政府が反動的なは勿論だ。學校がそれに迎合する必要が何處にある。これは右傾とか左傾とか云ふ問題でない。學校當局に見識があるかないかの問題である。

學園の自由今何處にかある。誰れか、此自由の旗を守るものはないか。それがなければ、大隈御侯は泣くより外はないだらうと察せられる。僕は此所に學問の獨立が再び叫ばれる日を待つ。

十二無産政黨の統一へ

田所輝明

一

日勞黨はその立黨精神に於いて統一のための政黨である。昨年民大會に於いて「宗派分裂主義排除」の所謂單一絕對條件を以つて第一次合同を提唱した。その後一方、舊勞農黨の反宗派主義勢力は無産大衆黨を結成し、他方社民黨には合同勢力が擡頭して來た。こゝに於いて日勞黨は最小限統一の實現をなすべき時期に到達した。本年十月の擴大中央委員會に於いてこれが論議され、遂に一時中止の決定がなされた。かくて擴大中央委員會の決定は、統一運動の進行を一時停頓せしめた。しかし擴大中央委員會の討議によつて、全國の黨員の統一に對する熱意と要件は明らかにされた。それ以來、本部、特に麻生書記長は如何にして新らしきスタートを切つて、新黨準備會幹部の計畫しつゝある大左翼結成と社民黨幹部の計畫しつゝある大右翼結成を切斷する一大大衆黨結成を完成すべきかに苦慮した。麻生書記長が熟慮の結果求めたスタートは直接に大右翼結成の後陣を斷つ農民黨との合同であつた。かくて農民黨幹事長平野力三氏の提議に應じて書記長は內交渉を開始し、吾黨を中心とし民憲、農民、大衆黨をも含む一大大衆政黨の樹立の協定をなし、これを本部幹部に內示した。これに對して組合同盟側の大衆黨を含まざる大衆政黨樹立說と、他の大衆黨をも含む大衆政黨樹立說との間に議論が繼續されたが、一切を十二月一日二日の中央執行委員會の決定に委した。

二

農民黨との內交渉により、同黨よりの合同提議は十二月一日になされることに決定した。日勞黨も同日中央執行委員會と統一委員會を召集した。このことは三十日には一般新聞に發表された。當日になると正午突如として民憲黨より合同申込みあり、午後三時農民黨代表と屆を連ねて無産大衆黨よりも合同の申込みがあつた。その提議文は別項の如くである。

日本農民黨よりの合同申込み書

日本農民黨は貴黨に對して左の條件及び希望を付し卽時合同を提議します。來る十二月五日迄に誠意ある貴黨の囘答を切望致します。

條件及希望

一、兩黨は解黨して即時合同新政黨を樹立すること。但右希望條件は九州民憲黨中部民憲黨に對しては貴黨より合同を勸誘せられたく無產大衆黨に關しては貴黨に一任すること。

二、新黨黨名、役員、合同期日、その他の細目にわたる事項は各黨より選出の合同準備委員會に一任すること。

三、新政黨は日本の國情に立脚すること。

無產大衆黨よりの提議

勞農大衆が今や强烈に要求するところの無產政黨の全合同による統一政黨を實現せんとする吾黨と同一の目標の下に貴黨がその立黨の精神たる階級的正義に基いて『右翼結成』と勇敢に闘はれつゝあることに對して吾黨は心からの敬意を表します。

吾黨は現在の全情勢に鑑み絕對無條件に依る全無產政黨の全合同による統一への第一步として先づ可能的範圍に於ける各黨間にと合同問題についても協議會を開きたいと思ひます。

右協議會は十二月五日前後に成立せしめたいとの希望をも申添へて協議會の召集に關する件を貴黨にお任せいたします。

一九二八年十二月一日

無產大衆黨中央委員會

九州民憲黨よりの提議

無產政黨の合同統一は無產大衆が熱望し期待する唯一のものである。しかもそれが今日迄結成さるゝに至らなかつたことは日本の各無產政[illegible]する。

しかも無產大衆は燃えつゝある。合同の熱意と！統一の希望に！

支配階級の反動的彈壓が深刻果敢になればなるほど大衆の合同欲求は燃ゆる。この時吾等は何を爲すべきか？過去の一切の總決算として一路合同への突進であらねばならぬ。この認識は支配階級の攻勢と無產大衆が現實の要求に立脚した動かし難きわれらの確信である。故に吾が民憲黨の一九二八、一一、二六日の決議はその指導精神を同じふし、しかも過去數年間無產政黨の合同統一のために輝ける努力を有せらるゝ貴日本勞農黨の名に於いて全合同を即時提唱せられんことを希望するものである。幸にしてわれらの此の要求が貴黨の承認するところとならば我が民憲黨はこれに即時參加するものなることを言明するものである。

一九二八、一二、一

民憲黨中央委員會

三

十二月一日中央執行委員會は、統一委員傍聽せしめたまゝ、午後三時開會。

中央執行委員會――杉山元治郎(顧問)、松谷與二郎(會計監督)、吉田賢一、山名義鶴、淺沼稻次郎、河野密、加藤勘十、三輪壽壯、棚橋小虎、坂本孝三郎、須永好、(以上執行委員)平野學、清水武雄、田所

耶明（以上部長）（麻生書記長病氣缺席、河上丈太郎、宮本吉治、兩執行委員事故缺席）

無產黨統一委員會——杉山元治郎、金井芳次、松谷與二郎、三宅正一、森榮一、棚橋小虎、西村菊次郎、安藝盛、加藤勘十、坂本孝三郎、野口龍三、山名義鶴、今村等、（麻生書記長病氣缺席、石山委員事故缺席）

開會された中央執行委員會は、三黨の提議を直ちに統一委員會に附議し、執行委員會を徹夜續行すべきことに決し、同時に各黨の申込書の內容を紹介し『幸ひ開會中の我が黨中央執行委員會は誠意を以つてこれを受けとり、直ちに中央執行委員會及び統一委員會に附議し、出來得る限り速かに全無產大衆の要望に添ふべく決定した。我黨は立黨の精神たる戰線統一主義の旗幟を實現すべき絕好の機會に於いて邁進すべきことを誓ふ』と結ぶ聲明書を發表した。

四

山名委員を議長とする統一委員會は、先づ農民黨との內交涉の經過報告と質疑應答に始り、大衆黨も含むか否かに就いて、熱心な討議が續けられ、午後九時より十二時にかけて各委員別に意見を陳述し、多數意見と少數意見に分れたが、採決を行はず、そのまゝ執行委員會を再會す。執行委員會は夜を徹し討議を進め、二日朝二時より各委員、各部長別に意見を開陳す。多數意見と少數意見に分れたが、黨の結束を防衞する爲に採決を用ひず、朝四時一先づ休會し、二日午後一時より再會するに決定。その間に組合同盟側の考慮を懇請することになつた。

二日一時より執行委員會は續行された。連日の疲勞、睡眠不足に顏面を蒼白にした委員は、靜然として席についた。燃る如き愛黨の精神而かも妥協の餘地なき見解！　そこには憎惡の何物もない、互に正しきものと階級のための強硬！　從つて委員は一語一語を愼重にして議事を開始した。先づ組合同盟代表として棚橋、望月、上條、安藝の四氏より『二日朝五時より正午まで熟議するも、尙自說の正しきを信ずしかし、もし吾等の意見破るゝとも結黨以來二年苦鬪を共にせし同志と袂を分つが如きことは斷じてしない』と交々悲痛の淚を以つて陳述された。列席の各委員は唯々頭をうなだれて淚をうかべたのみである

その後二三の討議が行はれたが、黨の最大限の平和維持と、組合同盟の純情なる愛黨心に敬意を表し、執行委員會は採決を忌避し、一切を松谷杉山兩長老と、麻生書記長の裁定に一任した。かくて三度休會後兩長老は書記長を訪ねた

午後七時兩長老の來着を迎へて執行委員會を續行す。杉山顧問はいとも靜かに口を切つた——『麻生書記長と三人で種々協議し、合理的なる妥協點を發見するに努めた。遂にこれを發見し得なかつた。よつて大勢の趨く所に從つて大衆黨をも含む合同に決定致しました』かくて提携裡に連日の重大要件は終つた●

その後執行委員會は方法手續に就いて左の如く決定した。

一、合同代表委員會(十五名)

麻生久(委員長)、河野密、加藤勘十、三輪壽壯、松谷與二郎、須永好、坂本孝三郎、三宅正一、吉田賢一、山名義鶴、金井芳次、森榮一淺沼稻次郎、望月源二、田所輝明

一、三日に加藤、淺沼、河野、田所の四名を代表として、各黨に別項の如き回答を齎らすこと。

一、合同代表委員會を連日開き吾黨の合同方針を決定すべきこと。

一、別項聲明書を發すること。

一、多數の地方政黨は協議會を通じて合同すること

一、中部民衆黨には、加藤執行委員を特派として送ること。

一、三輪、淺沼兩執行委員を代表として組合同盟に對して挨拶をなすべきこと。

聲明書

合同の前途に對する外界の揣摩憶測に拘らず、愈々四黨協議會の運びに至つた。分裂と排擠との暗雲を掃蕩して、合同統一の炬火は高く揭げられた。

過去二ケ年の苦鬪の成果!! 思へば感慨無量である。

我等は三友黨の諸君が萬難を排して合同統一に向つて邁進するに至つた誠意を多とすると共に、我等もまた誠意を以つてこれに應答せんことを誓ふ。

虚心坦懐、階級的正道を求むる心こそ、全民衆ノ歸一する心情でなければならぬ。希くば一切の行き懸りを排して一大階級的大衆黨の結成を!

右我等の衷情を天下に聲明す。

農民黨への回答

去る十二月一日付の貴黨よりの合同の提議に對し、我黨は一日二日の兩日に亘り、中央執行委員會及び統一委員會を開催した結果左の如く受諾の回答をなし得ることを喜びとします。

一、日本農民黨、無產大衆黨、九州民憲黨、及び日本勞農黨の正式代表を以つて合同協議會を開催すること。

二、第一回の合同協議會は來る十二月五日我黨本部に於いて開催すること。

農民黨への回答

去る十二月一日付の貴黨よりの合同申込に對し我黨は一日二日の兩日に亘り中央執行委員會及び統一委員會を開催した結果左の如き受諾の回答をなし得ることを喜びます。

一、貴黨よりの合同申込と同時に九州民憲黨、無產大衆黨よりも合同の提議あり故に貴黨並に各黨の代表者を以つて來る十二月五日我黨本部に於いて合同協議會を開催すること。

二、中部民衆黨に對しては貴黨の意思を體し我黨より勸誘者を派遣すること。

五

かくて四黨合同を通じて、中部民衆、革新勞働、信州大衆、神奈川自治、關西民衆、神奈川民政研究會、島根自由民衆、千葉勞農の地方政黨を含む十二政黨統一の怒濤はまき起こされた。

この十二無産黨の統一は如何なる意義を有するか？

一、日勞黨にとつては、その立黨精神の實現であり、昨年度大會以來の統一方針の實行と大衆に對する公約の執行である。

一、階級運動に於いてそれは舊勞農黨幹部の企圖せる大左翼結成と社民幹部の計畫せる大右翼結成の後陣切斷である。更らに生誕する一大大衆政黨は、左に轉じては農民戰線を通じて新黨準備會の宗派主義幹部を孤立せしめ、右に轉じては社民黨內の分裂の幹部と合同の大衆の對立を激化せしめる。社民幹部にはこの合同に參加するか、或は獨自說を立てる二途その一を選ばねばならぬ。恐らく獨自說をとる。かくて關西大衆の合同運動は鮮かに浮ぼりにされてくる。反宗派分裂主義、反大右翼結成の旗は立つた。大衆は東京を見よ！　而して統一主義の新しき旗を見よ！　（十二月五日朝）

最近のプロレタリヤ文學と新作家

藏原惟人

一

プロレタリヤ文學はわが國に於いても亦既に爭ふべからざる事實となつた。そしてそれは啻に爭ふべからざる事實となつたのみでなく、また次第にわが國の文壇に於けるヘゲモニー（指導權）を獲得しようとしてゐる。このこのことは最近、過去の文壇から解決されずに殘された重要なる諸問題——所謂「藝術的價値」の問題、形式と內容との問題、文藝批評の問題、藝術性と大衆性との問題、等々の一般的文學的諸問題が、ブルジョア文學のではなくしてプロレタリヤ文學の陣營內に於いて、理論的に、また實踐的に、初めて正當に解決されんとしてゐると云ふ事實によつても亦これを云ふことが出來る。今や歷史的に正統的なるものはブルジョア文學でなくてプロレタリヤ文學であると云ふ風になりつゝあるのである。

わが國のプロレタリヤ文學は發生以來多くの段階を經過して發展して來た。初めてわが國にプロレタリヤ文學が唱へられた時、それは實際に於いては、現存秩序及び既成文壇に對する小ブルジョアジーの個人主義的反逆と勞働者の經濟主義的反抗との氣分の文壇に於ける反映であるに過ぎなかつた。しかもこれ等の「プロレタリヤ」作家達は、既成文壇に反抗しつゝも、尙且自然主義的な、表現主義的な、或はまた象徵主義的でさへある藝術的[illegible]ば、彼等自身がその本質に於いて自然主義者であり、表現主義者であり、また象徵主義者ですらあつたのである。このことは當時の秋田雨雀、小川未明、中西伊之助、江口渙、前田河廣一郎、金子洋文、今野賢三等の作品を見るならば、今となつては全く明かなことであらう。

所が一九二六年頃から、所謂文學に於ける「目的意識」と云ふことが問題になり初め、プロレタリア文學を小ブルジョア的軌道から、眞實にプロレタリヤ的なる軌道へ移さうとする運動が捲き起つた。この運動も亦、勿論、最初は唯古い傾向及び作家に對する漠然たる不滿と云ふ形に於いて爲されたに過ぎなかつたが、しかしそれは次第に意識的な傾向を取つて來た。そしてこの新しい傾向の波に乘せられて現れて來たのが、新しい作家では、——葉山嘉樹、林房雄、村山知義、黑島傳治、里村欣三、中野重治、久板榮二郎、鹿地亘、平林たい子等であり、やゝ古い作家から

は、――藤森成吉、前田河廣一郎、山田清三郎、江馬修等がこれに加はつた。これ等の作家達は、古い文壇的傳統に影響されつゝも何そこに何等か新しい、プロレタリヤ的な藝術様式を作り出さうと努力したのである。

然るに一方に於いて、所謂「目的意識」の誤つた理論とその强調とは、唯政論的な概念的な結論を作の中に置くことをのみ急いで、それが具體的な、藝術的な形象の中に具象化されることの必要を忘れ、やゝもすれば抽象的な「目的意識」さへあれば、それは成功したプロレタリヤ文學であると云ふ風に考へられる危險をともなつた。此處に於いてプロレタリヤ文學に、藝術的なものから政論的なものとなり、作品の中に扱はれた人物は、その現實性を失つて、作者の槪念によつて構成された公式主義的な「紋切型」となつた。この傾向は今は既にインテリゲンチャの・・・自己滿足として殆んど克服されてゐるが、しかもそれは一時わが國のプロレタリヤ文學から、所絕滅しようとする勢をさへ示したのである。我々は當時の「文藝戰線」「プロレタリヤ藝術」「前衛」等にその典型的な作品とその理論づけとを見ることが出來る。

しかし他方に於いて、プロレタリヤ文學に於けるこの傾向は、プロレタリヤ作家の或者をして、所謂「目的意識」からの機械的反撥の方向に向はしめた。それは、現象を全體としての歷史的過程の一部として見ることなしに、云ひ換へればすべての現象をプロレタリアートの解放と云ふ觀點から取扱ふことなしに、その引離された個々の現象の描寫に滿足しようとする傾向である。この傾向は現在「文藝戰線」に結成されてゐる作家の或者に特に顯著であるが、それはこれ等の作家をして古いレアリズムの藝術様式に近づかしめてゐる。我々はこれをプロレタリヤ的、或は農民的日常生活主義と名づけることが出來る。

かうして、これ等の種々なる傾向を含んだまゝ、わがプロレタリヤ文學は、一九二八年

二

○一九二八年のプロレタリヤ文學は、この年に於いて初めてわが國にプロレタリヤ・レアリズムの旗が高く揭げられたと云ふ點に於いて、特に著しい。プロレタリヤ・レアリズムなる言葉は、成程それが或る一部の人々によつて誤解され歪曲されたことは事實であるが、しかも多少とも新興文學に關心をもつ殆んどすべての雜誌の中に現れて來た。このことは勿論、決して或る人が偶然にプロレタリヤ・レアリズムを唱導したが爲にそれが流行になつたと云ふ風に解釋さるべきでなくて、それはわが國のプロレタリヤ文學が初めてこの問題を解決しなければならない、また解決し得る段階にまで成長したことを說明する以外の何物でもない。

○プロレタリヤ・レアリズムとは何であるか？ それは決してプロレタリヤ文學に於ける一つの流派ではない。それはプロレタリヤ文學が、、、、、、、、、、、、、、そして

を要求する前に必要な根本的態度に置かなくてはなら[illegible]い。ではプロレタリヤ・レアリズムは藝術家から何を要求するか？

それは先づ第一に、藝術家が、あらゆる現象を歴史的發展の必然の觀點から、云ひ換へれば、、、、、、、の觀點から見、選擇し、そして描いてゆくことを要求する。從つてそれは何でもかまはずに現實を片つぱしから「客觀的」に描いてゆきさへすればいゝのではない。それはまた、假令それがプロレタリヤ的なものであつても、日常の瑣末な生活を何等の觀點なく、瑣末に描いてゆく所の、自然主義的、日常生活主義的レアリズムではない。プロレタリヤのレアリズムは、現實の階級的藝術的表現の手段である。それは云はゞ英雄的革命的レアリズムである。

しかしプロレタリア・レアリズムは、それと同時にまた、自己の狹い階級的主觀によつて現實を勝手に粉飾し、改造する所の、公式主義的主觀主義とも異つてゐる。それは階級的であると同時に客觀的なプロレタリヤの眼をもつて、眞實をそのまゝに[illegible]い[illegible]て見、それを研究し、そしてそこから眞實に、、、なものを發見することを要求する。從つてそれは現實に於いて、、、、、なものを見得ず、自己の頭の中で「、、、」に思索しつゝある所の、小ブルジョア的、個人主義的革命主義の態度とは何等一般のものを有してゐない。作者の概念の中に構成された生活をでなくして、現實の生きた生活を描くこと――これがプロレタリヤ・レアリズムの第二の要求である。

このレアリズムの問題と關聯して、所謂藝術性の問題が、一九二八年のプロレタリヤ文學の一つの問題となつた。初期のプロレタリヤ作家及び批評家は、ブルジョア作家との論爭に於いて、時代を超越した絶對的な「藝術性」なるものはあり得ないと云ふ結論に到達した。我々も亦此の如き「藝術性」のあり得ないことには全然同意する。しかしこのことは決して藝術の本質そのものを否定することを意味しはしない。藝術は例へば科學や哲學[illegible]異る所以は、藝術に形象をもつて作られたものであると云ふことである。藝術性はその時代々々に於いて夫々異つた具體的な形相をもつであらう。しかしこの藝術の根本的な性質には變りはないのである。

このことは我々が最近問題となつてゐる所の藝術の大衆化を問題とする時に特に重要である。藝術はそれが眞の藝術性を獲得した時に最も強く大衆を動かし、そして原則として最も廣く大衆を捉へる（私は敢て「原則として」と云ふ、何故と云ふにそれは他の社會的事情によつて妨げられるから）。このことを我々はともすれば忘れ勝ちであつた。しかしこれを忘れて藝術に關する如何なる問題の解決もあり得ないのである。

わが國のプロレタリヤ文學が、その發展の道程に於いて、幾多の疾病に捉へられたと云ふことは、それはこの文學の若さから來る歴史的に「必然な惡」であつた。それは常にわが國に於いてのみではなかつた、我々の先進

者として世界に於けるプロレタリヤ文學の道を切り拓いて行つたソヴエートのプロレタリヤ文學に於いてすら、この同じ公式主義、日常生活主義、及び藝術性の缺除の疾病はあつたのである。しかし今や我々はこの疾病を克服しなければならない、また克服し得る所にまで來たのである。そしてこれ等の疾病を克服した時にのみ初めて、世界の、部分的にはわが國のプロレタリヤ文學は、眞に廣汎なる讀者大衆を捉へ、眞實にブルジョア文學に勝利し、文學に於ける眞のヘゲモニーを確立することが出來るのである。——一九二八年の日本のプロレタリヤ文學は、この勝利への第一歩を踏み出したと云ふ點に於いて、特に重要な意義をもつてゐる。

三

此の如く、一方に於いて、我々の前に立つたこれ等の理論的な諸問題を解決すると共に、同じ年のプロレタリヤ文學は、幾多の優れたる作品を提供して行つた。成程それはまだ本當に劃時代的な作品を生んでゐない。しかしそれにも拘らず、一九二八年の日本の文壇はプロレタリヤ文學によつてリードされてゐたかの如き觀を呈したのである。以前から名の知られてゐた作家の中では特に、藤森成吉、前田河廣一郎、林房雄、黑島傳治等が活動した。しかしこの年の最も著しい現象は、この年に幾多の優れた新作家が現れて來たことである。それ等は——「文藝戰線」の平林たい子、山本勝治、山内謙吉、「戰旗」の立野信之、橋本英吉、小林多喜二等である。

平林たい子をこの新作家の中に加へることは妥當でないこともないが、彼女が多少ともプロレタリヤ作家として現れて來たのは昨年になつてからである。この作者の初めの作品「嘲る」「投げ捨てよ」「施療室にて」等の主題を爲してゐるものは、放浪する一人の少女の悲慘な、しかし反抗に滿ちた生活である。これ等の作品に於いて作者は、これまで日本の文學に缺けてゐた新しい世界と新しい型とを展開して見せ、そしてそこで作者が敏感な眼と獨自な表現力とをもつてゐることを示した。しかしこれ等の作品は、その主題が個人的生活の限界を超へてゐないこと、及び作者の現實に對する態度が個人主義的、人道主義的、無政府主義的であることをも示した。しかし作者は昨年に到つて「夜風」「荷車」等に於いて、この個人的生活の限界を超へ、より廣い社會的なテーマを取扱ひ初めた。これは作者としては一つの大きな進展として我々がその將來を期待してゐたのであるが、「改造」に發表した「毆る」に於いて彼女は再びもとの無氣力な日常生活主義に歸つてしまつた。これは作者が現實を本當に、、、、、、的に見てゐない爲であつて、作者の取つた新しい形式も何等その本質を救ひ得てゐない。

橋本英吉は昨年中に、「棺と赤旗」、「揚水ポンプ」「逃亡」「發端」等を發表して、その才能を認められたが、彼から如何なる作家が生れるかは今の所未知數である。昨年中に發表されたものゝ中では「棺と赤旗」が最も優れてゐる。これは島に於ける炭坑のストライキを描いたものであるが、この作者は一般にか

なりに複雑な内容を簡潔な形式の中に[illegible]に盛り上げることを知つてゐる。しかしこの彼の才能は時には彼に災ひして彼は時々自分の形式の故にその內容を[illegible]たらしめてゐる。この作にしても尚書き殘された幾多の重要な問題を明確に描いたならば、より一層效果的であつたであらう。他の作品に於いては多少マンネリズムの危險もある。

橋本と並んで、或はそれ以上に我々がその將來を期待し得る作家は立野信之である。彼の作品では軍隊を描いた「標的になつた彼奴」、「豪雨」と、農村を描いた「どぶいたち」とがいい。これ等の作品は、作者が種々なるタイプを描くに優れた才能の所有者であることを證明した。軍隊や農村のタイプを彼程活々と描き得る作家は現在の日本に於いて蓋し多くないであらう。作者の選んだリアリスチックな而も彈力のある形式も亦注目に價ひする。しかし現在の作者の一つの缺點は彼が現在の軍隊や農村に於ける最も新しいタイプを描いてゐないと云ふことである。我々にとつ[illegible]のではない。彼が眞實に新しいタイプを發見してそれを描き出すこと――そこにこそ現代プロレタリア作家の重要なる社會的歷史的使命があるのである。この作者はその自己の才能をこの方面に向けた時初めて偉大な作家となり得るであらう。

この意味に於いて「戰旗」十一月及び十二月號に連載された小林多喜二の小說「一九二八年三月十五日」は極めて重大な意義をもつてゐる。これはわが國プロレタリアートに取つて最も近い問題――三月十五日の所謂共產黨事件を取扱つてゐる。これまでこの同じ事件を取扱つたものには、左翼の若い作家の二三の作品があつたが、この事件を小さいエピソードとしてではなしに、一つの大きい時代的なスケールの中に取扱つたものは、この作が始めてゞある。この作には北海道に於ける共產黨事件の檢擧を中心として、鬪士達の種々なるタイプとその生活が描かれてゐる。がそれがこれまで屢々あつたやうに概念的にで[illegible]種々なる缺點と長所とをもつて人間として描かれてゐる。――この點に於いてもこの作はこの種の題材を取扱つた作品の一つの進展を示してゐる。

この作品にはイデオロギー的にまた藝術的に多少の缺點があるが、それは他の場所で述べたので此處に云はない。

私は以上に於いて極めて簡單にではあるが、わが國プロレタリヤ文學のこれまでの發達の經路と、その最近に於ける新しい作家の傾向とについて述べた。この傾向が新しい年と共に更に如何なる方向に發展してゆくであらうかと云ふことは、わが國プロレタリヤ文學運動の主觀的及び客觀的條件によることであつて、此處に遽かに云ひ難いが、しかし私が上に述べた所から、一九二九年のわがプロレタリヤ文學は、眞實にプロレタリヤ的な內容の獲得と、その藝術的完成への方向に進んでゆくであらうと云ふことだけは、此處で斷言することが出來るのである。（一九二八、一一、二五）

三四の女流作家について

平林たい子

宇野千代氏が行詰つたといふ批評を折々きく。「人魚」「老女マノン」などを讀み、初期の作品と比較して見ると、「行詰つた」といふ言葉が適切かどうかはしらないが、兎に角、氏の採ばれた道の、行きつく所まで行きついてしまつたといふ感をうける。

初期の作品には、多く下層小ブルジョア婦人の生活の客觀的描出が企圖されてあり、氏自身の足場がさういふ生活から遊離してゐない爲に、作者のいゝ主觀が、作中の人間の生活と渾然として、人に訴へて來るものがあつた。その作品の主題となつたものは、いろいろな角度から描かれてゐたにもかゝはらず、そして、氏自身が、意識的に企てゝゐたのでなかつたにもかゝはらず、氏が徹底したリアリストであつたゝめに、そこに扱はれたものは多く下層小ブルジョア婦人の、この社會に生きるための摩擦（苦しみといふ程でなかつたにもせよ）の如實な描寫であつた。

所が、氏が所謂文壇生活をする樣になつて年が重なるにしたがひ、その足場は徐々に動いて行つた。この社會に生きる爲の摩擦として觀察した生活の出來事を、一方では、飽くまでリアルにさういふ風に見て行かうとする努力を持ちながら、一方では、その原因を個性の掘り下げで解決しやうとしたり、もつと抽象的な、人間の「精神」とか、原因の探究を作者が少しも求めてゐない「偶然」とかいふ樣なもので說明しやうとしたりする傾向がだんだんに勝つて來た。勿論それらのもの丶配合は文學には飽くまで必要であるが、さういふものをつくり出す原因である所のこの社會環境にまで視線を走らせることを氏は忘れて、そのために混迷に陷つてしまつた。それはゾラやモーパッサンが晩年に陷つた混迷と全く型を同じくしてゐる。氏は出發點から、徹底したリアリストではあつたけれども、それは生活の部分々々を切り離してその斷片々々の現象形態だけに捕れてゐ勝ちであつた。だから、さういふものを追窮しつくして來ると、結局現在の、あの「人魚」の樣な所に迷ひ込んでしまふより外仕方がなかつた。「老女マノン」にしても、昔の氏ならば、どこまでもリアルにあゝいふ老婆の生活の描出に努力して行つたであらうが、自然主義者としてのさういふ追窮はしつくしてしまひ、袋小路の突當りまで行つてしまつた現在では、結局あんな風に結んで咏嘆してみるより外に解決の途はなかつたらう。室生犀星氏が、あの作品を評して、作者の「作家的精力の欠乏」だと言つたのは皮相である。氏の作家的精力は未だ決して欠乏してゐない。自然主義者の典型的發展の型として、兎に角、ニヒリズムか神秘主義か、そのどちらかを採らねばならなくなつた氏の行き詰りは、自然主義者が究極には必ず陷る行き詰りであると思ふ。

中條百合子氏が「伸子」一卷の中にある小說を書いて居られた頃にも、あれで行詰つてしまふのではないかといふ杞憂が隨分あつた。氏の日本人には珍しい太い線や强い把握力は、大丈夫次に切り拔けられるといふ半分の信賴を誰にでも持たせ得はしたが、あれからどういふ途を探し出すであらうかといふ事

では、私は大きい疑問を持つた。が、氏がロシヤ行を決行し、「モスクワの印象」を發表するに及んで、氏が今までの狹い視野から解放された事を知つた。「モスクワの印象」は、單なる報告文式の旅行記でなく、藝術的感覺の濾過を經た、鋭いモスクワ批評である。プロレタリヤ獨裁治下のロシヤの生活に、積極的な好意的な批判を下してゐる。しかし、それが、世界唯一のプロレタリヤ國家であるからではなく、中條氏が好ましく思はれるらしいロシヤ人の國だからであるらしい。「赤い貨車」の中で統一されてゐる人間の生活を讀むとそれが尙更に明である。世界に唯一つしかないプロレタリヤの國へ行きながら、ことさらに選んであんなくすんだ生活ばかりを見てゐる事について多くの期待外れを感じながらも、私は、氏に對する大きい期待を、尙捨てない。不幸にして、日本に於いては、プロレタリヤの團結の大きな力に接する機會を持たず、社會の發展に對する正しい科學を持ち得なかつた氏も、ロシヤの生活に於いては、遂に日常の見聞によつてさういふものゝ端緒をでも攫り得て歸られるに違ない。私はそれを信じてゐる。「赤い貨車」一篇の中に描かれた人間の生活だけを見て、中條氏の未來を豫斷してはならぬ。

野上彌生子氏については先日の女人藝術に極めて短い批評を書いたが、私はあまりに、よくない傾向の方ばかりを強く見すぎたと思つてゐる。野上氏が絶えない發展の途上にあつて、不充分な事は言ふまでもない事ながら新しい女性の型として「眞知子」の樣な女性を引用した事は氏の一進展を示すものであらう。氏は內容のみならず形式に於いても一大發展を企圖せられる必要がある。あの文章のテンポや骨格は、男性から獨立して、一人の人間として完成した女性の強い意力や理智性の息を人に吹かける不思議な強さは持つてゐるが、情熱に稍々欠乏してゐると思ふ。

以上の三氏をあげてみると、あとには、特にとりたてゝ見る程の婦人の作家がない事を發見する。

網野菊氏と志賀直哉氏とを聯關させて見ることは面白いことである。志賀氏の小說は徹底した小ブルジョアの文學として、懷疑的、非鬪爭的、個人主義的イデオロギーの宣傳の爲に、形式內容ともに非常に強い力を持つてゐる樣に私は以前から思つてゐたが、網野氏といふ作家は、實に志賀氏の小說の強い宣傳力によつてうまれ出た作家であると思ふ。一人の網野氏を見るにつけても思ふことは、志賀氏の小說の、人間を小ブルジョア的に絹綾する不思議な力である。しかし、網野氏は、相當な境遇に安定した生活をしてゐるといふ事情と、在來の女性特有の生活視野の狹さとに妨げられて、作品は非常に一面的であり、あの形式のもつ影響力は、志賀氏に數段數十段劣る。

三宅やす子氏と吉屋信子氏とについても一とまとめとして短い批評をかくつもりであつたが、枚數がつきたからやめる。

大體、日本の婦人作家のこの頃の行き方を見ると、社會の流に對して多少とも進步的な涉を持つてゐる人は發展してゐるが、さうでない作家は一時喝采されても大抵それだけで終つてしまつてゐる。

新刊批評

幸田成友氏著 日本經濟史研究

瀧本　誠一

本書は主として我が德川時代に於ける經濟史實の重大なるものに就き、著者が多年研究せられたる結果を、其の時々學術雜誌などに發表せられたる考證論文に多少の訂正を加へ、完備したる成書の體裁を具へて出版せられたものである。內容は「米切手」と題する篇より「日本經濟史上の大阪」と題する篇に至る凡て十七篇を收容し、何れも著者の該博なる學識と、精確なる觀察に依つて得たる金玉の收穫であるが、就中「札差」並に「札差雜考」、「質屋」及「富札」、「天保改革の一節」以下「天保十四年の御用金」に至る數篇と、最後の「日本經濟史上の大阪」の如きは著者が最も得意の研究らしく思はれ、考證殊に精確にして、學界に裨益すること極めて多大なるべしと信ず。

社會經濟上の諸問題に就き、個々特殊の制度若くは現象を徹底的に研究して、其の由來、沿革及現狀等を明かにすることとは、經濟史そのものゝ研究とは自ら異つたる仕事であつて、それは所謂考證學家のつとむべき任務である。考證學の研究が大に發達し、過去に於ける個々の史實の眞相が明白に分つて來て、始めて眞の經濟史を編み立てることが出來得るのである。私は此の意味に於て、本書の如き精確信賴すべき考證文獻の現はれたるを、特に大に歡迎する所以である。

近年日本經濟史の研究に從事する者、日に月に益ゝ多きを加へ、新聞、雜誌若くは著作に於て所謂研究の結果を發表する人、少なからずと雖も、多くは皆杜撰孟浪にして、殆んど小說に近き取るに足らざる材料を基礎として、その上に經濟史を打ち立てんと企てつゝある樣である。私はこの點に於て、我が日本の經濟史家の地位の甚だ困難なることを痛感するものであつたが、今この著者の考證文獻を見るに及んで、實に空谷足音の情に堪へないのである。

著者の論斷の或る部分に於ては私は必ずしも同意を表することが出來ない點もある。例へば「武士と町人」と題する論文中に「兵農の區別は戰術の變化による」と云ふことを說いて居らるゝも、兵農分離の時代、即ち北條時頼時代に至り、戰術が著るしく變化して、兵農の分離を必要とする程の大變革が行はれたと云ふことの證據は、著者の述べられて居る所では甚だ薄弱であつて、この論斷は聊か覺束なく感ぜらるるのである。勿論古人の中にも著者と同じ樣な言を洩らして居るものあるも、それは固より淺薄なる想像說であつて、社會の發達、農業の狀況が兵農の混同を許さないように進んで來た結果と見た

方が正しくないかと思はるゝのである。畿術の變化としては、太古は希臘、支那、近古はウエルスなどに於ける兵農分離の現象は、全然說明が出來ないように考へらるゝが、著者は果して如何に觀察するか、親しく其の說明を聞きたいのである。尙ほその他、一二の點に於て首肯し兼ぬる論斷なきにあらざるも、大體に於て、本書は近刊書中の白眉にして、我々日本經濟史の研究に從事する者の座右に缺く可らざるものであらう。

著者は本書の發行と同時に、讀史餘錄と題する小册子を公にせらる。これは著者の研究の餘瀝を拾收したものであつて、「日本經濟史の研究」の拾遺として見るべきものであらう。勿論この書の方には、全く經濟史に關係なきものも採錄しあるが、大部分は經濟史實の緒餘であつて、中には我々の爲め好個の資料として一讀を要するもの之れなきにあらず、本書と倂せ見て大に裨益する所あるべし。

「日本經濟史の研究」と「讀史餘錄」とは共に大岡山書店の發行である。この書店は先きには故橫山由淸先生の遺著「日本田制史」を出版し、今又「日本經濟史の研究」を出版して、我が學界に貢獻する所少なからず、從來同店が場當りの際物を排斥して、寧ろ賣口の遠き、確實なる立派の大著作のみを擇んで出版しつゝあるは、我々の多とする所である。(東京市麻布區本村町十八大岡山書店發行・定價拾圓)

西村氏の『日本古代社會』を讀む

鳥居　龍藏

現今我が學界に於て、人類學古代史等の著述家として非常なる熱心な學者は西村眞次氏の右に出づるものはなからう。近頃『日本神話學概論』や『萬葉集の人類學的研究』を著はされた氏は、今や直ちにひき續いて本書を公にせられた。以ていかに氏の斯學に對して勉强せらるゝの熱度を見るべきである。

今度出版せられた本書はキク判四一六頁で、章を都合一四にわかち、それには序論・人種學上の日本人・古代文化の輪廓・文化の數字的反映・言語慣習から觀た古代生活・古代日本人の住居・船舶と交通・日本神話の世界的位置・記紀の土俗學的諸問題・古代の貿易・日本歌謠の原始形質・婦人の社會的位置・日本古代社會の人種學的研究・國家發生過程の文獻學的研究・結論をのせ、最後に索引を附し、製本・印刷・圖版等頗る美しく出來て居る。

本書は學問上から我が日本人祖先の古代社會を說明したもので、よく人類學や言語學や文化史その他一般にわたつてよく記述せられて居て、固より私は悉く氏の意見に從ふわけにはゆかないが、先づ氏の日頃主張せらるゝ氏の意見をよくまとめられ發表せられたと云つてよい。

氏に從へば、日本人の根本族はネグリトー族・アイヌ族・ツングース族・カルマツクの蒙古族・漢族・印度支那族・インドネシア族等

の七からなり、これが混合したものが今日の日本人であるとしそのうちツングース族は、最も古代に多數を占めたと云ふのである。從つて氏はこの七族を組合寫眞で一所に燒きつけ一つの混成タイプを寫眞として現はして居る。この七のタイプとして出された寫眞の三つ（アイヌ・臺灣生蕃・苗族）までは私の撮影したるものを引用せられて居る。

以上の七つの混合民族が現代日本人であるが、古代に於てはこの七つの民族が、我が國で生活し社會を組織し、各々彼等が劇場（しばい）をして居つた事項を記したのが、卽ち本書である。

私は玆で一々これ等を批評するとせば、多數の頁を費さねばならぬからこれを略するが、要するに本書の内容は以上に擧げた各章に於ける諸事項で讀者は大概推考することが出來るであらう。

本書は結論に中々斯學上、振ひ切つた大膽なドグマがあるけれども、そのシステムは極めて新しく、他人の容易に立入て來ることの出來ない諸事項に涉つて居る。想ふに我が學界に於て兎にも角にも、斯くの如く文化史的人類學その他に涉つて白熱的に論議する學者は、我が早稻田大學教授の西村氏を除いたならば、官學東大にも京大にも教授として何人もなからう。斯く記して來ると我が學界はいかに淋しく官學にその人のないことが知れるであらう。願はくば西村氏よ、今後一層の努力あらんことを望む。（東京市本鄕區湯島切通坂町一九ロゴス書店發行・定價參圓貳拾錢）

新村出氏著

天草本伊曾保物語

橋本　進吉

今より凡二十年前、新村博士が、大英博物館に藏する現存唯一の天草版本から親しく謄寫して歸られたイソップの譬喩談の國譯本を、ローマ字から國字に翻じて文祿舊譯伊曾保物語の名で雜誌藝文に連載せられた時、我等の喜はいかばかりであつたらうか。我々は、はじめて、此書が西洋文學を我國語にうつした最初のものとして珍奇であるばかりでなく、譯文も甚巧妙で興味多く、用語も亦室町季世の口語の標本として絶好の資料たるを知り、驚異と感歎とを禁ずることが出來なかつたのである。此書は、我國の布教に從つた日本耶蘇會で、日本語學習の爲に編纂し、その學林で印行したものであつて、吉利支丹教徒の手に成りながら宗門に關係なき南蠻文學者として特異の地位を占めるものである。

新村博士の國字本は、後に一卷とし、初に懇切なる解說と、終に伊曾保物語の國譯本に關する周到にして興味饒かな研究と、書中所用の洋語對照法とを添へて刊行せられたが、絶版となつて年久しかつた。その間に、南蠻研究は次第に盛になつて之に關する著作も續々世にあらはれ、新村博士も、南蠻更紗、正續南蠻廣記等を著して、研鑽の結果を世に示され、この書の原本と合册として印行せら

れた口譯平家物語も博士校閲の下に龜井氏の手で國字に改めて刊行せられたが、この書もまた今回再版せらるゝにいたつたのは喜に堪へない。前版の本文は、博士の謄寫本によつた爲、間々誤脱もあつたのを、再版本は、原本のロートグラフ本によつて校訂を加へられたので最信憑すべく、又新に附錄三篇を附して、日本及支那に於ける伊曽保物語の翻譯本に關する該博な考說を加へられた。その外、印刷用紙裝幀までも全く面觀を改めて、内容に適はしい淸楚なものになつた。

ローマ字綴の日本語を國字に改めるのは容易な事のやうに思はれるけれども、用語が三百餘年前の口語であり、文學が古拙な活版印刷である本書の如き場合には、豫想外の困難な事業である事は、我々の乏しい經驗からも推察する事が出來る。この書をかくまでに讀み易く且正しく國字に翻せられた勞は多としなければならない。たゞ讀み易きを主として原本の發音的綴字法を歷史的假名遣に改められたのは、原本の嚴格なる寫音法を傳へるには不便なことで、「出ゐ」「出會うて」のやうな方法で實際の發音を傳へようとせられた苦心の程は察するが、「今日より鳥類の一門をはつするぞ」(一三二頁)の「つ」の如き、「ヲ」の音か又は促音か明でない所が出來たのは遺憾である。(東京市芝區愛宕下町四ノ六改造社發行・定價參圓)

新刊紹介

◆**日本資本主義發達史**(高橋龜吉著・幕末より明治維新に至る經濟革命より筆を起し、急速に發展せる日本資本主義とその行詰りを緻密なる事實と統計によつて論述せり。定價二圓五十錢・東京丸ノ內昭和ビル內・日本評論社)

◆**思想と信仰**(島地大等著・定價三圓五十錢・東京區神田錦町一丁目・明治書院)

◆**高楠時次郎他五篇**(長谷川伸著・定價一圓二十錢・東京下谷區上野櫻木町四五・柳蛙書房)

◆**アイルランド文學の鬪爭過程**(帆足圖南次著・定價八十錢・東京市外杉並町高圓寺五五一・思想教育研究所)

◆**文都の現狀** 朝日常識講座第三卷(大西齋著・縮約一册五十錢・東京大阪朝日新聞社)

◆**事象を追ふて**(山川均著・わが社會主義界の長老たる氏が、吾等の眼前に明滅するあらゆる社會事象を捕へ來つて、犀利な筆を振へる隨筆的時評數十篇を收めたり。(定價一圓五十錢東京神田區美土代町・白揚社)

◆**「創作」若山牧水追悼號。**歌壇文壇哀悼の裡に逝いた近世の大歌人牧水氏の死を弔し、夫人の傷心を慰めるために編まれたもの。夫人歌友知友門弟諸氏の思ひ出深き追悼錄無慮百五十篇に餘り、卷首の寫眞二十數葉と共に故人を偲ぶ絕好の紀念號である。(靜岡縣沼津市本字南側六一創作社發行・定價壹圓五拾錢)

小盜市場(セウトルイチバ)

龜井幸行

　目下報知新聞連載小說吉川英治氏作の江戸三國志に盜ッ人市といふのが書かれてあるが小說でも何でもない昭和の今日、この盜ッ人市が白晝公々然と存在してゐるといふ事實を自分は今回見て來た。しかし早まつては不可ない、是は日本の內地の事ではなくて支那の大連に於ての事なのである。噂に聞けば是は大連のみならず上海其他の地にもあるとの事であるが自分は玆に二回に亘り親しく實見して來た大連の事を書いて見やう。

　大連市內の小崗子といふ處に市場があるが是が所謂泥棒市場であの地では是を小盜市場と呼び、立派な盜賊の都會盜品の取引市場として盛つてゐる所だ。此處の市場は道路が左右兩方に別き兩側の店には古物、絢爛な反物、貴金屬、道具類は固より、果ては一足の下駄、ペン先の屑等に至る迄種々雜多なガラクタ品が玉石混淆して陳列せられてゐて顧客の慾心を血走らせるが、中には內地人の到底買ふに堪へざる豚の臓腑類迄も並べられてゐる。

　需要に供給の伴ふといふのは經濟學上の明白な原理であるが自分は敢て其の逆に供給にも需要が伴なふと强調し度い。其れは斯る市場に所謂ホリ出し物を漁りに來る各階級の客が街路に充滿せるを見るからである。斯る供給市場が無かつたならば何も血眼になつてホリ出し物を搜しに來る者もないであろう。この市場の現況を一瞥しては一種の異醉を覺えて思はず目を瞠りつゝもそれ等のものゝ消化せられ行く社會の健康に韓た戰慄を禁ぜざるを得ない。

　しかし自分の考へではたとへ名は小盜市場(セウトルイチバ)とはいへ是等の無數の商品が悉く盜品には非ずして或は密輸入品、警察等の拂下品、質流れ品、擬造贋造品等も其一部或は大部を占めてゐるのではないかと思はれた。

　とに角、此處の市場では時折飛んだ掘出物を手に入れる事がある。或る人は四五圓でニッケル製の腕時計を買つたが、それが後で擬ひもないプラチナ製の時計である事が判明して一躍四、五百圓儲けたとか云ひ、又或る內地人がカラカネの佛像を購つたがこれも後で純金製であるといふ事が判つたとか傳へられてゐる。又其反對に相當高價な品を求めた積りでゐると、後で見ると三文の價値もないイカサマ物に外ならなかつたといふ樣な、悲喜劇も尠なからず演ぜられる。盜難品は此の市場へさへ行けば大抵發見されるし、尙諸官衙の被害品も當局者が逸早く此の市場に手を廻せば八ケ釜しい責任問題を惹起するに至らずして內濟し得るとさへ云はれてゐる。

　此外に奇異なのは此の市場の中に私娼窟の介在してゐる事で僅か一坪位の薄汚ない室に一寸した幕の下がつてゐるのが目につく。其の家の側の露路で洗濯してゐる瓜實顏の女などを見受けるが、これが娼婦らしい。時間制だとの事である。

　泥濁し切つたこの雰圍氣、雜多な階級の人々、喧騷と物慾にくらんでゐる目、何れ暗黑に棲む陰性に外ならない。

學生運動の歷史とその展望

林　房　雄

昭和三年十一月一日の東京朝日新聞は「學生生徒の思想善導」なる論說を揭げて、文部省が十四萬六千餘圓の責任支出によつて、學生の思想善導のために設置した學生課なるものが、結果に於て教育への警察行政の侵入にあらざるかを疑ひ、新人會員の豐島岡密議事件に對して、東京帝國大學が、從來の如き、豫審の成行きを見、公判確定後、斷然たる處置に出づる「愼重の態度」を捨てて、急據學生三名を放校、三名を退學、十五名を一年間の停學に處したことが、文部當局の思想「善導」の趣旨を裏切るものでないかをうれひ、さきに京大事件にて追はれた者が、共產黨事件に如何に活動したか、社會科學の學內における研究を禁止し左傾教授を追放したことがかへつて逆効果をもたらしたことを指摘して、學生生徒の思想善導のためには嚴罰主義と警察的取締りを極力避けなければならぬと忠告してゐる。

しかし、この自由主義新聞の自由主義的忠告にも拘らず、當局の學生運動彈壓の方針はその後駒場農大事件、早大事件等に現れてますます熾烈を加へ、今や學生運動は、完全に窒息せしめられて、僅かに餘燼をくすぶらせてゐるかの如く傍觀者の眼には映る。

この彈壓は何を意味するか、そして學生運動はこの彈壓のもとに果して窒息し終つたのであらうか？　――これは責任をもつて答へられなければならぬ問題である。

一口に學生運動といふが、プロレタリアートの見地から有用なもの、卽ちその、、、のために利用され得べき運動には、次の三つのものが含まれる。⑴學生社會科學聯合會の運動、⑵全日本學生自由擁護同盟の運動、⑶學生消費組合聯盟の運動。――どうしてかゝる區別が生じるか？

由來、學生層は、決して獨立した階級ではない。第一に學生層は、その意識生活に於て、完成したインテリゲント、卽ち直接な資本家組織そのものの中に組こまれ終つた官吏、技師、教師等と異り、諸階級間の勢力關係の變動に伴つて、種々なる階級の意識を比較的敏感に直率に反映する。勞働者階級の鬪爭の發展と共に、この新しき階級の意識は、ブルジョア科學の反動化と相まつて、强力に學生を捕へる。社會主義的思想運動としての學生社會科學聯合會の運動がその現れである。

第二に、その政治生活に於て、學生層もまた、諸階級の政治的鬪爭、權力關係の變動の明らかな影響をうける。例へば、學內の自治權、或は參政權獲得等の問題に關して、學生層は、かの護憲三派內閣の成立以前までは、ブルジョア政治家の援助、時には積極的煽動

をさへ受けてゐた。然るに、地主階級に對する資本家階級の征服的妥協の完成としての三派内閣成立以來、ブルジョア政治家は、斷乎として學生を政治生活より遠ざけ、今日に於ては逆に、全精力をあげて、これを奴隷化する政策をとりつゝある。かゝる時期に於ては、社會科學研究の禁止、授業料値上、學友會、學生新聞、辯論機關、消費組合等の自治組織の破壞、參政要求の拒否、、、、、、、、等に反抗しようとする學生の民主主義的要求を支持し得るものはプロレタリアートを他にしてない。この事實が即ち、昔のやうに自由主義者によつて先驅せられる代りに、明かに社會主義的學生によつて指導される政治的團體としての「學生自由擁護同盟」を生んだ所以である。

第三に、經濟生活に於ては、學生は消費者である。勞働者農民の如き生産階級でないことは勿論、資本家地主の如き直接の搾取階級でもない。一般にいつて、中産階級より出身し、主として支配的階級によつて現在及び將來の生活を保證されてゐる層である。しかし、帝國主義時代の國際現象の一つは、中産階級の慘憺たる貧困化である。この事實は學生の大多數をして、貧しき消費者としての自己を意識せしめる　消費組合の運動がそこから生れる。

かくの如く、學生層の生活は、その各領域に於て、種々異なる變動をうけるが、この變動は他の一切の社會現象に於けると同じく、根本に於ては、基本的階級たる資本家階級と勞働者階級の權力關係の變動によつて決定される。この點を無視しては、學生運動の歴史もまた理解され得ない。この見地から、吾々は運動の歴史を次の三つの時期に分ける。

第一期——(大正十三年六月護憲三派内閣の成立)に至るまでの運動

何故三派内閣の成立を第一の里程表とするか？　これこそ、わが資本家階級が地主に對する征服的妥協の裡に支配的地位にのぼり、一方勞働者階級が同じく長き闘爭の後に農民に對する指導的同盟を結び得て、兩者が、、、、するに到つた時期を表明するからである。かの普通選擧法と治安維持法の同時制定こそは、この間の消息を最も雄辯にものがたるものであらう。この瞬間(モメント)に至るまでの資本家階級は、「特權階級を倒せ」の標語のもとに全民衆を自己の傘下に動員することを努め、普選法の即時實施を叫んでも、地主、、政府の提唱する「過激思想取締法案」には斷乎として反對してゐたのである。

したがつて、この期に於ける學生運動は、急進的ブルジョアジイの支持、少くとも默認のもとに行はれてゐた。

吾々は、社會主義的學生運動發生の時期、即ち勞働階級の闘爭の發展が思想的に學生層に影響し始めた時期を、大正七年より數へ始めることが出來る。ロシア革命の、、、影響はこの年に入つて漸く吾國に及び、一方戰後の好景氣により勞働組合農民組合の勃興が、學生中の俊敏な要素を動かし始めた。七年十二月に於ける帝大新人會が創立され、翌年八

[illegible]の早大建設者同盟、[illegible]日を期しての學生聯合會及び高等學聯盟の成立を經て、やがて全國の研究會は三十餘を算するに至つた。

この期に於ける勞働者運動が經濟鬪爭の時代と政治鬪爭への發展を示し始めた二期に分れてゐるが如く、學生運動もまた、麻生久氏の小說に描かれてゐるやうに、ロマンチックな無組織的運動時代から、組織的に勞働者運動への貢獻を志し始めた二期に分つことが出來る。その分水嶺をなすものが學生聯合會の成立である。

この期に於ける學生の政治的運動としては、先づ大正七年早大學生の運動を口火とする都下各大學の學生聯盟による普選運動をあげなければならぬ。これはブルジョア急進主義者の煽動によつて、學生一般が資本家階級を大衆的に支持した例である。この運動に對しては、社會主義的學生の間では參加すべきか否かについて盛んな議論があつた。が、要するに消極的態度に終始した。しかし、大正[illegible]月の早大軍研事件を機とする同大學文化同盟の學園自由擁護運動、六月の共產黨事件を機とする大學擁護運動等に於ては、社會主義的學生が次第に積極的なイニシアーチヴをとり始めて來た。

そして、さきにものべた如く、これらの諸運動は今日に於けるが如き甚だしい彈壓をうくることなく、當時尙地主、、と戰ひつゝあつた進步的ブルジョアジイの好意若しくは默認をうけた。彼等は、學生聯合會が、日本に於ける、、、、、、、主義形成のために、かのロシアのインテリゲントがなした如き貢獻をなしつゝあつたことをさへ滑稽にも見おとしてゐたかのやうに思へる。後に全國高校校長會議の首頭としてメッテルニヒの仇名を得た溝淵進馬氏が、吾々の學校五高に於て、研究會にきわめて理解ある態度をしめし、設立のための助產婦の如き役目をはたしくれた如きは、その典型的現れの一つであらう。

最後に大正拾年を期とする資本の攻勢、中[illegible]つて、この期の終りに消費組合運動が[illegible]生の間に問題となり始めて來た。

第二期――昭和三年三月（第二次共產黨事件）に至る運動

十三年六月に於ける護憲三派內閣成立以來の學生運動の歷史は彈壓の歷史である。

すでに第一次共產黨を有するまでに成長して來た勞働者階級の影響のもとに、著しく勢力を擴大して來た學生聯合會は、今や全力をあげて壓迫と戰はなければならなくなつて同年九月に於いて、「學生聯合會」は「學生社會科學聯合會」と改稱し、「從來の學生の間への社會科學の普及と、無產階級運動へ、、、、、、、、、、、、をもつ學生をつくり出すこと」といふ目的を「社會科學の研究促進と該研究の普及」に改め、小ブルジョアインテリゲンチャの自然成長的研究團體として自己を認識するに至つた。學生自身の生活欲求にもとづく研究團體の範圍に自己を限り、その、

他の活動は團體外に於て一個人の自由意志によつてこれを行ふべしといふ活動方針をたてた。

　この問題については、内部の意見は二つに分れた。活動を校内に限る必要なし、學生聯合會は學生への宣傳機關ではなく、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、であるといふ意見と、それはどこまでも學生への宣傳團體であり、教育團體である、その他の運動は校外組織によつて、行はれなければならぬといふ意見がそれである。九月の全國大會は、この後者の意見の勝利に終つた。

　しかしこの新裝も、客觀的には、要するに一つの假裝的性質のものとならざるを得なかつた。如何に校内團體に限らうとも、校外團體を別に作らうとも、その特殊な地位により、、、、、、、、、、、、、、、を直接に（少くも文獻的には）受理し得た學生の勞作が、當時政治鬪爭への轉換を要望しつゝあつた勞働階級にうけ入れられて、これが前進に重大な貢獻をなしたことは否定出來ないからである。

　政府は學生運動の思ひがけぬ發展を見て狼狽し恐怖し、大正十三年十二月の五高社會思想研究會の解散を起點とする全國各高等學校の研究會の一齊解散を開始した。そして翌十四年一月には、例の京大事件を、、して、三十八名の學生を治安維持法の最初の犧牲者として鐵窓につないだ。この事件は、關西聯合會の優秀な要素が聯合會外に、勞働者農民の教育團體を作つた事實を發見した當局が學生運動、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、關東聯合會の指導的要素をも卷きこみ「學生の全國的陰謀事件」として、、、、、、ものである。

　この事件はもちろん、すでに多くの論者が指摘したやうに、單に小ブルジョア學生の研究の目的に對する彈壓はない。それは當時政治的鬪爭にまで進出せんとしつゝありし、プロレタリアートに對する、、、、、、、、、、。、、。

　果して京大事件以後、當局の壓迫政策は露骨となりついに十五年五月二十五日高等學校長、十二大學豫科主任全國會議の席上に於ける岡田文相の次の如き内訓となつて現れた。

一、研究會及び讀書會はその名稱の如何を問はず、絶對にこれを禁止す。

二、個人としての研究も社會思想に關するものは禁止す。

三、指示した書籍雜誌を讀むことを禁ず。（「改造」、「解放」をさへ含む）。

四、學校外の演說はその學術講演たると否とを問はず禁止す。

五、他の學校との聯合演說會を禁止す等。

僅かに大學に於ける研究會のみが、公然の禁止をまぬかれたのみで、その他の研究會は少くとも形式的には全滅され終つた。

にもかゝわらず、學生運動そのものは決して死なかつた。昭和二年十月神田青年會館に開かれた社會科學聯合會主催の社會科學デ

」最後の講演會の盛況が、それを事實に於て物語つた。この會合は、、、、、、、、、、、、、によつて解散せしめられたが、翌々日直ちに再開され、大衆的デモストレーションの波を九段坂下まで續かせて學生運動未だ死せずの印象を世人に與へた。

この期に於ける政治的特徴は勞働者農民の政治的進出にある。勞働農民黨の結成、、、、、、、の大衆的結成がそれである。この影響は當然學生層へも及んだ。高校研究會の解散、內訓事件等の壓迫にたえかねた民主主義的學生は「學生生活に於ける一切の自由の擁護並びにその獲得を期す」と標語する全日本學生自由擁護同盟を創立してその下に集つた。この同盟は研究組織としての社會科學聯合會と異り、明かな政治的鬪爭組織として、九大の學生放校事件、早大に於ける大山敎授留任運動等に於て活躍したが、當時に於ては、その指導者に吾國の階級關係の正確な分析がなく、この種のブルジョア民主主義的運動もまた、三派內閣成立以前の如く、所謂自由主義者によつて行はるべきでなく、社會主義的學生によつて指導さるべきであることを見得なかつたために活潑な活動を行ひ得なかつた。

消費組合の運動は、この期に於ていよいよ具體化した。大正十五年に有馬頼寧を會長とする學生消費組合聯盟が生れ、早大、拓大等がこれに加盟した。

第三期——昭和三年三月（共産黨事件）より今日に至る運動

第二次共産黨事件は實に勞働階級の、、であり、資本家地主と勞働者農民との、、、、、、、である。この、、と共に、從來獨立と自由の、、、、、、、、、、、、、、、、、、僅かに保たれてゐた學生の自由は、、、、、、されるに至つた。それはやがて新人會、京大研究會の解散、河上、大森等の進歩的敎授の追放、學生の大衆的放校となつて現れた。

資本家地主政府は、この虚に乘じて學生の全層を完全に自己の勢力下におき、政治的にもイデオロギイ的にも勞働者階級の影響からひきはなすことに全力をあげつゝある、帝大に於ける學生監會議、文部省學生課、學生主事の設置、寄宿舍による學生の[illegible]諸政策、スポーツ、宗教、軍事教育の奬勵。、、、、、、、、、、、、、、、、るための新財政計畫は、今のところの充分な實現をさまたげてゐるらしく思へるが、しかも尚、この「思想善導費」には廿萬近い金額が支出されてゐるのだ。

その後、、、、、、、、、、、、警視廳は、有名な豐島園事件なるものを、、し、ひきつゞき駒場、早大等に侵入して、、、をおかしつゝ研究を續けつゝある學生の掃蕩を企てた。、、、がすでに形成されてゐる今日にあつては、以前と異り、學生のマルクス主義の研究は、直接に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。支配階級としては勢ひ血眼にならざるを得ない。

この期の終りに至つて自由擁護同盟は再生

した。學生の自由の眞の擁護者としてのプロレタリアートの黨の觸手が明かに民主主義的學生をつかんだのである。

帝大に於ては、學友會の解散、新人會の解散、進歩的教授の追放等、、、、、、、、、、、、、、學友會員相談表演說會の後、、、、、、、、、。早大に於ては自由擁護デーを期して、寄附金の強制寄附に反對し、、、、、、、、、、、、、ほどの大示威を行つた。二高、一高、水高、四高等にも自由要求の叫びがあがり、京大に於ては河上教授留任運動の演說會で、潜入した、、、、、、、、、、、、、、。六月國民講堂に開かれた同盟主催自治協議會に於ては、數百の學生によるデモンストレーションが行はれ、築地署の檢束者は、、、、、、同盟に逆宣傳を加へた東日紙は抗議された。しかしこの同盟もまた、、、、、、、、、、となつて、運動の波は今は一時減退してゐる。

たゞ消費組合運動のみは洋々たる前途をもつて上り坂にある。

由組織破壞の方針によつて學內に存在を許されないにも拘らず、學生の要求によつて校外にこれを有してゐる。自由學園、同志社大學等にもその設立を見た。

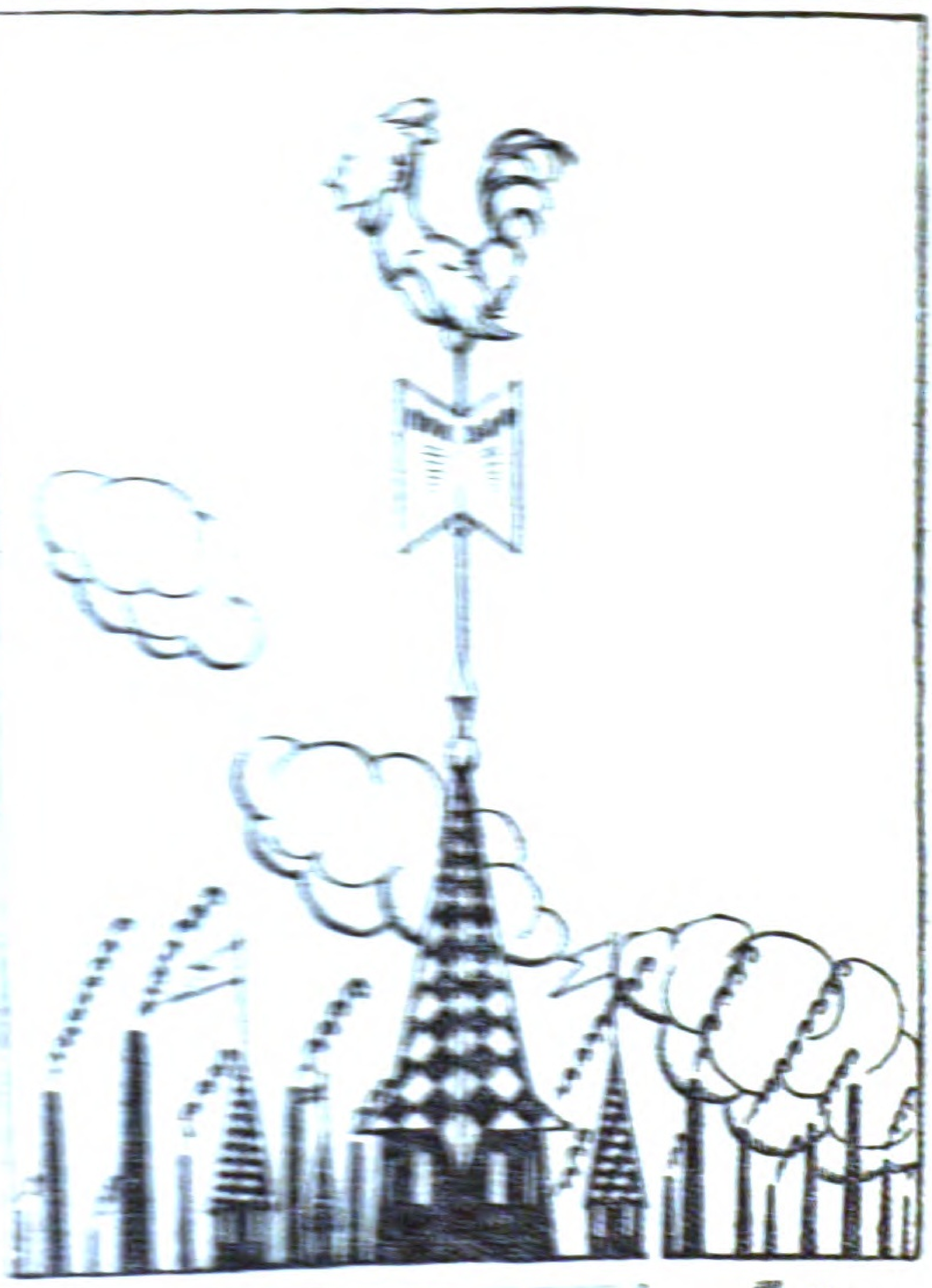
將來の展望

吾々は、かくの如く、學生のあらゆる進歩的な運動の運命が、、、、、、、、に依存することを知つた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

だが絕望は逃避者にのみ屬する。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、「、、、、、、、、、、、、、、、、、、主義の攻擊に激潮として現れつゝある。その下に、結成された優秀なる要素は、地下にあ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。かゝる鬪爭は、一時學生運動を極度に蔑し、理論家たることをマルクス主義者の第一の要件なりとする知識階級的幻想のもとに、徒らにおしやべりで、政治的活動能力なき學生を輩出せしめた福本主義の害毒から彼等をひき離し、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。且つ學校行政を完全に、、、した政府の方針は、自由擁護同盟の下に集まつた民主主義的學生を強ひて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。また、底止するところなき中産階級の沒落と學生の貧困化は自治的共同的組織としての消費組合運動を發展せしめ、、

再びいふ、絕望は逃避者にのみ屬する。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

勞農ロシアの漫畫とポスター





革命の番兵トローツキイ——彼が陸海軍人民委員長時代を諷した漫畫（デーニ畫）

黄金







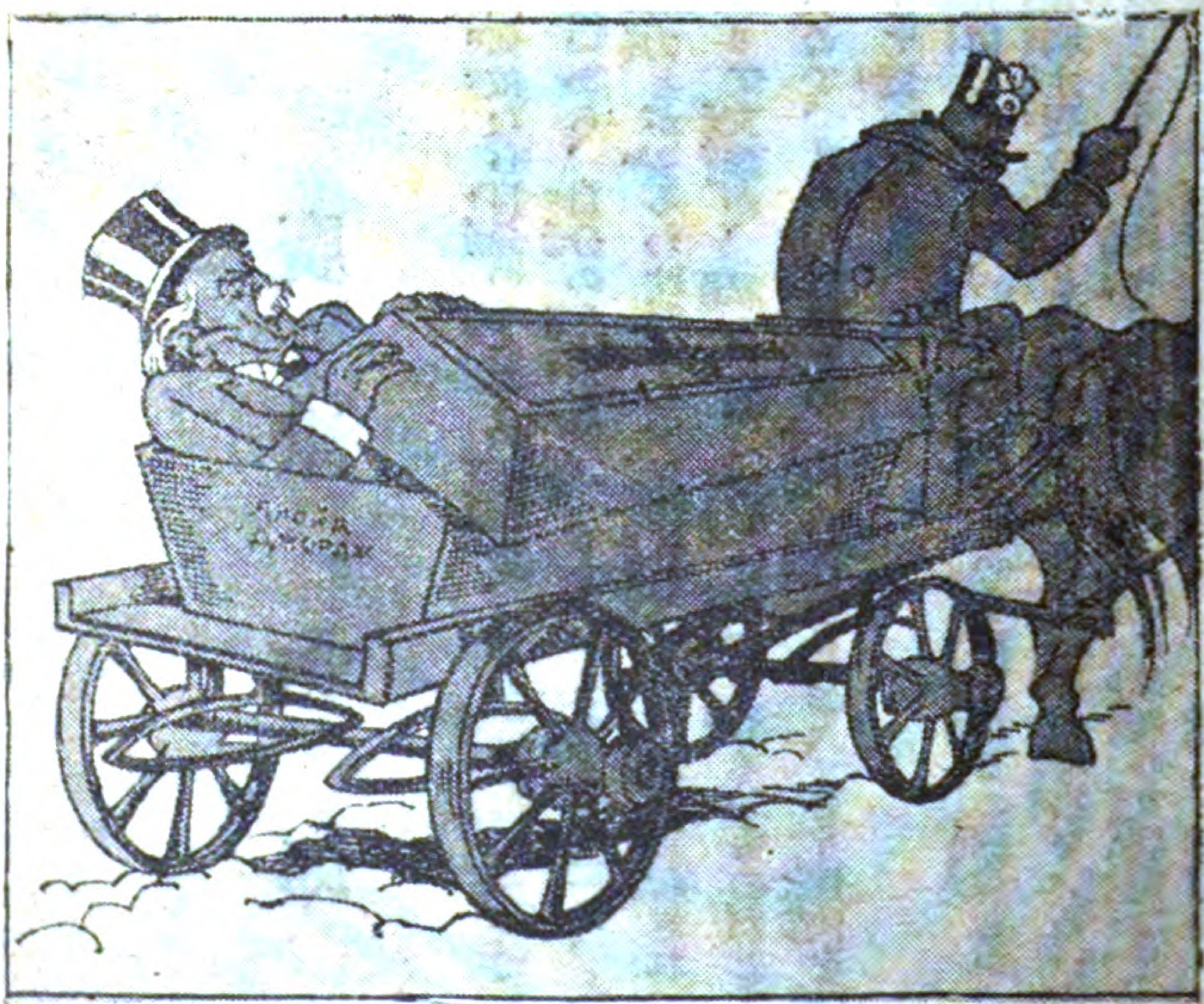
嬰兒週間――「兒童はコンミユンの花である」といふ語を主題に取つたポスター(チフリスの某畫家筆)

平和の假面
―ロシア封

つて――ウルバンソンの畫を基調としてブルジヨア社會の黄金慾を諷した漫畫（デーニ畫）



柩の中のロイド・ジヨージ――ゼノア軍縮會議に於ける彼の失敗を諷した漫畫。說明に曰く「馭者！馬を迫はないで呉れ、俺はもう何處へも急ぐ必要はないから・・・・」（デーニ畫）





の聯合國を諷した漫畫（デーニ畫）

文藝時評序論

廣津和郎

一

この一二年私の頭は文學の事を主として考へるやうな傾向から遠ざかつてゐるので、月々の創作や批評の大部分を讀まずにゐるが、併し讀まずにゐても、その間に文壇の調子がかなり變化して來た事は、何處からともなく、私にも感ぜられて來てゐる。

私は震災直後の時事新報に、雜誌がだんだんアメリカニズムの占領するところとなつて、總て講談社風なものになつて行くだらうといふ事を書いた事がある。その場合は所謂純文學の危機で、そのフイリステイニズムから文學を救ふものは、結局プロレタリア文學に外ならないといふやうな結論にその文章の最後は達してゐた。——『何だ、結局近頃流行のプロレタリア文學への迎合か』と云つたやうな言葉で冷かした批評家もあつた。

私はだからと云つて、自分が直ぐプロレタリア文學への轉換を試みはないし、（何故なら自分の今までの生活を、さう無意識にやつてゐたわけではないから、自分の生活を改革しようなどとするのには、かなり時日と努力とが要るわけだから）又現在叫ばれ、或は實行されてゐるプロレタリア文學が、私の云ふ『文學を救つて行く』ものだとも思つてゐないので、この問題は私の心內の問題として、さう解決を急がずに保留して置いた。

それを保留して置いて、私は文學とこの實際生活との關係とか、或は文學と功利主義の關係とかについて、自分だけの考察をいろいろに試みてゐた。さうした時々の感想は、斷片的に新聞の文藝欄などに書いて見た事もある。文學そのものの性質は、この我々の實生活に如何に近いところからその第一歩を踏み出させて見ても、それをしてそれ自身の進むままに委せて置くと、直ぐ生活から遊離して、空漠とした世界に飛散して行つてしまふ。そして在來の美學は、此處に文學の美を認め、その生活遊離、又は功利主義からの全然の遊離を以て、文學

い[illegible]
そ、文學が我々に取つて必要なのであつて、それがなければ文學——既に我々が文學と稱してゐる現在の小說とか脚本とか云ふもの——は、ほんたうに我々とは沒交涉のところに飛んで行つてしまふのではないか、と。

そして現に我々のやつてゐた文學——自然主義的現實接近から出發した我々の時代の文學は、いつの間にかその本來の出發點から、文學（或は藝術）の飛翔性によつて、ずんずん遊離してしまつたので、此處に新たに又新しい現實に立戾つて、再び始めなくてはならない時期に達してゐるのではないか、と。

私のさういふやうな理論的考察が、新しい現實觀から出發しようとしてゐるプロレタリア派の擡頭といふものを、その具體的な文學的成果は別にして、先づ理論的に是認してかかるべきではないか、といふ事を私に囁いてゐた。——無論自分が直ぐそれに轉向しようといふのではない。それは前に云つた通り、一朝一夕で出來るものではない。無產政黨に同感を持つたから直ぐそれに入黨する、といふやうな事はわけなく出來るものであるが、併し我々の持つてゐた文學では行きづまつてゐるから即座にそれを捨てて、新しいものを直ぐ始めるなどといふ事は、我々の今までの刻々に積み上げて來た生活が許さない。それにはかなりの時日と、それから刻々の反省が要る。

兎に角、私は（私獨特の理論から）先づ理論的に新興文學に厚意を
[illegible]
んな風な[illegible]私は[illegible]その
變化を見守るつもりでゐた。ところが、私の頭に二年越し、或は三年越しに必ずやつて來る例の癖——全然文學の方へ頭が向かなくなる癖が、突如として私を襲つて來たのである。

私は一昨年（昭和二年）あたりから、そして殊に昨年（昭和三年）は、一切の創作、一切の評論を讀む氣がなくなつてしまつたのである。私は自分のこの癖は、自分ながらどうする事も出來ない。それで自分の頭の働いて行くままに勝手にまかせて置いた。

もつとも、勝手に頭の動くままに委せてゐたと云つても、全然文學と關係のない事を考へてゐたのではない。私は文士達の創作活動について考へる氣がなくなつて、その外的生活——文士達の經濟生活について考へてゐたのである。在來の雜誌或は出版者と文士との關係は、一種の友人關係とでも云つたやうなもので、大部分解決がついてゐた。それは他の社會から較べて、文壇が最も遲くまで、自由主義的な心持で生きてゐられたからだ。けれども、此二年ほど、突如として出版界を襲つて來た大資本主義は、文士達のこの泰平の夢を破りかけて來た。——いや、必ず破らなければならない、から私は考へついたのである。これについて、どんな風な對應策を講ずべきか、私はそんな事ばかりを考へながら、暮してしまつたのである。

もつとも、既成作家達の大部分は、その熟練工的の餘裕のされ方か

ら、その波を今のところ直接に受けてはゐない。だから、さういふ事は杞憂に過ぎないとして、捨てて顧みない。併したとひ自分等がそれを直接に受けてゐないでも、同じ同業者の或者は、それをひしひしと身に沁みて感じ始めてゐる。――一體それをどうしたらいゝか。私は誰々が佳作を書き、或は誰々が劣作を書いたといふやうな事を、數へてゐる事が、今の場合、どうしても自分には出來なかつたのである。

こんなやうな私が、今此處で突然文藝時評の筆を執ることを引受けた。もつとも引受けた時には、相當の日數の餘裕があつた筈だから、その間に最近の創作界を一通り調べる事が出來るつもりでゐた。併し日の迫つた今日になつても、前述のやうな自分の心持が、どうしても創作界を振返るやうに自分をさせなかつた。

そこで、自分はさうした問題を離れて、もつと大體的な文壇の傾向について、自分の感想を述べて見たいと思ふ。

二

と云ふのは、震災直後に自分が豫覺した傾向が、現在どんな風に現れてゐるか、或は現れてゐないかといふ事を吟味することだ。

その時に自分が豫覺した第一の事、つまりだんだん時代がアメリカニズムの影響を受けて、今までの文藝雜誌が次第に立行かなくなり、娛樂雜誌風の雜誌の傾向が、ジャアナリズムを支配して行くだらうと云ふ豫想は、不幸にして段々はつきりして來た。文藝雜誌の多くが收支償はなくなり、無理と痩せ我慢とで發行を續けて行く時に、『キング』式の雜誌のみが益々發展して行くといふ事は、今や誰の眼にも明かだ。

この傾向を專門文士達の多くは乾度喜んでゐないであらう。併し確に喜んでゐない事がはつきりしてゐる筈であるのに、いつか次第にそれに捲き込まれつつある。それは雜誌といふ雜誌がさういふ傾向を帶びて行きつつある際に、それに全然反對の態度でゐる時は、生活が成立つて行かなくなるからだ。いや、文士ばかりではない。雜誌そのものもさうだ。最近後から後からと出て來る雜誌の大部分が、總て『キング』的傾向を帶びてゐる。『朝日』『平凡』等々々。

そしてそれ等の雜誌は、今やそれ等のジャアナリズムが持つ立場から、それ等の雜誌に載せる文士諸君の作品に對して、材料上の一つの制限を與へようとする程、それ等自身の傾向の發達を示して來た。『かくかくの材料をかくかくの形式で、何枚位に書いて下さい』それがそれ等の雜誌から文士達が受ける注文となりつつある。そしてその傾向は今後益々濃厚になつて行くだらう。

『材料は當方でさし上げます。それをかういふ風に書いて下さい』今に恐らくそこまで行くかも知れない。

私達既成作家――十年乃至二十年位前から文壇に出てゐる所謂既成作家達から考へると、それは考ふべからざるジャアナリズムの無法である。何故かといふと、私達が物を書き出した時代に、雜誌社から受

ける注文は、『あなたの勝手な材料を、あなたの勝手な書き方で、あなたの自由にお書き下さい』といふが常だつた。あなたのお好み次第に、あなたの思ひのままに、思ふ存分に書いて下さい。大體の枚數は申し上げますが、併しそれは申上げるだけで、長くなりましても、短くなりましても、一向差支へありません。——我々の聞いた注文は常にさうである。もつとも、今でも我々は文藝雜誌からはさういふ注文を受けてゐるのであるが。——

併し文藝雜誌が次第に凋落した今日、文士の全體の生活が文藝雜誌の原稿料に頼る事が出來なくなつて來ると、勢ひ今まで文士達が何等の拘束を受けない創作的自由性としてみづから誇つてゐたものを、どんどんジヤアナリズムのために冒されなければならなくなつて來る。——一つあなたの思ふままに、あなたの思ふ材料を、長短御隨意にやつて見て下さい——などと云ふのは、我々の時代までの泰平の夢であつて、今後は見られないものとなつて來つつある。——つまり何かこの世間一般から獨立した一種の特權階級のやうに思つてゐた文士生活が、世間の荒波にもまれ出したのである。世の中の他の職業と同樣に、せち辛くなつて來たのである。

ひと頃文壇で——時にプロレタリア側の文士の口から——目的意識といふ言葉が叫ばれた。自然發生の藝術ではいけない。目的意識を持たなければいけない、と。

これは一時新興文壇が在來の文藝を攻撃する合言葉のやうな觀があつた。

併しその目的意識といふ武器を最も有效に使用してゐるのに、プロレタリア文學よりも寧ろ反動派的なジヤアナリズムである。プロレタリア派の目的意識論は、聲ばかり高い割合に、さう彼等自身それを人々に納得させるやうに具體化させて見せなかつたし、又既成文壇に影響を與へる事が、まだ左程明かでないが、默々として一つの雜誌としての目的意識を以て、作家達の創作を變形させて行くアメリカ式雜誌編輯法が、文壇に與へて行く影響は、もつとずつと大きい。

今や純粹文藝で立つて行かうといふ作家達は、プロレタリア派の目的意識論と『キング』『朝日』式の目的意識的編輯法との間に板挾みになつてゐるわけである。

いや、今日露西亞的思想と亞米利加的思想とが、何事の上にも、左方からと右方からと押寄せて來て、現存のものを變形しつつある事を思へば、文壇の上にそれが兩方から押寄せて來て、そして既成文壇を變形しつゝあつたところで、何も不思議はないわけである。

自分が暫く雜誌を讀まず、創作も讀まず、從つて文壇の個々の事實に遠ざかつてゐて、今急にその方へ振り返つて見て、最初に感じられるのは、以上述べたやうな文藝の混亂である。

プロレタリア文學が、在來の日本的既成文壇を目の敵として、戰鬪開始をしてある間に、そして主として文藝雜誌の爭奪戰に汗水垂らしてゐる間に、そんな事に關係なくぐんぐんのさばり出て來て、雜誌な

も文藝をも片つ端からその資本力を以て占領して行かうとするのは、亞米利加的低調平俗な雜誌編輯法である。昭和三年で最も顯著な事實は實にそれであつた。それらの凄じい渦卷の前には、既成純文壇も亦プロレタリア文藝も、共に上品過ぎ、色が青白過ぎた。要するにこの雜誌アメリカニズムに向へば、今まで戰つてゐた既成、新興兩文壇は握手し、協力して、フイリステイニズムに墮して行く事から文藝を救はなければならないだらう。

所謂「ブル」文藝と云はれてゐる人達と、「プロ」文藝と云はれてゐる人達とは、近來頓に横暴になつた出版資本主義に對して職業的立場から、協力して當る傾向が最近生じて來た。——今年あたりはこの兩者の協力が、アメリカ式雜誌編輯法を相手にまはして戰ひ始めなければならないのではないかと思ふ。

自分はこれから出來得る限り精を出して、今年の文壇を見守つて見ようと思ふ。(十二月十日)

更に男を持てる女房について見れば、

又「重井筒」のおふさ德兵衞についても云ひ得るであらう。其處には固より父のために金を作るべきおふさの義、貞淑な女房に感謝すべき德兵衞の義がある。併し此等の義を生きて果すことが出來なかつた理由は、德兵衞の弱き性格と彼等の上に降りかかつて來た非運の強さにあつたのである。「南無三寶、義理に詰つた女房のせりふ、尤と胸にこたへしより、房が大事をはつたりと忘れたり」と「どふせうかかふ生薑酒」辻に立迷ふ薄弱な德兵衞、愈々心中の場に立到つても自分の方が先に死なうとしたり、女に刄物をあてかねて「男は力なみだに迷ひ、刄物持つ手も弱々と、女の膝に伏まろび、掩ひ、重り泣きゐたり」するやうな意氣地なしの德兵衞——この弱々しい人の上に「兎角二人に死脈が打つ、何處も彼處も一どきに、しほのさいて來るごとくばらく／＼と首尾惡く」非運が押寄せて來るとき、彼等はこの內外兩面の運命のために死ぬより外に道がなかつたのである。其他「堀川波の鼓」のお種の死は情と義が一つになつて彼女の過失に對立するところに生じ、「大經師昔曆」のおさんの悲劇は、背後に茂兵衞に對する好もしさの感情が働いてゐるとはいへ、茂兵衞に對する戀と大經師に對する義との衝突ではなくて、「二人に不義の誤りは微塵程もなけれども本の因果のまはり合ひ」、強ひて云へば女の宿業なる嫉妬に乘じて、偶然の惡戯が彼女を不義者とするのである。故にこの類に屬する悲劇の動機をも義と情との衝突に歸してしまふのは正當とし難い。嚴密な意味に於いては、それはたゞ「心中宵庚申」のやうな作品にのみ通用するのである。併し悲劇の主因が何處にあるを問はず、彼の戀愛は常に情と義との相關の世界に動いてゐる。それは父子親朋その他の錯綜せる社會の一片として、特に道義との交渉の相に於いて見られる。從つて情と義との相關は、假令悲劇の主動機とはならぬまでも、さま／＼の相をとつて發展して行く戀愛の世界に重要な役目を演じて、「戀と哀れは種一つ」（「冥途飛脚」）、其處に義理に詰つた憂を作り出して行くのである。「親もゆかしや夫も戀しや、父は子を呼ぶ夜の鶴、我は夫呼ぶ野邊の雉子」（「五十年忌歌念佛」）——これは西鶴のおなつが知らなかつた心の分裂である、物の哀れである。而も近松は極めて多くの場合、この義を人物の外に立つて裁く正義として見ずに、この義をも人物の內心に働く一つの情として、情を以て情に對立せしめる。故に悲劇の主動機は何であつても、それは情と情との相剋として、人物の內面に進行するのである。

近松にあつても戀愛は官能の慾に出發し、官能の滿足を渴望する。これを見拔く眼の尖鋭と明澄とに於いて、彼は西鶴の敵ではないが、認識の明るみにひき出さるゝ前のこの欲望の活きたぬくもりが、音樂と詞章を兼備するその文章によつて表現されてゐることは疑ひ得ぬ

ところであらう。國により事情には監察の眼を眩はさんがための下劣な手段として藝術的不純の烙印を捺さなければならぬ場合もある。多數のうちから僅少の例をとれば、「心中萬年草」で阿呆の花之丞が、妹お梅の名前を説明せむとする暗示、「五十年忌歌念佛」で爺の佐治右衞門が黄昏に歸つて來た娘と婿とをたしなめて云ふ濱納屋の下の喧嘩話などは、假令猥談に平氣であつた當時の風習と二人の人物の無智愚鈍とを勘定に入れて考へても、猶其誇張には見物に媚びむとする打算の痕跡が明かであると云はなければならぬ。また「薩摩歌」に於ける源五兵衞おまんの馴初話や「嫗山姥」に於ける八重桐の廓話などは、白や身振りのユーマーを主眼とする誇張と見て、歌舞伎劇に於ける傾城買の傳統を參照することによつて始めて許容せらるべきもので、これも私が今茲に云はうとするところの例證とするには足りない。併し同じ「薩摩歌」の――「秋の初夜過、はや夜中、蒸くり暑ふ寢にくやと、小まんの君の夜中おき、庭にとほんと風受けて、ア、生熟や、こちが様に肥た者はなほ熟い、男持つて痩たいぞと獨言」する姿には、成熟せる處女の懊惱の描寫がある。假令それは侍女の林(許嫁三五兵衞の女裝)に誘ひの水を向けるための意識せる嬌態であるにしても、このトリツクそれ自身が既に處女のやるせなさでなくて何であらう。

更に男を持てる女房について見れば、特に三篇の姦通物の女主人公は、それ〴〵に[illegible]をしてゐるのである。「樋子ある一夫の戀しい江戸詰の留守に、蚊帳を縫手に針仕事しながら、「去年六月の江戸立には、又來年の五月にお戻して、下る迄は逢はれぬぞや、無事で居よ、よふ留守せよとの詞つきが、目にちら〱と見るやうでほんに忘るゝ隙もない、不斷戀してゐるやうでいつか〱とまつの木に、衣張結び細引のゆふて思ひや晴らすらん」お種は「せめての心慰みに」松風の鼓に釣られて松の木に走り寄らうとするほどの寂しさの中にゐたのだつた。(「堀川波の鼓」)。同じく夫の「留守の宿」、おさゐは流石茶人の妻、物好きも能く氣もだてに、三人の子の親でも、花奢骨細の生れ付、風しのばしくゆかしくの、三十七とは見へざりし」みづ〱しさを以て、娘の髮を結つてやりながら、心で覘ふ娘聟鑓の權三を褒めちぎる――「此様な娘を大ていの男に添はせるは妬しい、常々つく〲思ふには、御家中で聟をとらば、表小姓の笹野權三樣に添せたい、器量はお國一番、武藝よふて茶の道も、弟子衆に續くはない、そして氣立といふ物が萬人にも憎まれぬ、いとしいかた氣、男の生粹生粹……ほんに市之進殿といふ男を持たねば、人手に渡す權三樣じやないわひの」――この人口に膾炙する言葉に、娘の名に於いて男を思ふ年増の母の、「一時の坐興の深戯」を超えた浮れごゝろの頂點を見ることは、今日の讀者の神經過敏のせいば

かりでもないのである（「鎗の權三重帷子」。）さうして大經師のおさんも亦「幼馴染の以春樣」なつかしの心の奧に、夫のよそ心に伴ふ物足りなさをあらかじめ薄々感じてゐたであらう、手飼の雌猫を抱きすくめて云ひきかせる言葉のはしぐに、まだ未來に男を望む係戀の影がちらくしてゐる――「猫にも人にも合緣機緣、隣の紅粉屋の赤猫は、見かけからやさしう、此三毛を呼び出すも、聲を細めて恥しさうに見へて、こいつが男にしてやりたい、又向いの練物屋の灰毛猫は、憎らしい無道な顏で遠慮會釋もなふ、屋根の上を馬責める樣に、怖い聲して此三毛を呼出す、先度も下立賣のかゝ樣と、親子たつた二人ゐる緣先の藏の屋根で、此三毛を可愛げに、それは見られた事かいの、あんまり憎さに憎さに棹竹持て追たれば、おれを睨んだ目元のこわさ、こりや三毛よ、悪い男持なよ、灰毛ねこと濡かけたら一度が大事ふつてのけ、此さんが從者聟、よい牡猫添はそぞゑ、ヲ、かわいやと猫なで聲」――竹棹を持つて醜い牡猫の戀を妨げるこの若女房は、夢ならぬ現實としては夫との共棲に落付きかねる何物かの身じろきをまだ心の底に感じてゐるのである。彼女は未だ半ば處女として「猫にも人にも合緣機緣」に不思議ななやましさを感じてゐるのである。「一度が大事」の瀨戸際を半ば過去の如く半ば未來の如く、心の謎さを以て眺[illegible]な處に潜んでゐるかういふ心持の活きたぬくもりを捉へて來る點に於いて、彼は決して尋常一樣の作者ではない。更に「重井筒」の夜半の炬燵にひとり輾轉反側する德兵衞の描寫を附加すれば、彼が戀愛と官能との交錯にどれほどのわりなさを見てゐたかを觸知することが出來るであらう――「内と外とに、引合ひの、心の駒の諸手綱、房が思ひの通ふかや、夢とはなしにうつゝたや、顏を並べて見る樣で、いだきつけ共小夜蒲團、涙にぬれて冷々とかわじほどけて身にさはる。其夜の心地しみぐと、身に引まとひねて見ても、一人ころりはェ、らつちがない、心のうちはむしやくしや枕、いつそ明けてものけよかし、アア大儀の此蒲團、小六も寢つろ小夜も寢つらん、房も寢よふ、引手あまたに、どこの誰めと寢くさつた、ぶちたい踏みたい叩きたいゑゝ、ゑゝく踏むた蒲團に科もたい、今は踏んでも叩いても、房に逢はれぬ逢はせぬかと、火燵にとんと腰もぬけ、わけも、涙にわが身ながら男の、樣にもたかりけり」。此處には最早觀客に迎合する秋波の痕跡もない。作者は德兵衞その人の境地に同化して痛切に純粹に彼の官能と戀愛との惱亂を描寫する。近松も亦これほどの深みまで堀り下げて戀を描くことを解しゐたのである。この點に於いて、彼も亦西鶴と等しく元祿期の詩人に相違なかつた。而も常に人性の底に渦卷くもの[illegible]

さへ示して來るのである。

41

但し近松の戀の本體はこの地盤そのものにあるのではなくて、この地盤の上に建てられた上層建築にある。彼にとつて戀は主として魂の問題である。彼は官能の誘惑を拔け出でた上にも猶二つの魂の間の限りなき親愛、獻身、歸依、犧牲の關係があることを見た。さうして戀の本來の領域を其處に認めた。この點に於いて既に彼と西鶴との趣異が始つてゐる。かういふのは西鶴の中には魂の戀がないといふ意味ではない。兩者の間には重點の置きどころの相違があるといふのである。

この相違は既に美形の取扱ひにもあらはれてゐる。近松と雖も決して美形の力を感せぬわけではないが、その細部の叙述と細部に魅惑せらるゝ心の表現とは彼の作中に殆んど見出すことが出來ない。固より西鶴の一代女のそれに匹敵すべき女繪の密畫を試ることは、既に淨瑠璃といふ藝術の性質上極めて困難なことは云ふまでもないが、併し「拇指反つて色あつて、少し髮の縮みたる」程度の千枚道具の叙述と讃美とは、地の文にも人物の口にも十分に存立の餘地がある筈であ

てその印象を[illegible]

人柄を最後の關心とするのが[illegible]である。[illegible]の細叙に於いて西鶴の「女繪」に比較すべきものは、狂亂のおなつの前に浮んで來る清十郎の姿であるが——「結ぶる夫のなりかたち、姿は詞に、語る共心は筆も及びなき、ほんじやりとしてきつとして花橘の袖の香に、昔男の業平づくり、黒い羽織が好きすき油、髮付髮付頂黒々、黒目勝成目の中にいかいか筋通つて櫻色、年比は廿あまり、せい高からず低からず、茶の湯躾上打囃し、男の藝に何一つでも、癖なき玉の盃の、酒もよい酒かな文かき手の秋の露……」といふその讃美も結局は「ほんじやりとしてきつとして」といふ人柄の印象に歸着點を持つといふべきである。更に女の美形に就いて云へば「壽の門松」の藤屋吾妻は「雪駄の音のしやらくと、春めく中に紫は色の重や藤屋が內、あづまといへる名木の、松には續く花もなき、戀と、利發をいいいいいいいい目の張に、恬こほるゝ道中は、往來の人も立とまり、花を見捨る肭金も、歸りくるはの晴れ所……」と、僅かに魂の表情に溢れる眼だけをとり出して描寫されたのみで、他は「諸體のよかり撫へ」の中に一際目立つものとして、その美しさを動かしてゐるにとゞまる。又「夕霧阿波鳴渡」の夕霧は、全然容貌の記述を缺いて、たゞその毅々たる

餘の風姿のみが作者の「打詠めて賞する情」に溢れた描寫の對象とされる――「戀風の、其扇屋の、金田と、名は立のぼる夕ぎりや秋の末よりぶら〳〵と、寢たり起たり面瘦せて、藥も日數ふる雪の、積らぬ先の養生と、勤め心ま〻なれど、深きよしみの吉田屋は、足もと輕き道中や、暖簾くゞるも力なく、今日はめでたふござんす、ア、しんどうやと腰うち掛け、我身を横に投入の水仙活き姿なり」――前の吾妻が、正月の街頭に動く他の諸遊女と、目をそばだてる諸見物とを背景として、くつきりと鮮かに浮び出してゐるに對して、茲の夕霧は、人の見る目をよそに一人師走の廓に面瘦せた體を運んで行く、さうしてその身のこなしと僅かな一言とによつて、誠に「水仙活き姿」を吾々の前に描き出して來るのである。近松の描寫は、兩者を通じて、レッシングの「ラオコーン」に賞讃せらるべき手法であるが、これは作者の鑑賞の眼がその風姿の神を見むとする欲求に統一せられてゐるが故に始めて可能なのである。近松は西鶴とは別様の意味に於いて美形を愛する。換言すれば美形の底から輝いて來る魂の表出を愛する。從つて彼は戀愛の描寫が佳境に入るにつれて、髮の縮れと拇指の反りは固より、美形そのもの〻敘述をも忘れて魂の表現に集中することが出來るのである。

[illegible]

も、たゞこなさんがいとしい」といふ嵯峨(「生玉心中」)の言葉に簡潔にその中心義を道破する。故に離れてゐての嘆きは、「力身にも才覺にも、かなはぬものは逢ひたいと、思うて逢瀨がなかつた」(「傾城反魂香」の遠山)である。逢うてのあまへ口說きは「これはなつかしうはないかいの、顏を見たうはないかいの」(「夕霧」)である。いとしさ、逢ひたさ、なつかしさ、この言へば簡單にして而もその深さの不可說なる感情が思ひ人と思はれ人との魂を緊く結び付ける。さうしてこの結合の偉力は其處から生れて來る千態萬様の方向轉換によつて、云はゞ生活の建直しによつて說明される。一度この結合が起ることによつて、忘れられるものもあれば捨て去られるものもある。發育の根據を得るものもあれば、新しく吹き出でるものもある。一面に堪へて堪へて堪へ拔く力が生ずると共に、これまで何氣なく堪へて來たものが到底忍び難い苦しみとなる。歡樂と悲痛と、樂しみとなげきと、光と影との交錯が未曾有の嚴しさを以てその心を襲うて來るとき、彼等自身さへ茫然として如何に處理すべきかを知らないのである。人は戀愛の白熱に燒かれて、利害を忘れ、明日の打算を忘れ、自己の誇りを忘れ、終局は一身をさへ忘れ去る。されば吾妻は「與次兵衞樣に逢ひましたは、女房にならふ共、手かけ妾にならふ共、[illegible]かはした事もな

[illegible]

[illegible]れ太郎、未練みない契りなれば、これ限り〳〵と逢ふたびごとの數念」も戀の大敵には甲斐なく破はれて、二人に生れかはつたら、本妻定めぬ、その先に早ふ女夫になりませう」といふ果敢ない夢を頼りとするのである。而もその裏には本妻お辰の「男と男の恥よりも、隱しても隱したい、女子同士に恥を見せ、男は寢取られ寢間帳臺は見さがされ、阿呆の數々よみ盡され、これでも男の可愛ひは、扨もいか成因果ぞや」といふ悲嘆があることを思へば、「長町女腹切」のお花が白の「いとしいがただ因果ぞ」といふ言葉に無量の感慨が籠つてゐることを感じなければならぬ。併しこの意味の「因果」はただ戀愛の力の一面に過ぎない。それは他の一方に於いて、如何なる困難を凌いでもこれを貫かうとする積極的な力を喚起する。思はぬ難儀に落ぶれて「身に附くものは手足より外に何のあてもなく」博多柳町に迷うて來た宗七に取縋つて、「よふ打明けて下んした、我は源物、お命さへあるたれば、わしや嬉しうござんする、わたしが心でお前一人はどうなとなる、おいとしや肌寒かろ、お顏がたんと細つたと」我身の上着を着せかける小女郎の心は、固より悲みにうちしめつてゐるが、併しその底には猶、この不幸な戀人を一身に引受けてこれを「どうなと」しようとする積極的な心が、戀ゆゑに生れ來てゐるのである。人は小女郎[illegible]

重ねてゐあらう。女が男を養ふといふやうな決心は當世のあまりの[illegible]迷言で、彼等には到底これを實行し通す力もなけりもないと笑ふでもあらう。さうして凡そ身を捨てた戀といふやうなものは詩人の空想で、戀とは畢竟男と女との共喰ひを美化する假裝、世には不壞の「不通りたる」信實といふやうなものはない、戀愛を魂の事件として取扱つたのは近松の藝術の甘さであると引導を渡すでもあらう。併し近松は戀愛の可能を信じてゐた、凡ての戀さがひの男女の戯れが悉くこの範疇に屬するのでないことは云ふまでもないが、其處には彼が描いたやうな戀もあり得ることを信じてこれに溫かな魂を吹き込んだ。故に所謂甘さの上にこそ彼の藝術は打たてられてゐたのである。この甘さを表現し、この甘さを肯定し、かくてこの甘さを以て社會の心を征服するところに、彼の藝術の重大な使命はある。さうしてこれを「男女の道は關を立つるのみ」といふ當時の形式派道德と對立させるとき、作者が意識すると否とを問はず、彼の藝術の戰ふべき戰は決してなまやさしいものではなかつたであらう。あらゆる新興思想の如く、又あらゆる微菌の如く、彼の藝術の歴史にも亦、排斥せられつゝ潜行し、潜行しつゝ蔓延するといふ經路の一面があつたにちがひない。この戰ひが、偽善の講說に倦んだ社會の上で、良家の子女の心緒か

なる戀ひの世界で、凡そ戀愛を拒まうとする態度の「良家」の風習深く、氣長にねばり強く行はれたにちがひない。固より戀愛のやうな根柢の深い現象は、學者と政治家との如何なる說敎にも拘らず、生活事實及び生活感情として覆すべからざる本能の支持を受けてゐるが故に、彼の戀愛藝術は前代の安樂や隆達以來の歌謠や浮世繪や演劇と共同戰線を張つて、大威張りで民衆の間に通用するを得たことは勿論であるが、戀愛の權利に對する信念を社會に植え付ける仕事は、この外面的繁昌のみによつては遂げられない。戀愛の根柢に魂の美しさを發見すること、魂の美しさを表現してこれを對手の心に感染させること――かういふやうな藝術の力によつて、それは始めて敵の牙城に迫ることが出來る。民衆自身の間に戀愛の觀念を高め、高められたる戀愛の姿を示すことによつてこれを排斥する者をも不知不識その權利の承認に傾かしめることは、戀を信ずる藝術家のみのよくするところである。この意味に於いて近松の甘さはその藝術を一つの事業とする。近松自身は彼の藝術のかういふやうな使命を充分に自覺してゐなかつたであらうが、それにも拘らず彼の歷史的意義の大部分は正しく此點にあるのである。彼の甘さを愛すると嫌ふとは、趣味としては各人の勝手であるが、孰れにしても彼の甘さの積極的な力を把捉し得ぬ者

戀愛觀には此處に一つの大きな穴があくからである。

――併しこれは寧ろ後に云ふべきことであつた。小女郎のやうな形で戀愛の積極性を示すことは、近松にあつては例外に屬する。彼が主としてこれを發見するのは、一度思ひ染めた心の誠を死を以て貫かうとする、戀そのものの強さである。彼の作中にあらはれる男女の主人公は、原則として云へばその戀を護るに充分に賢明でもなく、運命と戰ふに十分に粘り強くもないが、兎に角その折れ易き脆き生活力は戀愛の中に集中して燃え、且つ燃え盡すのである。其處におのづから生れ出でる弱き者の強さは、「傾城反魂香」の遠山を脇から脇に流浪させ、「天の網島」のおさんに義理に詰つた縁切を思はせ、「曾根崎心中」のお初に「これや恭なかろはいの、わしと徳比さあんすと、こなたも殺すが合點か、徳様に離れて片時も生きて居よふか、そこな九平次のどうずりめ」と讐仇を罵倒させる。このお初の捨身の強さは、窮地に追ひ込まれた女の言葉として、必ずしも珍らしがるにも及ばぬものであるが、「徳様に離れて片時も生きて居よふか」といふ一句が、更に吾吾を導いて新しい視野を開かせることは記憶して置かなければならぬ。このやうに思ひつめた戀は固より西鶴にもある。が、それは遊里に於ける戀愛のたゞ一つの樣相であつて、多くの客に情をかけて品位あ

てゐ[illegible]壁に、籬の中に行はれる[illegible]、わけ知りの戯れにあるのではない、それは遊女と地女との境界を超越して、如何なる場合にも[illegible]ぬ一つの魂の奥深き結合にのみある。故に既に[illegible]の大籬にもあり、後世に降るに從つて益々資本家側から要求されるやうになる遊女の職業意識——被傭人として親方に損をかけることを不德と考へる道德は、近松にあつては極めて輕視される。遊女の道德も亦地女と等しくよき戀をすることであつて、賢明な取引をすることではないのである。固より近松にあつては、抱主の利益と遊女の戀との必然的矛盾が後世の新内のやうに十分に理解されず、温情ある抱主が寧ろ遊女の戀に同情することゝ夕霧と扇屋との關係の如きものが多いから、それは決して取引を排斥する意味を必然的に持つてゐるのではないが、自然の結果として近松流の戀を知れる遊女は商賣に堪へ難き苦痛を感ずる以上、彼の戀愛觀は、地女の戀が遊里に侵入する極めて有力な先鋒となつたと見らるべきである。これに對して或人は、「傾城反魂香」の中で遣手道を說いてゐる名文を、反證として擧げるかも知れない。——「御意の通り賣物とは申ながら、神佛の奉加と同じことで、金出しながら拜まするは恐らく世界に傾城ばつかり、買ふてくれるが嬉しいとて親がゝりやお主持の、戀路の闇の一寸先見へぬ所をそばから見[illegible]外すか[illegible]、[illegible]における[illegible]には、世間に心中す[illegible]、[illegible]——この遣手道は常に人情の内として[illegible]れてゐるだけではなく、作者近松の是認を得てゐるものであることは疑ひ得ないが、これを川柳の中で、下女、淺黃裏、信濃者などと並べて嘲罵の對象中の大立物とされてゐる遣手と比較すれば、吾々は一方に世間のまだ寛かであつた時代を思ふと共に、一方に近松の同情の博大なことに敬服しなければならぬ。此處で取扱はれてゐる遊女は勿論賣物としてゞある。但しそれは「金出しながら拜まする」世界無二の賣物として、最少の仕入を以て最大の收入を得さすべき品物とは、別樣に取扱はれてゐるのである。これは遊女道ではなくて遣手道——遣手がその利害に仕へてゐる[illegible]道であり、[illegible]の商賣の立場を離れぬことは勿論であるが、それにしても此處で說かれてゐる道は商賣の中に籠る人情であつて、人情を蹂躪する商賣の道ではない。「女郎ものほさぬやうに」するのは、寧ろ人間同士の情であつて、自分の利害を主にして考へてゐるのではないのである。特にこの白を云ふ遣手のみやは、戀ゆゑに太夫の位をすべて廓から廓に轉々せる遠山の後身であることを思ふとき、吾々は、この一節を以て、近松の遊女觀が商賣離れをしてゐることの反證とするわけには、猶更行かないのである。

寧ろ私は近松の素人趣味に對する遙かに有力な證據を提出する——近松には幾つかの特愛の思想があつてそれが篇を異にして屢々繰返されてゐるが、その中で最も頻繁に繰返されたものは何であるか。それは愛する者は夫婦であるといふ思想である。心を男に捧げてしまつたものは彼の妻であつて傾城ではないと云ふ思想である。「此夕霧をまだ傾城と思ふてか、本の女夫じやないかいの……誠を云はば今比は一門中の狀文にも、伊左衞門内方と書いても人の咎めぬこと」といふ白は引用するまでもなく人口に膾炙してゐる。「色で逢ひしははや昔、今は眞身の女夫合」といふのは梅川忠兵衞「せめて一夜はうそなしに、ほんの女夫といつの世に、云はれつ云はん情なや」歎つは「長町女腹切」のお花。博多小女郎は「お前の心に此小女郎はまだ傾城じやと思ふてか、此身は廓にゐるとても、心はとうから女夫ぢや、肩すそ結び手をひいて、人の戸口に縋るとも、かはしたことばちがやせぬ」と誓ひ、麩屋の吾妻は「新艘のはつ床より、面白いと悲しいとわけのありたけ仕つくして、つとめは名ばかり、夫婦といふて今一人と、外にはもらす身もなし」と與次兵衞との仲を物語る。さうしてこれは人物の白にのみ於らはるゝ思想ではなくて、作者自身が地の文の中に又同樣の取扱ひをしてゐるのである。おさん茂兵衞は一旦の過失を共にしてその後の朝夕

あり、治兵衞にはおさんがあるに拘らず、梅川と忠兵衞とは夫婦、小春と治兵衞とも亦夫婦と呼ばれてゐるのである。その他「曾根崎心中」のお初德兵衞を初め、生きて世間に許されず、作者の媒介によつて始めて夫婦となつたものを幾組となく擧げることが出來るであらう。これは決して淨瑠璃作者の筆拍子とのみ見ることが出來ない。彼の取扱ひ方の全部が此等の男女を媒酌してゐるからである。吾々は、近松の魂を裸にして見る態度が、此處まで徹底してゐることを忘れてはならぬ。

茲に於いて私は、もう一つの近松特愛の思想を一瞥せんとする誘惑を禁じ得ない。それは武士と町人とが人格として平等であるとの思想である。「心中宵庚申」の八百屋半兵衞が「形こそ町人、心は侍」と自稱する言葉は、たゞ彼の出身の事情を、敍述するものとして、聞流せば聞流すことも出來るであらう。併し「生玉心中」の嘉兵衞が忰嘉平次をたしなめて、「二本指すを侍、一本指すは町人と斗思ふか、うつけ者、大小は此胸に有る」といふとき、彼が生來の町人なるが故に、吾々は聽耳をたてぬわけに行かない。さうして更に「夕霧阿波鳴戸」に於いて、「侍とても尊からず、町人とて賤しからず、尊い物は此胸一ッ」といふ白が、あまり侍らしくもない伊左衞門の口に置か

[illegible]い。この思想に、同じく愛を[illegible]かにして見る態度が、[illegible]に於ける顯現である。彼に一面に於いて地女と遊女との差別を超え、結婚の正式非正式の障壁を撤して、魂の結合に眞正の結婚を見たと同様に、一面に於いては又階級の尊卑に拘らず、人間の品位を決定するものが「此胸一つ」にあることを信じてゐたのである。かくて吾々は、彼の考へ方の根柢にある三界一心、一念三千流の信念を無視することが出來ない。彼自身の自覺如何は知らず、彼の特色が結局此處に歸着し、此處から放射してゐると見るのは私の僻目であらうか。この立場から見れば「天の網島」の孫右衛門が「小春を踏む足で、うろたへたおのれが根性をなぜ踏まぬ」といふやうな言葉も、亦彼の根本傾向の平談俗語を借りたあらはれに外ならぬのである。一切の樞機は一心にある。人生を緊縛し桎梏するさまぐの障礙も畢竟己れが心の投影であると近松は云ふであらう。併し彼はこの投影の中に自らもがき、生死の海に浮沈するものゝうちにも亦濁らぬ魂が宿ることを見た。茲に彼の藝術家たる所以はあるのである。

貫之の考へてゐた和歌の本質について

吉澤義則

古今集は、延喜五年四月始めて撰集せられてから明治に至るまで千年の間、和歌の模範として尊重せられ來つたものである。尊重といふよりも、信仰の本尊として祭られ來たといふ方が當つてゐよう。だから、室町以後はその奥義の授受も嚴肅な祭式のもとに行はれたもので、江戸時代になつては、卅歳にして傳受の資格を生じたのであるが、古くは五十歳以後ならでは、古今集を傳受することは出來なかつたと傳へられてゐる。その古今集が、明治以後になつてまるで顧みられなくなつてしまつた。と同時に、撰者の筆頭である紀貫之も、殆ど和歌の世界から葬られ去つたかの觀がある。が、それは果して本當だらうか。物事は、とかく極端から極端に行きたがるものである。貫之には、幸に古今集の序といふものがある。それによつて、貫之が摑んでゐた和歌はどんなものであつたかを考へて見たいと思ふのが、この考察である。

大まかな別け方ではあるが、それが便宜であるやうにおもふ。傾向の歌は、萬葉時代に於て、可なり流行もし發達もしてゐたのであつたが古今集時代になつては、一層盛に行はれて、この集の大部分が、それであるかの觀を呈した。この點が、古今集の失脚するに至つた所以であり、また、撰者たる貫之等が忘れられるに至つた所以でもある。が、貫之は、さうした趣向が和歌の本質だと考へてゐたであらうか。時勢こそ違つてもゐるが、ともかくも和歌に精進した一世の宗匠である彼が、その表現味に氣附かなかつたであらうか。彼は古今集の序の中にかういつてゐる。

こゝに、古の事をも歌の心をも知れる人、僅に一人二人なり。これかれ得たるところ得ぬところ、互になむある。（六歌仙の評を省く）このほかの人々、その名きこゆる、野べに生ふるかづらのはひ廣ごり、林に茂き木の葉の如くに多けれど、歌とのみおもひて、そのさま知らぬなるべし（尾上博士校註古今和歌集による）

[illegible]の意義も知つてゐる人は、一二人に過ぎない。それも得たところ得ぬところがあつて、完全な歌人とては一人もない。貴紳は暫くおき、六人の先覺者たちも、それ／＼に瑕瑾あつて宗とするに足らず、その他は、蔓草の野もせに蔓衍してゐるやうに、ざらにあるデモ歌人たちで、卅一文字ならべたら、それで歌だとのみこんで、和歌の趣といふものは、御存じないやうだと評し去つたものである。

かうまで先輩同輩を一蹴し盡した貫之には、それだけの信念があつての事と見てよからうとおもふ。それが、右を向いても左を向いても、和歌といへばたゞそれであつた彼の淺薄な趣向の歌で滿足してゐた筈はなからう。それで滿足が出來たのなら、あゝまで罵倒し去らずとも、共に語るべき歌人がいくらもあつた筈である。何か、人の氣附かなかつた或物を摑んでゐたものがあつて、それによつて和歌を批判してゐたからこそ、あゝして、貫之の總つていからうとするほどの歌人を發見することが出來なかつたであらう。かう考へて來ると、古今集の中にも、貫之を滿足せしめるに足る和歌は、多くは無かつたであらう。趣向の歌が集中の最大部分を占めてゐる所以は、當時一般に詠まれてゐたものは、殆ど趣向の歌であり、またそれが萬葉集以來和歌の一體と認められて來たからであつて、貫之の理想は、別に他にあつたものでは無かつたであらうか。

然らば、貫之の考へてゐた和歌の本質はどこに存してあつたであらう。前に引用した序文の一節の中にも、「そのさま知らぬなるべし」とあつた。六歌仙の批評を見ても、六人の中三人までに「さま」を繰返して、それを批判の標準としてゐる。して見ると、この「さま」は貫之の考へて居た和歌の本質そのもので無いにしても、可なり重要な何ものかで無ければならぬ。抑も「さま」とは何を意味してゐるのであらうか。

六歌仙の批評を見ると、貫之は、和歌を批判するのに、「さま」と「こゝろ」と「ことば」との三つの標準を用ひてゐたやうである。心でもなく言葉でもなくて、和歌批判の標準である「さま」――貫之は所によつて違つた意味に用ひてゐる。即ち「そのさま知らぬなるべし」の時の「さま」は漢文の序に趣とあり、六歌仙の批評中の「さま」は皆「體」とある。蓋し、一の物を表裏から見た言葉で、それを外形的にいへば「體」であり、それを内容的にいへば「趣」である。今は多きに從つて、六歌仙評言中の意味に據つて說く――は和歌の全體としての姿であつたやうである。言葉をかへていへば、用語の相關的な音調即ち「しらべ」を根柢として、いろ／＼な感情が三十一文字に統轄せられた全體的の姿でなければならない。

私は、古歌を考へるときに、「しらべ」を基調・時代調・表現調の三種にわけて說明してゐる。餘り芳しい名では無いが、用ひなれてゐるま

ゝに、今もこの名稱を使用する。基調は五七五七七の「しらべ」である。和歌は、この「しらべ」によつて、雜駁な俗談平語の世界とは截りはなされた別の世界を持つてゐる。この特殊な世界に動いてゐる氣分が時代趣味と調和したところに、時代調が生れる。これは萬葉調だ。これは古今調だといふ、それがそれぞれの時代調である。つまり、その各の時代に於ける「しらべ」の型である。萬葉時代には、そんな型は無かつたといふ異議が出るかも知れないが、確に萬葉調だと感じさせるだけのものがあるといふばかりではなく、萬葉時代には、一切の漢語——當時の時代思潮から考へても、新しい廷臣たちの間には、日常の談話にも盛に漢語は用ひられてゐたであらうが——が和歌から拒否せられてゐたといふ事實は、語感の問題として論議すべきか、又はその他の問題として取扱ふべきかは暫くさしおくとしても、ともかくも、當時の歌人たちには、和歌に對して可なり窮窟なそして共通的な感じが持たれてゐたことを示すものと考へてよからうと思ふ。からしたわけで、萬葉時代には萬葉調といふべき型の存在したことを認めて差支なからうと考へる。

筆がやゝ岐路に走つたが、この基調と時代調とは、總ての和歌に共通の「しらべ」であり、型であるが、表現調は當該の心持を表現する爲めの「しらべ」であるから、歌ごとに相異なつてゐる筈のものである。而して貫之の所謂「さま」は前に「しらべ」を根本とした和歌の姿ものと考へてよからうと思ふ。

王朝時代は、藝術界といはず、世間といはず、全的に、一つの趣味によつて完全に統一せられてゐた時代であつた。そこに一つの異分子が加はつても、生活の有機的機能が妨げられるほどに微妙な統一世界であつた。さうした統一を締めくゝつてゐた時代趣味は、一語でいへば、優雅とか典麗とかいふ言葉で言ひ表はすべきであらう。それで違つてはゐないと思ふが、それも王朝時代を知つてゐて、その知識でそれらの言葉の意味を補删しなければ、王朝趣味をそれらの言葉から味ひ出すことはむづかしからう。で、寧ろ、王朝趣味は王朝時代の言葉をかりて表はす方が適切でもあり、はつきりすると思ふ。が、それを簡單に言ひ表はさうとすることは容易なことではない。

私は今、説明の便宜の爲に、王朝時代の美人の形容語を借りて來てそれを一般に推し及ぼすことによつて、説明の筋を行きたいと思ふ。王朝美人の典型的な形容語は「あてになまめかし」である。「あて」は上品であり、「なまめかし」はみづみづしい美しさである。上品に過ぎては愛嬌が無くなり、妖艶に流れては品位を失ふ。上品に過ぎず、妖艶に流れず、この兩者の巧みに調和せられたところに生ずる情趣が、王朝趣味であつた。凡て調和の美は、單色の美と違つて、温雅な味のあるものである。王朝人はこの調和美を庶幾したものであつて、大體

[illegible]和歌に於ても、[illegible]てかうした情趣に調和するのでなければ、和歌時代に生きていく事は出來なかつたであらう。即ち時代調の生れる所以であつて、この時代調の味を形に見せたものが、上代様の平假名であつた。和歌を寫す文字も、またその「しらべ」に調和するものでなければならなかつたのである。

かうした「しらべ」が所謂古今調であり、それに導かれた情趣の世界が和歌の世界であつて、この世界に住することがその第一義であつた。この世界に住しさへしたならば、つまらぬ駄洒落一つでも和歌に成り得たのであつた。理窟でも說明でも、内容の如何は問ふところでは無かつたのである。から解釋することによつて、古今集に「物名」や「俳諧歌」がその一種として納まつてゐることも、たやすくうなづかれるのである。平朝時代も末に近づいて古今主義の和歌が行きつまつた時に、源俊頼が「つづけから」といふ融通の路を見出して、窮屈な用語の束縛から脱れる事の出來たのも、要するに當時の和歌の第一義が「しらべ」にあつた事に氣附いたからであつた。

藤原公任といふ大歌人があつた。恰も道長時代に生れあつて、和歌の世界を文酣してゐた人である。公任が、當時歌人たちの間に如何に重きをなしてゐたかは、次の挿話によつても窺はれようとおもふ。藤原長能といふ有名な歌人が、三月の小の月であつた或年の春に、

[illegible]と詠んだ。三月が大の月であつたならば、日數が卅日あるのにと、春を惜しむあまりの心持を歌にうとしたものである。然るに公任はこの歌を見て、春は卅九日では無い筈だと、つまらぬこいつめひろひをしたものであつた。が、長能は、それから病を獲て、遂に悶死したのであつた。また同じ時代に藤原範永といふ歌人があつた。山家秋月といふ題を得て、

住む人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり

と詠んだ。公任が、この歌を見て、體を得たものだと評したと聞いた範永は、この歌を、一生涯肌身はなさず頸に懸けくらしたと傳へてゐる。

その公任の歌學書に新撰髓腦といふのがある。それに歌は心深く姿きよげにて、心にをかしきところあるをすぐれたりといふべし。(中略)心すがた相具することを難くば、先づ心を取るべし。終に心深からずば、姿をいたはるべし。

とあつて、一寸見ると、私が時代調を第一義としたと說いたのに觝觸するやうに聞えようが、それは和歌たり得た後に於ての優劣論の標準を說いたもので、和歌たり得る得ないの境を論じてゐる今の私の說には關係の無いことであるから、茲に一言ことわつておく。

かうしたわけで、時代調に導かれた情趣を獲ることが、和歌たり得る第一義であつたから、表現も趣向も、それを破壞するやうな性質の

ものであつてはならなかつた。先づこの情趣を獲た後の表現や趣向で無ければならなかつたのである。で、古今集の和歌に望まれることはなま〴〵しい實感の胸を叩き來ることでも無ければ、嘆きつくやうな呼吸を感じようとすることでも無かつた。大殿油のほのかなまたゝきの下に春の夢をおふ心持を味はふことであつた。

貫之の考へてゐた「さま」は、大體に於て此の如きものであつたと考へてよからう。が、私は、「さま」に就いて餘りに多くの頁數を費し過ぎたやうに思ふ。「さま」は和歌の成立に大切なものではあつたが、その時代に生活してその空氣の中で修養した大宮人たちにとつては、この意味に於ての「さま」を獲ることは、大した難儀なことでも無かつたであらうし、また貫之も、それを和歌の總てと考へてゐなかつたことは、六歌仙の批評を見ても明かである。

「さま」の說はしばらく打切つて、貫之の考へてゐた他の二つの標準に就いて調べて見よう。心は內容であり、言葉はそれを組成する成分であるとだけは、いふまでもなく分りきつたことであるが、それから先が問題である。心の善惡といふのはどういふことだらう、用語の巧拙といふのはどういふ事だらう。心の善惡とは趣向の善惡を意味するのであらうか、用語の巧拙とは緣語や懸け詞の用法などを云つてゐるのであらうか。たゞそれだけの事ならば、その條件に適つた歌は集中にざらにあるやうである。何も、歌の心を亂つたものは一人二人だ

古今集卷頭の歌は

　年の內に春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

といふのである。これは年內に立春のあつた冬に詠んだもので、歌の面の矛盾感を仕組んだ趣向の歌である。この歌を、藤原俊成が、その著書であつた古來風體抄に

　この歌まことにことわり強く、またをかしくも聞えて、ありがたくよめる歌なり。

と評してゐる。その「ことわりつよく」は趣向におちの無いことを賞めたものであらうが、「またをかしくも聞えて」といふのは何を云つてゐるのだらうか。「また」とことわつてゐるから「理つよく」とは別の事であるやうに思はれる。即ち、理のつんでゐるのがをかしく聞えるのでは無く、趣向の理がつんでゐる上に、何かをかしく聞かせる所以が有ることを云つてゐると解すべきであらう。その所以のものに何であらうか。

この問に答へる前に、讀者の眼を古今集の和歌に向ける。前にも述べたやうに、右を見ても左を見ても、集中に幅をきかせてゐるのは趣向の歌である。

　夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへすゞしき風や吹くらむ

これは夏秋の間に詠まれた歌で、夏に[illegible]あつてあり、秋は涼しいか

[illegible]な。

霜の經露の緯こそよわからし山の錦の織ればかつ散る

紅葉を錦に見立てることは、支那傳來の着想である。それが脆く散りすぎる所以を說明したのがこの歌で、はかない霜や露を經緯とすることに思ひついたところに作者の苦心があり、この作の生命があつたわけである。

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

これは風の名の「あらし」の語原解釋を試みたもので、この風が吹いてくるなり秋の草木が萎れてしまふから、「あらし」——荒し——と呼ぶのだらうか、尤もな名稱だといふのである。この歌は、かうして語原解釋を三十一文字に仕組んだといふことの上に、更に嵐の字の成立を編み込んであるのかも知れぬ。嵐字を暴風の意味の國字——新井白石は、榊、峠、裃、鰹などいふ類の漢字形をしながらも實は日本で生れた文字を、國字といつてゐる——に用ひ始めたのは何時からであつたかは、明かでない。けれども、天武天皇の御代に作られた新字といふのは、この國字のことであらうといふのが通說であるし、よしやその新字のことはさしおくにしても、かうした國字が古今集以前から行はれてゐた事は事實であつて、現に婇、榊、襷、椿、萩、鮎等は記紀萬葉集等の古書に用ひられてゐる。尤も椿、萩、鮎などは支那[illegible]わけで[illegible]古今集以前から[illegible]れてゐたであらうと考へることも[illegible]ずしも理由が無いではあるまい。從つて、この歌にさうした字謎の[illegible]までも趣向の一つとして附加へられてあると見られないことも無いやうに思ふ。

この見方については、さうまではと疑ふ人も多からう。私もまた強ひてとは主張しない。が、降つて千載集の中には、藤原季道の歌に、

ことごとに悲しかりけりむべしこそ秋の心を愁ひといひけれ

といふのがあつて、明かに、文字成立の解釋を歌に仕組んでゐるのであるから、こんな洒落が古今集時代に無かつたとは斷言しにくからうと思ふ。さうした眼で見ると、紀友則の歌の

雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきてをらまし

といふのにも、梅字の構造說が考へられてゐるやうに思はれないことはなからう。

それはともかくも、古今集にはかうした趣向の歌が滿ち〳〵てゐる中に、さすがに表現の歌が見出されぬではない。

ひさかたの光のどけき春の日にしづごゝろなく花の散るらむ

この歌は慌たゞしく散る花が、のどかな春の心持を亂すのを咎めたものではあるが、さうしたぎこちない難詰の心は、ゆるやかに流れゆく

「しらべ」の波にかくれてしまつて、風なきに舞ふが如くもかつ散る花をながめながら、霞の中をたゞよふ陽光に包まれて爛熟した春を味ひつゝある歌人の心持がさながらに浮び出てゐる。若し假に「など」といふやうな咎めの副詞がこの歌に用ひられてあるとしたらどうだらう。興味は頓に索然として、春なほ寒き心地にをのゝかざるを得ないであらう。

　木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり

うすらさびしい秋の哀れが、しみ〴〵と身に寄添ひ來るのを覺えるではないか。

　さ月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

香といふ言葉が二度までも用ゐられてゐて、當時避くべきものとして忌まれてゐた同語の病にかゝつてゐる歌ではあるが、それを超越するものがあつて選びにも入つたのであらう。香、香を繰返し來るところに、その香をなつかしむ心持の搖曳するを感じる。朝じめりせる五月の庭に故き戀をたどりつゝ、橘の木蔭を去りがてにしてゐる人の淡やかな哀れが、讀む者の胸をかすめ去るやうに思ふ。

　來めやとはおもふものから蜩の鳴く夕ぐれは立ちまたれつゝ

あきらめようとしてもあきらめかねる心を蜩の聲にそゝられながら、薄れゆく殘照の影に立ちつくす乙女の淋しい姿がいらだつ心持が、あり〳〵と感じられる。

である。といつても、固より感情そのものゝ強さ弱さをいふのではない。その表はれかたの強さ弱さに就いていふのである。

　春の野に霞たなびきうらかなしこの夕かげに鶯なくも

　わが宿のいさゝむら竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

これは何れも大作家持が詠んだ歌である。二首共に「この」といふ指示代名詞を用ひてゐるが、この言葉は吾々の胸を突通すやうに強く響いてくるのである。「うらがなし」は悲しいとも云はれず淋しいともいはれない感傷的な心持を表はす言葉である。それが極度に達して、貧弱な言葉では到底表はしきれなくなつた時に、たゞそれと指さして「この」といふより外に道は無かつたであらう。かうした強さは、前に擧げた古今集の歌のどれにも味ふことが出來ないのである。「秋は來にけり」と人ごとのやうに言ひ流してしまふ。また「立ちまたれつゝ」とその只今の感じである筈のを、常に繰返される定例のやうな口吻にぼかしてしまふ。が、それが王朝時代に生きて行く所以であつて、どぎついまたなま〳〵しい感じは決して王朝趣味に調和すべきものでは無かつたのである。それを赤裸々でない眞でないと責めるならば、責めるものが無理であらう。現代人の姿でないところが王朝人の姿であるので、時代を異にすれば姿を異にするのが當然であつて、修養ある王朝人の人間としての眞の姿は、とりもなほさず其れであつたのである。なほこゝに言ひそへておきたいのは、佳表現の歌どもは集中の絶

[illegible]に歌を通して眺めると、[illegible]に於て劣いながらも、表現の姿が優しく吾々に呼びかける。して見れば、貫之等はこれらの歌にも引きつけられる所があつて入選せしめたものであらう。されば、貫之が和歌の表現味を味ふ事に於て不能でなかつた筈である。かくて六歌仙の評言を心靜かに吟味して見ようと思ふ。

僧正遍照

歌の心はえたれども、まこと少し。繪にかける女を見て、徒に心を動かすがごとし。

「歌の心」が普通本には「歌のさま」となつてゐる。この「心」は形式に對する內容の意味ではなく、和歌の精神といふほどの用ひかたであり、また「さま」にも同じやうな用例――例へば前揭序文中の「歌とのみおもひてこのさま知らぬなるべし」とあるが如き――もあるのであるから、こゝでは彼此殆ど同義の言葉と解釋して、どちらでも可いやうにも思はれるが、漢文の序に、

尤得㆓歌體㆒、然其詞花而少㆑實

とあるのを見ると、「さま」とある方が可く、また、この「さま」は前に說いたやうな姿の意味に用ひたものと解くべきもののやうである。

「まこと少し」は眞實味の足らぬ意味で、漢文のと參照して、彼は心の眞を歌はうとしないで、徒に綺羅の文字を疊むのに腐心してゐると評したものと解くべきでは無からうか。而して、そこに表現への欲

[illegible]その心餘りありて、ことばあかず。萎める花の色なくて匂ひ殘れるがごとし。

「ことあかず」が普通本には「言葉足らず」となつてゐる。「こと」は言であるから、これはどちらでも可いやうなもの、漢文の序に、

其情有㆑餘、其詞不㆑足、如㆘萎花雖㆑少㆓彩色㆒而有㆗薰香㆖

とあるのに照合すると、寧ろ普通本のが適切であるやうである。この評文中の「ことば足らず」は佳辭麗句といふやうな技巧的な表面的用語法に關して云つてゐるのでは無く、表現を達成する意味に於ての用語に關して云つてゐるものと解かなければなるまい。

文屋康秀

ことば巧にて、そのさま身におよはず。いはゞ商人のよき衣着たらむが如し。

「身におよはず」が普通本には「身におはず」とある。これは當然普通本がいゝので、漢文の序には、

巧詠㆑物、然其體近㆑俗、如㆘賈人之着㆓鮮衣㆒

とある。

この評言は、巧に言葉を使ひこなして表現は完全であるが、その姿は卑俗なやうだと言つたもの、やうにも解かれさうであるが、その譬喩から考へると、佳辭麗句に富んではゐるが、歌の姿がそれに釣りあ

はないといふ意味らしく思はれる。で、こゝの「ことば巧にて」は表現には關係なく、裝飾としての末技に就いて云つてゐるものと見なければなるまい。これは當時としては當然すぎるほど當然の見方である。

喜撰法師

言葉かすかにして、始をはり確ならず。いはゞ秋の月を見るに曉の雲に逢へるが如し。

漢文のには

其詞花麗、而首尾停滯、如下望二秋月一過中曉雲上

とある。和文の序には華麗の意味が表はされてゐないが、この評は、主として歌意の曖昧なのを難じようとしたからであらう。花麗とあるあたりは、技巧に就いて評してゐるやうにも考へられるが、「言葉かすかにして」とあるあたりは、象徴せられた言葉の意味を、味得しようとして味得しかねた心持が窺はれるやうに思ふ。

小野小町

古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて強からず。いはゞよき女の惱めるところあるが如し。

漢文のには

古衣通姫之流也、然艶而無二氣力一如三病婦之着二花粉一、

とある。この評は、その歌の表現を味ふ上に於ての言葉であつて、趣向の上の立言であらうとは信じられない。

そのさまいやし。いはゞ薪負へる山人の花の蔭にやすめるが如し。

漢文のには

古猿丸大夫之貌(一本に次と有)也頗有逸興、而體甚鄙、如二田夫之息一花前一也

とある。和文の序に「そのさまいやし」と簡單に片づけてゐるのは、「さま」の卑しいのを見て、その他は論ずるに及ばずと考へたものでもあらう。卑しい「さま」は王朝趣味に合流すべきものではなく、さうした和歌は和歌たる資格を具へないとさへ考られた筈であるからである。

以上六歌仙の評言を見渡したところ、貫之は表現歌に就いて十分な意識すらも有つてはゐなかつたやうではあるが、しかも、表現味を味はつてゐなければ言はれない筈の語句が用ひられてゐるのは事實である。

和歌の如き、言語による表現は「しらべ」と「ことば」との相關的合流によつて達せられる。「ことば」は、全體としての「しらべ」の一成分であり、それが集まつて「しらべ」を構成してゐるのではあるが、また「ことば」は、それ自身獨自の感じを以て、直接に人の心に觸れて來る。それが所謂語感である。語感とは、たゞに簡單な音感ばかりを指すのではなく、もつと複雜な、その言葉によつて喚起されるいろ

とするところに、[illegible]「[illegible]」[illegible]
いのである。[illegible]
たにしろ、[illegible]
漫然[illegible]へられ[illegible]
に表現の[illegible]
それを味はつて[illegible]
るしするのを忘れた[illegible]
ことは、[illegible]出来ま[illegible]

[illegible]之は和歌の[illegible]
ゐた時代の人として、[illegible]
[illegible]は[illegible]文の[illegible]にけ[illegible]
[illegible]と[illegible]の[illegible]な[illegible]
[illegible]時代[illegible]
[illegible]

[illegible]

りきれず、その他の種々相にも相當の興味を持ち得た理由に就いては前に一言しておいたが、この問題の上に參考すべきは、香川景樹の態度である。

景樹は幕末に出て古今集を宗とした歌人である。從つて、古今傳の威望の墜落と共に、殆ど歌人としての聲譽は認められなくなつたのではあるが、古今集の體得者としても、また歌人としても、永久に忘るべからざる一人である。

景樹は古今集を尊重してはゐたけれども、古今集の世界を理想境とは考へてゐなかつた。それを更に一歩を進める爲の修業地と考へてゐた。和歌は「しらべ」に在りとして、その「しらべ」を自得すべく古今集を讀みならふことを勸めてゐる。景樹の「しらべ」には二種類ある。尤も景樹自身が二種に別けてゐるのではない。彼の二種の識別に於ける意識は甚だ不明瞭なものであるが、その說いてゐるところによると二種に別けられるのである。和歌たる爲の「しらべ」と、心持を表現する爲の「しらべ」とがそれである。和歌たる爲の「しらべ」は上品にあれと云ふのである。表現の爲の「しらべ」は、郭公は郭公らしく鶯は鶯らしく富士は富士らしく筑山は筑山らしくといふのである。秋風に漂ふ雲の絕えまよりもれいづる月のさやけさの歌を例に引いて、外聞を顧みず人の口の端に斟酌せず、たゞ神佛に申上げる心にて詠めといつてゐる。「秋風の歌も最上の感あり。其本は最上の感より出るが故に、最上の調ある也。最上の感と云は端的の感なり。高くさぐるを最上とな思ひそ」と云つてゐる。景樹の說を忠實に傳へた歌學提要にも、「見るもの聞くものにつけ、或は悲しび或は歡び、その事に物に臨みたらん折、うちつけにあはれと思ふ初一念をよみ出ることそ歌なるべけれ。二義にわたる時に、道理に落ちて感なきものなり」と見えてゐる。また同書に「そは、物にふれ事につきて感動する即ち發する聲にして、感と調との間に髮を容るゝの隙なく、一偏の眞心より出ればなり」とある。

以上述べ來つたところで、景樹の說が盡きてゐるわけでは無いが、景樹が如何なる態度で和歌に臨んだかは、ほゞ分明であらうと思ふ。さてその歌は、果して事前の感情を間髮を容れざる底の調に載せたものであるか。さうした和歌は、常に出來るものではなかつたにしても少くとも、さうあらうとして詠まれてゐるだらうか。それは、今私が答へるまでもなく、その自撰にかゝる桂園一枝一卷を繙いてもらひさへしたならば、事實は自らに明かである。蓋し、景樹はさうした歌を上乘のものと認め、その上乘の歌の性質を究めて、我をも誡め、他にも教へたけれども、その他の種々相が、ひとしなみに、それぞれ價値づけられて久しくなつた因習の中に居た彼は、その種々相をふり棄てゝ理想とした表現歌の一路をさしてのみ精進することは出來なかつたのであつた。

景樹の態とは少しく趣を異にしてゐて、それほどこの場合に適切ではないが、論議と實詠との一致してゐない態としては、王朝末の大

歌人達が後輪を掲げることが出來る。心にかうと偏つてゐる事でも、さて實作の機に臨むといつしか手近な興味に見きずられて、思ひもよらぬ結果の生ずることは、必ずしも和歌の例に限られた事ではなく、寧ろ人事の常である。困つた事ではあるが、またそれが人間の面白いところでもある。

ながく〜と曲りくねつた迂路をたどつて來たのであるが、やつと一時低徊の足を留めるべく假の宿に着いた。

貫之は搖曳し來る表現味に心ひかれて、そこに和歌の本質のあることを感じてゐた。さてこそ錦繡を飾るをこれ事とし、小手先の技巧にのみ腐心し寡した當代歌人達――滔々として皆それであつた――を罵りもしたのであつた。が、貫之も終に時代の兒であつた。一つの主義に拘泥して動きのとれない程に窮屈な境地まで論じつめては居なかつた。論を論ずる遑を以て、創作の興味に沒頭してゐたのであつた。さてこそ萬葉歌人も同じやうに、自由な大地の間に呼吸して中にも興趣を感じ乙にも興趣を感じつゝ、のんびりした歌逍遙に一生を終ることが出來た。且彼が古今集撰輯の勅命を拜するや、先例として學ぶべき唯一の歌集は彼が奈良の帝の勅撰と考へて居た萬葉集であつた。それには、有りとあらゆる種類の歌が一樣に收められてあつた。さうした材料は、彼の周圍にも、林に茂き木の葉の如くに、いくらでも在つた。彼は同じく勅命を蒙つた數人の同僚と共に、それらを取捨選擇分類配

隣つた。かくて、古今集さへ手本であつたやうに、後の世に於ても謎を解るべく、中頃の説を以て附會せる二三の新撰集を失敗した。而して、それが已の理解を誤られる種子とならうとは氣附かなかつた。學問の將來に際限はない。新な資料が現はれることがあるかも知れぬ。新な解釋が生れることがあるかも知れぬ。その時はまた草鞋の紐を結びかへて、再び低徊の旅に上らう。

神効不思議な湊式吸癒療法

『科學畫報』『主婦之友』推奨

最新發見の科學的療法

鼻

湊式吸癒療法は切開手術をせずして治る最も進歩した最新療法であります。痛い目を忍び、澤山な金を使ひ、長い間入院してよく治らない蓄膿症が吸入などで治るものかと思ふ人もあるか知れませんが、湊式吸癒療法では、薬が極小さな霧煙となつて鼻の奥の小さな穴を通して膿のたまる粘膜に作用するのであるから、如何なる難症でも見事に根治します。

肺

肺病の人の症状の一である咳には、誰でも困るところで、咳のために喀血を誘發することもあれば、咽喉を痛めて喉頭結核ともなります。湊式吸療法は今咳きこんで今試み、即座に咳を鎮めることができるばかりでなく病者自らの黴菌を利用して一種自家ワクチン的のものとなし、自己免疫の原因によつて、肺病の本体を根治せしめんとするものでその効驗の著しいことは驚くばかりです。喘息や百日咳にも又特効があります。

腦

頭痛持ちと申せば、死ぬまでつゞく持病だと大底の人は諦めてゐますが、この吸癒療法を試むれば余程のひどいのでも驚く程速かに全治します。これは吸癒療法は腦全体の血液循環を旺盛にし、腦の内部に滯つてゐる疲勞廢物を除去する活力を送り込むからであります。それればかりでなく腦貧血や腦充血は勿論、神経衰弱や不眠症等も見事に根治します。

科學畫報・主婦之友 實驗證明附

説明書

雜誌名記入ハガキ申込次第進呈

定價

湊式吸癒器一揃及吸癒液(六十日分)

定價金四圓五十錢也

荷造及郵稅送料

內地 廿五錢

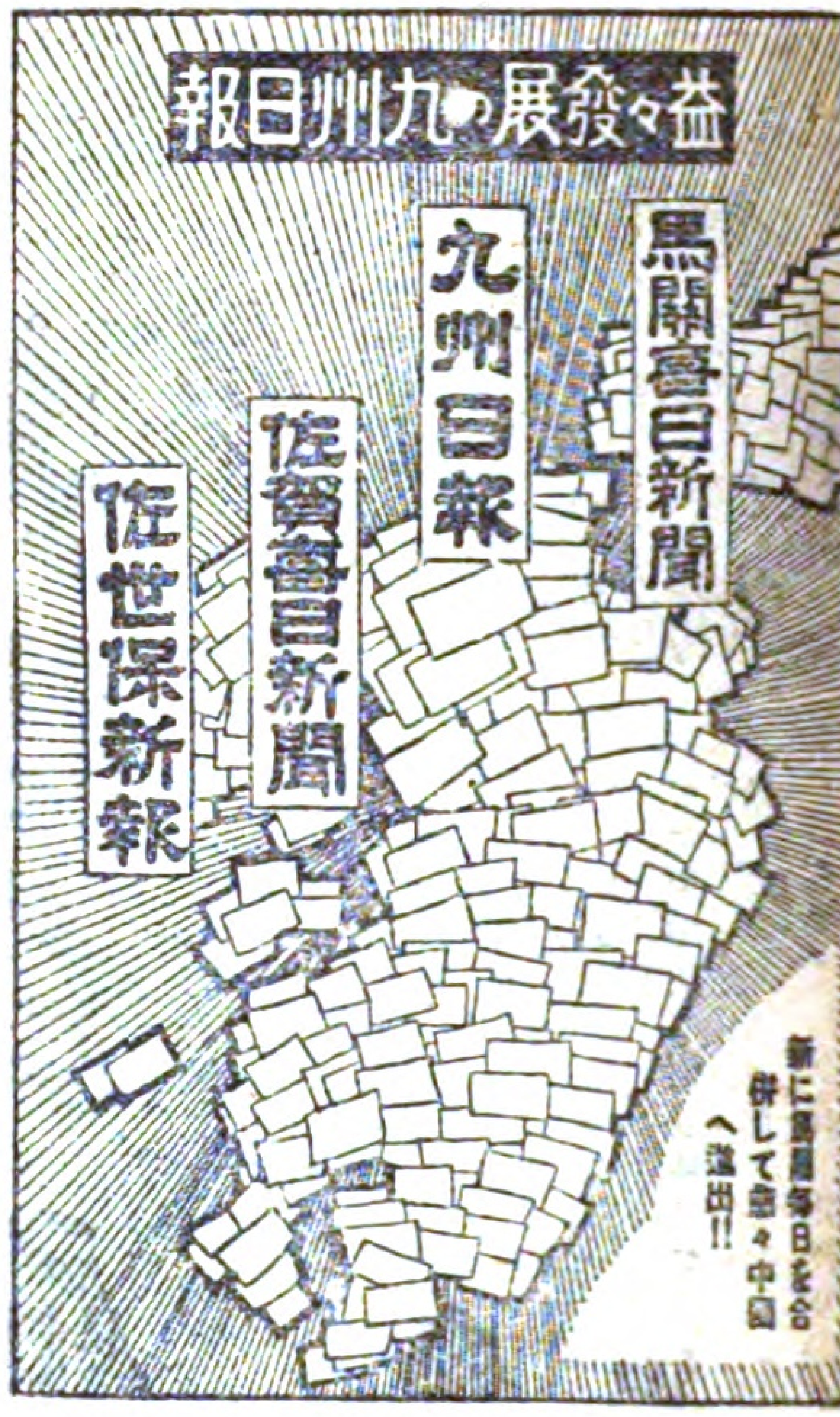
滿鮮 五十五錢

東京市麹町上二番町七番地

湊式吸癒液發賣元 **明光社**

振替東京六〇七九六




益々發展の九州日報
馬關毎日新聞
九州日報
佐賀毎日新聞
佐世保新報
併して愈々中國
へ進出!!


高知新聞


鹿兒島朝日新聞


福島民報

謹賀
新年

北海タイムス

函館新聞

[illegible]山形

海南新聞

1929

東京市牛込區市ヶ谷薬王寺町八三
電話牛込(34)一四七一番
宮尾製本所
宮尾義雄

謹賀新年

東京市牛込區西五軒町三四
電話牛込四三六〇番
福山印刷製本所

朝鮮新聞

中正不偏

下野新聞

中國民報

秋田新報

北越新報

新選名作集

本集は現代日本文學全集の姉妹出版であつて、同全集に編入せざりし名作を悉く網羅し、八ポイント二段組にして總頁各五百頁以上七百頁に及ぶ。文學全集と併讀せば僅か一圓で巨匠の大全集を讀むことが出來る譯だ。

新選 北原白秋集（散文篇）

[illegible]○[illegible]小品―その一―（[illegible]篇）○小田原小品―その二―（[illegible]篇）○[illegible]○雀・生活○山荘主人手記（[illegible]篇）○季節の窓（十九篇）○風景は動く（八篇）○[illegible]（[illegible]篇）○フレップ・トリップ ▼（小說）[illegible]

四六判並製
八ポイント二段組
五六九頁
定價壹圓
送料二十錢

新選 横光利一集

▼（小說）ナポレオンと田虫○花園の思想○[illegible]○マルクスの審判○[illegible]○機械○[illegible]

四六判並製
八ポイント二段組
六八九頁
定價壹圓
送料二十錢

新選 長田幹彦集

ゆく春。尾[illegible]。アイヌの子。小夜ちどり。自殺者手記。旅鳥。桑名心中。夕潮。[illegible]兒。[illegible]の[illegible]。（以上長・中篇・十篇）

四六判並製
八ポイント二段組
七四一頁
定價壹圓
送料二十錢

新選 近松秋江集

舊痕○[illegible]○小石川の家○久世山情話○[illegible]○[illegible]

四六判並製
八ポイント二段組
七四〇頁
定價壹圓
送料二十錢

新選 森鷗外集

▼（短篇小說）そめちがへ、雁、獨身、青年、[illegible]、興津彌五右衛門の遺書、佐橋甚五郎、護持院ヶ原の敵討、大鹽平八郎、安井夫人、津下四郎左衛門、栗山大膳、魚玄機、最後の一句、寒山拾得、澁江抽齋 ▼（戲曲）靜 ▼（飜譯小說）病院横丁の殺人犯、冬の王、父の讐、正直人、[illegible]、アンドレアス・タアマイエルが遺書 ▼（飜譯戲曲）辻馬車、秋夕夢、戀を三昧、耶蘇降誕祭の買入、債鬼。

四六判並製
八ポイント二段組
七五二頁
定價壹圓
送料二十錢

新選 山本有三集

▼（小說）生とし生けるもの ▼（戲曲）[illegible] ▼（隨筆・評論）[illegible] ▼（飜譯）[illegible]

四六判並製
八ポイント二段組
五六五頁
定價壹圓
送料十八錢

新選 岡本綺堂集

西南戰爭聞書、城山の月、[illegible]出陣、兩國の秋、[illegible]、切支丹屋敷、小栗栖の長兵衛、村井長庵、入鹿の父、亞米利加の使、[illegible]、[illegible]、茅が崎、品川の[illegible]、[illegible]の湯、[illegible]、[illegible]、[illegible]夜、長崎の兄弟、江戸名所圖會、お化師匠、三河萬歳、[illegible]、風鈴蕎麥屋、蛇を[illegible]る女

四六判並製
八ポイント二段組
七九〇頁
定價壹圓
送料二十錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

懸賞募集

昭和三年度に於て本誌は創作の懸賞募集を試み百萬讀者の間に多大のセンセーションを惹起し且つ新人を紹介し得て聊か沈滯せる現文壇に寄與する處が有つた。その結果に鑑み茲に新春劈頭更に左の懸賞募集を發表して廣く隱れたる新人と、珠玉の如き力作を世に問はんとす。應募者は左記各項御一讀の上奮つて應ぜられたし。但し住所姓名を明記すること。

詩

長短隨意。　締切　一月末日。　發表　本誌四月號

賞金　一等　壹百圓　　二等　五拾圓

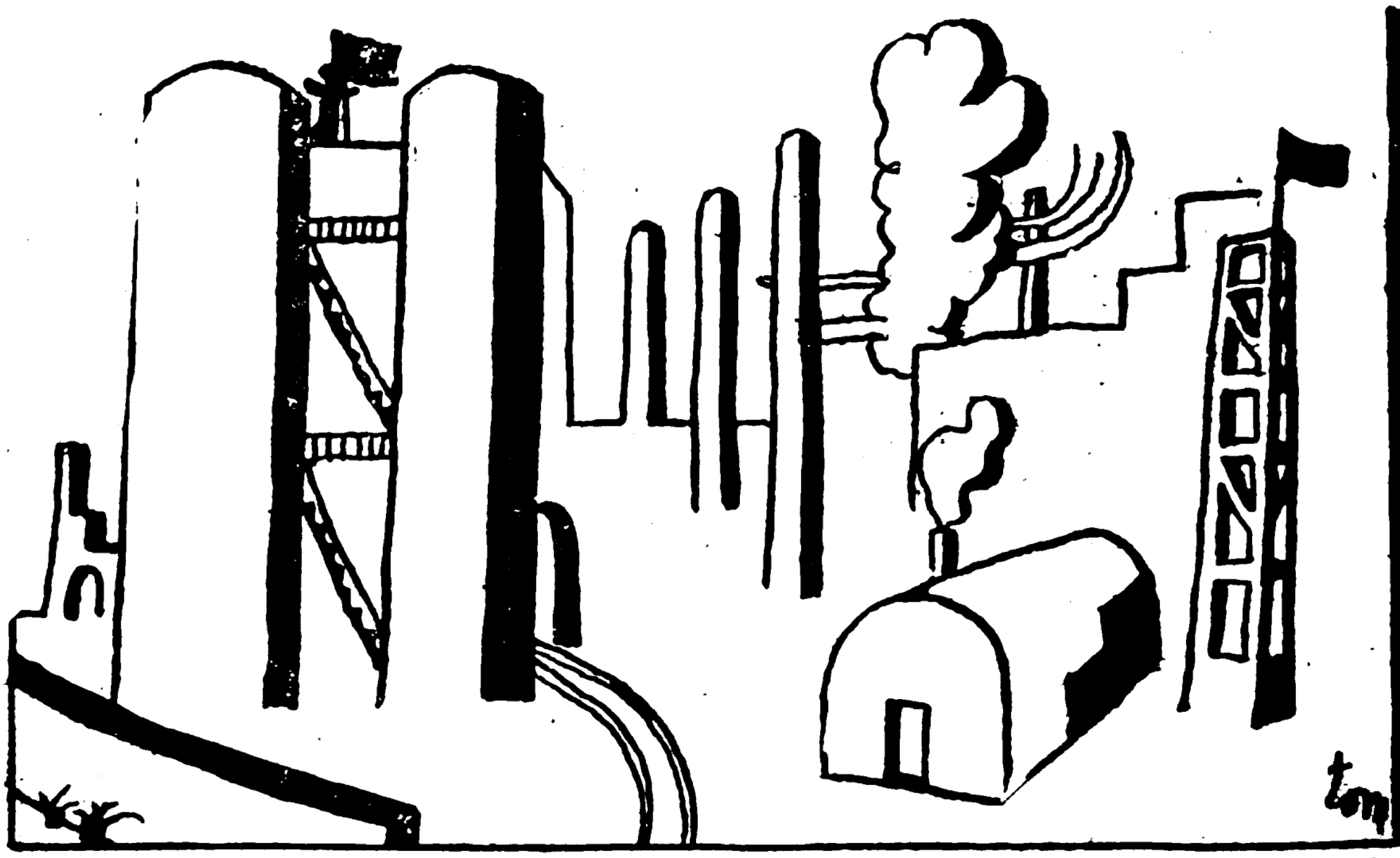
文藝評論

四百字詰五十枚以內。　締切　四月末日。　發表　本誌八月號

賞金　一等　參百圓　　二等　百五拾圓

以上詩及び文藝評論共に本社編輯部の審査とす。

改造編輯部



海底に眠るマドロスの群

葉山嘉樹

一

海底には、どの位の人間の屍體が沈んでゐるであらうか。航海中の惡疫、投身、激浪に浚はれ、或は又、船と共に沈沒し、又はボートで本船を離れたまゝ行衞不明になつた人々。

死は永遠の休息であらうか。

若し、死が永遠の休息であるならば、私は、たとへば暴風雨に吹き折られたマストのやうに、地上を支配する不合理な、、から吹き飛ばされた、多くの友の死を歡を以て送るべきであらうか。

沈沒した歐仁丸に、私の知つてゐるのは酒卷と云ふ二等機關士丈けである。

酒卷は、私と萬壽丸に乘り合せてゐた時は火夫長であつた。

彼は、職業柄でもたいだらうが、スライス・バーに似て瘦せてゐた。

彼は子煩悩であつた。彼は七人の子供を持つてゐた。

私は、彼を憎んでゐた。彼は火夫やコロッパスたちに、月二割の利子で金を貸してゐたから。だが彼は貧乏だつたさうである。

酒巻は機關長や、船長を恨んでゐた。それは給料や仕事の辛さがひどく違ふからであつた。

船長や機關長は船主を快よからず思つてゐた。それは絶えず陸上にゐて、海の危險と云ふものを知らないし、自分の持つてる船が、どの位恥しいボロ船であるか、知りもしない上に、木材はダンブル丈けで足りないで、ブリッヂと同じ高さまで積み上げるし、石炭雜貨は保險マークも糞もあつたものではなく、三分の一沈沒させた上で出帆させるのである。

日本の太平洋沿岸は、百六十數浬の間、金華山から館山までは、避難の出來る港は一つもない。

そこは世界一の難所である。

狂氣のやうなサイクロンが襲ふ。濃霧が息苦しい程の稠密さで蔽ふ。潮汐が惡い。

燈臺が少い上に惡い。

世界一の難所を持つ日本は、又、世界一に古船を買ひ込む。從つて、海難率は「名譽にも」世界第一位か第二位である、とロイドの調査は示す。

世界一の難所に、世界一二の海難率を以て乘り出す、七人の子供の親であり、扶養者である酒巻は、「必然に」「永遠の休息」に就いた。

冷たい、寒い、息の詰る、魚か海獸で無ければ呼吸の出來ない、太平洋の怒濤の下に！ それが一杯丈けでなく二杯の船が、その全乘組員と共に、沈沒して「永遠に休息」してしまつたのだ。

私は、私の知つてゐる、船友に就いて物語りを進めやうと思ふ。私の言ひ度い事を、私は先に種明かしをして終はう。

これこれの人間はこれこれの過去と環境を持つてゐた。そしてこれこれの未來を獲るために努力した。

そして、その總ては、彼の死後の生活をでなく、現世の生活に今少しの希望と、人間らしい生活を摑まうと努力した。が、彼の努力にも拘らず、彼の希望を破壞した最要の條件は、「人間の生活を基礎にする代りに、投資家の利益を基礎にした」ことにあつた。

海と云ふものは、氣の代り易いものである。それはいつ暴れ出すか知れない。全く字義通りの「お天氣者」である。

凪の日には、彼女は何物よりも美しい。彼女の囁きは、最上の愛の

陰言である。従臣を使者にして彼女はキッスを送る。

海岸を訪ふ者も、又、絶えず海の上を生活の土台とする船乗りたちも、彼女の愛を受けると、その清い息吹きに深いと息をついて微笑まずにはゐられない。

彼女の着物は時々刻々に着換へられる。朝も晝も、お茶の時間も、夕も夜も。

どんな贅澤な貴婦人でも、彼女程多くの着換へを持つてゐるものはない。そのどの着物も彼女には全く似合ふのだ。

だが憤り出すと、ヒステリーの女よりも始末が悪い。そしてまた、實によく彼女は憤り出すのだ。

世界一の巨船だつたタイタニック號の夥しい乗客も、ノビレ少將を北極に救けに行つたアムンゼン翁も、また私が書かうとしてゐる歌仁丸、寶林丸の船員たちも、殆んど何等の遺骸をも残さずに、永久にその胎内深く飲み込まれてしまつたのだ。

金華山の燈臺を右舷に見たのが、午後の仕事のかゝりであつた。

午後の仕事はアフターピークのセメン塗りであつた。

晝飯後の午睡から、密着した膏薬を引つ剝すよりもひどい痛さで、おもてのセーラーたちは引き起された。

そこで、彼等は各々、スパナーを提げて船尾の倉庫へ行き、アフターピークへのガットの、ナットを緩めにかゝつた。

ナットは、水夫たちよりも、もつとグッスリと、ボールトの上に眠りこけてゐた。

セーラーたちがブツ〳〵云つて起きるやうに、ナットは始めガリガリ云つて騒がつたが、終ひには默つて、體をひねくらせながら起きた。

ガットが開いた。

「オイ、蠟燭を先に下して見ろ」

とボースンが大きくて突び出してはゐるが、威厳のない人のいい目を光らせて言つた。このボースンは、若し役者が衣裳屋から買ふとしたならば、随分、高價を拂はせられるに違ひない、立派なカイゼル髭を生して居た。が、その立派な髭もボースンをカイゼルのやうに威厳を帯びさせる代りに、滑稽に見せた。

何故かつて、ボースンは、セーラーたちの言ふのに依ると「背の低さが高い」のだつたから。精確に言へば、身長が五尺に二寸足りなかつた。

然し、このボースンは、その事で、セーラーたちから軽蔑されてはゐなかつた。愛嬌があると云ふので反つて好感を持たれてゐた。

アフターピークなんて、地獄との境を見たいた處に迫び込むのも、ボースンのせゐではなかつた。

『どうして蠟燭なんか入れるんだね。』

と、前航海に横濱で操り上つた許りの、ドバスが訊いた。

『濕氣があると怖ねえからなあ。』

『そんなものがある事があるのかね。』

『まあ、蠟燭を下して見ろよ。』

そこで、ドバスは蠟燭の胴を縛つて、ピークへ下した。灯は淋しい光を放ちながら、ピークの底まで達した。

『よし、濕氣はない、入れ！』

セーラーたちは、セメントの罐とブラシとを提げて、ロープを傳つて船底に下りた。

長い間の密閉と、寫眞室よりも暗い闇と、そのジメ〳〵した秘密とが、蠟燭の微かな光に曝されて、鬼氣とも云ふべきものを皆に感じさせた。

そこは子供の貯金箱に似てゐた。此鐵製の空洞は上部に人間一人が辛うじて入れる小さなガットを持つてゐる丈けで、それも數年閉され放しになつてゐた。

その箱の壁を透うては、プロペラーが水を叩き散る音が響くので、セーラーたちは叩かれる太鼓の内部に居る樣、耳を毆られた。

此半分以上海水の中に沈んでゐる、鐵製の空洞の内部には、何かしら目に見えぬ白い粉のやうなものが一杯、充滿してゐるやうに思はれた。

白い粉のやうなものは、蠟燭の灯りに淡暗く三尺四方位に、その氣配を見せた。然し、それは白い粉ではなくて、濁つた空氣と、餘りにも深い闇と、冷たさとを照す蠟燭の光線の姿であつたのかも知れない。

それは鬼氣であつた。

鬼氣と云ふ言葉は變ではあるが、マドロスたちは、太鼓の内部のやうに騷しい空洞の中で、此上もない靜けさを感じた。

それは、魂を、冷たい海の水と、凝結した闇黑た空氣とに似た流で、摑まれるやうな無氣味さであつた。

波間に、ガットの下の、それから下には光の及ばない、二間餘りの高さのプレイトの上に下りた。

プレイトは三尺許りの長さで、ビームから突き出てゐたが、それは船の動搖に從つて、飛行機の翼と同じく搖れた。おまけにプレイトは、一瞬の間も乾いた暇がなく、數年間濡れ續けてゐたのに違ひない。

時には、蝦の耳のやうに急激に折曲を變へるそのフレートから、辷り落ちないためには、片手は絶えずビームに縋つてゐなければならなかつた。それに、セメントの入つた重いバケツを下に落すと、西澤か、小倉かの頭に落ちないとは限らない。それを彼は足で押へた。

それは曲藝であつた。彼等の手は必要に迫られると、手品師でもそれ以上は曲るまいと思はれる程に曲り、彼等の足は猿のやうに、その裸の指で摑んだ。

一方の手は、セメントを含んだ手箒で、サイドプレイトを、ビチヤビチヤと叩いた。

マドロスたちは、今、自分たちがセメントを塗つてゐるサイドプレイトが、どんなものであるかと云ふ事を知つてゐた。

それは陸上にあるどんな建築のベンチングよりも、壁に塗るセメントよりも重大な作業であつた。船を護るその鐵板は外部からは海の怒濤が洗ひ、海草や貝類を附着せしめる。

が、内部からも、永久に乾くことない黑潮と、永劫の暗黑と、凝結した東氣とが腐蝕せしめるのだ。

ゴム鞠のどこが少し許り破けても、それは撥まなくなるやうに、船のサイドのどこが、――サイド以下では　破けても船は浮ばなくなるのだ。

彼等の修理してゐるサイドプレイトに、僅かに滲み、恐く、執拗に行き亘つた疥癬が、皮膚に現はれるやうに、濕潤の徴候を示してゐた。

『おい！　賣れ殘りの淫賣の面に白粉をなすりつけてゐるやうな氣がしないかい！』

下で、西澤が號令でもかけるやうな聲で、小倉に叫びかけてゐるのが、太鼓の音に混つて波田の方まで微に聞えて來た。

『全くだ、方々から膿が出てやがらあ。』

と、小倉が喚きかへすのが聞えた。

下の二人の叫び聲は、淋しさと、マドロスだけが内心深く秘密に潜ひ隱してゐる不安とを、胡魔化して追ひ散らすためのものだつたが、それは效果はなかつた。

三人のセーラーたちの不安や寂寥を追つ拂ふためには、絶えざる饒舌が必要であつた、が、スクループロペラーの轟音と張り合ふ丈けの聲量は、マドロスと雖も持ち合せてゐなかつた。

胡魔化し損ねた後の、捕へ難い厭な感じは、何かの中毒患者にその藥が切れた時と同じく、憂鬱極まるものであつた。

空氣の流通は、ボースンが蠟燭を下げさせて見た程惡かつた。そのため丈けでも彼等は頭が痛かつた。その上に騷音があり、濕氣があ

り、鬼氣があつた。猶、一層悪い事には、そんな場合に限つて、彼等は自分の身の上と云ふものを振り返つたり、行く先を想ひ見るのであつた。

彼等の思ひ出は、港々に於ける女や酒ばかりで鏤められてゐる譯ではない。そう云つた思ひ出の多くが勿論ある。

だが、それは「おもて」で餘りにも多く語られ過ぎてゐるのだつた。

現實の生活が單調であつたり、無聊であつたり、又は空虚であつたりする場合、人間の生活は現實と空想とが、その位置を顛倒するものだ。牢獄であるとか、病氣での長い臥床であるとか、又は何不自由のない贅澤な生活の中に於てであるとか、マドロスの無聊な航海の間にも此現象が現はれる。

マドロスにとつて、最も悪い空想が現實の姿を取つて現はれるのは、曾て同じ船に乗つてゐた同志の顔や姿の出現である。殊にその同志が行衛不明になつたとか、又は沈沒して終つた船に乗つてゐた、とか云ふ場合である。そして、マドロスの經驗のあるものは誰しも知つてゐる事であるが、そう云ふ場合が少ないのだ。

そう云つた風な場面が、アフターピークのセメン塗りなどの場合に多く生じるのだ。

過去に何等のそうした薄氣味の悪い、不吉な回想を持たない者にしても、例へば波田の場合のやうに、マドロスになつて間もない者の場合でも、その作業の性質と、場所とが限りない自由奔放な空想の翼を與へる。

それは恰度、彼が波に乗つて、揺り上げられ、投げ落されてゐると同じやうなものである。

波田は、西澤の言つたお茶挽きの淫賣の顔のやうなサイドプレートに、セメントをピチヤ〳〵と塗つてゐた。その飛沫は彼の頭から、顔から腕、體から踝の足まで、動揺のために雨のやうにかゝつてゐた。

そして、冷たさに體中は空船の時に船が感ずる小刻な自震動をやつてゐた。

だのに、どうだらう。その見窄らしい平カチのマドロスの空想の世界は!

波田は、二千四百トンぽつちのインダラカーゴの船長を輕蔑してゐた。

『俺の欲しいのは、地位でも名譽でも、金銀でもない。』

と彼は、いつでも昂然として言ふのだつた。

『おやあ何だい? 女かい。』

と西澤が言つた。

『いや、俺の欲しいのは自由だ。』
『そんなものが便所の中にあるのかい。』
『お前は混ぜつかへすからいけない。どんな境遇にでも自由はある、と考へ得る境地に俺は到達したいのだ。』
『えらい！ さすがは波田だ、えらいぞ。俺だつて、そんなうめえ「境地」とかにトウタツしてえや。』
『それは、そう思ひ込みさへすれば譯なく出來る事だ。たゞ、人間共は慾が強過ぎるから覺らうとしないだけなんだ。』
『そうだ！ ビフテキの代りに自由を胃の腑に、女の代りに自由を抱き、眠くてならねえ時に自由の眼を擦つてりや、世話あねえ事あ世話がねえなあ。』
『ビフテキも、女も、睡眠も欲しくないと覺つたらどうだ！』
『そいつあ土左衛門さ。』
波田は、自由を求めてゐた。そして彼は完全な自由を得たと思つてゐると、未だもう一晝夜も自由の夢の見てゐたい深い眠りから叩き起されるのであつた。
彼は自由に手足を延ばす代りに、セメントとペンキだらけのゴワゴワの、言はゞトタン板に近いオバーオールを身につけてゐた。
それでも猶、彼は救はれる見込みのないロビンソンクルーソーのやうな禁欲をした末に、チベットには自由があると空想してゐた。そこは、このアフターピークの空氣見たいなものでなく、大西洋の上を一杯に充つてゐる空氣のやうな、大きな自由、澄明な自由があると思ひ込んでゐた。
しかし、彼も、現在自分がアフターピークの中で、睡眠不足と、惡い空氣と、過勞と、性的に非常な不自由の中にある事を、自分に隠し終せる譯には行かなかつた。
『胃の腑にや、自由よりやビフテキの方が、ほんとにいいらしい。』
と、波田は思はないではゐられなかつた。すると、彼は、自分が船中で一番惨めな一勞働者に過ぎないと云ふ事が解つた。
――俺は、自分が惨めだと思ひ度くないために自由だなんかと云つてるのではあるまいか。自由とは何だ？ 空氣のやうなものか。空氣だつてガットで閉められりや腐るぢやないか――
殊に、波田は陸に殘して來た愛人の事を考へると、自分から打ち壊した陸上の生活の方が、どの位自由であつたかを、いやと云ふ程覺らざるを得なかつた。
彼は自由と、現實との間をローリングしながら、セメントを臟物の上に塗り續けた。
三時間の後、作業は終つた。

ガットから這ひ出したセーラーたちは、粉まみれの飴ん棒見たいにセメントに塗れてゐた。

『なんて間が悪いんでせう。』

と西澤は言ひながら手帶を海へ投げた。二人のセーラーたちは「おもて」へ歸つて行つた。

二

未だ日は高かつた。

三陸の海岸が、他所他所しく、遙に右舷に連つてゐた。

小倉と西澤とは、濡れた仕事着を着換えるために「おもて」へ入つたが、波田は着換えは寢間着用の浴衣以外は、たつた一枚しか無く、それも纜上に乾してあつたので、ブルワークに凭れて、遙の海岸を眺め入つた。

——陸と海とは何と云ふ違ひのある事だらう。陸から海を眺め、靜に辷る船を眺める時は、あんなにも船は美しくて憧れの的だつたのに、今、海から陸を見ると、何と云ふ神秘な陸だらう。あの陸こそ、俺が求めてゐた自由のチベットのやうな優しい、夢見るやうな姿をしてゐるではないか——

そんな風に波田は感じながら、いつまでも陸岸に見入つてゐた。

三月の上旬であつた。風は寒かつた。

空は揚子江河口の海水のやうに、一つのむらもなく一面に鈍つてゐた。それは神經病に罹つた患者が、絶えず頭の痛さに攻められながら、ムツと押し默つてゐる不機嫌な表情に似てゐた。

神經病患者が發作的に何をやり出すか解らないやうに、こんな表情をしてゐる空は、海と共謀して、どんな事をおつ始めるか、氣象臺でも見當のつかない事が多かつた。

波田は濡れた仕事着でブルワークに凭れながら、ガチガチ歯を嚙み合せてゐた。

彼の戀人は、この海續きの日本の南端で、彼の事を思ひながら、海岸に逍ひ出てゐるに相違ない。そして一日も早く、波田が世帶を持てる丈けの收入を得る地位になるのを待つてゐるのだ。

『妾は小學校の先生になる試驗を受けるやうに勉強して、いつまでも待つてますわ。』

と、波田の戀人は別れる時に言つた。

——あの廣い、夢の國のやうな陸に、俺の世帶を持つだけの隙間がなかつた。この廣いヨーロッパにも、南米にも、北極にも續いてゐる海の上にも、生活苦のない隙間と云ふものはないのだ。俺は自由を求めてゐる。だが、それは、生活を押し潰す自由ではない。俺が十左エ

間になつて始めて得る自由ではない。生活を樂しみ得る自由でなければならない。俺は空想丈けでなく、自由を得る實際の方法を、小學教師の免状を取ると云ふ樂子のやうに、實際的に考へねばならない。――

波田は考へてゐた。

『おい！　何を考へてやがるんだい。ハッチのライシンだぞ。』

頭の働きは、再び筋肉の働きへと振り換へられた。

『何だつてこの凪に、ハッチのライシンなんかやるのかい。』

『見てろ！　今に、どでかいしけが來らあね。世界一の難所を通る時や、そのやうに準備しなきやいけねえ。』

若し陸であるならば、先づ樹の葉をそよがせ、次いで梢を搖ると云つた軟い風が吹いて來た。

『何だい、こんな撫でるやうな風か。』

水夫たちが、一番のハッチから、二番のハッチまでライシンを爲し了へた頃、梢を搖かす位の風は、船のマストを搖ぶり初めた。

雨と霙とが混つて横つ飛びに打つつかつて來た。

リギンやステーが鳴り始めた。

染料が一度より二度と布を濃く染めるやうに、暴風雨は一刻一々と、時間的でない暗黒を海の上に撒き散らし出した。

『どうだい。波田、世界の難所だぜ、此處は！　並な氣紛れぢやねえだらう。』

全く、四番のハッチをライシンする時は、怒濤はもうデッキへ打ち上げて來た。

――自由も、理想も糞もねえや――

と波田は口の中で呟きながら、仲間と一緒にビショ濡れに、雨、霙、飛沫とに濡れて、懸命の勞働をした。

ハッチのライシンは終つた。

デッキ積の木材のライシンも終つた。

フオツクスルのスカイライトのカバーも終つた。

すつかり怒濤や、暴風雨との鬪爭準備が終つた時分は、暗い闇と、暗慘な暴風雨とが、天と泡立つ海面との間で、誰憚るものもなく勝手氣儘に荒れ狂つてゐた。

水夫たちは、おもてへ歸つて各自の巣にもぐり込んだ。

限りなく波田は憂欝であつた。

ボールドは硝子窓だけ、嚴重に閉めて、鐵のブラインドは閉めたいで、仄暗い海を眺めてゐた。

『おい、鐵蓋を閉めろ！　水が入るぞ！』

向ふ側の西澤が怒鳴つた。

全く、怒濤がサイドに打つ衝る毎に、力一杯閉めてあるボールドの

ゴムを透して、海水が浸透して來た。

船は、二十間も前後へ搖りやられたり搖り返されたりしてる氣配が感じられた。

波田は西澤には返事もしないで、たゞ舌打ちをしたゞけで、窓から依然として外界を覗いてゐた。

彼は、何を見ると云ふ譯で眺めてゐるのでもなかつたが、ひどく大きな波が、船首に打つ衝つて乘り越して行つた時々怒濤の中に魚の泳いでゐるのを見た。

『閉めろつたら、打ち壞されるぞ。』

西澤が又、怒鳴つた。

波田は猶、默つて、窓から、時々現れる魚群を眺めてゐた。

——羨ましい野郎たちだ——

と波田は思はないではゐられなかつた。

——こいつ等は自由だ。こいつ等には何か言ひ付ける奴がゐない。こいつ等は生きるために生きてゐる。死ぬために生きてゐるのではない。——

『來て見ろよ！　魚の野郎、面白さうに泳いでるぜ！　未だかい、お前たちが餌になるのは！』つて面あして、口をパクパクやつてるぜ。ウンと居るぜ。』

波田は、窓を瞶めながら西澤に言つた。

『馬鹿野郎！　閉めろ！　手前は命が惜しくはねえのか！　魚なんか水族館で見ろ、馬鹿野郎！』

『心配するなつてことよ。此處が浸水したつて沈沒しやしねえからな。』

波田は突つぱねて、魚の泳ぐ波と、それと同じやうな空間とを見續けてゐた。

それは何の事はない、直徑一尺のレンズを持つた水中眼鏡で、海の中に潛り込んだのと、些かも違ふ處は無かつた。

誰でも知つてゐる事ではあらうが、海は上から見た時と、陸から見た時と、「下」と云ふのは語弊があるが、中からと云へばいいだらうか、潛り込んで見た時とは、色が違ふものだ。

いや、色丈けではない感じが全つ切り違ふものだ。然も、内部からあらゆる角度で見る時には！

しかも、しかも、その眺める眼の持主は生命の問題を控へてゐるのだ。

恐らく、船のりがオットセイや、アザラシのやうに、陸ででも、海水の中ででも棲む事が出來るならば、暴風雨でもどんな濃霧でも、暗礁でも、些も恐れる理由はないのだ。

それ處か、暴風雨などは待ち望んでゐるかも知れないのだ。それは、海水の中に、多くの酸素を供給するだらう。又、餌たつて、空の鳥が吹き落されて、珍味を供給するかも知れない。それは呼吸も樂にするし、餌をも豐富にするではないか。

そして全く、ボールドから見える魚たちは樂しさうに泳いでゐた。その怒濤に從つて動いてゐる樣子は、子供たちが遊動圓木に乘つかつてゐるのと、些しの違ひも無かつた。

『馬鹿だなあ、お前は、しける時にはも少し沈むもんだよ。稀にや表へ飛び上るのも面白いが、さう、のべつに浮んでるといまに草疲れるぞ。』

と、魚たちは、八つ目鰻のやうに、頭に圓い多くの眼を持つた巨大な魚、喘ぎ惱んでゐる汽船に云つてるやうに見えた。

全く、船は、草疲れて行き惱み始めた。

巨大な魚の眼は、泡を噛む海面と、その切り口とを、交互に忙しく眺めた。

海面は喚き、罵り、悲鳴を擧げ、いろんな船具が吹つ飛んだ。

切口は、全で海と云ふ生物の内臓を見詰めてゐるやうだつた。魚は海の寄生虫の蛆ではあるまいか。

波田は、全で、自失したものゝやうに、そんな風な事を感じてゐた。

擲りかれた西澤が、大儀さうに波田の巣へ上つて來て、

『手前なんぞ見てえな、娑婆に女のねえ者たあ違ふんだぞ！　おいらあ濱においらんが待つてるんだからな。』

そう云つて、彼は敏捷にボールドの上へ、ブラインドを嚴重に閉めた。

『アンカーがゆるんで、ドサリと來て見ろ！　一度で、金槌土左エ門だぞ。』

『おめえ見たいに命の惜しい奴を、俺は世界でたつた一人つ切りか見ねえや。』

『俺は又、手前見たいな强がりを見た事が無えや。海に度胸を見せるなんざ、人間のするこつちや無えんだぞ。』

『俺はな、おめえと違つて、陸には女房があるんだぜ。それでも、おめえ見たいにビク／＼しやしねえぜ。そんなに海が怖かねえんなら何だつてセーラーなんかになるんだい。』

『それはな、波田。』と、西澤はいつになく眞面目になつて言つた『お前が年が若くて、世の中のいろんな事に打つ衝つてゐないからなんだ。「熱い」と云ふ事を知らない赤ん坊は燒け火箸でも握るからな。お前は未だ沈沒した船に乘つてた事がないから、沈沒つてものはどんな

味がするものだか知らないのだ。東京の震災に出つ會したものは、それから後は、前よりも地震を怖れるやうになつたのだ。』

『だつたらお前は沈沒した事があるかい。』

『あるさ。だから、俺は時化と度胸比べなんかやられねえんだ。』

『だつたら何だつて又船乗りなんか引き續いてやつてるんだい。お前の一つ話の紡績の男工か、牛太郎でもやつてりやいいぢやねえか。』

『お前は此世の中を自分の思ふ儘に暮した事があるか！　お前は全で我儘息子見たいな勝手な事を言つてる。だが、俺たちは勞働者なんだ。世の中が儘にならないつたつて俺の知つたこつちやねえや。』

西澤はそのまゝ波田の巣へ腰を卸して、バットに火をつけた。

『俺だつて世の中が儘にならないつて事位は知つてるさ。だが、船乘りにならなくたつて陸にいくらも働く口があるぢやねえか。』

『お前は年は幾つだ！　嘴に卵の殻のくつついてるくせに、出つたい事を拔かすな。』

『俺は十九だ。お前は戸籍調べの役人か。』

『ゴツデム！　手前はもう三十年も前に船に乘つてりや、いいボースンになれたらうになあ。』

『俺はボースンや、船長見たいなケチなものになり度かねえんだよ。』

『ヘッ！「俺の欲しいのは自由だ」か。』

『そうさ。當り前ぢやねえか。お前は自由なんか欲しくないとでも言ふのかい。』

『そんな腹の足しにもならねえものなんか眞つ平だ。なあ小倉、お前は自由つてものを沖賣らうが持つて來たら買ふかい？』

西澤はそう言つて、船首の方の彼の巣で本を讀んでゐた小倉の足を引つ張つた。

『俺は買ふよ。』

『チヨツ！　こいつかぶれやがつたな。で、手前見た事があるかい？』

『見た事があるかつて？　そのあべこべのものばつかり見てるから欲しいんだ。』

『あべこべのものつてなあ買つた事があるのか。』

『買はなくたつて、どこに行つても押つ蔽さつてらあ。』

『ぢやあ見せて見れ！』

『よし見せてやる！　眞面目に見るか、辛抱して。』

『時化の食ひ序だ！　辛抱してやらうよ。』

かうした冗談から、彼等の憂鬱極まる暴風雨の一夜か、身の上話で紛らされるのであつた。

三

『僕の祖先は自由を持つてゐた。』と、小倉は語り出した。
『誰がそいつを取り落したんだい。』
『混ぜつかへすな。今話してやる。』
　小倉の話した事柄を會話のまゝでは私は覺えてゐない。だが話の筋丈けは今でもはつきり覺えてゐる。
『ある年の春、「お役人様が村へムらつしやる。」と云ふ評判が立つた。俺の村の者はその噂で持ち切つた。何故かつて云ふと、俺の村には役人などが來た事は、村が何百年かの前に始まつてから一度も無い事なんだ。
　ある者は道をつけるために測量に來るのだ、と云つた。も一人の者は、何でも此山續きに金を掘り出しに來る。いや違ふ、學校を建てるんだ。いや違ふ道だ。いや金だ。學校だ。と言ひ合つたんだ。おやおや前はどこからその話を聞いたんだ、と言はれると、お互に默り込んで考へてるんだ。
　終ひには「役人が來る」なんて破天荒な事は、誰も言ひ出した者が無くて、聞いたもの許りだつたことになつた。
　で結局、金が出たり、道がついたり、學校が建つなんてうまいことは、煙のやうに山の上を吹いて行つて終つたのだ。
　俺の村は、中國の脊骨になつてゐる山脈が、いきなり日本海に飛び込みさうになつてる、ひどい山の谷にあるんだ。天氣のいい日には遠くに日本海が見えるんだ。四十哩許り沖には隱岐の島があるんだ。
　俺は小さい時分、山の岩鼻へ出てはよく海を見たものだ。それは、かうして海に苛められてる時と違つて、俺の夢の的だつたからな。青い海の上に、犬つころのやうな柔かい白い雲が浮いてるんだ。そこは山の中の寒村と違つて無暗に廣いんだ。
　四つ位から六つ位までの間、天氣さへよければ俺は海ばかり見てゐた。多分俺が五つの年だつたかもつと幼かつた時分だつたか、兄が俺を連れて來たんだ。その日、俺は朝から夕方近くまで、間に晝飯を食ひに歸つたつ切りで海に眺め入つてゐたんだね。
「お前は小さい時、餘り海を永い間見てゐたので、俺が連れに行つた時、――軀が重い――と云つて立てなかつたのを覺えてるか。」と、此前脚氣で横濱の病院に入院してる時、兄貴が見舞に來て言つてたがね。それ程惚れた海だつたのだ。
　何しろひどい山の中なんだから、俺は海を眺める事以外に興味がなかつたんだ。で、遂々、俺は村の者からも家の者からも「少し足りな

い」つて事にされちやつたんだ。尤も今だつて足りても居ないんだがね。

然し、學校に行くやうになつてから、學校の成績はずつと上席が續いた。で、「あいつ等は學問馬鹿だ」と村の人から、俺の一家は言はれるやうになつた。と云ふのは、俺の祖父が村中では讀み書きが出來たが、そのために貧乏になつたんだ。で、俺の親父には教育をしなかつたが、これも又、いつの間にか村中の學者になつた。そこで家運いよいよ傾くと云ふ段取りになつた。

俺の爺さんが死ぬ前年頃だつたが、俺の村にまで「不如歸」が「ラッパ節」になつて入り込んだのだ。

——血を吐く思ひのホトトギス、
トコトツトコ、チットツト——

てな唄を怒鳴りながら、俺の從兄弟が朝暗い中から山麓の町へ出かけて行つて本屋で、

「ほととぎすつて本を下さい。」つてんで、その本を抱へて廻れ右をして、一直線に村へ歸つて來たんだ。ところで、山へかかる邊で本を出して表題を見ると「不如歸」と書いてある。

從兄弟は「フゴトカヘル」と訓んだね。小學校を出た丈けなのだから、パンはパの字が麪で、ンの字が包の字だと覺えるやうな覺え方なのだから、「不如歸」では、どれがホトトギスのホトの字かギスの字か見當がつかないんだ。それは俺にだつて未だ分らないがね。で、ええ仕樣がない、つてんで、俺の處へ來て、「わいが爺さんは知らん字はないちうが、これぱかりは分りまい、一つ困らせて進せやうではないか」

八十になる爺さんは、二粒の乾葡萄見たいな眼で眺めると直ぐ、「ああ、これやほととぎすだ。未だ外にかうも、かうも」と云ひながら、火箸で爐の灰へ三つばかり書いて見せた。

その爺さんは三味線が好きで自分で彈いてゐたし、俳句もやつたらしい。そして俺の小さい時見たいに、一日外で鍬に顋を載せて海を眺めて考へ込んでゐたつてんだから變り者ではあつたんだね。

俺の親爺も又變り者だつた。三里餘りの道の往復を褌 をブラ下げて歩いたり、俺が學校に行つてる時「おい、一寸來て見い、小山の正公の兄弟ぢやないか、あんな阿呆が立つてるが」で、見ると、俺の親爺が、口をポカンと開けて立つてるんだ。だが、決して白痴ではなかつた。困難な事件は村の人たちが親爺に解決方を賴んだ位だから。

俺の親爺も死んだ。その死に際が俺の村の原始的な生活を俺よりも

上手に話す。尤も俺の村だつて此村よりにいいからなれたい。医者と云ふものに、兎に角親爺を見せた上で死んだのだからね。

尤も、此医者と云ふのが、もう七十をズツと越した老人で、自分でも医者にかからねばならない病人だつたのだ。本業は鍛夫だつたが、中風が出たので医者に商売換えをしたのだ。

俺が迎ひに行つた時は、医者は病氣の具合が良いので、から言つた。

「それは、それは、お氣の毒な、診て進ぜるどころではない。直ぐに行きますで、これを持つて去んでもらいませう。おれはこれから風呂を沸かしまして入つてから行きますだよ。」

「風呂は私の家で入つて貰へませんか。」

「いや、のう、風呂に入つて血管を緩めてからでないと、山道は歩けませんでのう。」

「ではなる丈け早く来て下さい。」

と言つて俺は医者の薬箱を擔いだ。それは下手な箪笥ほど大きかつた。言はゞまあ俺は薬局の薬品棚を擔いだんだ。そいつを擔ぎ出すと医者の家には、一粒の丸薬も殘られえんだからな。

俺はダダくに汗になつて歸つて、薬箱を親爺の枕下に据えつけた時は、何かの児の済んだ後のやうな氣持がしたね。

大に行つた時医者が来た。俺は医者の顔の下から突き上げてやりたいか、と思つた。何故つたつて、草も木も萎え返る程暑く、花は山中に石水でも振りかけたやうに吹き乞つて、太陽はその頭上の情熱で大地を抱擁してゐるのに、医者は湯上りの脇に、羅紗、綿入れ、大黒頭巾、股引き、その上から毛布にくるまつて、山道二里を歩いて来たのだ。

破れた草鞋からは膝の邊まで撥ねが上つてゐる。これが、俺たちの地方での「神様か八田様か」と尊敬されてゐる唯一人の医者なのだ。

俺は今だつてあの医者を尊敬してゐる。いくらもいい医者は居るだらうさ。だが、あの医者程、人の病氣を癒したいと心底から思つてるたのを見た事がない。その医者は職業として医者をやつたのではなく、自分の病氣を癒すために医者になつたのだからね。

親爺は然し死んだ。

俺は妹と代つてちよつと眠らうとしかけた時、妹が駈けて来た。俺は心臓に泥足で踏み込まれたやうに感じた。俺たちは泣いた。

父の葬式が済むと、おふくろは俺の兄貴に言つたんだ。

「安や、これからは何もかもお前の肩にかかるやうになつた。お父さんの代りに重荷を……」

と云つて泣いてしまつた。

父は善良だつた。だから生活が苦しかつた。兄も善良だ。骨が磨り減る程働いた揚句、たつた一頭の馬を賣り飛ばしてしまつた。俺は、眼の玉の中へ入つた石炭屑をとる暇もない程忙しく扱き使はれてる。どこに自由があるか。

初め役人が來ると云ふ噂が立つたと言つたが、それは事實だつたのだ。その役人が來てから、俺たちの山の森林が官林に編入されたのだ。

だが、村の者は何百年來の仕來り通りにやつた。それが盗伐と云ふ結果になつた。

俺たちの村は生活手段を失つた。俺たち村の青年男女は、「俺たちの村を救はう」と決心して各地に出發した。が、未だ誰も故郷に待つてゐる老人たちに送金し得るものはあるまい。どこへ行つても空氣があるやうに、どこに行つても生活の苦しさがあるのだ。自由はどこにもない。

俺が故郷を救ひ得るのは、自由を取つてからだ。勞働者や農民が生活を得ると云ふ事は自由を得る事だ。それには、どんな値段を拂つても高いと云ふ事はない。それは生命を買ふのと同じだからだ。

俺たちは自由を得なければならないんだ。』

四

此時の暴風雨は一時間四十五浬の速力で、伊豆沖から釧路の方向へ移動した。

海の上にも壯者があり老衰者がある。それは繁華な都會の街路の上に見られる、多くの人々の往來にも似てゐる。

新造船や巨大なメイルボートは海上に於ける壯者である。足も速い、抵抗力も強い。

だが、海の上では陸上よりも老衰が早くやつて來る。二十年、三十年を經た船は、犬のそれと同じ程に老い衰れるのだ。

その日、此ひどいサイクロンの猛襲を受けた船は、一萬五千噸級以上の客船二隻、一萬噸級以下五千噸までが三隻、後の五隻の汽船は一千噸級から二千噸級の船で、四千噸の胴體を持つてゐても、老朽した船體と、積荷の過重のためヨロ〳〵の船であつた。

それはひどい暴風雨が都市や農村を襲つて、多くの建物を倒し、樹木を倒し、葉や梢や大枝や、トタン屋根や、屋根瓦を吹き飛ばし、人々を家の内に閉ぢ込めて猶も安心させない大暴風雨の夜と同じであつた。

たゞ、陸上で起る變は、怒濤がない、ゆるがない地盤で、下からも

船體へさらりとする事であつた。

大ビルデイングのやうに、確かな基礎工事も支柱もないバラックが、風に弱いのと同じく、小倉たちの小船も、酒谷の乗つてゐた大船も、海上に於けるバラックであつた。

仁田が三陸の海岸を夢見心地に眺めてゐる時に、沖の方を巨大な船舶が二杯追ひ抜いた。

それは眞つ白く塗つたビルデイングが走つてゐるやうに見えた。高い船體の下部は、海の圓みの下に隠れて見えなかつた。

夕暗が薄く波頭の間から湧き初めた時、その巨船は細長い灯の町のやうに見える。

そこには陸上に於ける大ホテルと同じやうな會話があり、儀禮があり、華美があり、娯樂がある。

だが、此處には生命の危険と仄暗い一つの電燈の光のみしか無い今では、ボールドから覗く魚群も見えなかつた。波田も小倉も西澤も死を選びにでは無く生を選んで來てゐるのであつた。

ワイヤレスの技師は、絶えず、SOSを打つた。

『救助不能』の返信があり『救助に向ふ』と云ふ返信があつた。又、SOSを木魂のやうに打ちかへす船もあつた。

震災當時の救ひを求むる聲のオーケストラにも、それは似てゐた。

わがK丸は、デッキ積の木材を激浪に噛み千切つて行かれた。噛み千切られた木材はデッキを跳り越えて、その束縛を解かれた嬉し紛れに、マストの束縛であるステーやリギンを、片つ端から切り放して荒れ狂ふ怒濤に身を委せた。

一本立ちのマスト、然も、それは右と左へ四十度づゝも頭振をふるデッキの上である。

見る間にマストも怒濤の中へ跳り込んだ。

アンテナが切斷する瞬間に入つた無電は、『遺族タノム』と云ふのであつた。

酒谷の乗つてゐた歐仁丸の無電なのだ。

ところが、今は、わがK丸はアンテナが切斷し、マストは取られた。正に『遺族頼む』と、最後の無電を打たねばならない時に、その最後の言葉は掻き消されねばならなかつた。

機關に浸水した

一

全船の電燈が一時に死んだ。

闇夜と、暴風雨と、唸む怒濤との間に、眼も耳も手も足も無くなつた廢人の如き、難破船が漂流し初めた。

それがわがK丸の運命であつた。

K丸は、今、全く「死」を宣告された。

その乘組全員も、死人の中の諸臟器と同じく今は死を待つ以外に、施す術が無かつた。

全船員はハウスに集つた。

かう云ふ時以外に絶對に開かれる事の無い「全船會議」が開かれた。

船内の階級は、「死」の前に一瞬にして吹き飛んで終つた。

全員四十九名はケビンに集つた。

と同時に一大衝撃を船は受けた。

『坐礁た！』

『ライフ・ベルトをつけろ』

それが岩礁であれば、一瞬の後は死であつた。

『ソケットだ！　ソケットだ！』

『デッキで火を燃せ！』

如何なるものも、此場合燒いてならぬ程貴重なものは無かつた。

石油を打つかけられたウエスは、暴風雨に人魂のやうに怒濤目がけて吹つ飛んだ。

全くこの火は人魂であつた。

船は沈沒しなかつた。

五時間餘り、赤黑い人魂を全員が虚空に投げつけた。

夜の闇は、その明りでは破れなかつた。

どんな大聲も、口から出ると直ぐ暴風雨に拭き取られてしまつた。

再び船が悲鳴を擧げた。

『折れた！』

この時、陸上らしい處に篝火が見えた。

船尾は少しづゝ沈むやうに感じられた。

船首は坐礁し、船尾は沈み行く。そして陸上に篝火が長く尾を引いて、火の子を舞ひ散らし初めた。

全員は心臟を締め上げられたやうな緊張を感じた。

『死か、生か！』

泳いで着けるだらうか？

怒濤は、K丸が吐き出した木材を牙のやうに噛み鳴らしてゐる。

怒濤の飛沫は霧となつて、陸上の火を隱す。

救命ガンは幾度も發射したが屆かない。

木材にロープを縛りつけて流した。切れた。ワイヤも切れた。

陸の灯を見ながら、それに辿りつく方法のない氣持、それは着物全體に廻つた火を負ひながら水を目蒐けて驅ける人の氣持、と同じもの

ではあるまいか。いや、それは言ひ現はし得る氣持ではない。

五

K丸の坐礁したのは、今までどの位の多くの船を呑んだか知れない鹿島灘の、極めて不便な半漁半農の村の沖であつた。

その村は輕野村と呼ばれてゐる。

そこへ用事のある者は砂漠を歩かねばならない。そこは植民されてから未だ七十年位しか經つてゐない。

霞ケ浦と鹿島灘との間に、數十里の長さで心細く横たはつてゐる、紐のやうな細長い砂地である。

千葉縣の佐原から銚子行きの發動機船に乘つて、日川と云ふ村へ降りる。

そこから「跣足」で、輕野村まで行くのである。道と云ふ道はない。雨上りには勝手な處を膝の深さで水が流れ、はけ口のない處は廣い砂底の沼を形造る。

砂山と呼ばれる砂漠が連つてゐる。その盆地には水が溜つてゐる。道もない砂漠を荷馬車に乘つてノロノロと行く者がある。日本の土地であるとは考へ難い狀景である。

ある年の夏、盲目の按摩が此盆地で死んだ。杖は一里先を見透すことが出來なかつたからだ。

又、夜になると土地の者でも、此盆地から拔け出し難いさうである。

水平線が、その白く盛り上つた砂糖のやうな丘の上からは、きつと見えるだらうと想像しながら旅人は、濤の音に想像を裏附けながら急ぐ。丘の頂きに着くと海の水平線の代りにも一つの砂糖の丘がある。

芋や、落花生の畑。草一本生へてゐない砂漠、松の矮林、松のよく生ひ茂つた林、その林の處々を、正しい長方形に刳り拔いた水田、その附近に純農の家が所々にある。

純農の部落を過ぎると、半漁半農のひどく貧しい部落が、風と濤とが盛り上げた小高い砂の襞の陰にこつそり隱れて建てられてある。

この、ひどく貧しい半漁半農の村人たちが、わがK丸の「人魂」を深夜の海上に發見した最初の人たちであつた。

此濱沿ひに建てられた漁船乘組員の殉難碑は、方々に海を眺めて立つてゐる

それは彼等の子孫に「海に行くな！」と云ふやうに淋しい表情である。

だが、子孫たちは、〇〇の頭を藁で結へて、原始人に似た勇敢さで、海に乘り出す。でなければ食へないのだ。

K丸の乘組員も、此濱人たちも、生活するためには不慮の死を怖れてはゐられなかつた。

K丸の人魂は海面を匍つて飛んだ。

怒濤は一哩以上の沖から、壁のやうに捲いて來た。

暴風雨は霙を交へて、砂を飛ばした。眼も開けられなかつた。

木材は怒濤に乘つて、人間よりも先に濱に跳び上つた巨人のやうに見えた。直徑六尺以上の丸材、二尺角四十尺位の角材、それらの肥つたの、痩せた長いのが轉び上つた。

海にも濱にも、平常よりは引き延ばされた夜が這つてゐた。

濱の人たちは、曉を待ち切れないで、決死隊を募つた。

十八人の血氣の若者が第一回の舟を仕立てた。枕木の上を小舟は辷つて怒濤を待つた。一つの波に乘つて小船が五間も出た頃、次の激浪に十五間も陸へ叩き返された。

怒濤は嗤いた。

『舐めるな!』

長い時間が又、わがK丸を占めた。

濱で行はれてゐる、決死的な方法が了解される筈もなかつた。

全船舶會議は通夜の夜の如くにしめやかに進んだ。全員の心の中には入り切れない多くの思ひが張り詰めた。新婚後十日間にして出帆した、チーフエンヂニーアの船室は、タチアップした許りであつた。次航海には愛妻に海の空氣を味はゝせるためであつた。それが今では、打ち上げられた牡蠣の殻にくつ着いた、美しい小貝にも似た運命になつて終つた。

誰の心にも一つの影像が、永く留まることなく、恰度その時の暴風に煽られる雨滴のやうに飛び過ぎた。

ボースンは月二割でも、此小船の不勞所得は四人の子供を、棟割長屋に食はせて置く丈けでも、行き詰つてゐた。

親、兄弟、妻、小供、親戚、縁人、それから村、彼等の一人として、愛着の相手の無いものは、一人でに生れた者が無いのと同じく無かつた。

意地惡く永引した闇が薄らぎ初めた。

陸の姿、海の姿が、どちらからも、微に、飛沫の霧にぼやかされながら眺められた。

わがK丸は案外に陸に近く、それも齒磨粉のやうに軟かい砂濱續きに坐礁してゐたのだ。

全船舶會議は、二つの意見に分れた。一つは船と運命を共に爲やう、

と云ふのも一つに、船に留つて全員餓死するよりも、半數は死んでも半數は救はれるかも知れないから。

そこで第一の決死隊が、おもての平カチ連十名で作られた。

それは、三月十一日の午前九時頃であつた。

濱の村人達は、ボートが下され始めるのを見た。誰もがハッとした。

『駄目だ！』

『卸すな！ 卸すな！』

と村人たちは濱を駈け廻り、手を振つて、聲限りに怒鳴つたが、村人たちの怒號も暴風と怒濤の音に呑まれた。

ボートは怒濤の頂上に乘つた。次の瞬間マドロスたちは見事にホックを外した。

怒濤の傾斜にかゝると、ボートは沖を向いて物凄い速力で流れ始めた。

オールは直に浪に取られた。それは省線電車の中から棒を出して、電柱を支へて止めやうとするのと同じであつた。

濱からは、もう一呑みにされたと村人たちは諦めてゐた。

『あ、未だ浮いてる！』

と、一様に暫くの後、濱の村人たちは叫んだ。

ボートは沖へ、沖へと流された。それは見える時よりも波頭へ隠れて見えない時の方が多かつた。村人たちは空虚な溜息を漏らした。殘つた

沖へ流されたボートは、沈沒した本船よりも遅れであつた。殘つたものは助かるかも知れない。だが、ボートに乘つた者たちは！

それは殘つた者も、ボートの中の決死隊の十名の平カチも、又、濱に駈け廻つてゐる村の人たちも、一様に感じた處であつた。

海岸には木材が打ち上げられて、それが數町の間、砂濱の代りに木材の濱にしてしまつてゐた。

猶海中に浮いてゐる多くの木材は、鰐の群のやうに時々頭を氣味惡く持ち上げた。

決死隊のボートは、本船の周圍を離れかねるもののやうに、又は最後の別れを告げるためにでもあるやうに、二時間の後に船尾の方に姿を現はした。

暴風雨は依然より少し凪いだやうだつた。が怒濤は少しもその勢ひを收めなかつた。

僅かに殘つた四挺のオールは、懸命の努力と、懸命の注意とで、波の坂を下る時だけ一撃を與へた。それは本船の坐礁によつて急に造られた潮流に乘つて、海岸間近く漂つて來た。

再び萬一の希望が、濱と本船と決死隊とに湧いた。然し、ボートのまゝ濱に打ち上がることは絶對に不可能であつた。そこは砂濱の緩い

傾斜の代りに、木材の塞が築かれてあつた。

が、怒濤はそんな事には拘つてゐなかつた。その一つの捲浪にボートを乗せると、水雷のやうな速力で塞に向つて突進して來た。

ボートが破壊されれ一瞬間前に、マドロスたちは跳び込んだ。次の怒濤の來ない中に、血氣のマドロスたちは、木材を越えて砂濱に飛び上つてゐた。

波は未だ木材の間で、口惜しさうに泡を嚙んでゐた。

十人のマドロスたち（その中には波田、小倉、西澤、なども交つてた）は、皆元氣であつた。

潮と、雨と、風とで、濡れ、凍えてゐるのに、村人たちと抱き合ふと、直ぐに本船を振り返つて眺めた。

全く奇蹟だとしか思へなかつた。

だが、未だ本船には三十四名の仲間たちが救ひを待つてゐる。

村の人たちは、おそらく彼等の唯一最善の防寒具である、つぎの當つたどてらを持つて來て、彼等に着せた。

西澤はロシヤ人の着るシューバー見たいた長いのを、小倉は丁度いいのを、波田は上着位に短いのを。他の全部も同様であつた。それはアイヌに似た格好であつた。

本船からは、怒濤の打ち越すブリッヂに、決死的信號手が昇つて、手旗信號を始めた。

──救助タノム──

小倉は、村の人に貰つた布を木の枝に縛りつけて、返信した。

──村人と相談中──

──救助に來るか──

──今、決死隊行く、待て──

血氣の漁夫が再び決死隊を組織した。

そして、前よりもひどく毆り返された。

此間に大分時間が經つた。

本船では再び夜の襲ふ事を焦れた。

──救助船駄目か──

──救助船出られぬ──

その時、海岸線に沿ふて一臺の水上飛行機が暴風の響よりも高い爆音を立てゝ、低空飛行して來た。

然し、此怒濤の上にも、K丸の甲板上にも着水する譯に行かなかつたと見え、四五回旋回飛行を行つて立ち去つた。

本船の寂寥は益した。再び手旗信號があつた。

──ボート卸す。全員乗る。テンプクカクゴ、救助タノム──

第二の大型カッターが降り始めた。午後の三時頃であつた。

一度間に詰合で命を助かつた、第一次の沈沒隊も、見てゐるのは辛かつた。それは全く無謀であつた。

カツターは顛覆された。

オールを取られた

夕闇が暮つた空と、白い泡を噛む海上との間を隙間も無く埋める頃、第二のカツターは木材の寨に打つ突つた

奇蹟であらう。全乘組員が這ひ上り、或は引つ張り上げられた。

一人の事務員は上陸すると同時に氣絶しかけたが、ゲンコツを食つて、ウヰスキーを飲まされて元氣が出た。

わがK丸乘組員はかうして、奇蹟的な幸運に惠まれた。兎に角、此時は命拾ひをしたのだ。

だが、此時にわがK丸を救助に來るとて返信を發した、寶林丸、獸仁丸の二隻は、この同じサイクロン、同じ犬吠岬で、永遠に港にも、海上にも姿を現さなかつた。

乘組船員も！

酒巻も！

その後、此奇蹟的に命を助かつたK丸のマドロスたちは、もう船に乘らなかつたならなあ！

又乘つたのだ。

『もつと船足の輕い、もつと大きい、もつと新らしい、良い船に乘らう。』

と彼等は決心しながら、機會を待ち切れない爲に、又は陸で餓死し度くない爲に。

沈沒した二杯の汽船の船員、その家族の其後は？

未だ私は凡てを知る事が出來ぬ。知り得ないであらう。

寶林丸船長の未亡人は、犬吠岬燈臺の岩礁の上で供養した後、

『此海が私の夫を殺したのだ。此附近に一分でも止りたくない。』

と云つて即日歸京した。

獸仁丸と永遠に運命を共にした一水夫の老父は、輕野村に來て、わがK丸の殘骸を眺めて、

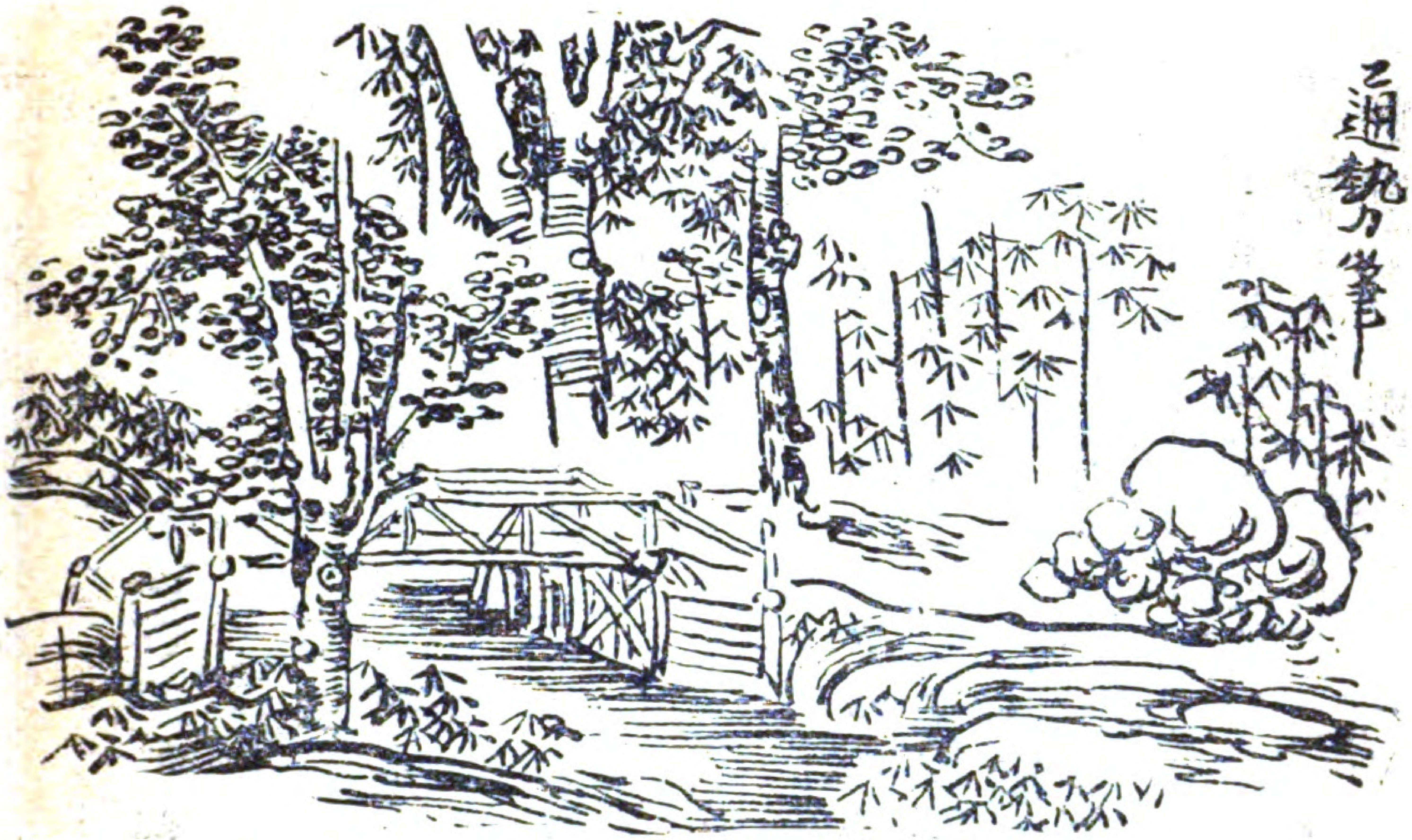
『此海だな。』

と言つた。

『あれの新嫁にも一度見せてやらう。』

と言つて、一日砂濱に涙を滲ませながら坐り込んでゐた。

が、海と暴風雨丈けが惡いのだらうか？——一九二八、一一、一三——



鳥取

志賀直哉

一

前夜大阪を立つ時には彼は三朝温泉へ行くつもりだつた。郵便物は其所の××旅館へ、送るやう、家にも云ひ置いて來た。然し、翌朝、濱村あたりで眼を覺まし、顏を洗つて、一人薄ら寒い喫煙室で、窓外の景色を眺めてゐると、やがて汽車は松崎驛に近づき、朝霧のかかつた黄色い田の面の彼方にうつすり銀灰色に廣かつた東郷湖が見え出した。彼は急に氣が變り、兎に角此所で降りようといふ氣になつた。近い三朝は午后からでもいゝと思つた。次の上ゲ井が乘換驛で既に仕度は出來てゐたから、重い鞄はボーイに頼み、自分は急いで二重まわしを羽織り、傘と手提を取つて歩廊へ降り立つた。

早朝の事で驛前には自動車も人力車もなかつた。彼は鞄を一時預けにし、輕い手提だけ持つて、五六丁の路をぶら〳〵宿の方へ歩いた。

よく熟れた稻の穂が濡れてたれ下がつてゐた。彼は田甫路を橋まで行き、其所から右へ櫻並木の小さい堤へ折れた。小川からは白い靄が立ち、その中を鶺鴒が低く飛んでゐた。

彼は十五六年前二三度此温泉に來た事があり、その后も汽車からはよく眺めたが、今來て昔ながらの淋しい吹きさらしの大きな宿を見出した。更にその昔、小泉八雲が家族と來て、中の藝者騒ぎに「地獄です、此所は地獄です」と其儘玄關から引返へしたと云ふ話を傳記で讀んだ事があるが、十數年前既に其面影がなかつたばかりでなく、今は又その時よりも脂氣が脱け、恰も枯れ木を見る感じで彼には好意が持てた。

十六七の田舍娘が彼を二階に案内した。隣りのない靜な八疊間で、出窓の前は小川、その對岸はよく廣がつた赤楊の大木と丈の高い白楊の生えた原になつてゐる。左手は東郷湖、右手は收穫前の廣々した田の面の向ふに松崎町の屋根が小さく見えてゐた。そしてそれら全體を取巻いて低い山々が眺められ、如何にも穩やかな景色だつた。

「いつそ、此所へ落ちついてもいゝな」彼はさう思つた。元々彼の三朝行きには二つの目的があつた。一つは持病の坐骨神經痛の養生、もう一つは書きものゝ仕事。然し三朝は前に行つた經驗から此二つの目的が兩立しにくい事が分つてゐた。ラヂウムの含有量で世界一といつていゝ三朝は彼の病氣には此上ない溫泉だつたが、宿屋に藝者が入いる爲めに毎夜十二時頃までは仕事にかゝれぬといふ不便があつた。夜書く癖の彼にはこれが難物だつた。

「此所はどうだね？」彼は女中にそれを訊いた。

「入るには入りますが、そんな騒がしい事はないと思ひます」

「此土地には何人ゐるのかネ」

「松崎に三人ゐるだけです」

「そいつが毎日來るかしら」

「いゝえ。第一お泊りがさうはありませんから……」

「成程。それに家も廣いからね」彼は、いよ〳〵此所へ落ちつく氣になつた。そして早く仕事を濟まし、三朝へ移つてもいゝと考へた。此所の湯は氣持はよかつたが、彼の持病には利きさうもなかつた。只此靜さは仕事に申分ないと思はれるのだ。

彼は驛から荷を取寄せて貰ふ事にした。

が、扨て落ちついて見ると、落ちついたやうな落ちつかない氣持だつた。こんな所に一週間、——仕事が延びれば十日間、——居られるだらうか、そんな氣がした。圖體こそ大きいが、此宿は湖へ突出た一軒家で、今のところ客といつては彼一人だつたし、先刻着いてから出て來たのは此小女だけで、此調子で夜になると、自分自身が空家の鼠になりはしまいかと云ふ氣がして來た。

彼は荷が屆いても、机に原稿紙を展げて見るやうな氣にならなかつた。湯から出て來ると、出窓の手摺に手拭をかけ、其儘窓に腰かけ、

ぼんやりと穩かな景色を眺めてゐた。

賑やかな細君、よく騷ぐ四人の子供、犬が三疋、小鳥が七羽、其所から逃れて來た彼だが、これは又餘りに靜か過ぎた。慣れるまでの辛抱だとしても其間が思ひやられた。

先刻から、底の淺い舟に砂を一杯に積んで湖の方へ運んでゐる男があつた。自身川へ入り竹籠に鐵の刄のついた鍬で淺い川底の砂を舟へ積込む。舟が沈みさうになるまで積込むと鍬は川の中へ捨て舟の艫に輕く飛び乘つて出雲節を唄ひながら靜かに棹をさして行く。暫くすると、又空舟で還つて來て、同じ事をしては又湖の方へ出て行つた。

何所からともなく川蟬が、水面とすれ／＼に忙しい羽根使ひで飛んで來る。そして岸の棒杭へとまると、ぢつと川面を見てゐる。時々いきなりぴちやんとたゝきつけるやうに水面へ飛び降りるが、毎時それで獲物があるとは限らない。間もなく、舟が還つて來る。川蟬は又水とすれ／＼に三十間程先の棒杭まで飛んで行く。

砂舟は女中の話だと、湖水に接した田に小さい堤を築いてゐるのだといふ事だつた。

午後彼はアンドレ・ジイドの飜譯本を讀んだ。何か陰氣臭い感じで讀み續けられなかつた。

湯に入る。まづい茶を飲む。對岸の原へ出て見る。砂濱にしやがんでダボ沙魚の子供を觀察する。然し退屈だ。四方の山々は美しく、空はよく晴れ、風がなく、實に穩やかなものだ、が、それが又彼には箸にも棒にもかゝらない退屈さだつた。幾日間かこれを忍ばねばならぬといふ豫想で、彼は參るのだつた。

日沒が近づくと渡鳥の群が頻りに飛び廻はつた。默りこくつて力一杯飛んでゐる何百といふ小鳥の群が頭の上を通る時には、さあ——ッといふ强い羽音が降つて來た。一夜の塒を探してゐるらしく、原の白楊を目がけて來ては彼の立姿に驚き、田を越え見えなくなるまで飛んで行くが、又しても强い羽音と共に還つて來る。彼は部屋の中から見る事にした。そして彼はそれから一時間程の間は渡鳥が皆塒に落ちつくまで叮嚀に見てゐた。四百羽程ゐて、眞直ぐに立つ白楊の枝の先が總て鳥の重みで垂れ下がつても、まだ止りきれなかつた。飛ぶ時默りこくつてゐた小鳥が塒につかうとする時の騷ぎはまた驚く程八釜しかつた。

其夜彼は早く床に入つた。翌日からかゝるべき書きものが彼の全心全身を打込む程の材料でなく、書かない內から出來榮えが見えすいてゐるやうな氣がし、更に感興が起らないのを心細く感じた。

翌日もいゝ日だつた。時雨がちな山陰の秋には珍らしい晴れた日だ

が、それでも今日は幾らか風があつた。渡鳥の群はもう其邊には見えず、前夜黄になつた銀杏の樹は僅かな風にカラ／＼葉を鳴らしてゐた。その午前、彼は兎に角原稿紙に向かつてみた。そして無感興のまゝ無理に少し書いてみた。永い怠惰な生活から、何かを生み出さうといふのは無理だが仕方がなかつた。こんなものでも二つ三つ書いてゐるうちには道が開けるだらう。それから今は氣持に少しも潤ひがない。然し潤ひがないから、書けないとは限らない。露骨に味も素氣もなく書いてやらう。

彼は味も素氣もなく書き出した。味といひ素氣といひ、何も大したものではない。尤も素氣とは何の事か分らないが。

午后も彼は其まゝ机の前に坐つてゐた。が、書き出しばかり何枚も書いて、一枚もものにならなかつた。素氣なく書いてもものになるのは中に余程の感興がなければ不可能な事だつた。要するに彼の心の狀態は書くには不適當であり、彼自身もそれを知つてゐるのだが、然しこんな事をしてゐる内に不知それが變化して來ないとは限らぬと彼は考へてゐるのだ。

朝から坐つてゐて、踝の所が痛くなつた。彼は自分で下駄を出し、昨日來た道を逆に町の方へ出掛けて見た。彼の住ひが奈良であるせいもあるが、此邊の山を特別に面白いとも感じなかつた。それより稲の熟れた匂ひが何か昔の事を憶ひ出させた。シグナルに[illegible]が下がつてゐる。もう直きに下り列車が來るのだ。間に會つたら鳥取まで行つて見よう。

彼はさう思ひ、歩度を早めた。

二

鳥取までは一時間の路だつた。彼は何所へ行く的もなかつたから、驛前で俥に乘り、車夫の勝手に市中を廻はつて貰ふ事にした。「智頭きやあどう」「鹿野きやあどう。」街道を車夫はさういつた。市内一番繁昌の通りが街道は面白いと思つた。古道具屋の店前では彼は車夫に梶棒を持つたまゝ立止まつて貰つた。縣の物産陳列場は丁度閉つたところで入れなかつたが、その邊は昔の大手前であらう廣い閑寂な通りで古い建物があつた。

車夫は蓮のある濠について、彼を公園に連れて行つた。猿の檻、孔雀の檻、水禽の檻などを車夫は膝掛けを抱へ案内して廻はつた。運動場では中學生が野球の練習をしてゐた。彼はそれも暫く立つて見た。

樗谿神社はもうおそいので止め、町はづれの玄忠寺といふ寺に荒木又右衛門の墓を見に行く。門前の小さな溝に眞菰や慈姑などの生えた古風な屋敷町を通つて行つた。

又右衛門の墓は寺の門を入ると直ぐ左手にあつた。法名を彫つた自然石に金網をかけたのがそれである。寺の建物は新しく風情がなかつた。

それから、車夫は私設植物園に彼を連れて行つた。苗木屋程度の植物園であるが、雞頭が美しかつた。彼は先年此所から多鯰ケ池とか沙漠の大擂鉢とかを見物に行つた事があるが、それらは何か不思議な感じのする景色で面白かつた。所で今日の植物園でも又右衛門でも公園の猿の檻でもさういふ意味ではさつぱり面白くなかつたが、氣を揉みながら案内して呉れる車夫には好意を持つた。同じ路を通るまいと五六丁の砂利路へ入り、喘ぎ〱曳く時には氣の毒になつた。此所では何んといふ料理屋がいゝんだ」先刻さう訊いたので、車夫は砂利路を眞直ぐにわざ〱その名代の鰻屋の前を通つて呉れたのだ。

停車場へ還つて來たのはもう日暮れだつた。

六時半の下りまで二十分程あつた。彼は驛前のカフエーへ入り、紅茶を飲んだ。奥の一段高い部屋には七八人の學生がゐた。

「オイもう十五分だぜ」そんな聲がした。彼は學生達も同じ汽車に乘るのだなと思つた。ミツシヨンの女學生のやうな感じのする若い女が、素足に汚れたフエルトの草履を穿き、大股で忙しさうに菓子や茶を運んでゐた。

驛ではもう改札が始まつてゐた。柵を潜ると列車が、着いた。乘客が少なく彼は前の腰掛けまで占領し、足を延ばす事が出來た。

間もなく五六人の人が乘込んで來た。それは背後からで彼には顏は見えなかつたが、中の學にかゝつた奥州訛りが何か聞き覺えがあるやうな氣がして彼は一寸身を起こしてその方を振返つた。それは學生時代二三度演說を聞いた事のある、そしてその後も新聞雜誌で時々寫眞を見る、I老博士だつた。

見送人が柳の手提鞄や梨の籠を網棚へ上げてゐる間に老博士は自分で窓硝子を開け、歩廊の見送人達に顏を出し微笑を以つて見渡してゐた。それから手近かな人に話しかけ、又話しかけられると、ゆつくりした調子でそれに受答へをしてゐた。その口調に何所か牧師らしい所があるのは、今は知らないが昔は熱心な基督信徒で說教などをしてゐた、其名殘りであらうと彼は考へた。カツフエーにゐた學生達は此老博士を送りに來た連中だつた

彼が此客車に乘らうとした時、茶の藥鑵を提げ、擦違ひに降りて行つた白髮の老外人があつた。赤いつるりとした口髭のない顏からアメリカ人らしく思はれたが、それが今壜に茶を一杯に入れて還つて來るとI博士と顏を見合はせ、如何にも思ひがけないといふ風で二人は立話を始めた。老博士の英語は流暢なものだつた。二人は見送人をよそ

にして話してゐたが、間もなく發車のベルが鳴ると、博士は外人との話を打切り、窓から半身乗出すやうにして見送人を見廻はし微笑を送りながら輕く頭を動かしてゐた。さういふ如何にも餘裕ある、又、如何にも名士らしい姿態の内に彼は何か不自然なものを感じたが、後に彼はそれは老博士が甚く疲勞してゐた爲めだつたかも知れぬと考へた。

此時、一人の學生がつかつかと出て來て、老博士の前に直立不動の姿勢をとり、切り口上でいつた。

「今日は先生の有益なる御講話を承り、吾々一同感謝に堪えぬ次第で厶います。これから校歌を以つて先生の御出發を御送りしたいと思ひます」

汽車は動き始めた。今の學生は歩廊に並んだ學生達に「これから校歌を……」と云ひ、自身音頭をとり、一同はそれに和し、勢ひよく唄ひ出した。

汽車は歩廊を離れ、暗い夜の中に段々速力を早めて行つた、老博士は胡麻鹽の頭を窓から少し出し、いつまでもその方を見てゐた。遠くの方で校歌はまだ續いてゐる。汽車が一町も先に行つて未だそれが濟まなかつたら、どうするつもりだらうと彼は少し心配になつた。然しそれが殆ど聞えなくなつた所で漸く老博士は首を引き、窓硝子を閉めようとすると、いよいよ校歌も濟んだと見え、二度程「——萬歳——萬歳——」さういふ大勢の聲がかすかに聞えて來た。老博士は旣に閉された頭を窓硝子の前で二三度下げてゐた。それが硝子に映り、其處でも老博士は頭を下げてゐた。

五六丁先の見えない人々に一人で答禮してゐる、老博士の樣子は悪い感じはしなかつた。

老外人は黒い革鞄から新聞紙に包んだ手製の餘りうまさうでないサンドウヰッチを出し、食つてゐた。そして老博士が腰掛けるのを待つて直ぐ話しかけた。博士は如何にも疲れた風で、應じてゐた。老博士は棚鞄から鳥打帽を取出し叮嚀に被つた。松江泊りで、着くのは十時過ぎるといふと、老外人は不意に日本語で「それはお氣の毒さま」といつて笑つた。

兎に角、老外人は甚く機嫌がよかつた。然し老博士は疲勞から話してゐるのもつらさうだつた。

「貴方は何所までゞ？」と博士が訊いた。

「三朝」

「みあさ。みあさ」老博士は繰返しみささをさう訂正した。所が外人は笑ひながら、

「ザット・プロナンセス・ミササ・イン・ジヤパニーズ」と云ひ、この發

嬌に自分でも滿足したらしくにや〱笑つてゐた。老博士は他の博士號と共に文學の博士號も持つてゐた。その文學博士が「日本語では」と外人に直されたのは如何にも愛嬌があり、面白かつたが、疲勞し切つてゐる老博士にはその愛嬌も愛嬌にならぬ風だつた。外人は神戸あたりの商人か、或は耶蘇教の方の人か分らなかつたが、兎に角博士を日本の名士として尊敬してゐた。

老外人はパンを食ひ終ると、床に置いた茶の罎を取り上げ三四杯續け樣に飲み、それから、又それを足元に置いて、今度は餘つたパンを丁寧に新聞紙に包み、更にモスリンの風呂敷で卷き、その兩端を一つ結び、もう一つ駒結びに結ばうとし、暫く考へてゐたが、恐る〱結んで見ると、それが逆で結目は十文字になつて了つた。老外人は僅に微笑を浮べ、「しまつた!」といふやうな表情を一寸したが、それはそのまゝ鞄へ仕舞込み、直ぐ洗面場へ手を洗ひに立つて行つた。

老外人は濡手でハンケチを探しながら還つて來た。そして腰掛けの端に一寸腰をかけ外套、上着、内隱し、胸の隱し、――濡れた指先で氣味惡るさうにそれを探してゐたが、見つからなかつた。紙包をのせた頭の上の網棚を見上げ、考へもしたが、ない。忘れて來たか、落したかに違ひない。とう〱諦めて外套の内隱しから五六枚たゝんだ少しばかりの懐紙を取出し、その一枚で、もう大概乾いた兩の手を拭くと、小さな玉に丸め、痰壺の中へ落とした。

そして老外人は初めて腰かけに深くかけ、扨て老博士の方を向き、これから又ゆつくりと話でもしたい風だつたが、老博士は腰かけの倚りかゝりに仰向き加減に鳥打帽の頭をつけ、眼をつぶつたまゝ凝つとしてゐた。

博士は二十分程さうしてゐたが、自分を送つて來てゐる人々を立つて置いては惡いと思ふらしく、車内が少し寒くなつたので立つて外套を着ると、そのまゝ皆の集まつてゐる所へ出掛け、仲間に入つた。やがて、汽車は松崎驛に着いた。此所はブリッヂがなかつたから、彼は少し行つて、歩廊から線路へ下りる鐵板の伏せた所で汽車の出るのを待つてゐた。間もなく汽車は動き出し、彼の眼の前を窓の中の老外人が過ぎ、次に二三人の見送人を對手に話込んでゐる老博士の姿が過ぎて行つた。



夢魔

岡田禎子

1

暗い部屋の中である。

左手と正面手前に土間が在つて、他は一面揚床の板間である。土間の右端には開き戸が有つて隣室に續いてゐるが、戸は固く釘着けにされてゐる。

板間の中央に新しい厚い樫の角材で組んだ、方三間の格子の檻が、天井裏に迄突立つてゐる。檻には頑丈な錠が下り、物の出し入れに使ふ小窓が、正面下方に一寸附いてゐる。

檻の傍に焚いてない石油ストーブ有り、右手、奥の天井から電燈が下つてゐる。窓は正面に二ヶ所、併し、天井に近く、且つ小さいのが有る許り、なにさま暗い部屋である。

部屋の出入口は左手。

檻の中は疊敷に成つてゐて、贅澤な夜具に、狂つた男が眠つてゐる。そこへ弟と未亡人が入つて來る。弟は卅歲、未亡人は廿八歲である。

弟。暗い部屋だ（呟く。檻に向つて呼ぶ）兄さん！

（間――答へなし。雷の様な鼾聲）

弟。眠つてゐます。

未亡人。隨分大きな鼾をなさいますのね。

弟。大きいです。兄の物は何でも大きいです（彼は洗練された喉で、表情の豊かな話しぶりをする。ヂェスチヤアは無い。言葉の表情である）

未亡人。よくお休みになれますの？

弟。よく休む様です。

未亡人。夜も？

弟。夜も晝も。——造作の無い病人です。極く温順しいのです。——そう、貴女は別に何かお仕事を、一寸した手仕事の様な物でも用意なすつた方がいゝかも知れませんね。退屈なさるに違ひない。

未亡人。まあ。

弟。全く、人一人附いてゐなければならない程の仕事は、此處には何も無いのです。それに私達は大勢家族です。手に不自由は無いのですから。

未亡人。ぢや私は、何を致しますのでございませう。

弟。此處に附いてゐて頂くのです。（右手を指して）其處が貴女のお部屋です。境界の戸は開きません。今度釘着けにしたのです。——或はそんな必要は無かつたのかも知れません。あすこが開いてゐるのは實際便利ですからね。只、私達は貴女の神經を尊重したのです。——昨夜迄は私が其處へ泊りました。今日から貴女に居て頂かうと云ふのです。決して拔けないで、しよつちう。——そこで、何をして頂くかは、それは、兄がお願ひします。

未亡人。兄様がですつて？

弟。兄がです。例へば兄は大聲に怒鳴りますよ「水！ 水！」つて。

未亡人。水ですつて？

弟。喉が渇くのです。すると貴女は——あゝ（檻の中を指して）其處に在ります。あれは丼鉢なんですが、兄の湯呑みでも有るのです。御覧の通り、兄の物は何でも大きいのです。

未亡人。（檻の中を覗き見て）するとあれは何に成りますの？ 金盥ですわ、水が入つて居ります。

弟。灰皿です。

未亡人。灰皿ですつて？

弟。勿論、煙草は火を點けてから渡してやつて下さい。この中へ、マツチを入れるのは危険ですからね。

未亡人。（憂はしく）でも、何を差上げれば宜しうございませう（目を伏せて云ひ譯する様に）良人は、それは煙草がやかましうございました。

弟。はあ、それは。——いや、併し、さうした御心配は貴女にして頂く憂慮では有りません。兄は敷島なんですが、それは此方から貴女

のお部屋迄お屆けしますよ。食事も飲食も兄に必要な物は一切私達が心得て居ります。皆お屆けしますよ。貴女はそれを、唯取次いで下されば宜しいのです。

未亡人。でも、それ位の事なら何故…………あの、澤山手は有ると仰有いましたが？

弟。（土間をゆつくり往き來し乍ら）私達は誰も此處へ來たくないのです。

未亡人。まあ。

弟。それに、兄は誰か家族の者の顏を見ると——（檻の鍵前を指して）その戸を開けに來て吳れたのだと思ふのです。

未亡人。そう。

弟。で、私達は此處に入らない方針を立てたのです。

未亡人。判りましたわ。

弟。併し、勿論一週に一度は、私も兄に會はねばなりません。理髪をさせて、湯に入れるのです。その時には店の男が二人と巡査が手傳ひに來ます。巡査がゐると、兄は非常に溫順しいのです。併し、それでも父や母は、顏を合せない事にしてゐます。——女達は其間に、この部屋を大掃除して、布團も取替へるのです。兄は潔癖で、なか〳〵のおしやれだつたんです。

未亡人。（檻の中を見て）大層ですわ。隨分綺麗でゐらつしやいますのね。

弟。——で私達は、貴女が間違ひなく此處に、そつちの貴女の部屋に居て下さる事を、只それ丈をお願ひするのです。

未亡人。判りましたわ、お附き致して居りますわ。でも…………

弟。何でせう？

未亡人。御病人は——あの、そつちの、私の寢くお部屋の向ふは、何處に成るのでございますの？

弟。あゝ、臺所です。そう、此處は少し寂し過ぎますね。病人を怖れてゐらつしやるのでせう。併し、この通り格子は頑丈に出來て居ります。又暴れる樣な病人では有りません。それは、健全な男よりもずつと安全でせう。只…………

未亡人。何かございますの？

弟。（微笑して）あすこに笛が有るでせう。

未亡人。笛ですつて？

弟。明笛です。退屈をすると、あれで兄は時々樂しみをやるのです。恐らく唯一の樂しみでせう。

未亡人。笛をお吹きになりますの？

弟。若し貴女が音曲をお嫌ひでなかつたら…………。

未亡人。嫌ひですつて？　良人は、大八では免許を取つて居りましたの。私も琴ならやりますわ、ほんの眞似事ですけれど。

弟。結構です。おやそれも大した嫌ひでは無いでせう。兄も、そうそう自分の藝を、安ざらしにする方では有りませんから。

未亡人。立派な笛ですのね。お上手なんでせうね。

弟。上手です。只時間を考へて吳れないのです。夜中、お休み中を、お騒がせするかも知れません。

未亡人。覺悟致して居りますわ。

弟。何うぞ。

未亡人。でも、隨分暗いお部屋ですわね。

弟。え丶暗いです。なんせ元は蠶室だつたんですから。

未亡人。蠶をなさいますの？

弟。昔です。僕もこの部屋の使はれるのを見たのは今度が始めてなんです。長い間、使ひ道もなく閉め切つたま丶でゐました。尤も子供の嚇しにはよく使はれました。何か惡戯をすると、何時も云はれたものですよ。「蠶室へ入れますよ」つて。

未亡人。まあー

弟。（柔和に微笑んで）僕は三度放り込まれました。兄は——兄は今度が始めてです。

未亡人。（慄えて）何故ですつて？

弟。兄は隨分溫順しい方でした。中學生で、仲間に呼び棄てにされない樣な人間は恐らく一人も有りませんでしたが、兄丈は上からも下からも、きちんと「杜田さん」と呼ばれてゐましたよ。きちんと「杜田さん」とね。

未亡人。まあ。

弟。それには、兄は若いダンセニーの樣にい丶男でした。又秀才でも有つたのです。僕が入學する時なぞは——僕は三年後から入つたのですが、「杜田さん」の弟が來ると云つて、教員室の期待にさへ成つてゐたんだそうです。

未亡人。まあ、だのに何うして、何うしてこんなにお成りに成りましたの？　何時からですの？

弟。十年以上も前です。中學卒業後間も無くです。何うした事か——え丶、私達初め誰しも、何うした事かと思ふのですが、兄は高等學校の入學試驗に失策つたのです。

未亡人。まあ、それで………？

弟。そのデリケートな消息は誰にも判りません。但し、兎に角それは怖ろしい打擊だつた樣です。それからと云ふものは、全く氣の挫けた、ぐづ〳〵した人間に成りました。毎日笛許り吹いて………そ

して私共は、眼が悪い為めに再び受験しやうとはしなかつたのです。

未亡人。まあ、そしてずつと其儘なんですの？

弟。ずつと其儘でした。尤も、適齢になればちやんと兵隊にも出るし………

未亡人。そして、御無事にお勤めに成りましたの？

弟。無事に、然かも三年です。兄は志願兵に成る事を何うしても肯じなかつたのです。

未亡人。何う云ふお心算でせう。

弟。判りません。

未亡人。それからも、学校へ行かうとは仰有いませんの？

弟。えゝ、何をしやうとも云はないのです。相変らず笛は吹きましたゞそれからよく方々を出歩く様に成りました。時には、座敷の襖や欄間へ字を書いたりしました。

未亡人。まあ、書をなさいますの？

弟。見事な筆跡ですよ。書く場所さへ間違へなければ。

未亡人。書家に成り度いとお思ひに成つたんぢやないでせうか。

弟。さうでも無い様です。盛んに盆栽を作つて見たりもするのです。座敷の壁をすつかり塗り返へして、新しい壁を作つたり………。

未亡人。まあそんな事迄、そして何時も、その時々に変りますの？

弟。遣り遂げましたよ。――只、道を歩いてゐて眼に留まる樹木があると、何処の何んな貴重な樹木であらうとも、平気で根を抜いて来て、自分の盆栽にするのです。いゝ、うちの庭は、二百年も昔、藩の茶師が作つたとか云ふ、まあ数奇者間の誉と云はれた名園でしたが、古い樹は兄の手に掛つて大分枯れました。燈籠の苔も綺麗に洗ひ浄められましたし、踏石の配置も泉水の水色も変つて了ひました。

未亡人。まあ、随分乱暴をなさいますのねえ。

弟。所が、妙にそれが乱暴と云ふ感じを抱かせないのです。兄は、静かに静かに思ひを凝らしてやるのです。誰もそれを、留めねばならないと思はないのです。

未亡人。まあ！

弟。仕度い放題を、した訳です。

未亡人。でもそれで、それで此処へお入れになりましたの？

弟。いや、兄が此処に入つたのはつひ一ケ月前です、それ迄は、ずつと母屋で、私達と一緒に暮してゐました。

未亡人。そして、その間もずつとそんな風でゐらつしやいましたの？ちつとも変つた事はなくて？

弟。左様、十年来そんな風でした。

未亡人。それで、お宅の皆様で、何うしてお上げに成る事も出來ませんでしたの？

弟。左樣。

未亡人。でも、でも、それぢやまるで、本當に御病氣なのか何うか判らないぢやありませんか？

弟。判りませんでした。殊に兩親には判りませんでした。

未亡人。だのにまあ、何うしてこんな非道い扱ひをなさいますの？

弟。（微笑して）兄は惡戯をしたんです。

未亡人。まあ！

弟。父を打つたんです。

未亡人。お父樣をですつて？

弟。父は店で、行商人と交渉してゐたのです。商人は障子紙を賣りに來たのですが、うちぢやもう、買つた後だつたのです。でも商人は無理に賣り附け樣としたんですね。父は全く困り切つた顏をしたんでせう。見てゐた兄が、突然其處に有つた擔ひ棒で、商人の頭を撲つたんです。

未亡人。まあ！

弟。父は驚いて留めに入つたんですが——店にゐた小僧達や、往來からも大勢留めに入つたんですが、皆片端から撲られたんです。

未亡人。さう。

弟。——家に、不用な部屋など置くものぢや有りませんね。私は子供の頃からこの部屋が大嫌ひでした。

未亡人。そして、御自分では何にもお氣が附かないのでせうか。そんな亂暴をなすつた後でも。

弟。判らないのですね。この間退院して來た父が初めて此處を見舞つた時、その頭の繃帶を見て兄は云ひました「お父樣頭を何うなさいました？」

未亡人。まあ！（涙ぐむ）

弟。「怪我をしてね」と父が云ふと、私に向いて兄は云ふのです「お前、よく氣を附けて上げなきや不可ないぢやないか」

未亡人。（手巾で眼を押へ乍ら）何んな御心持なんでせうねえ。

弟。——兎に角これが兄です。附いてゐて頂けますか？

未亡人。えゝ、出來る丈の事は致しますわ。

弟。ぢや何うぞ。——お部屋へ御案内しませう。

（二人去る）

2

同じ部屋の夜である。

電燈點る。併し、室内に霧の樣に薄暗い。闇の中に狂つた男寢てゐる。兩手の指を組んで頭の下に敷き、兩足を樣々な形に伸縮して、一人愉しんでゐる──突然腹這ひに寢返つて、軒も震ふ程の大音聲に呶鳴る。

狂つた男。煙草！　煙草！　煙草！

未亡人。(隣室から聲を先づ聞かす)はい、唯今、唯今……(左手から出て來る。マッチを擦つて煙草に火を入れ、格子から差出す)はい、お煙草ですわ。

狂つた男。ありがと(腕を伸して煙草を取り腹這つた儘ふかす)

未亡人お。寒くありません？

狂つた男。いや。──でも大分寒くなつたね。

未亡人。寒くなつたんですつて！

狂つた男。雪にでも成るのかねえ。

未亡人。もう雪の心配は有りませんわ。四月に入りましたのよ。

狂つた男。四月か。ぢや花の盛りだねえ。

未亡人。えゝ、雨でも有つたら、今度の日曜迄は持つまいつて、新聞で心配してゐますわ。

狂つた男。花は城山に限るよ。

未亡人。まあ、城山の花を覺えてゐらつしやいますの？(彼女は病人に眼を閉ぢ眉をあげ、椅の肘の端に腰を下ろす)行つて見度いとお思ひになりません？

狂つた男。あゝ、この頭腦が燃えてれ。

未亡人。何處かお惡いのぢやないでせうか。お苦しい所は有りませんの？

狂つた男。別に。──ぢつとしてゐりやいゝ樣だ。

未亡人。煙草は美味しうございます？

狂つた男。あゝ美味しいね。

未亡人。何か欲しいものはお有りにならない？

狂つた男。いや、ありがと。

未亡人。お寒く成つたのならストーブを焚きませうね(傍の石油ストーブに火を入れる)──貴方、私を誰だかお判りになつて？

狂つた男。判るとも、覺えてゐるよ。

未亡人。覺えてゐらつしやるんですつて？

狂つた男。あゝ、君さんだろ？

未亡人。(驚いて跳び上る)君さんですつて？

狂つた男。何時來たの？

未亡人。今日ですわ、さつきお夕飯を差上げたのも私ですわ。お氣附きになりませんでした。

狂つた男。そうか、そりや御苦勞だつたね。
未亡人。(一寸躊躇つた末、又腰をドろす。顔を格子に押しつけて) ねえ、私誰だかお判りに成りません？ 君子さんでは有りませんわ。
狂つた男。(格子を隔てゝ顔をすり寄せて來て) あゝ、僕、間違つちやつた(煙草を棄てゝ起き上る。腕を組む。——彼は卅三歲、頭髪を短く刈り込み、顎は青々と剃り上げてゐる。膩い額、秀でた鼻、殊に肉氣に瞬く長い睫の蔭から、小心に、柔和に微笑みかける潤い眼差しは限りなくチャーミングである。彼は冷やかに、靜かに、何んな言葉も同じ調子で話す)
未亡人。(吸はれる様に檻の内の男に見入り乍ら) 私、貴方のお世話をする爲に、今日お宅へ雇れて參つたんですわ。初めてお眼にかゝりますのよ。私京子と申します。
狂つた男。そうですか。
未亡人。でも貴方は、君子さん、とかに來てお貰ひに成り度かつたんでせう。
狂つた男。(いぢらしくてれて) そんな事は有りません。
未亡人。まあ！——ねえ、君子さんて誰人ですの？
狂つた男。僕の妻です。
未亡人。旦那様？——何うしてまあ左様なんですの？ 貴方、一體何様なすつたの？
狂つた男。ええ、幾度もしました
未亡人。幾度もですつて？ 誰人と？
狂つた男。君子とですよ。外の人なもんですか。
未亡人。だつて、何うしてそんなに幾度もなすつたの？
狂つた男。(懸りついに) 何うも、巧く往かなかつたんです。
未亡人。巧く往かないんですつて？
狂つた男。巧く往かないんです(考へ込んで) 君子は何時でも外の男のものに成つて了うのです。僕と結婚はするのですが……。
未亡人。まあ！(格子につかまつて) ねえ、私、弟様から貴方の事を可成り詳しく伺ひましたの。お母様にもお話し致しましたわ。でも、女の方のお名前はつひぞ出ませんでしたわ。——ねえ、その方なんでせう、貴方の——あら御免遊ばせ。でも、貴方その方を愛してゐらつしつたんでせう？
狂つた男。ええ、僕それを幾度もいひましたよ。君子も云ひましたよ。——彼奴は悪い奴ですよ。
未亡人。何うしてですの？ 貴方達は愛し合つてゐらつしつたんでせう？ そして、お宅の皆様それを御存じたんですの？
狂つた男。[illegible]ないでせう、勿論

未亡人。一層そんなにならなかつたんでせう、何故お話しに成りませんでしたの？ こんなに成る程思ひ詰めてゐらつしつたのなら、能く胸の懐も話して下すつたでせうに。

狂つた男。（憂うつに）駄目なんですよ。皆判らない奴許りなんです。

未亡人。だつて、黙つてゐらつしつたのでは判りやうが無いぢや有りませんか。皆様随分良い方達ですわ。

狂つた男。駄目ですよ。僕は勉強中だつたんです。試験を受けなければならないのです。

未亡人。まあ！——それで、黙つて辛抱してゐらつしやいましたのねえ。随分お苦しみに成つたんでせうねえ。（殆んど熱情的な囁きの眸を病人に注ぐ。——病人は憂うつを現はした彫像の様に端然と坐つてゐる。——彼女の眸は次第に瞑想的にかすんで來る。弱く）ねえ、貴方お寂しく有りませんの？

狂つた男。何故です？

未亡人。此處に一人でゐらつしつて、お寂しく有りませんの？

狂つた男。別に。——時々變になりますけれど。

未亡人。まあ！（ぐつと頭を格子に押しつけて）ねえ、貴方本當に御病氣なんですの？

狂つた男。（不思議そうに）僕ちつとも病氣ぢや有りません。

未亡人。えゝ、さうですわねえ（とうつむき加減にする）——でも、寂しい身の上ねえ。

狂つた男。寂しかありませんよ。僕、寂しさには慣れてゐますよ（身を動かして格子の左手に背を凭せ、胡坐を組む。高い窓から差す月の光が丁度彼の胸の上に落ちる。彼は、ふとその月影を認めると塵でも拂ふ様な手附でそれを拂ひ落そうとする。月影は容易に落ちそうもない。不審そうに胸を指して）これ何でせう。

未亡人。月の影ですわ。

狂つた男。何處から來たのでせう？

未亡人。あすこですわ、あの窓から月が入つたんですわ（格子の間に這ひ上つて上方の窓を指す。——彼女はこの病人に限りない好意を覺えたのである。優しく話してやる決心をする）

狂つた男。月が出てゐるのですか？

未亡人。えゝ、外は綺麗な月夜ですの。十三夜位でせうねえ。

狂つた男。すると今夜なんですね。

未亡人。何が今夜なんですの？

狂つた男。隣家の女が赤ん坊を生んだのは。

未亡人。隣家の女がですつて？

狂つた男。澤山血が出たそうですよ。そりや綺麗らしかつたそうです

よ。でも、赤ん坊は元氣なそうです。下の川で洗つたと云ふ事です
がね。

未亡人。誰が洗つたんですの？

狂つた男。女乞食ですよ。

未亡人。女乞食はそんなに澤山居ましたの、――其處の松原なんでせう。私、さつき一寸入口迄行つて見ましたわ。乞食なぞ一向見えませんでしたけれど……隨分いゝ眺めですのね。

狂つた男。いゝ所ですよ。この町に惠まれた唯一の散步場なんです。誰も知りやしませんがね。

未亡人。誰も知らないんですつて？

狂つた男。えゝ、あの松原は、ありや僕が發見したんです。理想的な遊園地なんですがねえ。誰も知らないのです。

未亡人。何うして知らせてお遣りになりませんの？

狂つた男。誰も僕の云ふ事を聽かうとしないんです。

未亡人。でも、乞食のお蔭が有つたりしては一人で散步するのには不氣味ですわねえ。

狂つた男。えゝ、乞食は引越して貰はねばなりませんねえ。――併し、困るんですよ。奴等にもあすこは樂園なんですからねえ。故里なんですからねえ。雨露を凌ぐ軒であり、生活を支へる床なんですからねえ。然かも、奴等はそれを、神から直接に貰つて來たんですからねえ。

未亡人。（本氣で）まあ、何て優しいお考へなんでせう。

狂つた男。僕は論文を書きましたよ。――健康で幸福な市民は、その健康と幸福の爲に、何の程度の權利を持つてゐるものだらう。彼等が、或は一日の勞苦を其處で慰め和らげられる爲に、又遊つては復へる事の無い青春の喜びの爲に、靜かな、眺めの快よい散步場を持たうとする時、何の程度迄の横暴が許されてゐるものだらう。その爲には、不幸な人生の落伍者達の弱々しい腕が、最後の力で縋り着いてゐる一本の藁をさへ奪つて了つていいものだらうか。………

未亡人。（感嘆して）まあ、それを、それを貴方がお書きになつたんですつて？

狂つた男。えゝ、書きましたよ。

未亡人。そして、その論文何うなさいましたの？　貴方のお考へは何う成りましたの？

狂つた男。全ての考へは先づ輿論に問はねばなりません。輿論の法廷をパスしなければ、何んな名論にも權威が有りませんからねえ。

未亡人。（熱して）恰も、狂人相手である事を忘れたかの樣に）そうですわ。本當にそうですわ。そして其、輿論の法廷とやらは、決つ

て、斷れた頭から出た斷れた考へを辿つて了ひますのね。全で先驅者と云はれる樣な人々の、悲しい運命が其處に有るのでせうねえ。――亡くなつた私の良人なぞも、何んなにその運命を堪え忍ばねばならなかつた事でせう。高い孤獨だと、云ひ〱して居りましたわ。

狂つた男。孤獨ですねえ、孤獨ですよ。

未亡人。貴方にはそれがお判りになりますのねえ。若し良人が生きて居りましたなら、屹度良いお友達に成つて頂けたと思ひますわ。――良人も寂しい人でした。屹度寂しさに負けたんですわ。まあ何うでせう。ロンドンの、下宿の窓から飛んだんですつて！

狂つた男。あゝ、よく有る奴ですよ。何故留めなかつたんです。

未亡人。誰も傍にゐなかつたんですわ。書置一ツ有りませんでしたの。ほんの一寸した發作だつたんでせうね。何かゞ何うかしてゐて、その瞬間さへ救はれてゐたら、屹度永久に救はれたかも知れないのですわ。

狂つた男。そう、貴女が其處にゐるとよかつたんだ。

未亡人。えゝ〱、何うして一人で出してやつたかと思ひますわ。あんなに寂しがりやだつたんですもの。一人で置いては變に成るのは當り前ですわ。本當に私達を愛して居りましたんですからねえ。何んなにしてでも、私達は歩いて行かねばならなかつたんですわ。

狂つた男。別れるのは不可ません。それは悲劇ですよ。悲劇の始めで、そうして終りです。

未亡人。本當ですわ。仰有る通りですわ。でも、あの時それを云つてくれる人は誰もなかつたんですの。それに、たつた三年だからと、私達も思つて居りました。

狂つた男。三年では有りませんよ。そんなものでは有りませんよ。

未亡人。そうですわ、それが永久のお別れに成つて了ひました。――判りませんでしたわ。もう一ヶ年近くに成りますのに、今だに間違つて居ります。良人は死んだんだ〱と皆樣で云つて聞かせて下さるのですけれど、でも、私はそれを見ないんですもの。私が見たのは、茶の縞セルの服を着て、ちやんと立つてゐた良人の姿ですわ。小さな箱に入つてゐる骨なんぞ、幾ら何う見直してもあの人では有りませんわ、あの人では有りませんわ！

狂つた男。そうですとも、あの人ぢや有りませんよ。

未亡人。（ふつと吾に歸つて苦笑）御免なさい、私まあ、つまらないお喋りを致しましたわねえ。

狂つた男。いゝえ、大變愉快になりました。

未亡人。（再び悲しんで）まあ、本當に貴方はそれで御病氣なんでせ

うか。

狂つた男。僕、何處も悪くは有りませんよ。唯少し不精者なんです。

未亡人。不精者ですつて？

狂つた男。それには皆が悪いんです。僕には働きさせたいんです。

未亡人。おやこれからは不精でなくお成りになれますわ。私、貴方のなさり度い事は何でも出来る様にして差上げますわ。

狂つた男。ありがと。貴方疲れませんか？

未亡人。いゝえ、何うして？ 貴方お疲れになつたんぢや有りません？

狂つた男。僕は平氣です。

（間――）

未亡人。まあ、私達の乞食のお話しをしてゐたんですわねえ。そして貴方は乞食を何うすればいゝとお考へですの？

狂つた男。乞食ですか、これは僕話しを着けて来ました。

未亡人。話しを着けてですつて？

狂つた男。昨夜一ト晩話し合つたのです。僕の部屋を貸してやるから来ないかと云つて見ました。

未亡人。（がつかりして）まあ、そう。――（悲しく相槌を打つて）そして、何と云ひまして、乞食は？

狂つた男。父も承諾したら、何時僕の部屋へ来ると云ひました。

未亡人。お父様は、何と仰有つて？

狂つた男。あゝ、僕早く父に會ひ度いんですがねえ。貴方電報を打つて一呉れませんか。

未亡人。何處へですの。

狂つた男　大阪へですよ。父は大阪へ行つてるんです。何時もの商用なんですが……（考へて）オトコノコウマル、カヘレ、と打つて下さい。

未亡人。何處に子供が生れたんですの？

狂つた男。大阪で生れましたよ。ありや僕の子供なんです。

未亡人。貴方の？ だつて……（迷はされて）ぢや、その女乞食の子は、貴方の子なんですの？

狂つた男。捨子の子ですよ、女乞食ぢや有りませんよ。

未亡人。（がつかりして、相槌を打つ）そう、そしてその赤ちやん何處にゐらつしやるんですの？

狂つた男。隠してあるんです。（悄気て）秘密なんです。

未亡人。でも私にはいゝでせう。私には何でも仰有いましたわねえ。

狂つた男。（非常に狼狽て）僕は何にも知らないのです。

未亡人。（又々迷はされて）まあ、貴方にも知らないんですつて？ お父さんが何處かへ連れてらつしつたのね。貴方にも隠して。

狂つた男。君子も一緒に連れてつたんです。

未亡人。まあ、誰が？

狂つた男。判らないのです。それが判るといゝんですが。

未亡人。非道い人ですことねえ。

狂つた男。（ふつと頭を上げて、微笑み作ら、濃度深く）貴女、赤ちやんお有りですか？

未亡人。えゝ、えゝ有りましたわ。――もう大きく成りましたけど、この四月から、學校へ行つて居りますのよ（この辺りから彼女の判斷は疲れて行く。相手が狂人である事を全く忘れる。正常な人にする様に、感情を籠めて應對する、相手の何んな異常な言葉にすらも。――若しかすると、彼女は相手が狂人でない事を望んだのかも知れない、よしや彼女自身、それを意識しなかつたにしても。）

狂つた男。學校へ行くんですか？

未亡人。そうですの、もう學校へ行く様に成りましたわ。子供の大きく成るのは、早いものですわねえ。

狂つた男。學校は何處です？

未亡人。町の小學校へ行つてますの。これからは唯上へ／＼と進む許りですわ。――私の力で、何處迄遣つてやれますものか……。

狂つた男。貴女の力でやるんですか？

未亡人。えゝ、私の力許りですわ。父親は何も殘しては呉れませんでしたの。無理もございませんわ。あんなに若くて死ぬ心算ではなかつたでせうものねえ。

狂つた男。そんなに若かつたんですか。

未亡人。卅五で亡くなりましたの。生きて居れば今年六ですわ。五十迄にはあの子も大學を卒業するでせう。そうしたら何も彼も巧く行つたでせう。生きてさへ居りましたら、私達を路頭に迷はせる様な事はまさかございませんでせう。小壯學者として、一部の人達には晴れがましい様な將來を期待されて居りましたんですから。

狂つた男。學者なら大勢居ますよ。

未亡人。えゝ、でも、皆私の良人では有りませんわ。

狂つた男。何うしてです。

未亡人。私には子供が有るのですもの。私がお宅で頂くお給金で、やつと人並に小學校へも通つてゐられる子供が有るのですもの。

狂つた男。そうですね。子供を捨てては不可ませんねえ。

未亡人。まあ何うして！　何うしてそんな事が思ひ附けませう。良人の唯一の記念なんですわ。でも良人はいゝ記念を殘して呉れました。そりやよく良人に似て居りますのよ。少し氣嫌の惡い時に、眉の間にかゝる皺りなど、そつくりパヽかと思ひますわ。眉だつて

つばり一寸猫背なんですの。綺麗な足ですわ。そして拇指の爪もやつばり一寸内向いてゐますの。そつくりですわ。そつくり小猫のパパですわ。私、お嫁さんに如くでせうねえ（これを云ふ間、彼女はうつとりとして、幸福らしくさへ見える）

狂つた男。如くのは不可ませんねえ、姉妹は苦しいですよ。

未亡人。まあ！（笑つて）でも、早くそんなに成り度いものですわねえ。

狂つた男。直ぐですよ。

未亡人。（悄然て）えゝ、本當に、無事に行けば直ぐなんでせうねえ。——つひこの間ですもの。パゝに折紙の鶴を教はつて、上手だと云つて讃めて貰つたのは。

狂つた男。器用なんですね。

未亡人。パゝに似たんですわ。パゝは一寸した手ずさみ迄とても器用的な人でしたわ。紙切が有ると、よく切り紙細工をしたものですわ。貴婦人だの、パンプだの、モガだの、それから長く續いた列車だの、上手に切り拔くんですの。それを又子供が喜びましてねえ。——あゝ、すつかり形見に成りましたわ。

狂つた男。覺えてゐますよ。ほうら、僕喇叭を吹いてやりましたね。

未亡人。まあ！（がつかりして椅子に縋り附く。大粒の涙がポロリと一ツ彼女の眼に湧いて、靜かに頰を流れ落ちる）

狂つた男。ね、その子供は僕の事を云ひませんか？

未亡人。（やるせなく）だつて知らないんですもの。

狂つた男。知らせないんだな、彼奴のやりさうな事だ。

未亡人。（獨りで）本當にねえ、こんなに暇なんでしたら、お願ひしてあの子を引取らせて頂けたら何んなにかいゝでせう。叔父樣の家だと云つても、お錢を送らなきや世話をして貰へない樣な所ですもの。…………

狂つた男。お錢を送るんですか？

未亡人。えゝ、一文でも餘計に取らうとしてゐるんですの。——こんなに成つて見て人の心がやつと解りましたわ。あんな中で、やつと七ツの子供が、何んな思ひで暮してゐるかと思ひますと…………（叫ぶ）

狂つた男。子供は僕に會ひ度がりませんかねえ。

未亡人。一度御目にかゝつたら、お慕ひする樣に成るかも知れませんわ。

狂つた男。（熱心に顏を近づけて來て）何んな子です。僕會ひ度いなあ。

未亡人。まあ！ ちや呼んでも宜しうございます？

狂つた男。いゝですとも。──でも氣を附けないと不可ませんよ、邪魔する奴が出ると困りますから、乾度出ますから。

未亡人。でも貴方が許して下されば、お宅の方へはお願ひしいゝと思ひますわ。

狂つた男。僕はもうとつくに許してゐる。

未亡人。えゝ〳〵、呼びますわ、呼びますわ。乾度御邪魔に成る事は無いと思ひますわ。靜かな子なんですもの。優しい子ですわ。可愛い事を申しますのよ。

狂つた男。可愛いでせうね。僕抱きますよ。

未亡人。えゝ〳〵、でも、隨分重うございますよ。とても丈夫な子なんですもの。

狂つた男。大丈夫ですよ、僕斯う見えても強いんですよ（月光の中へ、兩手を擴げて裏に表に返へして見入る）

未亡人。まあ、きやしやなお手ですこと。それぢや何にも出來やしませんわ。

狂つた男。（心配氣に）子供は僕より強いですか？

未亡人。まあ！（笑つて）そんな事を心配してゐらつしやるの？　大丈夫ですわ、何てたつて、まだ子供ですもの。

狂つた男。（輝かしく）そうですか。僕おんぶしてやりませう。松原へ散步に連れて行きませう。砂糖黍の畑を縫つてやりませう、五色濱へ行つて、貝を拾つてやりませう。盆栽を拵つてやりませう。でも箱庭の方を喜ぶでせうか。

未亡人。そりや、箱庭の方が子供にはよく判りますでせう。

狂つた男。箱庭にしませう。眞中へ富士山を置きませうね。富士川から、三保の松原から、松江の古跡から、勝山城から、石手川から、華嚴瀧から、不忍池から……そして僕の部屋迄入れませうねえ。

未亡人。まあ、隨分大きな景色ですわねえ。

狂つた男。大きいですとも。日本中を入れるんですよ。月も太陽も入れるんですよ。須彌山も入れませう。ダニューブ川も入れませう。ノールウエーも入れませう。あすこはいゝ景色ですから。

未亡人。まあ、立派ですこと。

狂つた男。その中へ、僕は大きな藝術畑を作りますよ。僕は知つてるんです。この土地の土質が、何んなに藝術栽培に適してゐるか、ちやんと調べたんですからね。

未亡人。お調べになつたんですつて？

狂つた男。調べましたよ。ほう、この時この邊一體に麥や稻を止して了つたでせう。皆砂糖黍を植ゑる樣になりましたねえ。この砂糖黍

を誘惑した、曲技師の山野つて男は、ありや僕なんですよ。

未亡人。まあ！

狂つた男。（叉光の格子に背を凭せて胡坐を組む。月光はずつと上つて、彼の顔の下半分を照らす。空を見て）明るく成りましたね。夜が明けるんですか。

未亡人。月の光ですわ。まだ一番鶏も啼いちやゐません。――貴方、お眠くは有りませんの？

狂つた男。僕はもう眠飽きました。もう、一生眠らないでもいゝ様です。

未亡人。そんな時、退屈なさいません？

狂つた男。僕は弦線を作り度いと思ひますよ。土質の研究もまだ手を着けた許りです……。

未亡人。何故お続けに成りませんの？

狂つた男。道具が無いのです。それに学者仲間も有りません、研究を発表する友人も無いのです。友人は何よりの力なんですがね。

未亡人。（喚ぶ様に）あゝ、貴方は本当に御病気なんでせうか！（ひしと格子に縋り附く）

狂つた男。（退屈そうに檻の中を見廻す。明笛を見附ける。取り上げて暫くは其穴を人差指で交互に塞いで見てみる。やがて吹き始める。――朗々と古曲一曲吹奏し終る。未亡人の放心である）

未亡人。（格子に縋つたまゝうつとりと聞き惚れる。――終つても、暫時庭に余韻を求める様に、恍惚と美しい狂人の顔に見入つてゐる。）

狂つた男。（笛を膝めに抱えて窓の月を仰ぐ。月光は今彼の顔の額上に落ちて、その美しい面を神秘的に照らし出してゐる。――物倦びて、ゆつくりと）夜が明けたんですか。明るいですね。

未亡人。いゝえ、まだ夜中ですわ。あれは月の光よ（恍惚に涙へ作ら）ねえ、此処開けて下さいな！（大きな錠前を鳴らす）

狂つた男。（優しく笑つて）駄目ですよ。此処は開きません。

未亡人。何故、何故開きませんの？ 開けて下さいな。そちらから押して下さいな。私も引張りますわ。ね、ね、開けて下さいな。押して見て下さいな。

狂つた男。（優しく）駄目です、駄目です。錠が下りてるんですよ。誰にだつて開きやしません。決して出られやしません。

未亡人。いゝえ、いゝえ。出てゐらつしやい！ でなきや私が入りますわ。ね、此処開けて頂戴、開けて、開けて！（烈しく格子を両手で叩く）

狂つた男。（優しく）駄目なんです。温和しくしてなきや不可ませ

——（夢）—— ——（窓）——

ん（又崩や巡査が來ますよ。彼奴等は強いんですからねえ。何んなに踠いたつて出られやしません。ぢつと入つてゐらつしやい。ぢつとして居れば、誰も虐めやしません。欲しい物は皆持つて來て呉れます。何にも怖がる事は有りませんよ。ぢつとして入つてゐらつしやい。

未亡人。えゝ、入つてますわ、入つてますわ！ だから開けて頂戴！ 私は彼處へ行きたいのよ、お傍へ行き度いのよ！（烈しく格子を叩く）

狂つた男。駄目ですよ。何んなにしたつて貴女は出られやしません。僕の云ふ事を聞いて、ぢつとしてゐらつしやい。その中良く成りますよ。何も彼も良く成りますよ。慣れて來ますよ。（月光の中で、彼の顏は限りない愛と優しさに滿ち輝く）

未亡人。いゝえ、いゝえ！ 開けて下さいな！ 助けて下さいな！ 押して下さいな！ 私を入れて下さいな！（格子を兩手に摑んでどすんどすん、と身體をぶつける）

——幕——

一九二八、三——



大地

未定稿「安城家の兄弟」の一部

善魔（自昭和二年二月至十二月、改造所載）並に
不動（自昭和三年一月至五月、女性所載）の續篇

里見弴

一の一

東京にゐれば、自然あとからあとからと用事も出來て來るし、別だん斷つたところで差支ない會などへも、つい顏を出すやうなことになつて、兎角滯在が永びくのだが、それはそれとして、大根を云へば、矢つ張り琺瓏に別れを告げるのが可厭なからだつた。そのくせ、子煩惱な昌造のことだから、一緒に海にはいつてやつたらどんなに喜ぶだらう、船に乘せて鯊釣にでもつれて行つてやりたい、――日に一遍やそこらは、必ずさういふ思ひに駈りたてられて、いきなり、

「あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ」

などゝ、自分でも吃驚するやうな、突拍子もない聲をたてたりすることもあつたけれ

ど、さアと云つてすぐ隣のうちのあかりのたいか點けた時なぞ、一時に一二割化しには藝者を呼ぶといふやうな日もあつて、いつかまたそのまゝにお御輿が据つて了つた。殊にその氣持は、遊びの金につまつて來れば來るほどひどくなつた。勝負算用から切あげを早めるやうなことは、昌造の都會人根性が、なんとしても承知しかねるところだつた。却つて、ます〳〵尻が落ちついた。これが昔の世の中だつたら、早速、治兵衞や伊左衞門や忠兵衞のやうな、安價な悲劇を生みだすところなのだが……、と、自分でもその愚しい素質を省るだけの餘裕はあつた。ただ然し、いかにも昌造らしい點を擧げるなら、一圖にその愚しさを憎んだり恐れたりはしないで、何かしらそこにも、球に似たものを掘りあてられさうな氣がして、平氣で、寧ろ微笑を湛へて、づか〳〵と進んで行くことだつた。決して自棄からではなく、自分では相應希望のもてる行くてだつたのだ。その點、文吉を死にまで驅りたてゝ行つた血を、こゝにもまた觀ることが出來るわけだが、然し昌造の考へに從へば、兄の場合には、そこまで踏み込んだ氣持は感じられない、と云ふのだ。成程、むかふは現に死んでゐるし、こつちはどんなに困難が來やうと、自殺だけはしさうもないのだから、それだけで云へば、突きつめ方で、遙に劣つてゐることになるかも知れないけれど、避け難い誘惑に導かれて行くうちに、次第に退路を見失ひ、そこで始めて正面をきつて、一二三一軒へと寄つて飲むことになつた時の勢ひできと、てんから無鐵砲に、どこへでも手ぶらでのこ〳〵はいつてゆく自分の氣持とは、よほどの違ひがあると思はれた。この「手ぶら」といふこと、——意識的な行爲を嫌ふといふ氣持は、性分といふよりも、永年かゝつて築きあげて來た、——だからして、その當初に於ては無論十分意識的な企だつたには違ひないのだが、今では、昌造の性格の一面だつた。無手勝流、——實戰での勝負は別として、流儀は兎も角無手勝流だつた。

「手ぶらでのこ〳〵」の歩みは、今ではもう球體の肚のなかにも、深い足跡を殘してゐた。幾度かの喧嘩でも、氣に喰はなかつたものは、だいぶ踏み潰して來たつもりだつた。さうしてその一方には、だらしのない浪費も生れて來てゐた……。

今度の上京もだいぶ永くなつた、それに晦日のことでもあるし、——

——さう思ひながら、昌造は、今だに普請の出來上らない神社の藏の二階に、新聞一回分の仕事をしたきりで、あとはごろ〳〵と、日中の暑さにめげ込んでゐた。

「さア、今日こそは、ほんとにもう歸らなくつちア」

「さうよ、ほんとにもう歸らなくつちア駄目よ」

ひとから云はれることでも、一應は口答するが、結局さう聞きわけ

のわるい方ではなかつたし、それにもまして、自分自身に對する器量の聞きわけのよさといふものは、これはまた、ちよつと類の尠いほどだつた。例へば、一旦自分が歸した方がいゝと思ひ込んで了へば、いくら昌造の方で泊ると云つても、なんのかのと逐ひたてるやうにする、といつた風で、さうなるとまるで良妻賢母のやうにきしりしやんとしたものだつた。まだ十代で別れた實の兩親とともに、臨終の間に合はなかつたのも、こんな時、何を措いても飛んで行くところを見たら、養母として淋しい心持はしまい、今の自分は、なんと云つても、こゝのうちの養女だといふことだけを忘れなければいゝのだ、――かう自分自身に云つて聞かせ、それを聞きわけなく守つたからだつた。無手勝流の昌造などには、殆ど想像もつかないくらゐ、これはまた一刀流の嚴粛を以て、始終自分自身に鉈を向けてゐた。

「夕方ね、……片影が出來た時分に歸るよ。とても今は……」

「だつて、歸れば、すぐ海ンだつて飛び込めるんだし……」

「まア、いゝよ、夕方でいゝよ」

「晩御飯食べてく、なんて云ひだしちア駄目よ。お酒が始つたら、もうとても歸れツこないんだから」

「だいじよぶだよ。きつと五時か六時の汽車で歸るよ」

ところが、その夕方が來て、いよ〳〵着物を着更へかけてゐた昌造が、ふと、思ひ出したといふ顔つきで、

「あ、さうだ！ 久しく御無沙汰しちやつたから、今日はひとつ、阿母さんのとこイ行つてやらうかな」

「今から？」

「とてもくれまいと思つてた原稿料が來たんだし、……どつか晩御飯でも食べにつれてつてあげようよ」

「駄目だわ、そんなことしてたら、また今日も歸れなくなつちまふわよ」

「なに、だいじよぶさ。飯がすんだら、そッからすぐ停車場イ行つちまふよ。どうせ阿母さんだけつてわけにやアいかない、年夫夫婦だつて誘はなきアならないんだから、うちまで送つて行く世話は要らないんだし、だいじよぶそれからだつて歸れるさ」

「さう？ ぢアさうなさいよ」

あぶないもんだ、といふ顔つきながら、羽織を着せかけて、「でも、兎に角電話で御都合を訊いてからのこつてせう？」

「うん、それアさうさ」

文吉の葬式をすませてから間もなく、二人の遺兒は隣の玉之助の家に引き取られ、母親は、赤坂の田町に近い裏町に、その稼業からかゝつてゐた頭米種加賀屋の新築が出來上り、年夫夫婦が帳場をみることに

たつて、そつちへ移り住んでゐた時に、かういふ事情を
つけることに決つた。その相談の始めの時には、若いころから習つた老
しい習慣の、而も後の女としては珍らしく感じられる節操をも、けなげ
に持ち込んで来た気丈な性質だが、最愛の孫たちと別々に住まなけ
ればならないと知るとともに、日々虚々と積つて来た胸の悩みの、
烈しい憤怒となつて破裂するのを、もういかんとも制する力がなかつ
た。

「お前たちは、たうとう仕舞に、道夫たちまで取あげちまはうつて云
ふのか！　孫の世話さイさしてくれないのか！　よろしい！　さうし
て、何もかもわたしから取つてつてしまふんなら……」

価値になつて、全身わなわなとうち震へてゐた。若い時分には、癇癖
が強くて、感情の激動に迎ふと、歯を喰ひしばり、後を閉め、うーん
と云つてのけ反ると、そのまゝ失神して了ふ、云ふところの「ひきつ
け」の来るのが、さう稀ではなかつたと、——母親などは、それに、離
に聞いてゐる方が先で、目のあたりに見た記憶は、たつた一度しかな
いが、芝居場でお駒がやつて見せるやうな、決してあんな生優しいも
のではなかつた。わが母ながらもの凄くて、泣きながらその場を逃げ
だしたことを憶えてゐる。その、激しい発作さへ続けられるほどの激情
を、殆ど三十年振りに見せられたきようだいたちは、息をのんで、ぢ
ツと見詰めて了ふより外はなかつたさうだ。さうして、母親には、
結局、息子の嫁たちが揃つて相談した時分が一番いゝのだ、といふこ
とも、決して解らないわけではない性質だつた。やがて、老母の胸に
七十年も晒されて来た鈍い激しい渦に、大粒の涙が、ぽろりぽろりとこぼ
れ落ちて来るのを見た時には、母親も、しんから哀れに、気の毒に思
ひ、また、人の一生といふものは、なかなか容易ならざるものだと、
高齢に達する母親、母の念に打たれて、暗然として、末席に席を掛
いてゐたやうなわけだつた。

一体が、血統の者に対して特別な感情を持つことを恥ぢるやうな傾
きの母親だつたが、これ以来母親に対する娘の態度に、愈々増してゐ
た。折があつたら、老後の安楽を慰めたい、といふ気はありながら、
昔日からの不和がぬけないで、日常往来をいゝことに、相変らず、
めつたに尋ねても行かなかつた。

この日彼女に思ひ立つた参詣は、とは云へ、だいぶ怪しいものだつ
た。一日神社を出ることは出ても、行つた先の都合で、絵馬堂に寄り
はぐれて了へば、どうもこれは、道草をして来るより仕方がない、
さういふ釈明を、自分自身に対して拵へるのか、半分以上の目的だ
つたと云へる。——偶に用事々々しい、下僕のやうな用件だ……。
親戚ないから来ない、といふ世間の批評に、さして違くもない母の家

へ出かけて行つた。――隼夫の好みで、亞米利加から取りよせた細君家屋を「母の家」と呼ぶことは、いかにもへんたものだつたが、恐らく金の出どころなどでさういふことになつてゐたのだらう。或る時、母親と一緒に乗つてゐた汽車のなかで、久振りの知人が、

「で、この頃は、阿母様はどちらに……?」

と、昌造の方へ向いて問ひかけたので、なんの氣もなく、

「赤坂に隼夫がうちをもちましたんで、そこに一緒に居ります」

すると、そばに聞いてゐた母親が、笑ひ顔ながらも、きつぱりとそれを訂正して、

「わたしが隼夫のとこにゐるんぢやない。隼夫たちがわたしのうちに一緒にゐるんだよ。お前の云ふことは、まるであべこべぢやないか」

いゝ年齢をして、人前で母親から叱言を食つた昌造は、けれどもちつともいやな氣はしないで、寧ろそのはつきりした態度を面白いものに感じながら、すぐ知人の方を振り向いて、

「今のはわたくしの間違ひで、お聞きの通りの次第です、――母のうちに隼夫の夫婦がゐるんださうで……」

「はゝア、成程……」

その人は、嚥み込めたやうな、わけがわからないやうな、不思議な顔つきのまゝ、たゞ笑ひ顔だけを合せてゐた。

そんなわけで、こゝでも是非「母の家」と呼ばなければならないわけだが、永年住み馴れた、父の設計になる番町の家を出て、七十といふ年齢から、急に西洋館住居をしやうといふ元氣は、實際に、一見除もお尻の出ッ張つた洋服を着、駝鳥の羽根のついたボンネットを被つて、鹿鳴館の夜會に出た、當年の「新しい女」たるに恥じないものがある、――などゝ云つて、息子どもは、蔭で笑ひ話にしたがらも、椅子だと足が張つて困るの、持出しの個所がないから、どうも腰が疲るやうな氣がして可厭だのと、さういふ、引越すや否やきつと出るだらうと思はれた繰言が、一つも出ないのに、内々腹から感心もしてゐた。少しは負惜みからだつたかも知れないが、さういふところは、實際ハイカラでもあつたのだ。

母親は、アルコラ・ボイラーなどの据えつけられた應接間に、機嫌よく昌造を迎えて、

「どうだい、みんなお變りはないかい」

と、まづ第一に家族の安否を訊ねてから、早速側卓の上の煙草盆に細煙管をもつて行き、一服吸ひつけて、「どうも、今年はたかく落いやうぢやないか」

「でも、お元氣さうですね」

「わたしは、夏はちつとも困らないんだけれど、……夏は、どこへも

行きたいと思つたことはないでせう……[illegible]」
「えゝ、可なり人がはいり込んでるやうですわね、そイでも土地の人に云はせると、みんな日歸りの客で、それもお辨當持つて云ふやうなのが多いから、一向金が落ちない、なんてこぼしてますよ」
「さうかね。いつまで續くんだらうね、この不景氣も」
「困つたもんですね」
と、一向に困つたやうでもない顏つきで、
「然し、成金時代、こつちなんぞ、どこイ行つても、洟もひツかけないやうなあしらひをうけた頃からみれア、まだしも氣持がよござんすよ」
「それアまアさうだけどね……」
たまに訪ねて來たところで、別だん話といつてはなかつた。冷たい飲料などを持つて、年夫の細君の鈴子も出て來た。亞米利加育ちで、年中洋服だつた。
「どうでせう、もう少ししたら、阿母さんを誘つて、どッかへ晩飯でも食べに出かけやうと思つてるんだが、年坊主、歸つて來るかしら」
「さうですね。ヒヨツとすると、今日は、會社の方をお午ぎりにして、ゴルフに行つてやアしないかと思ふんですよ」
「相變らず、熱心にやつてるんだね？」
「ええ、[illegible]……お兄様も、[illegible]ッ張り込むんだつて……」
「大へんさ、週ふたんびにね。……もう道具も、一揃揃の分を買つといた、とかう云ふんだからね、とても斷り切れやアしないよ。……そイで、ゴルフだとおそくなる？」
「さア、すんでから、眞直歸つて來れば、ですけどね……」
「まアいゝや、それア そん時の都合で。……あんたは行けるでせう？」
「わたくしもですか？」
「よかつたらどうぞ」
「それはどうも……。いゝえ、別になんにも用なんぞないんですけど……」
「こゝの子供たちは、ちつとも世話が要らないからね」
西洋流のきちんとした育て方で、夜も寢る時間が來れば、子供たち二人だけで、眞暗な寢室にしめ込まれて了ひ、それつきり朝まで泣聲ひとつたてない、といふ風なのが、母親はひどく自慢だつた。
「さうですね。あゝいふ風に躾ちまへば、母親だつて、隨分これで、自分の時間つてものが出來るわけなんだけれど、うちなんぞと來たら……」

お世話でなく、それは全く羨しいほどうまく行つてゐた。世話の時間などは二の次としても、こゝの子供たちの健康状態のすぐれてよいのは、生得より、そこに原因するところが多いやうに思はれ、感服のほかはなかつた。

やがて世話は、ひと風呂あび、ちよいとした他所行に着更へて出て来た。

「さア、お前さんも行つて、汗を流しておいで。……いゝお加減だよ」

その間、子供たちを遊ばせたから、最前の話相手も勤めてゐた親子が、代つて風呂場の方へ行つた。

「君たちは、マヽと一緒にはひるんぢアないのかい」

「えゝ、その人たちは、御飯後に、……寝しなに入れて貰ひます」

「さうか、えらいなア、二人ツきりではいるのか」

「なに？　どこに？」

「お風呂にさ」

「お風呂、僕、嫌ひだア」

「僕ア好きだ」

「今度またパヽと一緒に伯父さんとこイ来いよ。湯に入れてやるから」

「え、、さう〳〵。[illegible]お爺さん、[illegible]行つておくれたつたつて？」

「えゝ、行つて来ました」

「伯父さん、いつ行からうね。僕、逃げるよ」

「何が逃げる。……さア、お前さんたちは、もうちつとおもてで遊んでいらつしやい。よく運動して、お腹をすかせといてから御飯、ねッ」

聞きわけよく、子供たちが駈けだして行つたあとで、好物の煙草をふかしたから、前の話を続けて、

「それアどうも、忙しいところをおくぶり揃さんだつたね。それに、生憎、あの朝は大へんな降りで……」

「いゝえ、なに、上野までの間ですもの。彼方へつく時分にはあがつてきました。……あ、それから、ことづかつて行つたものは、それ〴〵みんなに渡しました。みんなからも、よろしくお礼を申しあげてくれつて……」

「さう。それアどうもお世話さん。……上州からみれア、よつぽど汽車も早くなつてるけれど、日帰りであすこまで行つて来るんぢア、なか〳〵疲れるよ」

「何しろ、――ほかに自分の用もあつたんですけれど、[illegible]見さんが一緒についてくれたんで[illegible]ア」

「それ――あら、あすこの――[illegible]」

「何から何までやつてくれるんだから、こつちはまア、安楽家の[illegible]どして、たゞちよつと顔だけ出して来た、つていふやうなもんですよ」

「それアまア、何しろ、世話なしでよかつたアね。……そイで、[illegible]を撮つてゐつた写眞とかつてエのは……？」

「えゝ、すつかり乾板を駄目にして来ましたから……」

思ひ出しても噴きだしたくなるその場の情景を、よッぽど模様にも話して聞かせやうかと思つたが、どう感じるにしろ、味が強すぎて、結局氣の毒らしいことになるので、口のはたによつて来る笑顔を、無理に押し殺して、最後に、たうとう知らん顔で通して了つた。

それは、その日から丁度一週間ばかり前のことだつた。文吉の死體が發見された當時、いろ／＼世介をかけた人たち、――別莊番の根津とか、出入りの大工とか、役場の書記とか、さういふ人たちにお禮をするのと、もう一つは、死體の腐爛が劇しくて、生前をよく知つてゐる根津でさへそれを見分けかねたため、ほどたつて別室から遺書を探し出して来るまでは、どこの誰とも知れず、從つて検屍の警官も、法規の手續として死體の寫眞を撮り、今にも役場に假埋葬を命じるまでの手筈をつけて了つたのだが、その、結局は不用になつた寫眞の、印[illegible]――この[illegible]として[illegible]時に[illegible]つて[illegible]――この[illegible]備を結んで、[illegible]が、[illegible]な、[illegible]女優子の良人も、自分出て来れて[illegible]してくれたので、[illegible]を[illegible]る[illegible]は、催主をよばれた[illegible]の別莊に、或は呼びよせたり、[illegible]いのは代理を差したてたりして、[illegible]片づいて了つた。

七時、東京をたつ時分には、まるで夕立のやうなどしや降りだつたやつが、山の上では、その時、たゞ深い霧と云つてもすむやうな、目に見えない霧雨になつてゐた。それでも、ベランダ風の窓の線を薄暗くして、もうそろ／＼色の變りかけた大きな葉を重ねてゐる樹々の間からは、火山に近い地方の、特有じみた砂地へ、ビショリ／＼雨垂が落ちて、あちこちに小穴を穿つてゐた。仕事の都合で、前の晩一泊もしずに上野に駈けつけた昌造は、禮物の上包に宛字を書いたりした頃に倚りかゝつて、食後の、けうとく、とろ／＼とした気持だつた。誰か見が、脚衣の時計を見ながら、そばへよつて来て、顔を向き、

「どうです、そイぢア、これから獨りでイよつて、成可くなら四時の汽車に乘るつてことにしますかな」

「えゝ、出かけませう」

「いま自動車をさう云はせたから……。どうです、その間にちよいと

行つて見ますかな」

態でその見當をしやくつてみせて、つい裏山の中腹にある安城家の別莊に誘つてゐる意味を通じさせた。

外套を着れば、今は要らないくらゐだつたが、つい近くの岡を、どんな高い山とも思ひ描けるやうな、深い霧の足が、靜かに流れ動いてゐた。それはまた、擽つたく睫毛に來てとまりもした。道々、別莊番の根津は、事件後そこを尋ねて來る若い男女がいかに多いか、といふやうなことから、もう建物を取り毀して了ふやうなら、町の青年會で、集會所に建て直したがつてゐる、歸つたら、相談して置いてほしい、など〻、そんな話も持ち出した。

六七年前、母親や文吉と一緒に、長男をもつたばかりの昌造も、そこでひと夏すごしたことのある建物の前まで來た。入口といふ入口が、嚴重に釘や鎹で打ちつけてあつた。

「ほゝう、釘づけかい」

主人の言葉に、使用人といふより御家來といつた感じの根津が、一足退つて、小腰をかゞめ、

「はい、さうでもいたしませんと、見に參ります連中が、なかへはいつてみたがりますし、それに、警察の方からも、ちよつと御注意がありましたもんですから……」

「さうかい。いや、それアちつとも差支ないんだがね」

「もしなかへはいつて御覽なさいますやうでしたら、金槌でも取つて參りますれば、すぐ……」

「どうします？」

「いえ、もう結構」

「うん。まだ少し臭いやうだね」

「どうも……。ずゐぶん消毒いたしましたんですけれど……」

「さうかい。……ひどいもんだな」

この、粗末な、バンガロー式の建物からは、どこともなく、今だに腐臭を送り出してゐた。遺留品の一部、──寢衣などを焼き捨てたといふ灰も、轢砂めいた砂の上を、まだ黒々と地取つてゐた。午後の氣の重さが、次第に陰鬱に暗み歪んで來てゐた昌造としては、たゞ穢らはしい、といふ氣持はかりだつた。若い男女の「參詣者」たちが、供へる心で挿し込んで行くのだらうけれど、雨戸の隙に、そこらに咲いてゐる月見草や萼の花などが枯れ凋んでゐたり、やたら寫眞を撮つて行くとみえて、フイルムから引きちぎられた黒い紙が、家の周りに散らばつてゐたりするのを見ても、へんに腹だゝしかつた。

やがて、霧のなかから、自動車の警笛が響いて來たので、遊覽の一つに「山莊」など〻紙とつて書いてあるこの建物のそばを離れた。高

[illegible]といつた[illegible]に、[illegible]として[illegible]の[illegible]を開いて、留置へ向ふ自動車のなかに、昌造の陰鬱は、ます〳〵深くなつて行くばかりだつた。

警察では、いゝ按配に署長がゐて、すぐ應接間のやうなところへ通された。額縁のある堀内が、昌造に代つて持ちだしてくれた希望は、誰が聞いても尤であり、また法に觸れるところもなかつたとみえて、快い承諾が與へられた。署長は、必要がなかつたのだ、印鑑は一枚も作らなかつた由を述べてから、自分で別室まで行つて、新聞紙に包んだキヤビネ型の乾板をとつて來た。

「これです」

と、卓の上にさし置いて、「たしか四枚でしたか、みんな一緒に包んであります」

「あゝ、さうですか」

「貴方がたの御覧になつてる前で毀しませう」

さう云つて、髭のある口尻に、なんともつかぬ笑靨をよせ、堀内と昌造とを交互に見やつてから、いきなり、右を拳固にかためて振りあげたが、「然し、いかゞです、一應御覧になつてからになさいますか」

「いゝえ、どうぞ……」

即座に斷りかけて、昌造の方を振り向き、「どうします。それとも、君、見ときますか」

「よしませう」

すらりと、簡單に答へはしたやうなものゝ、昌造の氣持は、實はそれほど簡單でもなかつた。

(ひとつ、蛆のわいてたと云ふところを見てやらうか!)

遺された血族らしくもない、さういふ毒々しい、一種、復讐的と云つてもいゝやうな感情が、むく〳〵と頭を擡げかけてゐた。

「ぢア、よろしうございますか」

署長は、念を押すやうに、もう一度二人の方を見た。──昌造の裡には、良識が、新聞紙を引き破つてみたがる惡魔の手を抑えつけて、「よせ〳〵!」と警め、忽ちその爭ひに勝つて行くのが感じられた。表面は、然し、落ちつき拂つて、

「どうぞ」

卓上の乾板に、拳の第一撃が加へられた。──不愉快きはまつたことには、それは、ピシリともいはなかつた。

「手ぢやあぶない! 怪我をするといけませんよ」

堀内の義兄は、何をかな、と思ふらしく、あたりを見廻したり、衣嚢に兩手を突ッ込んでみたりしたが、その間にも、署長の拳固は、續けさまに、猛烈にうちおろされた。その情景の阿呆らしさといふもの

は、……悪魔もやつと溜飲をさげて……あぶなく噴きだしかけた昌造が、それを誤魔化さうとして、

「机の角へでもぶッつけたらどうです」

「いや――」

卓の上へ平たく置いた硝子四枚の強さよりも、署長の強情は更に強かつた。――ゴツン／＼と、尚も不愉快な音ばかりだつた。

「あぶない、あぶない！　それアほんとにおよしなさい！」

堀内は、見てゐられなくなつて立ちあがつた。

「存外これで丈夫なもんだな」

、たうとう署長も我を折つて、さう独言に呟きながら、あたりを見廻し、そこに出てゐた茶盆から、青磁色をした厚手な安物茶碗を鷲掴みに立ちあがると、その糸底でゴツンと一つ喰はせた。それで、やつとピシリと鳴たが、執念ぶかく、こな／＼になるまで、鉄瓶打ちに砕きつづけてゐた。――昌造は、我慢しきれなくなつて、鼻をかむとみせて手巾をあてがひ、うまくそのなかに、無遠慮な笑ひ声を包みとつて了つた……。

お歴々の前に披露したくなつたのは、謂はゞその時に、手巾に包んで持つて帰つた彼の笑ひだつた。が、どこで聞くにしても、もと／＼それは悪魔から出たもので、心ある聴き手には、決していゝ感じを与へないにきまつてゐた。――昌造も、そこまでは気がつかなかつたが、ただ一味が強すぎる」といふほどの意味で差し控へた。

「新聞紙に包んだまゝで、署長が自分で、めちや／＼に毀してくれましたよ」

それだけにして置いた。

「さうかい。それアまアよかつたね。いくら無器用でも、そんなものが残つてゐると思ふと、なんだか気持がわるいからね」

「さうですよ」

銚子の支度は出来ても、まだ仲夫が帰つて来なかつた。早かつたら、あとからでも来るやうにと、そこからさし隔たつてゐない或る料理屋の名を云ひ置いて、二人だけで出かけた。そとは、いゝかたがけの散歩者の多い夜になつてゐた。

元老の一人で、胡麻食ひ蕎麦を喰つてたらうけれど、それより歯のぬけた口から、出来るだけよけい栄養を摂ることを大事に、三度々々の食膳を用意させてゐたのが死んで、隣に離れたそこの料理番が、一風流ある食ひもの屋を、山ノ手の場所に開いてゐた。――それへ母親を案内した。なんのために、甥婿の元老が、それほどがつ／＼と栄養分をほしがつたか、そんな余計なことさへ考へなければ、相応うまくも食へるし、もと／＼歯のない者といふことが考慮に入れてある料理

し、君たちここには持つて来したつた。

「いかゞです」

「いゝえ、もう沢山」

甘粕は、猪口に二杯目を注ぐとりかけた顔に、手の甲をあてがつてみたながら、李子の嫁の方へ、「お前さん、ちつとお酌でもしておあげなね」

「え、さう〳〵。どうも、自分がまるツきり飲けないもんだから……」

その一杯だけに注いで貰つたが、大概甘粕のは、相手や、酌のしてのないのを、少しも苦にしない酒だつたから、あとは銚子を引きよせて、ちび〳〵手酌でやつてゐた。別だんの話とてもなかつたけれど、そのないことを気にして、無理に考へださうと努めなければならないやうな、さういふ仲でもなく、落ちついた、ちよつと好もしい食後だつた。それでも、こゝからぢかに新橋の停車場へ行くと云つて、仕度の道具を入れた鞄まで持ち込んで来てゐた甘粕は、無理にも、とき〴〵時間を気にしないわけにはいかなかつた。

「停車場、おそいなア」

「ほんとに」

細君は、血色のいゝ頬に微笑を含んで、「でも、この時間になれば、どうせもう食事にすんでませうから」

「さうね。……さア、そイぢア、そろ〳〵あたしも支度にし[illegible]な」

はたの膳は引かれて、果物や紋の手拭が来てゐるのに、自分の茶碗は、まだふさつたまゝだつた。

「ぢア、女中を呼びませうか。……でも、まだちつともろくもおあがんなさらないし、もうちつとめしあがりたいんぢアありません？」

「いや、もうあんまり悠々ともしてゐられない時間なんですよ」

「でも、何も今夜お帰りンならなくちアならないつてことはないんでせう？」

この、目から鼻へつん抜けるほど利口た細君は、何もかもちやんと見透してゐる、といふやうな微笑ひ顔で、「もしなんなら、うちへ来てお泊ンなさいませんか」

「帰らないくらゐなら、あんたンとこなんぞへ泊めて貰ふつて手はありませんよ」

「まア！」

呆れ返るといふ顔に、「ぢア、また御別懇ですか―」

どこへ行く道だつたか、二人の児と一緒に、自動車で海岸を通りかかつた時、甘粕が、三之助の腿を叩き、すぐ窓のそとを指さしてみせ

て、
「こゝだよ、こゝだよ、沖津は」
「なんだい、沖津つて？」
「沖津さ、昌坊主の御別懇さ」
これが原で、今では「御別懇」といふ言葉は、女きようだい、姉妹たちの間にさへ擴まつてゐた。それにしても、まさか母親までは知るまいと思とつてゐた昌造は、この場にそれを持ちだす筱子を、またいつもの

でんだな、と、いくぶん意地わるいものに採り、それだけになほ、しやア〳〵とした顔つきで、
「あたりまへでさアね」
ところが、母親が、そばから笑ひ顔で、
「お前ンとこの御別懇は、たいそう高價いうちだつて云ふぢアないか」
「え、。とてもそれア、御本懇の生活費以上でね。これにやア此方から弱つてるんですがね……」
「お前さんも、もういゝ加減にしないといけないねえ」
「さうなんですよ。友達なんぞでも、もうそろ〳〵紙衣を着る時分だつて、樂みにして、——まさか樂みにもしてまいけれど、兎も角さう云つて待つてるくらゐでね……」

「いやな人だね、ほんとに……」
「昌兄様のは、御自分で、なんでも御承知で、それで……」
「冗談いつちアいけない。若氣の誤りで、ついふら〳〵ッとね……」
そこに女中が、今歸つて來たが、すぐそつちへ行くから、といふ早夫の電話を取次いで來た。
「あら、すぐ伺ひますつて……。今からもう……」
細君が、スカート膝で立つて、女中の方へ「そいで、電話、切れちまつたんですか」
「は。たゞさう申しあげるやうにつてことでございました」
「あら、さう。……仕様のない方ねえ。……ぢア、すぐこつちから電話をかけて斷りませうか」
「い、でせう。……と云つて、こゝのうちが困るんならば、だけれど……」
「いゝえ、まだうちは……」
「きつと、玄關でその話を聞くと、女中に電話をかけるやうに云ひつけといて、自分はうちイもあがらずに、そのまゝすぐ出かけちまやアしたいかと思ふんですよ」
「さうだよ」
母親は、始終喧嘩ばかりしながらも、矢つ張り一番可愛い末の子を

來るんだよ」
「こつちらそイで、得たりかしこしぢアないんですか」
さう云つて綾子が、甲高く笑ひ出した。
「まア、そんなこつたね」
これには昌造も苦笑ひで、「女中さん。あたしはもう澤山なんですがね、今すぐ、一人やつて來るのがあるから、もう一本だけ、どうぞ………」
「は。……なんか召上りものは……?」
「それアもうよからうと思ふんだが……」
「え、、無論それア食べて歸つたんでせうからよござんすわ」
母親が、煙管を前に、膝の上に兩肘を置いて、いやに優しく、女中の方へ、
「そイでも、なんか、お酒の肴に、摘むやうなものでもありましたら……」
「は、畏まりました」
女中のさがつて行つたあとに、昌造は、またしても時計を引き出してみて、
「さうかい。隼坊主、やつて來るのかい。驚いたなア」

て、
「たいそうお嬉しさうですのね」
「さうまアツパリ〳〵切るもんぢアありませんよ」
隼夫が來るといふことで、急に、燥く、といつてもいゝほどの上機嫌に飛びあがつてゐた昌造には、けれども、それくらゐの皮肉は、痛くも痒くもなかつた。
あともう一本と註文した銚子が運ばれたのとさう變りなく、すぐもう、元氣に滿ちた隼夫の聲が、梯子段の下から聞えて來た。
「やア、來た、來た」
と云つてゐるうちに、どこかでもう飲つて來たらしく、だぶ〳〵な紺絣の背廣にてりはえて、一際赤く見える顏を突き出した。
「や、これアどうも……」
「不思議な景色だらう」
「不思議だねえ。かういふことゝ知つたら、真直かへつて來るんだつけ」
「どこへよつてらしつたの?」
それに答へて、鳴澤のゴルフ・リンクで、勝祝ひといふのでまづ一杯、歸り、何某の自動車に乗せて貰つたもんだから、どこそこへ引ッ

張つて行かれ、それからどうしたかうしたと、お政の話も、昌蔵に負けず劣らず旭かつた。そのお仕舞に近く、うちへ歸つてからの様子が、たつた今こつちで想像してゐた通りなので、二人は、横手を拍つて喜び、

「さうれね、云はないこつちアない。さうだらうともつて、今もみんなで話してたところなんだよ」

「ハヽヽ」

と、白い齒並を見せて輕く笑つてから、「乗つて歸つたタクシーのやつが、うちのはいり口ンとこで、一度に梶が切りきれないで、ブウブウガタ／＼やつてやがつたから、おーい、待て、待てつて呼びとめといてさ、折角離れて來たんだが、こゝの主人が留守だから、もうちつと先までやつてくれ、つて、これが、お前、一日分を拂つちやつた後だから、メートルの外さ。もうちよつと先、もうちよつと先で、たうとうこゝまで乘つかつて來ちまつたもんだアね。どうだい、うまくやつたらう？」

「まア、ずゐぶんこすいのねえ」

「そイでも、たゞでもあんまり可哀想だと思つたから、煙草でも買ひたまついつて、十錢やつて來たがね、……こゝの主人が留守で、つて

「あたまの働きのお早い方は違つたもんね」

「さうさ。それでなくつちア、なか／＼これからの世の中、渡つて行かれないよ」

「さア、あけないか」

昌蔵が催すそばから、二人も、

「折角、十錢の自動車賃で駈けつけて來ても、昌さん、今夜あつちイ歸らなくつちアならないんだつて云ふから、さうもう時間々々はしちアゐられないんだとさ」

「歸る？　逗子にかい？　よせよ！」

「いや、まださう急がなくつたつて、終列車にやア間に合ふんだけどね……」

「まア、いゝやね。……兎も角もまア、歸りにちよつとうちイよるんだね。……今度湯殿にシヤワアを取りつけたんだよ。いゝ心持だぜ。シヤーッとひとつ浴びて歸らないか」

「あれが、とてもお得意でね……」

「得意ぢやないけどさ、實際、いゝ心持だよ。まア、兎に角よりたまい」

どつちかと云へば、薬食ひの客の多いうちだつたから、水ッ尻は禁

に、ふざけてみんな默つてそこを出た。老氏の口癖で、お話こなしに歸いて歸らうと云つてゐるそばで、いかに停車場へ飛行する氣でも、自分一人自動車は云ひつけにくかつたので、別れる角あたりで、タクシーでも拾はうと思つてゐたのだが、それは、隼夫がどうしても承知しなかつた。またしてもシヤワアをもちだして、よれよれと云ふ、——その裏には、實は、うちへ歸つてから、自慢のコツクテルでも振つて、兄にも薦め、自分も飲み足したい氣持があるらしかつた。そこへもつて來て、母親の方には、汽車の時間をすごして了へばすごして了つたで、それもまた結構、といふ氣が、もとより十分肚の底にはあるので、誘はれるまゝに、再び母の家へと逆戻りして了つた。

家のじようで、歸ると、隼夫は早速上着をぬぎ、ホワイト・シヤツの袖を肘の上までまくりあげてから、隣の食堂へはいつて行つた。

「それ始まつた！」

母親は、老人に似げない惡戯々々した顔つきを差し寄せ、兩手で、コツクテルのシエーカーを振る手つきをしてみせながら、「これだよ、これだよ。また、これ式が始まるんだよ」

「え、さう！」

姑と嫁とが、わざとのやうに聲をひそめ、目だけで笑ひ合つてゐる隣室からは、

「おい、貫一！ 君はあなたのやうな、君に」

起たうともしずに、切口上で、

「はい。ございます」

「大急ぎで、剥いて持つて來てくれないか。そイから、ピーナッツの罐はどこだつけね」

「どうでせう、まア。普段あゝいふ風に働いてくれるといゝんですけれど……」

「おい！ ピーナッツの罐、どこにあるんだつたら！」

「はい、はい。今あたくしが、みんな揃へて持つて參りますから………」

「どうぞもう、さう御自身でお働きあそばしませんやうに、とさ」

母親もから隣へ聲を張つた。

「ハ、、、、」

それには、笑顔だけで答へて置いて。やがて隼夫は、銀色をしたシエーカーは脇の下に、洋酒の瓶三四本と、コツプ二つ三つを、兩掌の指の股に挾めるだけ挾んで、捧げたかくそこへ出て來た。

「なかなか大式なんだね」

「これね、何百種つていふやうな混ぜ方を、一々詳しく書いた本なんぞもあるけどね。そんなものを見てやるより、却つて自分勝手に、凡

その勘定をやつた方が、よつぽどうまいのが出來るんだよ」

「ぢア、ひとつ、成可くその、勘のいゝとこでやつて貰はふかな」

「よし來た。……かい。かん酒つてのは、これから始まつたつて云やアしねえか」

「いやだよ、馬鹿々々しいねえ」

やがて、クラッカーやチースも持ち出されて、洋酒の酒宴に油がのりかけて來る時分には、勢、母親などはもうのけ者だつた。それに、いつもなら夙に床に就いてゐる時間で、眠くもなつて來たらしく、

「そイぢア、あたしはお先に御免かふむるよ」

と、椅子を立つて、「どうも今夜は御馳走様。久振りでほんとにおいしかつたよ。歸つたら、おしげにもよろしく云つておくれね。そのうち、少し涼しくでもなつたら、子供づれで遊びにおいでつて」

などゝ、行き届いた挨拶を殘して、片手を兼子にとられ、ゆつくりゆつくり二階の寢室へあがつて行つた。

煙ッたいといふほどではなくとも、生みの親の前には、矢つ張りなんとなく氣づまりな感じもあるもので、あとはまたひとしほの反跳だつた。たうとう、十時五十何分の終列車などは、かれこれもう大船近くまで行き着いてる時分まで、[illegible]などにうち興じてゐた。

「御自慢のシャリアは、一體どうなつちまつたんです？」

「あ、さう／＼。……だけど、もういけねえや。いくら御自慢でも、これであんなものにかゝつたひにやア、一遍に心臓がきゆッと來て、……ハ、ヽ、さようならだ」

「さようならと云やア、僕もうそろ／＼出かけなくつちア」

立つと、足もとが少しヒョロつくくらゐだつた。

「なんだ、まだいゝぢアないか」

「いや、ちよつと今、はゞかりだに」

その戻りがけに、電話をかりて濱作のお民を呼び出し、もう一度そつちへ歸つて行くから、と告げてゐると、そこへ兼子が通りかゝつて、

「やつてる、やつてる」

「なに、ちつともやつてやしないさ。……さうぢやない、さうぢやない、今のはこつちの話なんだ。……あゝ、いゝよ、そイぢアすぐ行くからね……」

電話を切つてから、事務所の方へ、

「兼子さん、そイぢア、ひとつ、僕をさう云はせて貰はふかな」

「は。すぐでおよろしいんですか」

「えゝ。すぐでよござんす」

客間に戻つて、暫くすると俥が來た。隼夫も、運動後の酒で、い丶氣持に眠氣さして來たためか、もうさう强くも引き止めなかつた。別れを告げて、おもてへ出てみると、い丶月夜になつてゐた。まるツきり雲がなく、晃々と明るかつた。六本木から溜池への下りへもつて來て、挽子が、この節には珍しい達者で、風のない夜を凉しく飛ばして行つた。酔ひが吹き散らされ、たぶんもう來て待つてゐるだらうと思はれる瑛龍のことや、たうとう今日もまた歸り損なつて了つた、といふ、後悔じみた氣持や、母親を喜ばせることが出來たといふ滿足や、いろんなものが、きれぐ\にあたまに來た。

夏霜枯で、華街とは思へないほど、もうどこもかもひつそり靜つてゐた。沖津でも、眠むさうな顔をした少女などが、珍しくも玄關へ出て來たが、勝手を知つてゐるので、さつさと藏二階の方へあがつて行かうとすると、

「あのウ、こちらです」

と、藏前の板間を隔て丶南側に建つてゐる一棟の、その梯子段の下に立ち止つて、「お民さん！　お見えンなりましたよ」

「あ丶、さう」

すぐ階段口へ、肥つた體を、なほさら短く現して、「どうぞこちらへ」

あがりながら、

「どうして今夜はこつちなんだい」

「い丶えね、あんまりい丶お月夜だから……。お藏の二階ぢアお月見が出來ないでせう、ですからね……」

「い丶よ、こつちの方が、廣々として丶。……今夜は、寢るのもこつちにしようよ」

「あ丶、さうしませうか。その方がい丶わね」

三疊の次の間は隔て丶も、簀戸ばかりで、それもあらかたあけ放してあつたから、きちんと餉臺の前に坐つてゐる瑛龍の姿は、すぐ目にはいつた。釣の手に、廻り椽を奥の八疊へ、——そこは、かれこれもう一年近い前のことになるが、三度目に瑛龍に逢つた晩、愛香と三人で寢て、明方、一時間以上もか丶つて、詳しく春江との交渉を話して聞かせた、あの千鳥と呼ばれる座敷だつたが、そこへはいつて行つた。

「お歸ンなさい」

「たうとうまた歸れなかつた」

「そんなこつたらうと思つてた。歸るんなら、矢つ張り晝間のうちでなくつちア駄目ね」

「晝間は、汽車ンなか丶暑くつて、とてもやりきれないから、明日

は、「斷然朝のうちに歸らう」
「えゝ、さうなさい。それがいゝわ」
「駄目よ、寢坊が二人よつて……」
後手に欄干によりかゝつて、お民は、座敷のなかを見おろしながら、「それを、梟の狩だくみつて云つてね、ちつともあてンなりやアしないわ」
「餘計なこと云ふ手間で、ゆかたでも持つて來なさい」
「ちやアんとそこイ出てるわよ」
「あ、さうか」
と、次の間に立つて來て着更へるのを、瑛龍が手傳ひながら、
「朝のうちに歸るとなると、新聞のお仕事はどうなるんです？」
「仕方がない、今夜、これから書いちまうんだね」
「そんなに醉つぱらつて歸つて來て、書けるもんですかね」
「一體、お前さん、うるさいね。なんか冷いもんでも持つて來るとか、少しは客らしく扱ふもんだよ」
「今お貞さんか誰か持つて來るでせう。憚ンながら、そんな氣の利かないうちぢアないんだから」
「そイぢアあんたは、お藏イ行つて、いろんなもの取つて來ッ頂戴よ。お仕事の道具は、……あゝ、鞄にあるからいゝか。そイぢアね、原稿を入れる大きな封筒、あたしの大鋏ひな、ガッチャンとやつて綴るもの、そイからね、煙草は箱ごと持つて來といてね。……まだなんかなかつたかしら……」
「さうね、戸棚をあけてみて、まだなんか要りさうなもんがあつたら持つて來るわ」
だるさうに體を運んで行くのと入れ違ひに、氷を浮した冷水と、絞り手拭を持つて、さつきの少女があがつて來た。
「お貞さん、どうして？」
「今、お風呂です」
「あゝ、さうか」
お民がおりて行つた。昌造は、座布團を縁側へ持ち出し、欄干に背を倚せて、そこに冷水や手拭を貰つた。
「卓袱臺をそつちイ出して貰つて、そこでお仕事なすつたらどう？涼くつてよかアない？」
「でも、暗くつて仕樣がないよ」
「なんかで、電氣をそつちイ引つ張つて貰つたらいゝぢアありませんか」
「大して遊ひさうもないけれど、さうして貰つてもいゝね」
藏二階の、昌造專用の袋戸棚から、いろ／＼取り揃えて來たお民

は、蚊の動かし序で、といふ風に、少女にも手傳はせて、三疊の次の間に寢床を敷き、蚊帳も吊つて了ふと、縁側へ出て、どしりと重い腰を据えた。昌造と瑛龍が大の贔屓で、おまけに話好きと來てゐたから、それからそれへと、やゝ暫く取りとめのないお喋りが續いた。そのうち、いま、沖天にかゝつて、光の冴えきつた月の眺めから、ふと月蝕の話が出た。昌造が、怪しげな天文の智識を振り廻して、その理屈を説明してやつた。電燈を太陽に、團扇を月に、さうして左の拳固を地球に例へて、二つのものゝ間に突き出し、月の面に影のうつる具合をして見せたりした。それがもとで、日蝕は、とか、雷は、とか、地震は、とか、續けさまに、そんな天變地異の話ばかりだつた。

「地震、雷、火事、親爺つて云ふけど、實際、地震が一番いやね。あたし大嫌ひだわ」

「それア、誰だつて好きな人たんぞありやアしないわよ。……さア、そイぢアもうあたし、お仕事の邪魔になるといけないから、そろ〳〵もう行つて寢よう」

「ちよいと、電氣どうしたのよ。こつちイ引つ張つてくれないの？」

「あゝ、さう〳〵。そイぢア、今なんか紐を持つて來るわね」

「いゝよ。あんまりいつまでもこゝに出てゝも、濕ッぽくたるやうな氣がするから、たかイはいつて寢くよ」

一さうね。ぢアさうなさいよ。俺等、たかイいれてあげるわ」

「寢る時どうするんだい？　雨戸は、あけッぱなしで構はないのかい？」

「えゝ。あなた方さイ構はなければ……。しめたら、とても暑くつてたまりませんよ」

「いゝえ、あけといていゝんなら、無論その方がこつちは有難いんだよ。だけど、萬一泥棒でもはいつた時、あたた方が締りをして置いてくれなかつたから、なんて云はれても困ると思つてさ」

「泥棒なんぞ來るもんですかね。……さア、ぢア、行つて寢よう」

「そイぢア、お民さん、明日の朝、きつと起してね？」

「ほんとですか？　朝のうちにお歸ンなさるなんて、とても駄目でせう？」

「駄目なこたアないよ」

「だつて、今から一回分お書きンたれば、二時半、三時半と、かれこれ四時ンなりますよ。とても七時や八時に起きられる氣among ありやアしませんわ」

「だから、九時でいゝのよ、九時で」

「九時ぢア駄目よ。まご〳〵してれば、すぐもう日中ンなつちまいますもの。歸つてから晝寢でもなんでもするつもりで、我慢して七時に

お起きなさいね？」

「そんな、可哀さうに、四時ン寢て七時になんぞ起きられるもんぢアありやアしないわ。ねえ、加島さん」

「まア兎に角、無駄と思つて起しに來て見ろよ」

「無駄よウ。無駄にきまつてるわ」

「ぢアまア、兎に角さういふことにきめてさ、あんた早く階下におりなさいなね。いつまでもそこで喋つてゐられたひにやア、だんだんお仕事がおそくなるばかりだわ」

「へえ」

わざと、咽をいつぱいに擴げたやうな、野太い聲を出して、「ぢア、お先イ。……おやすみなさいまし」

「さよなら」

「おやすみ」

昌造は仕事にかゝつた。

「あたし、お先ン寢ますよ」

「どうぞ、どうぞ」

ねまきになると、いつもの癖で、着てゐたものをきちんと疊み、ひとまとめに、腰紐で胴をしばつて、提げてもいゝほどにし、次の間の地袋の棚に載せてから蚊帳にはいつた。

一枚、二枚、昌造は書き進んで、三枚目の原稿紙をわきへのけると、眠ずに、その紙の音でも數へてゐたのか、瑛瓏はまたのこのこと起き出して來た。

「もうおきでせう？」

「うん、もうぢきだ」

カタコトと、そこらに出てゐるものを片づけ始めた。いくらもの靜かでも、その、尻からおッたてられてゐる感じは、少し邪魔になつた。それでも、一回分四枚を書きあげて、讀み返してゐるうち、ちよつと漢字の劃の怪しいのが出て來たので、字引で確めやうと、茶簞笥の上下、居周り索つてみてたが、どこにもない。

「こゝらに字引はなかつたかね」

「えゝ、もうしまつちやいましたわ」

「駄目だよ、まだ！」

思はず調子が荒ッぽくなつてゐた。そばへ持つて來た鞄をあけてみると、これから原稿を入れようといふ封筒、それを綴じるファスナーまではまだいゝとして、明日また懷へ入れるべき紙入、蟇口、煙草入、時計といふやうなものまで、一つ殘らず、ちやんともうそこへしまひ込んであつた。

「どうも篤に、あんたつてえ人は、手廻しがいゝんだね。少しよすぎ

ゐくらゐだね」

「だつてもうお仕舞だと思つたから……」

「お仕舞になつたところで、この封筒やガッチヤンが要るんでせう？」

「そイだから、こゝイ入れといて、鞄ごと持つて來れア一番早いと思つたのよ」

「紙入や煙草入だつて、鞄に入れて持つて歩くやつアないんだからね」

「さうお、ぢア、出しませうか」

「まア、入れたもんなら入れたでもいゝけどさ、すつかり仕事が片づいちまつてからだつて、いくらも出來るこつたからね」

「さうね、御免なさい？」

いくぶん、それが、勝手にしやがれ、の調子になつてゐた。

「あやまるほどのことでもないけどね、あんまりそばから手廻しよくやられると、ついこつちも氣が急いてね……」

「さうね、これから氣をつけませう」

二人とも、やゝ不機嫌のまゝ床にはいつた。かれこれもう四時で、東の空は、薄明るみかけてゐた。

（つづく）



長閑なる反目

岸田國士

保根
もえ子
野見
丸地
くみ
留奈子

一

保根の家――八疊の座敷――机が二つ部屋の兩隅に並んでゐる。

保根は一方の机に向つて、何か調べものをしてゐる。

野見は縁側に座蒲團を持ち出して日向ぼつこをしてゐる。

野見。此の家もわるくはないが、新躰、これだけの庭があるんだから、もう少しなんとかできないもんかな。せめて、季節季節の花だけでも缺かさないやうにするんだね。櫻、躑躅、ぼけ、こんなもんたら、一株二十錢も出せば、隣までくらゐのやつがあるよ。

保根。……………。

野見。おれはいろいろ考へて見てるんだが、君たちの生活には、もう少し變化があつていゝよ。それは、今にはじまつたことぢやない。君が毎日勤めに出てゐた頃からさうだ。朝きまつた時間に出て、晩きまつた時間に歸つて來るのはいゝさ。しかし、それが機械のやうに正確だと、少し悲劇だよ。お互にね。もう子さんにしてもさうだ。[illegible]立つてゐる時は割烹着をつけ、坐つてる[illegible]新聞の時だけは、[illegible]も、も[illegible]なるほど、[illegible]六[illegible]

[illegible]

おれも、もう子さんも、[illegible]

保根。おい、少し黙つてゝくれ。

野見。そんな賣込む當てもない翻譯なんかしたつてなんになる。翻譯者をちつとばかりやつたからつて、オオ・ヘンリは譯せやしないよ。

保根。賣れなきや賣れないでいゝのさ。勉強になるからやつてるんだ。

野見。おい、それより、何か一つだけ新聞を取れよ。時事の夕刊も、先週から投げ込んで行かなくなつたし、隣の大將は、何時のぞいて見ても新聞を讀んでゝ、そいつを一寸と云つて借りに行くこともできないし、第一、體裁が悪いぢやないか。それはまあいゝよ。僕と云ふ人間が世間から段々離れて行くぢやないか。

保根。世間のことなんか、おれには興味はないよ。

野見。おれ[illegible]、おれはまだ、[illegible]

[illegible]

歩いて見ようと思つてるんだ。

野見。おれも歩く。おれの知つてる處で、少しでも見込みのあるところは、いちいち當つてみるつもりだ。おれの親友で、かうして厄介になつてる男だつて云へば、何んとか考へてくれないこともあるまい。死んだ兄貴の友達で、今建築かなんかをやつてる男が――君、困つた時は、何時でもやつて來給へ、僕で出來ることならなんどもするからつて、さう云つたことがある。あいつのところへ行つて、君のことを頼んでみよう。事務所はなかなか大きいらしいから、人の一人や二人、どうにでもなるだらう。

保根。そんな口があるなら、もつと早くさう云つてくれりやいゝのに……。

野見。さうか。だつて、さう面白い仕事ぢやないからね、建築事務所なんて……。苟も最高學府へ卒業間際まで通つたといふ君が、大工の見習ぢや納まるまいと思つてさ。しかし、昨今の生活は、僕も見るに見兼ねてゐる。だから、さういふところでも、よかつたら、世話しようと思つたまでさ。

保根。どんな仕事だつて、かうなつたらやるよ。文句なんか云つてる場合ぢやない。しかし、なんだな。おれの方もおれの方だが、君も、一つ、早く仕事を見つけて貰ひたいな。學校を出て、何時までもさうぶらぶらしてると、そのうちに時機を失しるぜ。あとからあとから、新しい奴が出てくると、使ふ方ぢや、舊いのとは云はんからな。支那語は、今が一番賣れ口が早いんだし、もう少し奔走して見たらどうだ。

野見。なに、四年や五年遊んだつて、後がつかへるやうなことはないよ。あれは、まあ何時だつていゝから、君の方を早く片づけよう。それでないと、かうして厄介になつてるのが氣苦勞でいかん。

保根。なにしろ、以前はあれだけ定收入といふものがあつたから、始末をすれば、君一人ぐらゐ食はして置けたんだが、今の狀態ぢや、われわれ二人の家族が、滿足にやつて行けないんだからね。

野見。だから、あれが骨を折ると云つてるぢやないか。くよくよすることはないさ。

此の時、表の戸が開いて、もえ子が歸つて來る。

野見（もえ子の姿を見て）お歸んなさい。早かつたですねえ。

もえ子。電車が大變……。

野見。もう聞いた、その話は……。

もえ子。誰から……。

野見。それより、東方時論を買つて來てくれましたか。

もえ子。まだ出てないんですつて……。

野見。そんな筈はないさ。今日は五日ですよ。毎月、一日發行の雜誌が五日になつても出ないなんて法はありませんよ。方々探したんですか。

もえ子。方々つて……紀ノ國屋で訊いたのよ。

野見。紀ノ國屋…………？　嘘だ。大嘘だ。もえ子さん、忘れたんでせう。あすこで訊けば、うちではさういふ雜誌を置きませんつて云ふ筈だ。忘れたか、さもなければ、わざと買はなかつたか。だつて、新宿驛の賣店にだつて賣つてますよ。

もえ子。あら、さうでしたの。

野見。さうでしたのぢやないよ、もえ子さん、そんならさうで、七十四錢くれりや、僕が自分で買つて來るんだ。

もえ子。あたしんとこへ、手紙來てない？

野見。手紙なんか來てませんよ。どう、七十四錢貸して………、

もえ子。いゝわよ、この次、あたしが買つて來るから…………。

野見。今、讀みたいんだもの………さ、壹圓でお釣もつて來ますよ。

もえ子。野見さん、あんたも好い加減察しが惡い人ね。

野見（しばらくもえ子の顏を見てゐるが、やつと、腑に落ちたらしく、氣まづげに横を向く）

保根（机の方を向いたまゝ開封した手紙を差出し）姉さん、これ、……。

もえ子（それを受け取り）なんて云つて來たの。

保根。………。

もえ子（手紙を讀む）

長い間。

保根。直接返事を出さない方がいゝよ。僕から何んとか云つてやるから………。

もえ子。だつて、これぢや約束が違ふぢやないの。

保根。だから、姉さんは默つてた方がいゝよ。名村にさう云つて、解決をつけて貰はう。

もえ子。月々五十圓の仕送りをするつて約束で、かうして別居してるのに、そんなこと云ふなら、どんな女がゐたつてかまはないから押しかけてつてやるわ。

保根。さうすれや、こつちが不愉快なだけぢやないか。話はわかつて

るんだから、表向きにするつて、さう云つてやりやいゝのさ。それには、僕から、そんなことを云つてくのも可笑しいから、辯護士にやらせた方が、さつさと事が運んでいゝよ。

もえ子。うゝん、あたしが、ぢかに掛け合つて來る。

保根。駄目だ、そんなことしちや………。向うから、さうして理由までちやんとこしらへて云つて來てるんだから、當人同志ぢや、押問答をするだけだ。

野見。おれが行つて來ようか。

保根。君のやうにお人好しぢや、甘く見られてなほ駄目だよ。

野見。夫は、妻を扶養する義務があるんだぜ。

保根。わかつてるよ、そんなことは………。

野見。若し、その義務を履行しないときは、妻の方から………。

保根。わかつてるつてば………。

もえ子。こんな、自分の方の都合ばかり並べたてたつて、なんにもならないわ。

野見。もえ子さんも、そんな男はいゝ加減見きりをつけて、早く、第二の新しい生活にはいるんだなあ。女三十二なら、まだ遲かないさ。僕がもえ子さんより、一つでも年上なら、早速渡りをつけるんだが、五つも年下と來ちや、相手にされないや。

もえ子。およしなさいよ、馬鹿なこと云ふのは………。

野見。どうして………。そんなこと、冗談だけど、お世話なら、僕、しますよ。四十から六十までの間で、細君をなくした男、僕二三人識つてますからね。子供があつていやなら、子供の無いのもある。

もえ子。そいぢや、こつちへは返事を出さないで、すぐ名村さんにお願ひするのね。

保根。さうさ。それがいゝだらう。

もえ子。だつて、そんなことして、却つて長びくやうだと、困りやしない。

保根。大丈夫だよ。どうせ、あんな金、何時までも當てにできやしないんだから……。なまじつか、少しでも月々はひると思ふから、つひ、こつちも油斷をしていけないんだ。裸にならうよ、裸に……。さうして、二人で、ふんばらうよ。

野見。さうだ。おれもふんばる。また、米がない時は、芋でもなんでもいゝ。三人分無い時は、二人分を三人で分けて食へば、なんでもないさ。おれは、いくらだつてふんばるよ。貧乏は慘めぢやない。貧乏を苦にするのが慘めなんだ。

表で「御免」といふ男の聲。

保根ともえ子は顔を見合はせる。

保根。來たよ。

もえ子。どうする。

保根。さう云へばいゝぢやないか。

もえ子。なんて……？

保根。面倒臭いから、上げちまはう。

もえ子、玄關に出る。

野見。おれが追拂つてやる。大將、おれには變に好意をもつてるんだよ。

もえ子の「どうぞ、お上り下さい、そこではなんで御座いますから……」といふ聲。

やがて、もえ子に續いて、丸地が現はれる。

保根。さあ、どうぞ……。

野見。御無沙汰致してます。

丸地。いや、こちらこそ……。お隣に住んでゐて、來にくゝたろうぢや斷りますよ。こつちぢや、なんとも思つてないんだが、そつちで變な氣持がなさるだらうと思つて、つひ遠慮してしまふもんだから……。

もえ子。（座蒲團をすゝめ）お敷き下さい。

野見。僕の方だつて、なんとも思つてやしませんよ。毎日、新聞を拜見に行きたいと思つてるんですが、何時のぞいて見ても、讀んでらつしやる時なもんだから……。

丸地。新聞でも見てなきや、日が暮せませんからな。これでも、小遣がちつと自由になる頃は、家でぶらぶらしてたことなんかないんですがね。

野見。大分發展されたつていふ話ですなあ。

丸地。大分といふこともないが……誰にお聞きです。

野見。此の界隈ぢや、みんな知つてますよ。毎年一軒づゝ借家を買つて、それで新橋柳橋と飲み歩いた大家さんは、さう幾人もありませんからね。

丸地。全く幾人もない。それでもうあと賣る家と云へば、この家が一軒きりです。

野見。當分賣らないで下さいよ。賣るなら、借家人ともといふことに

願ひたいですなあ。

丸地。御尤も……。それについて御相談ですがね。當分賣らないことにしますから、家賃だけ、少し、入れて下さいよ。六ケ月までは默つてようと思ひましたが、先月で八ケ月溜りましたからな。

野見。それくらゐなんでもないぢやありませんか。

丸地。いや、さうは行かん。泣きごとを云ふやうだが、收入のあてと云へば、今、これだけです。少しばかりもつてた書畫骨董を、ぼつぼつ手放して食つてゐるわけですが、代々木文山が當節、二十圓といふ相場ですからな。

野見。もつと氣の利いたものがあるでせう。

丸地。それや、ないことはない。抱一の梅をもつてますがね。これが、足許を見られると、相手は、百とつけて來ませんよ。

野見。百圓ですか。

丸地。百圓と云へば、此の家賃四月分に足りません。

野見。そいつを賣つて、もう四月我慢して下さい。

丸地。我慢はいくらでもする。保根さんは、わたしも信用してる方だ。しかし、物には際限といふものがありますよ。

野見。後に僕が控えてゐてもですか。

丸地。あなたが控えてゐるから、なほ、わたしは心配だ。事情はよく知りませんが、家内なんかの話によると、風呂錢まで保根さんがもつてるつていふぢやありませんか。

野見。保根君と僕とは無二の親友ですよ。お互に困つてる時は助け合ふことになつてる。保根君が困つた時には僕がどうかするし、僕が困つた時は、保根君が引受けるといふわけです。ところが、僕の方が先に困つた。それで、保根君のところへころがり込んだ。すると、保根君が、今度は、困り出した。しかし、僕もやつぱり困つてゐる。かうなれば、二人で、困りつくらをするより、しかたがないことになる。現にそれをやつてる。どつちか、先へ困らなくなつた方が損をするだけです。

丸地。なるほど、それも親友の一種ですかな。してみると、わたしなんか、まだ當分は親友の必要なしですよ。ところで、どうでせう、保根さん、さう默つてないで、なんとか返事をして下さいな。無理なことは云はない。できるだけ都合して下さい。二月分でも、三月分でもよろしい。あとは急ぎません。

保根。なんとかします。そのうちに、きつとなんとかします。

丸地。それですよ、保根さん、さうおつしやられると、なんにも云へなくなるんですよ……。苦しいのはお互ですからなあ。よろしい、待ちませう。もう一と月待ちませう。なんとかして下さい。親

好たみに、なんとかして下さい。家內には內證ですが、わたし、遊暇、そこへ出來た、カフエー・ドン・フアンと云ふのにちよいちよい行くんでしてね。茶屋酒の代りにウヰスキイを一杯引つかけに行く。キング・オブ・キングスつてやつが、あれや五十錢ですか。あれをせめて、一週に一度は……（茶を運んで來たもえ子に）や、奥さん、どうかわるいやうに思はないやうに……。決して催促に押しかけたわけぢやないんです。お隣同志に住んで、顔をそむけ合ふなんていふのは、全く、世の終りですからな。

もえ子。ほんとうにお恥しい話で……。

丸地。いや、いや、それがいかん。兎に角、此の家へ見えてから、最初の一と月だけは、きちんきちんと頂いたものです。その翌月は、丁寧に來月一緒にといふお斷りがあつた。翌翌月は、月末が過ぎてから、道でお遇ひした時、やはり、來月はきつとゝいふわけで、それもなんでもなかつた。その翌月からですよ。月末は勿論、月の半ばになつても、音沙汰がない。それから、とうとう御眼にかゝる機會もなかつたわけですが、こつちは、なに、家賃そのものよりも、家を貸して恨まれたんぢや引合はんですからな。そんなわけで、今日は幸ひ天氣もよし、一應御諒解を得かたがた伺つたやうな次第です。家內も、奥さんのことでは、蔭ながら、御同情申上げてゐます。どうぞ、ちと、御話しにいらしつて下さい。

もえ子。ほんとに、さうおつしやつていたゞきますと、なに面目御座いません。

丸地。そんなら、もうこんなことは云ひますまい。わたしはね、保根さんも好きだが、此の野見さんといふ方が、どうも好きでしてね。

野見。僕も小父さんが好きですよ。他人のやうな氣がしないんだ。

丸地。いや、他人は他人で結構ですがね。だが、同じ好きでも、遊ぶのにいゝ友達だといふ氣がする。一緒に苦勞はしたくない。

野見。僕もさういふ氣がしますよ。第一、そんな爺さんと苦勞をして見たつて、はじまらないや。

此の時、表で、「電報」といふ聲。

もえ子が走つて出る。――「えゝ、さうです、うちです」といふもえ子の返事が聞える。

やがて、もえ子が、電報をもつて來て、それを野見に渡す。

野見（受取りながら）僕に……たんだ、これや、電報爲替だ。

一同の視線が野見の手に集る。

野見。(中を開き) 誰だらう……。

長い沈默。

野見。あゝ、さうか。わかつた。僕、一寸、郵便局へ行つて來る。ええと、今、三時だね。よしッ!

野見は、勢よく起ち上つて、机の抽出しから蟇口を取り出し、表に飛び出ようとする。

丸地。ぢや、わたしも失禮します(起ち上る)

保根。(彈機のやうに起ち上り) 野見、一寸待てッ!

野見。なんだ(かう云つて、次の間に立ち止る)

保根。あのね……(と云ひながら、野見のそばに近づき、何か小聲で囁く)

野見。あゝ、わかつた、わかつた。さうするよ。無論、そのつもりさ。

囁かすむと、野見は、表へ走り出る。

丸地。一寸、一寸、野見さん、わたしも郵便局に用がある。一緒にお伴しませう。(さう叫びつゝ、挨拶もそこそこ、表へ飛び出す)

保根ともえ子は、啞然として、突つ起つたまゝ、顏を見合はせてゐる。

二

保根の家の勝手口――右手にポンプ井戸――干し忘れた洗濯物――蓋のない芥溜――凄い月光。

もえ子は勝手口から寢卷の半身を出し、くみは外に立つて、襟をかき合せてゐる。しばらく無言。

くみ。以前なら、こんなことぐらゐぢや、驚きやしませんけれど、なにしろ、半年この方、夜遊びだけはぷつつりしなくなりましたし、まあ安心だと思つてたとこなもんですから……。

もえ子。野見さんだつてさうですわ。わたくしどもへいらつしつてか

ち、たつた一度だつて、猛鬱くなつたなんてことはないんですもの
ね。

くみ。それや、どつちみち、お小遣ひが自由にならないからでせう。ところが、今日は、さういふわけなら、てつきり、二人で何處かへ行つたんだらうと思ひますよ。わたしや、こちらでそのお話を伺ふまでは、事によつたら、お家賃をいくらか都合していたゞいて、そのお金をもつたまゝ、ふらッと出掛けちまつたもんと思つてましたの。

もえ子。でも、まさか、そんなことはないと思ひますがね。野見さん一人なら、わかりませんけど、お宅の旦那様がついていらしつて、そんな、子供のお使ひみたいなこと、ないと思ひますわ。あ、さう、さう、近頃、そこへ出來たカフエー・ドン・フアン、あそこへでもはいり込んでるんぢやないでせうか。なんでも、夜は、一時過ぎまで賑やかなやうですよ。

くみ。そこは、ぬかるもんですか。もう、さつき、ちやんと行つて見て來ましたよ。

もえ子。あそこぢやないとすると、やつぱり東京へでも出掛けたんでせうね。もう終電車まで間がありませんわ。

くみ。でもねえ、わたしも、永年一緒に連れ添つ見て、あの人の氣質によく飲み込んでるつもりですけど、まさか、人様の前を立てにして、方々遊んで歩くやうな人ぢやないと思ふんですがね。

もえ子。それやもう、弟もしよつちう申してますわ。──あんなさつぱりした方はない、大家さんにや珍しいよつて、さう申してるんですよ。

くみ。恐れ入ります。でも、その爲めに、これまで、どんなに損をしたか知れないんですよ。大工には誤魔化される、家賃は踏み倒される、その上、借家人の方で、困つてらつしやる方があると、お米の拂ひまで立替へてあげるつていふ始末ですからね。今ぢや、もう、そんな餘裕もありませんけど、それでも、お家賃の取立なんか、馬鹿落ちつきに落着いてゝ、わたしがいつでも癇癪を起しちまふんですよ。

もえ子。ほんとにね。さういふ大家さんもたまにはゐて下さらないと困る人は困りますわ。

くみ。でも、昨今は、図々しい方が多うござんすからね。はいつちまつたら自分の家みたいな顔をして、家賃の催促に行くと逆に威猛高になる人がありますからね。結局、貸してる方が負けですよ。だつて、さうでせう、向うは、出すお金を出さずにすむし、こつちは、はいるお金がはいらないだけの話ですからね。比較になりません

よ。

もえ子。そんなところに立つてらしつちや、お寒いでせう。

くみ。(それとなく、家の中をのぞき込み)なにしろ、大家とか地主とかいふものは、なんにもしなくつても、人に恨まれるもんでしてね。それや、たまには、相手次第でいやなことも云はなきやなりませんけど、高利貸やなんかとは違ひますからねっ(さう云ひながら、また、家の中をのぞき込む)

もえ子。弟ですか。もう、とつくにやすんでますわ。

くみ。(さりげなく)保根さんは、柔道なんか、なさいませんのですか。

もえ子。(無頓着に)えゝ、なんですか、學生の頃は、講道館とかによく通つてゐましたわ。

くみ。柔道つていふのは、人の首を締めたりなんかするんですつてね。

もえ子。それに、急所を突いて殺す眞似なんかもするらしう御座んすわ。なんでも、お腹の邊に、さういふ急所があるんだつて云ひますわ。

くみ。物騒なことを敎へるもんですね。うちの人なんかは、士族は士族ですけれど、丸でさういふ心得はありませんからね。男のくせに泥棒を怖わがるつたらないんですよ。毎晩、自分で一と通り戸締りを見て廻らないと、氣が濟まないんですがね。

もえ子。でも、此の邊は、割合、さういふやうな話は聞きませんわね。

くみ。ですから、何時でも、あの人にさう云つてるんですよ。家賃の催促なんかに行つて、あんまり永居をしちやいけないつてね。第一、上へは上らない方がいゝんですよ。云ひ爭つた末、相手がどんなことで亂暴をしないとも限りませんからね。これは高利貸ですけれど、金を貸した男から、棒で撲り殺されたつて話、御聞きになりませんでしたか。

もえ子。さあ……いゝえ。

くみ。よつぽど前のことですよ。

此の時、野見が一人、しよんぼり歸つて來る。井戸端の蔭に佇む。

くみ。(それを見つけ)あら、野見さんぢやありませんか。うちの人、御一緒ぢやなかつたんですか。

野見。御一緒でした。

くみ。それで……。

野見。もう黙つて寝てるでせう。

もえ子。(思はず全身を現はし)何處へ行つてらしつたの、今頃まで…………。隨分心配したのよ。

野見。さうですか。遲くなつたことをですか。

もえ子。………。

くみ。そいぢや、どうもおやかましう御座いました。(行きかけて、引返し)野見さん、うちの人と一緒に、何處へいらしつたんです。

野見。奥さんには黙つてゝくれつて云はれてるんだがなあ。

くみ。やつぱり、さうだつたんですね。

野見。さうとは………?

くみ。もうわかりましたよ。(もえ子に)奥さん、ね、わたしの云つた通り………。(かう云ひながら、走り去る)

もえ子。どうしたの、早くおはいんなさいよ。

野見。保根、どうしてます?

もえ子。もう寝てますわ。さつきまでお待ちしてたんですけど……。

野見。なんか、云つてましたか

もえ子。遲いのはかまはないけどつて、さう云つてましたわ。

野見。そんなこつたらうと思つた。

もえ子。ねえ、野見さん、早く上るなら上つて頂戴よ。あたし、こんな扮りで、それや寒いのよ。

野見。上つてもいゝけど、保根が怒ると、うるさいなあ。

もえ子。そんなに怒つてやしないわよ。

野見。もえ子さん、濟まないけど、一寸、先生を此處へ呼んで下さいな。

もえ子。お話があるなら、こんなとこでしないだつていゝぢやないの、可笑しな人ね。

野見。それがさうはいかないんだよ。顔を見とかないと上れないわけがあるんですよ。

もえ子。さう、そんなら呼んで來るわ。(奥に去る)

やがて、保根が羽織を引つかけながら現はれる。

保根。なんだい、變な奴だなあ。なんの用だい。

野見。おい、勘辨してくれ。

保根。………。

野見。あんなに云はれてながら、みんな使つちやつたよ。

保根は默つて野見の顔を見つめてゐたが、いきなり、拳固で横面を擲り飛ばす。

野見は、はづみを喰つて井戸端までよろけて行き、やつと井戸側にからだを支へる

保根は、裸足のまゝ、之に追ひつき、また續けざまに擲る。野見は、默つて擲られてゐる。

保根。貴樣には、おれたちの苦みが見えないか。馬鹿！ 野良犬！ 蛆虫！

野見。（痛むところを、いちいち抑へながら）百圓のうち、八十圓は持つて歸るつもりだつたんだ。

保根。金の爲なんぞ問題ぢやない。貴樣の性根が問題だ。

野見。しかし、やつぱり、金を使つちまつたのが悪いんだらう。

保根。馬鹿！ これだけ云つてもわからんか。（また、飛びかゝる）

保根は、野見を投げ倒して、その上に馬乘りになり、喉を締める。

もえ子が出て來る。

もえ子。もういゝ加減に宥してておあげよ、ねえ、兄ちやん………。野見さんだつて、一人でなすつたことぢやないんだから………。

保根（相變らず野見の頸を押へ）舌を引込めろ、舌を………。頸を締められて舌を出す奴があるか。畜生ッ！ かうしたら、どうする。（片手で頸を締め、片手で頭を抱へて、前に曲げる）

もえ子は、此の樣子を見て、事面倒と思つたか、急いで隣りへ駈けつける。

やがて、もえ子の聲で――「丸地さん、丸地さん、一寸いらしつて下さい。大變です。」といふのが聞える。

もえ子の後に續いて、丸地が、恐る恐る現はれる。

丸地。（遠くから）保根さん、それやいかん、それや亂暴だ。みんな、これや、わたしが悪い。野見君に罪はないんだ。此の通り、わたしがあやまる。保根さん、氣を鎭めて………。

保根は、丸地の聲を聞きつけて、手を緩める。此の隙に乘じて、野見が、起き上らうとするのを、保根は、さうさせない。

丸地。事情をお話しゝます。兎に角、野見君を放してやつて下さい。その格好ぢや可哀想です。丸で小犬がぢやれてるやうだ。(そつと保根に近づき)さあ、さ、あんたもそんなに弱いものいぢめをしないで……。起つて下さい。野見君、起き上る拍子に、保根さんの脚に絡みついたりなんかしちやいかんよ。

保根は、しかたなく、野見を放して起ち上る。野見は、その場に坐つてしまふ。

丸地。おい、また醉つてるのか。しつかりしろ、野見君……。

野見。くたびれた。おれは……。

丸地。なんだ、鼻血を出してるぢやないか。さ、これで拭け(袂からハンケチを出して渡す)

もえ子。待つてらつしやい、今、綿をもつて來てあげるから……。(家の中にはいる)

何時の間にか、くみが來てゐる。

くみ。保根さん、ほんとうに申譯ございません。野見さんも野見さんですけれど、うちの人はうちの人です。他の人こそ、どんな目に遭はされたつてかまやしません。

丸地。いや、お前はさういふが……ねえ、保根さん、わたしも、たしかに惡い。しかし、こればかりは、時のはづみといふもので、遊んだもんでないとわからない。醉つてるから云ふんぢやないが、金といふものは、使ふとなくなる。當り前のことです。わたしはね、お話をするとからだ。

もえ子が、綿をもつて出て來る。それを少しづゝ丸めて野見に渡す。野見は、そいつを鼻の孔につめる。

丸地。さうさう。さうして置けば、ぢきに止る。「これだけあると、一寸飲めるね」——さう云ひ出したのは、なるほどわたしだ。「半分だけぢやつまりませんがね」——野見君がかう切り出したのが事の起りなんです。「よろしい、五十圓、面白く遊ばせて見せる」——乗りつけたのは、嘘ぢやない、神樂坂です。

野見。おれが、あぶないから止せといふのに、先生、大盡風を吹かすんだ。

丸地。商賣を知られてるから、しかたがない。

野見。おれや、あんまり面白くなかつたよ。

丸地。贅澤を云ひなさんな。くみつつまんない話はよして、みんな、もうやすまうぢやありませんか。こんなところで立ち話をしてちや風邪を引きますよ。

丸地。それから先は、たしかに、わたしの誤算だ。それもね……。

野見。おい、餘計なことを喋舌ると、承知しないぞ。

丸地。さういふわけで、重々、わたしからお詫びを入れますから、保根さん、どうぞ、今夜のところは、大目に見て下さい。その代り、この埋め合せは、なにかで、きつとします。野見君、君も保根さんにあやまれ。

野見。おれは、さつき、あやまつた。これ以上あやまる必要はない。それより、保根の方でも、おれにあやまるべきだ。

保根。なにをツ！

丸地。まあ、まあ……。野見君、今、そんなことを云ひ出しちや、納りがつかない。

野見。うゝん、あやまらなけれや、歸つてやらないよ。誰が歸るもんか。おれのやつたことは、たとへ惡いにしても、三ツぐらゐ擲れば澤山な筈だ。それを、幾つ擲つた。よく勘定はしてなかつたけれど、憶えてるだけでも十以上だ。その上、頸を締めやがつた。頸を締めるといふのは、人間の呼吸の根を止めることだ。殺人未遂だ。おれは、あいつから、殺される覺えはない。これでも親友だ。畜生ツ！　破落戸！　暴力團！　鬼熊！

保根。よしツ、云つたな。

丸地が制するひまもなく、再び、取組合が初まる。が、忽ち、野見は、保根の腕力に屈服して、無抵抗の狀態に陷る。

保根は、悠々と起ち上り、微笑をさへ浮べながら、足下に横はつた野見の姿に、優勝者の一瞥を投げかける。

丸地。これや、どうもいかん、かうして置いちや……。奧さん、どうか弟さんを連れてつて下さい。わたしは、今夜だけ野見君をお預りします。こら、死んだ眞似なんかしてないで、早く立て。

丸地は、かう云ひながら、そこに倒れたまゝ動かうとしない野見の襟頸を引つ張る。

三

丸地の家の茶の間――炬燵が作つてある。正午近い朝食のあと。

丸地は、膳に向つたまゝ楊子を使つてゐる。

くみは、膳の上のものを片づけてゐる。野見は、赤、紫、黒、濃淡さまざまの痣を顔一面に殘し、咥へ楊子で、炬燵にあたり、仔細らしく新聞を讀んでゐる。

野見。久し振りで新聞を讀むと、世の中が丸で變つたやうだ。

丸地。君の支那語は、北で通用するのか、南で通用するのか。

野見。どつちでもしないね。第一、學校でやる支那語なんか、てんで眼中に置いてなかつた。

丸地。なにを眼中に置いてた、それぢや。

野見。はじめは、馬賊になるつもりで、滿洲と蒙古の地理を研究したよ。

丸地。それから、しまひには……？

野見。しまひには、新聞記者になるつもりで、支那の社會事情、政治經濟の方向に手をつけた。

丸地。保根つていふ人は、あれや、學校の成績はよかつたのかい。

野見。中學ぢや、おれの方が上だつた。それから先は知らない。あいつは勉强家だよ。

丸地。海外通信社つていふのをどうして首になつたんだらう。

野見。あんまり眞面目で、融通が利かないからさ。毎日來る通信を、わからないところがあるたんびに、わざわざ學校で習つた教師のところへ訊きに行くつていふんだからね。事務が捗る氣遣ひはないよ。

丸地。惜しいもんだね。使ひやうによつちや使へる人だらうにな。

野見。それやさうさ。もうちつと英語でもできれば、中學の教師ぐらゐやれるし、あれで少しお愛想でも云へれば、商館の番頭にだつてなれるしね。なにをやらせても、どつか足りないつていふだけさ。

丸地。お前さんはどうだい。

野見。おれは、その反對さ。なにをやつても、少しづゝ、餘計なところがある。

丸地。それも困つたもんだね。

野見。小父さん、碁は打てるのかい。

丸地。碁なら、一寸、此の邊に相手になる奴はなからう。

野見。へえ、ほんとか、それや……。そいつあ、うまい。毎日かうしてゝも、お互、退屈だからね。

くみが手を拭きながら台所から出て來る。

くみ。（丸地に）ねえ、ちよつと……野見さん、かうしてらしつてもなんだから、早く、あんたが附いてつて、保根さんと仲直りをさせてあげたらいゝぢやありませんか。

野見。いや、僕は、仲直りはしませんよ。こつちがすると云つたつて、向うぢや聽き入れつこありませんよ。

くみ。そんなこと云つてゝ、あんた……。

野見。いゝえ、いゝから、ほうつといて下さい。僕にも考へがあるんだから……。

丸地。まあ、さう急がないだつていゝやな。

くみ。こんなことつていふものは、時機を取り逃すと、まづくなるもんですからね。昨夜の今朝なら、一番、切り出し易うござんすよ。

野見。僕も、昨夜は、醉つたまぎれに、いろんなことを云ひましたが、なんと云つても、わるいのはこつちなんだから、向うから寛すと云つて來るまで、おとなしく辛棒してませう。

くみ。でも、そんなこと云つてらつしやると、だんだん歸り惡くなるばかりですよ。

野見。なに、かうして隣りにゐるんだから、しよつちゆう顔を突き合はせなきやならず、自然、どつちからも近づいて行くつてことになりますよ。それに、僕は、どつちにゐたつて、おんなじなんだから、かまやしませんよ。どうせ不自由には馴れてゐるし、別にかまつて下さらなくつたつていゝですよ……。

くみ。それや、無論、おかまひはできませんけどね。うちも此の通り狹いんだし……。

野見。向うよりや廣いでせう、これでも……。

丸地。さう、離れの四疊半だけ廣いわけだな。

野見。そいつを僕の部屋にすれや、なんでもない。荷物は行李一つです。四疊半で澤山ですとも……。

くみ。でも、あの部屋には道具がいつぱい置いてあるから……。

野見。なに、寝るだけの場所があれば、晝間は、此處にゐたつていゝんだし、客なんか滅多にないですから、御心配いりませんよ。僕、煮た魚は、あんまり好きませんから、それだけ云つときます。それと、ぜんまい、いゝ、ひじき、あゝいふものは一切、食ひません。保根のとこぢや、二人とも、あればかり食つてますよ。

くみ。野見さん、あんたを家へお置きするつてことは、だあれも云やしませんよ。

野見。だつても、現にかう置いてるぢやありませんか。

くみ。(丸地に)あんた、さういふつもりぢやないんでせう。

丸地。うむ……。まあ、そんなことは、今、きめないだつていゝさ。とにかく、保根さんの方と諒解さへつけば、どうにでもなる。

くみ。わたしや、昨夜だけ、お泊めしたんですからね。あゝいふことがあつた後だからと思つて、いやな顏もしずにゐたんですよ。あんたもあんたぢやありませんか。ちつとはうちの事情も考へて御覽なさい

丸地。だから、なにも、さうときめてやしないぢやないか。保根さんの方との……。

くみ。保根さん保根さんつて、此の方は、保根さんのところばかりが、いらつしやるところぢやないでせう。

野見。僕のことですか。僕は、どこへだつて行きますよ、行くところさへ出來れば……。その代り、行くところのない間は、今ゐるところにゐるといふのが、僕の方針です。

くみ。方針だかなんだか知りませんが、さういふ方針は、一つ、變へて頂きませうかね。わたしたちは、人樣をお世話するだけの餘猶はないんですから……。

野見。そいつは、僕にもない。

丸地。おくみ、さうだあ、ごみごみいふなよ。お前の云つたことぢやないといふかも知れんが、昨夜は、大變、御馳走になつてるんだ。それに、わしとしても、今、更めて保根さんに合はす顏はない。家賃のこともあるにはあるが、それとこれとは一緒にならん。たとへ、家賃をいくらか負けてあげると云つても、わしのやつたことを償ふわけにやいかん。そこを一つ、考へてくれ。當分、野見君の面倒を見るのは、こいつ、保根さんに對する私の義理だ。そこでだ、今度は野見君、家內の云ふことも無理はないのだ。昨日もお聞きの通り、わしたちの手許は、目下不如意を通り越してゐる。君も一つ、奮發して、早く仕事を見つけて下さい。食費だけ拂つてくれゝば、君ならいくらでもお世話をする。君は、實際、快男兒だ。その意氣を押し通し給へ、必ずものになる。

野見。小母さん、僕で出來ることなら、なんでも用を云ひつけて下さい。御勝手と、針仕事と、家の掃除と、あゝ、それと、八百屋のお使ひとを除いたら、大槪のことはやりますよ。小父さんのやるくらゐのことはやりますよ。こんな人はゐなくつたつていゝんだ。あ、表が開いたやうですよ。僕、出て見ませうか。(から云ひたがら、玄關に出る)

間。

丸地。どうだい、可愛い男だらう。

くみ。これから先どうなるか、あたしや、知りませんよ。

丸地。さう捨鉢になるなよ。何が誰のためだかわかるもんぢやない。

やがて、野見が先に立ち、若い女を案内して現はれる。
丸地とくみとは驚いて顔を見合はす。

野見。(いくらか照れて)この人、今、僕を尋ねて、保根の家へ行つたんですつて……。さうして、此處を教へられて來たんですよ。(女が坐つてお辭儀をする、それを見て)あ、これ留奈子さん又は留奈ちやんと云つて……、君、姓は何と云ふんだつけな、まあいゝや……僕の友達です。そんなにしてないでもいゝよ。こつちへはいり給へ。炬燵があるぜ。寒いのに、よく來たね。さ、手を出さない?

丸地とくみは、あつけに取られながら、それでも、座を外さうとする。

野見。小父さんと小母さんは、座敷が寒けれや、僕の部屋へ行つてるといゝや。

留奈子。(二人が去つた後)どうして、あんなに、人をぢろぢろ見てんの。

野見。僕んとこへ、女のひとなんか訪ねて來たのは初めてだからさ。

留奈子。あら、あんな嘘云つて……。

野見。向うの家でなんか云つたかい。

留奈子。あれ、お神さんか知ら……はじめ、どういふ用で來たかなんて訊くのよ。あたし、あゝいふ風に訊かれんの、嫌ひさ。

野見。そいで、なんて云つた。

留奈子。默つてたら、此處教へたのよ。昨夜から、こつちへ引越したんですつて……?

野見。僕の顔、變つてやしないかい。

留奈子。えゝ、さつきからさう思つてたけど、わるいから云はなかつた。どうしてそんなんなつたの。

野見。喧嘩したんだ。

留奈子。擲られたのね。

野見。擲らしてやつたのさ。

留奈子。あら、隨分慈善家ね。どういふ人に……。

野見。親友にだよ。その男は、今頃、後悔してるさ。だが、その時

は、さうするより外に解決の方法がなかつたんだ。當分、お互に顏を反向け合ふだらうが、どこかで、氣持が通じ合つてるに違ひない。どつちも、相手のために、なにかしらしてやつたといふひそかな悦びを感じてゐる。つまり、そこが親友の親友たるところさ。

留奈子。なんて、擲られりや、やつぱり痛いでせう。馬鹿馬鹿しいわ。時に、あんたに、少し、御相談があつて來たのよ。

野見。金か。

留奈子。あたつた。どう、少し都合つかない。

野見。昨日だとよかつたんだがなあ。百圓ばかり餘分な金があつたんだ。

留奈子。それが今日はどうしてないの。

野見。野暮なことを訊くなよ、留奈ちやんらしくもない。いくらいるんだい。

留奈子。うゝん、いくらでもいゝの。友達に貸してやるんだから……

……。

野見。君の友達に貸してやる金なんか、おれは用意してないよ。

留奈子。だつて、なくつちや困るのよ。是非つて云はれたんだから…

………。二十圓でも三十圓でもいゝわ。

野見。ない。今日はない。

留奈子。あんたたちの大丈夫だと思つて來たんだわ。

野見。昔のことだ。今は違ふ。

留奈子。そいぢや、もう一つ、こつちはあんたの悦ぶ話なんだけど、云つてあげないわよ。

野見。そつちを先へ云へばよかつた。あとからなら聞きたくない。聞いても無駄だ。

留奈子。怒つたの。

野見。………。

留奈子。怒つたつて、怖くないから………。よう、貸して頂戴よ。貸さないと動かないから………。

野見。動くな。

留奈子。ずつと此處にゐてもいゝ?

野見。いゝ。

留奈子。あんたの部屋、何處………?

野見。あとで、見せてやる。

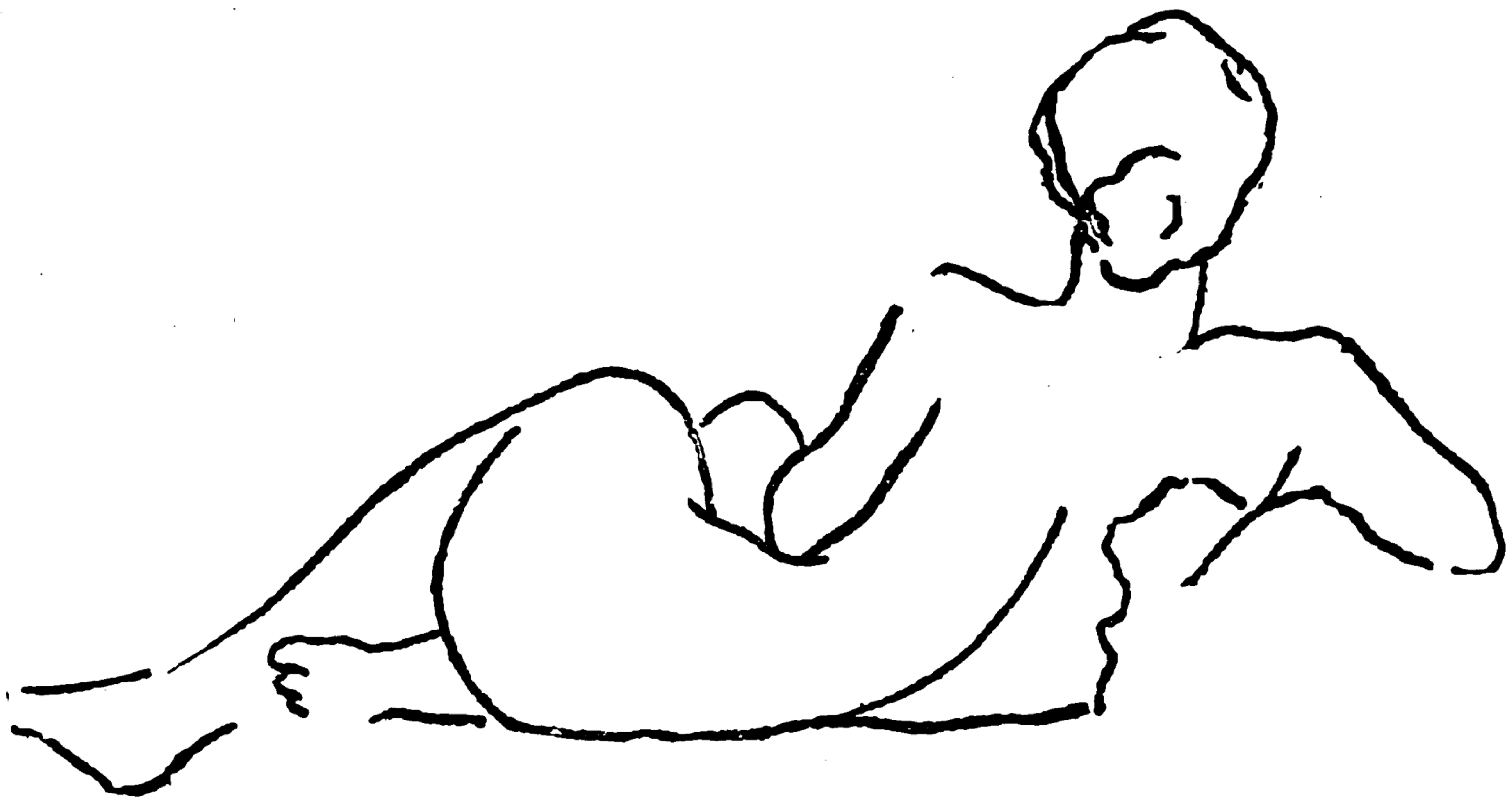
留奈子。ほんとね。おや、荷物持つて來てもいゝ? すぐそこだから………。

野見。どこだ?

留奈子。そこの煙草屋へ預けて來たの。

野見。前の家はやめたのか。
留奈子。あたしぢや、ハイカラすぎるつていふんだわ。
野見。早く行つて來い。
留奈子。序に郵便局へ寄つて來るわよ。
野見。なにしに………。
留奈子。電報打ちに………。
野見。何處へ………。
留奈子。國へ歸る筈だつたの。
野見。よし。煙草も買つて來い。
留奈子。バットね。
野見。バットだ。

留奈子は、いそいそと出て行く。
隣から、もえ子の歌ふらしい歌が聞えて來る。「埴生の宿」である。
野見は緣側に出て、しばらく、耳を傾けてゐる。が、やがて、自分もそれに合せて、「長閑かなりや、わが宿」と、やゝ調子外れな聲で歌ひ出す。



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その十一

「なあ奥樣、今夜のことはさぞかしお腹立ちですやろけど、どうぞどうぞお願ひします。」さう云うて男は又ぺたぺたッと疊へ頭を擦りつけて、「僕の一身はどないなつても構ひません、どうぞ光子さんを無事に送つたげて下さい、御恩は一生忘れませんから」云うてしまひには掌を合はせて拜むんです。わたし云うたらそらもうほんまにお人好しですよつて、そないされてしもたら何ぼあんまりや思ても「イヤや」云ふ譯に行けしません。それでも口惜しさが一杯でしたよつて、暫くの間男がペコペコお時儀するのんをじいッと默つて睨みつめてましたけど、とうとう根負けしてしもて、たッた一と言「よろしいです」云うてしまひました。すると男は「ああ」とさもさも感激の籠つたやうな芝居じみた聲を出して、もう一ぺん頭を擦りつけて、「ああ、承知して下さいますか、ほんとに有りがとございます、これで僕も實に安心です」云うて、それから人の顏色を窺ふやうにしながら、「そしたら唯今ここへ光子さんを呼びますけど、それについても一つお願ひして置きたいのは、今夜のところはいろいろのことでえらい興奮してはりますので、どう

の線まで出る路が又えらい淋しいて、片ツぽ側が大きな松のたあんと生えてる土手ですよつて、あんなとこを女三人で歩ける筈あれしません。そんで綿貫はちよつとでも長いこと光子さんと一緒にゐたいのんで、自働車を降りてからあの路を送つて來たいのです。それにしても「船場の德光さんの寮所にをります」云うてたのんにそんな橋の名やあの邊の路を知つてる云ふのは、もう今迄に何遍も二人で此處ら邊を散歩したことがあるからなんで、さう云うたらあの松林の中なんぞで何をしてたことがあるやら分れしません。私よつぽど「誰に見られても男の人が附いて來るのんが一番わるい、三人だけやつたらどないでも言ひ譯立つよつて、あんたええ加減に歸んなさい。私に預ける云うときながら、あんた歸つてくれはれへんねんやつたら私歸ります」云うてやろか知らん思たんですが、お梅どんの方は「それがよろしおまんなあ」「さうしまよなあ」と何でも彼んでも綿貫の云ふことに調子を合はせて、「そんならお氣の毒ですけど、阪急のとこまで送つて頂けまツしやろか」と、知つて男の思ふ壺へ嵌まつて行くのです。考へてみるとお梅どんかつてやつぱり光子さんや綿貫とぐるになつてたん違ひないのんで、やがて橋のとこで車を降りて土手の下の眞つ暗な路へかかりますと、「なあ奧樣、こんな闇夜に男の人ゐてくれはれしまへなんだら、恐うて歩かれしまへんなあ」と、用もないのんに私を摑まへて、此なひだ此の路で何處其處のとうちやんがこんな目に遭ひはつた云ふやうな話を休みなしにしかけて、なるだけあとの二人より離れて歩くやうにするんです。二人は五六間うしろの方からまだ何や知らん相談しながら來るらしいて、「ふん」とか「はあ」とか云ふ光子さんの聲がかすかに聞えてるのんでした。

停留所の前で男が歸つてしまひますと、又三人は默り込んで、あそこから俥で光子さんの家まで行きました。「まあ、まあ、ほんまに、何でこないにおそおましてん」云ひながらお母樣が出て來なさつて、「いつもいつもお邪魔に上りまして御厄介になりますばつかりで」と、えらい私に氣の毒がつていろいろお禮云ひなさるんですが、此方は私も光子さんもけつたいな顏してますのんで、長いことしやべつてたらぼろが出る思て、自働車呼びませう云うてくれはりますのんを「いいえ、俥待たしたあります」と逃げるやうに出て來まして、又阪急で夙川まで後戻りして、あそこからタキシーで香櫨園まで歸つて來ましたら、ちやうど十二時になつてました。「お歸りやす」云うて玄關へ出て來た女子衆に「旦那はんどないした？　もう寢やはつたか？」云ひますと、「ついさつきンまで起きてゐやはりましたけど、もうちよつと前お休みになりはりました」云ひますのんで、まあよかつた、なんにも知らんと寢ててくれたらええ思ひながら、出來るだけそうツとドーア

たんで、出てからちよつと階下の食堂へ行きましてん。えらいおそなりましたよつて此れから光子さんを送つて行きます」云ひますと、お母様が出て來なさつて「まあ、さうでおまッか、あんまり歸りがおそいのんでたつた今お宅様へお電話したとこでしてんわ」云ひなさる様子が、警察からなんにも云うて來てエへんことは確かでした。そんでそんたらええ鹽梅や、一刻も早自動車で歸ろ云ふことになつたんですが、男は三十圓のうちの半分ばつかり殘つたんをみんなそこの男衆や女子衆にやつてしもて、どんな事があつても決して迷惑のかからんやうにして欲しい、その筋から此れ此れ云ふ取り調べがあつたら此れ此れ云ふやうに云へ云ふたりして、そないな時にもそらもうびつくりするほど細かい所へ氣が廻るのんです。それからやうやう、——私がそこへ着きましたんが十時ちよつと過ぎた時分で、一時間ばつかりぐずぐずしてしまひましたよつて、出たんは十一時過ぎでしたやらう。その時やつとお梅どんを待たしたあッたんを思ひ出して、「お梅どんお梅どん」云うて、ろうかを往つたり來たりしてるのんを車へ乘せたのはよろしいが、「僕も其處まで送りませう」云ひながら、男も平氣でその車へ乘り込んで附いて來るんです。

光子さんと私とが奧の方へ並んで、お梅どんと綿貫とがスペアシートへ腰かけて、四人がむうッと向ひ合うたなり一と言も口をきかんと、車はどんどん走つて行きました。武庫の大橋へかかつたときに私が始めて、「どないします？　やつぱし電車で歸つたやうにせんと工合わるいと思ひますが、……」と、ふつと考へついたやうに誰に云ふともなう云ひ出して、「なあ、光子さん、何處で自動車返したらええか知らん？」云ふのんでした。それが光子さんの家云ふのんは蘆屋川の停留所から川の西をもつと山の方へ行つて、あそこに汐見櫻云ふ名高い櫻があるついその近所なんでして、電車筋からほんの五六丁ですねんけど、途中に淋しい松原などがあるのんで、よく追ひ剝ぎやの強姦やのがあつたりしてえらい物騷ですよつて、いッつも晩おそう歸るときにはお梅どんが附いてるときでも停留所の前から俥に乘つて行きますさかい、あそこまで自動車を着けたらええ云うたり、いや、そらいかん、俥屋が顏を知つてるよつて何處ぞもつと手前の方で降りた方がええ云うたり、そんなことから私もお梅どんもぼつぼつ口を利き出しましたけど、それでも光子さんだけはやつぱり一と言も云ひなさらんと、ときどきさし向ひに腰かけしてる綿貫の方をジーッと見つめては、何やひそひそ眼で物を云うて溜め息してなさるやうなんです。すると男が「ふん、そんなら阪神國道の業平橋のとこで降りたらよろしいがな」と、同じやうに光子さんの顏を見返しながらさう云ひ出した云ふのんは、私にはよう分つてるんですが、あの橋のとこから阪急



運命のたわむれ（四幕）

武者小路　實篤

登場人物

A、B、C、D、E、F、G、X、女、

「時はすぎゆき
人は白骨になる、」

「或るものに何か。」

第一幕

A。誰だ。
B。私だ。
A。何處から來た。
B。下から來た。
A。何しに來た。
B。お前と話がしたくなつたからだ。
A。其處に坐つたらいゝだらう。
B。ありがたう。
A。話とはなんだ。
B。君はもうぢき死ぬといふことを知らせに來たのだ。
A。僕が死ぬ。
B。さうだ、君が死ぬのだ。
A。[illegible]
B。[illegible]
A。[illegible]

B。僕達がさう云ふ決定をしたのだ。僕達は三日たつ内に君を[illegible]と云ふね。
A。それは面白い。[illegible]
[illegible]

B。[illegible]
A。[illegible]
B。[illegible]
A。[illegible]



運命のたわむれ（四幕）

武者小路　實篤

登場人物

A、
B、
C、
D、
E、
F、
G、
X、
女、

「時はすぎゆき
人は白骨になる、

「賣るものは何か。」

第一幕

A。誰だ。

B。私だ。

A。何處から來た。

B。下から來た。

A。何しに來た。

B。お前と話がしたくなつたからだ。

A。其處に坐つたらいゝだらう。

B。ありがたう。

A。話とはなんだ。

B。君はもうぢき死ぬと云ふことを知らせに來たのだ。

A。僕が死ぬ。

B。さうだ、君が死ぬのだ。

A。人間は誰だつてもうぢき死ぬよ。

B。君は四十で死ぬのだ。もうあと、三日で死ぬのだ。

A。そんな馬鹿なことがあるか。

B。僕達がさう云ふ約束をしたのだ。僕達は三日たつ内に君を殺すと云ふね。

A。それは面白い、殺してもらはう。僕はもうそろ／＼殺されてもいゝと思つてゐるのだ。僕の今迄して來た仕事は僕が殺されることで輝き出すだらう。僕のやうな人間は殺される方がいゝのだと思つてゐる。僕はこの世にはもう生きてゐる興味がなくなつた。だが自殺するのはいやだ。殺してもらへればこんなありがたいことはない。僕は生きておいぼれるよりは、死んで生きる方が好きさ。それに、この世に生きる興味ももうそろ／＼なくなつて來た。何も未練なんかない。僕はもう殺されてもいゝ齡だ。それはありがたい、よろしく云つてくれ。

B。まけ惜みにそんなことを云つてゐるのだらう。何と云つたつて、三日の中には君は殺されるのだからさう思ふがいゝ。

A。今殺してくれたらどうだ。君はこの世に生きてゐたいかね。この世に何か未練があるのかね。僕なんかないね。

B。本當かい。

A。本當とも。僕だつて三年前までは死ぬことは絕對に嫌ひだつたがね。この頃にいゝわけさへたてば死ぬ方がらくだと思つて來たよ。命がなくつて生きてゐるのは厄介だね。命をとることは考へてもい

やだ。それより死んだ方がいゝ。それも殺されるのは理想的だ。大いに感謝するよ。

B。(ピストルを出す)。それなら殺してやらうか。

A。あゝ殺してくれ玉へ。君と心中するのは少しそんだが、しかし一人で死ぬよりはいゝ、話相手がある方が死んでからも退屈しなくつていゝだらう。

(戸をたゝくものがある)

A。一寸まつてくれ。

B。それぢや又くるよ。

A。さうか。切角の時に邪魔が來て、殘念したね。だがいつでもやつて來玉へ。

B。(獨白)本當にこいつは死にたいのかな。

(B退場、C登場)

C。君、僕は大へんなことをきいたのだ。

A。なんだ。

C。君を近日の內に殺さうとたくらんでゐる人間がゐるさうだ。

A。さうかい。それもいゝだらう。僕は生てゐるのに興味が段々なくなつて來た。勿論積極的に死にたいとは思はないが、生きたいとも思はない。そんなことはどつちだつて大したことはないと思ふよ。

C。さうかね。僕は今死んぢやたまらないと思ふね。僕はともかく生きてゐたいね。

A。さうかね。生て何か面白いことがあるか。少くも死ぬ方が樂だね。僕はさう思ふね。

C。いつ頃からそんな考へになつたのだ。

A。二三年前からそんな氣になつて來た。僕も人生の峠はすぎて來たらしい。もういつおちつく所へおちついてもいゝと云ふ氣になつてゐるよ。

C。それなら本當に殺されてもいゝのかい。

A。いゝね。僕はむしろそれも望んでゐる。

C。僕にはそんな氣持は想像が出來ない。

A。それは君は呑氣に生てゆかれるし。

C。君だつて別に生活が苦しいわけでもあるまい。

A。處がさうぢやない。僕は借金がふへる許りで、金をとる仕事がます〳〵いやになつて來たのだ。それと同時に、人間は別に生てゐる必要もないものだと云ふ氣がさかんにするやうになつて來た。

C。本當かね。

A。本當だよ。

C。生てゐるのが苦しいのか。

A。苦しいと云ふ程でもないが、ともかく生てゐることに興味はなくなつて來た。それより、死んでしまうあとの平和がなんだか自分をひきつけるよ。

C。だが僕は殺されるのはいやだね。

A。所が僕は殺されるのがすきだよ。ともかく僕のやうな仕事をしてゐるものは殺される方がいゝのだ。病氣で死んだり、自殺したりするよりはね。その方が僕の思想が生きるのだ。自分の主義に忠實だつたから殺されたとなればね。僕が生てゐては出來ない仕事を僕の死がしてくれるのだ。

C。君は隨分虚榮心が強いね。死んでまで、そんなに自分の名譽のことを考へるのかね。

A。名譽なんか大したものとは思はない。それより僕は僕の仕事を愛する。僕の生命を僕は自分の仕事に捧げてゐる。そして僕の仕事は又人間の生命を主にしてゐる。僕の主人は僕ぢやなくつて、人間なのだ。人類なのだ。だから僕は死んでも自分の仕事がものになれば、それで僕はうれしいのだよ。

C。君の仕事なんか、不滅なものぢやないよ。

A。さうかも知れない。それで僕は結構だよ。人類の犠牲として死ぬことが出來ればね。

C。それは單なる空想だ。

A。事實だよ。之以上の事實はない。

C。君はそれなら最近に死ぬわけなのか。

A。まあそんな所だね。三日たつと殺されるわけださうだ。

C。それで君は平氣なのか。

A。御らんの通りさ。

C。君と云ふ人間は不思議な人間だね。

A。矢張り本能の仕業さ。死にたくないのも本能ならば、死にたくなるのも本能だよ。それ以外のものぢやない。

C。君は本能論者かい。

A。まあさうだね。人間は本能に支配されて生てゐるものだよ。飯を食ふのもねるのも本能以外ぢやない。考へるのも本能以外ではない。君は本能以外に出られるか。

C。人間には理性がある。

A。それは多くの本能の調和をつかさどるだけのものぢやないか。

C。死にたいと云ふのはどうもへんな本能だね。病氣な本能だね。

A。まあ君も四十になつて見ると、少しはわかるだらうよ。

C。僕だつてもう三十六だよ。しかし死にたいとは少しも思はないね。

A。さうかね。それに君が偉いか、馬鹿か、どつちかだからだらう。僕は君程偉くもなく、君程馬鹿でもないからね。

C。ともかく僕は殺されるのはいやだよ。

A。へんな奴だな。

C。どつちがへんなのだ。それぢや失禮するよ。

A。まあ僕の死ぬのを祝つてゐてほしいね。僕は死んで生きて見せるからね。僕の死後の仕事を見てもらいたいね。

C。さう思へる君は仕合せものさ、それでは失禮するよ。

A。失敬。僕が死んだら君を迎へに來てやらうか。

C。澤山だよ。

A。僕が死んで一年の内に君は死ぬよ。

C。そんなことは云はないでほしいね。

A。だが事實だよ。いかにいやでも死ぬ時は人間は死ぬより仕方がないものさ。

C。さよなら。

A。あとからやつて來給へ。

（C、Aにへんな顔して睨まれ、身ぶるひして去る）

A。ざまあ見ろ。さかさまにおどしてやつた。（西洋將棋を持ち出して、やつて見、腕を鳴す）あはゝゝ。俺は矢張り死にたくはないのだな。

（D登場）

D。A！

A。何んだ。

D。面白いことはあるか。

A。俺の顔を見ろ。

D。少し青ざめてゐる。

A。さう見へるか。

D。どうかしたのか。

A。いや別に、一つ西洋將棋をやらないか

D。やつてもいゝ。今日はまけないぞ。

A。僕だつて今日はまけないよ。

（二人やり出す）

D。君のお父さんは強かつたのかい。

A。なに強かないよ。あまり好きでもなかつた。子供のおもちやのつもりで買つて來たのだ。

D。しかしお父さんと君はやつたことにあるのだらう。

A。それはやつたことはあるさ。だが僕の十四の時死んだのだからよくは覺えてゐないが勝つたり負けたりだつたと思ふね。

D。それに君はアメを愛してゐたのだらう。

A。それはさうかも知れない。父は花をいぢることが好きだつた。この趣味は中々よく出來てゐるだらう。

D。本當によく出來てゐるね。君の番だよ。君は今日は少しぼんやりしてゐるね。何かあつたのか。

A。なに大したことぢやないのだ。たゞ僕をおどかす奴が來たゞけさ。

[illegible]

D。負け惜みかい。

A。さう誤りでもない。實際この頃死ぬことは別に大したことではないやうに思はれて來たのだ。そして僕が生てゐては出來ないことが、死ねば出來るとも思つてゐるのだ。少くも自説のために殺されゝばね。しかしそれは又方便でもあつたのだ。さう云へば僕がおどろくと思つてゐるのがおかしかつたからおどろかないことをはつ切り示[illegible]したやうだ[illegible]

[illegible]

ふことにな[illegible]

A。勿論僕は好んで死なうとは云はないよ。だが死ぬことを恐れるの[illegible]

正直な處、僕はどつちだつていゝのだ。この頃、自分が生てゐなければならないとはあまり考へなくなつてゐる。生てゐるのも死ぬのも同じだと思つてゐる。生悟りかも知れないがね。人間の一生と云ふものはどつちにころんでも大したものぢやない、大事なのは自説をまげないことだけだ。自分の信じてゐる通りを行ふことだけだ。あとは他愛ないものだ。

D。本當にさう思つてゐるのかい

A。あとは一時の迷ひだよ。馬鹿には出來ないがね。人類をつらぬいて働くものは、自分の確信通り生ると云ふことだけだね。他は一時的の現象だ。それも馬鹿には出來ないがね。

D。君はそれで本當に殺されると思つてゐるのかい。

A。殺されるとは思つてゐないよ。だが殺されないとも思つてゐない。人間はいつだつて死ねるものだし、いつだつて殺され得るものだ。ピストル强盗でも入つて來れば、僕なんかも簡單に殺されるね。

D。しかし人間て、中々死なないものだと思ふね。

A。思ひやうによるよ。何年逢はないでも生てゐる人が多いが、しかし昨日元氣だつた人が、今日もう死んでゐると云ふこともいくらでもある。

D。それはあたりまいのことさ。

A。一寸待てよ。こゝで亂暴すると負けるからね。

D。矢張り負けたくないか。

A。それは勝つ方がいゝね。君だつてさうだらう。

D。それはさうだ。

A。どうだい。之でかつたわけだね。

D。まあ、今日は負けておいてやらう。僕は君を殺したくはないよ。どうしても。

A。ありがたう。

D。僕は何とかいゝ方法を考へやうと思ふ。Eの處ね。あすこに逃げたらどうだ。

A。あすこなら大丈夫だらうね。

D。それは大丈夫と思ふね。

A。しかしEが迷惑するだらう。

D。そんなことがあるものか。よろこんで君を迎へるよ。それにEの處なら靜かで、勉强も出來る。そして、君の逢ひたい人なら誰でも出入りが自由に出來る。そして君の逢ひたくない人は皆拒絶してしまうことが出來る。Eの處へ當分引こむといゝと思ふね。僕は之からEの處へ行つてくるよ。

A、僕はなんでもないと思ふよ。

D。だが形成する方がいゝよ。唯一のことがあつては馬鹿氣てゐる。

A。生てゐることも馬鹿氣てゐると思ふね。

D。そんなことを云つてゐては限りがないその内に又いゝことがあるさ。

A。僕はもう信じないよ。いゝことなんか。

D。それは君のやうな目に逢つたものには無理はないさ。しかしその内どんなことが起るかわからないよ。

A。もういゝことなんかに逢ひたくない。僕は今の自分の生活をわるいとは思つてゐないよ。そして死ぬことも生きることも悪いことゝは思つてゐないよ。どうせ人間は皆死んでゆくのだ。いくら働いても、いくらもがいても。

D。そんなことはわかつてゐるよ。だが君だつて正直な所、死にたかないのだらう。

A。死にたくないとは云ひたくないね。僕の妻も、僕のたつた一人の男の子も死にたくはなかつたらしいが、死んでいつた。

D。それは何とも云ひやうがない。しかしだから君が死んでいゝと云ふことはない。

A。勿論僕は好んで死なうとは云はないよ。だが死ぬことを恐れるのはいやなのだ。平氣で死んでゆきたいのだ。よろこんでゞはないが、それと同じやうに僕は死ぬまでは喜んではないが、生きてやらうと思ふのだ。

D。僕にとつて生きてゐることは喜びだがね。

A。さうかね。僕はさう云ふ時代は通りすぎたね。僕は生きてゐることは喜びでも悲しみでもない。どつちでもない。たゞ事實だ、夢のやうな事實だ。僕はこの頃になつてます〳〵人間と云ふものは、生れても生れなくつてもいゝものだと思つてゐる。かうやつて生きてゐる。わるくはない。しかし愉快とも思はない。甘い杯でもにがい杯でもない。

D。それでも君は事實死にたくないのだらう。

A。だが同じやうに事實生てゐたいとも思はないのだ。

D。君の生活はあまりに單調で、あまりに淋しい。

A。しかし僕は之でいろ〳〵のことを知つて來た。今更、女に夢中になる氣もしない。金や名譽や、事業についても、僕は別に望を持たない。何か魔物につかれたやうに夢中で生たり、仕事したり、女で夢中になつたり、酒に醉ぱらつたりしてゐる人を見ても、僕は少しも羨ましいとは思はない。

D。君のあのすぐれた男の子が生てゐたらな。

A。そんなことは僕の人生觀には影響しないさ

D。だが君の内の生命は今のやうな狀態におちこむやうなことはなかつたらう。

A。それはさうかも知れない。だがそんな空想は何にもならない。

D。ともかく僕は君がEの處へ行くことを望むよ。

A。今死んでも始まらないからな。だが生ても始まらない。

D。君の勉强がものになるまでは生てゐてほしいよ。

A。それだつて知れたものさ。眞理の發見、僕はそんなものが他愛ないものだと云ふことを、しみじみ感じてゐる。

D。そんなことを云ふものぢやない。

A。云はないだつて事實はさうだ。

D。其處へゆくとEは隨分君とはちがう考へをもつてゐる。

A。病的な胃腑をもつた人間と、健康な胃腑をもつた人間とは、ものゝ感じ方がちがうのは仕方がない。だがあいつはいつも醉つてゐる男にすぎない。僕は醉へない人間にすぎない。

D。あいつの所へゆくと、僕はいつも人生てこんな陽氣なものかと思ふ。そして君の所へくると人生てこんな陰氣なものかと思ふよ。

A。僕はちつともEを羨ましいとは思はないよ。

D。勿論だ。Eの方が君の方を羨ましがつてゐる。

A。僕を羨ましがつてゐるつて、馬鹿な奴だな。

D。だが君のこの頃の仕事に、Eは實に感心してゐる。君のこの頃の詩は鍛え切つた刃のやうだと云つてゐた。

A。ふん。Eのいひさうなことだよ。それでEは僕を幸福にして、君を錆びた鐵にでもしやうと思つてゐるのだらう。

D。Eはそんな人間ぢやない。

A。あてになるものか。Eのやうな男はね。女王蜂見たやうな奴でね。もう一疋女王蜂が同じ世界にゐることをよろこばないものだよ。

D。だがEの處へゆくといゝと云つたのは僕が考へたことで、Eが考へたことぢやない。

A。それはわかつてゐるよ。だが僕がEの處へ行つたらきつと碌なことはないね。

D。僕はさうは思はない。

A。君には僕達の氣持はわからないよ。君は實に平和な人間さ。君は他人が立派な仕事をすれば、よろこんでそれをほめることが出來る。君は自分より優れたものが居てくれることに、喜びをもてる人間だ。所が恥かしい話だが、僕やEは少し人種が下等に出來てゐる。相手より自分の方が優らないと氣がすまないのだ。

D。それだつて、君とEとは仕事がまるでちがふぢやないか。

A。仕事の價值ぢやない。人間の價值だ。僕にEがむきあつて立つね。そして皆がEにおべつかをつかつて、僕を居候あつかいするとするね。僕はその時、Eを輕蔑しないわけにはゆかないのだ。征服しないわけにはゆかないのだ。

D。それで兩方がます〳〵いゝ仕事をすることになれば、何よりぢやないか。

A。所が中々さう理想的にはゆかないよ。だが僕はまけはしない。Eが少し氣の毒なのだ。

D。Eは氣の大きな奴だよ。

A。自分より優れないものにたいしてはね。

D。それぢや君はEの處へゆかないのか。

A。ゆ〳〵つもりだよ。

D。それでEと競爭するのか。

A。さうでもないが、しかしEが贅澤に幸福にくらしてゐるのを見たら、少しは僕も生る氣になれるかも知れない。負けてはやらないと云ふ氣持でね。馬鹿々々しい氣持だが、今の僕にはそれもわるくないかも知れない。ともかく西洋將棋よりは本氣になれさうだからな。それに勝負が一生ではきまらないのも面白い。

D。それでは僕は之からEの所へたのみに行つて來るよ。

A。さうしてもらはう。少し生てやる氣になつて來た。しかし死ぬのがいやだなぞとは云はないがね。

D。それでは又あとで。

A。Eによろしく。

（D退場。間もなくX登場）

A。何か用があるのかね。

X。別に用はないのだ。

A。默つて何しに入つて來たのだ。

X。一寸君と話したいと思つたのでね。

A。人の室に默つて入るなんて失禮ぢやないか。

X。さうかね。

A。出てもらはう。

X。僕は出ないよ。僕は今日君にあふことを神樣からたのまれたのだ。

A。氣ちがいの聲色はよせ。

X。（怒鳴る）僕は氣ちがいぢやないのだ。

A。それなら出てくれ玉へ。

X。出ない。どうしても出ない。神樣はこの室に僕が入ることを命じ

られたのだ。

A。（氣をかへて）さうかね。神樣はなんておつしやつたのだ。

X。このなかにお前を求めてゐる人があるつておつしやるのだ。

A。それで。

X。僕はその人の魂を救ひに來たのだ。

A。さうかい。しかしこゝには魂の救ひを求めてゐる人は一人もゐない。

X。さう云ふ君の魂を救ひに來たのだぞ。

A。僕は救つてほしくはない。

X。それがいけないのだ。君の魂は死にかけてゐる。僕はそれを救ひに來たのだ。君の顏には死相があらはれてゐる。僕はそれを救ひに來たのだ。君は今東京にゐると命生があぶないぞ。北へゆけ、北へゆけ。

A。行かう、北へ行かう。北へ

X。いつ行くのだ。

A。君の命令通りにするよ。さうすれば生きられるならばね。

X。あすの午後六時の汽車で北へゆけ。

A。承知した。

X。雪の山をこえて、T温泉へゆけ。雪は君の心を平靜にし、湯は君の心をあたゝめるだらう。

A。中々君は道理のわかることを云ふ。

X。神を疑ふと生命がないぞ。

A。神を信じると助かりますかね。

X。それはたすかる。

A。それなら君の云ふ通りしますよ。

X。君でも生命は惜しいのだね。

A。まあ、惜しいことにしておいてもいゝよ。だが僕も君に一つ云つておくことがあるよ。君の顏には死相があらはれてゐることをね。君は南へ、南へ行け。北へゆくと君はピストルの餌食になりさうだよ。君のその額のほくろね。其處を死神がねらうさうだよ。君は生きたくないかい。君は死にたいのかい。生きたいなら、南へ行け、南へ行け、明日の午後六時の汽車でね。は……。

X。君は僕を愚弄してゐるね。

A。いや僕は本當のことを云つてゐるのだよ。北へ僕がゆくとね。僕はあらゆる毛物の内で、最も狡猾で、最もいやしい毛物をピストルでうつことになるのだがね。そのたまがそれて君にあたるといけないからね。雪のなかだと、目がちらつくから丸もそれるかも知れないからね。だから僕は君へ南へゆけと云ふのだ。まさか僕のピストル

ルの丸は百里はとぶまいからね。

X。君の云ふことはちつともわからない。君こそ氣ちがいだ。

A。さうかも知れないね。僕は今日は愉快で仕方がないのだ。君の顔のその額のほくろを見たら、なほ愉快になつたよ。本當に君は僕の魂ばかりでなく肉體をも救つてくれるために身がはりになつてくれる男らしいね。ありがたいね

X。ともかく僕の云ふことをきけば、君の生命は助かるよ。

A。ともかく僕の云ふことをきかないと、君の命は助からないよ。歸るのかい。まあもう少し遊んでいつたらいゝだらう。お茶でもとりよせやう。

X。澤山だ。だが君は本當に死にたいのかね。

A。君が生てゐたい位い、僕は死にたいね。まあ、其處に腰かけたらいゝだらう。僕は君の顔をよく見ておきたい。君のやうな顔はざらにない顔だからね。ともかく珍らしい顔だ。一寸ぢつとしてゐてくれ玉へ、スケッチするからね。

X。君は畫かきか。

A。畫かきぢやないさ。しかしスケッチ位なら出來るよ。

X。僕は君なんかにかいてほしくない。(退場)

A。あは……。

(幕)

第二幕

(幕の前)

B。どうでした。

X。中々喰へない奴だな。

B。矢張り死ぬのはいやなのでせう。

X。さうらしい。

B。旅行しさうですか。

X。しさうもないね。あいつにじつと睨まれたら、いい氣がしなかつた。

B。向ふでもさう云つてゐるでせう。やつけますか。

X。殺したことがわかると面白くない。自殺したやうに見せないと。

B。毒でものましますか。

X。うまくゆくかね。

B。あいつは喰ひ辛抱ですからね。菓子でも送つたらよろこんで食ふでせう。愛讀者からと云つて。

X。しかし矢張り他殺と云ふことがわかる。

B。矢張り崖の上からつきおとすのですね。

X。しかし旅行しなければ仕方がない。

B。何とかうまい方法がありさうなものですね。強盗が殺しにいつたとしたら。

X。あいつの處へ入る強盗もあるまい。

B。往來を歩いてゐる處を、トラックでひき倒したらどうです。あいつはまぬけですから、よけ損つて死んだと云ふことになるでせう。

X。あまりうまい考へぢやないな。あいつのものゝ愛讀者や、崇拜家を出すのは面白くない。

B。しかし知れたものですぜ。

X。捕つかまつても馬鹿氣てゐる。それ程の相手でもない。氣らくに殺せるなら殺してやりたいと思ふ程度だ。

B。今に日本にも殺人國が出來るといゝのですね。そして生かしておくと不愉快な奴を片端から殺してゆくとね。

X。君らしい考だ。だがAの奴はどうするかね。

B。どつちにしろ、殺すことにしませう。あいつはへんに虫のすかない奴です。それに我々を心から輕蔑してゐます。

X。人間を殺す程樂なものはないと思ふが、いざ殺すとなると中々厄介だ。自分が死んでもよければ、こんな簡單なことはないが自分が死ぬのぢや馬鹿げてゐるからね。

B。どうしてもトラックですね。つかまつたつて大したことはありません。

X。君は運轉が出來るのかい。

B。人をしく名人を僕は知つてゐるのです。

X。へんなものを知つてゐるな。しかしその男からばれるといけないよ。

B。僕はそいつの人を殺したことを知つてゐるのです。

X。人殺し同志で仲がいゝのか。

B。人間て一ぺん殺すと又殺したくなるものですよ。兎がりよりはりあいのあるものですよ。

X。困つた奴だな。

B。だがたまには瓢法なこともあるでせう。

X。それではあいつの行動を注意してゐてくれ。

B。承知しました。うまくやつてお目にかけますよ。

X。あいつがトラックにしかれる所を考へると一寸面白いな。

B。まあ、蛙をつぶすやうなものですな。

X　あはゝゝゝ。（退場）

B

（幕とれる。Eの室、ちがう色の幕の前）

E。さうか。さう云ふことだつたら早速僕の處へ來るやうに云つてくれ給へ。

D。すぐ來るやうに云つていゝね。

E。いゝよ。そのはかり、少しもかまわない、飯だけは出すがね。それもあの室で一人で食べてもらはう。勿論出て來たい時はいつでも出て來てもいゝが、しかし僕の方で困る時は斷る。そのかりは僕の方で話しに行つても、都合のわるい時はどんどん斷つてもらうやうにしたい。お互に遠慮をするのは馬鹿げてゐるし、氣分の上で亂されては困る。お互に普斷は存在を忘れるやうにしたい。

D。勿論、それは、Aものぞむ處だらう。たゞへんな奴が出入りしないやうにしてほしい。

E。あの室なら大丈夫だ。僕が考へてつくつた室だからね。

D。君は困りはしないか。

E。僕だつて必要があればあの室にゆくが、この頃さつぱり必要を認めなくなつた。誰にでも逢ふことがすきになつた。又誰が來ても仕事の邪魔になる時は斷れるやうになつた。僕はもう美術記者や、批評家を恐れる必要はない。彼等の内の正しい者だけを信賴するが、しかしもう他人の顏色を見る必要はない。いゝ實さへかければそれでいゝのだ。斷りたい時はどんどん斷ることにしてゐる。

D。Aもこれをきいて安心するだらう。

E。こゝに來ることを氣どられないやうに、しないといけない。

D。勿論、それはAのことだから抜け目はあるまい。あゝ見えて、あれは中々質のわるい處がある。

E。馬鹿ぢやないな。

D。時々、馬鹿なこともある。一つのことに頭がむいてゐる時は、他のことには馬鹿になつてゐる。

E。それはあたりまへのことだ。しかしAは本當に死にたがつてゐるのかね。

D。たしかに生きる興味を失いかけてゐる

E。生るよろこびが缺けてゐるのだね。

D。さうかも知れない。

E。人間は、普通死にたくはないやうに出來てゐるはづだからね。しかし、Aのやうに不幸がつゞいちや、生るのが下らないことに見へるのも仕方がないかも知れない。

D。死ぬ程、樂なものはないと思ふと、よく云つてゐるよ。

E。馬鹿な奴だな。僕なんか今死んぢや浮ばれないね。之からだからな。

D。僕もさう云ふのだ。するとあいつは死んでしまへば同じだよ。何故

A。そんなことは僕の人生觀には影響しないさ

D。だが君の内の生命は今のやうな狀態におちこむやうなことはなかつたらう。

A。それはさうかも知れない。だがそんな空想は何にもならない。

D。ともかく僕は君がEの處へ行くことを望むよ。

A。今死んでも始まらないからな。だが生ても始まらない。

D。君の勉強がものになるまでは生て[illegible]

A。僕を羨ましがつてゐるつて、馬鹿な奴だな。

D。だが君のこの頃の仕事に、Eは實に感心してゐる。君のこの頃の詩は鍛え切つた刄のやうだと云つてゐた。

A。ふん。Eのいひさうなことだよ。それでEは僕を幸福にして、君を錆びた鐵にでもしやうと思つてゐるのだらう。

D。Eはそんな人間ぢやない。

[illegible]

E。[illegible]大丈夫だ。

E。[illegible]なければね。

A。[illegible]ないよ。僕は生きられる限りは生きて[illegible]許された範圍で自然の仕事を[illegible]と思つてゐる。

E。よろこびだとは思はないかい。

A。苦しみだと僕は思ふね。

E。それに苦しみもあるが、よろこびだと云つてもいゝと[illegible]

A。僕にかゝない方がらくだよ。

E。それぢや用があつたらこのベルをならしてくれ[illegible]

A。ありがたう。

E。D以外には君がこゝにゐることは秘密にしておかう[illegible]

A。いやしやべつてもらつてもいゝ。逢ひたくない[illegible]すむから。しかしなんだか[illegible]ねばまずね。[illegible]

……てゐてくれる、君なら何處へ來てもらつてもかまわない。

A。僕は自分の家にゐるやうに振舞ふから君の方で迷惑だつたら、はつきりさう云つてもらはう。君も云ふ通り、つまらぬ遠慮はやめて、呑氣にしてゐやう。

E。それが一番いゝ。それぢや僕はモデルが來て待つてゐるから、畫をかいてくる。君も氣が向いたらやつて來玉へ。

A。あとでゆくかも知れない。

(女中、登場)

女中。Dさんがお見へになりました。

E。それならこゝに來てもらうか。

A。あゝ、さうしてもらはう。

E。それなら失敬する。

A。どうか。

(女中、E退場、Dまもなく登場)

D。どうだい、おちつきさうか。

A。普澤なうちだな。

D。しかしかくれるにはこんないゝ處はないだらう。

A。何處からも見へないで、それで贅々してゐるよ。

D。出來た時はEは隨分自慢してゐた。こゝで美人をはんべらして南畫をかくのは惡くあるまいなぞと、云つてゐたものだ。

A。そんなことを云つてゐたか。處がいゝ美人が來たものだな。はゝゝ。

D。しかしすぐこゝに來るのは面倒になつたらしいがね。尤も美人もゐなかつたからだらう。

A。あいつは呑氣ものだね。

D。E位い傍若無人に自分の仕事をしてゐるものはない。

A。生活だつてさうだね。

D。あれで一てきの酒ものまないのは不思議だよ。

A。とにかくよく仕事をするな。

D。仕事がたのしみなのだからね。愛撫してかいてゐる。この地上に畫のこと以外は何にもない、それも自分の仕事を中心としての畫以

をしたつて、しないだつてね。さう云つて皮肉に人の顔を見るのだ。まるで、今にも僕が死にでもするやうな不氣味な顔をしてね。

E。あの顔はへんに冷酷だね。深淵でも見てゐる感じだ。

D。自分の後ろには死に神がゐるのだ。君の後ろにもゐるよ。いつか夜中にそんなことを云つて、僕をおどろかしたことがあつた。

E。惡興味だ。だが僕はあいつにはまけない。僕は自分の生命に忠實になる許りだ。

D。それならAにいつ來てもいゝやうにさう云ふよ。

E。あゝ、明日早く掃除さしておく。

D。君は何時頃に起きるのだ。

E。僕は寢坊だよ。だが明日一日位は早く起きたつていゝ。

D。そんな必要はないだらう。

E。僕がねてゐてもかまはないから、早く來た方がよかつたら、早くくるやうに云つてくれ給へ。

D。ありがたう。（二人退場）

（幕とれる、EとA）

E。この室だよ。

A。之は靜かでいゝ。

E。この室は何處からも見へない。そしてこの室へくるにはどうしても、あの溫室をぬけないと來られない。だから誰もこんな室のあることを知つてゐるものはない。知つてゐるのはDと他に二三の人か居る許りだ。秘密を守れる人の他には誰にも話してない。まあ君のかくれ場としてはこんないゝ所はないと思ふ。

A。本當に之なら大丈夫だ。

E。自殺さへしなければね。

A。自殺はしないよ。僕は生きられる限りは生きてゆく義務があると思つてゐる。許された範圍で自分の仕事を完成することは、義務だと思つてゐる。

E。よろこびだとは思はないかい。

A。苦しみだと僕は思ふね。

E。それは苦しみもあるが、よろこびだと云つてもいゝと思ふね。

A。僕はかゝない方がらくだよ。

E。それぢや用があつたらこのベルをならしてくれ給へ。

A。ありがたう。

E。D以外には君がこゝにゐることは内證にしておかうね。

A。いやしやべつてもらつてもいゝ。逢ひたくない人には逢はないですむから。しかしなんだか少し大げさだね。實は簡單なおどしにすぎなかつたのかも知れない。少し恐ながら臆病だ。

E。しかし君は何處にゐたつて同じことぢやないか。おどかされて來たと思はず、こゝにくるためにおどかされたのだと思へばいゝ。

A。いかにも君らしい考へ方だ。

E。それから一人で退屈したらいつでもやつて來てくれ玉へ、君なら何處へ來てもらつてもかまわない。

A。僕は自分の家にゐるやうに振舞ふから君の方で迷惑だつたら、はつきりさう云つてもらはう。君も云ふ通り、つまらぬ遠慮はやめて、呑氣にしてゐやう。

E。それが一番いゝ。それぢや僕はモデルが來て待つてゐるから、畫をかいてくる。君も氣が向いたらやつて來玉へ。

A。あとでゆくかも知れない。

（女中、登場）

女中。Dさんがお見へになりました。

E。それならこゝに來てもらうか。

A。あゝ、さうしてもらはう。

E。それなら失敬する。

A。どうか。

（女中、E退場、Dまもなく登場）

D。どうだい、おちつきさうか。

A。おちつくだらう。しかし今迄の處と少し樣子がちがうね。畫室見たやうだね。僕には少し調和しない。

D。すぐ室の方から調和するよ。

A。贅澤なうちだな。

D。しかしかくれるにはこんないゝ處はないだらう。

A。何處からも見へないで、それで廣々してゐるよ。

D。出來た時はEは隨分自慢してゐた。こゝで美人をはんべらして南畫をかくのは惡くあるまいなぞと、云つてゐたものだ。

A。そんなことを云つてゐたか。處がいゝ美人が來たものだな。はゝゝ。

D。しかしすぐこゝに來るのは面倒になつたらしいがね。尤も美人もゐなかつたからだらう。

A。あいつは呑氣ものだね。

D。E位い傍若無人に自分の仕事をしてゐるものはない。

A。生活だつてさうだね。

D。あれで一てきの酒ものまないのは不思議だよ。

A。とにかくよく仕事をするな。

D。仕事がたのしみなのだからね。愛撫してかいてゐる。この地上に畫のこと以外は何にもない、それも自分の仕事を中心としての畫

外は何ものも認めないのだから、いくらでも仕事が出來るわけだ。

A。一種の仕合せものだね。僕もこゝにゐる間仕方がないから、ぶんといゝ詩でもかいて見るか。一つ牧歌的な靜かな歌をつくつて見やうかと思つてゐる。僕はあばれることもすきだが、同時に靜かなことがすきだ。しかしこゝに二三日も引こんでゐたら、世間にとび出したくなるだらう。

D。あぶないぞ。

A。虎穴に入らざれば虎兒を得ずさ。

D。君にとつて虎兒とはなんだ。

A。虎の子かね。はゝゝゝ。

D。誰か來たやうだね。

A。何かの音だらう。原因のわからない音と云ふものは、何處か凄味があるね。正體を知れば何んでもないがね。僕達は知らないことに興味をもつ、知つてしまへば、何んでもないことかも知れないがね。

(E登場)

E。こんな手紙が來てゐたさうだ。

D。もう君がこゝにゐることに氣がついたのかね。

A。さうと見へるね。死神つて何處にもゐるものだよ。(あけて見る、)馬鹿な奴さ。

D。何てかいてあるのだ。

A。お約束の時間が近づきます。北へゆかないのですか。忠作生とかいてある。子供見たやうな奴だ。

D。どうして知つたらう。

A。つけて來たと見へる。執念深い奴さ。

(女中登場、Eに)

女中。かう云ふ方が一寸お逢ひしたいと云つて見へました。

E。かう云ふ人を君は知つてゐるかい。

A。そいつだよ。僕をねらつてゐる仲間は。

E。斷るかね。

A。一人で來たのですか。

女中。えゝ、お一人です。

E。それならともかく逢つて見やう。それぢや一寸逢つてくるよ。

A。君に迷惑を與へるやうだと僕はいつでも出るよ。

E。大丈夫！それぢや一寸逢つてくる。

(幕とれる。E登場、つゞいてX登場)

E。どうか、おかけ下さい。

X。ありがたう。

(沈默)

X。Aさんは何處におゐでゞす。

E。Aは何處にゐるか知りません。

X。本當に御存知ないのですか。

E。えゝ。知りません。

X。おかくしになつても駄目です。

E。Aに何か御用がおありなのですか。

X。えゝ。用があるのです。

E。どう云ふ用ですか伺つておけば、あつた時おつたへしてもよろしい。

X。僕達はAさんに一寸御注意したいことがあるのです。

E。どう云ふ注意です。

X。Aさんの、生命をねらつてゐるものがあるのです。

E。その方は君の御友達ですか。

X。友達と云ふ程ぢやないのです。

E。よくわかりましたね。

X。それはその男の處へゆく人からきいたのです。

E。それで君はAが殺されないことを望むのですか。

X。それはAさんが殺されない方がいゝと思つてゐます。

E。それはどうもありがたう。

X。しかしAさんをねらつてゐる人はそれは執念深い人ですからね。

E。それなら北へ行つてもやられるでせう。

X。東京を去れば、殺さないと云つてゐるのです。

E。それはたしかですか。

X。たしかです。

E。どう云ふわけですかね。

X。逃げたと云ふことで安心するのでせう。

E。さうですか。それではAに逢つたらさう云つておきませう。

X。Aさんは今日中に逃げないとあぶないのです。

E。さうですか。それではAの處へ電話をかけて見ませう。御用はそれだけですね。

X。Aさんをかくすと君の為にならないことをお知らせしたいのです。

E。Aを僕がかくしてゐると思つてゐるのですか。

X。勿論です。Aさんが君の家にゐることは僕達は知つてゐるのです。

E。僕達はね。

X。さうです。

E。君もAを殺したがつてゐるのですか。

X。命令があるのです。

E。へんな命令ですね。Aはおとなしい男ですよ。

X。そんなことは問題になりません。私達の仲間は、命令を實行するだけです。Aさんに追放の命令があつたのです。そしてそれを聞かないものには死刑にすると云ふのです。又それを保護するものも死を覺悟しなければならないのです。

E。へんな命令ですね。

X。我々は命令にたいして批評は許されないのです。

E。それで僕にどうしろと云ふのです。

X。Aをあなたの處から逐ひ出せと云ふのです

E。そんなことは出來ません。

X。あなたは死にたいのですか。

E。誰が死にたいものですか

X。それならAを逐ひ出しなさい。

E。そんなことは出來ない。

X。それならあなたはこの一ヶ月の内に死ななければならない。

E。警察署に訴へます。

X。私達の仲間はいくらでもゐます、

E。警察の人は片端から君達をとつかまへるでせう。

X。はゝゝ。

E。君達はAが秀れた詩人であり、我が國語の爲に獨歩のやうな詩をかく得やすからざる人物だと云ふことを知らなければならない。

X。僕達にAのやうな詩をかく男は生てゐる價値のないものと認めてゐる。君の詩だつて同じことだ。我等は我等の味方するものには絶對の價値を認めるが、我等を否定するものにたいしては絶對に價値を認めない。

E。同じ人間だと云ふことを君達は認めないのか。

X。味方でないものは敵だ。我等は生きるために味方と力を一つにして、敵は粉碎するのだ。少くも、僕達を侮辱するものはね。

E。どうしても君達はAを殺すと云ふのか。

X。A許りぢやない。Aを保護するものも殺す。Aは旅行すればいゝのだ。そしてこの土地に歸らなければいゝのだ。

E。その君の言葉は信用していゝのか。

X。信用していゝ。君がもしAを逐ひ出せば僕達は君を殺す理由はない。君が生きたければAをおい出すがいゝ。君がAと一緒に死にたければ、何處までもAをかこつておくがいゝ。簡單明瞭なのだ。他に道はない。君は死にたいのか、生きたいのか。殺されたいのか、

殺されたくないのか。

E。少し考へさしてもらはう。

X。よろしい。それなら三日の猶豫を與へる。しかし訴へたりなんかしたら、この家をやき必ず君達の生命はもらう。僕達の仲間には人を殺すことが平氣なものが、いくらでもゐるからね。

E。それなら考へておく。

X。三日の内にAをおい出せばよし、さもなければ、君達を殺す。そんなことは僕達には朝飯前の仕事なのだよ。それなら失禮する。（退場）

（D登場。）

D。E、何を考へてゐる

E。僕は迷つてゐる。

D。君をおどしたのだらう。Aをかばうと君を殺す、とおどしたのだらう。

E。さうだ。おどしだと思ふ。だが僕は萬一それが本當だつたらと思ふと、どうしてい丶かわからないのだ。僕はAぢやない。どうしても今は死ねない。僕の實はあと五年か丶らないとものにならない。少くもあと五年うんと勉强したら、少しは藝術家らしい顏して死んでゆけるだらう。今死んぢや恥かしい。又どうしたつて僕の内にある、立派なものを全部はき出さずには僕は死に切れない。僕にはどうしたつて死にたくない。だが友を賣ることはなほたまらない。僕を信頼して來たものを、そして男子が一度約束してしまつたものを斷ることは死んでも出來ない。僕はどうしたつて死にたくないのだ。だがどうしたつて友を賣ることは出來ない。あまりに彼等の云ふことは馬鹿馬鹿しい。しかし彼等はそれを平氣で實行出來る程の馬鹿だ。僕はどうしてい丶のかわからない。

D。Aに正直にさう云つたらい丶ぢやないか。

E。それは出てゆけと云ふこと丶同じことだ。

D。しかしAだつて、君をつれてゆかうとは思つてゐない。こ丶にゐることがわかつた以上、君に迷惑をかけるのはいやだから、すぐ出ると云つてゐる。

E。すぐ出る必要はない。三日の内にAを出さないと僕を殺すと云ふのだ。實に理窟も何にもないことだ。しかし昔にはさう云ふ時代があつた。今でもある國ではさう云ふことが行はれてゐる。しかし僕達の國ぢやそんなことが行はれないことをよろこんでゐた。だが今にそんな時代が來るかとは思つてゐた。暗殺時代だ。人間をありのま丶に認めることが出來ず、ある型に人間を無理におしこまないと承知の出來ない時代、それは一番恐ろしい時代だ。人間を人間とし

て見ず、個人を個人として見ず、生命を自分達の方便以上には認めない。邪魔になるものはすべておしつぶしてゆけばいゝ。彼等はさうとしか思つてゐない。

D。君はAが出ることを心にのぞんでゐるのだらう。

E。それはたしかに望んでゐる。しかし僕はさう云ふ自分の卑劣な根性をやつけたく思つてゐるのも事實だ。僕は恐れを知らぬ人間になりたい。そして悠々と畫をかきたい。彼等馬鹿者にやつけられない、しつかりした社會に住んで、悠然と畫をかいてゆきたい。しかし今の時代はよくない時代だ。個人に、その價値を發揮させることを拒んでゐる。僕は其處で平氣で、個人の價値を生かして見せやうと思つてゐた。人間をつくつたもの丶意志、人間に目を與へてくれたもの丶意志をすなほに地上に生かしてゆきたいと思つてゐた。又それが自分には出來ると思つてゐた。しかしそれは時代をあまり信じすぎてゐたのかも知れない。

D。ともかく僕はAに話して見るよ。

E。いけない。

D。本當にいけない。

E。いけない。

D。それが君の本音か。

E。本音だ。

D。僕一人の考へとしてAに云ふのはいゝだらう。

E。それは氣の毒だ。まあ、もう一日待つてほしい。

D。早く、だしぬく方がいゝかも知れない。

E。そんなことになると僕にはよくわからない。

D。その點、Aの方が君より利口らしい。

E。それはさうかも知れない。

D。ともかくAに話して見る。

(暗轉)

(AとD)

A。よくわかつた。

D。Eは何處までも君を賣りたくないと云つてゐる。

A。よくわかつてゐるよ。Eに一つピストルをもらつてもらいたいね。

D。どうするのだ。

A。北方へ猛獸狩りに行かうと思ふのだ。

D。猛獸狩。

A。猛獸と云つたつて、卑怯な滑稽な猛獸さ。ともかくEに逢はふ。心配することはないよ。僕はEとはちがう。僕は死ぬことをさう恐

いことゝは思つてゐないのだ。生きられる限りは生きなければならないと思つてゐるがね。だから僕は平氣だよ。むしろ勇氣がわいて來た。僕は奴等の味方が實に少ないことを知つてゐる。そして奴等は腕力こそ僕よりつよいが、しかし僕より利口とは云へない。自働車を云つてもらはう。さつき君がEの處へ行つてゐる內に旅行案內をしらべた。そして今ゆけばまにあふことを知つてゐる。ゆくさきはT溫泉だ。そして目的は狐うちだ。さう誰か僕のことをきいたらさう云つてくれ玉へ。少し愉快になつて來た。僕の血には、野武士の血がまちつてゐる。殺人强盜のね。それは嘘だがね。へんに愉快になつて來た。Eの處へ行かう。

（暗轉）

A。だから安心してくれ玉へ。心配なことはない。君の所にピストルがあつたらう。外國へ君が行つた時買つて來たのか。

E。あるよ。どうするのだ。

A。猛獸が出てくるといけないからね。自殺はしないからそれは安心してくれ。僕は死ぬのは怖くはないが、生きるのも怖くはないのだ。一つ見せてもらうかね。

E。（出して來て）どつちがいゝか、どつちでも、僕はもういらないのだ。

A。二つともらつてゆくわけにはゆかないかね。

E。やつてもいい。

A。二つあるともしかすると都合がいゝことがあるのだ。猛獸に大がい二疋で出てくるだらうと思ふのだ。さうすると同時にこの二つのピストルでやつけてやる。

E。さううまくゆくといゝがね。

A。うまくゆくつもりだよ、あとは歸つてから話すとしやう。丸はあるのだね。

E。ある。もう十發位ゐ切りのこつてゐないがね。

A。あゝ四五發あればいゝのだ。どつちにもあふのだらうね。

E。それはあふ。

A。近頃つかつたことがあるのかい。

E。あゝ、時々野良猫が出て來たり、鼠が出て來たりする時、うつて見ることがある。

A。それから何か人間の解剖圖があつたね。

E。あるよ。

A。それをかしてくれないか。

E。何するのだ。

A。猛獸の心臟のあり場をよく調べるのだ。

E。人間ので猛獸のがわかるかね。

A。それはわかるよ。

E。君は人間の心臟が何處にあるか知らないのかい。

A。知つてゐるつもりだが、まちがふと厄介だからね。一發でやつつけないと都合がわるい。

E。うんさうか。

A。やつとわかつたのか。向ふでゆるしてくれと云つたつて、かうなづたら僕の方で許さないよ。人間て面白いものだ。かう覺悟がきまるともう怖いものはない。反つて何んだか愉快になつて來た。

E。しかし亂暴はやらない方がいゝよ。

A。大丈夫だよ。

(女中登場)

女中。自働車が參りました。

A。それなら解剖の本をかしてもらはうかね。

E。あゝ、それなら之をもつてゆきたまへ。自分の心臟を打つちやいけないよ。

A。大丈夫、僕は自分を殺しにくるものをうつても、自分をうつやうなことはしない。僕はその內又歸つてくるつもりだ。

E。僕は本當に君にはすまないと思つてゐる。

A。そんなことは案じてない。僕は新しい生活を始めるつもりで出かけるのだ。僕は生きられる限り生きる氣になつてゐる。しかし死ぬこともわるいとは思つてゐないのだ。それでは又すぐ歸つてくるよ。僕は實際、自分が殺されるやうなつもりになつてゐたのがおかしい。殺すのは僕の方だと云ふことを忘れてゐた。平氣で、出かけ、平氣で歸つてくるつもりだよ。送つてもらはないでいゝよ。

(三人退場、EとD歸つてくる)

E。Aは本當に愉快さうに出かけて行つたね。僕は自分の卑屈なのをまざ〱と感じさせられた。いゝ當でもかけなかつたら、僕程やくざな人間はないね。

D。Aは矢張り、いざとなるといゝ處があるね。あいつは本當に猛獸をうつてくるかも知れない。

E。あんな男が、存外怖いのだね。

D。本當に死ぬことが平氣らしいからね。

E。人を殺しても平氣かも知れない。

D。殺しにくる人間をやつけるのだからね。

E。しかし僕は考へても閉口だ。

D。だが殺されるよりはいゝだらう。

(幕)

第三幕

（AとF）

A。君がこゝにゐるとは思はなかつた。

F。君がくるとは思はなかつた。

A。それは誰も思ふまい。僕だつて二日前まではこゝへ來るとは思はなかつた。不意にこゝにくる氣になつた。北へ行かうと思つて南へ來てしまつた。

F。今から北は寒いだらう。

A。一寸北へ用があつたのさ。猛獸狩りをすることを人にたのまれてね。

F。妙なことをたのまれたのだね。

A。しかし殺生はしない方が矢張り氣持がいゝと思つたので、こつちへ來ることにした。

F。君のお家の方は皆大丈夫かい。

A。その反對さ。一年前に皆死んだのさ。そして僕一人生きのこつたのさ。

F。さうかい。僕はちつとも知らなかつた。それはたまらないね。

A。もうすんだことさ。他人はとり返しのつかないことにはさつぱりすべきものだと何かにかいてあつたよ。

F。一人は氣らくは氣らくだがね。

A。さうだよ。だが僕はいつまで一人でゐられる人間かわからない。網にひつかゝるのは閉口だが、しかし時々はひつかゝりたくなる。うんといゝ網にひつかゝつて成佛したくもなるよ。だが一人が氣らくは氣らくさ。君はどうだ。

F。僕か僕の處には子供が五人ゐるよ。家庭は至つて平和さ。

A。それはお目出たい。

F。あんまりお目出たくもないよ。

A。だが平和な家庭は靜かでいゝものだよ。

F。五人子供が居ては靜かでもないよ。僕達は子供の餌食さ。

A。それが又いゝのだ。

F。ちつともよかないよ。だが別に惡いとも思はないがね。

A。僕もそろ／＼家でももつてもいゝ氣になつてゐるよ。田舍でね。小學校の先生でもしてね。

F。相變らず空想家だね。

A。僕は一方とび歩きたいし、勝手なことがしたいとも思ふが、一方田舍におちついて、ごく平凡な一家の主人になつて、くたばりたいとも、この頃しきりに思ふやうになつたよ。

F。おちつき出したら、すぐ又とび出したくなるのぢやないかい。

A。子供でも出來たら、さうもゆくまい。

F。それなら一つい丶細君を世話してやらうか。

A。そんなのがあるのかい。

F。一人たのまれてゐるのがあるのだ。

A。どうせ碌なのぢやないのだらう。

F。處が不思議にそれがい丶のだよ。嘘のやうに。尤も齡は二十六七になつてゐて、後家さんだがね。僕は近頃、あんない丶女を見たことはない。君には少し惜しい位いだが。しかし君がもらう氣になれば先方ぢやよろこんで承知するだらう。

A。子供はないのかい。

F。子供は嫁いださきで引きとつたのだ。

A。話が少しよすぎるな。

F。どうだ、もらう氣はないか。

A。ないね。

F。どうして。

A。僕は本當は、いつ死ぬかわからない身體なのだ。

F。何處かわるいのかい。

A。身體はわるくないが。僕をねらつてゐる奴がゐるのだ。

F。冗談だらう。

A。さうかも知れない。だが人間いつだつて死ぬものだからね。

F。そんなことを云つたら誰だつて結婚なんか出來はしないよ。

A。僕はある人相見から四十になる前に死ぬと云はれたことがある。來年は四十だからね。

F。そんなことはあてにはならないぢやないか。

A。處があてになるのさ。それに僕には定收入がない。

F。だつて原稿をかけばいくらでも金が入るのだらう。

A。そんなことはない。それに借金がある。わるいことだらけだよ。だから仲人になつたら、君はうらまれるよ。

F。さうかね。

A。さうとも、それに君の云ふ通り、家をもつたら、又すぐとび出したくなるだらう。

F。厄介な奴だね。

A。相手が眞面目な人ぢや、僕の處へ來たらろくなことはない。

(女中登場)

女中。あなたはAさんではゐらつしやいませんか。

A。誰がそんなことを云ふのです。

女中。生徒さんがいらつしてさうおつしやいました。

・Aは Aですが、僕は少し都合があつて名前はかくしておきたいのです。

女中。それはちつともかまいませんが、生徒さんがお逢ひしたいと云ふのですが、どういたしませう。

A。それはあつてもよろしい。

（女中退場、Gをつれてくる）

F。それなら僕は又くるよ。

A。あゝ、本當に珍らしい處で逢つたね。

F。さよなら。

A。さよなら。

（F退場）

A。どうして僕とわかつたのです。

G。僕の姉が先刻で御一緒だつたさうです。

A。あの方があなたの姉さんだつたのですか。

G。さうです。

A。それで御用はなんなのです。

G。僕は文學が非常にすきなので、僕のかいたものをよかつたら見て戴きたいと思つて上つたのです。

A。さうですか。君の姉さんはどうして僕だとおわかりになつたのです。

G。あなたのおかきになるものが、僕が好きだつたので、雑誌に出てゐた御寫眞を切りとつて壁にかけてゐるのです。

A。へー。随分君は物ずきな男ですね。僕のものなんか、よんでゐる人間が今時にゐるとは思ひませんでしたよ。

G。僕の姉もあなたのものは實によろこんで拜見してゐます。

A。嘘でせう。

G。本當です。

A。さうですか。それならともかく、君の詩を拜見しませう。

G。随分まづいもので。

A。それはあたりまいですよ。君の齢ですばらしいものおかけたら、僕なんか文學をやめてしまひますよ。

G。先生が文學をおやめになつたら、僕達はどんなにがつかりするでせう。

A。まあ御世辭はいゝ加減にしてもらつて。

G。先生！ 御世辭ではありません。

A。まあ、御世辭にしておいてくれないと、こつちが恥かしい。君の詩はわるくない。少し才がかつてゐるが、しかし君は存外ものになるかも知れない。

G。本當ですか。

A。君はへんに飛躍する言葉がつかへる人間だ。僕は滑走許りしてゐる人間だが、しかし之がものになつてゐると云ふのぢやないがね。大いに勉強したらものになるだらうと云ふのだ。

G。それから姉も詩をつくつてゐるのですが、見ていたゞけますか知らん。

A。それはよろこんで見る。

G。之で御ざいます。

A。之は感心出來ないね。少ししやれすぎてゐる。しかし君の姉さんは立派な女だね。詩より人間の方が上だ。おいくつかね。

G。二十五です。

A。さうかね。

G。姉も一ぺん先生にお逢ひしたいと云つてゐるのですが。

A。主人が許さないとでも云ふのかね。

G。姉の夫は昨年なくなりました。

A。よくこゝには夫を失ふ女がゐるのだな。

G。そんなこともないでせうが。

A。さう云へば、君の顔も姉さんによく似てゐるね。

G。それぢや又お伺ひします。

A。まだいゝぢやないか。

G。いつまで先生はこちらにゐらつしやいます

A。まだわからない。當分ゐるつもりだが、兵糧がつゞかなくなつたら歸らなければならないからね。

G。まだ二三日はこちらにゐらつしやるのですね。

A。そんな心細いことは云はないでくれ、まだ十日や十五日は兵糧があるつもりだ。

G。そんなにゐて戴けるのですか。

A。もつとゐたいと思つてゐます。

G。姉もよろこぶでせう。

暗轉

（Aと女）

A。本當に夢のやうな氣がしますよ。ありふれた言葉ですがね。僕はあなたのやうな方に逢ふことを若い時から夢みてゐました。しかし僕はそれが夢にすぎないことを知つてゐました。人間は實に本當の人間を求めてゐます。そして男は本當の理想的な女を求めてゐます。しかし實際はその理想のかけらで滿足するより仕方がないのです。それ以上の人に逢ふことは出來ないのが現實です。僕は空想のなかでは勝手なことを考へます。しかし現實は僕の空想をふきとば

してしまひます。僕は今まで夢のいゝことを何百度、何千度、何萬度考へたでせう。しかし現實はそれを平然とふきとばします。僕はそれでもこりず空想をしますが、要するにそれは空想です。現實ではないと云ふことを知らされすぎました。汽車で一目あなたを見た時、この世にこんな人もゐるものかと思ひました。僕は十五六の時、一度すばらしい美しい女の人を一瞬間べつけんしたことがあります。僕はおどろいてふり向きましたが、その人は通りすぎてしまつたのです。僕はその人を二度見たら、僕の幻影はくづれたらうと思つてゐました。所があなたを僕は汽車のなかで、何度見たでせう。五時間程、あなたと僕とは同じ汽車でした。そして二人はともかく向ひあつてゐました。僕はあなたを見なほすたびに自分の幻影はこわれるだらうと思ひました。處がこわれません。ます〳〵僕はあなたの美におどろいたのです。停車場であなたの姿を見失なつてから僕はぼんやりしてしまいました。そして二度とあなたに逢へないものと思つてゐました。處がそのあなたの弟さんが見へ、あなたの弟だと聞いた時、僕はおどろいてしまひました。そして今あなた自身がこゝに見へたのです。そして僕を愛してゐて下さることがわかつたのです。之はあまりに意外のことで、あまりに恐ろしい、現實です。

女。さうおつしやられると私は何と云つていゝかわかりませんが、私も本當にあなたがあなたゞと云ふことを知つた時、どんなによろこんだでせう。この方こそ私を救つて下さる方ではないかと思ひました。私はいろ〳〵うるさいことがあつて、この頃生てゐるのが少しいやになつておりました。

A。それをきくと僕はなほうれしく思ひます。僕も人間が生てゐると云ふことは幻にすぎないと云ふこと、目をさますと死んでゐることを本當に知らされてゐるものです。

女。あなたもそんな氣がなさるの。

A。あなたもそんな氣がするのですか。

女。えゝ、目がさめると死んでゐるやうな。

A。生きてゐる間が夢のやうな。

女。えゝ。

A。あなたは生きてゐるのが、いやなのですか。

女。えゝ。

A。僕はさうは思はないのです。僕は生てゐるのもわるいとは思はないのです。僕はたゞ死ぬこともわるくないと思つてゐる許りです。

女。ずるい方ね。

A。あなたはずるくないのですか。

女。ずるくないこともありませんね。

A。僕はうれしいのです。僕はこのまゝ時がたゝないといゝと思ひます。

女。私も家に歸りたくはありません。

A。いつまでもゐらつしていゝのでせう

女。私の家の養子で、私の義理の兄がそれは私をやかましく監督しますの。

A。そんな者、怖がらなくつたつていゝでせう。死ぬ覺悟が出來てゐれば。

女。所が中々死ねないものね。

A。御同樣です。

女。私は今に私を救つて下さる方が出てくると思つてゐましたの。

A。それが僕のやうな人間だとは思はなかつたでせう。

女。私はどんな方か考へたことはありませんでした。

A。本當ですか

女。本當です。ですが私はその人は何にも怖れない方と思つてゐました。そして私とよろこんで死んで下さる方と思つてゐました。

A。僕はよろこんで死にますよ。生きられるだけあなたと生きた上ではね。僕は死を懼れるのを恥ぢると同時に生を恐れることを恥ぢるのです。僕は今の世に悠然と生て見たいのです。食ふためには働いても、氣持の上ではね。僕の友達にEと云ふ男がありますが、こいつは中々しつかりした畫をかいて、今時に珍らしくしつかりした生き方をしてゐますが、少し生活がにごつてゐます。それも面白いと思ひますが、僕はもう少し淸い生活がしたいのです。しかし僕はどう云ふ生活をしなければならないとは別に思つてはゐませんが、しかしどう生きたつて一生なのですから、出來るだけおちついた根づよい生活をしたいと思つてゐます。

女。私も本當にそんな生活が出來たら、どんなにうれしいかと思ひます。私は今の生活からのがれたいのです。

A。逃げたらいゝでせう。

女。戸主が絶對の勢力をもつてゐるのですつてね。

A。そんなことがあるものですか、この世はもつと自由なものですよ。少くも死を恐れない、世間體をかまわないものはね。

女。どうせ生きてゐる間は短かいのでわね。

A。愚かものゝ犧牲になるのは馬鹿氣てゐます。僕だつて短かいものを月に一つか二つかけば、田舎なら生活は樂に出來ますからね。何處へだつてゆきますよ。僕は現實からあなたのやうな人を與へられて、逃げたり、かくれたりはしません。

女。あなたはすぐ私におあきになるわ、きつと。

A。そんなことはありませんよ。萬一そんなことがあればその時、あなたは死ねばいゝぢやありませんか。

女。あなたを殺してね。

A。それは御勝手です。

女。あなたのやうな氣持で生きてゐらつしたら、氣らくでせうね。

A。まあ、今の所、氣らくですね。苦しい目にあつたらどうかはるかわかりませんがね。人間はわからないことまで考へては切りのないものですからね。僕はその時、その時最上の生き方をすればいゝと思つてゐるのですよ。今、私はあなたが與へられたことをよろこべばそれでいゝのです。何もかもすてゝしまうと現實は又僕を始めつから出なほすことを命じるのです。そして僕は主人の前の犬のやうに、尻尾をふりながら、現實のみせた美しい網に自分からひつかゝりにゆくのです。人が見たら馬鹿に見へるでせう。だが僕はうまい酒に醉ふことが出來るよろこびでその他のことはまるで忘れてしまいさうです。(接吻しやうとする)

暗轉。

(XとE)

X。君はAが北へ行つてT温泉に行つたと云つたね。

E。さう云つた。

X。處がAはT温泉にはゐない。

E。温泉に猛獸狩りにゆくといつたが、急に心がにりでもしたのかも知れない。

X。君は知つてゐて、かくしてゐるのだらう。

E。いやなんにも知らない、僕はT温泉にゐると許り思つてゐた。そして今時分、君は地獄にでもいつてゐる時分だと思つてゐたよ

X。僕が地獄にゐるつて。

E。Aは君ともう一人の人を殺してやると云つて出かけたのだよ。ピストルを持つてね。そして僕はきつとAのことだからうまく君達を殺したらうと思つてゐた。

X。さうか、Aは本當にピストルを持つてゐるのかい。

E。持つてゐる。それも上等のをね。Aはあれでピストルをうつことは名人だよ。人間も二三人は殺したことがあるだらう。あんな顔してゐてね。

X。そんことは嘘だらう。

E。いやアメリカでたしか、辻強盗をやつたことがある。

X。Aはアメリカに行つてゐたことがあるのかい。

E。君は知らないのかい。Aはあれで世界を廻つて來た男さ。労働を

してね。

X。さうかね。

E。あいつはあゝ見へて喧嘩の名人だね。何しろ生命知らずだからね。

X。さうきくとさう云ふ處がある。

E。何しろあいつは恐ろしい奴だよ。あいつがT溫泉にゐなかつたのは君達にとつて仕合せだつた。

X。Aてそんな面白い奴かね。

E。面白い奴と云ふより恐ろしい奴と云ふ方が本當だよ。あゝ云ふ男が存外恐ろしいのだね。

X。さうかも知れないな。

E。用心しないと少くも君はやられる危險があるよ。君の顏はあいつは知つてゐるからね。

X。Aは何處にゐるか見當はつかないかね。

E。つかないね。存外東京のなかにゐるのかも知れないね。又近所をうろついてゐるのかも知れないね。どうせ殺されるのなら、君とももう一人をおともにつれてゆくやうに云つてゐたよ。用心する方がいゝね。尤も僕はあいつが殺されるよりは君達が死ぬ方がいゝと思ふがね。

X。それなら又くるよ。

E。まあ、もう少しゐたらいゝだらう。

X。さよなら。(退場)

(D登場)

D。E、Aから手紙が來たよ。

E。どうしてゐる。

D。非常に幸福らしい手紙さ。いゝ人が出來たらしい。

E。呑氣な奴だな。

D。一つよんで見やうか。

E。あゝ。

D。「僕は不意に氣がかはつて、こゝに來た。處がこゝには思ひもうけない運命が僕を待ちぶせしてゐた。人生と云ふものは夢にすぎないとすれば、今自分は一生の內最も幸福な夢を見てゐる。戀愛の夢をね。他のことはすつかり忘れてゐる。僕のことを君達が氣にしてゐるといけないので、幸福に醉つてゐると云ふことを御知らせする。夢もわるくないね。人間てどうしてかうよく出來てゐるのかね。だが之もすぎてゆくことはよく知つてゐる。所はわざと知らさない。Eによろしく、今の僕よりも幸福な者は全世界にあるまい。それ程いゝ夢を見てゐるのだよ。Eによろしく」

E。呑氣な奴だね。人を散々心配させておきながら。

D。だから僕はあいつのことは心配しないがいゝと云つたのさ。例の奴が又來たのかい。

E。さかさまに出鱈目云つておどしてやつた。Aは人を二三人殺したことがある男だからさかさまに用心しろつてね。おどろいてゐたよ。あいつも存外お人よしらしい。

D。Aが人を殺したことがあるはよかつたね。あは、、、。

E。これもアメリカで辻強盜を殺したのだよ。あは、、、。

(暗轉。)

X。本當にあぶない所だつたよ。油斷してゐたらやられたかも知れない。

B。それだけなほ殺さないとあぶないね。相手が生命知らずだと油斷が出來ない。

X。さうだね。今度は向ふが油斷してゐる時やつつけてしまうのだね。

B。僕はこの二三年人を殺したことはない。一つやつつけて見たいね。

X。Aの奴、何處に行つたのかね。

B。その内にはわかるだらう。本屋でも調べたらわかるね。金がなくなれば本屋へ手紙をよこすにちがひない。

X。その際、俺かあいつのかいたものが雜誌にのるのだらう。しかし油斷は出來ないよ。ピストルを持つてゐるらしいからね。それに人殺をしたことがあるのださうだからね。

B。あいつに人殺が出來るかな。嘘ぢやないのかな。生命知らずに事實かも知れないがあんな男に人殺は出來ないね。だが恐怖から僕達を殺すことはないとは云へない。なほやつつけてやるより仕方がない。

、(暗轉)

A。君達若いものは死にたいなぞとは夢にも思ふまいね。

G。そんなことは勿論思ひません。

A。しかしもう僕位の齢になるとね。大概一生の見當がついてしまうのだ。つまり人生のふたがあいてしまつたやうなものさ。浦島の玉手箱をあけたやうなものさ。人生て實は何にもないものだと云ふことがはつ切りするのさ。皆が大事件だと思つて大さわぎしてゐるものも、實はなんでもないのさ。たゞさわぎたくつてさわいでゐるにすぎない。大人が御輿をかついでさわいでゐる。何のためか考へてゐるものはあるまい。たゞ何んだかさわぎたいからさわいでゐる。その御輿が人によつてちがうが、本當にかつぎ甲斐のある御輿をかついでゐるものはこの世界に何人ゐるかね。そんなものが本當にあるのかを疑ひたくもなるよ。

G。だが先生、僕は、一生懸命に仕事がしたいのです。何か仕事がしたいのです。ぶら〳〵してはゐられないのです。

A。僕だつて若い時はさうだつた。今でもさうでないとは云へない。しかし先が見へてしまつた。たとへば今、ある人々にさわがれてゐるレニン、あいつが革命に成功したあかつき、あいつは得意だつたらう。だがその得意はながつゞきしたか、ロシヤの未來に見切りをつけなかつたか。レニンが野心家でなく、眞人だつたら、所謂、勝利の悲哀を感じたにちがひない。群集はレニンレニンと神のやうに歡呼する、それを見おろしてヨダレをたらした病氣のレニンがうつろの目をして見おろしてゐる一幅の畫は、何を思はせるか、君は知つてゐるか。

G。そんなことは僕にはなんでもないのです。僕の内には生命の火があります。それが僕を我むしやらに強いるのです。

A。それは自然だ、美しい。しかしそれはやがて通りすぎる時があるのだ。

G。通りすぎるまでは我むしやらに進みまや。

A。我むしやらにすゝむがいゝ。しかし出來るだけ賢くね。しかし僕はちがう。僕は人生に見切りがつきかけて來た。僕は靜かに運命の與へてくれるものを味はつて、それから涅槃に入る用意をしなければならなくなつて來てゐる。僕はへんに靜かさがすきになつて來た。

G。先生はまだそんな齡ぢやないぢやありませんか。

A。君の姉さんはこの二三日見へないがどうしたのだ。

G。實はそのことで僕は上つたのです。姉は二三日前に急に熱を出したのです。もう三四日休まないとならないのださうです。それに兄がやかましいので、お手紙を出させないので失禮してゐる。しかしお約束したことは死んでもたがへませんから、それだけは御安心下さい。いざと云ふ時がくれば兄なんか恐れはしないのですが、まだ時が來ないので、靜かにおとなしくしてゐる、お逢ひしたいことは隨分お逢ひしたいが、さう云ふわけで失禮してゐるからよろしく申し上げてくれとのことです。

A、それで御病氣はどうなのだ。

G。大したことはないのです。

A。熱は未だあるのか。

G。八度五分程あります。

A。それはいけないな。

G 一昨日は九度以上あつたのです。

A。心配はないのだね。

G。心配はないのです。

A。大事にしないといけない。人生に錯誤と云ふものがあるのに、本當に困つたものだ。

G。輕い病氣は時にはいゝものと思ひますね。

A。病氣のなほりかけはいゝものだが、病氣で若いものが死んでゆくのは思つてもたまらない。それも仕方がないがね。僕はへんに不運なのだ。だが君の姉さんの御病氣は大したことはないと思ふがね。

G。姉もいらいらしてゐます。二十六まで生きられないと、卜者に云はれたことがあるのださうです。

A。たちのわるい冗談を云ふ奴だな。

G。それが又實によくあたるのだと言つて氣にしてゐました。

A。あたるものかね。僕だつて四十になるまでに死ぬと云はれてゐるが、死にさうもないよ。

G。それはどうせ出たら目ですがね。

A。僕はちつとも知らなかつた。

G。すぐお知らせすればよかつたのですが、僕が一寸叔父の所へ三四日泊つてゐましたので。

A。君が旅行することはきいてゐた。

G。何しろ人生は僕は戰ひだと思ひますね。そして何處までも生きぬかなければならないものと思ひますね。

A。それはさうさ。發射された彈丸見たやうなものだ、強いられた所まではとんでゆかなければならない。發射された瞬間には千里でも二千里でもとべるつもりでゐる。しかし半分程くると、もう自分のおちつく所がわかるものだよ。だが僕は君の姉さんを知つて本當に助かつたよ。僕はこの世でこんな幸福な夢を又見られるとは思はなかつたよ。

G。姉も隨分よろこんでおりました。急に力が出來、何にも恐れない、自由な生々した氣持になれたとさう云つてゐました。それでは僕は失禮しますよ。

A。さうか。それぢや君の姉さんにくれぐれもよろしく。

G。まだ當分こちらにゐらつしやるのですね。

A。勿論だよ。一生ゐるかも知れない。

G。僕はそれをきいてうれしく思ひます。その內、又何處か山へでも御案內しませう。

A。是非ゆきたいね。君の姉さんの病氣でもなほつたらね。

G。えゝ。

（二人退場しやうとする）

幕。

第四幕

（幕前）（XとB）

B。とうとうわかりました。B温泉のT旅館にゐるさうです。

X。さうか。それならすぐ行かう。あいつの今度かいたものを見ても、いやに得意で、幸福さうで、實に不愉快だつた。僕達を征服したつもりでゐる。

B。あいつの生きてゐられるのも、もう二三日でせう。よろこばしておく方がいゝでせう。それなら今晩すぐゆきますか。

X。善は急げだ。すぐ行かう。

（二人見合はし笑ふ）

（ちがう幕前）

B。出かけませう。二人のゐる所をつきとめました。ピストルはありましたか。

X。あつた。丸もあつた。

B。それならば、二人が心中したやうに見せることはなんでもありませんね

X。何んでもない。

B。後からうつちや駄目ですよ。

X。大丈夫。

B。一發でやつつけなければいけませんよ。

X。大丈夫。

B。それならAの方は僕がひきうけますから女の方はあなたがやつて下さい。

X。大丈夫

B。それならそろそろ出かけませう。

X。出かけやう。

（二人退場、幕あく、海岸月夜Aと女話してゐる）

A。本當に夢のやうです。僕はあなたが病氣で死んだらどうしやうかと思ひました。僕程不幸なものはないと思ひました。人間の幸不幸なんて實に簡單なものと思ひますね。聖人や野人なれば別ですが、最も人間らしい人間で滿足するものにとつては、幸不幸なんて實に簡單に出來てゐると思ひます。その點、人間も蟲も同じことですね。

女。まあ、私達は蟲と同じなの。

A。さうです。僕達は蟲と同じなのです。あの今ないてゐるこうろぎなども、よろこんでないてゐますが、他の蟲に殺されゝば地獄です。そしていつ殺されるかわかるものぢやありません。恐らく彼等は殺される方が多いのでせう。しかし彼等は今なにも知らずにないてゐます。人間がきけばあの聲に淋しすぎるやうですが、こうろぎ

自身にとつてはあれで愉快なのでせう。

女。そんなことはわかりませんわ。

A。僕にはよくわかるのです。僕は小さい魚がすきでよく見ますが、世の中に小さい魚程びく／＼して生てゐるものはないと思ひますね。彼等は地獄のやうな生活をしてゐますよ。それなのに、一寸でも平和だと、彼等は實に呑氣に餌をさがし、それを食つてゐます。彼等の幸不幸は他人、他魚と云つてもいゝかも知れませんがね。他人にまかされ切つてゐるのです。人間だつてさうだと思ひますね。僕なんかあなたに逢ふ前と、逢つてからとは考がまるでちがつて來ました。僕はあなたに逢はなかつた時は、へんに厭世的になつてゐたのです。人間は生きてゐることは淋しすぎ、又苦しすぎるものと思ひました。しかし今はちがひます。僕は淋しさをさがすことが出來ません。かうしてあなたと話してゐると心の城壁がすつかりなくなつてしまひ、何となくうれしくなるのです。あなたが二三日姿を見せないと、又すぐ昔の僕に返るのです。それ以上と云つていゝでせう。處があなたが來てくれると又すぐ子供のやうに露骨に愉快になるのです。あまりそれが露骨な事實なので、自分でも恥かしい位です。別に恥かしくも思つてゐませんがね。

女。本當に私もさうなの。あなたが何か御用がお出來になつて、こゝをおたちになつて、もうおいでにならないなどと云ふことがあつたら、私はどうしやうとよく思ひます。

A。本當に僕はこゝに來てよかつたと思ひます。もし僕が一時の興奮で北へでも行つて二人の人間を手にかけたとしたら、それは誰にも氣がつかれずに所置が出來たにしろ、又それが正當防衞だつたにしろ、僕は心の平和を失つたでせう。そしてこんな呑氣な、いゝ氣持でゐられることは出來なかつたでせう。僕は人を殺すよりは、人に殺される方が幸福だと、この頃しみ／＼思ふやうになりました。

女。あなたが殺されたら私はどうなりませう。殺されるやうなことをなさつてはいやですよ。

A。僕はもうあなたをおいて死にたくはありません。僕はこのよろこびもすぎてゆくものだと云ふことは理窟では知つてゐますがそれでこのよろこびは否定はされません。僕は少し幸福すぎます。僕はそれだけなほ立派な仕事をしなければならないと思ひます。僕は之から本當に生きて見せるつもりです。

女。本當にながく生きして頂戴。

A。あなたも身體を大事にして下さい。

女。私も、もう死にたくはありません。

A。この静かな景色、どう見ても夢のやうですね。そしてすべてのも

のはもう寢てしまつたやうですね。僕達二人だけの世界のやうですね。私達は現世にゐるのではなく、なんだかすつかりとけあつた世界にゐるやうですね。

女。あら星がとびましたわ。

A。本當ですね。

（女せきをする）

A。又かぜをひくといけませんから歸りませう。又明日こゝへ來ませう。月のいゝ間は毎晩でもこゝに來ませう。

女。私は大丈夫。もう少しこゝにかうしてゐませう。私はなんだかこの世にゐるやうな氣がしません。私は何にもかも忘れてしまひました。私は今ふいに目がさめた子供のやうな氣がします。

A。あなたにさう云はれると僕も不意に目がさめた氣がします。僕はこの平和を限りなく愛します。

女。私は今迄、夜の世界がこわかつたのです。私達とちがうものが、夜の世界を占領してゐるやうな氣がしてをりました。今日私達は、そのちがつた世界の人達と和解が出來たやうな氣になりました。私はなんだかうれしくつて仕方がありません。波の音も、こうろぎの聲も今日程、身にしみてきいたことはありません。夜の世界はこの世とあの世の境のやうな氣がしますね。

A。本當にさうです。いつまでもかうやつてゐたいと思ひますね。時間を忘れて。

女。本當にもう何時でせう。もう隨分おそいのではないでせうね。

A。まだ九時です。

女。もう九時なのですか。

A。まだいゝぢやありませんか。

女。えゝ、私はもう何にも怖いものはないのです。たゞあなたをねらつてゐる人が怖いの。

A。あんなものは何んでもありませんよ。臆病ものです。たゞ、あなたにあはせるために僕をおどした道具にすぎません。僕はあいつ達に感謝してゐますよ。

女。私は死ねば、あなたと一緒に死にたい。

A。僕もあなたと一緒ならよろこんで死にますよ。人間て馬鹿なものだと思ひますね。心中する人間なんて利口には見えませんがね。しかしさう云ふこともわるくないやうに蟲けらの時代からつくられてゐるのですから仕方がありませんね。僕はこの頃になつてますく自然に感心して來ました。そして僕達は自然にすなほになることで、自然からくるよろこびを味はふより仕方がないのだと云ふことを知りましたよ。二人でこんな所で話してよろこんでゐるのは、現

ぼくがこほろぎの親類だからと思ひますよ

女。本當に私達はこほろぎの親類かも知れませんわね。

A。僕が笛でもふけてあなたが、おどりでもおどれたら。

女。私はそれより、あなたと靜かにお話してゐる方がすきですわ。

（二人だんだんそばによりならんで腰かけ、手をとりあふ）

女。私は、本當にうれしいのです。私の心も身體も全部さしあげてもいゝ人に今迄一人も逢へなかつたの、何かあとにものたりないものがのこりましたの。

A。僕も實際うれしいのです。僕はあなたのやうな人がこの世にゐるとは本當に思へなかつたのです。

女。私は本當に仕合せです。

A。僕こそ。

（二人接吻する。XとB出て來、そつと近づき、簡單に二人を殺し、顏を見合はせ、うまくやつたと云ふ表情をし、二人にピストルをもたせ）

X。かうしておけば心中したとしか思へまい。

B。大丈夫だ。うまくいつたね。

X。うまくいつた。

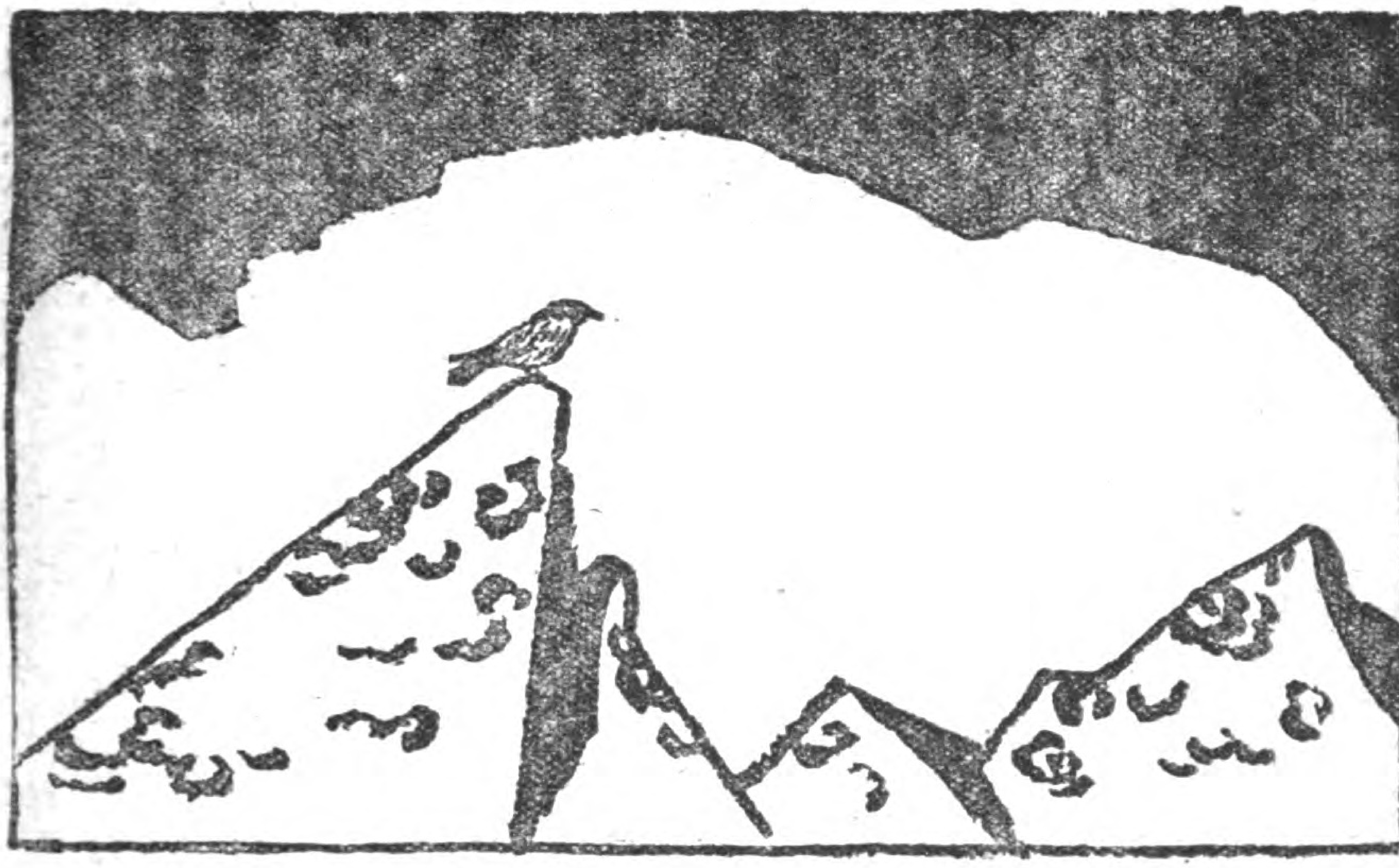
B。人を殺すことは一度經驗するとやめられない氣持がわかつたらう。

X。わかるね。

B。今度は誰を殺すかね。

（暗轉）

幕



旦那樣、子供、犬

（眞知子のつゞき）

野上彌生子

一

月が變ると、たび〳〵豫報されてゐた山瀨一家の上京が事實になつた。高等學校の學生監として山瀨が出席しなければならない會議が一週間東京で開かれた。それがすめば冬休であつた。

雪にでもなりさうな冷たい雨の降る朝、彼等は三つになる娘と、その遊び相手のアキルと呼ぶ茶色の小さいテリアを連れ、二つの行李と一つの鞄と、土產の林檎を詰め込んだ大きな木箱とで、ぐしよ濡れの圓タクにぎつちりになつて到着した。

未亡人は歡待の優しい表示で彼等を迎へた。遠く離れて住む娘や孫を久しぶりに見た悅びは、二三日つゞいてゐた偏頭痛や、眞知子に就いての不滿から近頃よく起こすヒステリ的な不機嫌を消滅させたかの如く見えた。同時に未亡人が山瀨を遇する態度は、同

に姉の夫でも上村に對してゐるのを嫌つてゐた。彼に、思ふには取り彼はれたが、輕蔑にされるとまでは行かなかつた。それは惡意のある差別と云ふより、同郷の縁故で、一時は家において學資の世話まで燒いた間柄の打ち解けた親しみの變形であつた。併しみね子が姉の辰子や妹の貞知子に比べて見劣りのせぬ器量を持つてをり、もう少し待つことに依つてより滿足な結婚をさせる見込があつたとしたなら、昔の書生で、そのころは單に中學の一教師に過ぎなかつた山瀬を婿にする決心は未亡人にも容易につかなかつたであらう。

「丁度似合ひものだよ。」

誰も不似合ひだと云ふものもなかつたのに、未亡人はその當座よくさう云つて辯解した。「派手な氣骨の折れる家では、みね子のやうな性分の者は一日だつて勤まりはしないんだから。山瀬さんなら氣心は分つてるし、面倒なしうとや小じうとがあるぢやなし、水入らずでどんなにでも氣樂に暮らして行けるから、それが何よりですよ。」

その點では申分のない選擇であつた。殊に山瀬は、道徳的に貞潔を守つたと云ふより、金がなかつたのと臆病なためもあつたのではあるが、兎に角三十で結婚するまで一般の男のするやうなふしだらには染まなかつた。彼の蓄積された十分な愛情に、兩人の妙なる妻を呼びかける時の調子に最もよく認められた。

「みねだ、みね子――」

手も足も胴も人並み以上に長い、かさばつた、その大きな身體とは反對に、優しい肝高い聲で彼は呼ぶ。それが稍ともつて、尻上りに發音されるため、頭文字のみがサイレントになつて

「ねこ、ねこ――」

と云ふやうに響いた。このことは隔てのない肉親の間で、いつも秘密な微笑の對象となつた。取り分け辰子は、妹婿を昔の書生部屋の山瀬と切り離して考へることが出來なかつたので、無遠慮にづかくからかつた。

「知らないものが聞くと猫を呼んでるのかと思つてよ。いつそみねとでもはつきり呼び捨てにしたら、どうなの。」

山瀬は度の強い、赤銅ぶちの眼鏡の下でちよつと赤くなりながら、同時に「みね子さん」とさんづけにして呼んでゐた時分には、それほど異様には響かなかつたかどうかを非常な眞面目さで尋ねた。

併しみね子自身に取つては、姉の冷やかしは要するに餘計なおせつかいであつた。彼女はそんな甘つたるい呼び方の代りに、何かひどい亂暴な言葉で怒鳴り立てられたとしても、素直なしほらしい返事で報いることが出來る位夫を愛し、その誠實と愛情に信頼し切つてゐた。彼がもとの書生であつたことさへ、彼女はそれをロマンチクに考へ

た。その頃から彼は自分を思つてゐたのだと極めてゐた。目立つて美しい姉と妹に挾まれて、少女時代からどこに行つてもちやほやされた覺えのないみね子には、これはたしかに嬉しい思ひ出であつた。それだけでも十分夫を大事にしなければならなかつた。そのうへ上村のやうに不品行ではないし（その點では、自分は姉の辰子よりは百倍も幸福だと感じてゐた。）酒も煙草も飲まないし、仕事に忠實で學校の評判はよいし、殊にあんな立派な學者なんだもの。——みね子はさう思つた。

彼を學者だと信じ込んでゐる妻の承認は、他の如何なる種類の賞讃や尊敬よりも山瀬には氣に入つてゐた。で、ほかのことではこの上なく鈍い夫であつたにも拘はらず、その學者としての特權を家庭に於て保留するためには、可なりデスポチクであつた。それをまたみね子の方では、學者の妻が當然忍ばなければならない美しい犧牲と考へてゐた。

彼女の忠實な心づかひは、到着のごた／＼がすんで、逗留中どの部屋に彼等が住むかゞ問題になつた時、明かにあらはれた。

彼女は妹に云つた。

『まあちやん、私たちどこでも構やしないけれど、宅の部屋だけは靜かでなくちや困るからどこか別のところにしてね。』

『いつもの部屋ぢやわるいの。あすこなら、次の六疊にお姉さんたちのものを置けるから丁度都合がいゝわ。』

『隣りぢやとても駄目。勉強してる時そばで騷がれたり話をされたりするのが、あのひとの神經に一番さはるんだから。』

『だつて毎日文部省に行くんぢやない。でなくも、旅先で大した勉強が出來る譯はないでせう。』

『まあ、どうしてそんな風に思つて。それどころぢやないのよ。田舍では參考書が十分でないのと學校の雜務のため思ふやうに纏まらなかつた仕事を、この機會に仕上げるんだつてあのひとは意氣込んで來てるんですもの。私だつてそれが出來れば帝劇にも三越にも用事はないと思つてるわ。え、何の研究かつて、委しい話はよく知らないけれど、書き上げればよつぽど立派なものになるらしいのよ。』

眞知子はそれ以上立ち入つて尋ねようとはしなかつた。この義兄が、專攻は哲學であつたが、文學その他に雜多な興味を持つてゐることと、同時に決して完成したことのない、また流行の婦人服のやうに斷えず變化してゐる研究題目を常に持つてゐることは、彼女自身も知り拔いてゐた。

北海道の長兄が暑中休暇に歸つた時に使ふ離れの八疊が終に書齋として選ばれた。そこはふだん締めきつたまゝでろくに掃除も出來てゐ

ないし、それに夏向でこれからは寒くていけないだらうと未亡人に注意されたけれども、みね子は、勉強にさへ都合がよければ彼は寒い位苦にはしないのだと云つた。

『ねえ、あなた、さうでせう。』

丁度そこへやつて來た夫の方を優しくふり返り、その承認を求めた。

「あゝ、結構だとも。――實際みね子の云ふ通りで」

書齋の靜寂を保つためにはそれ位の忍耐は平氣だと云ふことを山瀬は義母と義妹に對して主張した。『併しこれは僕に限らず、誰でも書齋生活を愛する學徒には共通の心理と云つていゝのです。その極端な例はまあカアライルなぞでせうが、さう、眞知子さんは知つてますね、彼の氣狂ひじみた音響嫌ひに就いては。夏目さんが書かれてから最もポピユラな逸話となつてるんですから。』

眞知子はとぼけてそんなものは讀んだことがないと云つた。山瀬の會話の中にうるさく出て來る西洋人の名前や引例を中斷するに役立つこれまでの唯一つの防禦法はこれであつた。併しその場合の否定は、ものがものであつただけいつもの如くは成功しなかつた。大學の講義まで聽いてゐる娘が、漱石の「カアライル博物館」を平氣で知らないと云ひ得ることは彼をびつくりさせた。

「驚いたなあ、漱石なんかもう古くて讀むに價しないと云ふんですか。おや、あなた方はいつたいどんなものを讀んでるんです。マルキシズムの議論とソヴイエト・ロシアの作物以外には興味がないなんて云ふのおや眞逆ないでせうね。もしあなた方の間にまでさう云ふ傾向が生じてゐるとすれば、全く驚くべきことです。」

話が以外に結果したのに眞知子は當惑しながら、聽講生の個人々々の讀みものに就いては委しくは知らないが、そんな偏頗な興味で讀書するものばかりではないだらうと云つた。

『その通り、偏頗な興味に陷らないこと、流行を追はないこと、書を讀むに當つてはそれが一番大切なことです。ところが中々旨く行かないんでしてね。』

山瀬は眞知子よりもだん／＼と未亡人を相手にして、『私の學校の生徒たちにしても、東京に何か一つの思想が移入されると、すぐ選擇なしにそれにかぶれるのだから困ります。從來のやうなオイケンとか、ベルグソンとか、タゴオルとか云ふのでしたら、まあ心配はないのですが、御承知の通り、この節の流行はそんな生やさしいものぢやないんですから油斷が出來ませんよ。從つて生徒監の職責が最も重大な意義を持つて來る譯でして。』

彼は非常に勿體ぶつてそれを云ふと共に、今度の會議も學生の危險思想取締と云ふことが眼目であると語つた。未亡人はそんな風なら困

舍の學校もはたで考へてるほど氣樂ではないだらうと同情した。それに對してみね子は、職務に就いては彼は非常に忠實であるために人一倍氣骨が折れるのだと云つた。

『それに學校ばかりでなく、歸れば自分の勉強つてものがこのひとにはあるでせう。ですから丁度二人分の仕事してるやうなものですもの。普通の人だつたら決して續きつこないと私思ふわ。』

『併し若い生徒を薫陶するのは中々愉快なものですよ。』

彼は妻の賞讃で一層上機嫌になりながら、『だから生徒監と云ふ役目には私は十分な滿足を持つてゐるのです。生徒が左傾するとか赤くなるとか云つたところで、要するに讀書の中毒に過ぎないんですからね。有害な讀物は絶對に禁止する、その代り適當な穩健な讀みものを選んでやる。――それさへ注意すれば間違ひの起る筈はないのです。幸ひにして私に、まあ此處だけの話ですが、大概のものに自分で目を通してゐるから、權威を以て選擇が出來るわけでして、――校長の如きもその點で非常に調法だと云つて悦んでゐられるんです。』

『それは全くよ、お母樣。』

みね子も急いで夫の言葉を裏書きした。『校長さんは誰よりも山瀬を信用して、殊に書物のことだと何でも宅の意見を聞くのですつて。ですから私、まあちやんなんぞでも、今度に義兄さんがわりに近くゐるんだから、その間いろ〳〵教はつておくといゝと思ふの。[illegible]度ために なつてよ。』

未亡人もそれは何より好都合だらうと云つた。併し眞知子は、大事な勉強を邪魔してはならないから、教はるにしても着手中の彼の論文が完成してからにしたいと云つた。

これまでのひつそりした親娘ふたりきりの、印刷のやうに正確であつた生活と並んで、今一つの別な、風變りの、稍々騷々しい生活が曾根家にはじまつた。

毎朝、茶の間の時計が六時半を打つ頃、彼等の小さい娘の喜美子は疳ずつた、けたゝましい泣聲できまつて眼を覺ます。

『ほら、母さん、きいちやんが起きたやうだよ。』

手持の庭掃除をすまして、この時分は離れた火鉢の前でひとりしづかに朝の茶を飲んでゐる未亡人が、斯う云つて洗面場か、でなければ次の化粧部屋にゐる彼女の娘を呼び立てる。するとみね子は楊枝を使ひかけてゐても、髮を結ひかけてゐても、そのまゝ自分たちの部屋の方へ飛び出し、赤いネルの寢卷にくるまつた、まだぴい〳〵泣いてゐる娘を、着換えの着物といつしよくたに抱へて、茶の間へ連れて來る。これに火の氣のない寢室よりそこの方が着替へさせるのに便利な

ためではなかつた。

　みね子は泣く娘の機嫌をとりながら云ふ。

「そんな聲して泣くんぢやないのよ、きいちやん。お父様がめゝ覺ましますよ。きいちやんのお父様は晩くまで勉強なさるんだから、朝だけはゆつくり寢せておいてあげなければ身體に毒よ。さうでせう、ねいゝ子だから、さあ泣きやんで――」

　併し、平生からあんまり丈夫でない上に長い汽車の旅で神經的になつた娘は、母の慰撫や、また祖母が茶棚から取り出したお菓子の甲斐もなくなほ執拗に泣きつゞけた。斯う云ふ場合の唯一の救ひは小犬のアキルであつた。みね子は半分子守唄のやうな調子を作つて高く呼ぶ。

「アキルや、――アキルや、――きいちやんのアキルや。――」

　これより先、犬はすでに廊下の硝子戸の外に駈けつけてゐた。彼はその長く引つ張つた甘へ泣きに依つて、小さい女主人が眼を覺ましたこと、そして自分の存在を必要とすることを知つてゐた。

「さあ、アキルがゐますよ。――いゝ子のお孃ちやま、お早うつて來ましたよ。――」

　實際アキルは先づ一番にこの挨拶をするため、沓脱の上にのぼり。硝子戸の板腰から約一尺のところに彼の狐に似た尖つた顏と二つの前脚をあらはにす。效果はてきめんであつた。小さい娘の顏に忽ち晴々しげな笑顏に變ずる。その代り窓にきれいに拭かれてゐる硝子板が、犬の足跡で泥だらけにされてしまふ。

　もし暖かに晴れた朝で、廊下が開け放たれてゐる場合には、緣側が同じ災を蒙つた。みね子は母の潔癖を知つてゐるので、沓脱から上には侵入させまいとして叱りつける。併しふざけ好きな小犬に取つては、主人の威嚇は勵ましであつた。彼は叱られたり、逐はれたりすればするほど痩せた栗色の身體で躍り上り、鋭い、突き出た口を開けて吠え、截られた短い尻つぽを、それ自身一つの獨立した生物のやうに振り立てながら、未亡人が掃いたばかりの霜の庭を駈け廻つた。

　新たな叱責と、新たな跳躍。――それを一層面白がる小さい娘のきい〳〵した叫び。――續く、性急な、はしやいだ吠え立て。――これ等の騷ぎが主人の安眠を妨害する點に於ては、結句喜美子の泣聲と變りはなかつた。みね子は頓て寢室の方から出て來た夫を見ると、はじめてそれに氣がついたやうに云ふ。

「いけないアキルねえ、お前さんがあんまり騷ぎ廻るから御覽、とうとお父様をおこしてしまつた。」

　四五日の經驗で、この姉夫婦とこれから一と月あまり暮らすためにはどんな態度を取るのが最もかしこいかを敏捷に判斷した眞知子は、

これ等の騒ぎにもなるたけ關係しないで、ひとり先に急いで食事をした。支度が出來るとまた急いで學校へ出掛けた。山瀬と連れにならないためであつた。眞知子はたつた一と朝でそれに懲りた。

その時も眞知子の方が先に家を出たのであつたが、五分と間がなかつたから山瀬の長い脚ですぐ追つつかれた。見ると彼の鼠つぽいズボンから上衣の後にかけてぼろ〱の土で汚されてゐた。彼は歩き〱手ではたきながら、アキルの悪ふざけに就いて怒つてゐた。眞知子もそれには同感であつたが、彼のむきになつてゐる風がおかしかつたのと、自分まで一緒になつて悪口を云ふのは小犬に氣の毒な氣がしたので、わざと、アキル自身の偉い名前からすれば、彼が勇敢過ぎるのも仕方がないだらうと云ふ意味を述べた。

『さう云はれりや大いにその通りですよ。何しろアキルですからね。』

彼は急に洋服の泥を忘れたかの如き愉快な色を角ばつた顔に浮べ、同時にその種類の知的なウイットは、彼女のやうな教養ある婦人でなければ云へない言葉だと賞め立てた。

眞知子は自分の無思慮な口出しを後悔した。斯う云ふ調子につゞく彼のペダントリには彼女はもう可なり悩まされてゐた。その時も早速それがはじまつた。

山瀬はあの小犬にどうしてギリシアの半神的英雄の名前を自分がつけたか知つてゐるかと訊ねた。眞知子は勿論知つてる筈はなかつた。

『流石にこれは分りませんね。』

彼は非常な得意さでそれを云ひながら、アキルはメエテルリンクの家に飼つてゐた犬の名前だと説明した。『メエテルリンクは蜜蜂なぞに就いても立派な研究をした如く、昆蟲や花や動物に興味を持ち、殊に犬は色んな種類を飼つたもんですよ。メエテルリンク夫人の——今のぢやありません、もとの奥さんのジオゼツト・ルブランですが——それの著した『メエテルリンクの犬』と云ふ書物を見ると彼の飼犬のことがすべて出てゐますがね、中々面白い書物ですよ。硬い本も結構だが、若い婦人はあゝ云ふものも大に讀むべきですな。趣味的な多方面の知識を得る點から云つても必要ですよ。』

それにしても、メエテルリンクの飼犬のことまで自分が知らなければならないであらうか。——眞知子はその辯駁で彼を妨げようとはしなかつた。それは話を變化づけ、一層長引かせるに過ぎないであらう。併し、彼女が黙つてゐるのを素直な傾聴だと信じ込んだ山瀬は、容易にその舌を休ませようとはしなかつた。終に彼の驚くべき講義は電車の中まで續いた。ラッシュ・アワの車の隅の吊皮に、胸の窪んだ、ひよろ長い身體をやつとぶら下らせながら、さうして周りの好奇的な嘲視を身ひとつに集めながら、平氣な、寧ろひそかな自持を以つて、彼

は七匹の飼犬の各々の名前や、その習性や、それに絡んで生じた逸話に就いて語らうとした。が、とうとう白山上の乗換場が來て、話の途中でその吊皮をはなさなければならなかつた時、彼は最後の熱心を以つて附け加へた。

「とにかく、今度の日曜にでも丸善にいつしよに行きませう。さうして何か斯う云ふ風な書物を見つけてあげませう。尤も、僕はもう二三度覗いて來たんですがね。何度行つても飽きないのは彼處ですよ。實際僕等が東京に出て來る唯一の樂しみは丸善にあるのです。」

二

日曜日は美しい靜で、おだやかに、晴れ／＼と明けた。長い習慣でこの日だけ不斷より小一時間寢坊することに極めてゐた眞知子には、取り分けその朝が新鮮に感じられた。同時にまたそのうらゝかな日光は、彼女の中に隱されてゐた或るひそかな期待に、あらたな望を附け加へた。斯んないゝお天氣なら姉たちは多分どこかへ出掛けるであらう。——そのあとの、暫くぶりの、靜かな留守をたのしみたいと彼女は思つたのであつた。

眞知子のやうな性情で、長い間孤獨に暮らし馴れたものに取つては、どんな肉親の間でもこの感情を取り除く譯には行かなかつた。またそれに依つて、彼女がみね子のこの上なしの善良さに對して持つてゐる同情や、小さい姪に對する明白な愛情——この脆弱い甘つたれつ子に、彼女を時々手こずらせたにも拘はらず——を傷つけることにはならなかつた。山瀬自身に對してさへ、上の姉の辰子が彼を馬鹿にしてゐるやうな仕方は、眞知子はしてゐなかつた。餘計なお講義をはじめさへしなければ、彼は正直な、策略のない、善人のひとりなのだと考へることを知つてゐた。

珍らしく皆んなで揃つた朝の食卓で、眞知子は自分の待つてゐた話が話出されるかどうか聽き耳を立てた。併しみね子は、その日特別に機嫌のわるい娘をすかすのと、小さい匙で食べものを口に入れてやるのに忙がしかつたし、山瀬は山瀬で、庭先の犬の監督で食事の間も立つたり坐つたりばかりしてゐた。

食後、女中の後片づけに手傳つてゐた所を眞知子は姉から呼ばれた。

「まあちやん、ちよつと。」

行くと、すぐ用事を云はうとはしないで、みね子はひとり先に立つて眞知子の部屋に入つて行き、それから出し拔けに尋ねた。

「あんた、今日義兄さんと丸善へ行くのだつて。」

眞知子はびつくりした。姉の樣子で、なにか二人だけで話したいのだとは察してゐたが、その瞬間は何に依つて生じたことか分らなかつ

た。彼女はそんな約束もなければ、そんな積りもないと答へた。

『でも義兄さんはあんたを連れて行つて、なにか書物を探してあげるんだつて云つててよ。勿論自分の買ふ本もあるのだけれど。』

電車の中での山瀬の言葉がふと思ひ出された。が、それは彼女だけの考で、眞知子には關係のない話であつた。そんなことになつて堪るものか。――彼女は今朝からの秘密な願望か、思ひもよらぬ結果に逆轉しさうなのに殆んど恐れを抱きながら、今日はそれどころではないと云ひ張つた。

『ノートの整理だつて、ほら、斯んなに溜まつてるのよ。』

『それぐらゐ、歸つたつて出來るんでせう。』

みね子は妹が示さうとした机の上の堆積には多くの注意を拂はうともしないで、どうか自分のために行つてくれまいかと頼んだ。『斯んなことほかの人には話されないんだけれど、今日はまあちやんが一緒だつて聞いたんで私いゝ幸ひだともつてゐるのよ。だつてね、あのひと欲しい書物だとあとのことなんか何んにも考へないで買ふ癖があるんですもの。今度だつて丸善に寄つたたんびに買つて來てるわ。そりや學者に書物が大切なことは私だつて知つてるし、あのひとが他のものは辛抱しても書物を買はうとする氣持も分かつてる積りよ。どうして當り前の人には決して出來ないことですわ。ね、さうでせう。ですから今までもそんなことでなんか云つたりしたことは私一度だつてないのよ。』

併しいろ／＼都合があるので、歸るまでにさう無暗と買ひ込まれては困るのだと云ふ意味を、恥かしさうな、また何か夫に對して惡たくみでもしてゐるやうな、おど／＼した風で打ち明けた。

この姉の斯う云ふ人の善さと單純さの中には、いつも眞知子を驚かす或るものがあつた。私たちの姉妹にどうして斯んなひとがあるのだらう。――色が白いだけで、目立つた特長のない、髮毛の赤い、いつも眠さうな眼をしたその圓い顔が、俄かに美しくさへ見えた。併しそれに釣り込まれることは今日だけは警戒を要したので、眞知子はわざと強情に、たとへ自分がついて行つたとしても、山瀬が買はうとするものを止める譯にはいかない筈だと云つた。

『止めるつて、いちがいに止めることは誰にだつて出來やしないわ。』

それで拒絶られまいとして、みね子は一生懸命になりながら『たゞまあちやんなら、あのひとが何か買はうとする場合に、その書物が今買つておかなければ後で買へないものかどうか、またさし迫つて必要なものかさうでないか、見分けがつくでせう。さうよ、私たちには云へない批評や意見が立派に述べられるんだわ。義兄さんだつて、まあちやんの云ふことなら乾度聞くともふの。輕い／＼冗談だつて賞めてる

んですもの。だからどうぞ一緒に行つて見て。ね、いゝでせう。お願ひだわ。」

小さい喜美子がまた泣き出した。奉公人の声でみね子を呼んだ。

「はい、——たゞ今。——ぢや頼んでよ、日曜だから早い方がいゝわ。」

みね子は娘の泣聲にせき立てられ、あはてゝ部屋を出ようとして、急に引き返したと思ふと、低いさゝやきで附け加へた。「——このことお母様には内證よ。だからその積りで。——だつてね、私が或る話をするとお前のとこで斯る事はないだらうつて云はれるの。書物のことを知らないからよ。私決してそれは云はないわ。はい、はい。——今すぐ行きますよ。」

二時間の後、山瀬と眞知子は丸善の二階の隅の一つに立つてゐた。山瀬は長い腕を伸ばして書棚から一冊の書物を抜き出す。先づ表紙から装幀を調べ、タイトル・ペイヂを開ける前に裏の見返しに鉛筆で書かれた定價に眼を留めてから、序文があれば序文を、なければ目録から本文をぺら〳〵とめくつて見る。それからばたんと閉ぢ、もとの空隙へ押し込む。今度は二三冊向うのを一冊抜き出す。同じ順序と同じ方法でぺら〳〵やり、また押し込む。それから更にまた新たな一冊を。——このことを彼は非常な熱心と性急で繰り返しながら、同時にそれ等のものから發散するインクと洋紙とクロウスと糊の、所謂丸善らしい匂を享樂するために鼻翼を怒らせた。

眞知子は、正直に云へばその時分にはさまで多くの興味を持たなかつたので、お附き合に二三冊手に取りながら、彼女がこの店に入る度にいつも思ひ出す一つのことをその時も頭に浮べてゐた。

まだ女學校の時分であつた。會話の出教授を受けてゐたミス・ブラウンと呼ぶ英國婦人が、南アフリカにゐる兄が重い病氣をしてゐると云ふ報知を得て見舞に行つた。往復四ヶ月を費して旅行から歸つた時、ミス・ブラウンは兄が病氣になる前近くの森で射殺したのだと云ふ豹の皮を一枚持つて歸つた。眞知子への土産としては、土地の動物植物のことを書いた一冊の綺麗な書物を呉れた。何かもつとよい書物を見つけたかつたが、船着きの海岸から四百マイルも奥に入つた土地のことで、

「丸善ほどの本屋もないのです。」

さう云つた後から、白髪の英國婦人は急に氣がついて云ひ直した。

「丸善のやうな本屋がないのです。」

その間の危い君と己の使ひ分けは、いつ思ひ出しても眞知子には面白かつたと共に、このちつぽけな一軒の本屋が、日本の近代の文化史の上に持つてゐる重大性を若しミス・ブラウンが理解することが出

來たならば、彼女はアフリカの豹のゐる田舎町の書店とそれを一緒にするやうな誤をばしなかつたゞらうと考へた。

早かつたので來たては割にすいてゐた部屋も、いつとなく立て込んで來た。あらゆる面の書棚と、あらゆる通路の陳列臺に沿うて、この店特有の客と、その客の殆んど七割を占めてゐる學生が群がつてゐた。同時にまたこれ等の學生の中には、丸善を目的に來たと云ふより、銀座シネマが開くまでの暇潰しに入つたに過ぎない幾割かゞたしかにあつたので、そこに田舎風の紳士と連れ立つてゐる洋服の美しい眞知子を見ると、彼等は頓て出逢ふスクリインの女たちのために用意してゐる嘆賞の眼つきを、露骨に前拂ひしながら通つた。

眞知子は斯んな時の癖で、左の眉根を寄せ、瞬をひやゝかに硬ばらせて彼等をやり過した。いつまでも同じ書棚の前から離れようとしない山瀨も少しぢれつたかつた。併し、その間眞知子が周圍に對して全然無關心であつたと云ふことは出來なかつた。彼女は時々當てどのない視線をぼんやり左手の眞鍮のふちのついた階段の方へ注いだ。何をその窪みから待ち設けてゐるのか自分でも氣がついてはゐなかつた。がそのうち、數人の高等學校の學生に續いてのぼつて來る、一つの黑い、見覺えのある型の帽子が眼に入つた。彼女はどきんとし、あはてゝよそを向きながら、瞬間の女らしい素早さで、もう一度鍔の下の顏をたしかめた。知らない人ではなかつた。——間違ではなかつた。この發見は、十日前築地で出逢つた時彼が挾んでゐた包紙と、その日この入口で彼を見たと云つた富美子の言葉が、今までどんな風に自分に作用してゐたかを同時に眞知子に發見させた。彼女の顏はひとりでに赤くなつた。そのまゝでは其處に立つてゐられない氣がした。で、今度は踏み臺を使つて高い棚に手を出してゐる山瀨に、ドイツ物のところへゐるからと云ふことを斷り、反對の側にある陳列臺の方へ行つた。口實ばかりではなかつた。彼女はもしあつたら、さうしてあまり高價でなかつたら、欲しがつてゐた米子のためにロオザ・ルクセンブルグの書簡集を買はうと思ひついたのであつた。

書物はすぐあつた。學校で指定された參考書で、買つておけば便利なものも一册見つかつた。併し二つながら買ふとすれば眞知子の小使は幾らも殘らなかつたし、餘分のものを母から貰ふのは一番氣の引けることであつた。彼女は最初のもくろみ通り書簡集だけを拔き出し、——その方がずつと安くもあつたので——勘定臺に持つて行つた。皮の手提から金入を出して支拂をした。店員が包んで紐をかけてくれるのを立つて待つてゐた。

と、すぐ後で低いつゝましい聲が呼びかけた。彼女は再びどきんとした。と云ふよりその響きが、前の黑い帽子を見た時の驚きと、それ

が與へた强い感じを今一度彼女の腦裏に鮮明にした。併し振り向いた彼女に慇懃な會釋をかけたのは、思ひがけない河井であつた。

『まあ、どなたかと思ひましたわ。』

待ち設けと違つたことは、この際却つて安心であつたから、眞知子はいつもより親しげに話しかけた。『いま入らつしやいましたの。』

河井は階段をあがるとすぐ彼女を見つけたのだと云ひながら、番頭の渡した紙包を見て、たしかに挨拶だけではない留意で尋ねた。

『何かありましたか。』

『友達の欲しがつてゐた書物があつたので。』

名前は別に打ち明けなかつた。本當を云へば、その著者の有してゐたやうな思想や主義に對して、また死で終つた彼女の勇敢な戰に對して、階級的に當然敵の地位に立たされてゐる彼がどんな批判を持つであらうかは、河井が單なる金持でないだけ眞知子には興味の深い想像であつた。併し打ち解けてそんな話をするほどの間柄でもなければ場所でもなかつた。眞知子はそのまゝ默つて彼の歩き出すのを待つた。河井は何故かすぐには彼女の前から去らうとしなかつた。その空虚は、それほど不自然にならないうち、向ふから近づいて來た山瀨に依つて救はれた。

『田舍の義兄ですわ。』

さう云つて、眞知子がその方へ歩きかけると、河井は持前のあの靜かな落ち着きであとに從つた。彼等は食堂のならびの、陳列かなんかの展覽館に使はれてゐる部屋の前で出逢つた。

眞知子の紹介が簡單であつたので、山瀨はその若い紳士について、初めは十分な概念をつくることが出來ないらしかつた。が、河井の苗字と考古學と云ふ言葉が何かを思ひつかせたやうに、彼は相手の立派な風采を無遠慮にじつと眺めてから、眞知子に向つて一二のことを尋ねた。彼女は輕いうなづきでそれに答へた。と、急に滿足さうな微笑が彼の顏いつぱいに擴がつた。山瀨はこの金持の考古學者のことを知つてゐたのであつた。

『實に奇遇で——』

あはてゝポケットから肩書つきの大きな名刺を取り出しながら、彼は、同じ學校の歴史の擔任者で、河井が援助してゐる考古學の或研究會に屬してゐる同僚の名前をあげた。『××君からよくお噂を承つて居りましたので、いつか是非お目にかゝりたいと考へて居つた次第でした。』

河井は誰に對しても區別のない鄭重さでこの挨拶に報いた。それからまた辭令だけでない友情を以つて遠くにゐるその會員の動靜を尋ねた。

『この夏休に出て來られた時には、ちよい〱お逢ひしたんですが。』

『そんな話で。お建てになつてゐる研究室の模樣もいろ〱伺ひました。非常にお立派ださうで。××君大に羨やましがつてをりました。何しろ河井さんは、三拍子も四拍子も揃つての仕事だからかなはないつて譯です。は、は、は。』

このとつぴな笑ひに、部屋の向側の書棚にゐた人たちまでこちらを振り向いた。さうでなくてさへ、彼の癇ずつた、變な笛のやうな高調子は、大きい聲は勿論、足音も立てさせまいとしてゐる、無言劇の登場者じみたこの店の客の間では、この上なく異常に響いた。併し山瀬は斯かる場合の田舍者らしい無頓着で、彼の[illegible]は河井如き境遇に於て初めて可能で、自分等のやうに一冊の參考書を買ふにも財布を氣にしないでは買へないものが、何か纏まつた研究でもしようとするのは容易ならぬ困難だと云ふ意味をしきりに述べ立てた。彼の未完成の論文を、金と時間のないことに當に原因づけてゐる彼としては、これは單に意見ではなく實感であつた。それだけ雄辯になり、それだけ聲が高くなつた。

この初對面の人の、場所柄も辨へないまくしたてには、河井もちよつと驚いたやうに見えた。が、そのあとから彼の顏はすぐいつもの悠揚な平靜を取り戻した。彼は如何にもゆつたりした辛抱强さで聞いた。眞知子はそばでそれを見てゐると、二人のあまりに著しい對照のために、河井を氣の毒に思ふより皮肉で面白かつた。併し、あんまり彼を困らせないやうにすることは自分の責任だと考へたので、山瀬がまだ何か云ひかけて咳をし、ズボンのポケットから汚れたハンケチを引き出して鼻をかんでゐる隙に、急いで言葉を入れた。

『あのう――』

山瀬の口を封ずるために、眞知子は彼の知らない多喜子のことでも聞かうとしたのであつたが、河井に出逢つたたび彼女を話題にするのはお追從じみる氣がした。さうなればまた研究室のことでも尋ねるより外に仕方がなかつた。『もうよつぽどお出來になつたのでせう。』

『建物ですか。』

『えゝ。』

『大工の手だけはどうにか離れたわけなんですが。』

內部はまだ少しも整頓されてゐないと答へた後、彼はふいと非常にたのしい事を考へついた面持で、若しよかつたら、今日歸りにいつしよに寄つて見てはくれまいかと申出た。

『まだ散らかつたまゝで失禮なんですが、何かお氣のついたことがあれば注意していただきたいし、山瀬さんの御批評も仰ぎたいと思ふのです。如何でせう、山瀬さん。』

思ひがけないこの摺傷は山瀬を子供のやうに悦ばした。彼は是非お伴をしたいと云つた。

「ねえ、眞知子さん、いゝ機會だからお邪魔さしていたゞきませうか。」

「でも。わたくし――」

「なにか御都合がおありですか。」

「別に。ですが。」

眞知子は、返事を待つて注意深く自分に注いでゐる河井の眼から眼をそらし、手首をのぞいた。十時過ぎたところであつた。おひるまでにもう二時間しかないこと、それにほんの買物だけの積りで着て來た手輕な服裝のこと、それからまた噂に聞いてゐる、河井家の貴族的な、多分ひどく威張つた、氣むづかしい母堂のこと、若しそんなひとに逢ふやうになるとすれば。――これ等の考が素早いひらめきで眞知子の頭の中を通過した。殊に最後の想像は考へただけでもおつくうなことであつた。さう云ふ生活と趣味に生きてゐる老婦人から、何かよい評價を贏ち得ようとは彼女にはさう考へられなかつた。寧ろ望まうともしなかつた。それは多喜子には大切かも知れないが、自分には不必要だと眞知子は思つた。實際さう云へば、彼等といくらかの接觸點を持つてゐるだけでも、彼女の現在の氣持には餘計なことであり、結局は面倒な、時々うんざりしてゐる自分の環境に、あらたな煩はしいものを追加するに過ぎなかつた。

河井は、眞知子が逡つてゐるのを見ると、自分が何か無禮な要求でもしたかの如く綺麗に剃刀のあたつた頰をこゝろもち赤くした。にも拘はらず彼は自分の思ひつきを捨てようとはしなかつた。さうしてもう一度鄭重に誘ひの言葉を重ねた。

「どうにかしてお繰り合せがつけば非常に仕合せなんですが。――それともどちらへかお廻りにでもなるんでしたら――」

「いゝえ、さうぢやございませんの。」

眞知子は前よりはきつぱりした調子になつて『すぐ歸るやうに云つておいたので、母や姉が待つてゐはしないかともつて。』

『それだけなら、眞知子さん構はないぢやありませんか。』

彼女のしりごみで折角の機會を取り遁すのを恐れた山瀬は、その時やつと鼻から除けたハンケチを急いで始末しながら、遮つた。『河井さんがあゝ親切に仰しやつてゐられるんだし、僕としても××君にいゝ土産話が出來るんだから。ね、いゝでせう。殊にほかのお宅ぢやなし、それも僕といつしよだから、歸りの時間が少しおくれる位云ひ譯は出來ますよ。併し、なんですね。そんなことをお嬢さんらしく心配するところを見ると、あんたも想像したほどモダンでもないんですね。は、は、は、」

ひとを馬鹿にしてる。――一種こつけいな腹立たしさと氣恥かしさ

で眞知子は思はずまつ赤になつた。その瞬間、とつさの判斷で決心を變えた。河井の言葉に從つて矢張り彼といつしよに行かうと考へた。その同伴者のために彼等がそこで陷つたもの笑ひな狀態から脫するには、それが最もよい方法であつた。また一方から云へば、來る時みね子に賴まれて來た彼女の秘密な義務も立派に果される譯であつた。

　山瀨はまだ一册も買つてゐなかつた。

　河井の自動車が待つてゐたので、彼等は日本橋から靑山の彼の邸まで二十分とは費さずにすんだ。大きな、寺のやうな、銅の金具がまつ靑に銹びた門と、緩い勾配のついた曲つた路で導かれた、同じやうに昔風な廣い戸板のついた玄關は、正面に置いた墨畫の巨大な鷲の衝立と共に眞知子には少し意外であつた。中等科を出るとすぐオクスフォウドに送られたと云ふ履歷から、彼の住宅に對しても彼女はもつと違つたものを想像してゐた。が、矛盾は感じたあとから忽ち消滅した。

　眞知子はその時遠い奧の部屋から傳はつて來る鼓の音を聞きつけた。この優美に古めかしい樂器の響は、それが彼自身の家であるよりも彼の母の家であつたことをはつきり彼女に意識づけた。

　河井は、式臺に出迎へた袴をつけた老人の執事と、丸髷に結つたしつかり者らしい女中頭の二人に、どちらにともなく、師匠が見えたのかと尋ねた。一時間ばかり前に見えて、お稽古がはじまつてゐるところだと女の方が答へた。それで彼等は上らず、そのまゝ研究室の方へ歩いた。

　車寄前の植込についた入口から、かなめ垣や、櫻の木立や、廣い公ざれた花圃に沿うて廻るやうになつた裏庭の、低い松の中に見出された建物は、毎日學校に行く時見て通る駕籠町の東洋文庫を眞知子に思ひ浮べさせた。尤も大きさは四分の一ない位であつたが、材料と樣式と色の類似から、二つの建築は同じ感じに出來上つてゐた。

　ひとわたり內部の部屋々々をめぐり、二階の殆んどすべてを占める場所の、まだ陳列を終へてゐない彼の貴重な蒐集の一部分に眼を通してから、そこだけ家具の入つてゐた階下の小部屋で茶菓のもてなしを受けた時、眞知子はそのことを話し出した。

『さうはお思ひにならない。』

『さう仰しやられて見ると、成るほど外觀だけは幾らか似てるやうですが。』

　彼は小間使のくばつた紅茶茶碗を取り上げ、しづかに脣にあてながら、併しその內容を思ふと、自分の蒐集などは種類が違ふだけでなく價値に於て比べものにならない貧弱なものだと云つた。

『まあ仕方がないのです。僕のやうな金のないものには始めから無理

な仕事なんですから。』

『瀧井さんにさう云ふ言葉を伺ふのは甚だ奇怪だと思ひますね。酒屋の主人から酒の飲めない不平を聞かされるやうなものでー』

山瀬は異議よりはそこに挟んだ自分の珍らしい、得意な洒落に就いて彼女の同意を求めた。『ねえ、臣知子さん。』

『いや、奇怪かもしれません。』

いつになく臣知子の返事を待たうともしないで、瀧井は續けた。『あなたは一冊の書物を買ふのも心配なしには買へないと云ふことをさつき仰しやつたが、その點だつて違ひはないのです。贅澤品を買ふ位ならそれらをあなたにあげたとしても、研究的に使はれなかつた發見でもやりたいと云ふ野心を起した、私の自由になる程度の金では到底追ひつかないんですからね。そこへ行くと外國の政府や富豪の仕事には實際羨ましいのですよ。』

瀧井は英國の最近の學界に於ける發表や、米國の學者が熱帶に試みた勝れた計畫をあげ、本來なら自國民の出生を外國人の手で取り返されることは、日本の若い學者に取つては感情上忍べないものがある譯だと云ふ意味を、臣知子が少し驚き、その目を瞠つた、浮き〳〵した態度で大膽に彼の顏をうち守つたほどの强い口調で續けた。いつ逢つても靜かに落ち着いて、性格的に激しい興奮を感じ得ないかの如く見えた彼が、この場合にあらはした熱情は臣知子にもの珍らしかつた。

山瀬は瀧井の意見に共鳴して、彼が金の不足を訴へたことに對する自分の抗議は忘れてしまつた。さうしてそれに就いてなほ自分の考へを附加するため、話の段落をうづ〳〵して待つてゐた。で、河井の言葉がちよつと途ぎれた際に、彼は口に持つて行きかけた茶碗を中途で受皿に戻して勇敢に突入した。

自分はこれでも官吏の端くれだから政府を非難する權利は持たないのであるが、と前置をしてから、彼は當局者の冷淡と、社會や金持が知識の探求に無理解なために、日本の學界と學徒が――そこに『我々』と云ふ言葉を挿むのを忘れなかつた――如何に多くの損失を蒙つてゐるかを論じた。とり分け金持の惡口をうんと云ひ、彼等は無知で、威張ることばかりが好きで、私慾と贅澤の目的以外に金の使ひ途を知つてゐるものは殆んどゐないのだと云つた。

『どうかして一人だけでもいゝから、學問に對して正當な理解を持つた金持があつてくれると大いに助かるんですが。』

そゝつかしい山瀬は、それ等の言葉で瀧井自身をも眼中の中に加へ込んでゐる危險には氣がつかうともしないで。『そりや私にだつて分かつてはゐます。斯う云ふ期待をするのはする方が間違だと云ふこと位はですね。だが、萬一にも外國に見るやうな篤志な金持があらはれて

御意見の如く東洋方面の發掘事業は英米人を待つまでもなく、日本の學者の手で立派に遂行されると云ふことになつたら非常に愉快だらうと思ひますね。」

雨井は何等の皮肉も交へない朗らかさで、自分もさう云ふ人が出てくれるのを希望する旨を述べた。それから、山瀬自身も××氏と共通の興味を有してゐるのかどうかを尋ねた。

「いや、何んにも分りはしないんですが、たゞ書物だけはこれで色んなものを讀み散らす方ですから、御存じのミハエリス美術考古學史――あれを、調べることがあつて讀んで見たのが病みつきなんでして」

「あの書物は誰にでも氣に入られるやうですね。」

「通俗的だと云つたところで、あれだけ立派な内容を持つてゐれば我々には非常に有益ですよ。さう云へば、一二年前どこからか翻譯も出たやうでしたが。」

その言葉で山瀬は、自分は原書で讀んだのだと云ふことを明白にした後、彼はいつもの筆法で眞知子にも是非一度は讀んで見るやうにと勸め、日本では知識的だと云はれる婦人でも、斯んな種類の書物になると少しの注意も拂はうとしないと非難した。二日前の「メエテルリンクの犬」から「美術考古學史」――何と云ふ奇拔な飛び移りであらう。この工合だとホッテントットの民謡詩まで推薦されさうな氣が眞知子はした。

「考へて見るに、この傾向は婦人に限らないんですね。」

眞知子が讀まうと云ふ返事をすぐにしなかつたので、彼はそれを近ごろの知識階級の一般的な缺陷にまで延長した。「現に私の學校の生徒で、日曜の度に××君に連れられて銀をかついでは出掛けてゐたやうな連中でも、大學に進む頃には土の底の瓦屑や素焼の破片が、プロレタリアのパンになり得るかと云つた調子に變るんでして、困つた流行ですよ。何等の新しい發見もなく、たゞかぶれるんですからね。」

要するに、一二冊のはやり翻譯書か、無邪氣な考古學のアマテアまで一足飛びに新興科學の追隨者に改宗させるのだと續けるのを聞くと、眞知子は我ともなく口を入れる氣になつた。彼女は、山瀬が指摘したやうな變化は、現代の若いものに取つては已むを得ないことだと抗議した。

「さうなるのが當り前ですわ。いつとう自然なことなんですもの。」

「自然。ほう――そりやどう云ふ意味です、眞知子さん。マルキシストになるのを自然だと云ふ思想は――」

「いゝえ、それは別問題よ。私はたゞ土の下と土の上のことを話してゐるだけですわ。」

「土の下と、土の上――」

「二つを比較した場合には、その人の傾向でいくらか違つた考へをするものがあつたつて、一般には誰だつて、地の底の過去の世界の人間がどんな生活をしてゐたかより、地上の現在の社會をどうして住み心地よくするかの方に、關心を持つのは當然だと云ふのですわ。」

「どうも。あんたのやうなお孃さんまでがさう云ふ論法に出て來るんだから。」

山瀨はてれ隱しに眼鏡をはづし、上衣の綺麗な方のハンケチでしづかに拭きながら、これにつけても大勢の若い學生を預る生徒監としての自分の職責が如何にむづかしいかを述べ立てた。

本統を云へば、眞知子もそんな話は河井の客となつてゐる今に於て、適當でもなければ興味でもないのを知らないではなかつた。が、彼女をそこまで驅り立てた感情には強い核が潛んでゐた。眞知子は關や米子のことを考へた。何が初め志望した文科を彼から捨てさせたのか。――また何が頭のよい教師や事務員にならないで、彼女をあんな貧民窟で働かせてゐるのか。――これ等の行動を裏づけてゐる苦悶まで、單なる觀念的流行思想の模倣に歸しようとするのなら――

併し眞知子はそれ以上山瀨を相手にする氣はなかつたので、一鉢の白の高い蘭で飾られた茶卓の向側から、その間つゝましく耳傾けてゐた、河井の方を眺めた。あのひとは私たちの論爭をどんな氣持で聞いてゐるのだらう。自分とあれほど近い關係のある私達に對して、何故あゝ閑雅な動搖のない顏つきをしてゐられるのだらう。どうして何等かの意見を摑まうとしないのだらう。さつき發掘のことが話された場合に示したあの熱情はどこへ隱されてゐるのだらう。――貴族や金持によくある、自分の興味のあること以外には決して留意を持たうとしない、また地位と金の力に依つてその我儘を通し馴れた、無意識的なエゴイストの一人なのだと眞知子は河井を考へた。

二度目のお茶が配られた。眞知子はそれを空にしたのをよい區切にし、膝の上においてゐた、山瀨の餘計な質問を避けるためロウザの忍ばせてある手提を取りあげると、もう暇乞をしなければならない時刻だと云ふ言葉で、辭見を促した。

河井は客と共にしづかに椅子から離れながら、稽古のために時が逢へなかつた殘念さを彼女に代つて詫びた。それをきつかけに、山瀨はさつきから云ひたくて堪らなかつたらしい鼓の音の優美さと、彼女の古典的な高尚な趣味を大げさな形容詞で讃美した。眞知子自身から云へば、逢はないですむことは寧ろ仕合せであつたので、そのためには彼に負けない賞讃をその二つに擲つてよいと思つた。

が、建物の外に出ると、後庭では玄關で洩れ聞いたよりも一層よく響いてゐた、さうして今までは煉瓦の厚い壁で遮斷されてゐると考へ

られてゐた鼓の音が、いつの間にかやんでゐた。それにすぐ氣がついたのは河井であつた。

『――すんだのかな。』

連れ立つて、松の間の砂利を敷いた路を步きかけた彼は、さう云ひながら、もし稽古が終つてゐたら、あちらへ寄つて逢つて行つては呉れまいかと改めて頼んだ。山瀨は元より異存はなかつた。眞知子は時間のないのと家で待つてゐるのを口實に、今日はこれで失禮したいと云つた。が、松を拔け、花圃の端に立つた白い溫室を臨む場所に出た時、さうしてそこには彼の母の好みで、茶卓に置いてあつたやうな蘭のみが培養されてゐるのだと聞いて、序に覗いて行きたいと云ひ出した山瀨の提案にまで反對する譯には行かなかつた。

溫室はさう廣くはなつた。が、云はれた通り棚の鉢は悉く蘭であつた。その多樣な種別は、それ〳〵特長を異にした花の姿と香氣に依つて、これ等の植物もまた彼の研究室の標本に劣らない貴重な蒐集であることを示してゐた。

眞知子は、山瀨が珍らしい鉢の前に立ち留まつては河井を相手に仰山な賞め言葉を並べたり、また花瓣のそばに子供らしく鼻を持つて行つて見たりしてゐる間に、ひとり先になつて步いた。彼女はだん〳〵氣がせいてゐた。それに何しろ暑かつた。入口の札にかゝつた寒暖計は夏と等しい溫度にのぼつてゐた。その溫氣と、硝子の屋根いつぱいに漲つて放下する眞晝の太陽は、その中に蒸された強い花の香と共に、焦茶の深いフエルトをかぶつた眞知子の顳顬をづき〳〵させた。で山瀨が天井から釣り下された、淡黄色の蝶のやうな花をつけた鉢を仰ぎ、支那から何度取り寄せても失敗してゐたのが漸く今年咲いたのだと云ふ河井の說明を賞嘆してゐるのをあとに殘し、構はず戸をあけて出た。すうつとした外氣の感觸が快かつた。彼女は小さいハンケチを出して汗ばんだ額と襟を拭いた。それから靴の爪先でまつ直ぐに立ち、兩手を外套のうしろで組んで大きく背伸びをすると、そのまゝ旅客が汽車の留つてゐる間際のプラットフオウムを散步する時の恰好で、長方形の溫室の長い片側の邊に沿うて步いた。

花圃の向ふの方では、二人の園丁が花のあとの秋薔薇らしい小さい列になつた灌木の手入をやつてゐた。彼等の鋏は、それ以外何等の物音も聞えない、また誰ひとり人影がないあたりの虛無に、一定のリズムでより深い靜けさを刻みつけた。眞知子は步きながら金屬性の單調な響を耳にし、眼の前の明るい、空つぽな、土の擴がりを眺めてゐると、家からも友達からも社會からもかけ離れた、なにか恐ろしく遠い場所に來てゐる氣持がした。事實、鼓や、蘭の花や、あの考古學の研究室や――この一瞬のすべてのものは、彼女の心からはあまりに遙か

な別の世界であつた。」

と、蹤跡的な不審な態ひつきで、眞知子は默りに粘子のところへ寄づて行からうか知らと云ふ氣になつた。ロウザを小包にする手數が省けるし、それに一二日前貰つた葉書に、仕事を休むほどではないが風邪氣味で少し弱つてゐるやうに書いてあつたので、樣子が見たかつた。おくれついでに、山瀨にはさう云つて途中から別れさへすれば――その時、溫室の入口に起つた話聲が眞知子の思念を中斷した。女の聲が交つて聞えた。さつきの小間使がなにか用事でも傳へに來たのであらうか。――彼女はそちらに行きかけてゐた足を返し、反對の側の、ひとり先に拔け出した、そこだけ素通しのはまつた戶に近づくと、溫室の中をまつすぐに自分の方へ步いて來た河井と硝子越に顏を合せた。同時に、眞知子は正面の入口のところに、一と目で彼の母と認められる、よく肖た老婦人が、玄關で見覺えのある年取つた女中を從へて立つてゐるのや、その前で山瀨が慇懃に何度もお辭儀をしてゐるのを、長い一段低くなつた煉瓦の床と、そこにあふれてゐる光線と、左右の花の群がりを通して、眞知子は透視畫のやうに鮮明に見渡すことが出來た

三

『きいちやんのところぢや、今晩は誰もほかには來ないんですか。』

『あとから義兄さんが入らつしやる筈よ。』

『みね子はまたお留守番。』

『きいちやんが風邪を引いてるから夜は出られないんだつて。』

『そんな事ばかり云つてるのね、あのひとつたら。この間も歌舞伎座へ連れてつてあげようともつて電話をかけたら、行つては見たいけれど山瀨さんがどうとかで都合がわるいからつて斷るんだもの。馬鹿々々しい。あれぢや何のため久しぶりに東京へ出て來たんだか分りやしない。』

『そんなこと、私に喰つてかゝつたつて。――でも、みね子姉さんがあれで滿足してるんなら、はたで餘計なことを云ふ必要はないわ。』

『どうして、大ありですよ。あのまゝぢやますます〳〵お人よしの田舍者になつちまふばかりだもの。なんしろ、明けても暮れても旦那樣と、子供と、犬ぢややりきれない。』

辰子と眞知子は、帝劇の二階の休憩室のオットマンの高い圓筒形のより凭にもたれ、この腰掛では不斷より一層長く見える盛裝の膝を姉妹らしい親密さで並べてゐた。舞臺の方では、午後六時からはじめたプログラムの三分の一がすでに進行してゐた。併し二人が聽く義務を持つてゐる富美子や、乃至多喜子の番にはまだ多くの間があつたし、

義務以外に興味で聽いて見ようと思ふ專門家は今夜は出なかつた。それに同じお義理の客で、席にかけ續けにかけてゐるより、出逢つた知者や友だちと好きな話をして廻る方をえらんだ人たちはほかにも多かつたから、二人の横着も目立ちはしなかつた。

『この間みねちやんが私のとこへ來た用事知つてる。』

『訪ねて行つたことは聞いたわ。』

『お金貸してくれつて云ふのよ。』

國知子は返事はしないで姉の顏だけ見た。彼女自身には想像されないことではなかつた。

『そりや私だつて、みねちやんがどうしても困るんなら何とかしないじやないけれど。』

知らない背廣の男がづかづかと入つて來た。彼はオットマンの向側の美しい二人に氣がつくと、泡喰つて、さうしてなにか異常な存在にぶつつかつたかのやうなあはて方で引つ返した。

『――――』

辰子は邪魔した侵入者の背中に、ちらと忌々しげな視線を投げてから、今度は出し拔けに妹に問ひかけた。

『ねえ、山瀬さん學者。』

『知らないわ。』

『おや、學者になれる人。』

『知らないわ。』

『ほら、ね、さうでせう。――私だつて前からちやんと見拔いてた。いくら學者ぶつて見たつて、北海道のお兄さんなんかとはあの人はまるで違つたたちなんだつてぐらゐは。――だのに肝腎の奥さんにそのことが分らないんだから困りものよ。それで丸善に餘計な御奉公をしては、あとで自分ひとり苦勞するんだもの。だから私云つてやつたの。みねちやんがなにか氣の利いた着物の一枚も拵へたいてなら要るだけ出すが、山瀬さんの尻拭ひは御免だつて。』

『だからあの日歸つた時變な顏してゐたのね。』

『わる口云つてた。』

『少しは。』

『みね子の意見だとね、私が上村に感化されていつしよに墮落してるから、學者の家の精神的な生活が理解されないだつさ。それどころか、上村の道樂のおかげでこつちの方がみねちやんたちよりは十倍も精神的に暮らしてる積りだ、つて云つてやらうかともつたけれど、あんな人を本氣にいぢめちや可哀想だからよしといつたの。――でも、まあちやんに中々評判がよかつたわ。私とは比べものにならないほど同情があるつて。』

それに對し、鄰の日曜日には丸髷のお供までしたのだから、評判もよつぽどよくなければ引き合はないと眞知子が云つたので、辰子は面白さうに笑ひ出しながら、なほ、その丸髷で出逢つていつしよに行つたと云ふ河井の家の樣子に就いて、殊にその母に就いて女らしい質問をかけた。

眞知子は溫室の外側でわづかに五分間逢つたきりなので、その老婦人が若い時にはどれほど美しかつたであらうかと思はれるほどすぐれた容貌を持つてゐたと云ふ以外に多くのことを話すことが出來なかつた。併し本統を云ふと、その間に河井の母の示した、氣むづかしさうではあるが氣取のない自然さと、河井によく似た物云ひをする鷹揚な態度は、これまで想像してゐたとは別な印象を彼女に與へた。

「そんなひと。」

辰子も妹の觀察を意外らしく聞いたやうに。『でも世間ではあのお母さんが昔風の貴族ぶつた氣むづかし屋だから、河井さんの奧さんもえり好みが多くて極まらないんだつて云つてるのね。』

尤も今度の多喜子には、田口夫婦と云ふ上手な周旋役がついてるから大丈夫だらうけれどとも、云ひ添へながら、辰子はそのあとで、忌憚なく批評すれば、彼女はそれほど大騷して選擇されるほどの相手ではないとくさした。

『あんなお嬢さんならそこいらに掃き寄せるほどあつてよ。それに顔立だつて、綺麗には綺麗だけど、お人形見たいでちつとも面白味がないわ。』

自分の美貌を信じてゐる女は誰でもさうである通り、辰子も何かの缺點をあげないでは人の顔を賞めなかつたから、眞知子はわざと多喜子はあれで十分美しいし、河井にも釣り合つてゐると云つた。

『あまのじやく。私がわる口云つたもんだから。』

『半分は正直よ。』

姉妹は、問題そのものより、冗談がうれしくて笑つた。同時に眞知子は、河井家の新夫人として多喜子を非常に不似合だとは考へなかつた。あんな趣味と格式の固定した家には、なにか鮮明な性格を持つた人よりも、彼女のやうな平凡か知れないが融合性の多い娘の方が安易に同化されるだらうと云つた。辰子は、では眞知子にその點は讓つてもよいが、今夜の多喜子のおつくりにはどうしても贊成出來ないと云ひ張つた。

『あのひと脊に上背がないのだから、もつとすつきりつくるといゝのに。――少し模樣が派手すぎるのね。』

『どこ、私まだ見なかつた。』

『いやなひと、同じ並びのボックスぢやないの。お父さんつて方まで

今宵は見えてるわ。」

眞知子が着いた時には、十三四の可愛いお下げの娘が、いつしやうけんめいでピアノにかゝりついてゐた。その曲目の終つた時丁度入つて來たとなりの田口家の人々にちよつと挨拶をしてから、彼女はそのまゝ辰子に誘はれて出たので、その他は誰がどこにゐたか知らなかつた。

併しその時座席の方から起つた盛んな拍手の音は、おひく棧敷に歸つてゐた方がよいことを二人に思ひつかせた。

『さあ、行つて見ませうか、うつかりして富美子さんのを聽きはぐれたら、田口のをばさんに恨まれつちまふ。』

辰子はさう云ひ、より凭りのびろうどの柱から離れたが、その前に化粧室へ寄り道して行くのを忘れたかつた。眞知子もあとについて一緒に鏡の前に進んだ。姉の顏と髮の手入は、妹よりは念入であつた。それにうしろであき間を待つてゐる女たちも二三人ゐたので、眞知子は自分だけのことをすますと、コンパクトを帶の間にさし込み、重い硝子戸を押した。あんまり來なければ先に椅子に歸つてゐようと思つてゐた。斯んな劇場の通路にひとりぽつんとしてゐるのは、最も嫌ひなことの一つであつた。で、待つと云ふほども待たないで、彼女は二三歩のろい足で絨氈の上を左側の座席をさして行かうとしかけて、忽ちそこに立ち留つた。行手のボックスの裏にあたる廊下に、三人の男が佇んでゐた。二人は河井と山瀬であつた。が、こちらに背中を向けた河井と、その前を塞いで何かしきりに話してゐる山瀬の間に斜に立つてゐる、背後の青い羅紗を張つた跳ね戸と、壁の高い照明の反射で常よりなほ蒼白に見える賦の横顏を目にした時、眞知子は自分の視覺を信ずることが出來なかつた。あのひとがどうして今夜の斯んな音樂會に來てゐたのであらう。——またなにが三人を近づきにしたのであらう。——丁度うしろから追ひついて來た辰子も、山瀬と河井を見出したあとから、眞知子を不思議がらせてゐたものに就いて同じく聞いた。

『でも、だあれ。あの右の方に立つてる若いひと。』

眞知子は賦の名前と、自分が彼を知つてゐることを姉に話さない譯には行かなかつた。が、何故斯んな場所に彼が現はれたかの疑問に關しては、それより何故それを自分が不思議がるかの事情をは、打ち開けようとはしなかつた。

二人の足を留めた周りには、化粧室に出入する女たちが絶えず動いてゐたのと、向ふの三人の方では山瀬の熱心な話が續いてゐたので、姉妹はそばに近づくまで彼等から氣づかれなかつた。たゞ隔たけは、彼の立つてゐる傍を歩いて行つた眞知子を、遠く認めてゐたやうに彼女自身には感じられた。併し山瀬がどこにゐるのかと思つてゐたとこ

ゐだと二十八に齢をかけ、それと共に漸くお振り返つて丁寧に頭を下げるまで、彼は無言で、その位置と姿勢を守りながら立つてゐた。

山瀬は關を自分が中學に敎へてゐた時分の生徒だと紹介し、今夜何年ぶりかで有樂町の停車場で出逢つたのを引つ張つて來たのだと云ふことを、重に辰子に向つて說明してから、彼は義妹を見て聞いた。

『——眞知子さんは關君を知つてゐたのですつて。』

『えゝ。』

『それならそれのやうに云はないのはいけませんね。』

『だつて、なあぜ。』

自分の交友に就いて彼に報告する必要があるだらうか。——併し眞知子はさうは云はず、たゞ山瀬自身が關のもとの先生であつたとは夢にも知らなかつたのだからと云つた。同時にその變に古風な『夢にも』が自分でおかしくなつた。と皆んなもそれを感じ共通の無邪氣な親しみでほゝ笑んだ。

山瀬はそれですつかり嬉しくなつたやうに、昔の敎師が古い生徒に對する時の自信のある親愛の身ぶりで、隣りの關の脊中を輕く叩いて見せ、それから急に低くした小さい聲で、こゝだけの話であるが、この男は一時大に赤かつたのだと云ふことを素つ破ぬいた。

『併しそれは以前のことなんで、——今さうだと云ふのぢやありません。——その點は私も信じてはゐるのですが。』

彼はしやべつたあとから、その漏洩の重大性に心づいて眩ひながら同時にまた長者ぶつた隔なさで關を訓戒した。少くとも、眞知子さんなぞに餘計な宣傳をして貰つては困ると。——

『ねえ、辰子さん、そんなことをされてはお互ひに大に迷惑しますからね。』

『それはさうね、このお孃さんにこの上主義者なんかになられたんぢや、ますます〳〵お嫁の口が遠くなりますわ。』

眞知子は神經的な嫌惡を浮べた顏を姉に向けた。

『そんな顏したつて、本統ですよ。實際關さんの前だけれど——』

辰子は笑つた、よく動く眼で、その若い初めての男をぢつと檢査するやうに見た。『私に息子があつて、お嫁さんを貰つてやることになつても、主義者のお孃さんぢやまあ御免蒙りますから。——ねえ、河井さん、あなたはいかゞ。』

辰子はわざと輕い調子を取つてゐた。河井もそれに應じ、自分自身より母が今夜來てゐて、彼女とその問題を研究しなかつたのは殘念だ、と云ふ意味を誇張して答へた。

眞知子は二人の目的を見遁さなかつた。山瀬の持ち出した場所柄を辨へない話材の側を、彼等はその諧謔で上手に取り除かうとしてゐる

のだと思つたので、それに對し關がどんな態度を示すかを氣をつけて見ようとした。

關は黙い、やゝ亂れた髮毛に蔽はれた、その形のよい頭をまつすぐにし、いつもの脊髓の肩を左だけこゝろもち聳かして、彼女のすぐそばに立つてゐた。相變らず寡黙ではあつたが、そのため傲慢にも見えなければ、素つ氣なくもなかつた。久しぶりの教師に絡んだ中學時代の思ひ出か、今宵の彼をつゝましく從順にしてゐるかのやうであつた。實際彼は自分の前に語られてゐる、彼自身に原因して生じた、彼自身として當然難駁を投げ入れてよい話題に對してさへ、別に何か云はうとはしなかつた。寧ろそれより辰子と河井の協力的な努力を面白がるやうに、かすかな微笑で、長い表情的な眼を輝かしてゐるのを見ると、眞知子は富美子が彼にその似たと云つた映畫の主人公の顏を思ひ出した。あの眼と額が一番よく似てゐるのだわ。――さう思ひ、思つたあとから一秒間多く彼を見過ぎてゐた氣がした。彼女はそれをごまかすために話しかけた。

『このごろ米子さんにお逢ひになつて。』

『二三日前に逢ひました。』

『私もこの前の日曜日にちよつとうかゞつたのですけれど。』

米子は留守であつた。眞知子はロウザの獄中記を最寄りの本屋に頼んでおいた。受け取つたともなんともまだ知らせて來なかつた。眞知子は贈物の名前はわざと云はず、意味だけを話した。

『さう云つてゐました。丁度醫者に行つてたのださうです。』

『まだはつきりしないのでせうか知ら。』

『無理をするからいけないのです。』

關は怒つてゐるやうな口調でさう云つた。眞知子はその言葉に彼の率直な愛情を見た。併しいつもの如くそれを讀みはしなかつた。今夜の彼は眞知子自身に對してもさう冷淡ではなかつたから。――彼は近いうちにもう一度米子を訪ねて、よく養生することを忠告して貰ひたいとさへ云つた。

『僕が云つても容易にきかないのです。あれで中々強情なんですから。』

『強情つてより、米子さんのは我慢強いんですわ。』

『あゝ云ふところが、あのひとの亡くなつた兄によく似てゐますよ。』

『そんな方でしたの。』

眞知子は話が自分たちだけの興味に落ち過ぎるのを知りながら、また辰子がそれに氣づかせようとして眼くばせしたのや、河井自身まで山根との話の關に好奇的な注意を向けたのを認めながら、わざと避けようとはしなかつた。彼女は寧ろその機會を利用する氣になつた。

闇との対照を、その性質を故意に明白にするには、丁度都合がよかつた。

併し二人が最も近く立つてゐた後の青い戸が、その時急にうちから押しあけられ、田口夫人の着飾つた若作りの姿があらはれた。倉子は危く跳ねのけられさうになつた肱と眞知子には目もくれず河井に近づき、出來るだけ愛想のよい誘ひかけで頓て多喜子の番だと云ふことを知らせた。それから彼に示した慇懃に丁度反比例した尊大さで山瀬と辰子を交る／＼眺め、彼等がいつまでもそんなところに河井を立たせてゐた心なさを責めた。

多喜子は精いつぱいで彈いた。ずいぶんよく彈くと多喜子は思つた。大き過ぎると非難されてゐた振袖の模様も、明るい、花環のいくつも並んだ舞臺では、殊に黒い樂器との對照から調和よく美しかつた。

柘植家の人々は、辰子が眞知子に教へた通り二つ上手のボックスにゐた。柘植夫人と、白い額のある、同じく小柄な、が夫人よりは威嚴のある容貌をした子爵は、眞知子の感じたことを三十倍にも感じてゐるやうな滿足さうな様子で、舞臺の娘を一心に見詰めてゐた。河井は同じボックスで、隣りの田口の席の一番端にゐた富美子の夫と、仕切を間にして並んでゐた。

舞臺を眞に見なければならない位置の條件から、絶えず視野のうちにあつたそれ等の人々に對して、眞知子は今夜は不思議に反撥的でなかつた。彼等と立ち交つてゐる場合常に感じさせられた不快な孤獨の代りに、淡い、ぼんやりした悦びが、彼女の心をこれまでになく和やかにした。すぐ向うにオペラ・グラスを手にして夫の老博士と並んでゐる田口夫人が、出入の洋畫家で、氣障なしやれ者らしいなりをした、婦人に就いてよくない噂を持つてゐる男を平氣にそばに引きつけてゐるのさへ、寛大に眺めることが出來た。

併しこの變化は、彼女にはつきり意識されてゐる譯ではなかつた。たとひ意識したとしても、音樂のこゝろよい影響以上に考へはしなかつたであらう。それ位眞知子は熱心に聽いてゐた。耳だけでなく、なほ眼からも音律の美しい流を吸ひ込まうとするかのやうに、見据えた、さう云ふ風にすると一さう底に深く擴がつて見える黒瞳で、遠い舞臺をぢつと打ちまもつてゐた。恍惚とたのしかつた。とは云へ、それでなにもかも忘れるほど夢中になりきつてゐたのではなかつた。寧ろ彼女はふだんより過敏であつた。取り分け、背後にすぐ接して並んでゐた一つの椅子に對して。——

で、多喜子の幻想曲が終り、入れ違ひにあらはれた、青い洋服の混血兒の娘が、ブラムスの『子守歌』を半分彈きかけた時、非常にし

づかな動作でそこから立ち上つた人のけはひを、眞知子は聞き洩らさなかつた。彼女は聽衆のすべてをもう一度搖籃の中にまどろませようとしてゐる、最も魅力的なアンダンテから、未練なく振り返つた。隣は外套を抱へ、椅子の下に入れた帽子を取り出さうとしてゐた。

『お歸りになるの。』

聲は出さず、殆んど口の型だけで眞知子は聞いた。隣は輕い目禮でそれに答へた。彼ははじめから長くゐない約束なのだと、そばから山瀨が低いさゝやきで說明した。

眞知子は再び舞臺の音樂に戻つた。ブラムスの中に、後の跳ね戸をさして歩み去つた、隣のひそかな注意した靴音が交り合つた。

と、今までは多喜子のよりずつと達者だと思はれてゐた混血兒の娘の彈き方が、單に亂暴に過ぎなかつたやうにいつとなく感じられだした。まるで、テマが解つてゐないのだわ。──音波と共に跳つてゐる彼女の栗色のおかつぱと、短かい、反つた鼻を眺め、眞知子はこゝろで嘲つた。あれでは、どんな溫順しい赤ん坊だつて寢つきはしないだらう。──彼女は隣の姉の膝からプログラムを取り上げて調べて見た。富美子が彈くまでにはまだ一人あつた。先に自由に蹴つた隣が、羨ましく意識に浮かんだ。それにしても斯んなお浚への音樂會に、今までどうしてあれだけ熱心になれたのか分らなかつた。

終に激しい喝采が起こり、勇敢な『子守唄』もお仕舞になつた。

『ねえ。』

眞知子は小さい筒に卷いたプログラムで姉の肩をつゝいた。

『富美子さんになるまでまた出て見ない。』

姉妹が跳ね戸を出ようとしてゐると、一步早くつぎの戸から出た田口夫人が、樂屋へ行くらしく、何かそれに就いてお伴の洋畫家と口早やに話しながら通つた。

この二人も、三十分前よりずつと慇懃なものに眞知子には見えた。

富美子が彈いたベエトヴエンの變奏曲で一部がすむと、眞知子たちは柘植の人々や河井と共に、田口で中央亭に用意させてあつたお茶に招待された。

『これで歸れるなら、その方が有難いんだけども、──まあ仕方がないわ。』

辰子は廊下に出ながら、眞知子の考へてゐた通りのことを囁いた。

それからもう一度化粧室に寄り直して行くために、山瀨には構はず行つて貰つた。

鏡のそばは、前と違つて容易に寄りつけなかつた。何人か待つて漸くそこを出ると、意氣な丸髷で、くらうとのやうな扮裝をした辰子の

友達にぶつかつた。眞知子も始には知つてゐたが、正面に云ふとなきな人ではなかつたし、相手も仰々しい隔々しさで、辰子にだけに分かる隱語で、なにか内證話のあるらしいことをほのめかしたので、眞知子は自分から避けた。

『私行つてるわ。』

あんな人と附き合つて、お姉さまなにか面白いのだらう。——姉の友達の選擇に就いて常に起こる不平で、眞知子はその時も少しぷんくしてゐたので、三階にのぼる階段で、上から急いで下りて來た富美子にもすぐには氣がつかなかつた。

『あら。——眞知子さん。』

行き過ぎて、自分の方から見つけた富美子は、いつもの子供らしい高い呼びかけで、喫驚して見た、間の女たちを派手な身振で無遠慮に突つきり、下り過ぎた三段だけ後戻つて來た。

『どうなすつたかともつて、探しに行くとこよ。——辰子さんは。』

『お友だちにつかまつたの。』

眞知子はその返事といつしよに彼女の立派な出來榮えをほめた。實際富美子は多喜子よりも、勿論またあの混血兒の娘よりも、數等上手に彈いた。

『本當はもつとうまい筈なの。』

打ち解けた洒落な微笑で、富美子は自然の儘し斟けた、小さいそばかすの顔をしやくつて見せながら、何しろ今夜は樂屋の激術係を引き受けたため、自分の番になるまで落ちつけなかつたのだと云つた。眞知子も彼女とは、來た時折よく座席に歸つてゐたのにちよつと逢つたきりであつた。

『小さいお嬢さんたちが交つてるでせう、だから、とても世話が燒けて厭になつちやつたの。』

が、言葉ほど厭でもないらしい快活さで續けかけたが、急に小さくした聲で一寸五分高い眞知子を下から覗き、『さう云へば、——××が來てたんですつて。』

富美子は、關に似てゐる役者の名前できいた。

『山瀬の義兄さんが連れて入らしたのよ。』

『もとの生徒さんなんだつてね』

そんなことまで皆んなに知られてゐるとすれば。——先に行つた山瀬が、なにか珍しい茶話のつもりで續けてゐるであらう餘計な饒舌に就いて、眞知子は漠然とした不安を感じた。併しその氣持が富美子にわかる筈はなかつたから、彼女はたゞ關が社會主義者であつたことの發見を、彼に腕を三本あつたと同じ位驚いて話した。

『でも、あのひとが主義者だなんて、嘘見たいだわ。』

「どうして。」

「だつて、あんな綺麗な顏してるぢやないの。」

眞知子は思はず足を留めたほど呆れ、眞面目に不審がつてゐる相手を眺めた。が、同時に、如何にも富美子らしいその呑氣な斷定がおかしくなつたので、外國の活動役者に似た綺麗な顏をしてゐれば何故社會主義者になり得ないか、と云ふやうな反問を持ち出す氣は起らなかつた。その暇もなかつた。中央亭の、大きな衝立でその廣さだけ内部の輝きとざわめきを遮斷した入口が、すぐ彼等の前にあつた。

「富美さん、ミイラ取りになられちや困りますね。」

正面の二つの窓際に亙つて作られた田口家のテイブルに、連れ立つて近づいた時、眞知子が一番に耳にしたのは、斯う云つて娘をふり向いた倉子の、氣取つた含み聲であつた。この諷責は、娘より彼女自身に云はれたのであることが眞知子には分つた。併し田口の方は持ち前の人の善さで、窓を後にしてかけた席から半分伸び上り、自分の左側が空いてゐると云つて招いた。横は河井であつた。もし多喜子が博士の右側で兩親に挾まれてゐなかつたら、幾らか彼女の好意でもその大事な場所を自分に讓りはしなかつたらうと眞知子は考へたが、素直に木村のそばにかける富美子と離れ、そちらへ行つた。

河井は彼女を端にかけさせるため、自分の椅子を隣りの山瀬の方へ少しずらした。それから低いしづかな聲で、今までそこに發展しつゝあつた話題を傳へた。

「さつきの關さんのことから、社會主義論が出てゐるところなのです。」

その重な話手が、眞知子の想像した通り山瀬自身であつたことは、二分と聽かないうちに明瞭になつた。彼は社會主義をなにか惡疫の一種の如く怖れてゐる世人の誤謬を指摘しようとした。

「これは内輪だけの話で、官立學校の生徒監を拜命してゐる私自身としては、よそではめつたに話されないのですが。」

その前置からすれば、彼等と同じく三十分の休憩時間を利用した客で賑つてゐる料亭の茶卓は、あんまり用心のよい場所ではなかつたに拘はらず、彼は乘り氣でつゞけた。

「要するに、完全な共同社會に對する欲求は、人間の數千年來の理念で、それをなくさせようとしたつてなくさせることは出來ないのですからね。大事なことは如何によくそれを指導すべきかと云ふ點なので、例へばネオ・カンチアネルの或る者が唱ふる如く、カントとマルクスの接種で社會主義を倫理的に基礎づけようとする考へ方なぞに依れば、世間で騷つて社會主義者になつたつて大した危險にないんです。だか

ら私は生徒等に云つてゐるんです。社會主義の書物が讀みたければ讀ましてやるから、ドイツ語で原物を讀め、ロシア流の宣傳用の赤本を一二册讀んで社會主義を宰義するつもりなら大間違ひだぞつて。』

『問題の關君は、ぢや、どちらなんです。』

向う隣りにかけ、彼の講義のやうな話をにやにやと面白がつてゐた洋畫家が質問を發した。『赤本組ですか、それとも原物のドイツ語の方なんですか。』

『さあ、どの程度に讀んでるか知れないが、あの男は語學は達者な筈ですよ。』

他人のひやかしの決して分らない山瀬は、非常な眞面目さで彼に答へ、序でに自分の教へてゐた時分の關がどんなに勤勉な頭のよい秀才であつたかを傳へた。

『あゝ云ふたちのよい青年を、ちよつとした蹉跌でいつまでも日陰者の狀態におくのは殘念ですからね。』

山瀬はなほ洋畫家を相手にしてゐる積りであつたが、彼の興味は茶々を入れることで、醫師の傳記ではなかつたのだから、知らん顏でマドロス・パイプの煙を吐いてゐた。山瀬は仕方なく話の後半は河井の方へ持つて行つた。

『實際惜しいですよ。且つ差別的に迫害すればするほど彼等を惡化させる譯なんですから。一度犯罪者がいくら眞人間にならうとしても、世間で前科者扱ひにするために一層大きな罪を犯すのと同じなんです──今夜あの男を私が無理に引つ張つて來たのも、一つにはさう云ふことを意志してゐたからなんで、でなくも立派な音樂の感化は──』

『ちよつと待つて、山瀬さん。』

彼の長い話にじれじれしてゐた田口夫人は、寶石の光る指で菓子ナイフを握つたまゝ、その時高びしやに中斷しておいて、彼がなにか意志することは自由であるが、その實行が自分たちに關係する場合に勝手なことをされては困るときめつけた。

『今夜だつても、みね子さんが入らつしやれなければ入らつしやれないでいゝから、なにもあんな飛でもない御名代を引つ張つて來ることはないぢやありませんか。あんたに常識があるんなら──。』

『さう仰しやられるとですが、奥さん。今お話した考へで』

『駄目、駄目、その考へが間違つてますよ。』

倉子はおつかぶせ、がちやと音させておいたナイフを皿ごと横に押しやりながら、『あんたはもと教へた生徒だつて、こちらぢやてんで知らないんだし、殊にそのため大學を出された札つきの主義者だつてものをわざわざ連れて來るなんて、だいち斯うやつてごいつしよに御招待した御客樣に對して、私の方でお詫のしようがないわけになります

よ。』

『だつてもね、お母さま。』

今度は富美子が木村の向側から母を遮つた。『あの醫者さんは眞知子さんも知つてらつしやるのよ。それに主義者だつて、あの人ちつとも怖い人ぢやなささうだわ、ねえ。』

眞知子は、この言葉といつしよに、富美子のわだかまりのない、同情の視線をテイブル越しに受け取つた。が、それに對して彼女がなにか報いなければならなかつた前に、倉子が誇張した間投詞で割つて入り、改めて本統に知つてゐるひとかと訊ねた。眞知子は本統に知つてゐるひとだと返事した

『當節のお孃さんの考へ方が幾ら自由だつたつて。』

大それた話だと云ふ表情を倉子はして見せながら、『さう云ふ交際は決して贊成出來ませんね、眞知子さん。山瀨さんも山瀨さんですよ。御自分はとにかくとして、眞知子さんまでそんな危險な人物に紹介するなんて。』

意外な飛ばつちりで面喰つた山瀨が、急いで寃罪を解かうした隙を與へず、倉子は眞向ひの夫に同意を求めた。『ねえ、あなた。もしそんなことで世間の誤解でも受けようものなら取り返しがつきませんわねえ。』

『大きに、さうだ。併し』

どんな場合でも生來の陽氣さと醫者らしい婉滑を失はない博士は、醫學的の見地からすれば、病菌は馴れるほど危險律が少くなるものだと云ふことを妻より皆んなを相手にした口調で話し出した。『結核の病院に勤めてゐる看護婦でも、田舍出の健康な者ほど却つてやられるんでして。この理屈で行くと、社會主義なんてものも幾らか樣子を知つたもの丶方が、本統なら免疫性になるべき筈なんです。』

『そんなことを仰しやつたつて、あなた』

『駄目ですかね、は、は、は。』

彼はわざとひようきんに妻をはぐらかすと、艶々と禿げた頭に、太いぼつちやりした手をやりながら、娘と並んでゐる婿の方をにこ〱と眺めた。『併し君だけは、木村、醫者のよしみに贊成しないといかんよ。』

『序でに社會主義豫防注射液でも拵へて、うんと儲けるんですね。』

『あんたまで何です。ふざけて。』

倉子が本氣に怖い顏をして叱つた。と、それがおかしかつたと云つて洋畫家がそばから囃したので、それに和したテーブルの各部分からの笑聲と微笑が、話題の中心を漸く社會主義と眞知子から移動させようとしかけた。

その時、それまでは傍聽者に廻つてゐた、寧ろ譯より、同じ程度に左の利く隣りの田口が、紅茶に對る名目で取り寄せたウイスキの方に心を引かれてゐた柘植子爵が、急に口を開き、自分の社會主義觀を一つ披露しようと云ひ出した。

『結句ボルセヴイキ觀になるんだが』

少し醉つて頰と鼻を赤くした彼は、そのため際立つて白く見えた鬚の中で斷りながら『この頃必要があつて、ロシアに關する書物を取り寄せては讀んで見ると、中々面白い。レニンと云ふ男はたしかに傑物ですよ。』

『子爵、失禮ですが、大いに危險思想ですね。』

『まあ、待ち給へ。』

はしやいで雜ぜ返しかけた洋畫家を制し、子爵はもの馴れた口調で、もし彼の考へ通りにロシアが改善されたらこの世に一つの理想國が出現する筈だと云つた。『併し理想國は一人ぢや出來ない。殊にロシアの場合は、六千萬人の農民が基礎で、それもめいく儲け過ぎちやいけないと云ふのだから事がむづかしいですよ。日本の百姓だつて、そんな制限をされて骨折つて働くものはないですからね。』

『お說の通りです。』

さつきから是非一言挾まうと待ち構へてゐた山瀨が、洋畫家に先んじられまいとして急いで贊成の意を表した。『全くのところ、個人の利己心を無視した點に、ボルセヴイキの大なる弱點があるのです。御存じと思ひますがイギリスのバアナド・ショウ——あのひとがフエイビアン・トラクトの中でマルクスを評した言葉に子爵と同じ意味のことを申してゐますが。』

彼はこゝでちよつときり、ずり下つた眼鏡を鼻柱のもとの位置に戾し、マルクスには勞働の槪念はあるが人性の槪念がない。人類共通の希望は、恆產を得て勞働をしないでもすむやうになることだ。だから彼は一種のドン・キホウテだ、と云ふ奇警な引例をした。——覺えてゐた暗誦が丁度當つた小學生のやうな得意さで。

子爵はバアナド・ショウも、フエイビアン・トラクトも知らなかつた。が、支配階級の一人として、人間が如何に怠け者であるか——殊に應酬の十分でない場合に於いて——ショウに劣らず確信してゐた。

『だからそのイギリスが、ボルセヴイキの陰謀以上に注意してゐるのは』

この言葉で、子爵は最も仲のわるいボルドウヰン內閣とショウを一緒にして云つた。『ロシアがあの怠けもの〻農民に今年は小麥を幾ら作らせることが出來るか、と云ふことなんで。その生產の如何でロシアの運命は決定すると云つてもい〻のですよ。』

『幹部連の内輪揉めなんぞも、原因はそこいらのむづかしい產業政策にあるらしいやうですね。』

田口もそばから合槌を打つた。

『決してほかぢやないのです。で、わしは斯う思つてゐる。ソヴエト・ロシアを本統に支配してゐるのはレニズムぢやない、ただ小麥だと――』

それだけ云ひたかつた子爵は、望みを果すと再びウイスキの小さいコツプを取り上げ、愉快らしく河井を名前で呼びかけた。『どうですか、輝彥さん。この問題は。』

それに對して河井は、適當な返事を怠りはしなかつた。が、調子の受け方は、いつもに似合はずぶまで、拙かつた。彼は本統は子爵の言葉も、そのほかの人が話してゐたことも初めほどよく聞いてゐなかつたやうに見えた。と云ふより、その間彼を捕へてゐたなにかのもつと大事な思惟が、聞いてゐなくとも聞いてゐたやうに裝はなければならない社交上の技巧を忘れさしたかの如くであつた。

倉子は敏い、探るやうな眼を彼の方へ向けた。その主要な客の動作に就いては、彼女は常に誰よりも神經過敏であつた。が、直接それに觸れる代りに、不斷ほど冴え〴〵しない彼の血色を心配するやうに云つた。

『あのう、なんなら、お熱いお茶でももう一つさしあげませうか。河井さん。』

『いや、結構です。』

彼は極めて何氣なく答へた。

『若しお風邪でも召しては大變でございますわ。』

倉子はなほそれで止めようとはせず、柘植夫人まで誘ひかけた。『ねえ、奥様、今日は近頃になくお寒い日でございましたもの。』

柘植夫人も非常に寒い日であつたと云ふ言葉で應じ、斯んな天氣が續けば彼の母夫人は近いうちに熱海の方へ行かれることゝ思ふと附け加へたのをきつかけに、そこにある河井家の有名な別莊や附近の避寒地のことが新に話し出された。殊に倉子と柘植夫人が何よりその話を面白さうに話したのは、本統に面白かつたと云ふより、それに依つて今までのろくでもない社會主義の議論を押しのけ、河井や多喜子になにか少しでも多く話させようとしたに過ぎなかつた。で、二部がはじまりかけ、樂屋に氣がかりのある富美子が、多喜子をせき立てゝ椅子から離れるまで、彼等の秘密な努力は續いた。

眞知子は階段を下りながら、とうとう姿を見せなかつた關を恨んでゐた。それ位なら自分も先に歸るのであつたと思つた。眞知子は田口

夫人の當てこすりや、彼女が傍に就いて云つた保護の言葉を忘れ得なかつたと共に、その聯と結びついて發展した話題に對する人々の嘲笑的な態度に反感を持つてゐた。自分自身には多分大眞面目であり、また實際聯の同情者であつた筈の山瀬に對してさへ、眞知子は赦し難い憤を感じてゐた。本統を云へば彼が一番わるいのだと考へた。聯を斯んな場所に引つ張つて來た無思慮と輕率。その上の餘計な闖入の暴露——彼を廊下に見出した瞬間の嬉しくないことはなかつた驚きや、いつしよにブラームスを聽いてゐた聯の無意識な愉しい恍惚感は彼女から消えてゐた。眞知子はたゞ今夜のことが彼に取つてどんなに迷惑な忍從であつたか、それのみを思つた。でも、あのひとが歸らないでお茶の時まで殘つてゐたとして、さうしてあんな話を聞かされたとして、それでもおとなしく忍んで聽いたであらうか。——が、それに對して自分で決定を與へえないうち、すぐ前を、人々に稍おくれて歩いてゐた河井から話しかけられた。河井は非常に前から聯を彼女は知つてゐたのかと訊ねた。眞知子はほんの一と月前知つたばかりだと答へた。

「いつか上野でお目にかゝつた時、いつしよにゐましたでせう、あの友だちの家で。」

「さう云へば今夜關さんに紹介されると、上野で逢つたことを思ひ出しましたよ。」

「あの一二日前までは私も知らなかつたのですわ。」

眞知子は云つてしまつて何故そんなことまで云ふ必要があるだらうと考へた。さうしてまた河井がそんな話を聯に就いて聞く必要が。——と、河井もすぐそれをやめ、若しかしたらこの冬彼は北海道に旅行するかも知れないと云ふ話に變へた。

「曾根さんにも久しぶりにお目にかゝれるだらうと思ひます。」

「兄はこの冬は歸らないさうですから。」

「そんなお手紙でした。あなたは、あちらは。」

「まだ一遍も。行くなら雪の時行つて見たいともつてますわ。」

河井はなにか續けかけ、急にやめた。倉子が振り向いた。さつきとすつかり同じ狡い探るやうな眼で。——が、二人の上に長くは留めず、そのまゝ廊下の左右を席の方へ急いでゐる婦人たちの群へそらしながら云つた。

「眞知子さん、どうなすつたんでせうね、お姉さんは。」



狂言

大佛次郎

御暇乞に藝盡しをお目に掛可レ申候とて、御番衆の見申さぬ様に枕屛風の陰にて堺町の踊狂言の眞似を被レ仕、そろ〳〵さはぎ被レ申、脇に奥田孫太夫潮田又之亟は御ゆるし被レ成候へとて臥被レ居候。又之亟被レ申候は、とかくあの様に騒ぎ申候間、やがて拵は明可レ申候へども、先明日は內藏助へ申候て手錠をおろさせ可レ申と笑被レ申候

（堀內傳右衛門覺書）

○

一番最後に寢る者が消すことになつてゐて、たつた一つ殘してあつた行燈の灯が、この廣間の天井にまるい影を置いてゐた。めい〳〵の枕もとに衝立を置いて、並べた九つの床に、もう微かな寢息さへ漏れてゐる。この、老人ぞろひの上の間では早く床へ入る習慣になつてゐた。

まだ、そちこち四つと云ふ時間だつた。厠から戻つて來た內藏助は、暖味の逃げぬやうに掛けたまゝ脫け出た床の中につめたい廊下で冷えた兩脚を入れながら、枕もとに捨ててあつた頭巾を拾つて頭にくゝりにかかつた。これは、人に笑はれながら寒がりの癖で、かうしないと、どうも睡れないのだつた。自分の影が變な恰好をして、布團の裾

り方にある襖の上で動いてゐる。この、たてきつた襖の向ふは廊下を隔てゝ、壯年の八人の者がゐる下の間になつてゐた。

内藏助は遠い話聲を聞いてゐた。若い連中はまだ起きて火鉢を圍んで話してゐるのである。こちらの堀部老人が夜中時々『えい！　えい！』と矢聲をかける癖があるのを聞きつけて笑つたのも、まだ床に入らずにゐた彼等だつたことが、頭巾をかぶつた頭の中に微笑とともに泛んだ。左右の老人たちの睡りを妨げないように内藏助は燈を消して立ちかけた。誰れか主家の方から廊下づたひに來る樣子だつたので、それに耳を澄した時、自分の隣りの床の中で小野寺十内が目をあいてゐるのに氣が附いた。十内もその足音を聞いてゐるのだなと思つた。

足音は、附添の番頭のゐる次の間の前まで來て停つた。宿直の堀内傳右衞門が立つて用事を尋ねたやうだつた。その次に聞こえた聲で、内藏助は、この家中の長瀨助之進と云ふ男の顏を思ひ出した。長瀨なら今夜は非番の筈だと氣が附いた時、かなり、はつきりした聲で云ふのが聞こへた。

『今お上屋敷から御状が廻つて來て、明朝こちらへ花をお遣しになると云ふのだ。茶道の衆が持參されると云ふから、どうぞ、そのおつもりで。』

傳右衞門がすぐと何か答へた。

助之進がまた何か云つたが、これは聲がひくゝて聞き取れなかつた。内藏助は二人の話した意味が直覺出來たのである。急に振返つて十内の顏を見た。十内は、もう掻卷から乘出してゐた。

二人が無言でゐる内に、助之進が主家へ引返して行つたらしく、廊下を足音が遠ざかつて行つた。氣が附いた時、今まで下の間に聞えてゐた話聲が急に歇んでゐた。

十内は、掻卷をはねて、布團の上に坐つてゐた。しかし内藏助はこれに

『寢よう。』

と云ふやうに目配せして、ふつと行燈を吹消した。眞暗な中で内藏助が寢床に戻つて掻卷をかける氣配が續いた。

十内は息を詰めてゐた。

『來ましたな。』

と云ふ言葉が變にえがらつぽいものになつて、喉まで出て來てゐた。助之進はあの一句を云ふ時確かにこちらに聞えるやうに聲を昂めてゐたのである。

十内は、そつと枕を内藏助の方へ移してから、ひくい聲で話掛けた。

『一同を起こして話して置きませうか？』

「さう……」
内藏助はどつちとも決斷がついてゐなかつた。
二人は、無言で、左右に寢てゐるほかの者の寢息に耳を澄してゐた。その途端に、疊廊下の彼方で、急に襖のあく音がした。「聞いてたな。」と、二人は同時に、下の間で急に話聲が歇んでゐたことを考へた。誰れか二三人で宿直の部屋の方へ歩いて行つた。足音が停つたと思ふと
「堀内氏。」
と、磯貝十郎左衞門の聲がした。
「ちとお話においでになりませんか？」
これは富森助右衞門だ。
默つてゐた内藏助が寢返りを打つた。起きるのかと思ふと、さうでもない。十内は闇の中で内藏助の樣子を見きはめようと目を据えてゐた。人のいゝ堀内傳右衞門は誘ひ出されて、たう〳〵下の間へ入つて行つたらしかつた。
内藏助は十内が何を考へてゐるか知つてゐたのではないか？
「まあ、よからう。」
と、靜かな聲で慰めるやうに云つた。
「行燈をつけませうか！」
「なんで？」
「…………」
返事はなかつた。下の間で、どつと皆で笑ふ聲が聞えた。その笑ひ聲が落ちると、傳右衞門が、いつもの質朴な口調で何か話してゐるのが聞こえる。
（花をくれる……）
細川越中守は、浪士たちの處分が愈々明朝ときまつたのを、それとなく浪士たちに仄めかさうとしたのだつた。話は如何にも急だつた。その前日まで、浪士たちは先年の市ヶ谷淨瑠璃坂の仇討の場合に準じて遠島になると云ふ風説が、根據のあるものとして一般に信じられてゐたのである。現に、取次の堀内傳右衞門は今もなほそれを信じてゐて、主人越中守が浪士たちを突然で驚ろかしたくなく花に托して送つた謎も解き得ずに、明日早朝當番の交替前の、簡單な雜務の一つとして頭に置いてゐたのだつた。

○

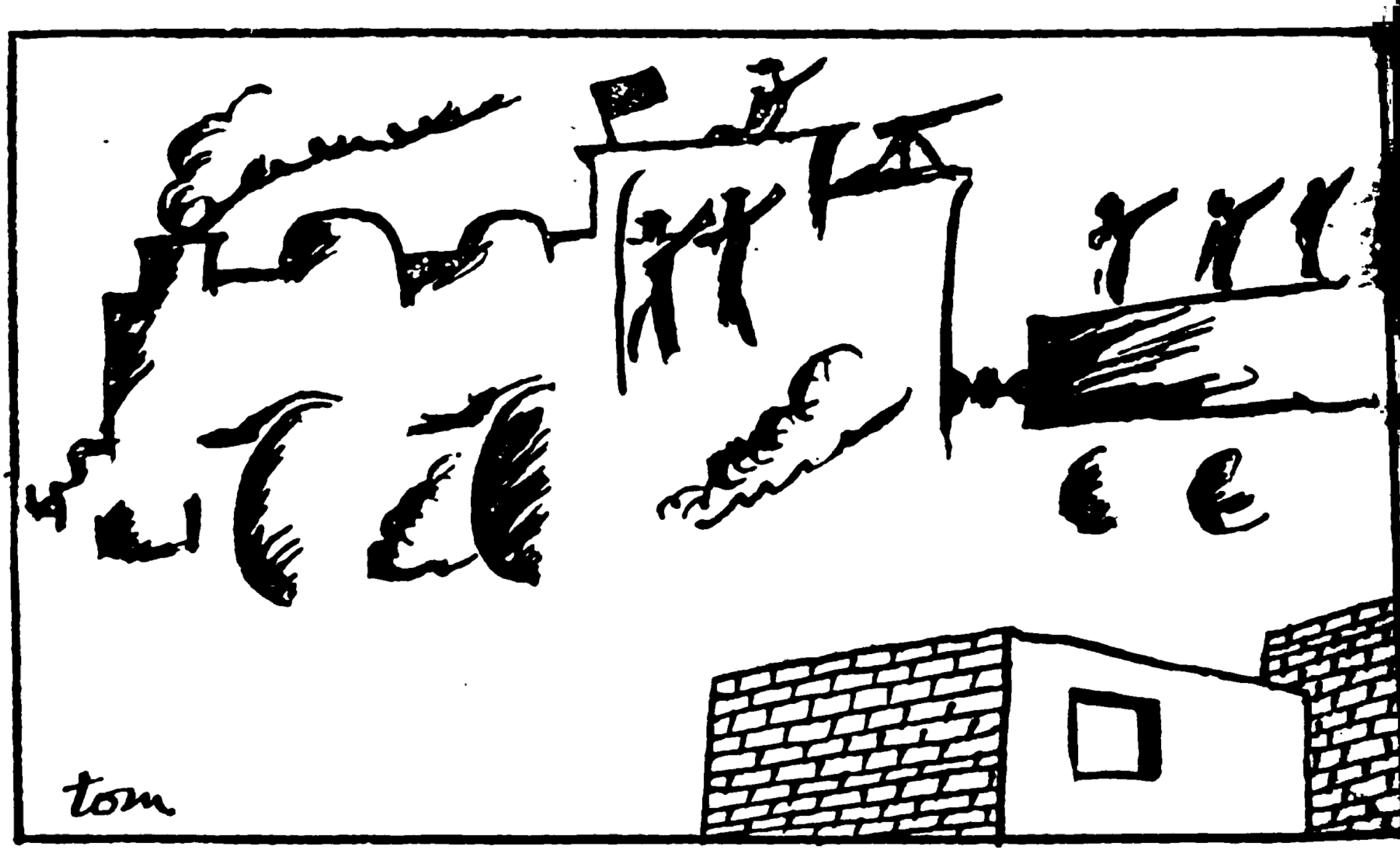
「左樣でしたか？　花をお生けくださる茶道の者がおいでくださる。」
富森助右衞門は、靜かに笑顔を作つた。堀内傳右衞門はそれ以上を何も云はないでゐる。云ふ必要を認めないのか、あるひは口止めされ

てゐるのだらう。
助右衛門は、視線を移して、火鉢を囲んでゐた同志の人々を見渡した。大石瀬左衛門、磯貝十郎左衛門、矢田五郎右衛門、近松勘六………順に、何事も知つてゐる目が、助右衛門の視線を迎へて微笑んだ。赤垣源藏は、煙管を啣へてゐる。奧田孫太夫は、よく起つた炭の色を凝と眺んでゐる。潮田又之丞は 懷手をして、絶えず、にやにやしてゐる。
暫く誰れも何も云はずにゐた。
『お靜かですな?』
傳右衛門が首をかしげた。
その途端、突然に矢田五郎右衛門が吃驚するくらゐ大きな笑ひ聲を擧げた。その爆發するやうな馬鹿笑ひの底に何かしら一座をぎよつとさせたものがあつた。
『何が可笑しい?』
急に源藏が、かう叱咤した。
五郎右衛門は無作法に疊の上に仰向きに轉がつてゐた。笑ひはなほ止まなかつた。苦しげに腹を押へ身をもがいて笑ひ續けてゐるのである。その上へ孫太夫が蹈掛つて太い腕で押へ附けた。
『怪しからん奴だ！ 何が可笑しい?』
『さうだとも。妙な男だ。ひとりで笑ふなどとは怪しからん。』
冗談とも眞剣ともつかぬ様子で二三人が五郎右衛門に飛びかゝつて行つた。
『よせ、よせ！』
助右衛門が制めに入つた。さう云ふ助右衛門自身が、いつもより荒荒しく快活になつてゐたのは不思議だつた。
『おい、みんな……』
と、笑ひながら云つた。
『何かやらう、何か?』
『むゝ。やらう。』
源藏までが、煙管を捨てゝ立ち上つた。
『何をやる?』
『なんでも。……總盡しだ。堀内氏をお客様にするのだ。』
『馬鹿、俺れア藝なんか何もない。』
これは、奧田孫太夫だつた。潮田又之丞も拙者も見物に廻ると云ひ出した。二人を怪しからんと云ふ者はあつても、この今夜の總盡しの趣向に異議を立てる者はなかつた。
『四つを廻つたくらゐのところだな。まだ早いさ。宵の内だ。こちらは一世一代の腕をお目にかけるのだ。堀内氏、これは滅多に御覽にな

れるやうなものと違ひます。』
『左樣で御座いませうとも。珍らしいものを見せて頂きます。』
傳右衞門はおとなしく客席に固りながら一同のいつにない騷ぎの底に何かしら嚴肅なものがあるのをおぼろげに感じて、顏色をひきしめた。この人々は御公儀の御沙汰の如何にしろ、やがて、今日まで親しくして來た自分と別れることになるのを考へて、その暇乞のために、こんな催しを考へ付いたのに違ひないのである
『さあ、拜見いたしませうか？』
『まだです、まだです。樂屋を作らなければならない。衣裳がないから、この座でやるのだ。それから外から見えないやうにしなければならぬ。』
芝居は噂だけのものらしかつた。夜、枕もとへ立廻す衝立を、めいめいが引出して來て飾り付け始めた。見物席の傳右衞門は、火鉢を二つまですゝめられて、贅澤に片手づゝあたりながら、これもわざと大誇らしく胸を張つて、狂言の始まるのを待つてゐる。さうしてゐて、狂言方も見物も、この騷々しい廣間の中に、冬の名殘りの寒さがあつて、胸に徹るのを感じてゐた。
『早く、やれッ！』
と、これは、やはり見物席に膝を抱いてゐる磯田孫太夫が、劍道で鍛へた聲でしきりと叫んでゐるのだつた。又之丞は、にや〳〵してゐるだけである。

○

『宜しいのですか？ 捨てゝ置いて。』
小野寺十內は我を忘れて腕を伸した。その手は闇の中で內藏助の頭巾にふれた。
『何か？』
內藏助は急に氣がくるつたやうにその手をはらひのけた。その權幕に驚く前に、十內は自分の指がふれた頭巾をつめたく濡らしてゐるものを知つてはつとしてゐたのだつた。
『推參なり景政、雷丸の切れ味を受けて見よ。』
下の間では助右衞門の聲色が聞こへ、一同でどつと笑ひ上げるのが聞えた。
『いゝぢやないか？』
と、內藏助は優しく云つた。



奇異なる葬儀（一幕）

殖民地小景

長谷川如是閑

人物

『旅の人』

島國中佐（但し現役か豫備か後備か不明、

大楯老（前支那浪人、その前は軍事探偵

秋口（鐵道官吏）

天堂枯泉（酒を飲まぬ男）

伊能（酒を飲む男）

戸山（阿片を扱ふ男――所謂、白黑屋）

お仙（ホテル・オーヤシマの女將）

銀ちやん（お仙の若い燕）

お花（ホテル・オーヤシマの女）

お園（同上）

エリナ（同上）

場所と時

北滿洲の冬の夜。現代。

サイペリア領に近い渤海のある小驛の日本旅館——といへば、いふまでもなく、ロシヤ人や支那人相手の曖昧宿——ホテル・オーヤシマの玄關傍の狹いホール。

漆喰壁の所々剝げ落ちた上をそのまゝ白ペンキで塗つたのもいい加減灰色になつた凸凹の壁に圍まれた部屋。向つて左手の壁に草色のカーテンが垂れてゐる所が玄關口。カーテンが少し引かれて、すぐ突き當りの、街道に面した戸口の重いドアの閉つてゐるのが見へる。

それに對する向側の、右手の壁には、支那美人の半裸體の下品な石版摺の額がかゝつてゐるが、それに紙片が垂らしてある。その奥が二重硝子の窓、黒ずんだニス塗の窓枠には不細工な目張りがしてある。その窓の下にはソファーがある。

室の中央には、原色の不明な色のあせた卓子掛けのかゝつたやゝ長方形のテーブルが、正面の壁と直角に据えられ、その頭の上に、舊式の、眞鍮製の、大きい、古びた釣ランプが灯つてゐる。

卓子の上は、火酒の罎やら、皿に盛られたソーセージやら果物やら、コップやらで、亂雜に散らかつてゐる。

中央正面の奥に、卓子と直角に白布に包まれた寢棺が、ビール箱を二つ宛積み重ねたのを足にして安置(？)され、その棺の頭上には、黄ばんだ唐紙に「南無妙法蓮華經」と髭題目を眞似た惡筆を振つたのがぶら下つてゐる。棺に面したテーブルの一端には、白布が敷かれ、その上に、板片に立たせた一對の蠟燭が灯り、その中間には、茶碗に飯を山盛りにした上に箸を立てたのが置かれ、その前に線香を立てた丼鉢や、水を入れて木の葉に切つた青い紙片を浮べた茶碗が供へられてゐる。

棺と並んだ左手には、恐らく棺を据へるために片寄せられたのだらう、洋酒の罎を列べた、食器棚が片隅に押しつけられて、その片隅の右の隅には、眞黒なペチカが四分の一だけ圓くハミ出てゐる。

窓の硝子は、吹きつける雪で、一枠毎に三角形に白くなつてゐる。

テーブルの左右には、飲んだくれた男女がめい〳〵勝手な位置に椅子を据へて、だらしなく居流れてゐる。その連中は、

鳥國中佐、テーブルの中程に、のさばるやうに構へ込んでゐる。五分刈頭に不精髭を生やして、褞袍の上に黒の紋付を羽織

つて、その頸にタオルをかけて、時々額の汗をふく。

大番頭、支那服を着た、血色の好い、眉の慾つた、眼付のどんよりとした低い仰いだ鼻の、その癖口元の力んだ、どことなく凄味のある、けれども、少し抜けたやうな、悪漢のやうでもあり、善人のやうでもあり、欺し相でもあり、欺され相でもある六十前後の男。島國と對して棺に近く陣取つてゐる。

秋口鐵道官吏、尋常な背恰好で、中佐に列んで座つてゐる。色の黒い、額の尖つた割に顎の圓い、機關車を眞ともから見たやうな顔の人の好き相な、けれども下役には可なり惡る相な男。

天堂枯泉、飲んだくれた男女を離れて、たゞ一人、秋口のうしろの窓の下のソファーに寝たり起きたりしてゐる素面の男。何をしてゐるか暢ん氣らしく、常に此邊を往來してゐる、疎らの山羊髯を生やした、くしや〳〵した眼付の、貧相な顔をして、沈んだ聲で物をいふ男である。

伊能、といふのは、唯酒をのむ男で知られてゐる。こゝでも最も酒の罎に近い所に坐つて絶へず呑んでゐる。まん圓いが栗頭の下部四分の一が辛うじて顔になつたといふやうな面をした男。ルパシカの上に、茶色の外套の殆んど全身が擦り切れて、所々繼ぎの當つたのを上衣のつもりで羽織つてゐる。

戸山白黒屋、白黒交りの髪をオールバツクにして、ロイド眼鏡をかけ、派手な色合の詰襟の洋服で、左の腕の上の方に、太い金鎖をぶら下げてゐる。

お仙、小柄な細面の、色の淺黒い、頗るジミな顔立ちの、一向女將らしくない寧ろ世話女房風の女。髪を古風な束髪に結つて、料理服をつけてゐる。

銀ちやん、スマート背恰好で、豐富な、眞黒な髪を、温和しく分けた、幾分青みがゝつた顔色をした、引締つた眼鼻立ちの、誰れでも一眼見て氣に入り相な恰好の青年。

お花、横ぶとりの、腕の飽くまで太い、顎の肉の垂れた咽の膨れた、縮れ巻きの、すべての器官の太く逞ましいのに、たゞ眉毛だけが、薄く、やさしく剃りつけられてゐる女。

お園、これはまた、すべてのものを大約お花に取られてしまつたやうに、細く、小さく、顔などは、全くしやぶり減らされたやうに肉に乏しい女。たゞ眼だけが氣の毒のやうに大きく出張つてゐる。

エレナ、國籍の判然としない白人種、流石に皮膚の色だけはここにゐる誰れとでも全く懸け離れて白いが、白人のそれにしてはやゝ赤味が勝ち過ぎてゐる。僅かな肉の、眞四角な顔で、額

の肉が餘つて屑の兩端に少し垂れ下つてゐるのはブルドックを聯想させるが、寧ろ美人に近い整つた眼鼻立ちの女。大い灰色の瞳でぐい〳〵と相手を見つめて參らせる所はやはり西洋の女である。

ソファーの上の男を除いた外の男女は蓄音器に合はせて鴨緑江節を唄つてゐる。

『玄關のベルが頻りに鳴る。

島國　何者だ、やかましいわい。今日は公休ぢや。

お仙、黒井に眼配せする。玄關へ行つて扉を開ける。

『旅の人』毛皮の外套につゝまれた大男。旅行鞄を下げて現はれる。

大楯　だめだ〳〵、銀ちやん、今夜は休みだといへ。この神聖な式場に毛唐を入れることはならん。

銀ちやん　日本の方です。(男の手から鞄を受取る)

島國　何、日本人だ？(立上る)

『お仙、走りよつて、男の外套をぬがせ、帽子を受取る。半ヅボンの旅行服を着た、逞しい體格の、力と知惠とに充ち〳〵たやうな恰好をしてゐるが、上衣の下からかなり汚れたスヱターが見へてゐる。

島國　日本人なら大歡迎ぢや。さあ遠慮せずにずつと入りたまへ、ずつと。

『旅の人』テーブルの方へ歩み寄つたが、正面の棺を見て立ち止る。

島國　不審はご尤もぢや。今夜はある婦人の葬式なんぢや。、、、、、、、よりも遥かに前方に突進して毛唐や支那人どもを征服する勇敢なる日本婦人の葬儀ぢや。當地在留のわれ〳〵日本人は、寄つてここに集つて、この婦人の冥福を祈つてゐるんぢや。さア君、取り敢へず、この悲壯なる婦人のために(コップを兩手にもつて、一つを男の方へ差し出して、)乾杯してくれたまへ。

『旅の人』進んでコップを受取る。

島國　諸君！　日本人の足を容れるもの極めて稀れなこの僻遠の地にぢや、かゝる深夜、しかも風雪荒れ狂ふ恐るべき深夜ではないか、然るにぢや、その恐るべき深夜たるに拘らずぢや、突然、一人の同胞がこゝに姿を現はしたといふのはぢや、いゝか、これ全く、わが勇敢にして悲壯なるぢや、あゝ、實にわが勇敢にして悲壯なるお國

嬢のぢや、その御姉妹の、霊魂が、此の一個の同胞をここに招き寄せたに相違ないんぢや。疑ふ勿れ、諸君！ これは實に、不思議なる現象即ち一大奇蹟ではないか。是に於て、われ／＼は、かくの如き奇蹟を現はしたお嬢様の霊魂のために、且つは、その霊魂に招かれてこゝに突如として姿を現はした、一人の同胞のためにぢや、諸君！乾杯したまへ。

大楯　大賛成！

戸山　ヒヤ／＼。

伊能　妙々、妙法蓮華經。

銀ちやん、お仙、お花等一同のコップに注いで廻る。

島國（一同と共に）萬歳！

お仙『旅の人』に椅子を與へたが、男は、凝と椅の方を見たまゝ突立つてゐる。

島國　何と旅の人、感慨無量ぢやらうが。が、まだ君は、此の婦人については何も知らんのぢや。、、、、、、、、よりも推出する事、數千ヴエルストぢや。實に悲壮ぢや。かの黒龍江の支流、ゼーヤ河の畔ぢや、あゝかの見渡す限り茫々たる千里の氷原。（吟詩の口調で）君見ずやアー、アムールのオー流れエー、又見ずやオコックの海ミー。

秋口　チエーストツ！

大楯（氣合をかける）エーイツ。

島國　旅の人、まア聞いてくれたまへ。我輩が、あの懐かしいゼーヤ河の畔でぢや、ある夜、端しなくもぢや、始めてわがお嬢様に會つた當時のことを追懐すると、我輩の鐵のやうなこの胸も、實に、張り裂けるばかりの思ひなんぢや。（涙をポロ／＼こぼして、）旅の人、笑つちやいかんぜ。こゝに居るお仙さんも知つてゐるんぢや。……話せば長いことぢやが、旅の人、君にも聞いて貰はにやならんのぢや

大楯　話せ／＼、大に話せ。何度でも聴いてやるぞ。殊に今夜は故人の冥福のためぢやでのう、舌のすり切れるまで話すんだぞ。

戸山　俺達も耳の擦れ切れるまで聞いてやるぞ。

伊能　俺達は頭ががん／＼するまで聞いてやるぞ。

秋口　僕は始めて聞くんだが、然しコップがからつぽだぞ。

お仙　これは失禮（銀ちやん等と注いで廻る）

大楯　注げ／＼、滿洲、サイベリアの酒が皆無くなるまで注げ。支那もロシヤも呑み盡してやるんだ。……よしツ。さア中佐、話せ。

島國　話すぞ、話さんで何うする。旅の人、聞いてくれたまい、今を去る十余年前ぢや……

天堂（ソフアーに寝ころびながら）又二三年殖へたぞ。

大楠　枯泉、默つとれ！

伊能　高粱野郎、默れ！

島國　當時我輩はある重大なる使命を帶びて、黑龍江を上下すること幾回なるを知らずぢやつたが、ある年の冬の初めぢや、途中の船の故障で、ゼーヤの町の波止場に上つたのが最早夜半近くぢや。迷ひ迷つて、端なく辿りついたのが、こゝに居るこのお仙女將の勤務して居つた例の宿ぢや。無論我輩は、其の頃は血氣盛の青年ぢや、今から見ると、實に勇氣勃々たるものぢやつた。況んや郷を出でゝ日本婦人を見ざること茲に幾年だ……

戸山　今よりも勃々ぢやとても大變だ。

島國　いやもうだめぢや、老いては駑馬に如かずぢや……閑話休題、所が、その家に入つて見て驚いた。お君婆さんなる女將が——勿論、その時始めて會つたんぢやが——玄關に現はれて、我輩の姿を見るなり、ポロ〳〵と涙をこぼすんぢや。

秋口　君の伯母さんだつたのかい？

島國　然らず……まあ聞け……我輩たるもの、面喰はざるを得んやぢや。旅の人、さうぢやないか、勃々たる勇氣に滿身をふるはせて入つて見ると、何うぢやい、お婆さんが泣いてゐるんぢや。驚いたね。『おい、お婆さん……』とはいはなかつたが、『おかみさん一體何うしたわけだい？』といふと、お婆さん、涙をふき〳〵『何はともあれ、お入り下さい』つてわけだ。その時丁度我輩のあとから、ロシヤ人が二人やつて來て、うしろの扉をノックしたが、婆さん、扉をあけるなり、ロシヤ語で、今夜はダメだから、明晩來いと叱りつけるやうにいつて、向ふの鼻面を叩きつけるやうに扉を閉めて、門を下してしまふぢやないか。さうして面喰つてる我輩を、まるで孫でもつかまへたやうに、抱き上げんばかりにして奧へ招ずるんぢや。無論汚さくるしいが、よく温まつてゐる自分の部屋に連れ込んだもんぢや。見ると、いかにも日本婦人が三人居つたわい。その一人が、今こゝに御座るお仙さんぢや。ああ、君、其の時の我輩のことを忘れてはくれまいな。

お仙　よく覺へてゐますとも。ヘチ切れ相に眞赤な、桃太郎さんのやうな顏をして、固くなつて椅子に畏つて居らしつたわ、ほんとう可愛らしかつたわ。

島國　固くもならう哩。お婆さんは依然としてポロ〳〵涙を流してゐるし、君方三人は、恐ろしく緊張した顏をして、まるで軍法會議に罪人に呼び出されたやうな恰好をしてけつかる。全く弱つたね。

戸山　勃々たる勇氣のやり場に困つたんだね。

島國　いやもう、先刻の勇氣何處へやらぢや。『お婆さん、拜むから泣

くのだけよしてくれたまへ』といひたかつたが、それさへ咽喉の所につまつて出て來んのぢや。旅の人。

秋口　桃太郎、鬼が島で捕虜になつたといふ形だね。

島國　大に然りぢや。……すると、婆さん、やつと、涙を拭いて微笑んだね。さうして曰くぢや『ほとんど十年ぶりで、突然、內地の方にお目にかゝつたので、我れ知らず淚をこぼしました。何年外國でこんなことをやつて居りましても片時も日本のことは忘れられんのに、この邊には內地の方は滅多に見えず、見えても私共の居ることは知らんで通り過ぎてしまはれるかして、もう十年餘りも內地の方にお會ひしないので、時々は氣違ひになるかと思ふほど內地の人の顏が見たいことがあります。それをまあ、今晚といふ晚は、思ひがけずあなた樣にお目にかゝつたので、嬉れし淚が止めどもなく出まして……』

伊能　よう〳〵、お婆さんの聲色はうまいぞ。

島國　さういつて、立ち上つていきなり我輩に向つて柏手を打つたもんぢや。旅の人。我輩神樣扱ひにされて大に驚いて婆さんの手を抑へやうとしたが、ふと後ろを振向くと、我輩の頭の上にちやんと神棚があつたんぢや。我輩はあわてゝ立ち上つて、婆さんと同じく柏手をうつて禮拜したんぢや、旅の人。

秋口　何うも飛んだことになつたね。

大楠　全く絕望ぢやのう。

島國　所がぢや、全く絕望ならまだしもぢやが、旅の人、まあ聞き給へ、我輩は椅子を動かして席をかへて、例の三人の女に今度は面と向つて坐つたんぢやが、その時ふと見ると、どうぢや、そのうちの一人の女がやはり泣いて居るぢやないか。

大楠　前門虎を防いで後門狼を入るといふ形勢ぢやのう。

伊能　その狼に喰ひつかれたかつたらうな。

島國　その狼……ではない、その婦人が即ち今夜の佛のお絹孃だつたんぢや、旅の人。さうしてその傍で頻りに彼の女を勞つてゐるのが即ち、そこに居るお仙さんだつたんぢやが、やがてこれも亦ベソベソやり出す始末ぢや、なあお仙さん、さうぢやつたらうが。

お仙　さうでしたわね。私は日本人もへつたくれもなかつたのですが……

島國　日本人もへつたくれもとは何だ。

お仙　失禮！　でもまあ話ですよ。日本人なんかよりお絹さんのことを思つて貰ひ泣きをしたんですわ。

島國　日本人なんか、といへば、その時そこにゐた我輩のことぢやらう。つまり我輩なんかといふ意味になるぞ。

お仙　全くね。あんたなんか眼中に無かつたんでせうよ。

島國　我輩だつて君なんか眼中に無かつたんぢや。我輩の眼中にはただお絹嬢あるのみだつたんぢや。お花、お関、エリナ諸嬢の前だけれども……

お花　何うもご馳走様。

秋口　おい／＼脱線しないで、／＼。

大栖　鐵道屋らしいことをいふのう。

島國　で旅の人。流石は婆さんだ、さう皆がペソをかいてばかり居ては折角のお客様に相濟まんことだから、今晩は、店を休んで、家中總出で我輩をもてなさうといふといふんで、支那人のコック、ボーイを叱咤して、酒池肉林の大御馳走だ。

秋口　そこで漸く我が時至れりか？

島國　惜しむらくは然らずぢや。何せ切つかけが切つかけだつたので、いくら飲んでも、一同妙にしんみりとして、まるでお通夜の晩ぢや。

伊能　やいお通夜てものは賑かなものなんだぞ。今夜だつて見ろ。南無妙法蓮華、ドンドコドンドコドンだ。

島國　やかましいや。お通夜といつても今夜のは別ぢや、その晩のは、わが勇敢にして悲壮たるお絹嬢の通夜の如くにあらずして、平凡々たる愚夫愚婦の通夜の如きものなんぢや。飲めば飲むほどいやに緊張して、お仙さんの如き婦人すら、端然として淑女の如く、決して本性を現さんのぢや。

お仙　憚りさま。本性を現はしたら何うなるのでせう？

大栖　だがその時本性を現はしたら、決してお絹嬢をして名を爲さしめなかつたらうよ。島國大佐、その晩はきつとお仙さんとお通夜をしたゞらうのう。

島國　大栖は、島國のことを中佐といつたり大佐といつたり、時には大將元帥などともいふ。

島國　大栖老人、年甲斐もなく燒餅を燒く所は、老いたりと雖も尚ほ馬上顧眄の勇ある所以ぢやらう。古つわものには敵はんわい。

戸山　鐵道屋さん、又脱線だ、御出張を願ひます。

秋口　てんからレールに乘つちや居らん。

大栖　支那人自營の鐵道以上ぢやのう。

島國　さて時局は何處まで進んで居つたのだつけな……

大栖　日本の外務省の云ふやうなことを云ひよるのう。

島國　何せ、旅の方、例の婆さん始め三人の婦人は、丁度、今晩のお花、お関、エリナ三嬢のやうに、平生のあばずれ何處へやら……

お関　覺えておいでなさい。

島國　君等のあばずれをかい？

秋口　何しろ勃々たる勇氣が出場を失つたので、無暗と八つ當りだね。

島國　とにかく、四人の婦人は、丁度、そこらに居るお孃さん方のやうに、只今貴婦人がレデイーになりましたつてやうな恰好で、お花孃のやうに太とやかな婦人が頗るしとやかに我輩にかしづいてゐるので、我輩も亦、紳士からゼントルマンになりたてのやうな湯氣を立てゝ畏つてゐなければならんぢやないか、旅の方。褻いま〳〵しいッ。

戸山（お花等に）あれは君方のことを怒つてゐるんだぜ、今夜ももつとあばすれろッてさ。

お花　もうくたびれちやつたわよ。

島國　然しあの時は、やつぱり、婦人等の眞劍味に魅せられて、我れながら多少、しんみりとしてゐたんぢや、旅の人。

大栃『多少』といひよる。案外正直な男ぢやのう。

島國　全くぢや。恐れて畏るべきものは至誠ぢや。至誠はかくの如くにして……

天堂　獸を人間にした！

島國　やかましいッ！　枯泉の奴、獸になる能力が無いのを口惜しがつたよる。……實際、諸君のうちに、あの晩の我輩のやうな敬虔な氣持で、婦人等と酒を飲んだ覺のあるものがあつたら御目にかゝらん。我輩と雖も、無論空前絶後ぢや。それがために我輩は飲めども飲めども少しも醉はん。といつて決して平生のさういふ場合のやうに、不愉快では決してないんぢや。といつて大に愉快でもない。

戸山　戀病らひこのはそれだね。

秋口　至誠は全く人間を戀病ひにするよ。

島國　かくの如くにしてぢや、宴は深更に及んだが、お婆さんの、十年同胞を見ざる述懐談も、あんまり長くなると、聊か我輩を無何有郷に遊ばしめるに足るやうになつて、居眠をしたと見えて、お婆さんも、十年ぶりで内地人の顔を享樂することを切りあげて、宴を撤することにして、自から我輩を寢室に案内してくれたもんぢや。四疊敷位の細長い部室にベットがあつて、小さいテーブルに靑いものを植えた鉢の乘せたのなどがあつたりして、頗る氣持のいゝ部屋だつた。我輩、最早その時は滿身たゞこれ至誠あるのみだつたので、幾日かの船中の生活から、始めて陸上の意外に氣のきいた一室に眠ることの出來る愉快で充分に滿足して、厚くお婆さんに禮をいつて、ベッドに横たはると、忽ち前後不覺に寢てしまつたんぢや。

秋口　多少、省略に從つたやうだね。

島國　ちつとも省略せんさ。……まあ聞いて居たまへ。……うと〳〵と寢たと思ふと、何かの物音に眼を覺ましたんぢや。

大楯　武士は轡の音に眼を覺すといふ奴ぢやのう。

島國　聊かその氣味ぢやつたね。疲れてぐつすり寢た割には早く眼が覺めたもんぢや。見ると、ランプの光に人影が見えるのぢや。一見して女たることが解つたんぢや。

秋口　今度こそ我が時到れりかい。

島國　慌てるべからず……

戸山　語るに落るといふ奴だ、大いに慌てたな。

島國　我輩徐ろ眼にを開いて、見ると案の條お絹さんぢや。

お花　何が案の條ですよ、自惚れてるよ、此人は。

島國　案の條が何うしたといふんぢや……我輩、敬虔の氣持のうちにも、お絹孃のことは片時も我輩の腦裡を去らなかつたんぢや。所へ其お絹孃だ・流石の我輩も心臟の鼓動が昻まるを覺えたんぢや、旅の人。

大楯　至誠の危機ぢやのう。

秋口　謹聽々々。

島國　所が、恐れて畏るべきものはやつぱり至誠ぢや、旅の人。我輩眼前にお絹孃の姿を見て、覺へず起き上つて、ベットの上に端然と坐つてしまつたもんぢや。さうして彼の女を椅子に倚らせて、さて御用件はとやつたんぢや。何うぢやい、旅の人。

大楯　枯泉曰く至誠は獸を人間にす。

島國　われながら天晴ぢやつたが、全くお絹孃の至誠の至す所ぢや。

伊能　(ぐてん〳〵に醉つぱらつて)やい、もうよせやい、何がシセーだい、人面白くもねへ。のろけるねへ。

お仙　(傍から抑へて)まあ伊能さん、お聽きなさいよ。そんなに飮んぢややだめよ。

伊能　何んだい、お仙將軍ともあるものが、あんな兵隊野郎の肩なんぞ持つない。

エリナ　伊能さん、醉つぱらひ、バカ。

伊能　何だと、バカと、ぬかしやがつたな、舶來の大福め、押しつぶして喰つちまうぞ。

秋口　謹聽々々。

島國　(これも大分へと〳〵になつて)至誠の至す所ぢや。全く至誠の……

伊能　又シセーだつてぬかしやがら、醉せつたら醉さねえか、舶來の赤鰯め、醉せッ。

大楯　舶來のすきな醉つぱらひぢやのう。

島國　醉さん！　旅の人、どうです聞いてくれますか、醉しませんぞ

我輩は……（けれども、眠む相に頭が時々垂れ下がる）

秋口　何うした中佐。のろけと居眠りを一緒にする奴があるかい。危機一髪といふ大事の所だ。お絹嬢の前に坐つて……居眠りをしたのかい？

島國　居眠りなんかせんぞ、我輩は……お絹嬢はぢや、旅の人、眠つちやいかんぞ、我輩に向つてぢや、彼女が本國を出てから今日に至るまでの經歷を委しく語り出したんぢや。あゝその千辛萬苦、故郷に在つては貧苦と戰ひ、海外に出ては……海外に出てはぢや、ロシヤ人や支那人と戰ひ、十年の長年月の間、惡戰苦鬪をつゞけたのは抑も何のためぢやと思ふ。郷里の父母が貧苦のために失つた田畑を取り戻す金を貯へやうといふんぢや、旅の人。彼女はかくの如くにして、自分の肉を削つて十年の間に八百留の金を貯へたといふんぢや。旅の人。

秋口　成るほどね。

島國　しかも彼女は機會ある毎に、それを手の切れるやうな新しい紙幣に代へて、しつかりと肌身につけて、これが千留になつたら、日本の金に代へて、故郷に歸り、兩親にそれを渡して、その喜ぶ顏を見ることを、一日千秋の思ひで待つてゐたんぢや、旅の人。

秋口　で千留になつたといふのかね？

島國　所がぢや、それが九百九十何留となつた年に、突如として彼女を奈落の底に突落した大厄災が彼女の上にふりかかつたんぢや。いや／＼、彼女の上にではない、全世界の上にぢや。それが何ぢやと思はれるか、旅の人。いはずと知れたボルシエビキー革命ぢや。彼の女が十餘年の辛苦の結晶たる、手の切れるやうな九百九十留の紙幣は、一朝にして全くの紙屑となつてしまふたんぢや、旅の人。あゝ天道是か非か、神も佛もない世界か、とはこれなんぢや。

秋口　やれ／＼可哀相にね！　おつと居眠りをしてはだめだぞ中佐。

島國　何の居眠るかい……彼女は、その千留の紙幣が全くの反古紙になつたことを知つたので、何度かそれをペチカに投げ込んで燒いてしまはうかと思つたが、何うしてもさうすることが出來なかつたと云つて、懷から、その反古になつた紙幣を出して我輩に見せるんぢや。全く手の切れ相な紙幣なんぢや。彼女はそれを我輩に示して潸然と涙を流すのぢや、さうしていふんぢや、十年の辛棒が全く水の泡になつて、もういつ日本に歸れるか、とても命のあるうちには見込のないことゝなつた。今日はもはやその日のパンさへ碌々喰べられないのに、十年が百年經つても、故郷の田畑を取り戻すことは愚か、自分の身體の故郷に歸れる見込さへもなくなつてしまつた。自分はこの先き何のために生きて行かなければならんかわからなく

なつた、といつてよゝと泣くんぢや、旅の人。我輩、慰める言葉も出ないで、たゞ茫然としてゐると、彼女は、一個の紙包を出して、何とかして、これを故郷の父母に屆くやうに取斗つてくれと賴むんぢや。それは何ぢやと聽くと、自分の髮の毛と手紙ぢやといふんぢや。自分は最早この異國の土となるより外仕方がないと諦めてゐるが、責めては、自分の魂だけも父母の傍に歸りたいと思ふので、その縁としてこの髮の毛を父母萬歲の後に一緒に埋めて貰ひたいといふんぢや、旅の人。笑つちやいかんよ、既に覺悟をきめて淚を收めた彼女の前に、我輩は、婦女子のやうに泣いてしまつたんぢや、旅の人。これが泣かんで……

秋口　泣いてゐる……が、眠つてもゐるぞ。おい〳〵、中佐。で何うした。

島國（ぐでん〳〵になつて）ウム、ウム、ウム。

秋口　何うしたんだ、その先きは？　君は彼女に賴まれた使命を果したか？……そのお絹孃がこの佛だとすると、とうとう田地は取り戾せずに、この土となつたのかね、やれ〳〵……

天堂　日本の親父の失くした田地を、ロシヤ人や支那人が取り戾してやらんければならん義務はなからう。

秋口　天堂、貴樣は怪しからんことをいふ男だな。俺はもう我慢はせんぞ。

天堂　で何うする？

秋口　法律が許せば決鬪する。

天堂　許さない法律を作つたのは君方官吏といふ動物ぢやなかつたかい？

秋口　やい此野郎（立ち上つたが、ふら〳〵と倒れて、これも睡む相だが、元氣を出して）おい中佐、枯泉の奴、怪しからんことをぬかしてゐるぞ。制裁を加へにやならん。起きろ〳〵。

戸山　武士は轡の音だ、中佐を起すのはお花さん、たちに限るだらうぜ。

お仙　だめ〳〵、島國さんが眠つたと來たら、大砲をぶち込まれたつて起きやしませんよ。

秋口　仕方のない軍人だ。どいつもこいつも賴みにやならん。枯泉の奴、出て來い。

　　ふら〳〵と立つてソファーの方へ行く、天堂はそつとぬけ出して姿を消す。

秋口（ソファーに倒れかゝつて）やい枯泉、居らんか、逃げたな、やい天堂……

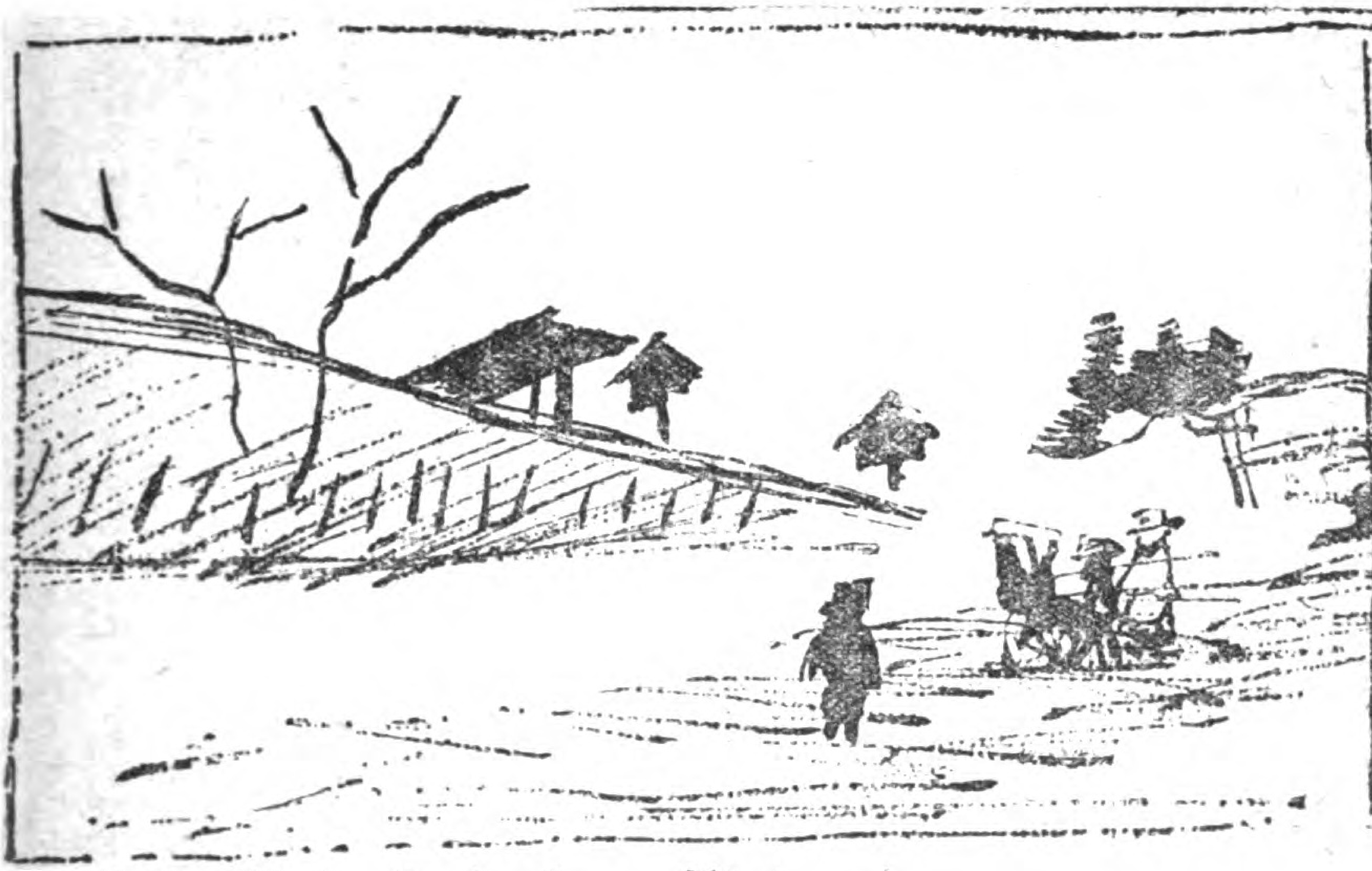
島國　天堂か枯泉か、ムニャ〳〵……

秋口　枯泉、出て失せろ、天堂出ろ（さう叫びなら、ソファーに倒れて寝てしまう。）

お仙　おや〳〵皆寝てしまつたよ、だらしのない人達だね。（『旅の人』が突立つてゐるのに氣がついて）おやまあ、私何うしたらいゝでせう、お客様をすつかりほつたらかしにして。お疲れでしたのに、ほんとうに濟みませんでしたこと。何うかあちらでおゆつくりお寝み下さいまし。さあ御案内いたしませう。

『旅の人』（棺の方へ進んで、恭しく默禮。お仙、お花、お國、エリナ、銀ちやん、立ち上つて、棺に向つて默禮。

（幕）



のん・しやらん記錄

佐藤春夫

(一)慈善デー

下層社會──どん底の世界。そんな言葉は今や單に抽象的な表現ではない。具象的なものとして文字どほりに實現された。地下三百メートルにある人間社會の最下層の住宅區(?)(これをしも住宅と呼べるならば!)である。

彼はここに來てから幾日目かの朝を目ざめた。朝といふことがこんな世界でもわかるのが第一に不思議であつた。ラヂオは絕え間なしに明確に響いて來た。しかし、そんなものは生きるためには何の必要もない。欲しいものは空氣だ。それから日光だ。それにくらべると食用瓦斯などはずつと後でもいい。(約十世紀ほど以前に、その內容はわかつてゐないが、「早過ぎた埋葬」といふ題で、これらの人間生活の悲慘を豫言した文學者があつた。又同じ頃に「もつと光を!」と言ひながら死んだ詩人があつたと傳はつてゐる。多分彼等は賤民文學者の先驅者であつたに違ひない)日光はここでは到底その見込みはなかつたけれども、空氣と食用瓦斯とは、最も小さい銀貨が一つづつありさへしたならば、それを自動メーターのなかへ投げ込んで買ふことも出來た。しかし彼は銀貨

どころではない觸覺一つなかつた。どうしたらそれが果して得られるものかさへも知らなかつた。彼はこの社會の生活の樣式に就ては少しものみ込んでゐなかつた。ここへ投げ込まれてからまだそれほど日が淺かつた。それに彼がどんなに聲を出して見ても、彼の聲は決して少しも響を立てなかつた。(ラヂオがこんなによく響いてゐるにもかかはらずこれは又、何と不思議な事である)さうして彼は何事をも人に質問する方法がなかつた。文字はここでは多分通用しないであらう。何人も知らないに決つてゐた。たとひ皆が知つてゐるにしたところが、何よりも第一にそれを書く可き、又讀むべき光線がなかつた。

欲しいのは空氣と光とだ。もし彼が今までここで育つてゐたのだとすれば、彼は自づとここに慣れてゐたかも知れなかつたが、彼にとつては急激な變化であつた。かういふ生活をこれ以上にもう三十時間もつづけてゐたならば、きつと自然に死ぬだらうと彼は自覺した。彼は今更のやうに彼が生きてゐたあの秘密の世界がこのやうな社會生活にくらべると如何に幸福であつたかを痛感せずにはゐられないにつけても、その幸福な秘密の世界の創造者であつた人、さうして彼一箇にとつては恐らく彼が生涯の唯一の知人であるだらうところのあの老人は、その後どうなつただらうか。彼にはこれが心がかりであつた。彼がラヂオに耳を傾けてゐるのは、外にする事もなかつたからではあるが、一つにはもしやその老人のその後の消息が、そこから聞かれはしないかと思はれたからでもある。

彼自身の聲帶が響を失つてゐるだけに、この空間に鳴り渡る聲が彼には腹立しかつたが、ラヂオは引きりなしに鳴りひびいてゐた。昨日一日人間の世の中であつた事を殘らず喋りつづけるつもりらしい。別に誰もそれを聞かうと企ててその仕掛けをしたのではなかつたけれども、この音は闇と同じようにこの階級にまで這入り込んで來るのであつた。尤もそれは社會教育に必要と認められるところの日々のニユースのたぐひであつて、娛樂に關する一切の放送は地下十階以下から、徐々にかき消されてゐて、これらの最下層の住宅には、全く何ものも洩れては來なかつた。何故かといふのに、社會道德は何人も心得て置かなければならない必須事項であつたが、娛樂は決してその必要のないものであり、いや反つてあらゆる人間が同時に平等にそれを味つてゐるといふ事實は娛樂の魅力の質と量とを稀薄にしてしまふといふ理由で、娛樂に關する放送が下層社會へ傳はることには、特別に異狀な苦心を拂つて完全にこれを防止してあつたのだ。かういふわけで彼が聞いてゐるラヂオは何の面白い事とてもなかつた。たとへば、市會議員の何の某が賄賂を拒否したがために告發された――この男の言ひ分では、一般市民に不利益と思へる議決に贊成してそれによつて自己の利

益を受けることは心苦しいから拒否したといふのであるが、これは社會の風習に反し市會議員の特權を侮蔑するものであるといふのが告發者の意見であるが、被告に同情する人々は、一應被告の精神狀態を鑑定することが必要であると力說してゐる云々といふやうな、報道は彼にとつては少しも興味のない問題であつた。かういふ報道でラヂオは終りになつて、彼のもしやと思つてゐた彼の知人の處罰に就ては何事も聞かれなかつた。

然し、ラヂオの最後に、彼は自分の耳を疑ひ度いやうな言葉に接した。ラヂオは響く――

「本日は×××の祝賀一週年紀念として（彼にはこの意味がよくわからなかつた）慈善デーを催します。上流社會の人々は特に半日の散步を割愛して、平常空氣と日光とに缺乏を感じてゐる下層社會の人人のために、自動車遊步圓形廣場を提供します。一切の陸上交通機關は本日の午後停止しますから、乘物を持たない階級の人々も少しも危險を感ぜずに、街を通用することが出來ます……」

彼はここに到つて始めて思はず呻き聲を發した。いや、彼ばかりではなかつた。あまりの嬉しさに我を忘れて發した叫び聲は、彼の身邊の四邊から起つた。隣の升（家でも部屋でもなかつたから）のなかに住んでゐる男たちの聲なのである。さうしてその叫びに消されて、肝腎のラジオはそれからあと、よく聞えなくなつてしまつた。

彼はすぐに決心をして這ひ上つた（立ち上がる事は出來なかつたのだ。ここの住宅區ではそれ以上の高さは贅澤だといふので、天井まで一メートルしか無かつた）。あちらでもこちらでも起き直つて這ひ上るけはひが盛んに感ぜられたが、彼が間もなくいつの間にか這ひながら犇いてゐる一部の人間の流れのなかに押し込まれてゐた。

（二）地上へ

一つの突立つてゐる非常に巨大な圓筒であつた。その上部の底は眩しい光の圓であつた。しかしその光は決して下部の底まで達せずに、下は眞黑であつた。その上部の光明こそは地上である。さうしてそこに達するためには、この圓筒の中心に何か非常に大きな玩具でもあるかのやうに、一條の最も長い螺旋形の梯子が、上の光の圓の方へグル〳〵〳〵と卷きねぢれながら上つてゐた。（これがこの下層の世界から地上へ上る唯一の通路であつた。あの立體軌道――その同一台のものが地上では自動車となり建物のなかではエレベーターに役立ち空間では軌道飛行をする交通機關は、地下十五層以下へは延長の必要が認められなかつたので、それ以下の低い階級の人々が交通するためには、どうしてもこの螺旋階による外しかたがなかつた。）

それを見上げると目が廻りさうであつた。いや、事實、その上り口で卒倒して、行政整理上適當に處置された人間が幾人あつたか知れない。(適當な處置といふのは死屍として手早く取片づけられることを言ふのだが、これらの設備は、歴史家の言ふところに據ると中古のモナコ王國の賭博場の建築から發達したものである)。平常、日光や空氣や食用瓦斯や飲料瓦斯やあらゆる榮養物に缺乏してゐる人々が、しかもこんな狹つた押合ひの中で、しかもこんな刺戟的な構造を見上げたならば氣絶するのが當然であつた。

彼は誘惑を感ずるにもかゝはらずもう二度と上部は見ない様に努めながら、彼が階段へ上れる順番がくる迄はたゞ彼の周圍に押合つてゐる人々に注意してゐた。彼と同じ社會の人達はどの人間も、彼と同じやうにもの言ふ事が出來ないのかそれとも極度の緊張からであつたか、隻語を發する者もなかつた。闃としてこの群集の沈黙は物凄かつた。

彼の順番が來た。彼は階段の番人によつて攀上を許可された。彼が階段に足をかけて二三段上つた時に、彼の後から上つてくる人間が呟くのを聞いた。

「あゝ、生きてゐたいといふ思ひ出には一つ日の光といふものを充分に……」

彼は、人がもの言ふのを珍らしく思つて、ふりかへつて見下した。それは彼の直ぐ後から攀上して來る人の言葉だつた。しかも、彼がそれを知つた瞬間には、氣の毒なその人はまだ日の光一すじ浴びないうちにもう階段からすべり落ちて、既に適當に處置されてゐるところであつた。多分あまりのうれしさにうつかりして踏み外したのであらう。彼はかすかに身震ひをして、改めてしつかりと階段の手すりを握り、足を注意ぶかく踏みしめた。

すさまじい勢ひで、風を呼びながら墜落する者があつた。やはり階段を攀ぢてゐるうちに力盡きたものであらう。その叫び聲がこの周圍のなかで反響した。これらの墜落者が幾つも幾つもつゞいて階段の外を喘ぎながら落ちて行つた。有難い事には、どういふ仕かけがあるのか墜落者は決して階段の上にまくれ落ちて來ずに、階段の外を落ちて行つた。見下ろすと、かういふ出來事は日常の普通事であると見えて、この階段の周圍は、墜落者を早速に自動的に處置するやうに出來てゐるらしかつた。(彼が悟つた通りである。さうして墜落者の數は、やはり自動的示針によつて明確に指示されてゐたのだ。何事にも完全な統計は文明國の政府として忽にすべからざるものだからである)最初のうちは墜落者を見ることに足がふるへて、彼自身も危く墜ちさうであつたが、いつの間にかそんなものにも慣れてしまつた。彼はもう大分、攀ぢたらうと思つて、上部を見上げた。彼の攀上がまだ

三分の一にも及ばなかつたのを發見した時には、彼は思はず溜息をつき、こんな激しい疲勞で果して無事に地上に到達することが出來るかと思ふと、危く墜落するところであつた……

(三) 彼の生ひ立

(額に油汗を流しながら螺旋階を上つてゐる彼が果して無事に地上に登ることが出來るかどうか。「いや、大丈夫登るであらう。さもなければこの話はもうこれ以上には發展しないわけなのだから」彼がこの單調なしかし緊張し切つた命懸けの仕事をしてゐる間に、我々は彼の過去に就て知つて置かう)彼の生ひ立ちは——尠くともその二分の一以上を、彼は自分でも知らなかつた。それは決して無理もない事である。個人が個人の經驗を鄭重してそれを記憶して置く習慣はここにはなかつたが上に、彼はその頃あまりに幼少であつたらしい。

或る日、彼は實にまぶしいやうな光線のなかで目を見開いたのだ。すべてが今まで身に覺えないほど快適な狀態であつた。さうして彼のぐるりには五六人のおとなが眠つてゐた。その外に別に一人の見慣れない老人がこれは起きてゐて、彼の枕もとにしやがんでゐた。

彼が最も快適に思つたのは、彼が今までの經驗したこともないものが彼の口のなかへ流れ込んで來てゐたのが重大な原因であるらしかつた。(ただ飲用瓦斯をのみ知つてゐた彼はその日まで水といふものを知らなかつたのだ)彼の居るところは隅から隅まで光に滿ちてゐた。そこで彼はその見慣れない老人と對話をしてゐるうちに、突然に起つたこんな變化の理由を、ぼつぼつと悟るやうになつた。老人が言ふのには、彼は道路で自殺をしたのである——交通機關のためにはね飛ばされる事を總括して自殺と呼び慣はしてゐたが、その自殺者として彼は、適當な處置によつて、交通整理車に運搬され、地下道に掃き捨てられたに違ひなかつた。

「わたしもその一人なのだ」老人は言つた「今日の社會の狀態では有料散步道以外のところを乘物に乘らないで步行するぐらゐな人間は、自殺志望者と見做されてゐるよ。無理もない事だ。あの道路を、どんな注意を拂つたとしても車に轢かれずに三メートルと步行出來る筈はない。それを承知しながら、そこに出てゐるといふことは、その決心の有無にかかはらず自殺志願者に違ひないわけだ。さうしてここへは毎日無數の所謂自殺遂行者たちが運ばれて來るよ。そのなかに無論お前のやうに單に氣絕したにすぎないだけの人も隨分あるのだ。わたしも丹念にそれを拾ひ上げては助けてみる。しかし誰も滿足には回復しない。もう今までにさんざん衰弱し切つてゐる連中ばかりだからね。ここにゐる人たちもせつかく拾ひ上げてはみたけれど、もうみん

な駄目なのだ」

言ひながらその老人は、彼を抱き上げて、それを片隅に置き直し、それからこれは彼にも以前味つたやうな氣のする食用瓦斯のパイプを彼の口に當てがつた。さうして老人は彼以外の人間を抱いて、ひとりひとり下の方へ投げた。その度に、ものを吸込むらしいゴオといふすさまじい音が地の下の方でうなつた。眠つてゐる者と思つた人たちは、みんな死人であつたと見える。

この老人は實に不可思議千萬であつた。どうしてこんな所にたつたひとりで生きてゐるのか、それが第一に判らなかつた。その上にこの人は何事でも知つてゐた。彼等は次のやうな問答をした——

「お前のゐたところは眞暗だつたかい」

「いいえ。少しは明るかつたの、ぼんやりと」

「お前は婦人といふものを見たことがあつたかい」

「婦人つて、どんなもの？　小父さん」

「知らないのか。それぢや見たことが無いのだらう。お母さんも無論知らないのだね。婦人はどんな人だつて地下の十階以下には決して住んではゐないよ。——特別にいい職業があるからね。それでお前、何かい。空氣は管から毎日吸つたかい？」

「ううん。時々なの——隨分おいしかつたの」

「うむ。するといろいろ考へ合せて、お前の住んでゐたのは多分地下の三十階附近だつたらしい。わたしは地上の一階から十九階までは知らないけれどもその外ならば知らないところは無いのだからね。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」老人はどうしてだか知らないけれども大聲でながい間ひとり笑つた。それから「それにしてもお前はきつと隨分といい生れなのだね。實際、出産税はおそろしく高い。それを滿足に拂へるのは地階の二十階までがせゐ〴〵だ。その外の階級ではたゞ社會税を支拂つて捨子をするより仕方のない世の中だからね。地下三十階に捨子をするために支拂ふ社會税だつて並大抵なものではない。お前のお母さんはそれが出來る程の人だつたとすると、お前はなかなかのいい生れだといふことがわかる……」

老人はその他いろ〳〵なことを話した。彼には了解しがたい事ばかりであつた。その後何年かの間、この老人は彼の養ひ親になつた。老人は彼を愛育した。彼が生長するに從つてこの老人がどんな人であるかといふことが少しづつ判つて來るのであつた。行路病者或は街頭自殺者の死屍を地下へ運搬する入口に當つてゐるこの人知れない一角へ人知れない世界をひとりで開いてゐるこの老人は、その人自身の言ふところによると、死屍のなかで新しい世界を夢みてゐる人であつた。この追放された半羊神は氣の毒な笛をこんなところでひとり吹い

てゐた。簡單に言ふとこの老人は、人間には靈といふものがあるといふ考を抱いてゐた。しかし彼があると信じてゐるその靈なるものは、今までにどんなえらい解剖學者も人體のなかからその存在を發見した事のなかつたもので、そのやうな目に見ることも出來ないものを信じてゐるといふことがこの老人の今日の社會のどの階級にも生存出來なかつた根本の原因であつたらしい。彼は何百層とある社會の種々雜多な階級から一段一段と追はれた。今日の社會ではどの階級にも彼の行動を理解する人々がなかつたから、彼は誰にも相手にされなかつたのだ。さうして彼は彼のやうな考はこの星以外の世界――多分火星あたりでは通用し、そこではさういふ別の文明によつて社會が出來てゐるかも知れないと思つてゐた。彼は火星との通信を今も熱心に計畫してゐた。

「もともと私は歷史の學者だ。さうして二十世紀と二十一世紀といふ昔の時代のことに興味を持つてゐてね。それは實に面白い時代なのだ。當時、新らしい煉金術が流行してね。何でもこの世界といふ立體を一度逆にひつくりかへして置き直して見ると、人生はどこもかしこも光明的なものに、黃金になるといふ思想なのだ。そこで世界が非常に動搖し出してね。その結果はひどくごつた返した後にやつとどうやらひつくりかへして置き換へたのだ。折角だんだん落着いて新らしい世界が出來てゐると今日の世の中なのさ。私が二十世紀に興味をもつてゐるといふのは、そのころ極度に發達してゐたその當時の世界の狀態が、不思議と今日の世界と大へん似てゐるからなのだ。かういふ研究を、私はまだ若くつて地上の二十階に住んでゐた頃に、發表したものなのだ。そこで私はそこの學者の社會から追ひ出されたのだ。それ以來といふものは私が物を言ふ每に、人は聞かないふりをして橫を向くのだ。私は地階の二十階を見棄てなければならなかつた。又、日光や空氣は人間には階級の如何にかかはらずその健康上必要なものだと說明した上で、それらのものは古代では人類が殆んど平等に享有することが出來たところを見るとこの意味では近代の文明は呪ふべきだといふ說を私が發表した時、私は二十一階の社會から追ひ出された。何でも私は時代の常識に從はずどんな事實にも特別の意見を抱く卓越個人とかいふものらしいといふので人々は排斥し出したのだ。」老人は聲を上げて笑つたが「お前はまだ子供だから話してわかるまい。そのうちに追々といろんな私の考を聞いて貰はうよ」

かういふ風に、老人は折にふれては彼の身の上を話したり、或は少年を教育しようとしたりした。夜になると、老人は小さな機械を組み立ててゐた。その火星に通ずるべきラヂオは、もしここに充分なアンテナを設ける高さなり廣さなりがあつたならば必ず役立つのだけれど

も、この秘密の地下部にはそれだけの餘裕のないのを、老人は恥ら歎息したから、研究に沒頭してゐるのであつた。

　この二人の住んでゐた小世界では、日光もよく射したし、空氣にも飲食物にも不自由しなかつた。適當な濕度まであつた。老人はそれらの事に就ては一言も言はなかつた。少年も亦、はじめのうちこそそれを奇異にも有難くも思つたが、そのうちいつの間にかもう人間當然の權利として怪しまなくなつた。

　突然、或る日、數人の人間が——いつものやうな死骸ではない珍らしい生きた人間が、この人知れない場所へ侵入して來た。それは警官といふものであつた。十幾年間に渉る永い間、日光や、空氣や、食料瓦斯、又は最も貴重な飲用水などといふものが、どこかで洩れてゐることが、メータアに現はれ、それを研究して見ると丁度一個の人間の必要分だけに相當することがわかり、しかも數年前からはそれが二人分だけの分量が消費されてゐることが知れたので、政府はそれらのものの使用區域を小さく區切つて取調べた結果、警官たちはたうとうここに踏み入ることが出來たのであつた。さうして未曾有の大膽不敵な犯罪者だといひながら、警官たちは、老人と少年とを捕縛したのであつた。(少年が神仙のやうに思ひ込んでゐた者は泥棒であつた)最も科學的に巧緻な方法で行はれてゐたこの犯罪は少年には不可能であつたし、老人は罪責を無理ひとりで負ふたから、少年は直ぐに釋放されることになつた。放免される前に少年は法官から、過去の記憶を失ふ方がいいか、それとも聲音を失ふ方がいいかと質問された。この難問を受けたものは暫く熟考してから、聲音を失はうと申し出た。何故かといふのに彼はあの老人の敬愛すべき人柄と恩義とを忘れたくなかつたからであつた。法官は彼に一杯の無味無色な液體を與へた。それを彼は嚥み干すと、口が利けなくなつてしまつた。さうして彼は警官に導かれて地下の最下層の社會へ送られたのであつた。

　彼の養父ともいふべきあの老人のその後の消息は杳として知られない。

(四) 街上奇觀

兩側の極端な高層建築は、見上げると遠近法の理に從つて正に一點に集中しようとするかのやうに兩方から今にも崩れかかつて來さうに見えた。さういふ直線が上に向つて延びてゐると同時に平面的に前方へも延長され、これら左右の平行線も亦一點で結びつかうとして遠くへ行くほど切迫してゐた。これらの固い冷酷な巨大な立體用器畫の風景は、どこもかしこも毒々しい赤や青で縱横無盡に出鱈目に不規則に大小さまざまな形で區劃されて、塗りつぶされてあつた。それは極度

に强烈なあらゆる色彩の稲妻が建築物の廣大な壁面へぶつつかつて、その痕にその色彩の断片を落して行つたやうであつた。その頭痛を催させる一つ一つの色の上にはそれと對應して最も不愉快な効果を强める別の色で、さまざまな文字が書かれてあつた。それはとても理性では理解することはおろか、推測することも出來ない文句であつた。或る一角には

「數千圓ガ僅ニ一圓！」

といふ不思議な算術が書かれてあつた。それよりもつと大きな一區劃のなかには、又何事であるかは知らないが、次のやうな破天荒な宣言があつた。

「自分ノ店ノ最モ粗惡ナ商品ヲ買ヒ、自分ヲシテ成金タラシメルコトハ、社會ノ正義ヲ重ンズル市民ノ忘ルベカラザル義務デアル。何トナレバ我等ノ商品ハ無智ノ幸福ト無反省ノ美徳トヲ適當ニ配合シタモノダカラデアル。偉大ナル哉「俗惡」ノ大精神！大臣モ將軍モ博士モコノ配合ノ絶妙ヲ讃美シ保證ス」

目に觸れるそれらの文句の一つとして不思議不可解でないものはなかつた。

やつと地上へ運び上つた彼はこれらの街上の奇觀を一瞥して、線の交錯と色の分裂とで先づ階段の恐怖に脅かされたが、壁上の不思議な文字を讀んだ時には、自分自身が發狂してゐるのではないかといふ不安に襲はれた。彼はせめては空とやらいふものの色を見たいと思つて上を見上げたが、屹立して落ちかかるやうな家と家との間の僅かな隙間にある空間の色は、壁面の騷々しさのために色を失つてただ鈍く光つてゐるだけであつた。さうしてそんなに高く仰いでゐると眩暈を感じて打倒れさうであつた。

彼はいつの間にか群集のなかに混つてどこことも知れないところへひとりでに動き出してゐた。群集は恰も最も深い淵の底のやうな、この街をさながら引汐の時の堀割にただようた泥や芥のやうに一定の方向の方へ移動してゐた。彼等は人の話に聞く日光といふありがたいものの恩惠に浴しようといふので、一生懸命に走つてゐるつもりであつた。しかも氣力を失つた彼等はやつと步くことが出來ただけであつた。中にはもう死んでしまつてゐて、死んだままで、やつと生きてゐる人間と人間との間に介在してゐるがために動いてゐるものもあつた。我々の主人公はこの群集の中で、もう何が何であるか充分に意識することも出來なくなり、ただあの壁上の最も非理性的なさまざまな文句がどういふ特別な仕掛があるのか嫌應なしに目のなかへ飛び込んで來ることを防ぐために目をつぶり首は自づと垂れてゐた。彼はもう自分の行くところを忘れてしまつた。さうしていつまでかうして步い

ゐるのだか知りたいけれども、多分この街上でかうして步きながら死んでしまふだらうと考へてゐた。

突然、群集の叫び聲に驚かされて彼は目を開いてみた。眼前には大きな廣場が展開し、その中心は色が變つてゐた。それは太陽から直射する光線の當つてゐるところに違ひなかつた。彼は一目見るとへんなことにはそれに對して食慾を感じた。この廣場には八方からたくさんの路が通じてゐて（多分この廣場を中心にして放射線狀に出來てゐたのである）その一つ一つの路――高い建築物と建築物との足もとにある小さな深い門の隙間からは、黑い群集が皆一度にこの廣場の日向にむかつて注ぎ寄せてゐた。（彼等のすべても亦食慾を感じてゐるのであらう？）

廣場は瞬くうちに無數の人間で一ぱいになつた。

いつの間にか彼の體にも日が當つてゐた。正午の太陽が空の眞中にあつた。彼は日光を手で掬うて食つてみた。日光は香氣がした。體中が熱くなつて來た。醉を感じた。ここでもまた人死が澤山に見られた。彼等は目がくらみ又かつて經驗のないこの快感のために中毒したものらしかつた。しかし、彼等は陶醉のうちに太陽を讚美しながら死んだのであつた。

一臺の甲蟲のやうな形の飛行機が現はれ、群集はざわめかいた。機は低く下りて來て着陸しさうに見えたが、群集は不安の中にもこの物凄い場所から動かうとはしなかつた。機は、しかし群集の頭の上をおもむろに一周しながら無數の紙片を撒き散らすと、再びどこかへ消えた。彼はひらひらと光りながら彼の肩の上へ落ちて來た一片を拾つてそれを手に取つてみた。それは、

「諸君ハ果シテ幸福カ」

といふ見出しであつた。どうも宣傳ビラであるらしい。

（五） 救世の福音

彼が讀んだところのものは、全く驚嘆すべき宣傳文に相違なかつた。

冒頭、先づ植物の幸福を力說してあつた。それは空氣にも日光にもあらゆる食物にも、決して事缺く憂のない種族だといふことを、多分本當に說いてあつた。それから次にはその植物とはどんなものであるかを說明してあつた。（何故かといふのに、神聖な種族である植物は、數世紀前からその傾向を示してゐたが、既に二三世紀前には悉くこの地上を見棄てて、そこからその影を沒してしまつてゐたからである）その說明によると植物と人間との單なる相違は只三つである。その第一はその形態。その第二は營養能力の有無。その第三は自己の意思で

動くことの可能と不可能。僅にこれだけの事にしか過ぎない。若し生命の長短を論ずるならば植物の殆んど無限ともいふべき生命は、到底人間などの比ではないのである。さうして、植物の形態がどんな立派なものであるかといふことは、古來の諸文獻に徴して最も明瞭な事である。してみれば殘されたところの唯一の問題は、發言能力及び自己の自由なる意志による運動能力の一點にある。

「コノ點ハ諸君ノ熟慮ヲ待ツベキモノナリ」

と、さう述べてゐる——この宣傳文の筆者は、賤民があの最下層住宅區の高さ一メートル、巾は三分の二メートル、長さ一メートル半の場所のなかで自己の自由な意志で運動出來ることを喜べる者と想像してゐるらしいのは寧ろ滑稽であつた。

それにしても何のために植物の幸福を說き、又人間と植物との比較を試みてゐるのだらうかと疑つてゐると、文章は忽然として次のやうに結ばれてゐた。——

「充分ナル日光、新鮮ナル空氣、飽クナキ榮養分ノ攝取！　又、無限ノ長壽！　之ヲ欲スルモノハ進ンデ植物タルコトヲ希望セヨ！　コレ實ニ諸君ノ幸福ニシテ、又、諸君ガ植物タルコトニヨツテ、今日ノ過剩ナル人々ヲ調節シ、又諸君ハ人間ノ呼吸ニ必要ナル瓦斯體ノ發生者トシテ更生スルノ一事ハ、諸君ガ、無意味ナル存在ニ比シテ、亦人間社會ニ貢獻スル點ニ於テ二重ニ優レリ……」

この宣傳文の末說には別に細說があつて、それに依ると簡單で絕對に無痛な一方法によつて人間を植物に變化させるところの手術が、或る醫學者によつて發明され、政府は本年の慈善デーの第一の計畫としてその醫學者に命じて志望者を植物に變形させるといふのであつた。

さうしてこの細說の最後の一項には次の如く書かれてあつた。

「尙、當日手術場ニハ多數貴婦人ノ御臨席アルヲ以テ、被手術者ハ誇ニ貴婦人達ニ見物セラルルノ光榮ヲ得ベシ」

皆一樣にそれを讀んでゐた群集は、やつと讀み終つたと見えて、口々に何か騷ぎ合つてゐた。感嘆の聲が洩れた（どんな點に感じたのだかは解らなかつたけれども）彼は宣傳文を再讀し、三讀した。彼は決心といふ程でもない決心で、植物になることを志望することにした。彼は決して植物になりたかつた譯ではなかつた。けれども彼は死にたくはなかつた。さうして今日のまゝで人間の形を保とうとしたならば、もう十時間とは經たないうちに死ぬ外はない。死人に運動が可能だらうか。發言能力の如き、彼にはもう完全に無いではないか。

「俺もその植物とやらになるとしよう。本當にここに書いてあるとほり幸福だかどうだか知れないが。何にしろ今日の我々よりもみぢめな存在物がこれ以上にあらうとも考へられないから、してみればやつぱ

りこれは大部に相違ないね」

「然うだ」

彼の周圍にはそんな會話をしてゐるものらあつた。

午後四時になつた。それは植物たることを好まない人間だけはここを立去らなければならない時刻であつた。然し、殆んど大部分の人間はこの場から動かうとはしなかつた。それらの多數の人間を、百人ばかりの役人が來て整理した。何臺かの巨大な車に乘り込ませた。車は燈影のかゞやき出した街のなかをほんの暫く走つたが、急に密閉疾走を始めた。その車室のなかで一人の役人に次のやうな注意を皆に與へた——

「君たちはこれからその實驗室へ運ばれるのだがその前に一應注意をして置く。一體にこの研究は九分どほりは成功してゐるが、未だ全く完全とは言ひがたい。往々にして動物とも植物とも判明し難いものを發生することがある。尤も、それにしても今日の君たちのやうに悲慘にして又無意味な低級物ではない。つまり今日よりは確に精確にはなれるのだからこの點は、說明とほりに安心してゐるがいゝ。で、研究の不充分といふのは同一の手術方法を講ずるにも拘はらずその結果がどうも同一の植物にはならないのだ。これは何か神の手術者——つまり君たちの性質などとも密接な關係があるらしい。第一にそれを知る必要があるし、また若し出來るだけは君たちをそれぞれ各自い希望にそふやうな植物にしたい。それらの必要上、只今カードを一枚づゝ上げる。何れお前たちは名前などゝいふ贅澤なものはあるまいから、そのカード番號が實驗室ではお前たちの名前になる——よく覺えて置きなさい。さうしてそのカードの諸項目のなかへ適宜に書き入れなさい」

彼はNO. [illegible]であつた。

(六) いよいよ植物に

彼等は大きな建物の內部をさまざまに上つたり下りたりした。さうして最後に頗る狹い小さな部屋のなかへぎつしりと監禁された。狀態はいよいよ險惡となつてしまつた。(既に彼等は手術の準備方法の下に於かれてあつたのだ。)

NO. [illegible]はどういふわけか第一番に呼び出された。さうして彼は外光のなかへ連れ出された。彼の立つてゐるぐるりには一間の間隔で馬蹄形に連り、それは後方へ行くほど一段づゝ高くたつて築かれてゐた。そこは人で埋つてゐた。(コロシウムに似てゐる)彼はそこへ連れられて行つた時には、前方の講壇の上では堂々たる人が喋つてゐた。

「……かういふわけでこの手術は、かくの如く社會政策の上から觀ても有益なものであると同時に、また一種の學術的見解の偉大なものであつて

ありますから、特に公開して皆さまを御招待申したわけであります。なほ製作された植物にして愛玩するに足るものは讃賞することに致してあります。何とぞよろしく願ひます」

人々は盛んに喝采するらしいが、彼の耳には非常に遠方から來たやうに感ぜられた。第一の人が降壇すると、別の男が現れた。この第二の男は彼――今から手術に取かゝらうといふNO. 192を臨席者に紹介するのであつた。

「カードの記入は御覽のとほりであります」からいつて說明者は後方をふり返つた。見るとそこには彼の筆跡がそつくり擴大されて白壁の空間のなかにくつきりと浮び上つてゐた。說明者は言ひつづけた「この記入は今回の應募者の中で最も特色のあるもので、それ故最初の被手術者として擇んだのであります。この記入文は御一讀しても了解し難いかと思ひます。先づ、No. 1928はすべての賤民社會の例に洩れず名前は無論、年齡の自覺がありませんので、我々は十五才位と推定しました。希望の項目の下には、愛されたいといふ最も難解な文句があります。實はこの一語は我々にも充分にはわかりませんので、言語學の方から言ひますと二十世紀位までは使用された事があるらしく、それ以後は全く廢語になつてゐます。そんな言葉をこの少年が何故知つてゐたかといふことは疑問であります。しかし下層階級には我々の想像をも許さないやうな突飛なまた野卑な言葉が往々にしてあります。更に角、廢語を復活した單語の研究は我々の專門外のものであります。そこで「愛」といふ言葉の本來の意味は十八九世紀ごろまでは心理學的題目であつたらしいのですが、その後我々醫學の方で取扱ふテーマとなり、簡單に申しますと心臟の薄弱から來る病的痙攣の作用なので、患者は多少の中毒的陶醉を感ずる者らしく、激烈なるものは無論生命を脅す危險を伴ひます。この流行性病症は前期の人類社會では異常に流行し、時には人工的にこの病症を導く傾向さへあつたものです。かういふ途方もない希望を抱いてゐる者がどんな植物になるかが、我々、及び諸君にもきつと多少の興味を感じさせませう。それから今までに最も樂しかりし經驗といふ項目には、溫かな香のよい白い人間に似たものに抱かれた夢を見た事とあります。これも充分には理解出來ないのでありますが、下層社會では婦人といふものを實際に見る機會は殆んど絕無でありますから、これは婦人のことを暗示し、多分異性に抱かれた夢を見たことがあるらしいのです。」

婦人の笑ふらしい嬌聲が方々から洩れた。この嬌聲を聞いてゐるうちに No. 1928 はふと人間の情緒の最後の炎が、もう一度一時に閃き上つたらしい。彼は笑聲の來る方をたづねてあたりを見まはした。座席には今まで氣がつかなかつたが見た事もないやうな種類の人間が

たくさんゐた。さうしてそれは彼が今までの夢のなかで時々見たことがあつた種類の人間――婦人達であつた。彼は氣まりの惡い思をして目をふせたが、手術者はそんな事には一切無頓着で、彼を俯伏にしはじめた。さうして臀部に鈍い痛みを感ずる注射をされた上で彼は一段高い臺の上へ登らせられた。座席の方からは貴婦人達のオペラグラスが一齊に彼の方へ向けられた。彼は益々首を垂れた。彼の登つた高い臺は、回轉し出した。だんだん早くなつたと思ふと、急にとまつた。彼は再び臺の下におろされた。彼の足が地上についたと思ふと、その時彼は一度に地面のなかへぐつと引込まれ、同時にうなだれてゐた彼の首が自分の胸のなかへ入つてしまつたやうな氣がした。

「もしや俺は野師にだまされて殺されるのではないだらうか」

が、次の瞬間に彼は爽やかな空氣を感じて愉快な深い呼吸をしたて恥しいとか苦しいとかいふ今までの感じは發散し消失してしまひ、振返つて見ると彼の腕は全く硬ばつた上に新鮮な青色を呈し、指はだんだん偏平になりやがてペラペラしたものに代つた。腕ばかりではなかつた。全身が眞青になつて、指の變形のやうなものがあらゆる部分から發生するところだつた。實際、彼の體は半分以上地面のなかへ引き入れられたと見えて、身長は今までの三分の一近くに縮められ、それよりも最も驚いたことには、ただ感じばかりではなく自分の首が自體どこかへ無くなつてしまつてゐる事であつた。それでゐてどこに視覺があるのか、外界のものははつきりと――今までの朦朧たる狀態よりも數倍かはつきりと見えた。「先生、見事な成功でしたね」助手が言ふと先生は默つてうなづいた。それを聞いて彼自身も安心したやうな氣になつた。別に一人の教授が彼の傍へ近よつた。彼を凝視してゐたが、「薔薇科に屬する植物である」と鑑定した。それはどんなものであるか自覺できなかつたが、彼はたしかに幸福感を持つた。

この時第二の被手術者が現はれた。それは番外と呼ばれてゐた。この番外を見た時に、彼は出來るだけ大きな聲を張り上げて叫んだ。といふのは番外とは實に彼を地下の別世界で養育したあの老人に外ならなかつたからである。彼の聲は彼自身の耳にははつきり聞かれたのに、何人もそれに應ずるものはなかつた。植物の言葉が人間に通じないことを彼は自覺した。さうして叫び立てることをあきらめて、默つてただ深い感慨に打たれてゐた。この老人は死刑の處罰をうける代りとして變形させられるのであつた。それ故、何等の希望をも述べることを許されないばかりか、普通の注入藥液でないところの特別のものを使用されることになつてゐた。彼は植物界に於て最も哀れな狀態にある微小な生存の蘚苔類にならなければならない――それは太陽に面することも出來ず、永久に不健康な場所から決して移動することは出

來ない。それは植物の世界に於ける最下層階級である──さう宣告せられてゐた。氣の毒な老人は何の抗辯もせず、又落膽や悲傷の樣子もなく、手術者たちの爲すがままに任せてゐた。彼は裸體にされ、廻轉台の上に乘せられ、さて地上に置かれた。その時である。突然、薔薇は激しい不安に打たれてよろめくのを感じた。下半部をそのなかに生かしてゐる地面が、むくむくと持ち上がるやうな事が起つたからである。驚いたのは、しかし薔薇のみではなかつた。周圍の見物人たちは泣き叫び、總立ちになり、手術者はその威嚴をも忘れて、その場に蹲つてしまひ、呆然自失してゐた。これらの騷動のなかに、地面を震動させながら根を張つた奇怪な發生物は、双腕を高く天に上げ、二本の腕の周圍からはまた諸所に各々の新らしい二本の腕を生じ、瞬くうちに數千の腕を生み出した者は、その手の指から最も壯んな火焔のやうな美しい綠を滴らせながら、なほも刻々に高く擴く延びることをやめようとはしなかつた。巨大なこの魔物は風を呼び起した。さうしてその新鮮な葉はサラ〱と鳴り響いた。それは植物の言葉では哄笑に外ならなかつた。(薔薇は久しぶりに、彼の叔父の樂しげな笑聲を聞いた。さうして恐怖はしづまつた)

この一大事はその後どうなつたか知らない。何故かとなら薔薇は間もなく別の場所へ移されたからである。

（七）幸福なる窗

それは一人の中流以上の婦人だといふことを、薔薇は本能的に知つた。さうして歡喜したが、彼女は薔薇を鉢のまますつかりつつんだ。彼の視野はすべて遮られた。彼は持上げられた。それから彼女の腕に抱かれた。(見ることは出來なかつたけれども、彼はすべてを感ずることが出來たのだ) 彼は彼女とともに滑走し、飛行し、上昇した。すべてが夢の中の出來事のやうで好かつたが、只一つ困却したのはこの乘物が絶えず高低の定まらない不快な音響を響かせる一事であつた。人間の世界といふものが如何に喧噪極まるものであつたかを彼は薔薇になつて始めて氣づいた。(軋るやうな音響の美を感じられなければ、この時代の音樂は理解されないだらう。歯の浮くことの快感ほど深刻なものはない! 彼の乘せられたものは音樂を奏してゐたのを、薔薇は知らないのだ)

動くことは止まつた。薔薇は卓上に置かれた。覆を取りのぞかれた。明るすぎる燈火の下に曝された。薔薇は變形させられるために裸にされた時、四方から彼の上にそゝがれた貴婦人たちのオペラグラスを思ひ出して、赧くなつた。彼をこゝに運んだ若い女の外に、ひとりの男がゐて、彼等は彼を見おろしながら話し合つてゐる。

「うまく手に入つたな――競賣はどんな具合だつたかね」

「競賣なんて、買ひ手はわたしひとりなのよ」

「そんなに不人氣か――それぢや、折角買つて來ても看板にはならないではないか」

「大丈夫、その點は大丈夫。みんなはそれや、このへんなものに興味は持つてゐるのだわ。でも何も使ひ道がないので買はうと言はなかつたのですよ。それにこれを飼ふのはなかなか贅澤ですよ――少くとも三十分は日光が必要なのですつて」

この對話は薔薇の自尊心を傷けた。

その晩、薔薇は窓の外に置かれた。こゝは地上の第何十階かは知らないけれど、彼は見下して身ぶるひした。窓は若い女の居室につゞいてゐた。彼女のところには夜更けに、非常に美しい若い男子が訪問してゐた。それは不思議だつた。どこからとも知れず忍び入つた。彼等は別に聲をひそめるでもなくさまざまなことを語りまたさまざまな行動をした。薔薇ははづかしくつてまともには見られなかつた。だからここで人に話すなどゝいふことはとても出來ない。若い男は一時間ほどそこにゐたが、再び掻き消すがごとく立去つた。絶えず例の軋るやうな高低種々な音響が洩れ、それに夜は太陽の直射よりもあかるかつた。空には大きくサアチライト的發光空間帶があつて、その上にはノン・シヤラン市と書かれてあつた。（彩間鐵道の目標なのであらう。その文字は時々赤くなつたり青くなつたりして信號した）薔薇は眩しさと騒がしさとで到底眠ることが出來なかつた。喧騒がやゝ靜まり、あたりの眩しさが消えてうとうとしたと思ふと、睡苦しい薔薇としての第一夜は明けたと見えて、もう朝日が彼の上に注がれたので目を醒さざるを得なかつた。太陽光は、しかし直射ではなかつた。幾つかの反射鏡で屈折せられてやつとこの窓に到達するらしかつた。こんな光でもしかし、彼の赤い蕾を養ふには役立つた。さうして三十分ほど照してゐたがもう當らなくなつてしまつた。（特に彼のために日光が買はれてゐることを薔薇自身知つたのはずつと後の事であつた。）彼は日當りのなくなつた窓の上で過去のことを思ひ、またこの境遇の變化を考へ、たしかに看板にされるのだと聞いたが、こゝは一體どんな店なのだらうかといふ輕い不安に襲はれ、夜の睡苦しいのも困つたものだと思つた。しかし、人間であつた時のことを考へると、その幸福はまるで雲泥の相違ではないか。然うだ。――さう思ふと、彼は彼の不平を勿體ないと氣づかずにはゐられなかつた。然し、薔薇自身は自覺しなかつたけれども、たつた一晩の間に彼は既にこの階級の空氣の洗禮を受けて、餘程贅澤な氣持になつてゐたのである。

薔薇は窓から運ばれて、大きなガラスの箱のなかに入れられた。そ

のまはりには彼のものに似たさまざまの花が首だけもぎ取られて、皿の上にころがつてゐた。花屋のウヰンドウかと思はれた。――「人ハ瓦斯ノミニテ生クベカラズ」といふ文字が、ガラスの上に書かれてゐるのが、その裏から左文字になつて讀めるのであつた。ウヰンドウの外では往來の人々が物珍らしげに立とまつて、皆は彼を指した。何か言つてゐるらしいけれどもガラス越しで少しも聞えなかつた。人が立ちとまつてのぞくので彼は滿足だつた。店の主人は彼以上に滿足らしかつた。薔薇は退屈のあまり自分の見物人を見物してゐた。彼はこの階級の人間といふものを、はじめて熟視したのであるが、彼等はどれもこれも見分のつかない程同じ顔をしてゐた。服裝に到つては男と女との二つの區別より外、皆一樣だつた。何か制服でも決まつてゐるらしかつた。――しかし、彼のこの觀察が間違つてゐた事は二三日するとすぐ判つた。(彼が地下の人知れぬ別世界のなかで老人から聞いた事のあつた話をふと思ひ出したのだ)なるほど人々は一樣の服裝ではあつた。しかもそれは日毎に一樣に變化してゐた。流行の型に從ひ、さうして流行は一日一日と變つたのだ。翌日の流行はラヂオで前日の夕刻報道された。一日おくれになつた流行はやがて次の階級の社會の流行になつた。人々は一日だけ着た古着を次の社會へ賣り拂つて、日毎に新らしい――つまりより一段上流の社會から來た古着を着用した。政府は流行税を徴し、また流行省は古着の專賣局を經營した。これは社會經濟の上から立案されたものださうで、これによつて下層民になればなるほど安い衣服を手に入れることが出來るといふ趣意だと言はれてゐる。が、何よりも先づ政府直營の古着專賣局の日々の利得は絶大なものであつた。人々は流行に支配されないわけには行かなかつた。流行に從はない――從ふ能力のない人間は風俗を紊るものとして、社交界から追はれなければならなかつた。それ故、この流行制度を呪ひながら、着用した衣服のお供をして下層へ落ちて行く人々の悲劇は日々無數にあつた。

悲劇と言へば、薔薇がそのウヰンドウに置かれたこの店は、どうも花屋ではなく、菓子屋であるらしかつた。客は相當にあつた。只、茲に不思議なことには、客が來ると店の女は必ず、先づ、

「悲劇の方にいたしませうか。喜劇の方に致しませうか」

と問ふのであつた。さうして客の注文に應じて、それぞれの箱を出し、客はそのなかから撰び出した。これが薔薇には全く了解しがたかつた。しかし、日常の見聞で遂に彼の了解に苦しむものは一二には止まらなかつた。この店にゐる二人の女も一人の男も、それがどんな關係の者であるか、いくら注意して觀察してもわからなかつた。最後に、男はこの家の主人で、女のひとりはその妻で、もうひとりの女は

寳子だらうといふことに一先づ決定した。又、隔週一度づつ必ず夜間になつて娘のところへひそかに訪問するところの男子もわからないものの一つであつたが、これはこつそりとは來るけれども、どうも公然の夫であるらしかつた。(これが映像と音聲とそれに觸感まで組合はされて電送される幻影で、産兒制限の最も確實たる方法として、政府が最近に奬勵してゐるものであつたことを、薔薇はまだ知らなかつたのだ)さうして薔薇は有夫の婦人を好まない性質であつたので、この女ではなく寳子の娘の方を愛することにした。彼はいつもこの女の心づかひで、窓に出されたりウヰンドウに置かれたりしてゐるうちに、自づとそんな感情を抱くに到つたと思へる。――彼は非常なさびしがりやだつたものだから。

(八) 藝術の極致

窓のそばの机に對しながら、この家の二人の女たちは一册の書物をのぞき合つて、「いいわね」「あら、素的じやなくつて」などとしきりに感嘆してゐるのを見た。薔薇は直覺的に彼女たちは詩集を讀んでゐると考へた。さうしてこんな不可解な社會にも藝術のあるのを知つて欣快を覺えた。そこでその横綴の小册子をのぞき込んで見ると、それは實に(!)模擬紙幣の圖案集ではないか。しかも彼女たちがそれを一とほり愛讀(?)して了つて本を閉ぢた時、表紙には現代文藝大全集の第八巻とあつた。彼女たちはそれを閉ぢ、しばらくの間文藝論を談合つてゐた。彼女たちは頰をほてらし目をかがやかしてゐた。ひとりはリアリステックな藝術を、ひとりはロマンテックなものを愛好するらしかつた。稍々百圓ぐらゐなものの方がより多く實感に訴へるといふのに對し、片一方は一萬圓などの方がいかに空想を豐富にし生命力を充實させるかを力說した。するとリアリズムの信者は、巨大な額面をテーマにすることの好ましい事に異議はなかつたけれども、それらを取扱つたものはどうも實際百萬圓などといふ觀念に伴ふだけの莊嚴な權威を表現し得なくて空疎な氣持がすると反駁した。

當時文藝は「いかにして金を儲けようか」とか「若し自分が百萬長者であつたならば」といふ近代文化の唯一の生活題目を文字によつて表現する方法は一世紀も前にすたつてしまつて、今日ではどの定期刊行物も單行本も、また一圓版全集も(現に今ふたりの女が愛讀してゐるものもその一つであつたが、――さうして「數百萬圓が僅に一圓」といふ宣傳はこれだつたか)同一の題目に對する、より直接的な効果に訴へる手法として、最近は殆んど悉く模擬紙幣の圖案集になつてゐた。中にはその過大な迫眞力のために人心を動搖させるといふので社會の風教のために發賣を禁止されるものもあつた。人々はそれを熟

視して生活の豐富になるのを痛感した。人生の目的を知つて生甲斐を感じた。さまざまの空想を誘はれて人生を光明的に感じた。さうして人々はこの種の藝術のことを精神的藝術と呼んで、もう一つの官覺的藝術と區別してゐた。

薔薇は間もなく知つたが、彼が飾られてゐるこの店といふのは花屋でも菓子屋でもなく實は、官感派の藝術家のギアラリイであつた。しかもこの主人といふのはこの社會ではなかなか權威のある藝術家に相違なかつた。精神派藝術の發達のために一時衰滅に瀕してゐた官感派藝術に一生面を開いた人物こそ彼であつた。彼は彼のところへ訪問する後輩に向つて、よくさう言つてゐるのを薔薇は聞いた――

「色だとか香ひだとかそんなものをいくら强烈にしてみたところで、もう誰も何も感じはしないのだからね。そんなもので滿足したのは昔の話だ。例へばこの薔薇さ（薔薇は指されて侮辱を感じた）こんな馬鹿なものを見て喜んでゐた古代の人間は、滑稽な話さ。そこでこんな花なんてものを食べられるやうに工夫したのは、確に前時代の天才の仕事だつた。實際人間は瓦斯體ばかりでは本當の味覺は充たされない。固形體を嚙つて見たいといふ欲望は深く根ざしてゐるのだ。この點を發見して色や香の綜合した固形體に、その色なり匂なりから當然[illegible]工夫したのは、正しく一大進步だつたのだ。ところが然し、それだけでは要するに古代の所謂お菓子と代りのないもので、女や子供の爲めの藝術にはなつても一般人士の要求には應ずるに足りないよ。そんなものをさういつまでも誰が喜ぶものか。だからこそ、まるで殼にもつかないつかまへどころのない精神派の藝術を、かへつて神祕があるなどと思つて、一般の藝術的流行はその方へうつつて行つたのだ。それにあの派の藝術も實際一時に進步したからね。紙幣そのものの情緒を直接に目に見せ、その用途などは全然看る者の自由意志に任せるといふ手法が時代の風潮をうまく捕へたものだ。その單純で直接なところは大にいい。ところで近代藝術の上で吾輩のやつた仕事といふと、これは諸君も幸に認めてくれるとほり、强烈な肉體的刺戟の創造だ。吾輩の製作を食へばとめどなく笑へるものもあるし、涙の湧き出すのもある。深刻なのになると今にも死にさうな苦痛の官覺を呼びおこさせる。死ぬやうな珍らしい官覺に打たれながら、それでゐて一方、これは藝術の作用だから決して本當に死ぬ氣づかひはないといふ安心はどこまでも失はない。つまり私のお蔭で人間はその時の氣分に應じて無數の肉體的感覺を勝手に發生させられる。交感神經や迷走神經などに適當な刺戟を與へるものなどは尤も通俗的製作だよ。要するに吾輩は色彩や形態や味覺の藝術のなかへ文學的要素を取入れたのだ。吾輩の藝術は紙幣圖案などといふ淺薄なもの

とは自ら選ぶ。諸種の傳統的藝術に一大綜合を施へたわけだ。吾輩は實際、今までのどの藝術家も藝術のなかへ藥物學を取入れることを拒んでゐたのが不思議でならない。その癖、太古からアルコールの藝術的價値は知られてゐたし、迷信につつまれた十九世紀二十世紀などでさへオピヤムやコカインなどの藝術的用法は知つてゐたのだ。あの藥物學の全くの啓蒙時代に於てもさ。しかもそれを自覺することが出來なかつた。――といふのもつまりは藝術を形而上的なものなどと迷信してゐたからさ。そこで吾輩は君に一つのテーマを與へたいが、どうだらう、一つ我々が賤民になつたやうな珍らしい諸官感を一時に人々に味はせる方法を工夫して見る氣はないかね。この贅澤た好奇的な希望を上流社會の人間に味はせると、きつと流行するよ」

　偸み聞いて薔薇は少しもその意味を解することが出來なかつた。それでゐて不思議にひどく腹が立つて來るのであつた。何を見ても何を聞いてもあまりに腑に落ちない事ばかりで、彼の最初の幸福感はどうやら段々うすれて行くのであつた。たゞ一つ喧ましいのや眩しいのにはもう自づと慣れてしまつて、踊ることだけはよく出來た。それに毎朝の太陽は一日ましに溫さを増して來た。日光の中でうつらうつらしてゐるのが彼には唯一の幸福であつた。ところがその夢のなかには彼の同類のこの上なく繁茂したものが現はれて彼に話しかけるのであつた。

「お前は月といふものを知つてゐるか」

「お前は星といふものを知つてゐるか」

「お前は虹を知つてゐるか」

「小鳥たちを――夜鶯を知つてゐるか」

「黑土の芳ばしいにほひは？」

「泉の囁きは？」

「夜の露は？」

「少女の接吻は？」

　彼はそれらの問に、何一つ答へることが出來なかつた。さうしてそんなむづかしい問ひを發する者は誰だと言つて反問すると、相手は言ふのであつた。

「私はお前の祖先だ。千八百年代の薔薇だ」

さう答へて、その頃の花の生活といふものを語り出した。――夢がさめて薔薇は身慄ひをした。日光は消えてしまつて彼はガラスの箱のなかへ運び込まれた。空氣は生氣がなかつた。人々は樂しい夏の熱さをいやがつて、このいい季節にアルプス山頂の空氣を毎日幾リットルだか混和してしまつたのだ。薔薇は夢のなかの祖先の言葉を思ひ出し、彼の身邊を見まはして自分を囚人だと感じ出した。その夢は彼

が毎日、三十分間日向に置かれる度ごとに現はれた――さめてから後に彼の現實を嘲笑ふために。花はどれもこれも三分の一だけ開いてしなびた。――噫、病氣だ。

(九) 新らしき恐怖

或日、一群の女たちが興奮しながら我勝ちに店のなかへ入込んで來た。主人も二人の店の女たちも口々に品切だと言つてあやまりながら、熱心なたくさんの客たちをかへした。さうして慌てて店を閉ぢ、本日休業の札をかかげた。店の者たち、特に主人は狼狽してふさぎ込んでしまつた。薔薇にはこの一場の異樣な光景の意味がよくわからなかつたが、聞くところを適當につけ合せるとかうである。その世界に不思議な恐ろしい病氣がこの都市で發生し、若い女で理由も判明しないうちに同じやうな症狀で瞬間に死んだものが、この半日にすでに九百何人に及んだ。この新奇な噂が擴がるとともにその強烈な新種の戰慄を一刻も早く實感してみたいといふので、かくも騷々しく婦人たちはこの藝術家の店に殺到したのだ。けれども、さすがに有名な肉體的實感の製作家たるこの店の主人もこの異常に新奇な感じを如實に表現する製作は無論持ち合せてゐなかつたのだ。彼はその名譽を失墜させないために店を閉ぢたのだが、この奇病が世界に全く始めてのものである以上、これは要求者の方が無理と云はなければならない。

夜になつて薔薇は窓の外に眠つてゐた。と、不意にどこか近いところで、人間の歎息を聞いたが、その次には多少人間の訛りのあるアクセントのややちがつた植物語で、

「全くわれわれは欺かれた」

と言つてゐるものがあるのに氣づいた。薔薇は目をあけて四邊を見た。姿はどこにもなかつた。

「誰です、僕に話かけたのは」

すると聲はごく近くの壁のあたりで答へた。

「一たい君は誰だ」

「僕は薔薇科に屬する植物だ」

「それではお前も、近ごろ人間から變形したひとなのだね」

「さうです」

「さうして一たいお前さんは薔薇か」

「…………」薔薇は否と言ひかけて口をつぐみその代りに「で、君は一たいどうなのだ」

「先づお前の方から言ふがいい」

「僕ですか。僕はそれや薔薇でない筈はないのだが」薔薇は曖昧な口調であつた。彼は相手が、いつか同じく變形させられた連中であると

伸ると、どうしてだか花瓣たちは伸出したくなかつたのだ。

「それは俺たちだつて薔薇でない事はないさ。空氣はある、日光もともかくある。それに植物はものは言へないなどと言つたが立派にこのとほり口が利ける。それから飛ぶことさへ出來るのだ」

「飛ぶことか？　植物でゐながら飛ぶ事が？」

「然うだ」相手は吐き出すやうに言つた「俺は出來そこなひなのだ。」

「一たいどこにゐるのです」

「壁に吸ひついてゐるさ」

薔薇はここで始めて、今まで全く忘れてゐたあの円形廣場の群集たちのことを思ひ起し、自分以外のあの時の人間がどうたつたかを知る機會を得た。本當の植物になつたものは薔薇自身と樫の大樹――あの處刑された彼の養ひ親だけであつたらしい。他の無數のものは皆ただ一片の厚ぼつたい葉つぱのやうなものになつてしまつたらしい。さうして彼等は昨日までは樫の木のどこかへ寄生して巣喰ふてゐたのだ。

「その樫の木はどうしてゐる。それは僕のお父さんとも言ふべき人なのだが」

「氣の毒に、切られてしまつたよ。根元から」

薔薇は驚き悲しんだ「どうして！又」

「知らない。あの人は毎日、この地上の空氣は惡い――地面は人間の頭上で騒いでゐる――空氣が地上には明るすぎて夜になつても星は見られない、とさう言つてこぼしてゐた。それでもどこか地から離れずると言つて時々は笑つてゐたのに、突然人間が來てその根のまはりの土を堀り出したのだ。とても堀り切れないのを知つて今度は根元から切りはじめたのだ。どうなりとするがいゝ――俺は何度でも芽を生やすのだから。あの人はさう言ひながら切られてしまつた。恐ろしい俺氣の毒だ。困つたのは俺達だ。無數の俺たちはあの人が吸ひ上げるものを掠奪はれて生きてゐた。もう俺は今日から喉が渇いてならない。俺は人間の血を吸はうと決心してゐる。渇いてゐる。それに變形させられる時一目よく見た貴婦人とかいふものの肌に俺はちよつとでも觸つて見たい。ヒー ヒー ヒー！ヒー！」

この笑ひ聲は人間のものに似てゐた。

夜は更けて行つた。薔薇は眠ることが出來なかつた。どうしてだか久しく決して思ひ出せなかつたあの地下窟の老人を、樫の大樹にたつた人のことを思ひつゞけたのだ。またこの地面のなかに自分はたつた一つの植物らしいといふ自覺がこの上なく淋しかつたのだ。夜があけた。朝日が彼の上を照し出した。その時どこかから直徑一吋ばかり丸い葉つぱがひら〳〵と飛んで來て、彼の鉢の横腹へとまつた。

「ちよつとここで休ましてくれ！」

この不思議な植物は、花瓣片は吸盤のやうなものを供へてゐると見えて、植木鉢へしつかりと吸ひついてゐた。薔薇は半睡狀態でいつもの日向の夢を見てゐた。……日の光の洪水。青春。そよ風。夜鶯が來て歌つた。月と星とは太陽と一緒に天にあつた。虹がかかり、その中から蝶がおりて來た。泉がささやき――渴いた者はそこで吞むがいい。少女（それは店の硝子の娘であつたが）が彼の滿開の彼に接吻した。夢は消えた。日はかげつて、毎日の如く彼をガラスの牢獄である飾り窓へ入れるために、彼女が彼の窓のそばに來た。薔薇ははつきり眠からさめた。昨夜の不思議な吸血植物の事に氣づき、どうかして人間の言葉を思ひ出して警告しようとあせつた時には、もう遲かつた。彼女は不意に床の上に打倒れた。と、その日の流行によつてすつかり露れてゐた右の乳頸が、ぽつかりと何者かに剔られ、全身は見る見るうちに紫色に變色した。

彼女の手から、驚きのあまりに投げ出された薔薇の鉢は、窓の外にころがり出た。あたりに風のうなるすさまじい勢で薔薇はぐんぐん墜落しながら、叫喚し、こんな世界で別に生き長らへるにも及ばないと閃光のごとく感じたが、それきり氣が遠くなつた。……

編輯だより

◇『改造』は常に我國の進歩的傾向を代表する。されど一主義のために囚はるることは斷じてない。本誌の讀者はどの雜誌の讀者よりも強い理解の上に立ちて本誌を愛して下さることが嬉しい。單なる月極めの讀者對雜誌社といふよりも我國民の精鋭として我國を背負つて立つ慨ある情熱ある人々であることを確く信ずる。

◇三年後、五年後ただしは十年後の本誌の愛讀者が我社會各方面に占むる地歩を思ふとき、我々はそこにはかり知れぬ偉大なる慰安があることを愉快に思ふ。

◇我々は必ずしも我々の讀者が大官、富豪となることを希望せない。あくまで全人道の勇敢なる闘士として正義のために一生を殉ずることを切望する。すべての事業の父たるものは正義であり、すべて事に當るに背後より强く力づけるものは實に正義の觀念である。

◇正義の上に立てばそこに何業であれ自分の確信が出でてくる。確信の上に基づいてした仕事なら何事でも悔ゐはない筈だ。ゴマ化し、その場のがれの流行する今日、確信を以つて日夕事に當る人がどの位あるだろふ。それは民事——藝術の全野に亙りて。

◇いい「新年號」が出來た。久しぶりの佐々木氏の論文は流石に氏だけの貫祿のある創意的論文。杉森氏の英雄論——從來に見られない英雄論——必讀の快文字。新鋭三木君の進出、高田氏の重味ある論文共に本誌の特彩。創作欄も力作本位で粒揃ひである。

◇「戰爭」を取扱つた。軍縮會議、平和會議國際聯盟等がありながら各國は軍備に汲々としている。結局戰爭は避け得らるるであらふか。各方面の權威者の言に聽かれよ。

◇岡田禎子氏は東京女子大を經て東京帝大に學んだ人だ。滿三ケ年の間絶えず我社に原稿を携へて來ては「ぜひ見てくれ」と根氣よく迫つた。氏の熱烈な態度には我々のいたく敬服するところだ。氏は今後つぎつぎに力作を見せてくれるだろふ。

◇「創作」懸賞募集〆切は十一月廿日で〆切つた。前年にまして投稿者の多かつたことは感激にたへない。それから「詩」と「文藝評論」の懸賞募集を別項で御一讀ありたし。

◇「啄木全集」は申込はたいしたもの、本年掉尾の盛觀を呈しつつある。「堀江歸一全集」また篤學者によりて愛好されつつあるのはうれしい。

改造定價

新號	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に當る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和三年十二月十八日印刷納本
昭和四年一月一日發行

（壹圓）
（郵稅五錢）

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町四ノ六　山本三生
印刷人　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ六　改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一一三一　一一三二　一一三三　一一三四

葛西善藏全集

第一卷（既刊）小說

自大正元年九月至大正九年四月計二十三編

第二卷（既刊）小說

自大正九年五月至大正十二年四月計二十三編

人生苦のあらゆる悲慘と戰ひ、而も身を切られ、肉を殺がれ、餓に當面して悠悠酒に親しみ、命の旦夕に逼るをつくづく知りつつも、また、嬰兒、糟糠の人の飢ゑを前に哀み見つつも、意至らざるの故を以つて二年の久しき筆を握つたまゝ瞑想するのみ、一字も書せず、——終に逝く矣。此全集を讀むもの誰か藝道の至難を嘆ぜざる。そして人生の陰慘と苦悶とに打たれざる。

第三卷新刊

（自大正十二年至昭和二年小說）

〔內容〕M君との話。迷信。遺産。蠢く者。妻の手紙。落葉のやうに。椎の若葉。從弟。湖畔手記。血を吐く。バカスカシ・霜枯れ作家の話。死兒を産む。弱者。われと遊ぶ子。もぐる。海岸にて。W老伯。醉狂者の獨白。忌明。

第四卷 隨筆手簡集（近刊）

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇三

新選名作集

本集は現代日本文學全集の姉妹出版であつて、同全集に編入せざりし名作を悉く網羅し、八ポイント二段組にして總頁各五百頁以上七百頁に及ぶ。文學全集と併讀せば僅か一圓で巨匠の大全集を讀むことが出來る譯だ。

新選 谷崎潤一郎集

○神童○[illegible]○秘密○[illegible] ○AとB ○The Affair of Two Watches ○前科者○異端者の悲しみ○人面疽○二人の稚兒○美食倶樂部 ○ハッサン・カンの妖術○柳湯の事件○富美子の足○小さな王國○[illegible]○呪はれた戯曲○或る少年の怯れ○母を戀ふる記○兄弟○恐怖

四六判並製 八ポイント二段組 六〇二頁 定價弐圓 送料二十錢

新選 菊池寛集

▼〔小說〕○藤十郎の戀○船醫の立場○笑ひ○[illegible]○[illegible]○仇討三態○恩を返す話○三浦右衛門の最後○[illegible]上人○ある抗議書○神の如く弱し○死者を嗤ふ○島原心中○晩年○[illegible]○羽衣▼〔戲曲〕○敵討以上○茅の屋根○岩見重太郎○[illegible]○玄宗の心持○[illegible]○貞操○[illegible]○兄の場合○[illegible]○ある兄弟○時の氏神○順番○温泉場小景▼〔長篇小說〕○火華

四六判並製 八ポイント二段組 五八七頁 定價弐圓 送料二十錢

新選 前田河廣一郎集

○三等船客○脫獄以後○赤い[illegible]○[illegible]地獄○裏切る者○ストライキ中○[illegible]論○[illegible]○十三段の段階○[illegible]の父親○手○[illegible]○海の女○盜人○[illegible]ダンク○エレナの[illegible]○ドウリスの[illegible]○メイの[illegible]○目撃者○「ダンブロ」○大陽の[illegible]○故郷○[illegible]○海の[illegible]○スキャップ○ハツソリーニ

四六判並製 八ポイント二段組 五一二頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 永井荷風集

○散柳窓の夕榮○夢の女○深川の唄○あの人達○新橋夜話○花瓶○[illegible]の[illegible]○小說作法○春のおとづれ—花より雨に—曇の町—[illegible]—[illegible]○下谷の[illegible]—[illegible]—日本の庭○[illegible]○ふらんす物語（舟と車—ローン河の[illegible]—秋のちまた—[illegible]—[illegible]の夜がたり—[illegible]—[illegible]—ひとり旅—[illegible]—巴里のわかれ—[illegible]其他）○珊瑚集（佛蘭西近代抒情詩選）（ボオドレエル—外十二人）○江戸藝術論（浮世繪の鑑賞—外九篇）○大窪だより

四六判並製 八ポイント二段組 五三五頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 藤森成吉集

▼〔短篇小說〕○[illegible]○[illegible]で○山○子供○[illegible]○[illegible]○故郷をあるまで○東京へ○[illegible]○[illegible]○野上○[illegible]○[illegible]○北見○拍手しない男○[illegible]▼〔戲曲〕○犧牲○[illegible]左衛門○何が彼女をさうさせたか○[illegible]○夫婦▼〔長篇小說〕○研究生○[illegible]

四六判並製 八ポイント二段組 六七二頁 定價壹圓 送料二十錢

新選 葉山嘉樹集

▲〔短篇小說〕○淫賣婦○誰が殺したか○[illegible]

四六判並製 八ポイント二段組 五三〇頁 定價壹圓 送料十八錢

[illegible]

四六判上製 八ポイント二段組 [illegible]

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

謹賀新年

兩角製本所

東京市芝區愛宕下町三ノ四

電話芝一九六八番

賀正

青木兄弟製本所

東京市芝區南佐久間町一ノ一
電話芝一九七四番

牧野製本所

東京市京橋區木挽町一ノ一二
電話東橋(56)七三三七番

牧野留吉

1929

